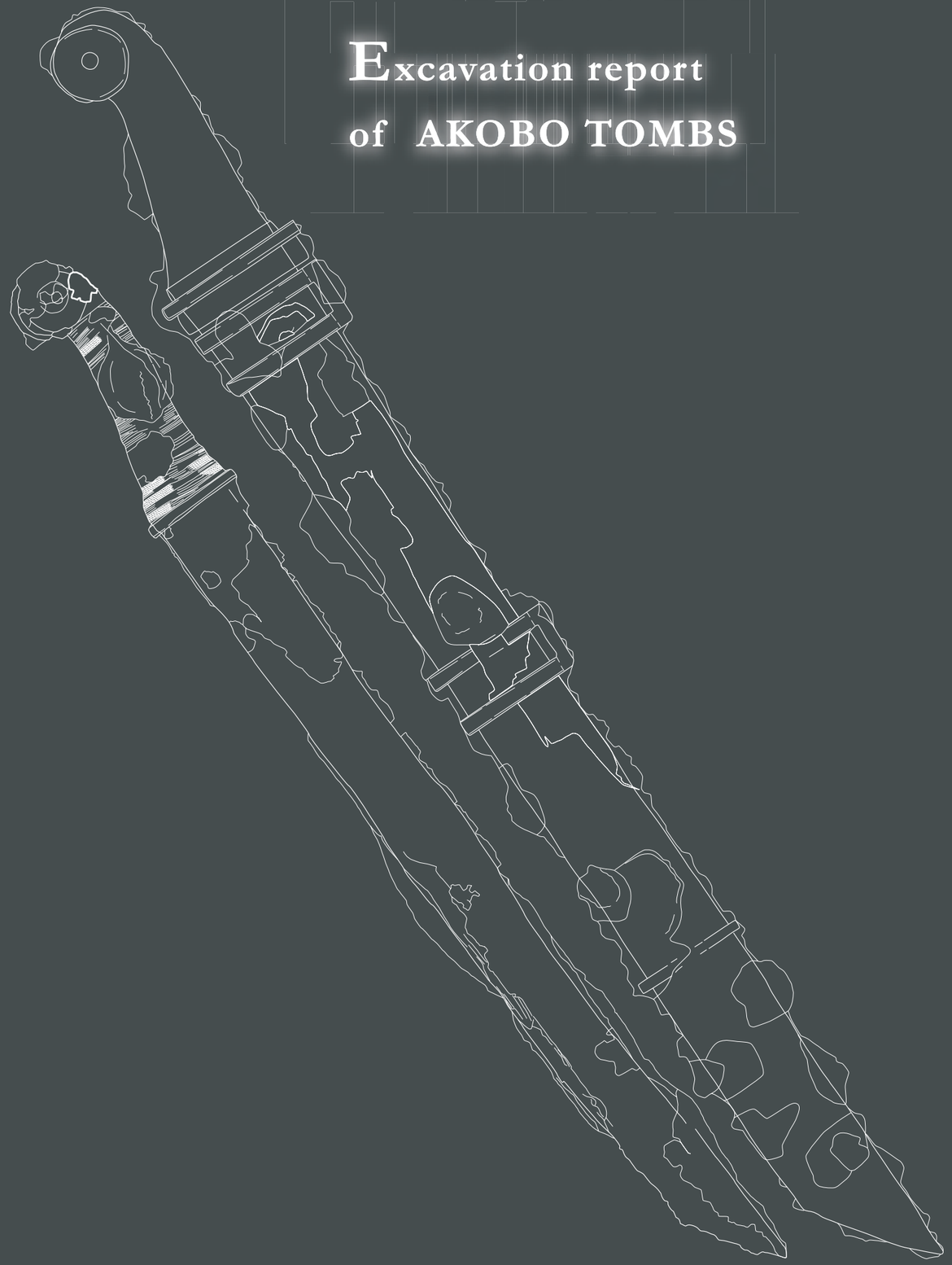
Excavation report of AKOBO TOMBS



Oirase Town board of education

阿光坊古墳群発掘調査報告書

二〇〇七年

おいらせ町教育委員会

おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第1集

阿光坊古墳群発掘調査報告書

調査成果

阿光坊古墳群ー阿光坊遺跡・天神山遺跡・十三森(2)遺跡ー の発掘調査報告書を再録。16次の調査をまとめた。

保存処理・分析報告

出土した大刀・鉄鏃・耳環などの保存処理を実施。大刀に付着していた繊維や鞘の材質についての所見を収録。未報告の須恵器胎土分析成果を報告。

考　　察

遺物や遺構の分類による、古墳群の再検討。阿光坊古墳群の意義とは何か。

2007年 1月　青森県おいらせ町教育委員会

阿　光　坊　古　墳　群
発　掘　調　査　報　告　書

青森県おいらせ町教育委員会

序

北の大地に潤い与え、命を育む奥入瀬川。千年まえも、そして千年の後も、悠久の流れを湛える。

このたび、旧百石町と旧下田町は合併し、おいらせ町となりました。この川のごとく、豊かな発展を願ってやみません。

おいらせ町には、多くの古代遺跡がみつかっております。その中で、阿光坊古墳群は、十数次の調査を経て、重要な遺跡であることが明らかになってまいりました。本書はその成果を纏めたものです。いささかでも歴史・文化発展に役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、御指導・御協力を賜りました関係各位に感謝を申し上げ、序といたします。

平成 19 年 1 月

青森県おいらせ町教育委員会
教育長　村上　博

例　言

1　本書は青森県上北郡おいらせ町阿光坊に所在する阿光坊古墳群の、平成 15 年度から平成 17 年度にかけて行なった発掘調査の本報告書である。同調査成果を理解するため、昭和 63 年から、全 16 次の調査成果のうち、事実記載を再収録した。

2　調査は旧下田町教育委員会が主体となり実施した。この調査にあたっては国庫補助金を使用している。

3　本書の編集は小谷地肇が担当した。事実記載については既刊の報告書を転載し、転載元は下記のように示す。執筆者は文末に記載した。なお、所属は報告書作成当時のものとした。

昭和 63 年度『阿光坊遺跡』下田町埋蔵文化財調査報告書第 1 集　原典 A
平成元年度『阿光坊遺跡』下田町埋蔵文化財調査報告書第 2 集　原典 B
平成 2 年度『阿光坊遺跡』下田町埋蔵文化財調査報告書第 3 集　原典 C
平成 11 年度『下田町内遺跡 3』下田町埋蔵文化財調査報告書第 14 集　原典 D
平成 12 年度『下田町内遺跡 4』下田町埋蔵文化財調査報告書第 15 集　原典 E
平成 13 年度『下田町内遺跡 5』下田町埋蔵文化財調査報告書第 18 集　原典 F
平成 14 年度『下田町内遺跡 6』下田町埋蔵文化財調査報告書第 19 集　原典 G
平成 15 年度『下田町内遺跡 7』下田町埋蔵文化財調査報告書第 20 集　原典 H
平成 16 年度『下田町内遺跡 8』下田町埋蔵文化財調査報告書第 21 集　原典 I
平成 17 年度『下田町内遺跡 9』下田町埋蔵文化財調査報告書第 22 集　原典 J

4　トレース図は、手描きトレース図をデジタルトレースした。再実測したもの等は注記表に示した。

5　遺物写真撮影は木村誠が行なった。

6　用語の一部を、平成 17 年度現在使用用語に統一した。周湟→周溝、把→柄、円形周溝墓・古墳・塚→末期古墳。その他助詞等の軽微な変更を行った。

7　本書で使用する方位は特に記さない限り座標北である。なお本書で用いた緯度・経度及び平面直角座標は日本測地系（第X系）である。

8　土壌色については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帳』2001 年版を参考とした。

9　挿図・写真図版には連番を付したが、第Ⅲ章及び寄稿については統一していない。

10　遺構及び遺物の網は以下を示す。

遺構　地山　炭

遺物　黒色処理　漆　布　木質

11　本報告書を作成するに当り、下記の諸氏・機関から多大なる御指導・御協力を得た。ご芳名を記して感謝の意を表します（敬称略・順不同）。

宇部則保・大野亨・小保内裕之・工藤雅樹・坂井秀弥・佐藤智生・佐藤良和・鈴木和子・清野孝之・高橋千晶・田中寿明・辻秀人・藤沢敦・藤原弘明・三浦圭介・村越潔・村田晃一・八木光則・文化庁・青森県教育庁文化財保護課・八戸市教育委員会

12　本報告に係る出土遺物及び記録資料は、おいらせ町教育委員会生涯学習課埋蔵文化財調査室に保管している。

目次

序文
例言・凡例
目次

第Ⅰ章　環境 …… 1
　第1節　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
　第2節　遺跡周辺の環境と基本層序 …… 4
　第3節　阿光坊古墳群の発見と調査経過 …… 6

第Ⅱ章　調査成果 …… 11
　第1節　阿光坊遺跡 …… 11
　第2節　天神山遺跡 …… 95
　第3節　十三森(2)遺跡 …… 161

第Ⅲ章　保存処理・分析報告 …… 193
　平成17年度阿光坊古墳群遺跡出土金属製品他保存処理報告
　　東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター …… 193
　青森県おいらせ町内遺跡出土須恵器の胎土分析　松本建速 …… 203

第Ⅳ章　考察 …… 206
　第1節　出土遺物について …… 206
　第2節　阿光坊古墳群の遺構について …… 227
　第3節　被葬者と集落 …… 238

列島の古代史における阿光坊古墳群　藤沢　敦 …… 244

まとめ …… 253

挿図目次

第 1 図　遺跡の位置 …… 2
第 2 図　周辺の地形 …… 3
第 3 図　遺跡周辺の地形分類図 …… 4
第 4 図　基本層序の模式柱状図 …… 5
第 5 図　調査位置 …… 8
第 6 図　阿光坊古墳群全体図 …… 10
第 7 図　阿光坊遺跡遺構配置図 …… 13
第 8 図　A1 号墳 (1) …… 14
第 9 図　A1 号墳 (2) …… 15
第 10 図　A1 号墳 (3) …… 16
第 11 図　A2 号墳 (1) …… 18
第 12 図　A2 号墳 (2) …… 19
第 13 図　A3 号墳 (1) …… 20
第 14 図　A3 号墳 (2) …… 21
第 15 図　A4 号墳 …… 23
第 16 図　A5 号墳 (1) …… 25
第 17 図　A5 号墳 (2) …… 26
第 18 図　A5 号墳 (3) …… 27
第 19 図　A5 号墳 (4) …… 28
第 20 図　A6 号墳 (1) …… 30
第 21 図　A6 号墳 (2) …… 31
第 22 図　A7 号墳 (1) …… 32
第 23 図　A7 号墳 (2) …… 33
第 24 図　A7 号墳 (3) …… 34
第 25 図　A8 号墳 (1) …… 35
第 26 図　A8 号墳 (2) …… 36
第 27 図　A9 号墳 (1) …… 38
第 28 図　A9 号墳 (2) …… 39
第 29 図　A9 号墳 (3) …… 40
第 30 図　A9 号墳 (4) …… 41
第 31 図　A10 号墳 (1) …… 43
第 32 図　A10 号墳 (2) …… 44
第 33 図　A11 号墳 (1) …… 45
第 34 図　A11 号墳 (2) …… 46
第 35 図　A11 号墳 (3) …… 47
第 36 図　A11 号墳 (4) …… 48
第 37 図　A12 号墳 (1) …… 50
第 38 図　A12 号墳 (2) …… 51
第 39 図　A13 号墳 (1) …… 52
第 40 図　A13 号墳 (2) …… 53
第 41 図　A14 号墳 (1) …… 55
第 42 図　A14 号墳 (2) …… 56
第 43 図　阿光坊遺跡トレンチ配置図 (1) …… 57
第 44 図　A16 号墳 …… 58
第 45 図　A17 号墳 …… 59
第 46 図　阿光坊遺跡トレンチ配置図 (2) …… 60
第 47 図　A18 号墳 …… 61
第 48 図　a1 号土壙 …… 62
第 49 図　a2 号土壙 …… 63
第 50 図　a3 ～ a 7号土壙配置図 …… 64
第 51 図　a3 号土壙 (1) …… 66
第 52 図　a3 号土壙 (2) …… 67
第 53 図　a3 号土壙 (3) …… 68
第 54 図　a4 ～ a6 号土壙 …… 69
第 55 図　a7 号土壙 …… 70
第 56 図　第 1 号溝 …… 72
第 57 図　第 2 号溝・道路状遺構 …… 73
第 58 図　遺構外出土遺物 (1) …… 74
第 59 図　遺構外出土遺物 (2) …… 75
第 60 図　遺構外出土遺物 (3) …… 76
第 61 図　天神山遺跡遺構配置図 …… 97
第 62 図　T1・T2 号墳遺構配置図 …… 99
第 63 図　T1 号墳 (1) …… 100
第 64 図　T1 号墳 (2) …… 101
第 65 図　T1 号墳 (3) …… 102
第 66 図　T1 号墳 (4) …… 103
第 67 図　T2 号墳 (1) …… 104
第 68 図　T2 号墳 (2) …… 106
第 69 図　T2 号墳 (3) …… 107
第 70 図　T2 号墳 (4) …… 108
第 71 図　T2 号墳 (5) …… 110
第 72 図　T2 号墳 (6) …… 111
第 73 図　T2 号墳 (7) …… 112
第 74 図　T3 号墳 (1) …… 114
第 75 図　T3 号墳 (2) …… 115
第 76 図　T3 号墳 (3) …… 116
第 77 図　T3 号墳 (4) …… 117
第 78 図　T4 号墳 (1) …… 120
第 79 図　T4 号墳 (2) …… 121
第 80 図　T4 号墳 (3) …… 122
第 81 図　T4 号墳 (4) …… 123
第 82 図　T4 号墳 (5) …… 124
第 83 図　T5 号墳 (1) …… 127
第 84 図　T5 号墳 (2) …… 128
第 85 図　T5 号墳 (3) …… 129
第 86 図　天神山遺跡トレンチ配置図 …… 130
第 87 図　T7 号墳 …… 131
第 88 図　T8 号墳 …… 132
第 89 図　T16 号墳 …… 133
第 90 図　T17 号墳 …… 134
第 91 図　電気探査 (T17 号墳・T20 号墳) …… 135
第 92 図　T20 号墳 …… 136
第 93 図　T21・T22・T23 号墳 …… 137
第 94 図　T24・T26 号墳 …… 138
第 95 図　t1 号土壙 …… 140
第 96 図　天神山遺跡遺構外出土遺物 …… 141
第 97 図　十三森 (2) 遺跡全体図 …… 163
第 98 図　J10 号墳 (1) …… 164
第 99 図　J10 号墳 (2) …… 165
第 100 図　J10 号墳 (3) …… 166
第 101 図　J10 号墳 (4) …… 167
第 102 図　J10 号墳 (5) …… 168
第 103 図　J21・J23 号墳遺構配置図 …… 170
第 104 図　J21 号墳 (1) …… 171
第 105 図　J21 号墳 (2) …… 172
第 106 図　J21 号墳 (3) …… 173
第 107 図　J23 号墳 (1) …… 175
第 108 図　J23 号墳 (2) …… 176
第 109 図　J23 号墳 (3) …… 177
第 110 図　J23 号墳 (4) …… 178
第 111 図　J61 号墳 (1) …… 180
第 112 図　J61 号墳 (2) …… 181
第 113 図　J61 号墳 (3) …… 182
第 114 図　J65・J66 号墳 …… 183
第 115 図　J5 号墳電気探査・十三森 (2) 遺跡
遺構外出土遺物 …… 184
第 116 図　坏分類図 …… 207
第 117 図　甕分類図 …… 208
第 118 図　須恵器集成図 …… 210
第 119 図　刀剣類集成図 1 …… 214
第 120 図　刀剣類集成図 2 …… 215
第 121 図　刀剣類集成図 3 …… 216
第 122 図　鉄鏃集成図 …… 218
第 123 図　農工具・その他 …… 219
第 124 図　馬具 …… 220
第 125 図　刀子・釧・耳環・環状錫製品 …… 221
第 126 図　玉類集成図 …… 222

第 127 図　遺物変遷図 (1) …… 223
第 128 図　遺物変遷図 (2) …… 224
第 129 図　遺物変遷図 (3) …… 225
第 130 図　遺物変遷図 (4) …… 226
第 131 図　墳丘構築模式図 …… 227
第 132 図　主体部分類と時期 …… 227
第 133 図　四辺埋め込み式木棺の構造と埋葬の手順 …… 228
第 134 図　末期古墳の時期 …… 229
第 135 図　主体部分類図 …… 230
第 136 図　主体部分類と出土遺物 …… 231
第 137 図　周溝規模 …… 232
第 138 図　方位 …… 233
第 139 図　主体部主軸方向 …… 236
第 140 図　下谷地 (1) 遺跡の窪み …… 238
第 141 図　住居跡規模 …… 239
第 142 図　集落の消長 …… 240
第 143 図　古代東北の地域区分 …… 241

図版目次

図版 1　A1 号墳 …… 77
図版 2　A2 号墳・A3 号墳・A4 号墳・A5 号墳 (1) …… 78
図版 3　A5 号墳 (2)・A6 号墳 …… 79
図版 4　A7 号墳・A8 号墳 …… 80
図版 5　A9 号墳・A10 号墳・A11 号墳 (1) …… 81
図版 6　A11 号墳 (2)・A12 号墳 (1) …… 82
図版 7　A12 号墳 (2)・A13 号墳 (1) …… 83
図版 8　A13 号墳 (2)・A14 号墳 …… 84
図版 9　A16 号墳・A17 号墳・a1 号土壙・a2 号土壙・a3 号土壙 (1) …… 85
図版 10　a3 号土壙 (2)・a4 号土壙 …… 86
図版 11　a5 号土壙・a6 号土壙・a7 号土壙 (1) …… 87
図版 12　a7 号土壙 (2)・道路状遺構 (第 1 号溝) …… 88
図版 13　第 2 号溝・A1 号墳出土遺物 (1) …… 89
図版 14　A1 号墳 (2)・A2 号墳・A3 号墳・A4 号墳・A5 号墳・A6 号墳・A7 号墳 (1) 出土遺物 …… 90
図版 15　A7 号墳 (2)・A8 号墳出土遺物 …… 91
図版 16　A9 号墳・A10 号墳出土遺物 …… 92
図版 17　A11 号墳・A12 号墳・A13 号墳・A14 号墳出土遺物 …… 93
図版 18　a2 号土壙・a3 号土壙・a7 号土壙・遺構外出土遺物 …… 94
図版 19　上空から見た阿光坊古墳群 …… 142
図版 20　T1 号墳 (1) …… 143
図版 21　T1 号墳 (2) …… 144
図版 22　T2 号墳 (1) …… 145
図版 23　T2 号墳 (2) …… 146
図版 24　T3 号墳 (1) …… 147
図版 25　T3 号墳 (2)・T4 号墳 (1)・t1 号土壙 …… 148
図版 26　T4 号墳 (2)・T5 号墳 (1) …… 149
図版 27　T5 号墳 (2) …… 150
図版 28　T5 号墳 (3)・T7 号墳・T8 号墳・T11 号墳・T16 号墳 …… 151
図版 29　T17 号墳・T21 号墳・T22 号墳・T23 号墳・T24 号墳・T25 号墳 …… 152
図版 30　T26 号墳・T1 号墳出土遺物 (1) …… 153
図版 31　T2 号墳出土遺物 (1) …… 154
図版 32　T2 号墳出土遺物 (2) …… 155
図版 33　T3 号墳出土遺物 (1) …… 156
図版 34　T2 号墳出土遺物 (3)・T3 号墳出土遺物 (2) T4 号墳出土遺物 (1) …… 157
図版 35　T4 号墳出土遺物 (2) …… 158
図版 36　T4 号墳出土遺物 (3)・T17 号墳出土遺物 …… 159
図版 37　T5 号墳・T16 号墳・T24 号墳・T26 号墳・t1 号土壙出土遺物 …… 160
図版 38　J10 号墳 (1) …… 185
図版 39　J10 号墳 (2) …… 186
図版 40　J10 号墳 (3)・J21 号墳 (1) …… 187
図版 41　J21 号墳 (2) …… 188
図版 42　J21 号墳 (3)・J23 号墳 (1) …… 189
図版 43　J23 号墳 (2)・J61 号墳 (1) …… 190
図版 44　J61 号墳 (2)・J65 号墳・J66 号墳 …… 191
図版 45　出土遺物 …… 192
図版 46　窪みとして認識できる住居跡の例 (向山 (6) 遺跡) …… 238
図版 47　阿光坊古墳群から東を望む (空中撮影) …… 241

第Ⅰ章　環境

第１節　遺跡の位置と歴史的環境

阿光坊古墳群とは、阿光坊遺跡・天神山遺跡・十三森 (2) 遺跡に所在する末期古墳の総称である。調査の進展により性格が次第に明らかになり、平成 14 年度調査より使用している。

阿光坊古墳群は青森県の南東部の、おいらせ町内に所在する。奥入瀬川下流左岸の段丘上に立地し、標高は 31.6m から 40m である。

阿光坊遺跡は、阿光坊古墳群の南東部に位置し、北東方向へ降っていく緩斜面上につくられている。現況は畑・山林である。

天神山遺跡は阿光坊古墳群の西側に隣接し、主に台地の平坦面に末期古墳が造られている。現況は山林である。

十三森 (2) 遺跡は、阿光坊・天神山遺跡からみると、小谷を隔て北側の台地に位置する。この台地は東側に舌状に張り出しており、北・東・南の三方向に緩斜面が形成されている。末期古墳は南・東側につくられており、北側にはみられない。現況は山林である。300m ほど北側には明神川が流れ、沖積地は水田として利用されている。

東流する奥入瀬川・明神川流域からは、多くの古代集落が見つかっている。

最も代表的な集落遺跡は、古墳群から東方へ 3.2km の地点に中心をもち、海岸から 4km の位置にある中野平遺跡である。これまで 20 次以上の調査が行われ、100 軒以上の古代の竪穴式住居跡が精査されている遺跡である。ほぼ古墳群の作られた時期に併行する住居跡がみつかっている。未調査地域には、現在でも竪穴式住居跡と推定される窪みが残っている。奥入瀬川下流域最大の拠点的な集落であると考えられる。この遺跡から更に東へ 1.2km の地点には、根岸遺跡がある。蕨手刀や挂甲小札が出土し、一辺 10m という、規模の大きな 7 号住居は重要である。

中野平遺跡から明神川を挟んで北方には向山 (4)・(6)、下谷地 (1) 遺跡がある。調査面積・軒数とも少ないが、多数の窪みが残っており、大規模な集落が展開したのは確実である。

古墳群から東方へ約 1km の地点には、7 世紀中葉から断続的に 10 世紀代まで集落が営まれた様子がみられる立蛇 (1) 遺跡・立蛇 (2) 遺跡がある。採集された土器の年代観から、発掘調査当初より古墳群との関連が指摘されてきた遺跡である。また西へ 1km の地点にはふくべ (3)・(4) 遺跡があり、やはり古墳群と併行する時期に営まれた集落がみつかっている。

このように阿光坊古墳群周辺には、同時期とみられる複数の集落が存在する点が注目され、古墳群造営との関連を想起させられる。

『日本後紀』弘仁二年 (811 年)7 月辛酉条には、邑良志閇村の降俘吉侯部都留岐が、爾薩体の夷の伊加古らが都母村にいて、幣伊村の夷を誘って自分たちを攻撃しようとしている。兵糧を得られれば先手を打って相手を攻撃したいと申し出、ゆるされている。この一文が、当地域周辺について触れられている可能性のあるもののなかで最も古いものである。まさに阿光坊古墳群の造営期間中であることが注目される。邑良志閇村は降俘吉侯部都留岐、爾薩体は伊加古に率いられており、それぞれの村には長がいたことが分かる。邑良志閇村と爾薩体は敵対関係にあり、爾薩体・都母村・幣伊村は同盟関係にあることなどから、その位置関係が近接していると推定される。このなかで、都母村は、七戸町坪川流域を中心に、広く上北地域とされている。坪川流域には、5・6 世紀の土壙墓がみつかった森ヶ沢遺跡があるが、当該期の集落は見つかっていない。

三陸沿岸部・九戸軽米地区・馬渕川上流域・下流域・奥入瀬川下流域・小川原湖周辺地域に集落が集中する様子が伺われ、このうち拠点的集落は馬渕川上・下流域と奥入瀬川下流域にみられ、これらが『日本後紀』に記された村々ではないかと推定した(小谷地2005)。都母村が上北地域であれば、明らかに 8・9 世紀段階の集落が多い奥入瀬川流域が妥当なのではないかと考えた。同様の見解は

青森県
上北郡
おいらせ町管内図
位置図
おいらせ町
阿光坊古墳群
1:50,000
北海道地図株式会社青森営業所
電話 (017) 777-9193
青森県上北郡おいらせ町役場

第１図　遺跡の位置

佐藤智生より提出され（佐藤 2004・2005)、「坪周辺は奈良時代～平安時代前期の遺跡が無きに等しく、大規模な集団の形成は考えにくい状況にあり、それゆえ上北地域におけるこの時期の中心地は奥入瀬川下流域と見なし得る」との見解が示されている。

古墳群一帯は、古くから十三森山と呼ばれていたという。そう呼ばれるに至った経緯について、すこし触れておきたい。

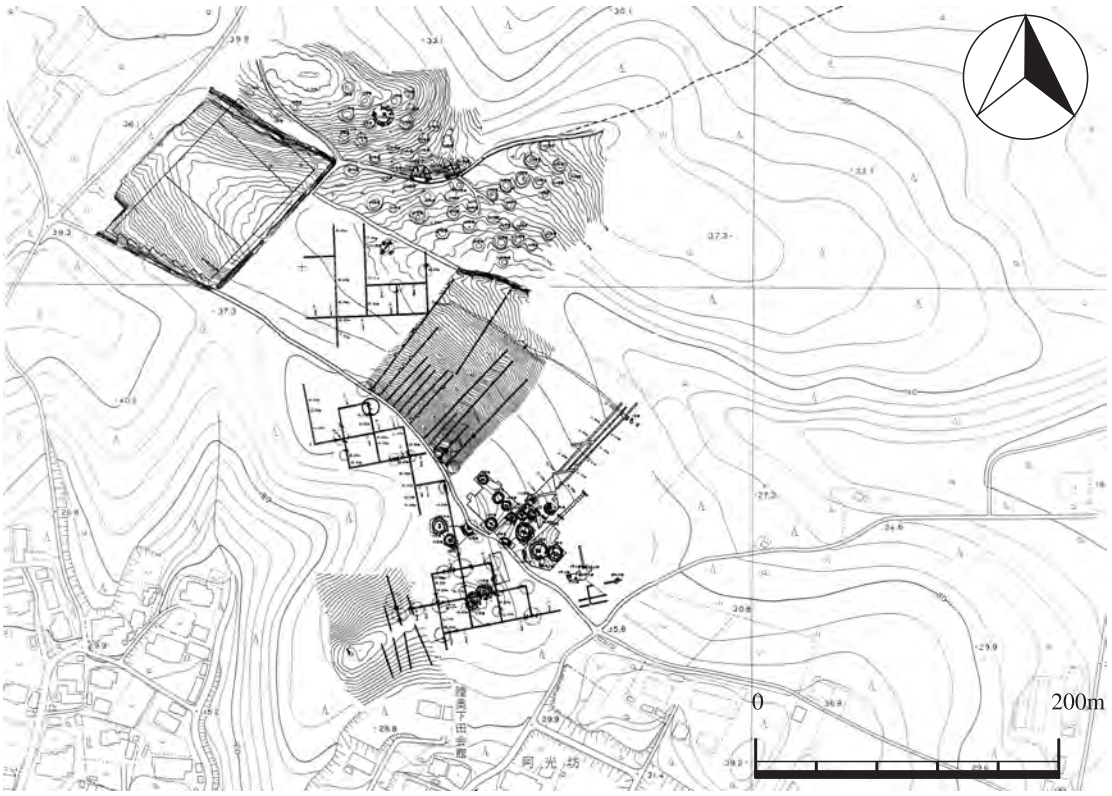
『下田町誌』には佐々木堀を築き農耕に従った人々が不慮の死を遂げたのを祀ったということを根幹にした、いくつかの伝説が紹介されている。また、十三森という名称から十三の数を基調とする信仰によって作られた供養壇が含まれ、「奈良時代前期に先ず古墳が築かれ、叢塚が出来て、そこに十三モリが中世の頃に至って築造された」と結論している。

伝わっている伝説は、十三塚伝説の一類型ととらえられる。累々と残っている末期古墳について、十三塚伝説の知識を有する人が説明し、意味づけたと想像され（小谷地 2006)、この十三塚伝説から十三森と呼ばれるようになったと考えられる。

このことは、阿光坊地区に古代以降人々が住み始めた時期から、阿光坊古墳群が認識され、大切にされてきた現われと考えられる。

	遺跡名	所在地
1	館越館	沼端
2	沼端遺跡	松原一丁目73-460
3	銀行山(1)遺跡	沼端14-184･161外
4	千刈田遺跡	千刈田11
5	東下谷地(1)遺跡	内山平74-723
6	日ケ久保貝塚	沼端14-248外
7	向平遺跡	向平22-73
8	銀行山(2)遺跡	沼端14-184外
9	東下谷地(2)遺跡	東下谷地115-716外
10	下谷地(3)遺跡	東下谷地45-1外
11	百石幼稚園遺跡	沼端14-127外
12	沼端貝塚	沼端14-208外
13	根岸遺跡	東下谷地
14	向山(1)遺跡	向山
15	向山(2)遺跡	向山
16	向山(3)遺跡	向山
17	十三森(1)遺跡	神明前
18	天神山遺跡	神明前
19	下谷地(1)遺跡	西下谷地
20	ふくべ(1)遺跡	瓢
21	ふくべ(2)遺跡	瓢
22	ふくべ(3)遺跡	瓢
23	神明前遺跡	神明前105
24	チョツチョウ坊塚墳墓	洗平
25	洗平(1)遺跡	洗平
26	洗平(2)遺跡	洗平
27	ふくべ(4)遺跡	瓢
28	柴山(1)遺跡	瓢
29	欠番	
30	ふくべ(7)遺跡	瓢
31	ふくべ(8)遺跡	瓢
32	ふくべ(9)遺跡	瓢
33	下谷地(2)遺跡	西下谷地
34	立蛇(1)遺跡	立蛇
35	立蛇(2)遺跡	立蛇、中下田、西前川原
36	下田館	舘越
37	古館	舘越
38	阿光坊遺跡	阿光坊105-43
39	中野平遺跡	中野平下長根山1-138外
40	向山(4)遺跡	向山2440-1外
41	木ノ下一里塚	浜道89-7
42	向山(5)遺跡	向山2465-1外
43	向山(6)遺跡	向山
44	十三森(2)遺跡	阿光坊

第１表　周知の埋蔵文化財包蔵地一覧



第２図　周辺の地形

第２節　遺跡周辺の環境と基本層序

遺跡周辺の地形

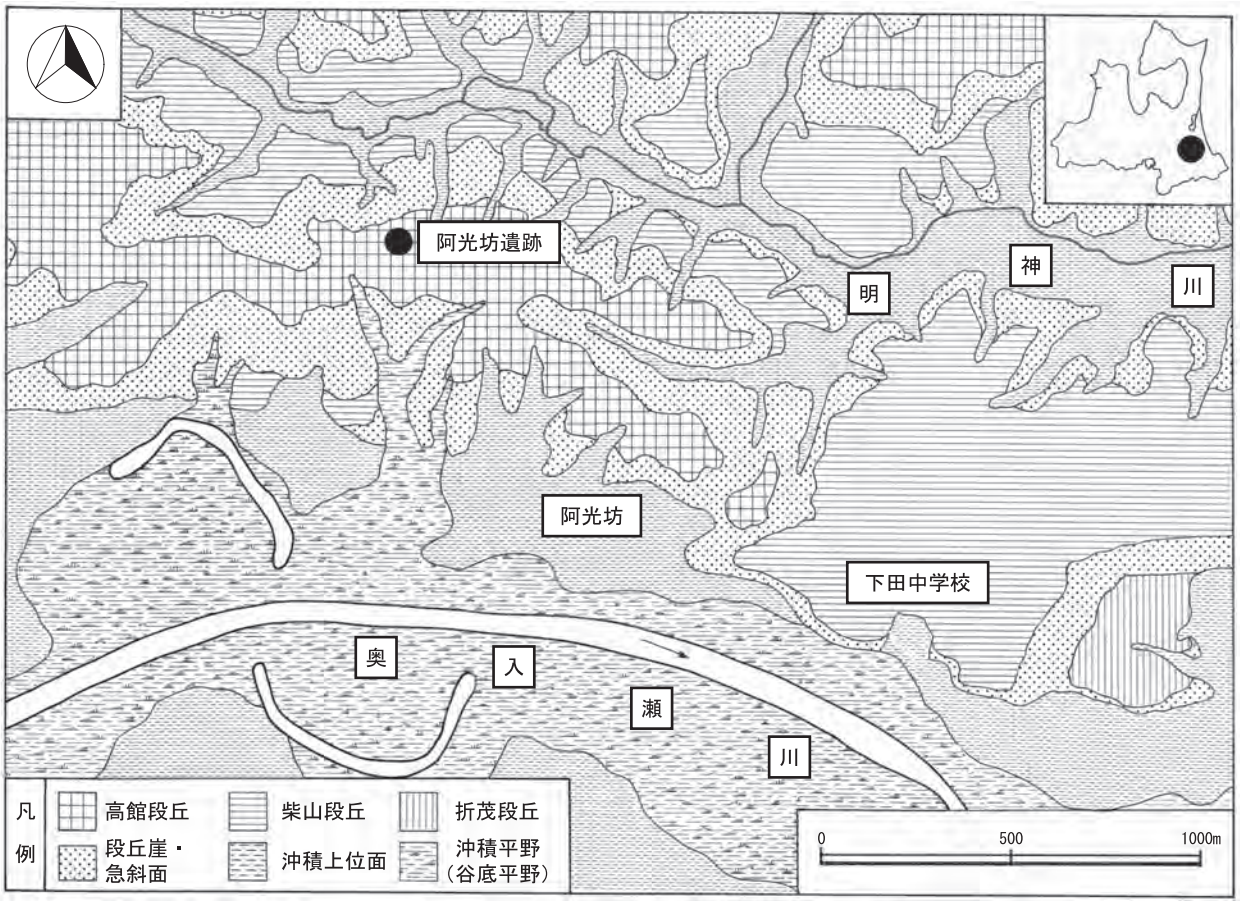
本遺跡は、東方の太平洋岸から約 7km 内陸側にあって、十和田湖に源を発する奥入瀬川（相坂川）下流域の左岸に分布する海岸段丘上に立地している。

東流する奥入瀬川流域の南北両岸には天狗岱段丘、高館段丘、柴山段丘、折茂段丘などの洪積段丘群が分布して台地をなしている。このうち、本遺跡周辺に分布しているのは高館段丘、柴山段丘、折茂段丘の３段丘である。そして、奥入瀬川下流域には南北幅が 1.5 ～ 2km の沖積平野が展開していて、河川改修されているが、三日月状の旧河道が認められる。なお、台地の縁辺部には沖積上位面が断続的に分布している。

一方、奥入瀬川の北方には河口を同一にする明神川が東流していて、流域内には間木堤、山崎堤、前田堤などの人工的に堰止められた沼沢地が点在している。この流域には柴山段丘が高館段丘の縁辺部に沿って帯状に分布している。

高館段丘は標高 35 ～ 50m であって、開析度がやや大きく起伏しているものの、全体的には東方への緩傾斜面ではある。東方に分布する柴山段丘は標高 20 ～ 25m であって、開析度が小さくきわめて平坦である。なお、柴山段丘の縁辺部には局部的に下位の折茂段丘が分布している。

本遺跡は、上記の両河川に挟まれていて東方に舌状に張り出す形の高館段丘上に立地していて、標高は約 40m である。周辺の地形を概観すると、開析度が大きくかなり起伏していて、全体的には北方への緩い傾斜面となっている。そして、この段丘面の南端は急峻な段丘崖であり、北端は下位の柴山段丘及び沖積上位面へと階段状に高度を下げている（第３図）。

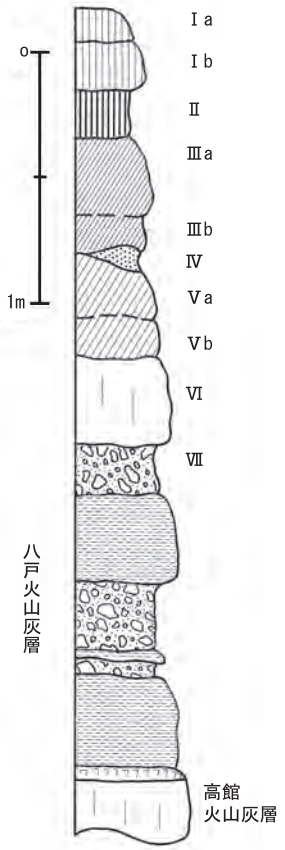


第３図　遺跡周辺の地形分類図

遺跡内の基本層序について

本遺跡の立地する高館段丘には、高館火山灰層及び八戸火山灰層が堆積している。遺跡内の基本層序は第４図に示した通りである。以下、その概要を記す。

Ⅰ層　黒褐色土。耕作土。乾くと、褐灰色に変色する。Ⅰａ層は、しまりがなくソフトである。Ⅰｂ層は､かたさはあるがしまりがなく、全体的に格子状の割れ目が目立つ。
Ⅱ層　黒色腐植質土。粘性、湿性があり、多少かたさはあるが、全体的にソフトである。細～中粒の浮石を微量に混入している。
Ⅲ層　黒褐色土。粘性、湿性に欠け、しまりなくソフトである。下位のⅣ層を多量に混入している。下位のⅢｂ層はⅣ層の混入量が多く、暗褐色浮石質土となっている。
Ⅳ層　オリーブ褐色浮石。中掫浮石層である。細～中粒砂質浮石で、しまりなくソフトである。本層は侵食によりレンズ状の堆積を示している。
Ⅴ層　暗褐色浮石質土。漸移層である。粘性、湿性があり、かたくしまっている。本層中には、下位層を粒子状及びブロック状に多量に混入し、Ⅴｂ層ほどブロック状の混入量が多い。
Ⅵ層　黄褐色浮石質ローム。本層は八戸火山灰層最上部のローム層に相当する。本層には径２～5mmの浮石がかなり混入している。
Ⅶ層　黄褐色浮石。本層は八戸火山灰層第Ⅵ層に相当する。径２～6mmの浮石が密集する。本層下位には八戸火山灰層第Ⅴ～Ⅰ層相当層が堆積し、さらに高館火山灰層が堆積している。



第４図　基本層序の模式柱状図

原典Ｂ　山口義伸　青森県立板柳高校教諭

第3節　阿光坊古墳群の発見と調査経過

阿光坊古墳群一帯は、古くから「十三森山」と呼ばれたことについては第1節に触れた。住民に認識されたのは遅くとも江戸時代であったと推定される。

古墳群のことが具体的に書かれたものとしての初見は、管見では昭和11年の小学校の副読本である『郷土の史蹟を尋ねて』である。史跡関係略図に「従者杜山」と示され、また、従者杜の項では「俗に十三杜山と称して、七八十の従者杜が群をなしてゐる。直径何れも五間もしくは六間に渡るもので、従者の人々の墓所であろう」と記されている。この前年、成田吉蔵氏が石帯の丸鞆を採集して、現物は現在に伝えられている（第115図　図版45）。

成田健康氏による『阿光坊の歴史と伝説』のなかに、阿光坊古墳群に関する発掘調査以前の知見がよくまとめられている（成田1987）。これによると、少なくとも明治期には様々なものが出土することが知られていたようであり、「明治、大正の頃は畠であり、畠一面に朱色の土器（ハジキ）その他唐草模様のついた青銅のような破片が散乱していた」と様子を伝えている。また、「初めに開墾した時には大きな石が多量に出た場所も数ヶ所あったと云われている」と、伝聞ではあるが、主体部が礫床タイプのものも含まれていた可能性が想起される記述がある点は注意が必要である。

昭和50年、農作業中にA1号墳に副葬されていたと見られる大刀が出土し、昭和51年には下田町教育委員会が有志を募って測量調査を行っている。この調査により、十三森(2)遺跡には塚が58基存在することが確認された。昭和61年には蕨手刀が表採され、さらに昭和62年の農作業中、阿光坊遺跡から勾玉がまとまって出土した。県文化課や県文化財保護審議会委員の村越潔弘前大学教授（当時）の踏査により、古墳の存在の可能性が濃厚と判断され、耕作による破壊の前に記録保存することを目的とし、発掘調査が行われることとなった。なお、各年度の調査概要・従事者は第2表に、調査箇所については第5図に示した。併せて参照されたい。

昭和63年、いよいよ3カ年計画の発掘調査が開始された。町が主体となり、調査を弘前大学に依頼する形で行なわれた。この成果により、当時、本州最北に位置する古墳群と考えられた。4基の末期古墳が調査され、7世紀後半から8世紀初めころという年代観が示された。出土土器の類似から立蛇(1)遺跡が古墳群を残した人々の集落と推定している。調査面積は300㎡であった。

平成元年、2年目の調査が行われる。さらに5基の末期古墳と1基の土壙墓が確認された。さらに畑や山林のなかに点在し、その数は丹後平古墳群に匹敵、あるいは凌駕するのではないかと推定している。調査面積は581㎡。

3年目の調査も弘前大学に依頼する予定であったが、諸般の事情により調査を担当することが難しいとのことで、県教育庁文化課と協議したうえ、八戸市教育委員会に依頼した。八戸市教育委員会はこれを承諾し、調査担当を八戸市博物館とした。3ヵ年計画の最終年度であったこの年には、580㎡の調査を行い、3基の末期古墳と1基の土壙墓を精査した。考察では、末期古墳の規模・構造や年代について検討が行なわれている。

3ヵ年計画の発掘調査はこれで終了し、鉄器の保存処理が平成5年度に行なわれている。出土遺物の一部は青森県立郷土館で常設展示されるなど、青森県内で古墳文化の波及を知ることの出来る数少ない資料と捉えられる。

付近に近世の塚がかつて存在したために、十三森山と混同され「十三森遺跡」と登録された地点があった（現十三森(1)遺跡）。その影響を受け、本来の十三森山は未周知であった。保護の必要から十三森(2)遺跡として平成9年に登録された。

平成11年に、5ヵ年計画が立てられ、十三森(2)遺跡と天神山遺跡の調査が行われた。十三森(2)遺跡については、現存する塚の性格を明らかにすることを目的とした。北側約半分の20cm等高線図の作成と、J10号墳の発掘調査が行なわれた。天神山遺跡の調査では、多数の末期古墳がトレンチ調査で確認され、かなりの広がりがあると予想された。

平成12年には阿光坊・天神山・十三森(2)遺跡の調査が行われた。阿光坊遺跡は、長芋の耕作機械が年々大型化し、遺構の消滅が危惧されたため、発掘調査を行った。141㎡と、狭い範囲の調査であったが、5基の土壙墓を検出するという成果が上がった。一方、畑として利用されている地点に設定したトレンチ調査では、予想以上の破壊状況であることが確認され、愕然とする。天神山遺跡の調査ではさらに北側にも末期古墳の分布が認められ、十三森(2)遺跡と阿光坊・天神山遺跡との関連が十分に考えられるようになる。十三森(2)遺跡の調査では、末期古墳の確認できる範囲の測量が完了し、地表から確認できる末期古墳は60基であった。なお、後の調査で3基増えることとなる。J10号墳が、阿光坊遺跡に見られる末期古墳の系譜を引くものであると結論づけられ、阿光坊・天神山・十三森(2)遺跡に所在する末期古墳が同一の古墳群であると考えられ始めた。

平成13年には、畑部分の破壊状況を確認するため、阿光坊遺跡で平成元年度調査区の一部の再調査と、隣接する北東部の調査を行った。A13・14号墳が確認された一方、A13・14号墳以北には末期古墳が造られていないことが明らかとなった。十三森(2)遺跡ではトレンチ調査を行い、末期古墳の検出を試みた。この結果、B-Tm火山灰が堆積する溝を2ヶ所で確認し、末期古墳であると推定し、それぞれJ65・66号墳とした。J61号墳のトレンチ調査を行い、B-Tm･To-a火山灰の堆積や、須恵器の出土から、末期古墳であることが確認された。

平成14年には天神山遺跡のT1号墳、T2号墳の発掘調査を行った。天神山遺跡内での初の本発掘調査となった。T1号墳からは直刀や鉄鏃が、T2号墳からは蕨手刀や玉類が出土した。この報告では、主体部の構築順位について考察し、主体部を造るのは盛土後と考えた。盛土を切る様子が観察されたことが主な理由だが、木棺蓋の腐朽による陥没と、掘り込みと、どちらの痕跡とも捉えられ、後の調査では、主体部構築が盛土に先行する可能性が高いと判断されることになる。

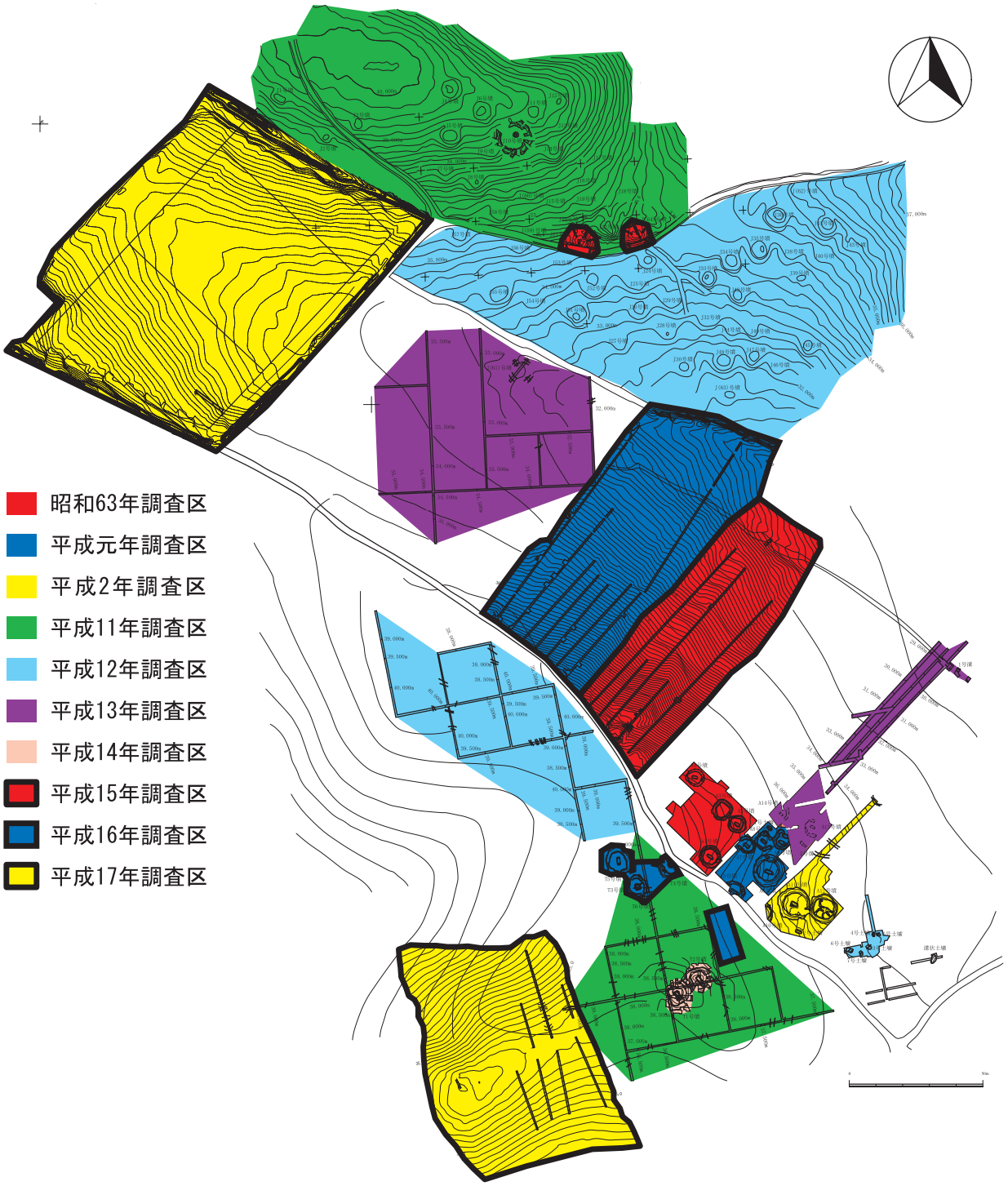
平成15年は、平成11年からの5ヵ年計画の最終年度となった。それまでの調査によって大規模な群集墳であることや、長期間にわたって造られた可能性が考えられるようになった。6月29日に文化庁文化財部記念物課坂井秀弥主任調査官、青森県教育庁文化財保護課埋蔵文化財グループ三浦圭介副参事を招き現地指導を受けた。古墳群の時間的・空間的連続性をあきらかにすることと、古墳の数を確認することが特に必要で、これらを明らかにするために3ヵ年の調査をするよう指導を受けた。これを受け、阿光坊遺跡の測量及びトレンチ調査を行い、新たに1基の末期古墳を確認した。また、既存の道に切られているJ21・23号墳の道部分を掘削し、周溝を検出し、墳丘の構築方法を観察した。出土遺物からそれまで未発見であった、9世紀前半代の末期古墳であると考えられ、古墳群が継続している可能性が高まった。

平成16年は、3ヵ年計画の2年目であり、前年に引き続き阿光坊遺跡の試掘・測量調査、天神山遺跡の試掘・測量調査を行った。阿光坊遺跡からは1基の末期古墳を、天神山遺跡からは3基をそれぞれ確認し、末期古墳の分布が台地の平坦面を中心とし、斜面にはほとんど造られないことが明らかとなる。T3から6号墳を確認し、T3・4号墳の発掘調査を行ない、時期や性格についての知見が得られた。また、物理探査が末期古墳検出に有効であることがわかり、次年度導入することにした。

3ヵ年計画の最終年度である平成17年には、古墳群の北西部の物理探査をメインに行なった。レーダー探査と電気探査を行い、調査した地域に遺構は分布していない可能性が高いと判断された。一部掘削し確認したが、落ち込み等はみられなかった。天神山遺跡では、昨年度に引き続き資料蓄積のためT3・T5号墳の発掘調査を行った。

調査終盤の9月10・11日の両日、イオン下田ショッピングセンターにて阿光坊古墳群シンポジウムを行い、2日目は先生方による現地指導と、現地説明会が行なわれた。

平成18年は、3ヵ年の発掘調査報告書作成のため7月から10月まで整理作業を行なった。阿光坊古墳群を理解するためには過去の調査の情報も必要と判断され、検出された末期古墳全てについて事実記載を再録することにし、遺構・遺物の再トレース等の作業を中心に進めた。11月20日に坂井秀弥主任調査官、清野孝之調査官に阿光坊古墳群の保存と報告書作成について指導を受け、1月に本書を刊行した。

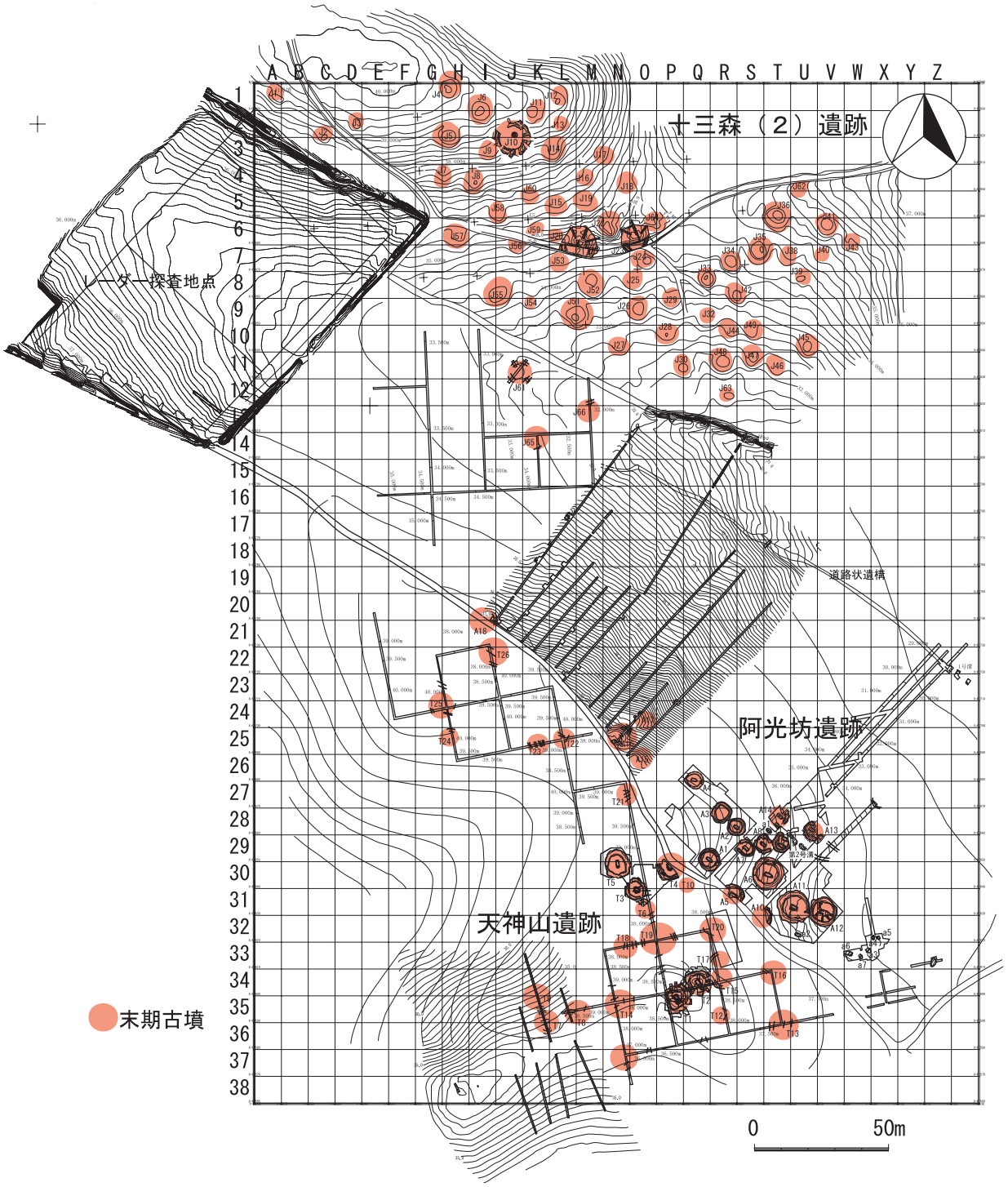


和暦	対象遺跡	対象遺構	期間	面積(㎡)	出典
昭和63年	阿坊光	A1 A2 A3 A4	8月3日～8月12日	300	A
平成元年	阿坊光	A5 A6 A7 A8 A9 a1	8月2日～8月12日	581	B
平成2年	阿坊光	A10 A11 A12 a2	8月20日～9月1日	580	C
平成11年	天神山	T1 T2 T3 T6 T8 T11 T12 T13 T14 T15 T16 T17 T18 T19 T20	7月12日～7月21日	196	D
平成11年	十三森(2)	J10	7月12日～7月21日	35	D
平成12年	阿坊光	a3 a4 a5 a6 a7	9月8日～9月19日	141	E
平成12年	天神山	T21 T22 T23 T24 T25 T26	7月21日～7月21日	175	E
平成12年	十三森(2)	J10	7月21日～7月21日	125	E
平成13年	阿坊光	A13 A14 1号溝 2号溝	10月18日～11月12日	611	F
平成13年	十三森(2)	J61 J65 J66	10月10日～10月26日	180	F
平成14年	天神山	T1 T2	8月8日～9月19日	400	G
平成15年	阿坊光	A16 A17 道路状遺構	8月5日～9月12日	400	H
平成15年	十三森(2)	J21 J23	8月5日～9月12日	201	H
平成16年	阿坊光	A18	7月14日～8月31日	205	I
平成16年	天神山	T3 T4 T5 T6 T7 T9 t1	5月28日～9月24日	65	I
平成17年	天神山	T3 T5	8月2日～9月16日	300	J

第５図　調査位置

西暦	和暦	所属	氏名	備考
1988	昭和63年	弘前大学教授	村越潔	調査員
1988	昭和63年	文化財保護審議委員	成田健康	調査協力員
1988	昭和63年	文化財保護審議委員	袴田義男	調査協力員
1988	昭和63年	社会教育課長	木村勝之	庶務
1988	昭和63年	社会教育課長補佐	澤頭光男	庶務
1988	昭和63年	弘前大学学生	矢島敬之	調査補助員
1988	昭和63年	弘前大学学生	羽柴直人	調査補助員
1988	昭和63年	弘前大学学生	木村高	調査補助員
1988	昭和63年	弘前大学学生	高木太	調査補助員
1988	昭和63年	弘前大学学生	赤沼隆一	調査補助員
1988	昭和63年	弘前大学学生	野坂麻美	調査補助員
1989	平成元年	弘前大学教授	村越潔	調査員
1989	平成元年	文化財保護審議委員	成田健康	調査協力員
1989	平成元年	文化財保護審議委員	袴田義男	調査協力員
1989	平成元年	社会教育課長	木村勝之	庶務
1989	平成元年	社会養育課長補佐	北向政美	庶務
1989	平成元年	社会教育課	田中和枝	庶務
1989	平成元年	社会教育課	中野重男	庶務
1989	平成元年	社会教育課	山村義一	庶務
1989	平成元年	弘前大学学生	赤谷隆一	調査補助員
1989	平成元年	弘前大学学生	相坂治	調査補助員
1989	平成元年	弘前大学学生	冨田雅樹	調査補助員
1989	平成元年	弘前大学学生	野坂麻美	調査補助員
1989	平成元年	弘前大学学生	吉田信子	調査補助員
1990	平成2年	弘前大学教授	村越潔	調査指導員
1990	平成2年	八戸市博物館副館長	栗村知弘	調査員
1990	平成2年	八戸市博物館学芸員	小林和彦	調査員
1990	平成2年	八戸市博物館学芸員	佐々木浩一	調査員
1990	平成2年	八戸市博物館学芸員	藤田俊雄	調査員
1990	平成2年	八戸市博物館学芸員	大野亨	調査員
1990	平成2年	八戸市博物館学芸員補	大嶋千早	調査員
1990	平成2年	文化財保護審議委員	成田健康	調査協力員
1990	平成2年	文化財保護審議委員	袴田義男	調査協力員
1990	平成2年	社会教育課長	澤頭光男	庶務
1990	平成2年	社会教育課長補佐	堤勝志	庶務
1990	平成2年	社会教育課	田中和枝	庶務
1990	平成2年	社会教育課	山村義一	庶務
1990	平成2年	弘前大学学生	小笠原雅行	調査補助員
1990	平成2年	弘前大学学生	小野貴之	調査補助員
1990	平成2年	弘前大学学生	吉田信子	調査補助員
1990	平成2年	弘前大学学生	吉田亜矢	調査補助員
1990	平成2年	國學院大学学生	小谷地肇	調査補助員
1999	平成11年	社会教育課	小谷地肇	学芸員（～平成18年）
1999	平成11年	社会教育課	成田和世	埋蔵文化財発掘調査員（～平成16年）
1999	平成11年	社会教育課	杉田幸子	埋蔵文化財発掘調査員（～平成14年）
2006	平成18年	生涯学習課	木村誠	主事

第２表　発掘調査従事者一覧



第６図　阿光坊古墳群全体図

第Ⅱ章　調査成果

第１節　阿光坊遺跡

平成２年度調査風景

A1 号墳　（第 8・9 図　図版 1）

位置　Q29 ～ 30、R29 ～ 30 にかけて位置する。

確認面　基本層序Ⅴ層上面で確認された。

周溝　内径 5.5 ～ 6.0m、外径 7.5 ～ 7.8m、上幅 0.8 ～ 1.5m、下幅 0.3 ～ 0.7m、確認面からの深さ 33 ～ 48cm を測り、ほぼ円形のプランである。底面は凸凹が激しく、東側の底面には長径 1m、短径 0.4m の隅丸長方形の掘り込みが 2 箇所みられる。埋土は 4 層に分けられる。

主体部　長方形のプランをもつ、長軸 2.3m、短軸 0.8m、確認面からの深さ 33 ～ 58cm を測る。長軸方向は N-51°-W を指す。底面は、ほぼ平坦で、北西の壁ぎわに長さ 45cm、幅 11cm、底面からの深さ 14cm の溝状の掘り込みがみられる。埋土は 2 層に分けられる。又撹乱層がみられるが、これは、畑の耕作時に直刀が発見された結果、耕作者等により掘り下げられたものであろう。

出土遺物（第 9・10 図　図版 13・14）

1 の小型の土師器は周溝の東側にみられる掘り込みの底面から口を北へ向け、横転した状態で出土したものである。

2 の土師器の高坏は、坏部と脚部の一部は、調査前に地元民により採集されていたものであるが、脚部の破片が周溝の底面から出土し、A1 号墳に伴う遺物として扱った。

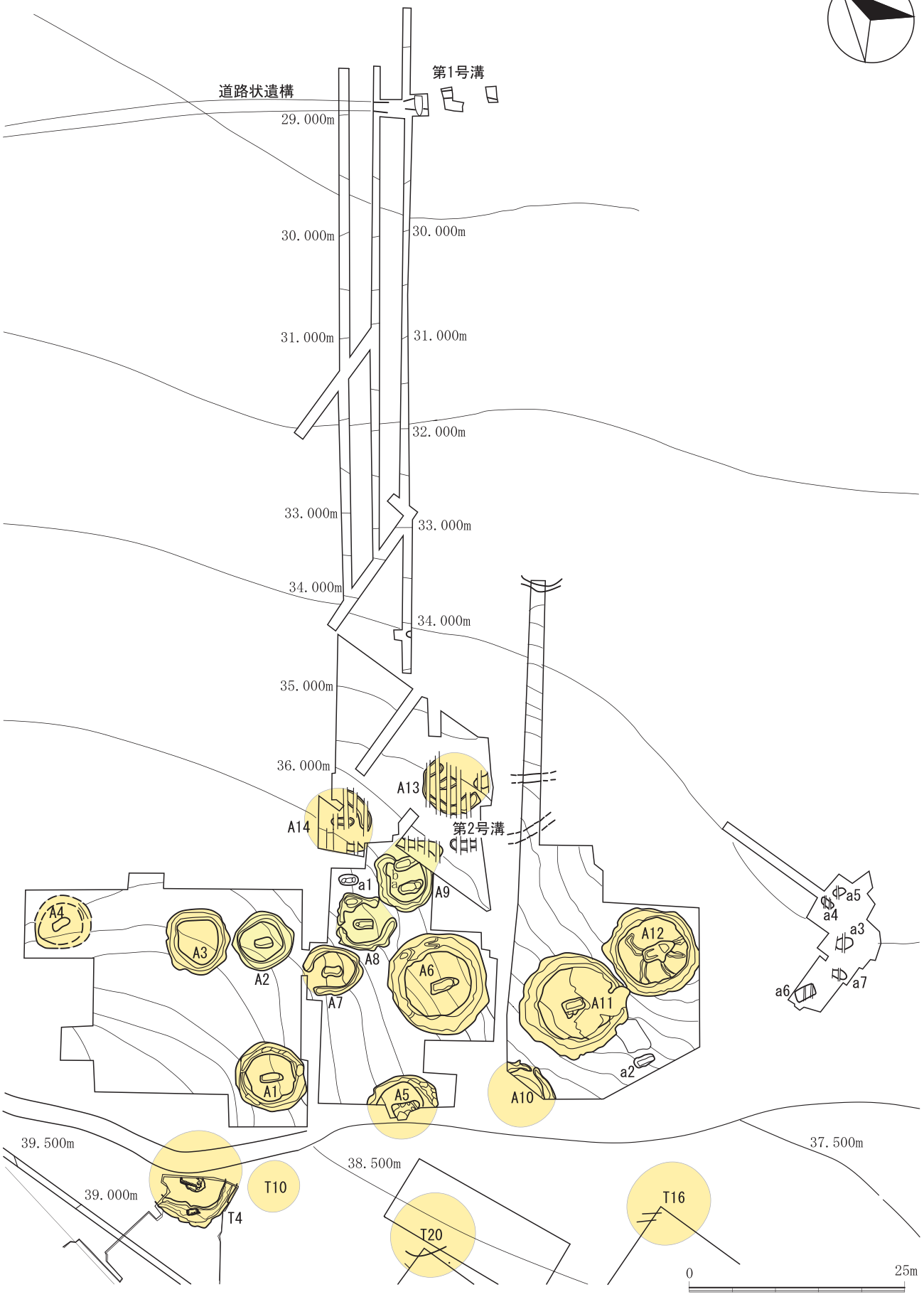
3 の土師器甕の底部破片は、周溝の覆土中から出土したものである。

4 ～ 16 の鉄鏃は、主体部の 2 層中から矢先を南東（溝状の掘り込みの逆方向）に向け、重なりあって出土した。4 ～ 13 は矢柄の一部が残存しており、矢柄に鏃をさし込み、糸状のものを巻きつけその上から漆を塗っていることが観察できる。18 は孔の有無が錆のため確認できないが、18 は孔のある 17 と形状がほとんど同じことから、18 にも孔があると推定できる。

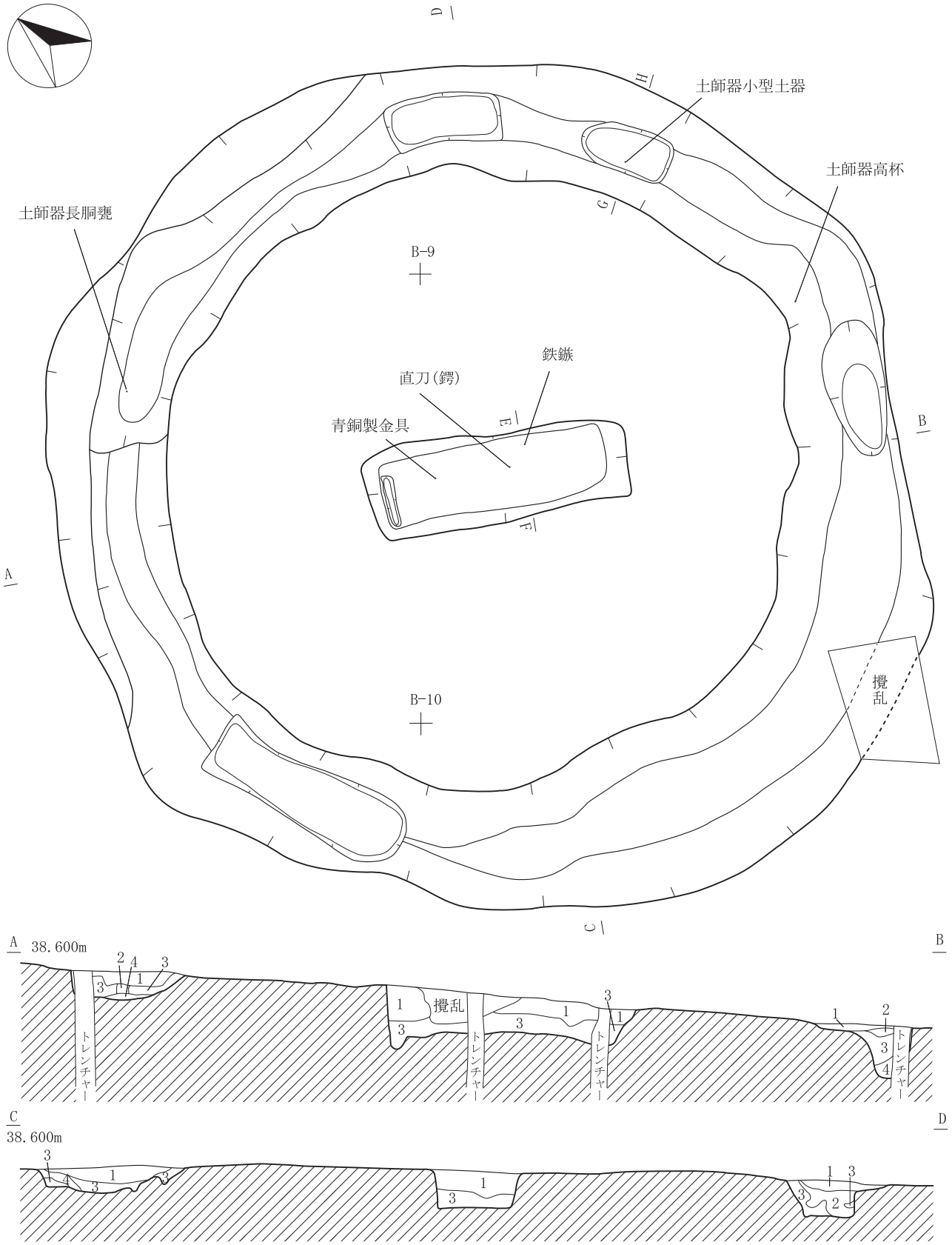
17 の直刀は、調査前に採集されていたもので、この古墳群の存在を示す端緒の一つになった遺物である。採集者の話によれば、昭和 50 年 5 月に農作業をしていたところ、この直刀を発見し、その周りを深さ 50cm 程掘り下げて直刀を採集したという、採集者の記憶ではその位置は A1 号墳の主体部分付近で、確かに A1 号墳の主体部には 2 層の途中にまで達する撹乱がみられ、又、この撹乱部分から、この直刀に伴う鍔が出土している。従ってこの直刀は A1 号墳の主体部に納められていたものと考えることができる。この直刀は刃が 4 つに折れ、刃毀れもかなりあり、遺存状態はかなりよくない。刃の造込は半造りで、棟は平棟であり、切先はカマスでふくらがない。茎はほとんどの部分を欠いているのでその形状は不明である。関は両関で、鎺元の金具と鍔とを装着する。この装着状態は本来の装着法から見れば逆の状態であるという。又、部分的に鞘の木質部が残っている。

18 は青銅製の締金具で、黒漆塗りの木質部とともに主体部から出土したものである。黒漆塗りの木質部は、刀又は刀子の鞘と思われるが、17 の直刀に伴うものであるかどうかは不明である。又、青銅金具自体も、刀装具のどの金具に相当するか不明である。

原典 A　羽柴直人　弘前大学学生



第７図　阿光坊遺跡遺構配置図

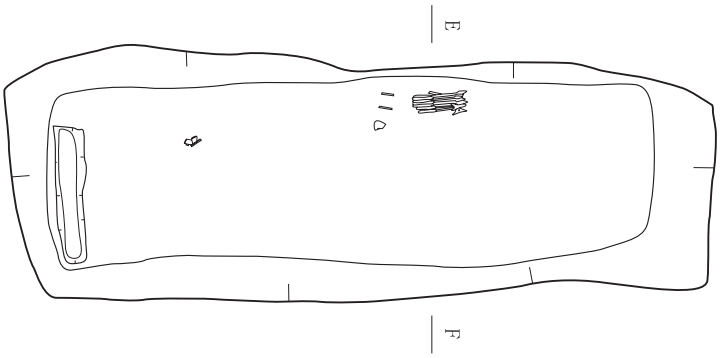


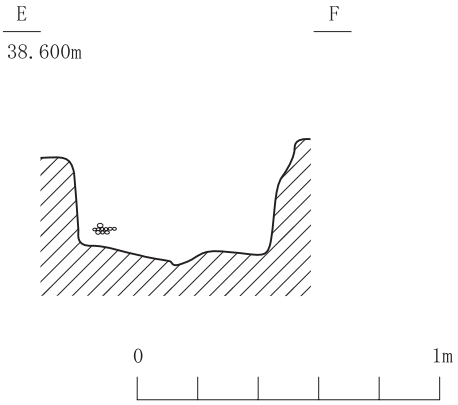
A1号墳

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	黄褐色浮石と黒褐色土(10YR3/2)を少量混入
第2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	黒褐色土(10YR3/2)シルト質の混土
第3層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	黄褐色浮石微量混入
第4層	黄褐色土	10YR5/6	ローム	黒褐色土(10YR3/2)を微量混入

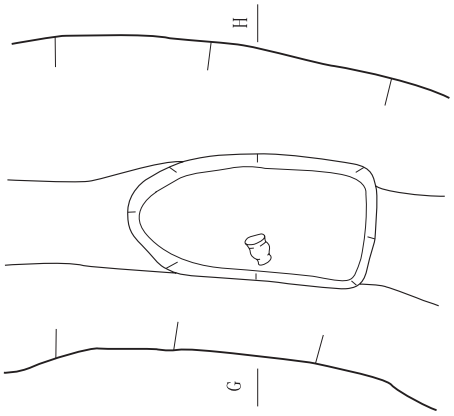
0　2m

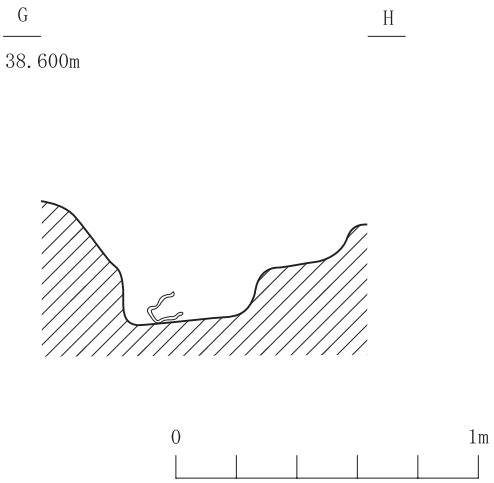
第8図　A1号墳(1)



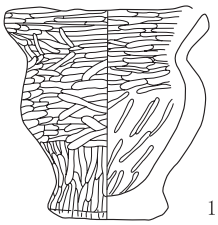


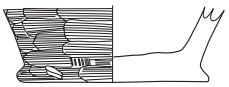
A1号墳主体部実測図

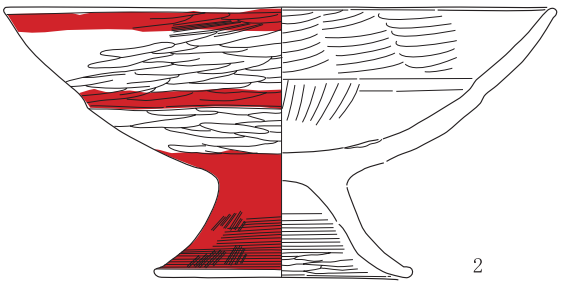




A1号墳小型土器出土状況



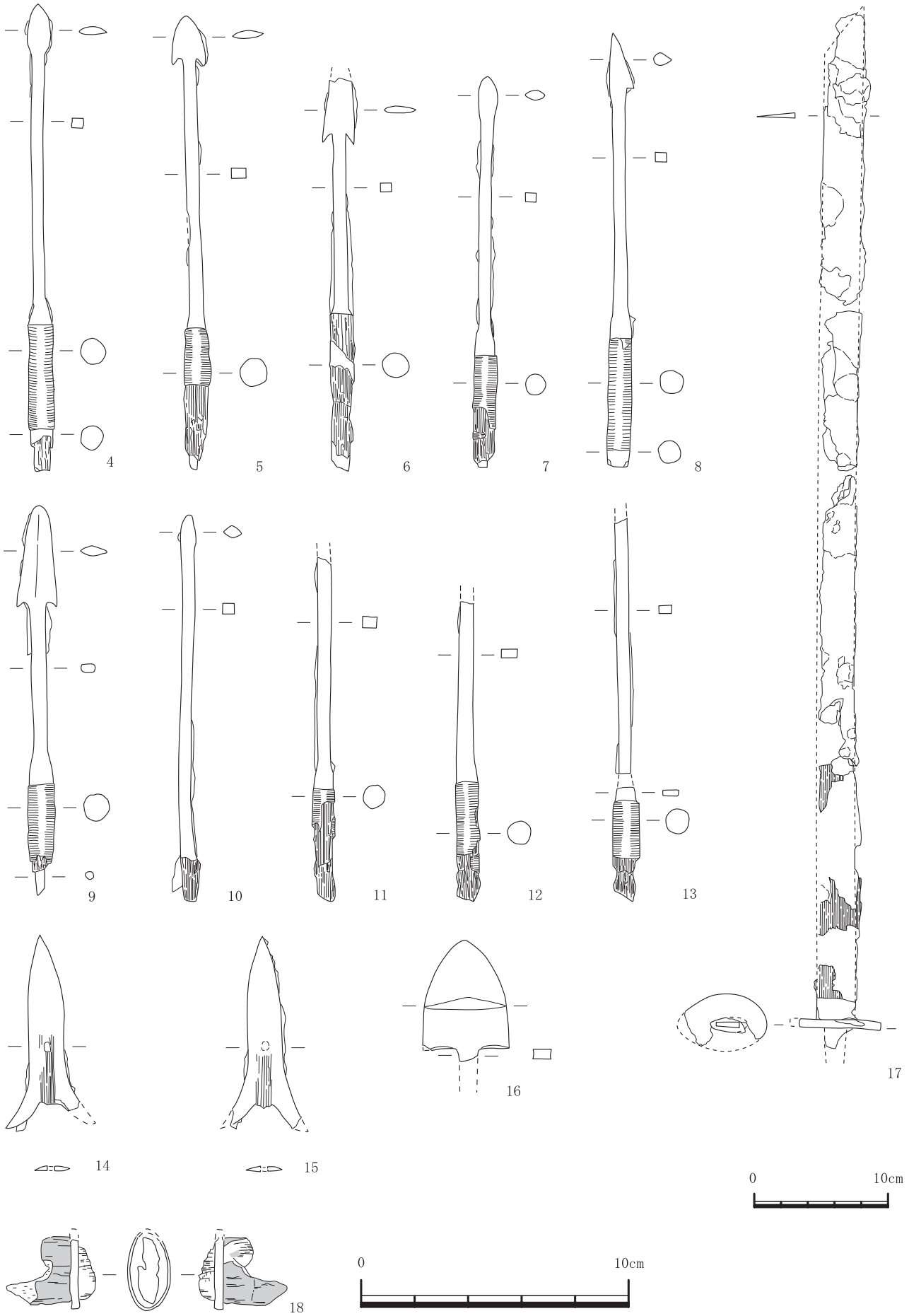




1号墳出土遺物

番号	出土位置	器　種	法　量（cm）			外面調整	内面調整	底面調整	備　考
			口　径	底　径	器　高				
1	周溝底面	小型土器	8.1	4.7	8.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
2	周溝底面	高　坏	21.8	10.1（脚部径）	10.6（推定）	坏部上半　ヘラミガキ 坏部下半 脚部　ハケメ―ヘラミガキ	ヘラミガキ 坏部内面　黒色処理		調査前に採集されたものと接合 外面に朱彩 八教委　’90丹後平古墳より
3	周溝覆土	甕	―	7.8	―	ハケメ―ヘラナデ		木葉痕	

第９図　A1 号墳 (2)



第 10 図　A1 号墳 (3)

第1号墳出土遺物

番号	出土地点	種　類	全　長	鏃　身　部(cm)			頸　部(cm)			備考
		(鏃身の形)	(cm)	長	最大幅	最大厚	全長	被部長	茎部長	
4	主体部	のみ頭式	17.4以上	1.9	0.9	0.5	15.5以上	10.1	5.4以上	
5	主体部	三角形式	17.0	1.7	1.2	0.3	15.3	9.9	5.4	
6	主体部	柳葉式	14.6以上	2.1以上	1.2	0.3	12.5	6.7	5.8	
7	主体部	のみ頭式	14.7	1.4	0.7	0.4	13.3	9.0	4.3	
8	主体部	片刃式	16.3	2.2	1.0	0.6	13.3	9.1	4.2	全長に柄の残部を含む
9	主体部	柳葉式	14.5	3.7	1.6	0.4	10.8	6.7	3.1	
10	主体部	のみ頭式	14.5以上	1.1	0.6	0.5	13.4以上	11.8	1.6以上	
11	主体部	―	12.7以上	―	―	―	12.7以上	8.5以上	4.2以上	
12	主体部	―	11.1以上	―	―	―	11.1以上	6.7以上	4.3以上	
13	主体部	―	13.4以上	―	―	―	13.4以上	9.8以上	3.6以上	
14	主体部	無茎式	7.4	7.4	3.4	0.2	―	―	―	有孔
15	主体部	無茎式	7.4	7.4	3.3	0.2	―	―	―	有孔？
16	主体部	三角形式	4.5以上	4.1	3.4	0.4	0.4以上	0.4以上	―	

第1号墳出土遺物

番号	全長(cm)	刃長(cm)	茎長(cm)	元幅(cm)	先幅(cm)	重ね(cm)	鋒長(cm)	鍔長(cm)	鍔幅(cm)	鍔重ね(cm)	全反り	反り
17	78.5以上	75.2以上	3.3以上	3.1	2.8	0.5	約3.8	6.1以上	4.0以上	0.7	-	-

A2 号墳　（第 11 図　図版 2）

位置　R28 ～ S28 に跨り、A1 号墳の北東に位置する。

確認面　Ⅲ層（黒褐色土層）の上面で周溝のプランが確認された。

周溝　平面形はほぼ円形のプランを呈し、規模は、内径 4.2 ～ 5.0m、外径 6.0 ～ 6.6m、上幅 0.5 ～ 1.2m、下幅 0.3 ～ 1.0m を測り、確認面からの深さは 20cm 前後である。また、掘り込みなどは特に見られないが、底面には凹凸がみられる。埋土は 2 層に分けられる。

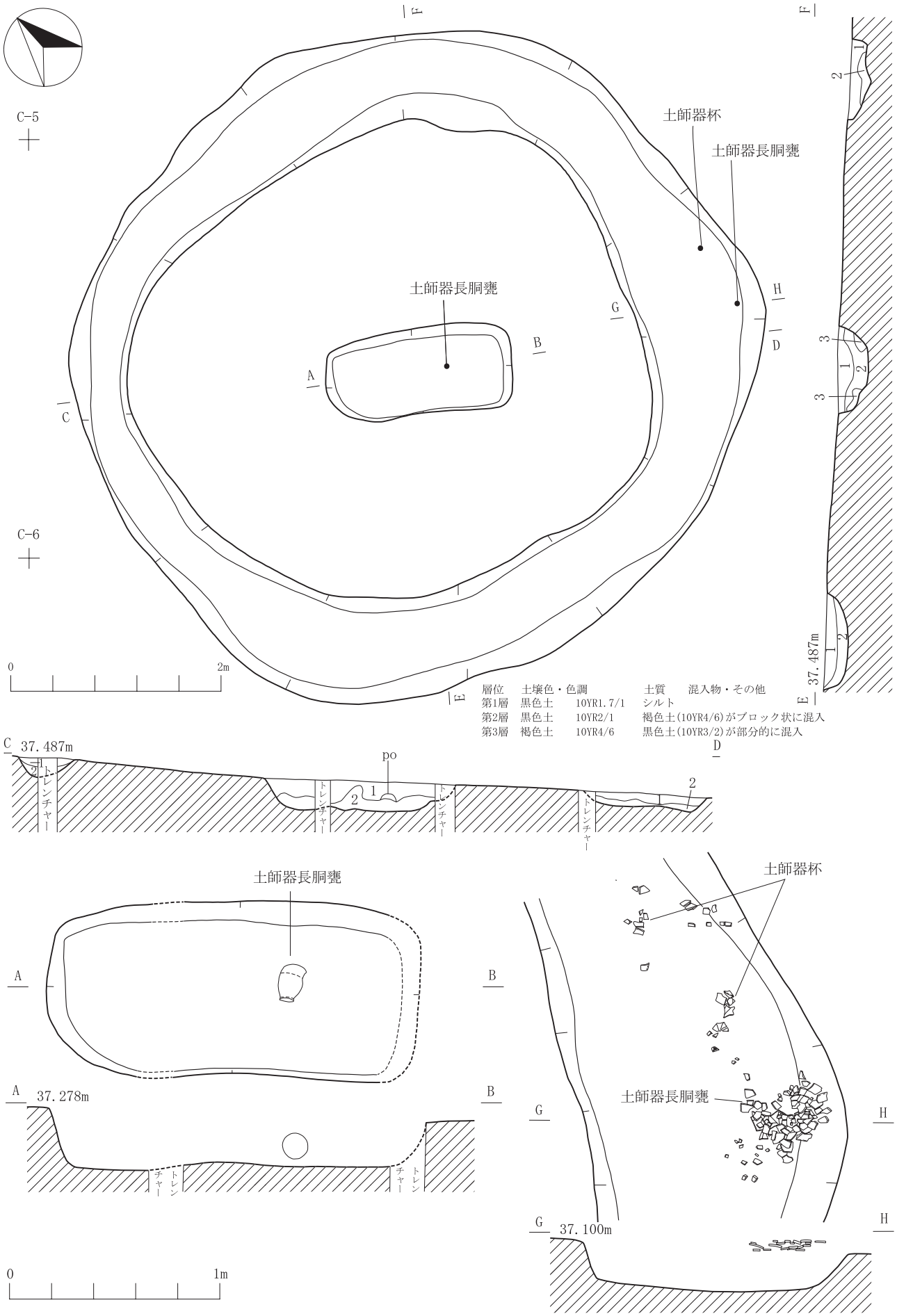
主体部　耕作機械による撹乱を受けており、正確な平面プランは不明であるが、ほぼ長方形を呈するものと思われる。推定規模は、長軸 1.78m、短軸 0.82m、確認面からの深さは、44 ～ 60cm である。西側のコーナーは若干丸みを帯びている。底面は、主体部と同様に凹凸が見られる。長軸方向は N-57°-W を示す。

出土遺物　（第 12 図　図版 14）

周溝からは土師器の甕・坏が 1 点ずつ、主体部からは甕が 1 点出土している。

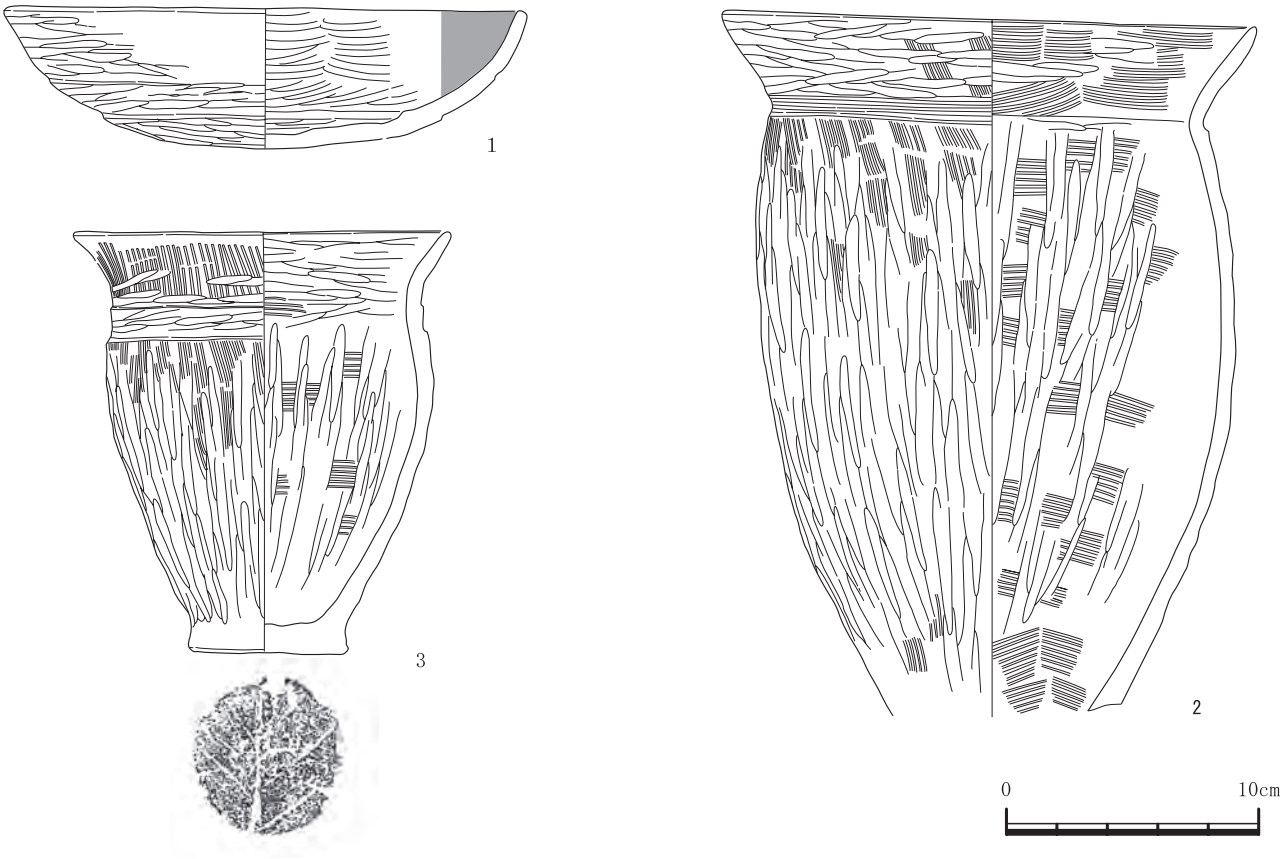
甕 (2) と坏 (1) は、周溝の東部（主軸方向の延長上）において、遺構確認面より検出された。この 2 点は出土地点が近接し、更にどちらも細片となって出土した（第 11 図参照）。それらは地圧によって押し潰された状態ではなく、ばらまかれたような感じで出土している。甕 (2) は、ほぼ全体が復元されたが、底部だけは検出されなかった。甕 (3) は、主体部底面より約 10cm ほど浮いた状態で検出された。また、主軸方向に対しては垂直な状態で出土している。口縁部の約 2 分の 1 が欠損しているが、意識的に打ち欠いたようにも思われる。

原典 A　木村　高　弘前大学学生



層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	
第2層	黒色土	10YR2/1	褐色土(10YR4/6)がブロック状に混入	
第3層	褐色土	10YR4/6	黒色土(10YR3/2)が部分的に混入	

第11図　A2号墳(1)



A2号墳出土遺物　土器

番号	出土位置	器　種	法　量(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	備考
			口径	底径	器高				
1	周溝覆土	坏	20.8	―	5.7	体部　ヘラミガキ 底部付近　ヘラケズリ―ヘラミガキ	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラケズリ→ヘラミガキ	八教委　'90丹後平古墳より
2	周溝覆土	長胴甕	21.7	―	27.0(残部)	口縁部　ハケメ→横ナデ→ヘラミガキ 体部　ハケメ―ヘラミガキ	ハケメ→ヘラミガキ	―	八教委　'90丹後平古墳より
3	主体部	甕	14.2	6.3	16.6	ハケメ→ヘラミガキ	ハケメ→ヘラミガキ	木葉痕	内面に炭化物が付着 八教委　'90丹後平古墳より

第 12 図　A2 号墳 (2)

A3 号墳　(第 13・14 図　図版 2)

位置　R27 ～ 28 に跨っている。

確認面　Ⅲ層 (黒褐色土層) の上面で周溝のプランが確認された。

周溝　内径 5.0 ～ 5.9m、外径 7.0 ～ 7.7m、上幅 0.8 ～ 1.7m、下幅 0.25 ～ 0.9m、確認面から深さ 15 ～ 25cm を測り、ほぼ円形のプランを呈する。断面の形状は緩い「U」字形であり、埋土は 2 層に分かれる。

主体部　古墳の中心部は、周溝確認面のⅢ層 (黒褐色土層) とは異なり、僅かに黒色土の割合が多かったものの、その範囲は極めて曖昧であった。よって、主体部のプランは確認できなかった。

出土遺物　(第 14 図　図版 14)

周溝中心部の周溝確認面上のⅡ層 (黒色土層) の中から、勾玉、切子玉、管玉、丸玉、小玉と琥珀製の玉が出土した。玉類の出土範囲が東西に大きく分かれているのは、その間をトレンチャーが走り撹乱されたためであろう。

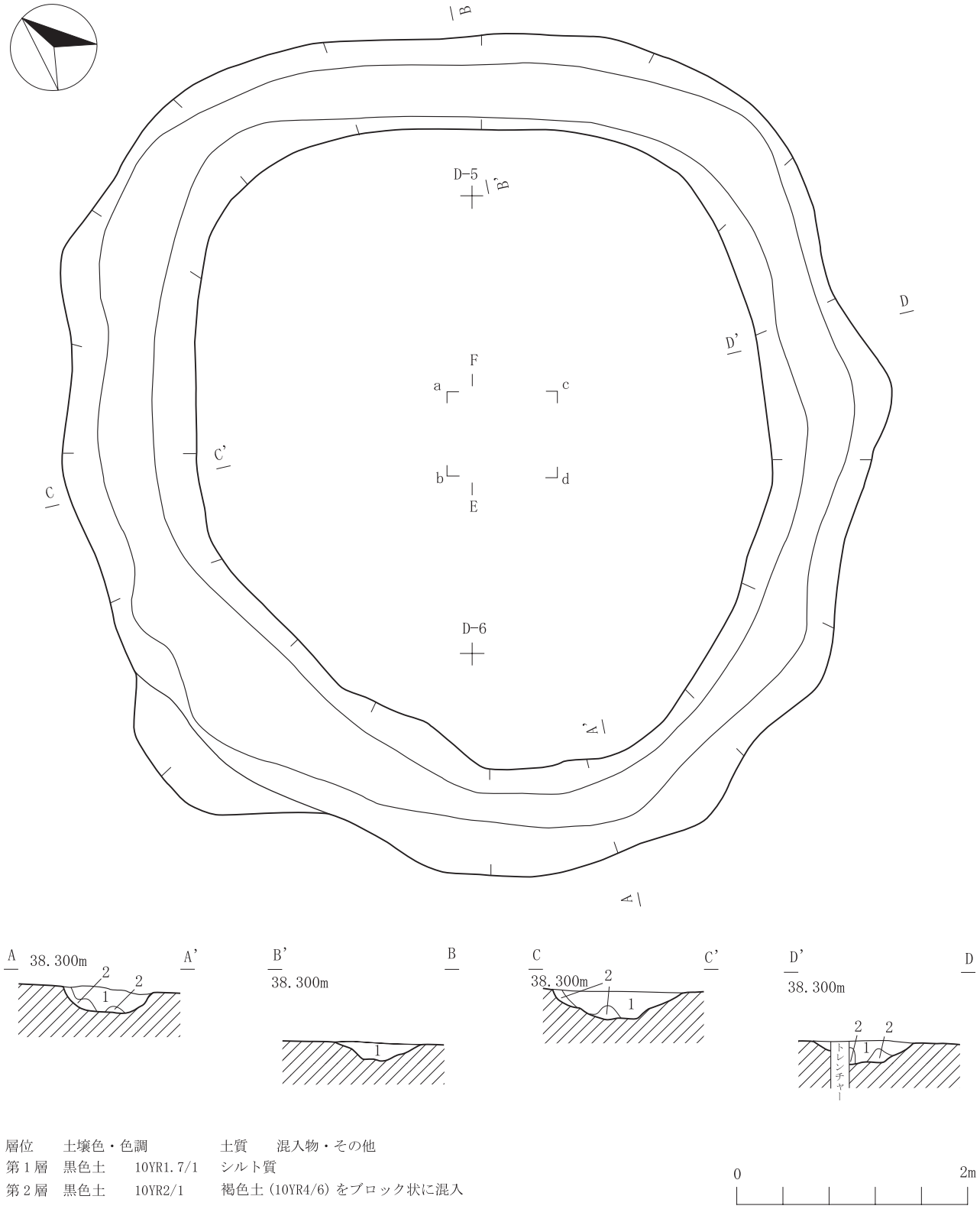
勾玉 (1 ～ 7)7 個出土し、内 1 個は翡翠で他は瑪瑙製である。2 個は C 字形勾玉で、他の 5 個はコ字形勾玉である。

切小玉 (8) 水晶製で、1/3 程破損している。

管玉 (10) 碧玉製で、穿孔を始めた面を上面とすれば、下面が僅かに欠損している。

丸玉 (11) ガラス製で、濃紺色である。孔を縦に据えた場合、天面と地面を若干研磨している。

小玉 (12 ～ 32)21 個出土し、すべてガラス製で、ほとんどが濃紺色を呈す。直径が 4mm、高さ 2mm 程のものが多い。また、ほとんどのものが、天面と地面を研磨している。

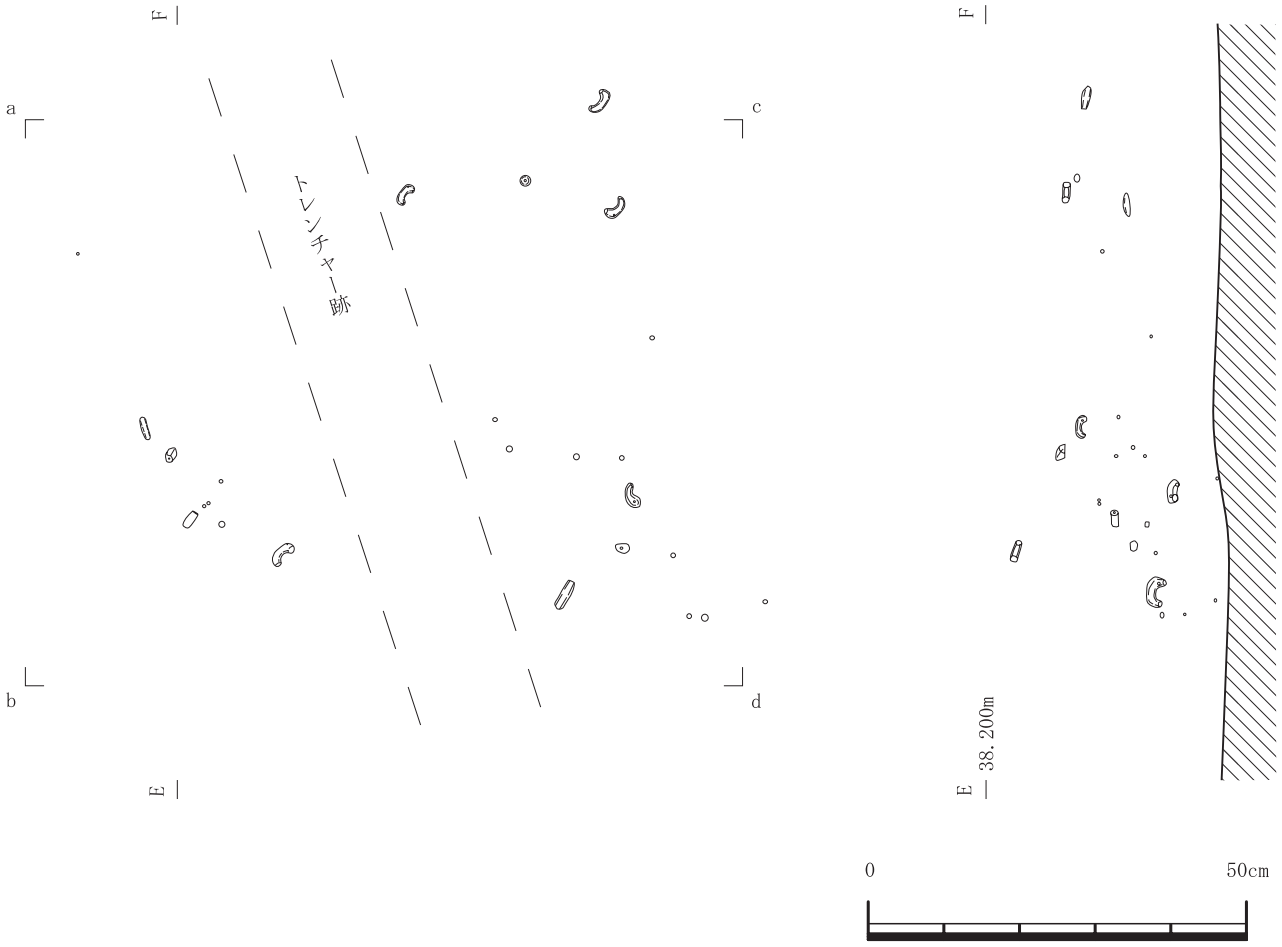


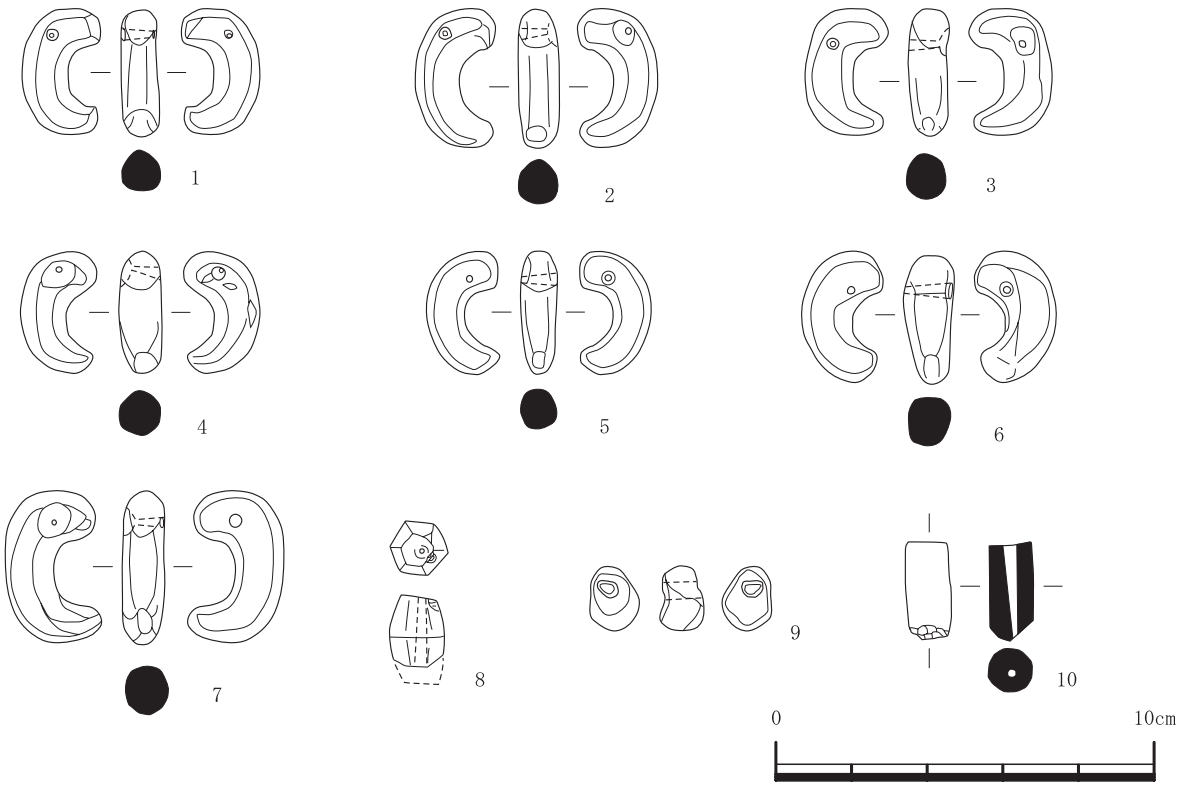
層位	土壌色・色調		土質　混入物・その他
第１層	黒色土	10YR1.7/1	シルト質
第２層	黒色土	10YR2/1	褐色土（10YR4/6）をブロック状に混入

第 13 図　A3 号墳（1）

琥珀製の玉（9）ゆがんだ形をしているが、全面が磨かれており、完成品として使用されたものと思われる。

原典Ａ　高木　太　弘前大学学生





第 14 図　A3 号墳 (2)

番号	種別	材質	全長(mm)	幅(mm)	厚さA (mm)	厚さB (mm)	重量(g)	穿孔方向	備考
1	勾玉	瑪瑙	33.3	20.5	12.0	10.0	8.5	C→ A	コ字
2	勾玉	瑪瑙	36.0	20.0	12.0	10.5	10.5	C→Ⓐ	コ字
3	勾玉	瑪瑙	33.7	21.0	12.0	10.5	9.5	C→Ⓐ	コ字
4	勾玉	瑪瑙	33.0	19.5	11.5	10.5	8.1	A→Ⓒ	コ字
5	勾玉	瑪瑙	32.0	18.5	10.0	9.2	6.8	A→ C	C字
6	勾玉	翡翠	34.0	20.0	13.0	11.0	13.2	A→ C	C字
7	勾玉	瑪瑙	40.5	25.0	13.0	10.5	14.3	A→Ⓒ	コ字
8	切子玉	水晶	18.5以上	14.5	―	―	5.5		
9	?	琥珀	17.0	11～13	―	―	1.3		
10	管玉	碧玉	25.3以上	11.0	―	―	5.5		

番号	種別	材質	高さH(mm)	直径R(mm)	比率H÷R	重量(g)	色調	備考
11	丸玉	ガラス	8.0	12.0	0.67	1.6	濃紺	
12	小玉	ガラス	4.0	8.0	0.50	0.4	淡青緑	
13	小玉	ガラス	4.8	7.5	0.53	0.3	濃紺	
14	小玉	ガラス	3.0	7.0	0.43	0.2	透明淡青	臼玉？
15	小玉	ガラス	4.0	6.5	0.62	0.3	濃紺	
16	小玉	ガラス	4.2	6.0	0.70	0.2	濃紺	
17	小玉	ガラス	3.5	5.5	0.64	0.1	濃紺	
18	小玉	ガラス	3.0	5.0	0.60	0.1	濃紺	
19	小玉	ガラス	3.0	4.2	0.71	0.1	濃紺	
20	小玉	ガラス	2.0	4.0	0.50	0.1未満	淡紺	
21	小玉	ガラス	2.0	3.8	0.53	0.1未満	淡紺	
22	小玉	ガラス	2.0	3.8	0.53	0.1未満	淡紺	
23	小玉	ガラス	2.3	4.0	0.58	0.1未満	淡紺	
24	小玉	ガラス	2.3	4.0	0.58	0.1未満	淡青	
25	小玉	ガラス	2.2	4.0	0.55	0.1未満	濃紺	
26	小玉	ガラス	1.9	3.6	0.53	0.1未満	淡青	
27	小玉	ガラス	1.8	3.6	0.50	0.1未満	淡紺	
28	小玉	ガラス	2.1	4.0	0.53	0.1未満	淡紺	
29	小玉	ガラス	2.0	3.8	0.52	0.1未満	濃紺	
30	小玉	ガラス	2.0	4.0	0.50	0.1未満	濃紺	
31	小玉	ガラス	2.0	4.0	0.50	0.1未満	濃紺	
32	小玉	ガラス	2.4	4.0	0.60	0.1未満	淡紺	

A4 号墳　（第 15 図　図版 2）

位置　A3 号墳の北東に位置する。

確認面　Ⅲ層（黒褐色土層）の上面で周溝が確認された。

周溝　確認が極めて困難だったため、約半分は検出されなかったが、平面プランはほぼ円形を呈するものと思われる。推定規模は、外径 6.3 ～ 6.6m、内径 4.9 ～ 5.4m、上幅 46 ～ 90cm、下幅 26 ～ 60cm、確認面からの深さは 20cm 前後である。埋土は一層のみである。

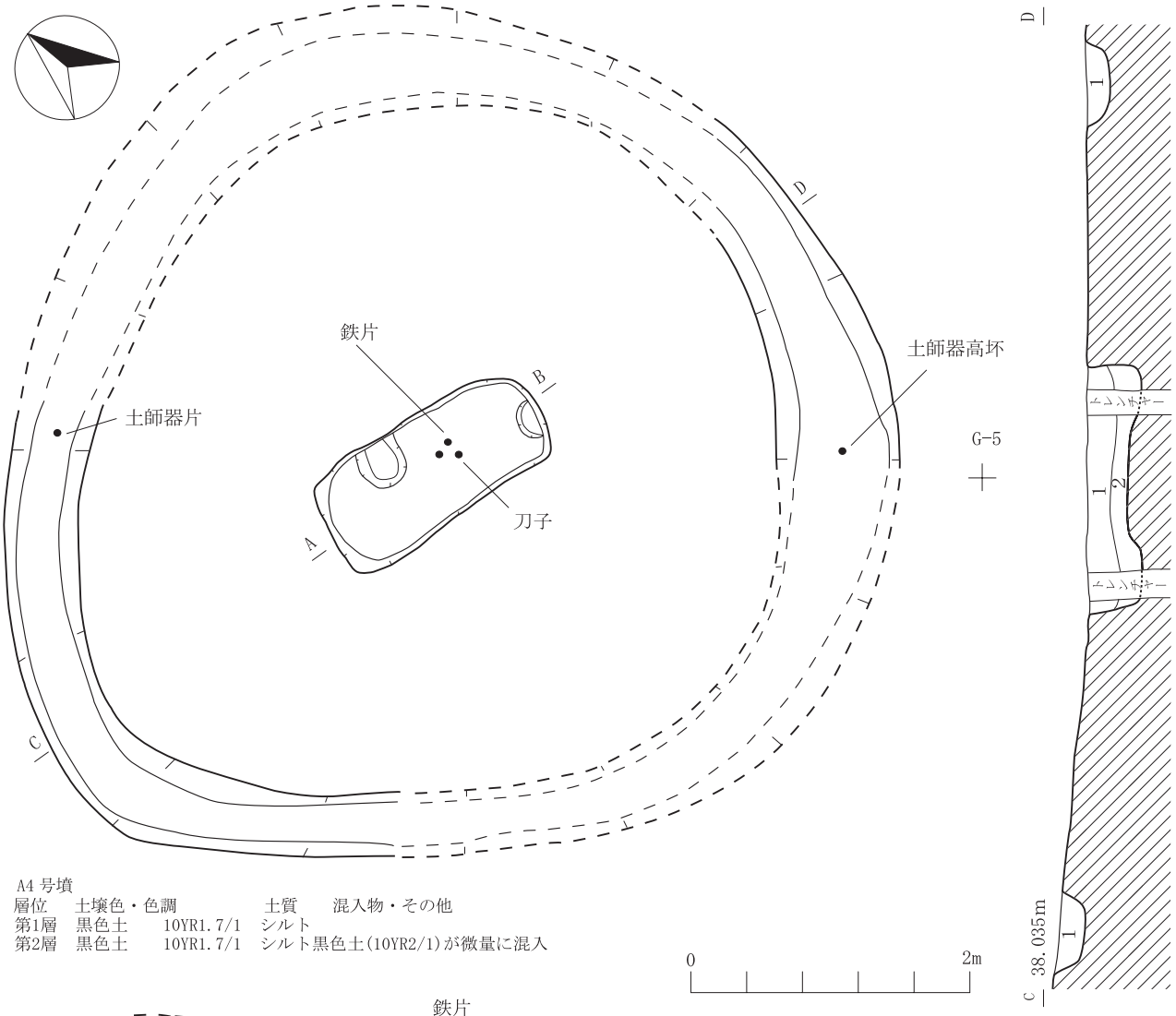
主体部　平面プランはほぼ長方形を呈しているが、多少歪んでいる。また、東側のコーナーは丸みを帯びている。規模は、長軸 1.76m、短軸 0.76m、確認面からの深さは 30 ～ 40cm である。底面には 2 箇所落ち込む部分が認められた。長軸方向は N-73°　-W を示す。

出土遺物（第 15 図　図版 14）

周溝からは土師器の高坏と甕、主体部からは刀子が出土している。

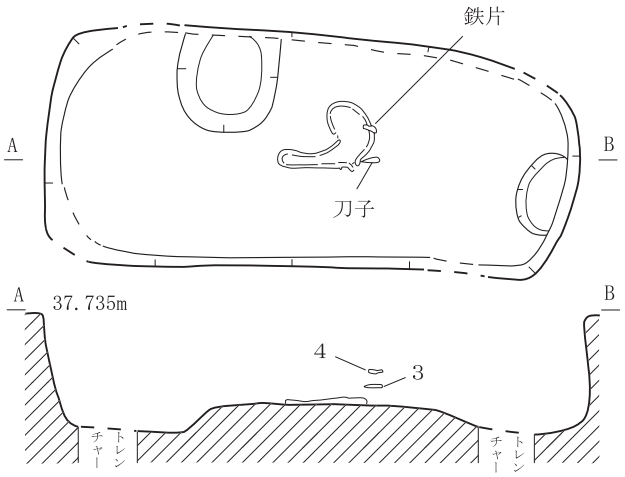
高坏 (1) は、周溝南東部で浮いた状態で出土した。また、体部破片が、倒立した体部下半～台部に覆い隠されるようなかたちで検出された。その付近には甕の部分的な破片もわずかに出土している。土師器底部 (2) は、器形の不明なものであり、周溝北東部分で浮いた状態で出土した。3・4 は、刀子の破片であると思われるが、これらは主体部中央より浮いた状態で出土した。また、木質部の残存するものである。4 は、2 枚の鉄が癒着しているものである。また、これら刀子の下からは第 15 図の主体部平面図に見える轡の一部（鏡板？）と思われるものが確認できた。長さ 33cm、幅 23cm を数え、色調は橙色を呈するものであるが、腐食が激しくほとんど粘土状に変質しており、取り上げは不可能であった。

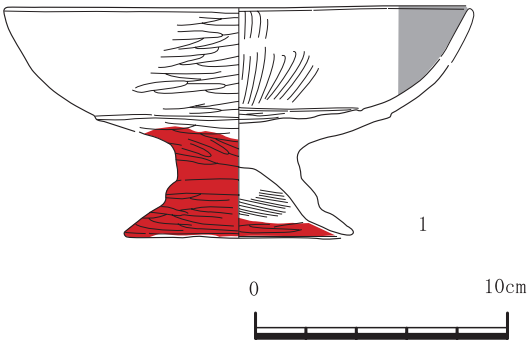
原典 A　木村　高　弘前大学学生

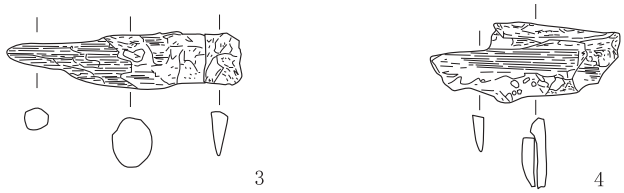


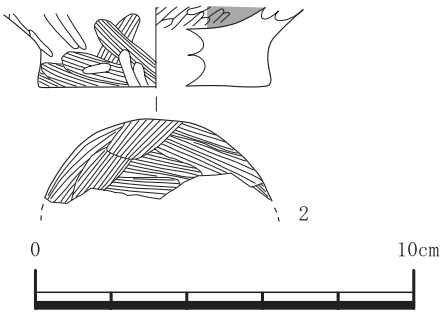
A4 号墳

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	
第2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト黒色土(10YR2/1)が微量に混入	









第 15 図　A4 号墳

番号	出土位置	器　種	法　量(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	備考
			口径	底径	器高				
1	周溝覆土	高坏	19.2	9.0 (脚部径)	9.1	坏部:ヘラミガキ　脚部:横ナデ、ヘラミガキ 坏部と脚部の境界部:ヘラケズリ　ヘラミガキ	坏部:ヘラミガキ、黒色処理 脚部:横ナデ	―	坏部下半、脚部、外面脚部内面に朱彩 八教委　'90丹後平古墳より
2	周溝覆土	不明	―	―	―	ヘラナデ　ヘラミガキ	ヘラミガキ　黒色処理	ヘラナデ	

A5 号墳　（第 16・17 図　図版 2・3）

位置　R30 ～ 31、S31 にかけて位置し、調査区外に跨っている。

確認面　基本層序Ⅲ層上面で確認された。

周溝　遺構の約半分が町道にまたがっており、実際に周溝全体を検出することは出来なかったが、ほぼ円形のプランであると推測される。推定内径 6.2m、推定外径 7.8m、上幅 0.64 ～ 1.3m、下幅 0.3 ～ 1.0m、確認面からの深さは 12 ～ 21cm である。周溝南東部が若干細くなっている。また、掘り込みなどは特に見られないが、底面には凸凹が見られる。埋土は 3 層に分けられる。

主体部　主体部は、埋葬部の西側と南東側の各々張り出し部を有する。長軸は埋葬部 2.7m、張り出し部 0.65m、短軸は埋葬部 1.0 ～ 1.1m、張り出し部 0.55 ～ 0.75m、確認面からの深さ 30 ～ 37cm である。また、主軸方向は N-64°　-W を指す。埋葬部には、とぎれている部分があるものの底面からの深さ 8 ～ 13cm の周溝が巡っている。埋葬部と南東側張り出し部の間の周溝は、中央が開口している。また、埋土は 8 層に分けることが出来る。壁際には垂直な土層の立ち上がりが見られるが、日程の都合上、土層注記を行うことが出来ず確認するにとどまった。床面には掘り方を有する。

出土遺物　（第 17 ～ 19 図　図版 14）

周溝からは土師器の長胴甕 1 個、主体部からは鉄鏃 18 点、その他刀子及び木片等が出土している。

1 の甕は、周溝東部より周溝上に浮かぶように、また口を周溝の外側に向け横転した状態で出土した。器形は中型（18.7cm）で肩部に段をもつ。外面底部の突き出しは見られない。外面は、口縁部全面にヨコナデ後に一部ヘラミガキ、体部にハケメ後にヘラミガキが各々施されている。内面は、口縁部にヨコナデ、体部上半にヘラナデ、そして下半には縦方向のケズリが見られ、底面は平坦な形を呈している。また、外面底部には木葉痕がみられる。

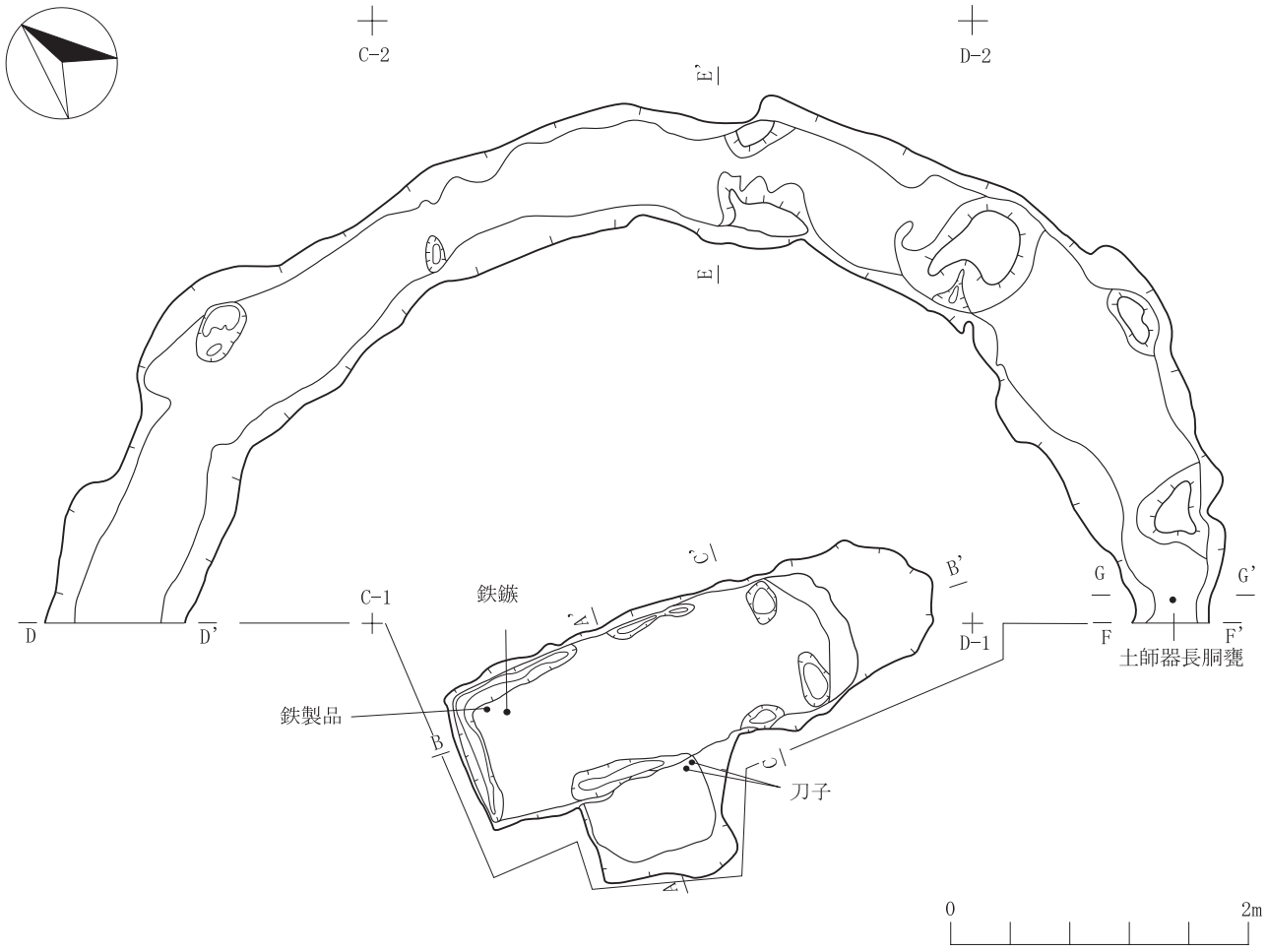
2 ～ 19 までの鉄鏃は、主体部北側の第 6 層より出土した。これらは、矢先を北西に向け重なり合って出土したが、なかには矢先が逆を向いているものもある。（第 18 図中 2 ～ 11 の出土状態参照）2 ～ 7、12 ～ 14 は有茎で片刃式のものである。鏃身部と箆被部とに関を持たない。2 ～ 4、12 ～ 17 は矢柄の一部が残存しており、矢柄に鏃を差し込み糸状のもの（樹皮？）を巻きつけ、その上から漆を塗っていることが観察できる。8 ～ 11、18・19 は無茎で腸抉柳葉式のものである。

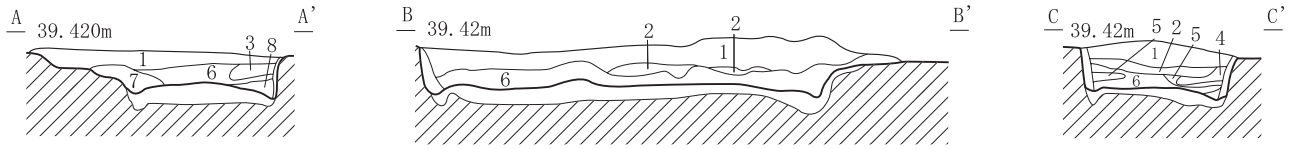
20 の刀子は、主体部西側の張り出し部より柄に装着した状態で出土した。刀身、柄ともに途中で破損している。刃は平造り平棟である。

21 は直刀の破片であると思われる。刀は平造り平棟になっている。後端が若干折れ曲がっているため、直刀鎌の可能性もある。

22 の木片は、主体部西側の張り出し部で出土した。中央に深さ 1.7mm の孔が穿たれており、木製品の一部かと思われる。

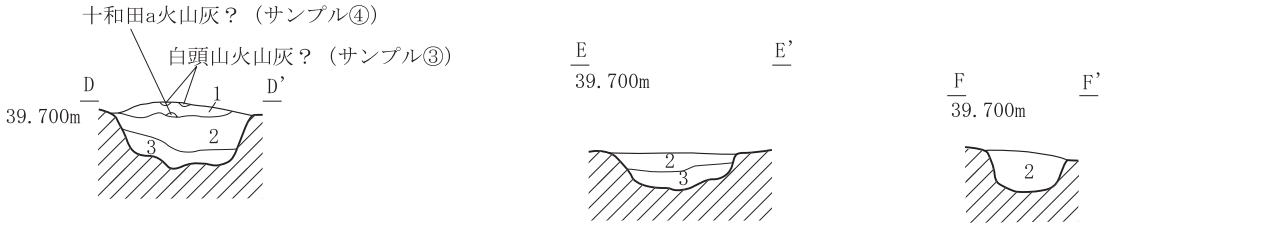
原典 B　冨田雅樹・吉田信子　弘前大学学生





5号墳

層位	土壌色・色調		混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	アワズナを混入
第2層	黒褐色土	10YR2/2	10YR5/8　黄褐色ローム質土をブロック状に多量混入
第3層	黒褐色土	10YR2/3	アワズナを混入
第4層	黒色土	10YR2/1	砂が微量に混入
第5層	黒褐色土	10YR2/3	軽石を混入
第6層	黒色土	10YR2/2	10YR5/8　黄褐色土をブロック状に混入
第7層	黒褐色土	10YR2/2	アワズナを混入
第8層	黒色土	10YR2/1	浮石で少量混入

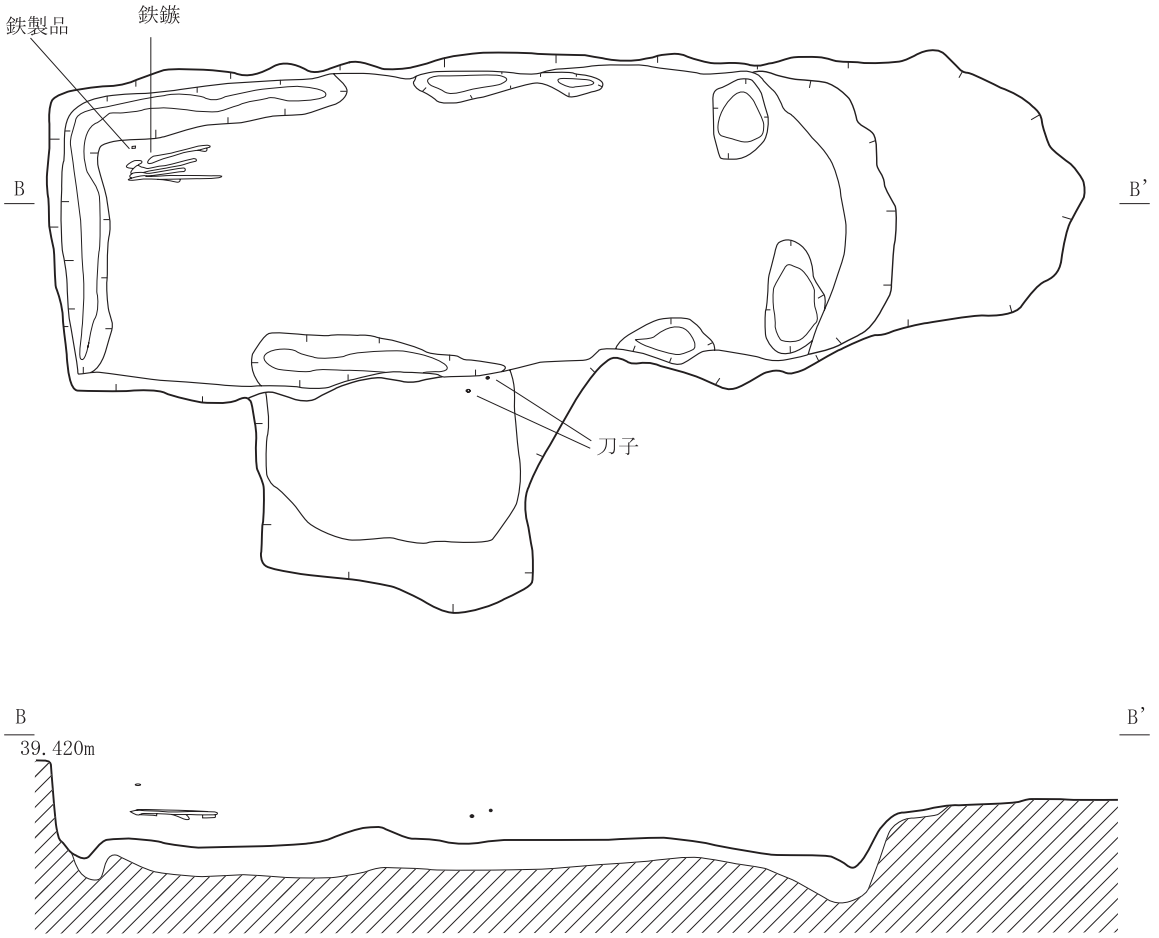


5号墳周溝

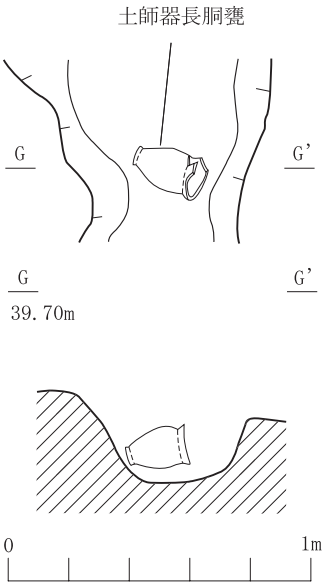
層位	土壌色・色調		混入物・その他
第1層	黒土	10YR3/1	全体に灰色の火山灰が少量混入
第2層	黒色土	10YR1.7/1	10YR3/3 暗褐色土微量混入
第3層	黒褐色土	10YR2/2	10YR2/2 暗褐色土をブロック状に多量混入

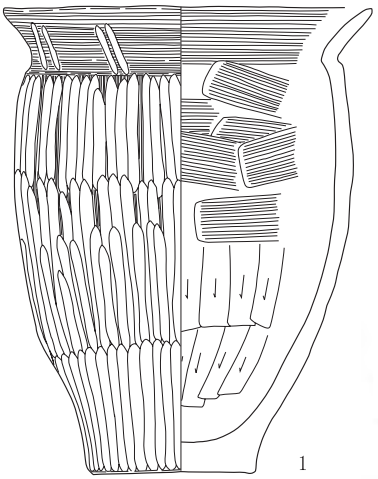
0　2m

第16図　A5号墳(1)



A5 号墳主体部実測図

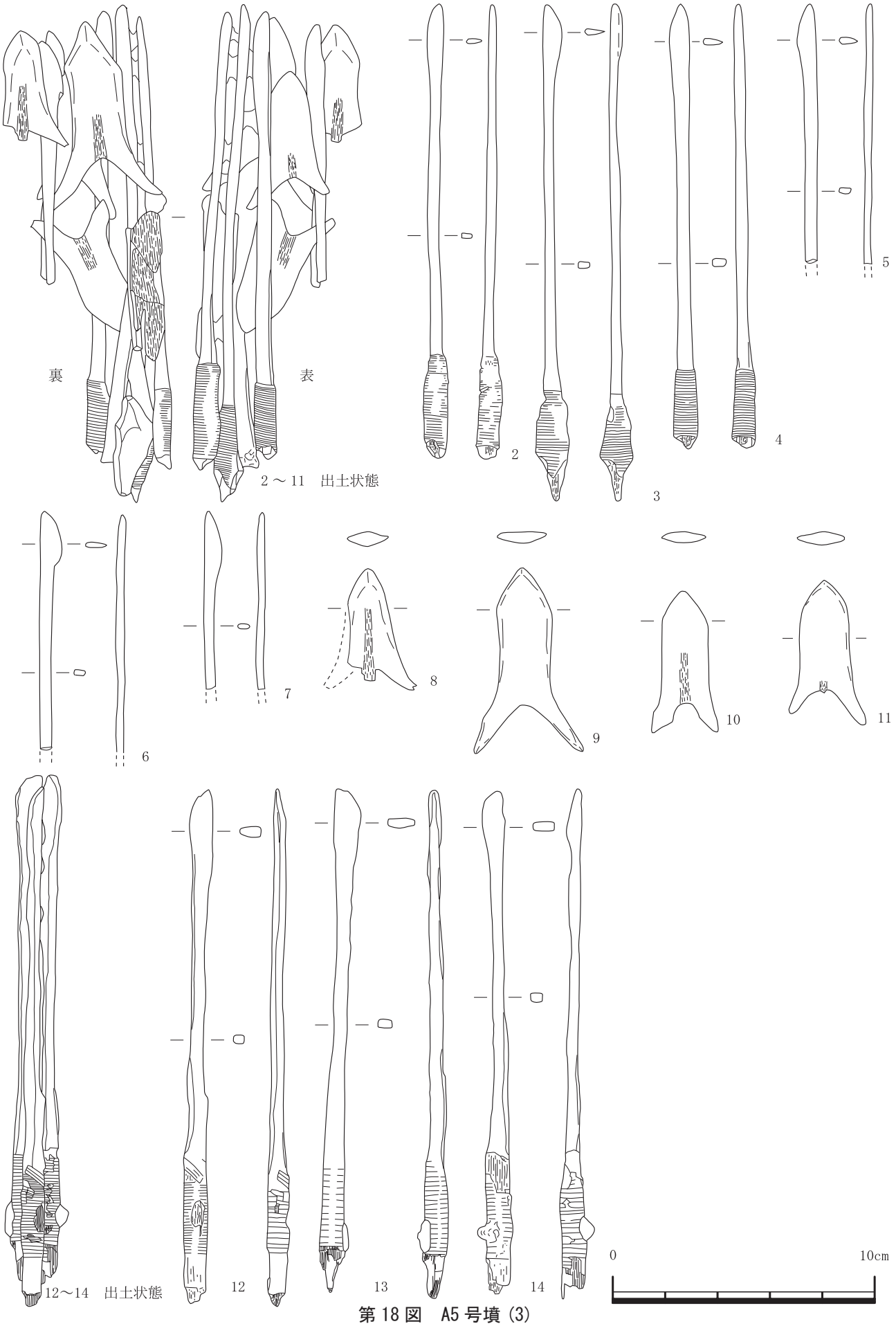




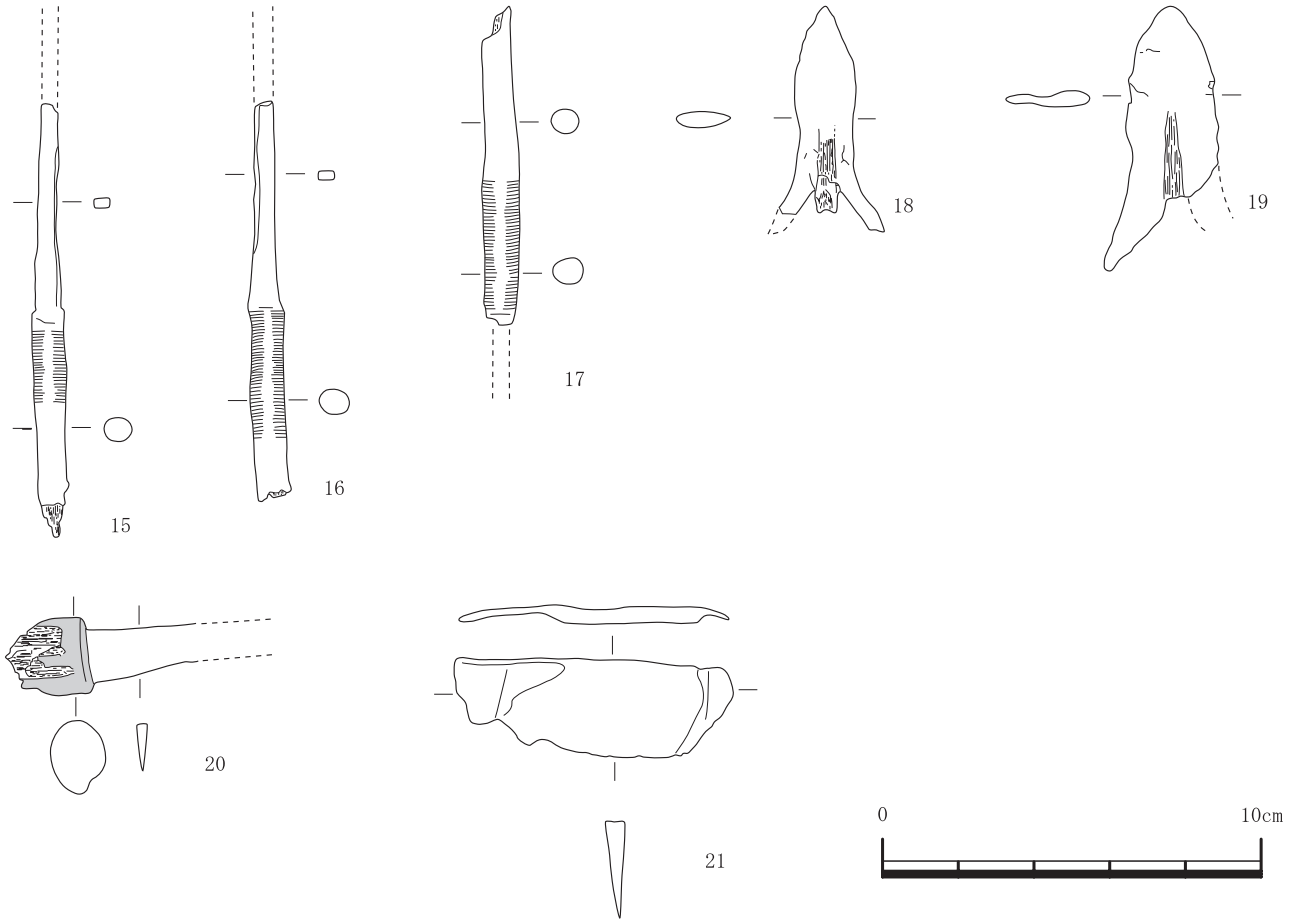
A5 号墳遺物出土状況

番号	出土位置	器　種	法　量（cm）			外面調整	内面調整	底面調整
			口　径	底　径	器　高			
1	周溝覆土	長胴甕	14.7	6.6	18.7	口縁:ヨコナデ　一部ミガキ 体部:ハケメ→ミガキ	口～体部上半　ヨコナデ 下半　ケズリ	木葉痕

第 17 図　A5 号墳 (2)



第18図　A5号墳(3)



番号	出土地点	種　類	全　長	鏃　身　部(cm)			頸　部(cm)			備考
		(鏃身の形)	(cm)	長	最大幅	最大厚	全長	被部長	茎部長	
2	主体部	片刀式	17.2	2.1	0.6	0.4	15.1	11.2	3.9	
3	主体部	片刀式	18.9	2.2	0.7	0.5	16.7	12.5	4.2	
4	主体部	片刀式	16.9	2.1	0.7	0.4	14.8	11.7	3.1	
5	主体部	片刀式	9.9	2.2	0.7	0.3	7.7	7.7	—	
6	主体部	片刀式	9.1	2.1	0.8	0.3	7.0	7.0	—	
7	主体部	片刀式	6.8	2.4	0.6	0.3	4.4	4.4	—	
8	主体部	無茎式	4.7	4.7	3.5	0.6	—	—	—	
9	主体部	無茎式	7.1	7.1	4.4	0.4	—	—	—	
10	主体部	無茎式	5.4	5.4	2.6	0.4	—	—	—	
11	主体部	無茎式	5.7	5.7	2.9	0.4	—	—	—	
12	主体部	片刀式	19.6	2.1	0.9	0.4	17.5	12.8	4.7	
13	主体部	片刀式	19.2	2.4	1.1	0.4	16.8	12.2	4.6	
14	主体部	片刀式	19.2	1.9	0.9	0.4	17.3	12.1	5.2	
15	主体部	片刀式	11.4	—	—	—	11.4	5.6	5.8	
16	主体部	片刀式	10.5	—	—	—	10.5	5.4	5.1	
17	主体部	片刀式	8.2	—	—	—	8.2	4.4	3.8	全長に柄の残部を含む
18	主体部	無茎式	6.0	6.0	3.1	0.4	—	—	—	
19	主体部	無茎式	7.1	7.1	3.8	0.4	—	—	—	

番号	名称	出土位置	計測値(cm)			備　考
			長　さ	最　幅	厚　さ	
20	刀子	主体部	5.3	刀部1.5　柄部0.3	刀部1.9　柄部1.3	刀部長さ3.2　柄部長さ2.1
21	不明		7.4	0.5	2.5	

第19図　A5号墳(4)

A6 号墳　（第 20・21 図　図版 3）

位置　S29 ～ 30、T29 ～ 30 に跨る。

確認面　表土を 30cm 程掘り下げたⅢ層上面で確認した。B-Tm、To-a 火山灰の堆積により周溝を確認し、プランを検出したものである。

周溝　プランはほぼ円形である。内径 7.2 ～ 8.0m、外径 11.2 ～ 12.1m、上幅 1.6 ～ 2.6m、下幅 0.5 ～ 1.8m、確認面から（残存部）深さは 40 ～ 60cm 程（Ⅵ層まで達する）であり、当遺跡の最大規模のものである。底面は凹凸がある。埋土を 3 層に分け、最下層は硬くしまっていた。

主体部　埋葬部の他に東側に張り出し部を有し、埋葬部底面に周溝を有する。主軸方向は埋葬部が N-62°-W、張り出し部が N-49°-W である。

埋葬部は長軸 2.3m、短軸 1.3m、確認面からの深さ 45 ～ 60cm の長方形を呈する。壁・床面ともに平坦である。床面はⅦ層上面であり、張り出し口底面はⅥ層である。床面の南北・西壁ぎわの溝は、幅 10 ～ 20cm、深さ 10 ～ 20cm で断面が「凵」型を呈している。接続している東側の溝は、幅 3 ～ 10cm、深さ 0 ～ 15cm で断面が「U」型を呈している。その溝の底面に直行するように確認面の角から壁面を掘り込んでいる。

張り出し部は、長さ 115cm の張り出しである。張り出し口幅が埋葬部の内幅とほぼ同幅の 90cm 程であり、先端の幅が 55cm でありすぼまっている。また、張り出し部は埋葬部より昇る階段状を呈している。「U」型の工具による大雑把な面取りの跡がある。

主体部全体は 3 本（うち埋葬部に 2 本）トレンチャーの走行による撹乱を受けている。

出土遺物（第 21 図　図版 14）

周溝より土師器球胴甕破片、琥珀製の玉 1 点、主体部よりガラス小玉 12 点出土した。球胴甕破片は、東側周溝の覆土の他に表土途中にも散在して出土し、トレンチャーによる破壊を受けている。図化できたのは、底部のみであるが、同一個体と思われる体部片があることから球胴甕として扱った。底部外面は外への突き出しがみられず、底部内面は平坦な形態である。調整は外面体部下半にヘラミガキ、内面にヘラナデが施されている。琥珀製玉 (14) は北側周溝のトレンチャー走行跡わきで出土した。粉砕された状態であり、原形は不明であった。ガラス小玉 (2 ～ 13) は散在して出土した。天面と地面を研磨しており、色調は 3 を除き紺系であり、3 は黄緑系である。

原典 B　野坂麻美　弘前大学学生

A7 号墳　（第 22・23 図　図版 4）

位置　S29 に位置する。

確認面　基本層序Ⅲ層上面で確認した。

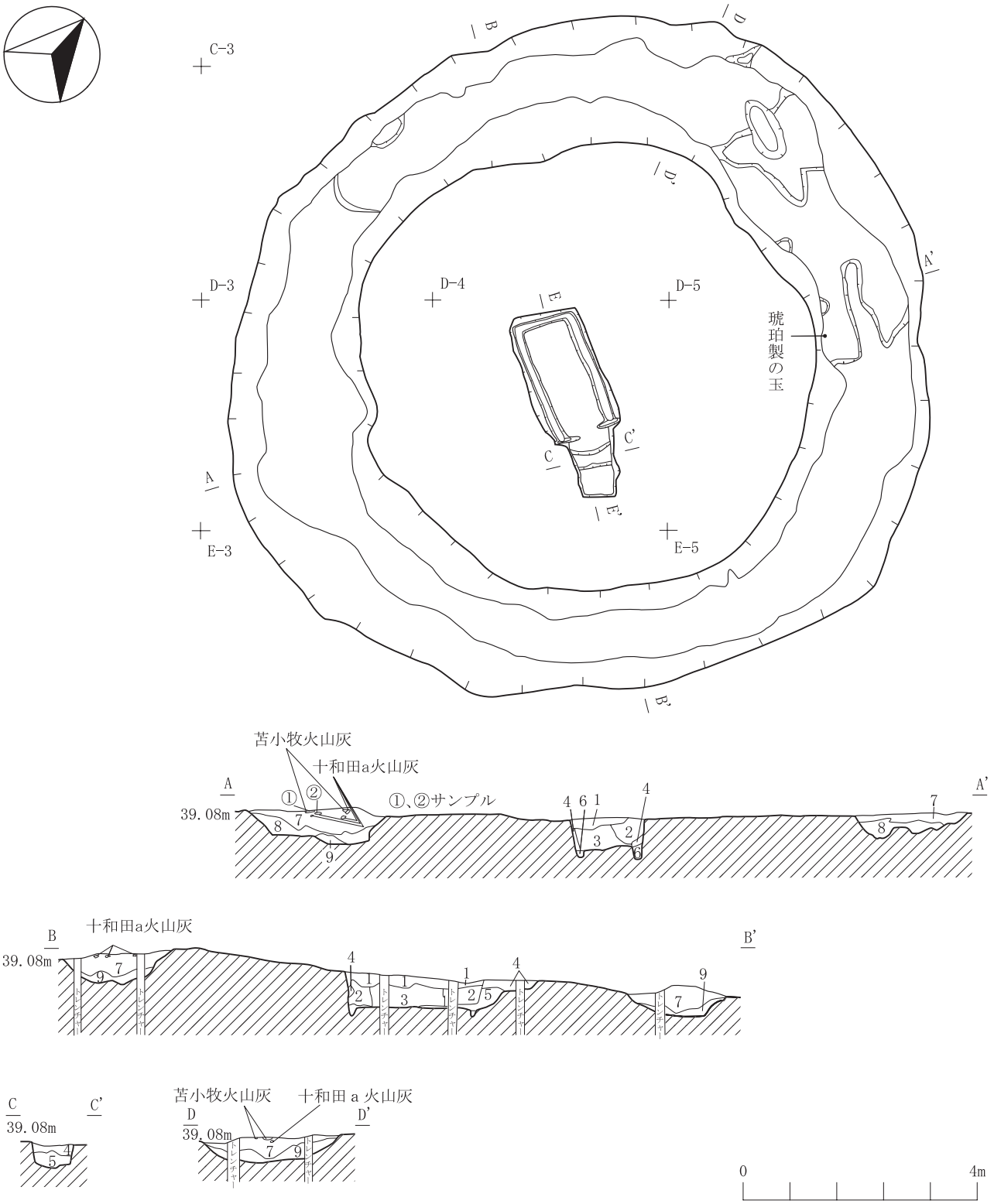
周溝　平面形は馬蹄形プランを呈し、北西に開口部を持つ。規模は、内径 4.2 ～ 5.0m、外径 5.4 ～ 6.9m、上幅 0.5 ～ 1.0m、下幅 0.4 ～ 0.8m、確認面からの深さは 20 ～ 35cm であり、開口部の距離は約 2.2m である。掘り込みなどは特に見られず、埋土は 3 層に分けられる。

主体部　やや長軸がくびれた長方形を示す。長軸 2.0m、短軸 0.9 ～ 1.1m 確認面からの深さは 11 ～ 24cm である。主軸方向は N-48°-W である。なお、主体部の中に特別な溝などの掘り込みは見られないが、北西コーナーを後世のピットによって切られている。埋土は 2 層である。

出土遺物　（第 23・24 図　図版 14・15）

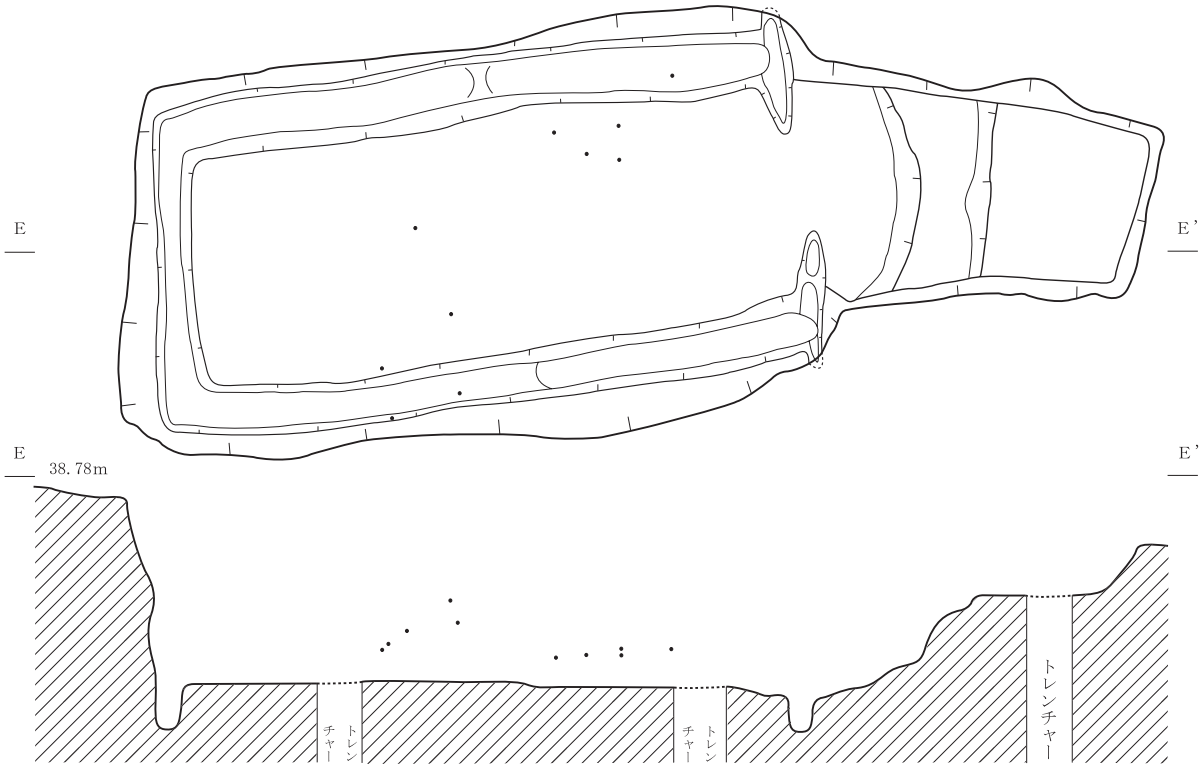
1 と 2 の長胴甕は周溝南東側で、重なるようにして出土した。また、どちらも周溝に浮かぶような状態であった。（第 23 図）1 の長胴甕は底部と口縁～体部の破片が接合しなかったが、調整・色調から同一個体と思われる。器形は高さがおよそ 19.3cm ぐらいと思われ、肩部に段を有し、外面底部は外側へ若干突き出す。外面調整は口縁部がヨコナデ後、縦方向のハケメ、体部は全面にハケメを施した後にヘラミガキが加えられる。内面は底部が丸底を呈し、調整は口縁部から体部までハケメを施すが、一部縦方向のヘラミガキが見られる。

2 は体部下半しかうかがい知ることはできないが、一応長胴甕として扱う。外面底部は外側に突き出しはない。外面調整はハケメ後、ヘラミガキが施されている。内面は底部が丸底で、調整はハケメが施

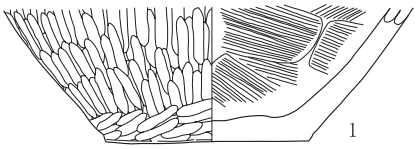


層位	土壌色・色調		混入物・その他
第1層	黒褐色土	10YR2/2	
第2層	黒色土	10YR1.7/1	黄褐色浮石微量混入
第3層	黒褐色土	10YR1.7/1	黒褐色土 明黄褐色ローム 黄褐色浮石少量混入
第4層	黒色土	10YR1.7/1	明黄褐色ロームブロック(径3～5cm)少量混入
第5層	黒色土	10YR1.7/1	明黄褐色ロームブロック(径1～3cm)多量混入
第6層	黒色土	10YR1.7/1	黄褐色浮石多量混入
第7層	黒褐色土	10YR2/2	黄橙色ローム粒（径0.5～2cm）微量混入 上部には苫小牧・十和田a火山灰層を含む
第8層	黒褐色土	10YR2/2	黄橙色ローム粒（径0.5～2cm）少量混入
第9層	暗褐色土	10YR3/4	明黄褐色ロームをブロック状に多量混入

第20図　A6号墳（1）



A6号墳主体部実測図（点はガラス小玉）



番号	出土位置	器　種	法　量　(cm)			外面調整	内面調整	底面調整
			口　径	底　径	器　高			
1	周溝覆土	甕	-	8.0	(5.3)	体部下半　ヘラミガキ	ヘラナデ	ナデ

番号	種別	材質	高さHmm	直径Rmm	比率H÷R	重量　g	色調	備考
2	小玉	ガラス	2.1	3.35	0.63	0.03	紺	主体部埋土
3	小玉	ガラス	2.5	3.95	0.63	0.09	黄緑	主体部埋土
4	小玉	ガラス	2.2	3.5	0.63	0.04	紺	主体部埋土
5	小玉	ガラス	1.8	2.75	0.65	0.03	紺	主体部埋土
6	小玉	ガラス	2.6	4.2	0.62	0.06	濃紺	主体部埋土
7	小玉	ガラス	2.1	3.6	0.58	0.04	紺	主体部埋土
8	小玉	ガラス	2.4	3.2	0.75	0.03	紺	主体部埋土
9	小玉	ガラス	2.1	3.3	0.64	0.03	紺	主体部埋土
10	小玉	ガラス	2.0	3.45	0.59	0.03	紺	主体部埋土
11	小玉	ガラス	2.05	4.1	0.51	0.05	濃紺	主体部埋土
12	小玉	ガラス	2.2	3.15	0.70	0.03	紺	主体部排土
13	小玉	ガラス	2.3	3.25	0.71	0.03	紺	主体部排土
14	琥珀玉	琥珀	—	—	-	1.35	-	周溝底面(破損品)

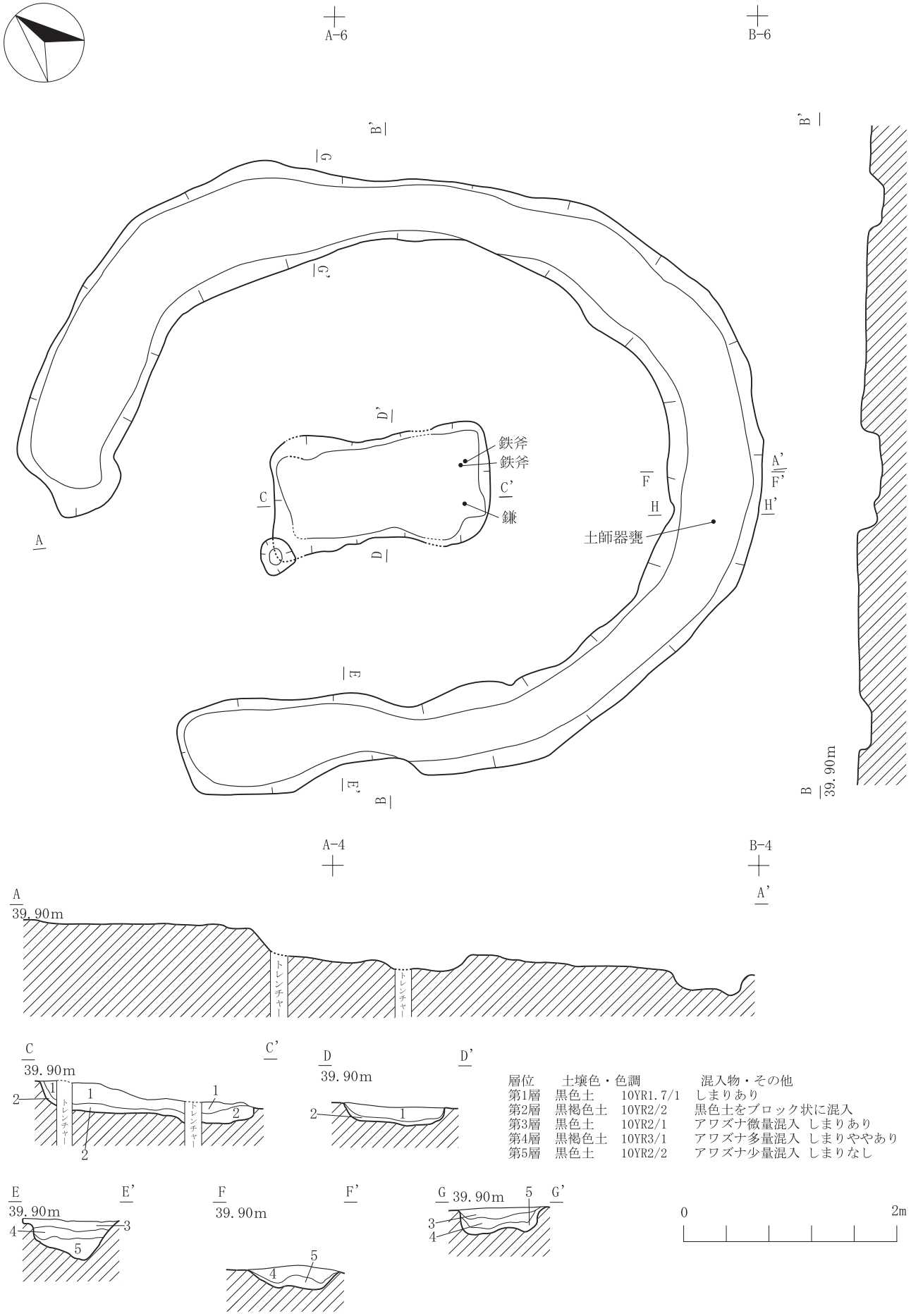
第 21 図　A6 号墳 (2)

されている。以上２点は、どちらも過去の表採品と接合している。

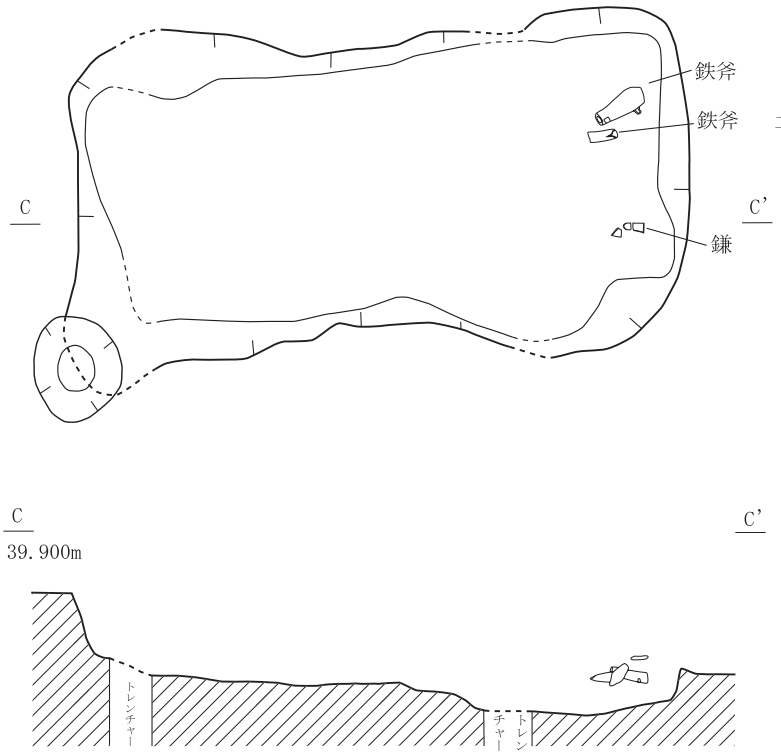
３と４の鉄斧は主体部南東側の１層より出土した。３は刃先を北東方向に向けて出土している。柄の部分は袋状になっており、刃は片側の端が欠けている。４は刃先を南東にむけて出土した。３と同じく柄は袋状をなすが、３よりも大型である。刃は片側の端が欠けている。なお斧であるか手斧であるかは不明である。

５の鎌は、４片に破損して出土した。うち１片は４の鉄斧に錆で付着して出土している。身は湾曲し、内湾した部分に刃をつけてある曲刃鎌である。身の一端は直角に折り返してあり、柄を装着するようになっている。

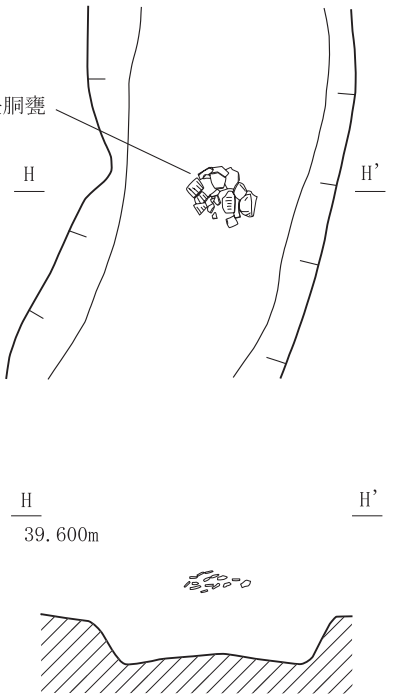
原典Ｂ　赤沼隆一　弘前大学学生


A-6
B-6
B'
G
G'
D'
鉄斧
鉄斧
C'
鎌
C
A
D
F
H
H'
A'
F'
土師器甕
E
E'
B
B
39.90m
A-4
B-4
A
39.90m
A'
トレンチャー
トレンチャー
C
39.90m
C'
D
39.90m
D'
層位　土壌色・色調　混入物・その他
第1層　黒色土　10YR1.7/1　しまりあり
第2層　黒褐色土　10YR2/2　黒色土をブロック状に混入
第3層　黒色土　10YR2/1　アワズナ微量混入　しまりあり
第4層　黒褐色土　10YR3/1　アワズナ多量混入　しまりややあり
第5層　黒色土　10YR2/2　アワズナ少量混入　しまりなし
E
39.90m
E'
F
39.90m
F'
G
39.90m
G'
0
2m

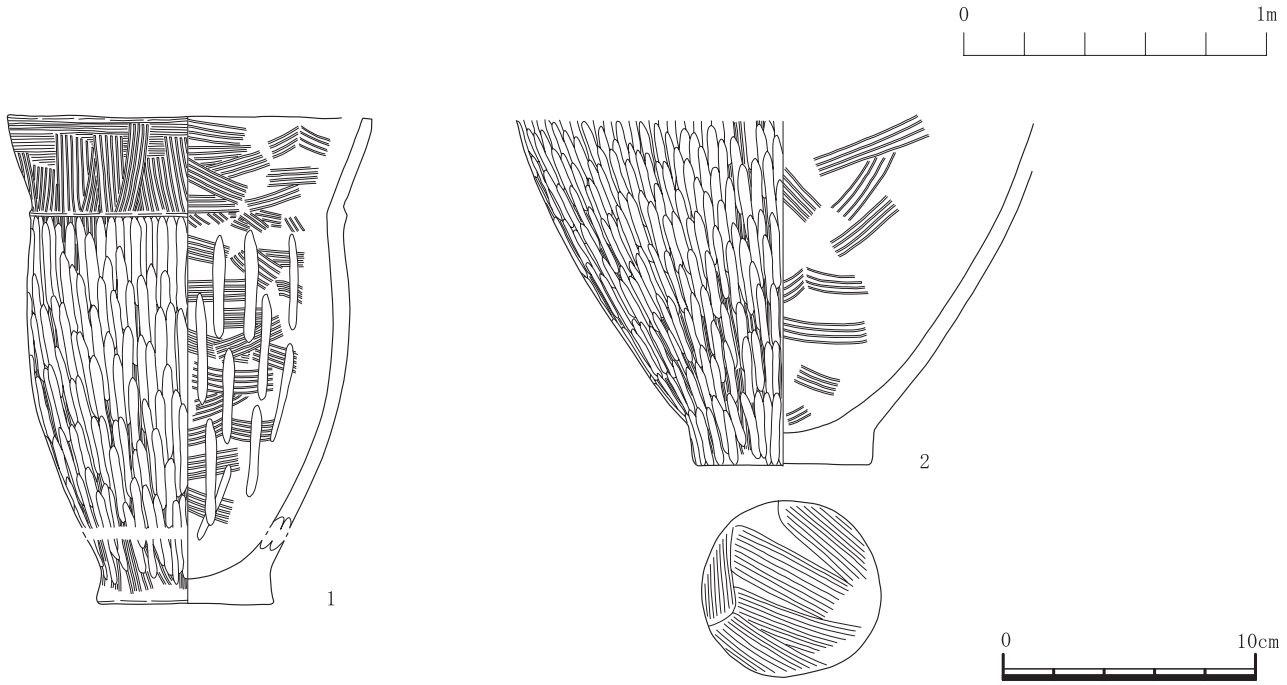
第22図　A7号墳(1)



A7号墳主体部実測図

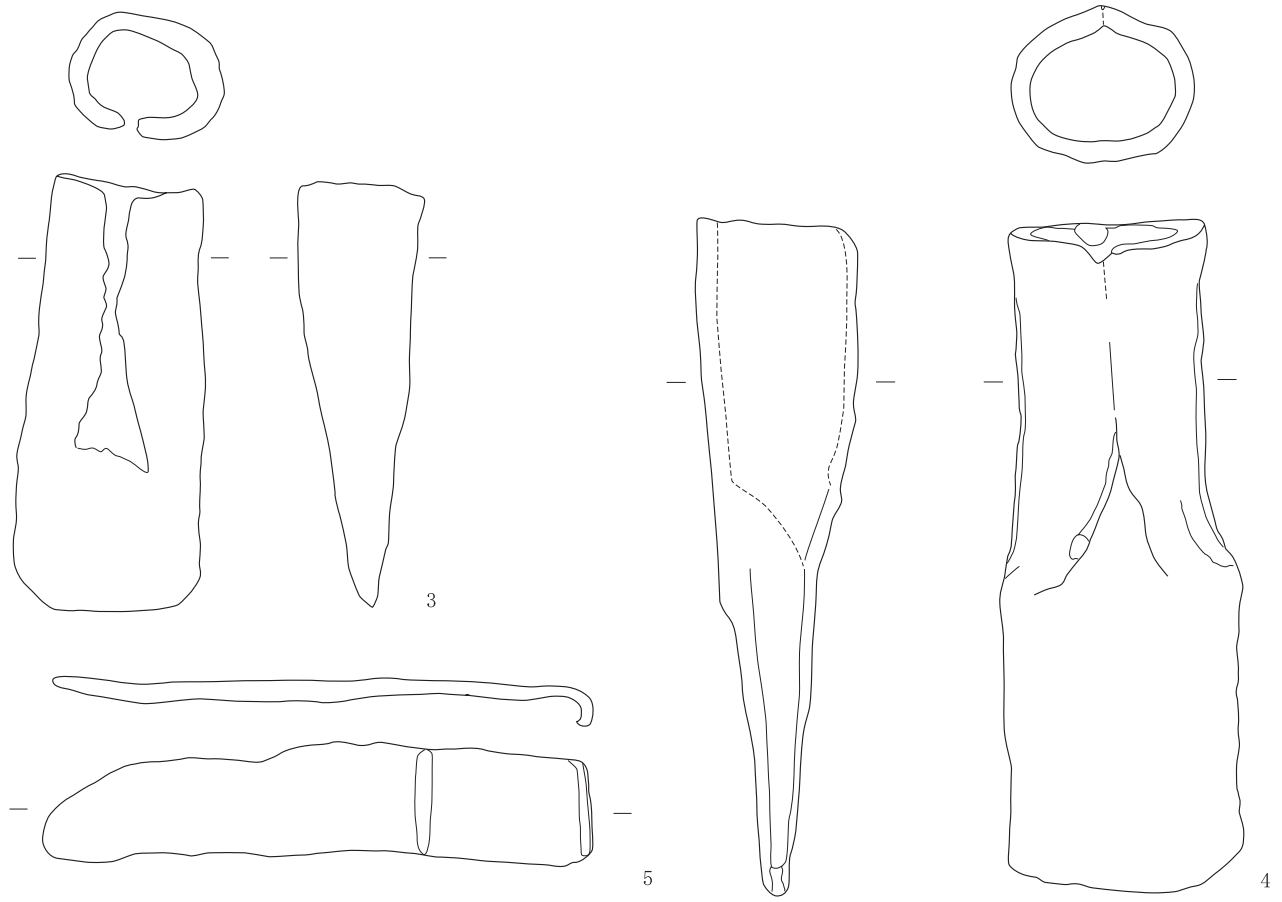


A7号墳出土状況



番号	出土位置	器　種	法　量(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	備考
			口径	底径	器高				
1	周溝覆土	長胴甕	14.5	6.6	19.3前後	口縁部：ヨコナデ→ハケメ 体　部：ハケメ→ミガキ	口縁部：ハケメ 体部：ハケメ→ミガキ	ナデ	過去の表採品と接合
2	周溝覆土	長胴甕	—	6.9	(13.9)	体　部：ハケメ→ミガキ	体部：ハケメ	ナデ	昭和63年度調査表採品と接合

第23図　A7号墳(2)



番号	名称	出土位置	計測値　(cm)		
			長さ	幅	厚さ
3	鉄斧	主体部	11.3	刀部4.9　柄部4.1	
4	鉄斧	主体部	17.2	刀部6.2　柄部5.3	
5	鎌	主体部	14.4	最大幅2.9	背厚0.5

第 24 図　A7 号墳 (3)

A8 号墳　(第 25・26 図　図版 4)

位置　S28、T28 ～ 29 に跨り、A7 号墳と A9 号墳の間に位置する。A7 号墳と A8 号墳の周溝は近接するが、切り合いはみられない。

確認面　基本層序のⅢ層上面で確認された。

周溝　プランは 2 ヶ所に開口部を持ち、弧の対峙した形である。北側のプランは曖昧であり、外側部分は遺構ではない可能性もある。内径 4.5 ～ 5.5m、外径 6.0 ～ 7.8m、上幅 0.2 ～ 2.2m、確認面からの深さ 10cm 前後、埋土は 2 層である。

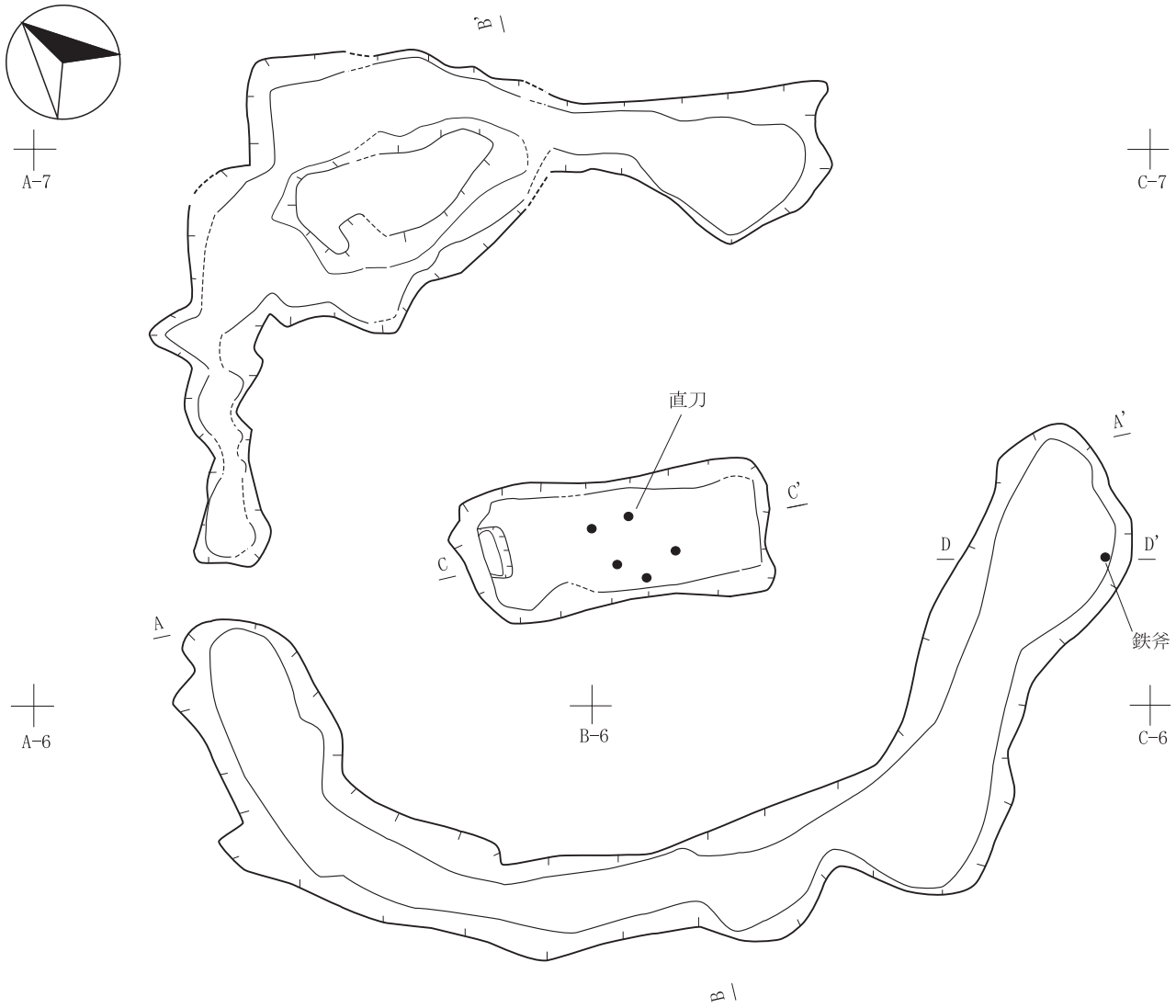
主体部　平面プランはほぼ長方形で、長軸 2.3m、短軸 0.8 ～ 1.0m、確認面からの深さ 32 ～ 54cm を測り、主軸方向は N-51°　-W である。底面には北西の壁際に長さ 40cm、幅 18cm、底面からの深さ 6cm の溝状の掘り込みが見られる。埋土は 6 層である。

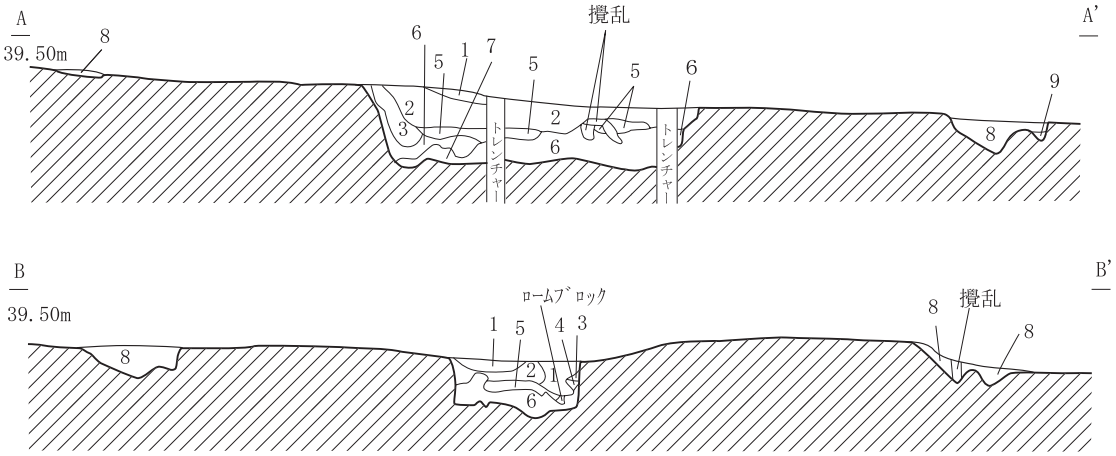
出土遺物　(第 26 図　図版 15)

1 の鉄斧は周溝東側より出土した。柄の部分は袋状になっている。斧であるが手斧であるかは不明である。2 の直刀は主体部 5 層より出土した。刃先は南東を向いていた。この直刀は鋒を一部欠くがほぼ完形である。刃の造込は平造りで、棟は平棟である。関は刃関のみで鏡元の金具を装着している。茎には目釘孔が 1 箇所あけられている。刀装具の遺存状態は悪いが、刀身の中ほどと刀身のつけ根のほうに、鉄製の締金具が残っている。責金具か足金具のどちらかであろう。

また、主体部 5 層からは 4 個の河原石が出土しているが、その役割は不明である。

原典 B　赤沼隆一　弘前大学学生

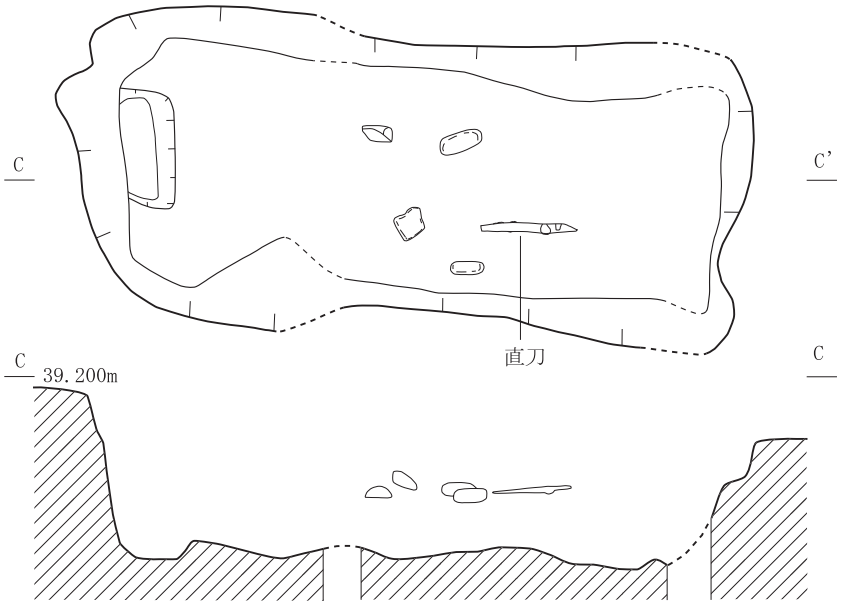




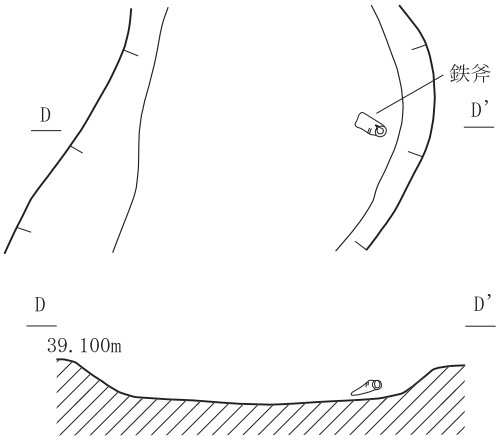
層位	土壌色・色調		混入物・その他
第1層	黒色土	10YR2/1	白色砂粒を多量に混入 アワズナを混入
第2層	黒色土	10YR2/1	白色砂粒を多量に混入 アワズナを少量混入
第3層	黒色土	10YR2/1	明黄褐色ローム浮石を多量混入
第4層	黒色土	10YR1.7/1	しまりがある
第5層	黒色土	10YR2/1	白色砂粒を多量混入
第6層	黒色土	10YR2/1	明黄褐色ロームを多量混入
第7層	明黄褐色土	10YR6/6	掘り方か？
第8層	黒色土	10YR1.7/1	白色砂粒を多量混入
第9層	黒褐色土	10YR2/2	明黄褐色ローム浮石を混入

0　2m

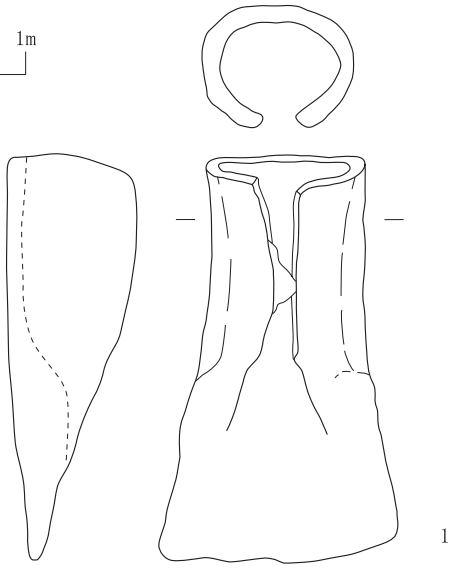
第25図　A8号墳(1)



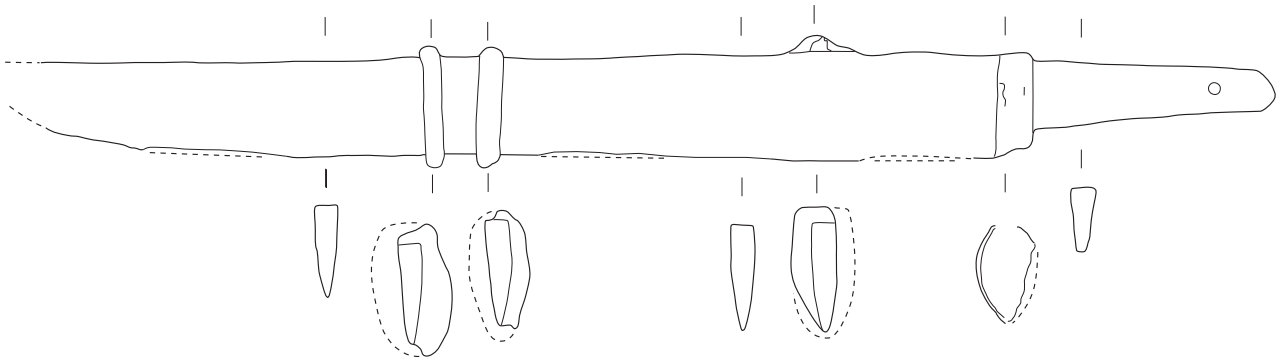
A8号墳主体部実測図



A8号墳鉄斧出土状況



番号	名称	出土位置	計測値　(cm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
1	鉄斧	周溝	10.7	刀部6.3　柄部4.3		



番号	名称	出土位置	全長（cm）	刃長(cm)	茎長（cm）	元幅（cm）	重ね（cm）	鋒長（cm）
2	直刀	主体部	32.4以上	26.2以上	16.4	2.7	0.6	―

第 26 図　A8 号墳 (2)

A9 号墳（第 27 ～ 29 図　図版 5）

位置　T28 ～ 29 に跨っており、A8 号墳の東に位置する。

確認面　Ⅲ層（黒褐色土層）上面で周溝プランが確認された。

周溝　平面形が馬蹄形を描くものと、弧を描くものとの、計 2 基の周溝プランが確認された。（第 27 図）

馬蹄形状の周溝の規模は、内径 4.4 ～ 5.7m、外径 6.2 ～ 7.4m、上幅 0.32 ～ 1.2m、下幅 0.2 ～ 0.8m、確認面からの深さ 11.5 ～ 37cm を測る。北東側で開口しており、埋土は 4 層に分かれる。北側の末端に近い箇所で南方向にほぼ直角に曲がったあと、幅をせばめながら進んでおり、A9 号墳 b 主体部の北側隅にぶつかって止まっている。

弧状の周溝は、馬蹄形状の周溝の北東に位置しており、規模は長さ 5.7m、幅 0.7 ～ 0.85m、確認面の深さ 1.9 ～ 19.1cm を測る。ほぼ南北方向にゆるやかに蛇行し、その北側と南端の計 2 箇所に掘り込みがみられる。

主体部　A9 号墳 a 主体部と b 主体部の、計 2 基の主体部が確認された。（第 28 図）

A9 号墳 a 主体部は、多少歪みがみられるがほぼ長方形の平面プランを呈する。埋葬部の規模は、長軸 1.95m、短軸 0.85 ～ 1.0m、確認面からの深さ 42 ～ 48cm を測り、主軸方向は N-59°-W を示す。埋葬部の東側 23cm 前後の段差の上に、長さ 73cm、幅 110cm の規模をもち、主軸方向 N-72°-W を示す張り出し部を有する。この主体部全体の埋土は 4 層に分けられる。前述した馬蹄形状の周溝は、この a 主体部に付随するものと思われる。

A9 号墳 b 主体部は、a 主体部の北東方向に並列して存在しており、その埋葬部は、長軸 2.1m、短軸 0.85 ～ 1.0m、確認面からの深さ 55 ～ 65cm を測る。主軸方向は N-68°-W を示す。埋葬部の東側 26 ～ 36cm の段差の上に、長さ 64cm、幅 90cm で埋葬部と同じ主軸方向を示す張り出し部を有する。前述した北東側の蛇行する周溝は、この b 主体部に付随するものと思われる。

出土遺物　（第 29・30 図　図版 16）

A9 号墳 a 主体部から耳環が 2 点、河原石が 1 点、b 主体部から釧が 1 点、周溝から鉄製品が 1 点、土師器坏が 2 点、高坏・球胴甕が各 1 点、周溝外から轡が 1 点出土している。

1・2 の耳環は a 主体部埋葬部の中央東寄りから破損した状態で出土したものであるが、材質は不明である。色調は両方とも暗緑灰色を示す。その他、河原石が埋葬部中央より出土している。

3 の釧は b 主体埋葬部中央より、出土したものであり、遺存状態が良くなかったが図上復元は可能であった。色調は緑黒色を示す。材質は不明であるが、岩手県西根遺跡出土品などの例から、錫製ではないかと思われる。

A9 号墳周溝内からの遺物の出土は、すべて前述の蛇行する弧状の周溝の南端周辺に集中している。また、すべて浮いた状態での出土である。

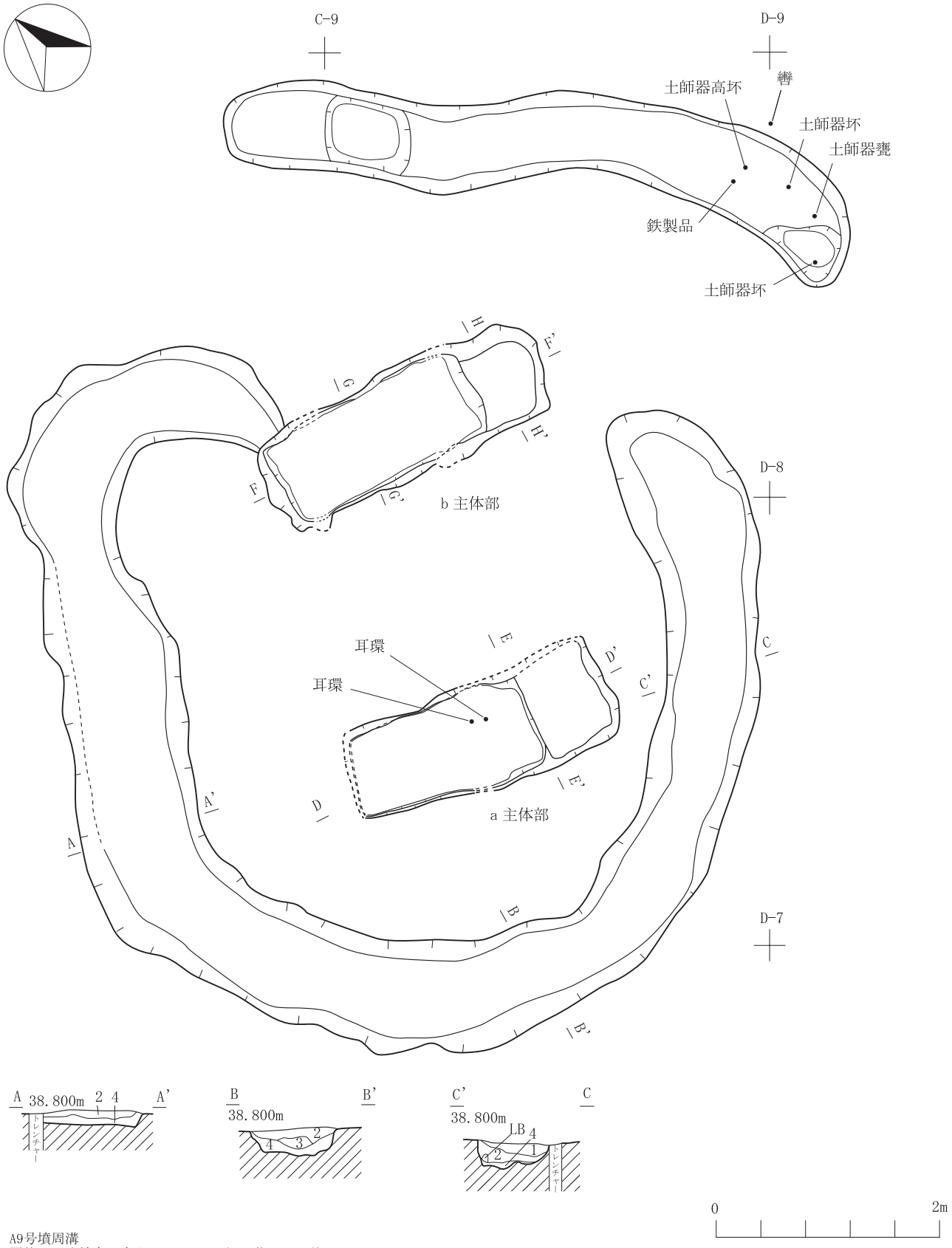
4 の鉄製品は、その形状から判断して鉄鏃の頸部かと思われる。

5 ～ 12 は轡である。周溝の外側に 10cm ほど離れた箇所から出土した。鏡板が素環で楕円形を呈していることから、板状立聞素環鏡板付轡と思われる。鉄製であり、破損しているが 1 個体分あるとみられる。5・6・7・9 は素環式鏡板の一部、8 は銜であろう。12 は引手である。一本引手で引手壷は角度をつけてある。9 は鏡板に附属する立聞とみられる。

4 点の土師器は、周溝の南端周辺やや東寄りに、周溝の壁に沿うように出土している。13 の高坏は、坏部の内外面に段をもち、段より上は内湾しながら立つ。調整は内外面共に丁寧なヘラミガキが施されている。脚部はハの字状に開き、内外面ヘラミガキ、内面の一部にはさらにヘラケズリが施されている。内面には黒色処理がなされている。

14 の坏は、器高の割には口径が小さく、椀形である。丸底で口縁部が内湾し、外面には体部上半に明瞭な段、下部と内面には稜をもつ。調整は内外面ともに丁寧なヘラミガキが施され、内面には黒色処理がなされている。

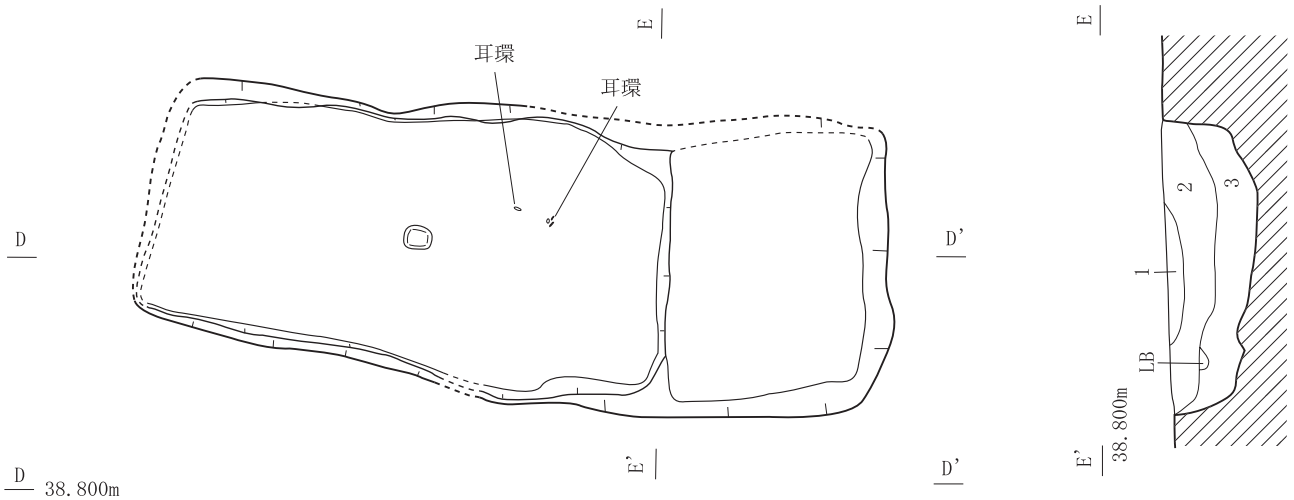
15 の坏は、内外面に明瞭な段をもつ。段より上は、わずかに外反した後に内湾して立つ。調整は内外面ともにヘラミガキが施され、外面体部にはその後にヘラナデがなされている。内面には黒色処理が施されている。

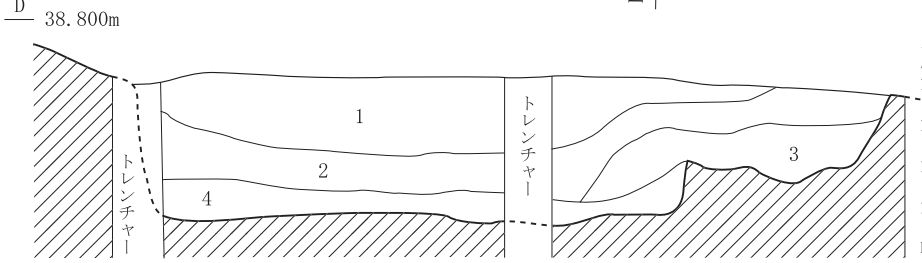


A9号墳周溝

層位	土壌色・色調		混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	明黄褐色ローム浮石を少量混入
第2層	黒色土	10YR2/1	白色砂粒を多量混入 明黄褐色ローム浮石混入
第3層	明黄褐色土	10YR7/6	明黄褐色ローム浮石主体とし 黒褐色土が混入
第4層	黒褐色土	10YR2/2	
第5層	黒色土	10YR2/1	黒褐色土(10YR2/2)を粒状に含む 明黄褐色ローム浮石多量混入

第 27 図　A9 号墳 (1)



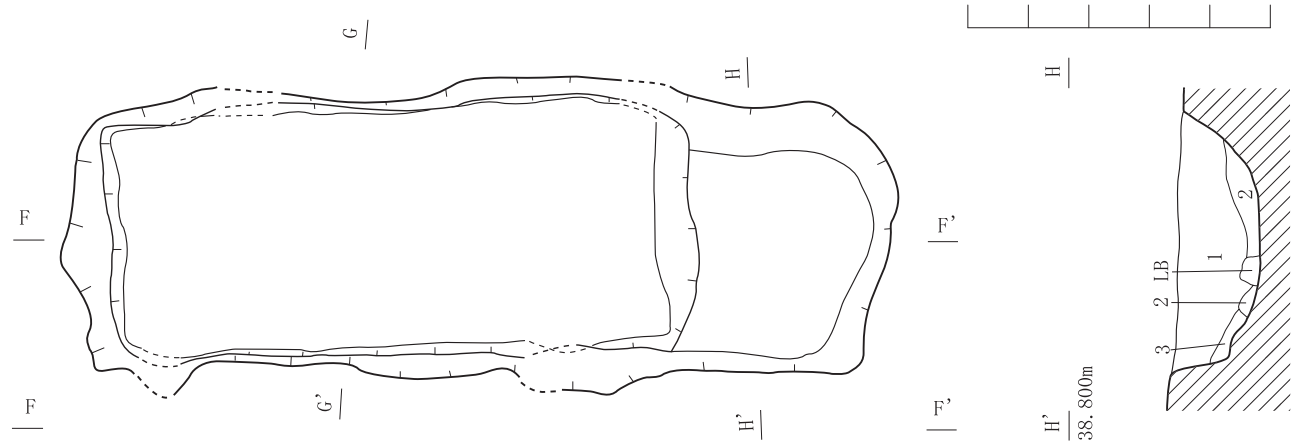


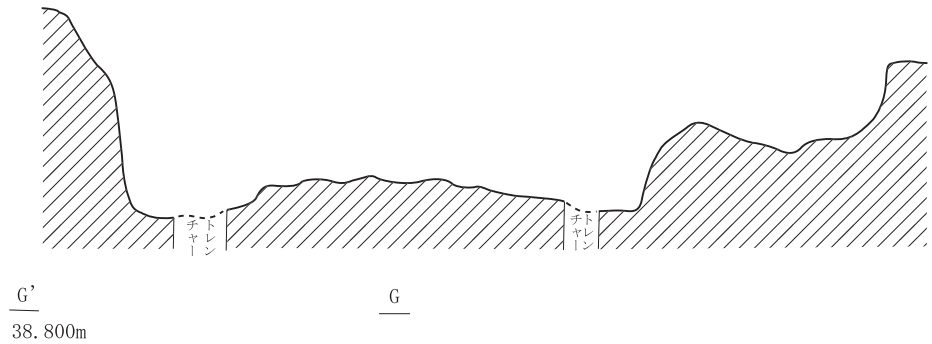
土層注記

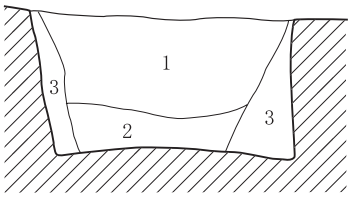
層位	土壌色・色調	
第1層	黒褐色土	10YR2/2
	浮石少量混入 しまり 粘性なし	
第2層	黒色土	10YR2/1
	浮石多量に混入 しまり 粘性なし	
第3層	黒褐色土	10YR2/3
	浮石多量に混入 しまりややあり 粘性なし	
第4層	黒褐色土	10YR3/1
	浮石多量に混入 しまり 粘性なし	
LB	明黄褐色	10YR7/6
	浮石ブロック	

0 1m

A9号墳a主体部実測図





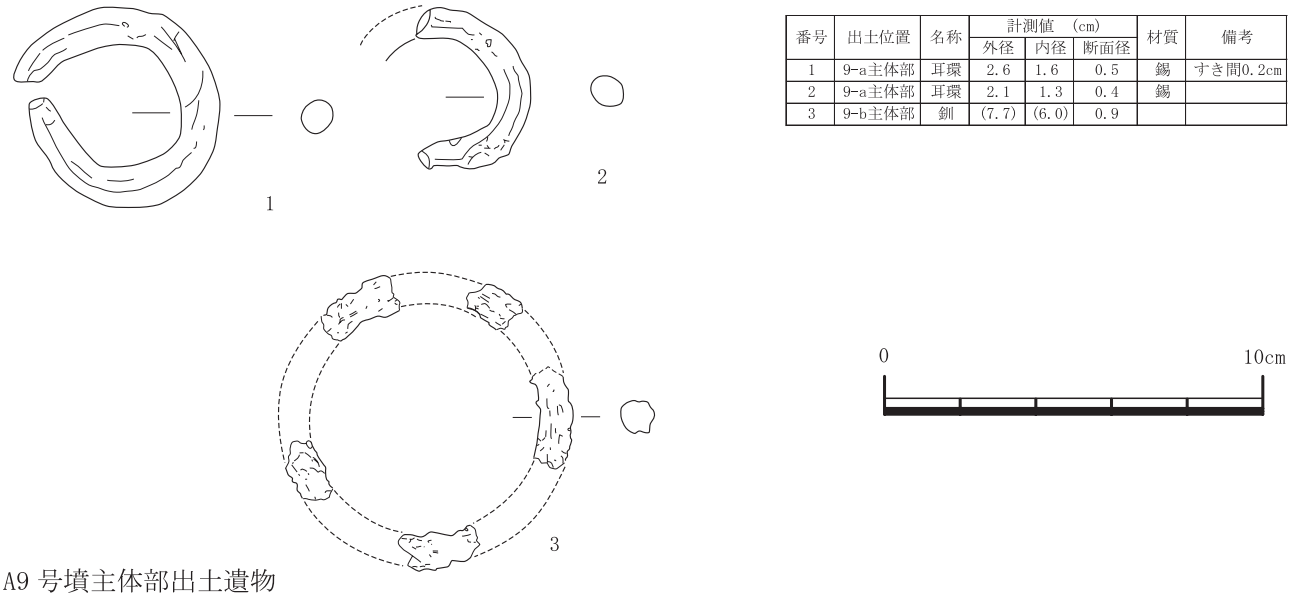


A9号墳ｂ主体部実測図

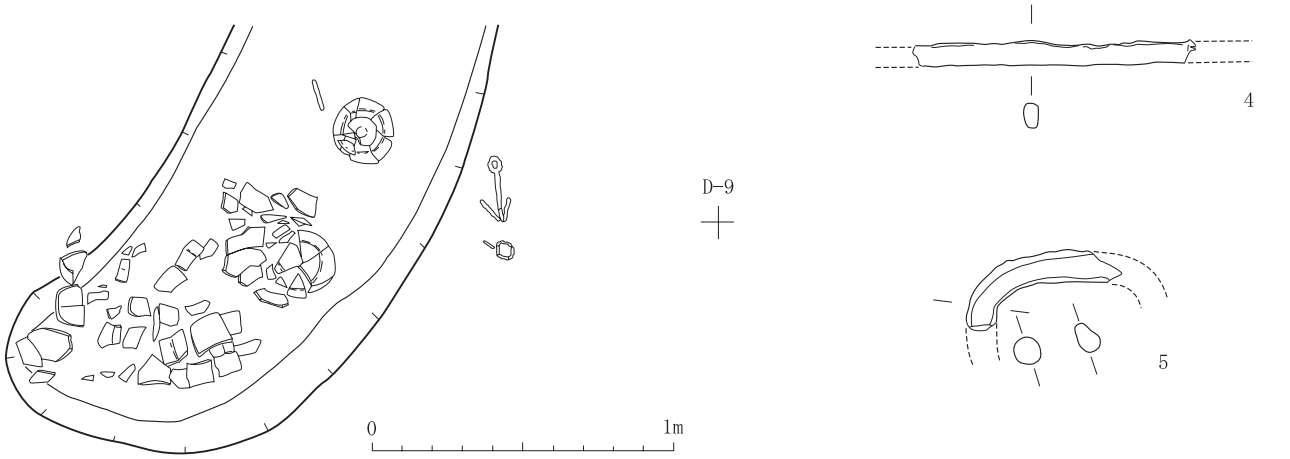
層位	土壌色・色調		混入物・その他
第1層	黒色土	10YR2/1	浮石(火山灰)微量混入 しまり 粘性なし
第2層	黒褐色土	10YR2/2	浮石少量混入 しまり 粘性なし
第3層	黒褐色土	10YR3/2	浮石及び褐色土少量混入 しまり 粘性なし
LB	明黄褐色土	10YR7/6	浮石ブロック

第28図　A9号墳(2)

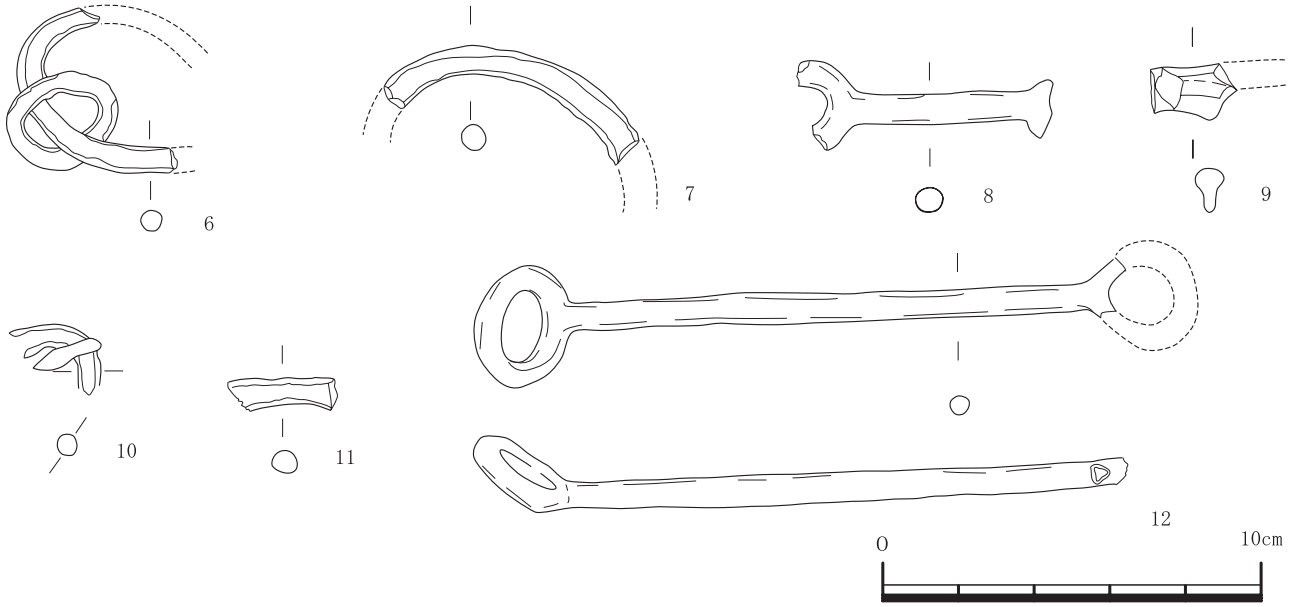
番号	出土位置	名称	計測値　(cm)			材質	備考
			外径	内径	断面径		
1	9-a主体部	耳環	2.6	1.6	0.5	錫	すき間0.2cm
2	9-a主体部	耳環	2.1	1.3	0.4	錫	
3	9-b主体部	釧	(7.7)	(6.0)	0.9		



A9 号墳主体部出土遺物

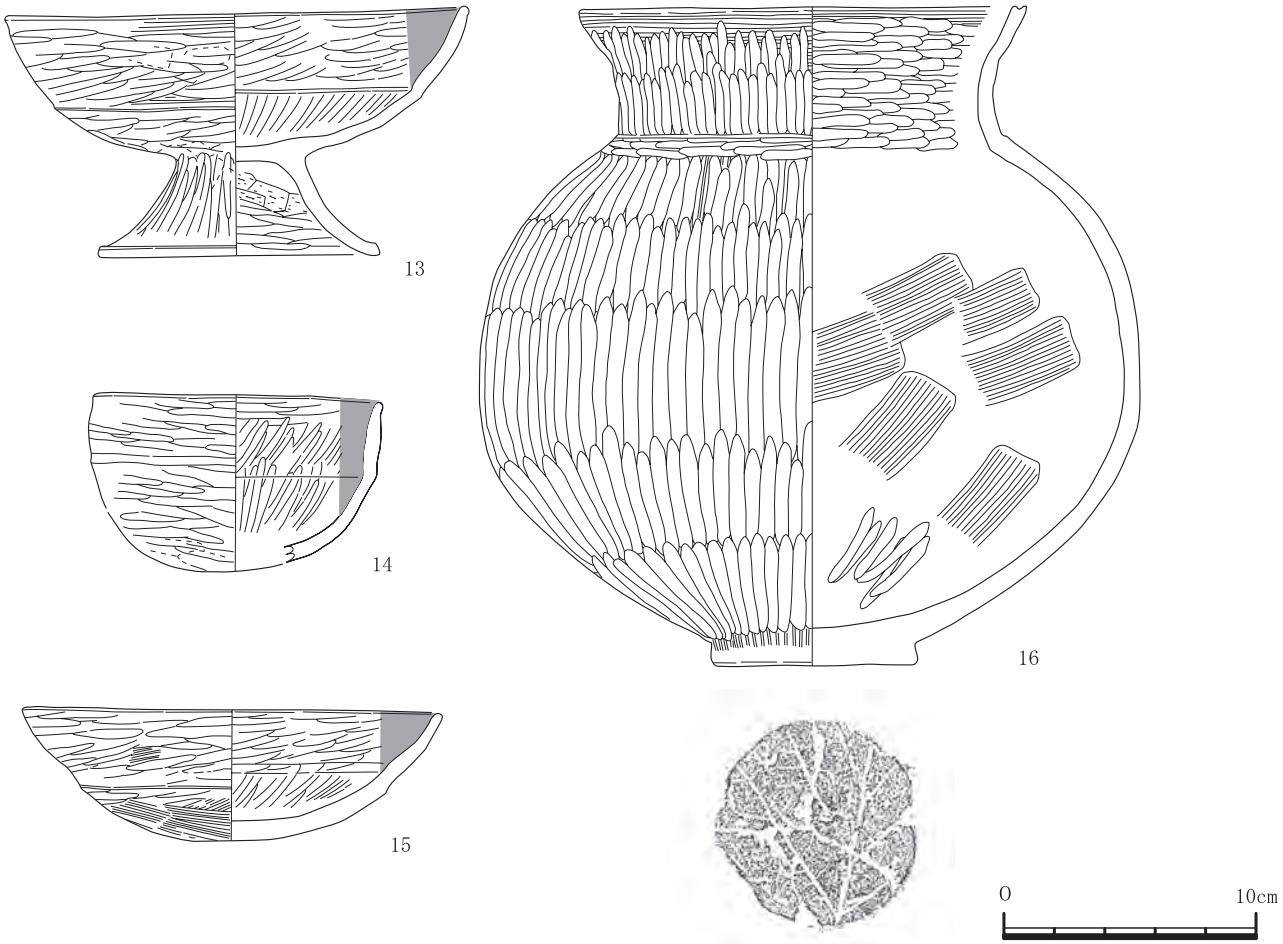


A9号墳周溝遺物出土状況



第 29 図　A9 号墳 (3)

番号	出土位置	種類	大きさ(cm)	備考
4	周溝外	不明	長さ7.6 厚さ0.7 幅0.4	鉄鏃の一部
5	周溝外	轡の一部	最大長4.3 最大断面径0.8	鏡板の一部で楕円形を呈すると思われる
6	周溝外	轡の一部	最大外径4.9 最大内径3.6 輪部最大径3.0 断面径0.6	鏡板の一部
7	周溝外	轡の一部	最大長16.7 最大断面径0.7	5と同様
8	周溝外	轡の一部	最大長6.6 直線部断面径0.8 輪部外径2.5 内径1.2	銜
9	周溝外	轡の一部	最大長2.2 最大断面長1.2	鏡板の立聞の一部か？
10	周溝外	轡の一部	最大径2.8 最大断面径0.7	鉸具
11	周溝外	轡の一部	最大長2.8 最大断面径0.7	用途不明
12	周溝外	轡の一部	最大長17.2 直線部最大径0.6 幹部最大外径3.3 円径1.9	引手



番号	出土位置	器種	法　量(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	備考
			口径	底径	器高				
13	周溝覆土	高坏	18.8	11.2	10.1	坏部～脚部ヘラミガキ	坏部:ヘラミガキ 黒色処理 脚部:ヘラミガキ→一部ケズリ	―	八教委　'90丹後平古墳より
14	周溝覆土	坏	10.9	-	(6.8)	ヘラミガキ	ヘラミガキ 黒色処理	―	八教委　'90丹後平古墳より
15	周溝覆土	坏	16.5	-	5.3	口縁部：ヘラミガキ 下半:ヘラミガキ→ヘラナデ	ヘラミガキ 黒色処理	―	八教委　'90丹後平古墳より
16	周溝覆土	球胴甕	17.9	8.0	25.4	口縁部:ヨコナデ→ヘラミガキ 体部:ハケメ→ヘラミガキ	口縁部：ヨコナデ→ヘラミガキ 体部:ヘラナデ 底部付近:一部ヘラミガキ	木葉痕	

第 30 図　A9 号墳 (4)

16 の球胴甕は、中型 (25.4cm) で肩部に段をもち、外面底部は外側に突き出る。器面調整は、口縁部外面にヨコナデされた後に縦方向のヘラミガキが施され、口縁端部は凹線状になっている。体部はハケメの後に丁寧なヘラミガキが施される。内面調整は、口縁部でヨコナデされた後に横方向のヘラミガキが施され、体部には部分的にヘラナデ、底部付近には一部ヘラミガキがみられる。外面底部には木葉痕がみられる。

以上の 4 点の土師器は、セット関係を示しているひとまとまりの土師器群としてとらえることができよう。

原典 B　相沢　治　弘前大学学生

A10 号墳　（第 31 図　図版 5）

位置　T31 ～ 32 にかけて検出した。

確認面　基本層序Ⅲ層上面で確認した。明黄褐色火山灰の堆積により周溝を確認し、プランを検出した。

周溝　遺構のほとんどが町道にまたがっており、実際に周溝全体を検出することはできなかった。検出した平面形は馬蹄形を呈し、北側で一部とぎれる。推定内径 5.85m、推定外径 6.9m、幅 0.70 ～ 1.90m、確認面からの深さは 6 ～ 18cm である。周溝北端部が若干細くなっている。また、掘り込みなどは特にみられないが、底面は凹凸がある。堆積土は 3 層に分けられる。

主体部　遺構が調査区域外に延びており、検出できなかった。

出土遺物（第 31・32 図　図版 16）

周溝から土師器の坏 2 点、轡 1 点が出土している。

1 の坏は、周溝東部で検出された轡の下より出土した。口径に対し器高の高い坏である。丸底を呈すると考えられ、口縁部が内湾気味に立ち上がる。体部中央に段を有する。調整は内外面ともにヘラミガキが施され、内面には黒色処理が施されている。また内外面に二次加熱によるハジケがみられる。

2 の坏は、周溝東南部の調査区域との境で出土した。口縁部が内湾しながら立ち上がり、口唇部で内側に入っている。丸底で、体部にゆるやかな段が 2 つある。調整は内外面ともにヘラミガキ調整され、内面には黒色処理が施されている。

3 の轡は、周溝東側の堆積土 1 層で出土した。鏡板が素環で楕円形を呈していることから、板状立聞素環鏡板付轡と考えられる。鉄製であり、片方の鏡板と銜が失われているが、同一個体と推定される。銜は断面が隅丸長方形である。引手はねじりの入った棒状であり、断面が菱形を呈している。

原典 C　大野亨　八戸市博物館学芸員

A11 号墳　（第 33・34 図　図版 5・6）

位置　T31 ～ U31 を中心として検出した。

確認面　Ⅲ層上面で確認した。主体部・周溝の東側が、後世の撹乱により削平されている。

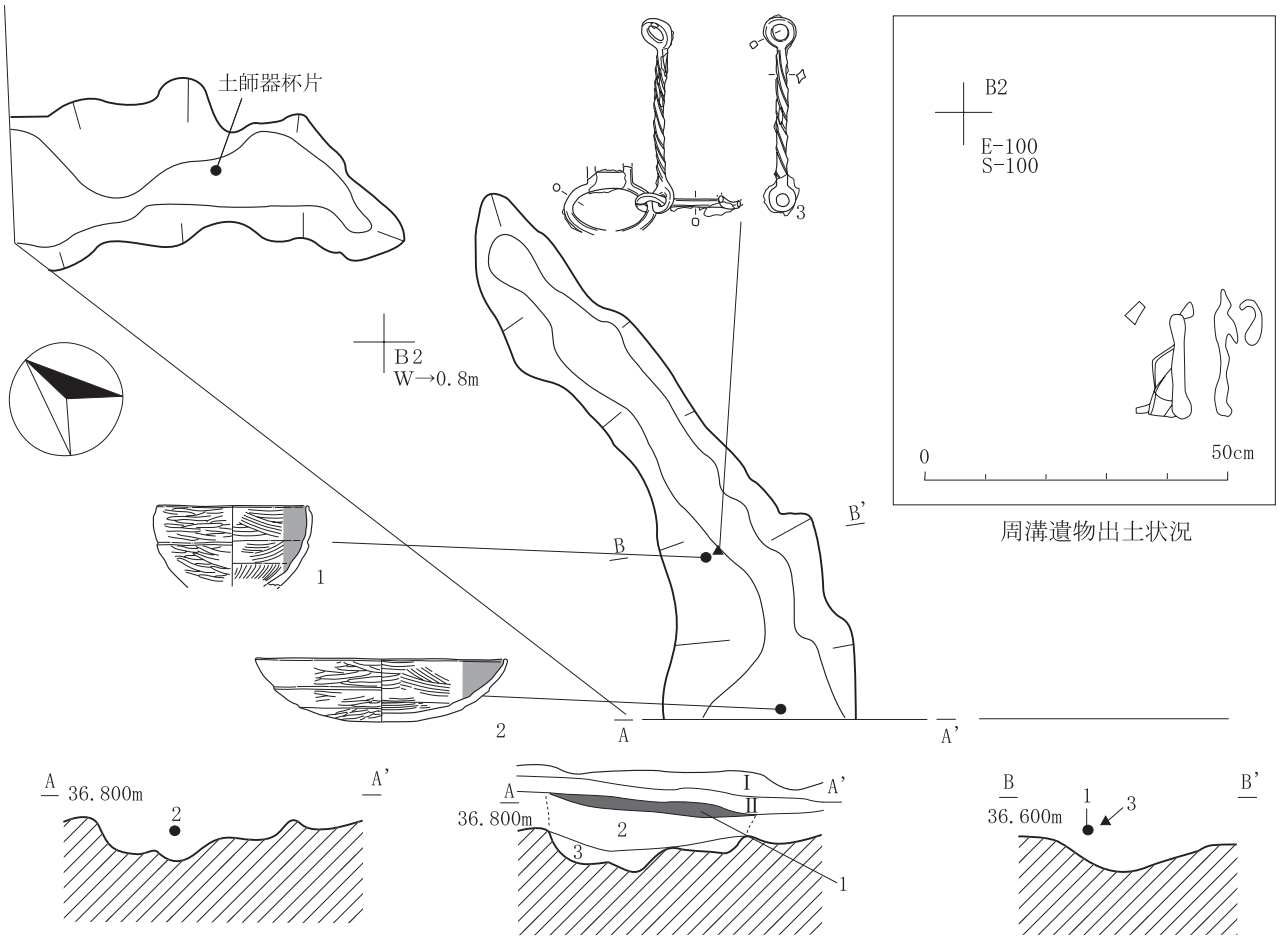
周溝　プランはほぼ円形である。東側は撹乱により削平されている。内径 8.40 ～ 8.60m、外径 11.60 ～ 12.60m、幅 0.80 ～ 2.60m、確認面からの深さは 22 ～ 50cm 程であり、当遺跡の最大規模のものである。底面は凹凸がある。堆積土は 3 層に分けられる。3 層はロームブロックを大量に含んでおり、埋め戻されたと考えられる。

主体部　埋葬部の東側に張り出しを有している。また南西壁に半円状の張り出しがみられる。主軸方向は N-65°　-W である。

埋葬部は長軸 2.55m、短軸 1.80m の長方形で、確認面からの深さは約 50cm である。底面はⅥ層上面であり、東側の張り出し底面はⅥ層である。床面をめぐる溝は、幅 16 ～ 38cm、深さ 11 ～ 23cm で断面が凵型を呈している。東側の張り出しは、撹乱により削平されている。

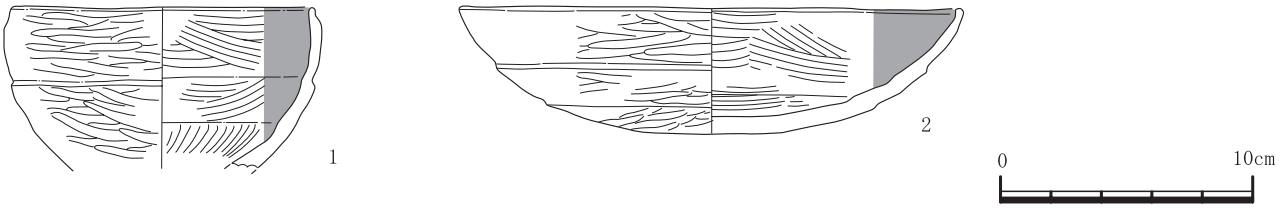
出土遺物　主体部底面から直刀（第 35 図）、刀子（第 35 図 2　図版 17）、鉄片（鉄鏃の茎？）（第 35 図 3　図版 17）、主体部堆積土上層から須恵器平瓶（第 34 図 1　図版 17）、周溝堆積土から土師器坏（第 36 図 5・6　図版 17）、小型甕（第 36 図 7　図版 17）、球胴甕（第 36 図 8　図版 17）、長胴甕（第 36 図 9　図版 17）が出土した。

直刀は全長 86cm 以上の大刀であり、柄は柄頭がなく、柄間が糸巻で、柄元・鞘口金具はみられず、喰出鍔である。柄間は、まず 0.8mm 位の細い紐（ 1 ）を五本セットにし、幅 4mm 程間隔をあけ、らせん状に巻く。その上に漆を塗り、細い紐の間に太い紐（組紐？）をらせん状に巻いた後、更に全体に漆を塗っている。足金具は 2 ヶ所あり、上部が欠けている。鞘の木質は腐朽によって痩せて薄くなっているが全体に残っている。表面には黒色漆が塗られている。比較的厚い塗膜とその下に薄い塗膜が観察できる。最低 2 回の塗り重ねが行なわれている。上層の塗膜は殆ど剥落しているが、下層の塗膜は胎の木質に密着して良く残っている。木質の収縮によって塗膜全体にしわが生じている。刀身、茎、鎺、区等は表面観察できずＸ線撮影により推定される。刀身は先端部が破損し、鋒は不明である。茎も先端が破損している。柄頭は不明であるが、11 号墳主体部堆積土中より厚くしっかりとした黒色漆の塗膜の破片が



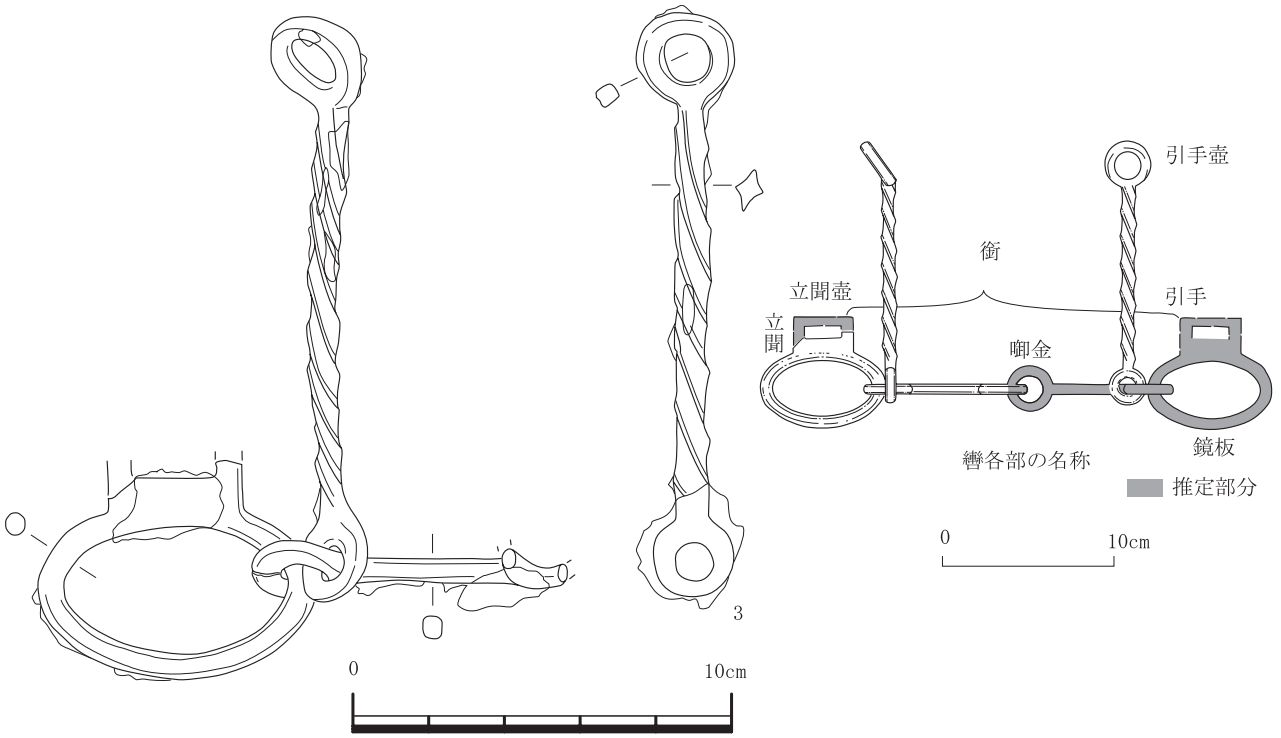
A10号墳　周溝

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第Ⅰ層	黒褐色土	10YR3/1	シルト	耕作土
第Ⅱ層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	中撥浮石微量含む
第1層	黒色土	7.5YR2/1	シルト	明黄褐(10YR6/8)火山灰少量含む
第2層	黒色土	7.5YR1.7/1	シルト	中撥浮石少量含む
第3層	黒色土	10YR2/1	シルト	暗褐色ロームをブロック



番号	種類	層位	特徴
1	坏	周溝覆土	外面：ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ→黒色処理 轉の下より出土 口径（推）11.8cm
2	坏	周溝覆土	外面：ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ→黒色処理 体部にゆるやかな段2つ 口径（推）19.8cm 器高（推）5.0cm
3	轉	周溝覆土	鏡板環体 7.3×4.4cm 立聞外径(3.5cm) 立聞内径(2.2cm) 銜(8.3cm以上) 引手長15.7cm 引手壺径2.6cm

第31図　A10号墳(1)



第 32 図　A10 号墳 (2)

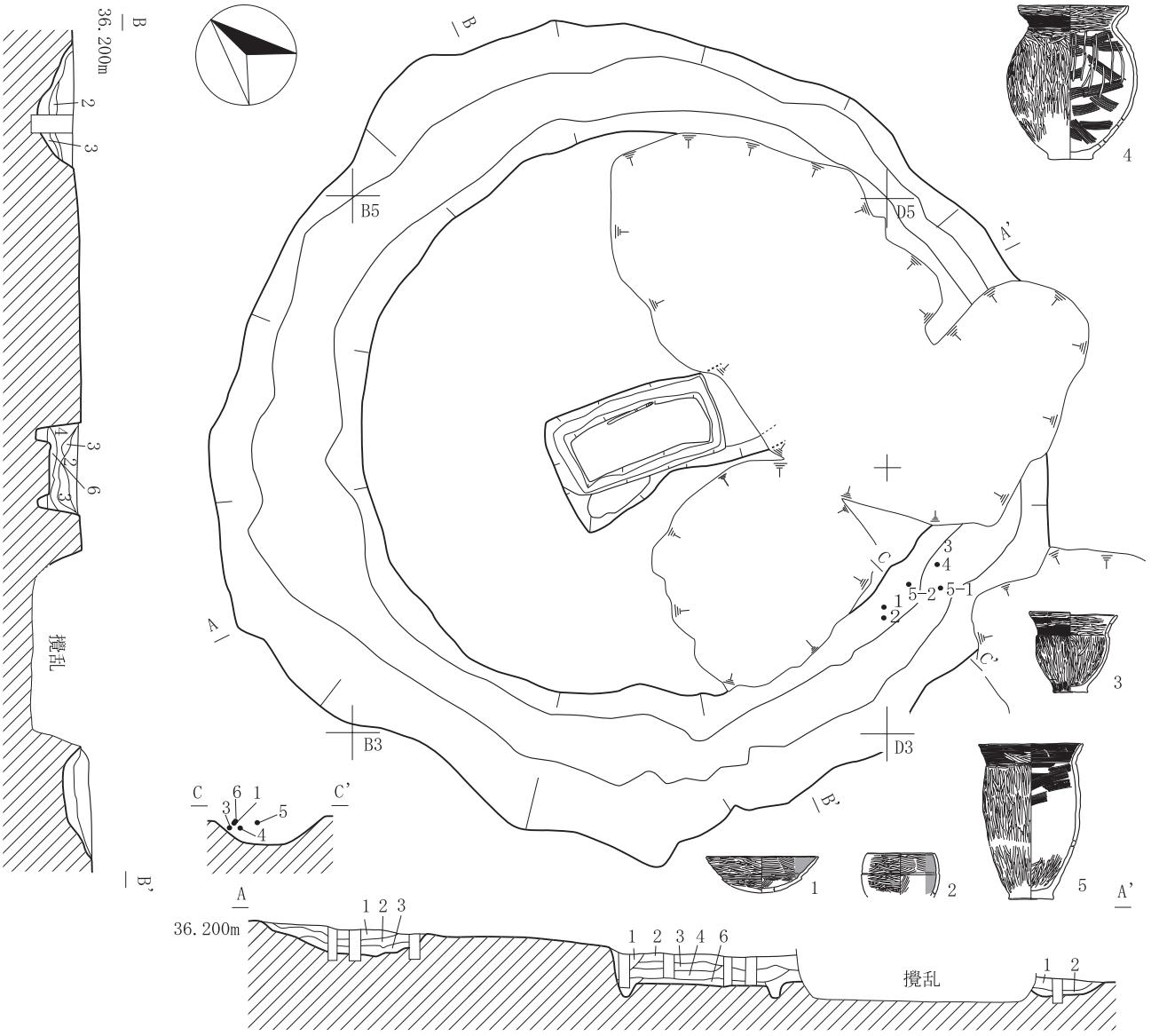
数点確認された。柄頭に塗られた漆の一部で、その形態より円頭の柄頭と推定される。鞘尻金具には布が付着している。刀子は茎の木質が残存しているもので、刃長 6.9cm である。

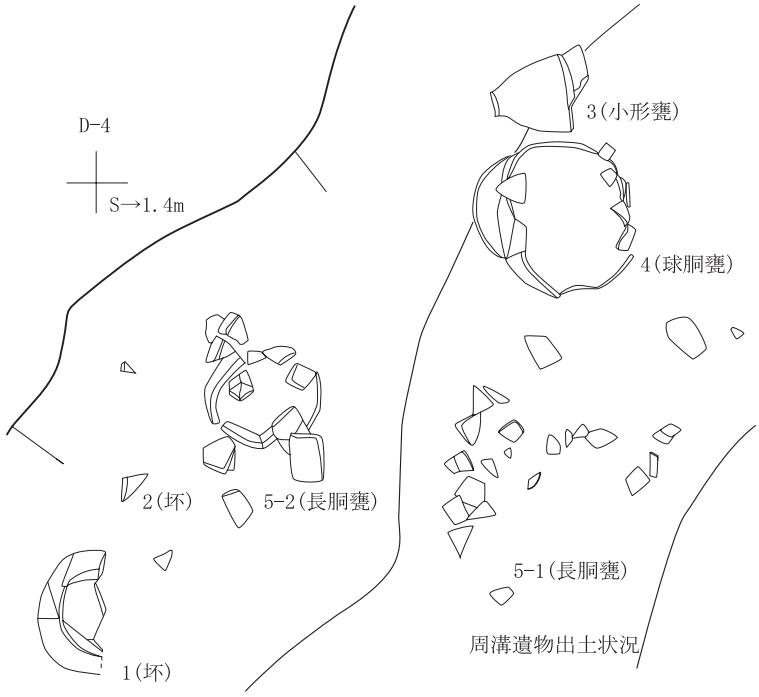
鉄鏃の茎と推定される鉄片が、2 点重なり合って出土した。2 点とも両端を欠損しており、断面が円形である。

主体部上層より須恵器平瓶の胴部片（約 1/2）が出土し、昭和 63 年度調査の表採資料である頸部片（第 58 図 9）と接合できた。ロクロ調整後、胴部下端に回転ヘラケズリを施している。口縁部は直立気味に立ち上がり、頸部中央に沈線が巡る。肩部には円形浮文（ボタン状）が 1 つ貼り付けられている。

周溝出土の土師器は、南側周溝堆積土より一括して出土した。1 の坏は、有段丸底で、口縁は外傾している。調整は内外面ともにヘラミガキ調整され、内面には黒色処理が施されている。2 の坏は、口径に対して器高が高い。口縁部が内湾し、体部は丸みを帯び、段を有する。調整は内外面ともにヘラミガキ調整され、内面には黒色処理が施されている。外面体部下端は、ヘラケズリの後、ヘラミガキ調整されている。3 の小型甕は、胴部は丸味をおび、頸部に明瞭な段を有し、口縁はやや外傾する。内面頸部に稜をもつ。底部外面には木葉痕がみられ、その上を十字の刻みをいれている。ヘラミガキ調整主体である。4 の球胴甕は、ほぼ完形であるが、底部は 3 分の 1 のみ残存している。口縁端部はやや直立気味に立ち上がり、頸部に段がある。外面ヘラミガキ調整主体で、胴部内面にハケメ調整がみられる。5 の長胴甕は、胴部片と底部片を合わせるとほぼ完形であるが、接合は不可能である。口縁部は内外面ナデ調整、胴部外面はヘラミガキ調整である。

原典 C　大野　亨　八戸市博物館学芸員





A11号墳　主体部

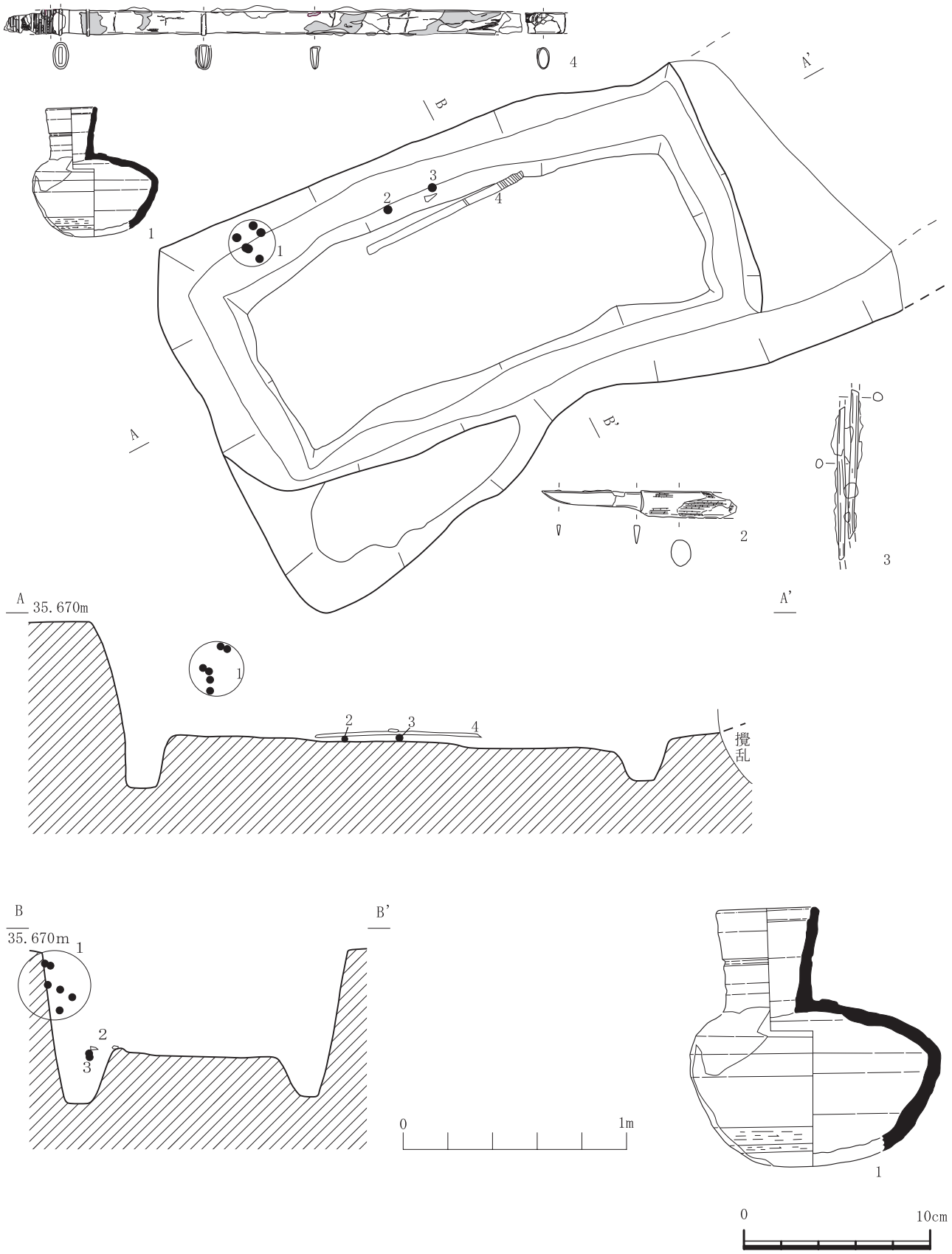
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	5YR1.7/1	シルト	黄色浮石粒をまばらに含む
第2層	暗褐色	10YR3/4	シルト	径1～5mm大の黄褐色ローム粒と
	黒色土	5YR1.7/1		浮石粒をまばらに含む
第3層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	径10cm大の黄褐色ローム
	黒色土	5YR1.7/1		ブロックを含む
第4層	黒褐色土	5YR2/1	シルト	径5mm～2cm大の黄褐色ロ
				ーム粒を均一に含む
第5層	黄褐色土	10YR5/8	シルト	径5mm～2cm大の黄褐色ロ
	黒色土	10YR1.7/1		ーム粒 浮石粒を均一に含む
第6層	黒色土	5YR1.7/1	シルト	径2cm大の黄褐色ローム
				粒をまばらに含む

A11号墳　周溝

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	中撹浮石を若干含む
第2層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	黄褐色ロームをブロック
				状に含み 中撹浮石を若干含む
第3層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	黄褐色ロームブロック
				多量 黄色浮石粒を含む

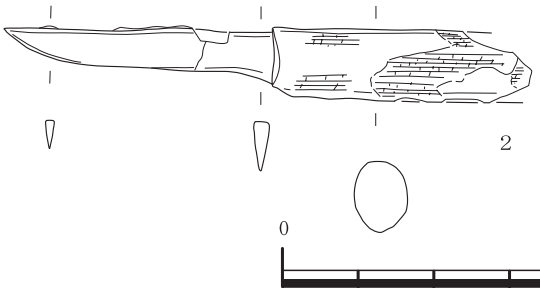
0　1m

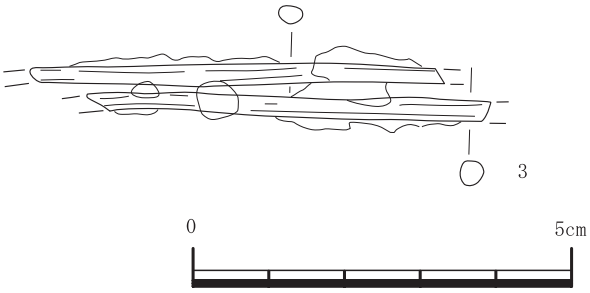
第33図　A11号墳(1)

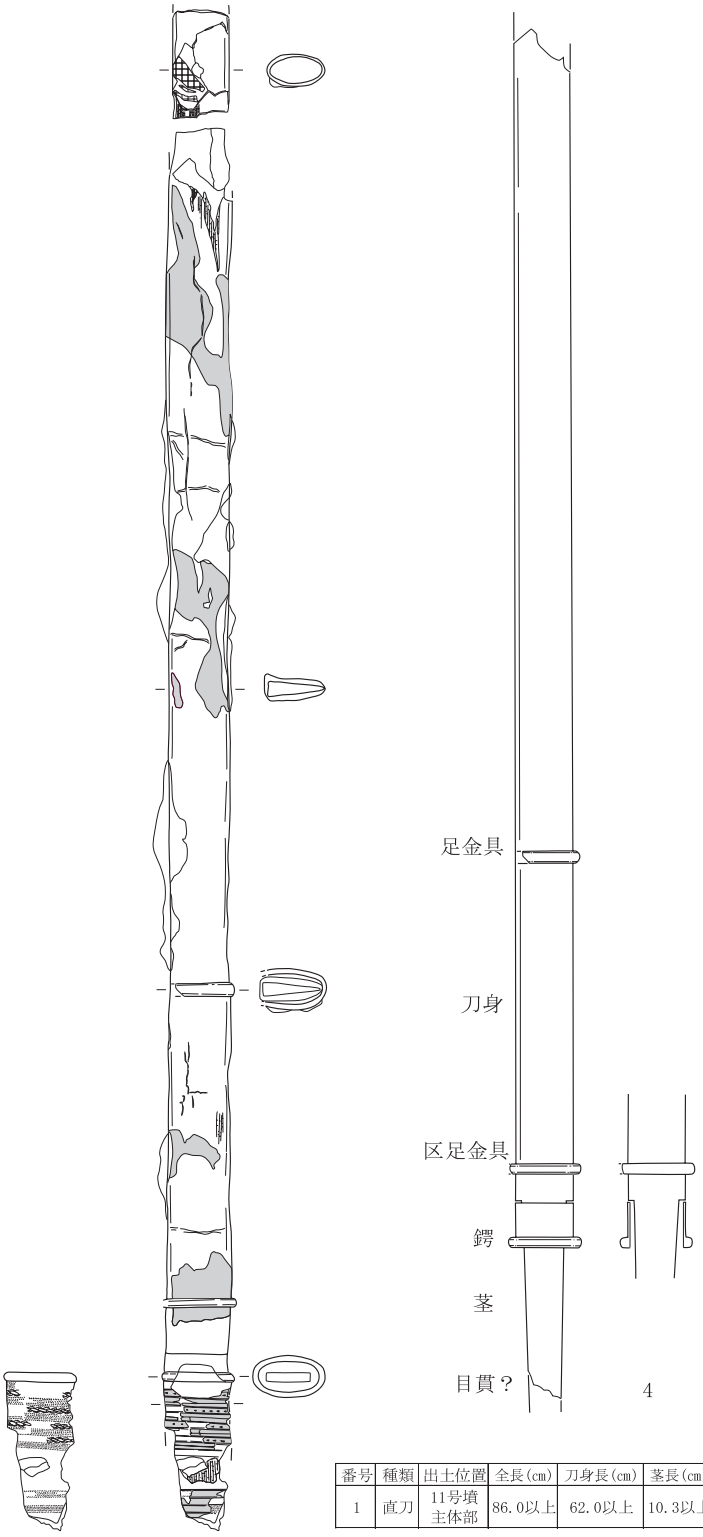


番号	種類	層位	特徴
1	平瓶	主体部上層	ロクロ調整の後 胴部下端に回転ヘラケズリ 昭和63年度調査の表採資料(頸部) と接合
2	刀子	主体部床面	柄:木質部残存 幅1.5～1.9cm 刃:刃長6.9cm
3	鉄鏃	主体部床面	茎2点付着 径2～3mm

第34図　A11号墳(2)

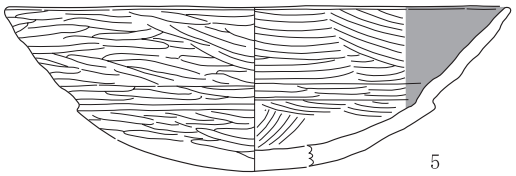


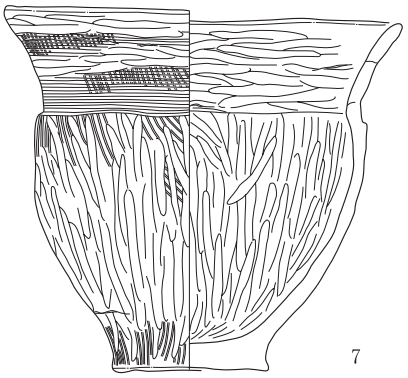


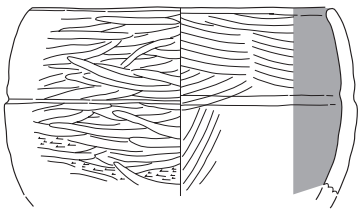


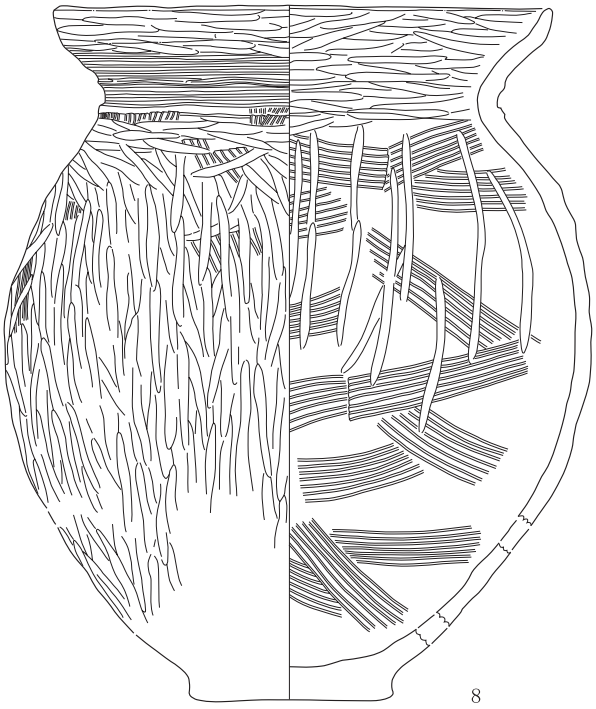
番号	種類	出土位置	全長(cm)	刀身長(cm)	茎長(cm)	元幅(cm)	先幅(cm)	重ね(cm)	鋒長(cm)	鍔長(cm)	鍔幅(cm)	鍔重(cm)	柄反り
1	直刀	11号墳 主体部	86.0以上	62.0以上	10.3以上	3.1	不明	1.3	不明	3.8	2.2	0.5	—

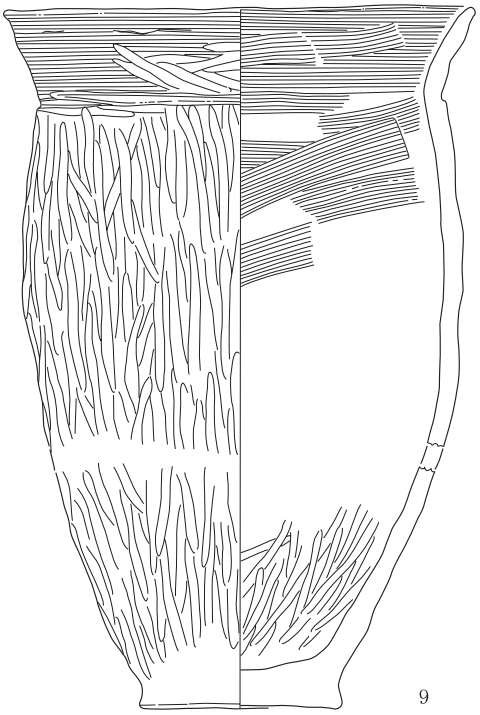
第35図　A11号墳(3)











番号	種類	層位	特徴
5	坏	周溝覆土	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ→黒色処理 口径19.8cm 器高(推)6.5cm
6	坏	周溝覆土	外面:ヘラミガキ 体部下端～ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ→黒色処理 口径(推)12.0cm
7	小形甕	周溝覆土	外面:口縁～ハケメ→ナデ→ミガキ 胴部～ハケメ→ミガキ 底部～木葉痕→「＋」のヘラガキ 内面:ミガキ 口径15.6cm 底径5.9cm 器高14.3cm
8	球胴甕	周溝覆土	外面:口縁～ミガキ 頸部～ナデ 胴部～ハケメ→ミガキ 内面:口縁～ミガキ 胴部～ハケメ→一部ミガキ 口径19.4cm 底径(推) 8.0cm 器高27.5cm
9	長胴甕	周溝覆土	外面:口縁～ナデ→ミガキ 胴部～ヘラミガキ 内面:口縁～ナデ 胴部～ナデ ヘラナデ 口径19.5cm 底径8.9cm

第36図　A11号墳(4)

A12 号墳　（第 37・38 図　図版 6・7）

位置　U31 ～ V31 を中心として検出した。

確認面　基本層序Ⅲ層上面で確認した。

周溝　内径 7.1 ～ 8.1m、外径 9.7 ～ 11.2m の楕円形で、幅 0.7 ～ 2.2m、確認面からの深さは 23 ～ 59cm である。北、南側の幅が広く、東、西側が狭くなっている。堆積土は 3 層に分けられ、3 層はロームブロックを多量に含んでおり、埋め戻されたと考えられる。

主体部　埋葬部の東側に張り出し部がある。埋葬部は長軸 1.7m、短軸 1.5m、確認面からの深さは 20cm である。主体部付近の遺構確認面で小礫が散在しており、掘り下げると長さ 1.7m、幅 1.5m の範囲に径 1 ～ 5cm の小礫が 5 ～ 10cm 程の厚さで敷かれていた。小礫を除去すると埋葬部の底面に幅 9 ～ 17cm、深さ 2 ～ 7cm の溝が北、西、南でコの字状に検出された。張り出し部は長さ 1.8m、幅 1.6m であり、底面で 1.1 × 0.9m の範囲で堅くしまった面が確認された。確認面からの深さは 49cm であり、張り出し部が埋葬部底面より一段低くなり、立ち上がっている。主体部の軸方向は N-68°-W である。

その他　主体部と周溝の間に 5 条の溝を検出した。主体部から東側に延びる溝は、周溝から主軸方向に向かう。北側の溝は長さ 3.0m，幅 32 ～ 90cm，深さ 8 ～ 21cm、（以下左まわりに）長さ 2.4m，幅 36 ～ 77cm，深さ 7 ～ 12cm、長さ 2.3m，幅 18 ～ 44cm，深さ 13 ～ 15cm、長さ 2.0cm，幅 31 ～ 60cm，深さ 16 ～ 27cm、長さ 1.4m，幅 38 ～ 76cm，深さ 4 ～ 49cm である。すべて底面は凹凸があり、柔らかい。

出土遺物　主体部床面から環状錫製品（第 37 図 1　図版 17）、周溝堆積土から土師器坏（第 37 図 2　図版 17）が出土した。環状錫製品は外径 3.1 ～ 3.6cm、内径 2.1 ～ 2.6cm であり、耳環かと考えられる。なお、蛍光Ｘ線分析結果によれば、若干の鉄とカルシウムを含むものの概ね錫でできた製品であるとの結果が出ている。2 の坏は、体部下端に稜をもち、口縁は外傾する。内外面ヘラミガキの後、内面は黒色処理している。

原典Ｃ　大野　亨　八戸市博物館学芸員

A13 号墳　（第 39・40 図　図版 7・8）

位置　U28 ～ 29 にかけて確認した。確認面は耕作土を除去した段階で、基本層序ⅡからⅢ層にあたる黒色から黒褐色土上面で火山灰を含む落ち込みとして検出した。

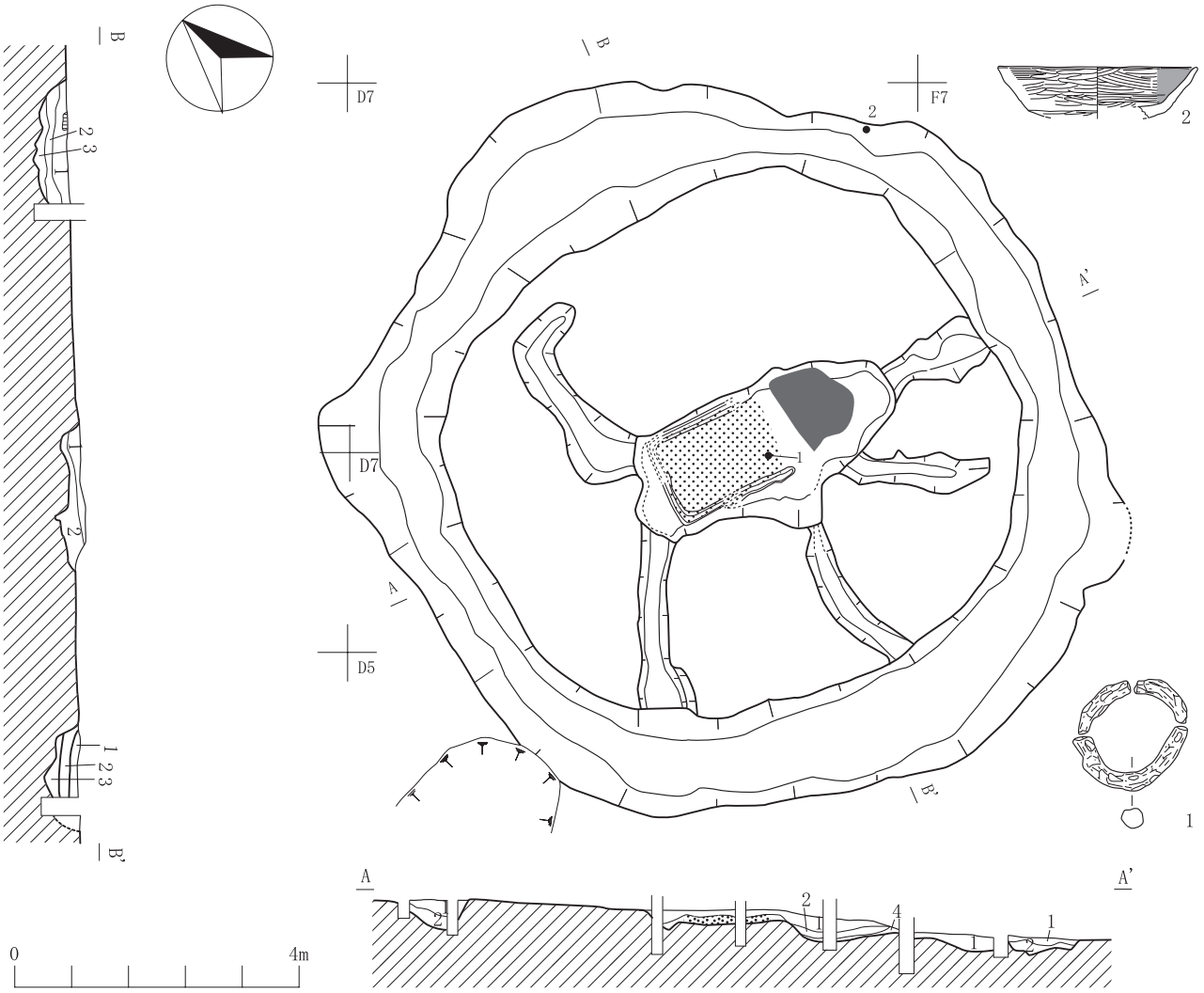
周溝　第 39 図周辺に To-a 火山灰と推定される灰白色火山灰が確認されたため、トレンチャーを掘り断面観察を併用して平面形の確認につとめた。確認面のⅡ・Ⅲ層と周溝堆積土の色調が酷似していたことと、耕作による削平、さらにはトレンチャーによる分断と悪条件が重なり、その確認は非常に困難であった。最終的に把握したものが第 39 図に示したものである。南側である E7 付近は比較的残りが良かったが、東側は立ち上がる様子が確認され、南東側に開口部があったと推定される。一方北東側は上面からの確認が難しく、断面観察を主な手段としたが、F8 から西に 1.5m の地点で途切れた。堆積土は黒色から黒褐色土であり、底部から 30cm 程浮いた場所に To-a 火山灰と推定される火山灰が堆積していた。確認面からの深さは 10 ～ 37cm 程であり内径は 4.6m、外径 7.7m であった。

主体部　周溝に囲まれた地域に黒色の落ち込みとして確認された。周溝と同様明瞭な平面形が確認出来ず、トレンチャー跡を利用したトレンチによって断面観察を併用して把握につとめた。長軸が両端ともトレンチャーに切られていた。残存する長さは 2.0m、幅は最大 1.25m である。主軸方向は N-57°-W である。3 層はロームブロックが含まれ、掘り方埋土である貼床と考えられる。

出土遺物　（第 40 図　図版 17）　主体部からの出土遺物はなかった。周溝の南端、周溝底部から 1 の土器底部が出土した。外面ヘラミガキ、内面はナデが施される甕である。底部はナデであった。

小結　周溝の北東側が削平のため途切れるのか本来このような形で造られたものかは不明だが、南東部は明らかに立ち上がっていたため南東部に開口部を持つ末期古墳と考えられる。時期については周溝に To- a 火山灰が浮いた状態で確認されたことから火山灰降下以前でありそれ以下の土壌が堆積する時間幅が想定される。主軸方向は a1 号土壙や A8 号墳とほぼ平行するものであった。これまで確認されている末期古墳と大きな時間差はないものと推定する。

原典Ｆ



A12号墳　主体部

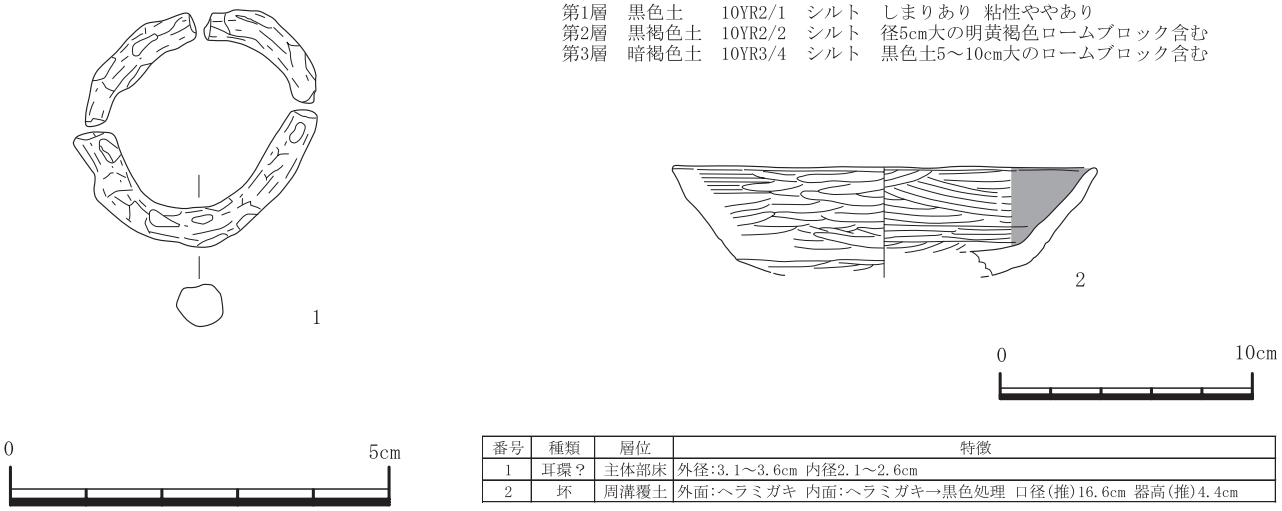
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	微細礫含む
第2層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	にぶい黄褐色のロームブロック含む 礫少量含む
第3層	暗褐色土	10YR3/3	破質シルト	下位に礫密に含む
第4層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒含む 礫少量含む 非常にかたくしまっている

A12号墳　主体部周溝

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	微細礫含む

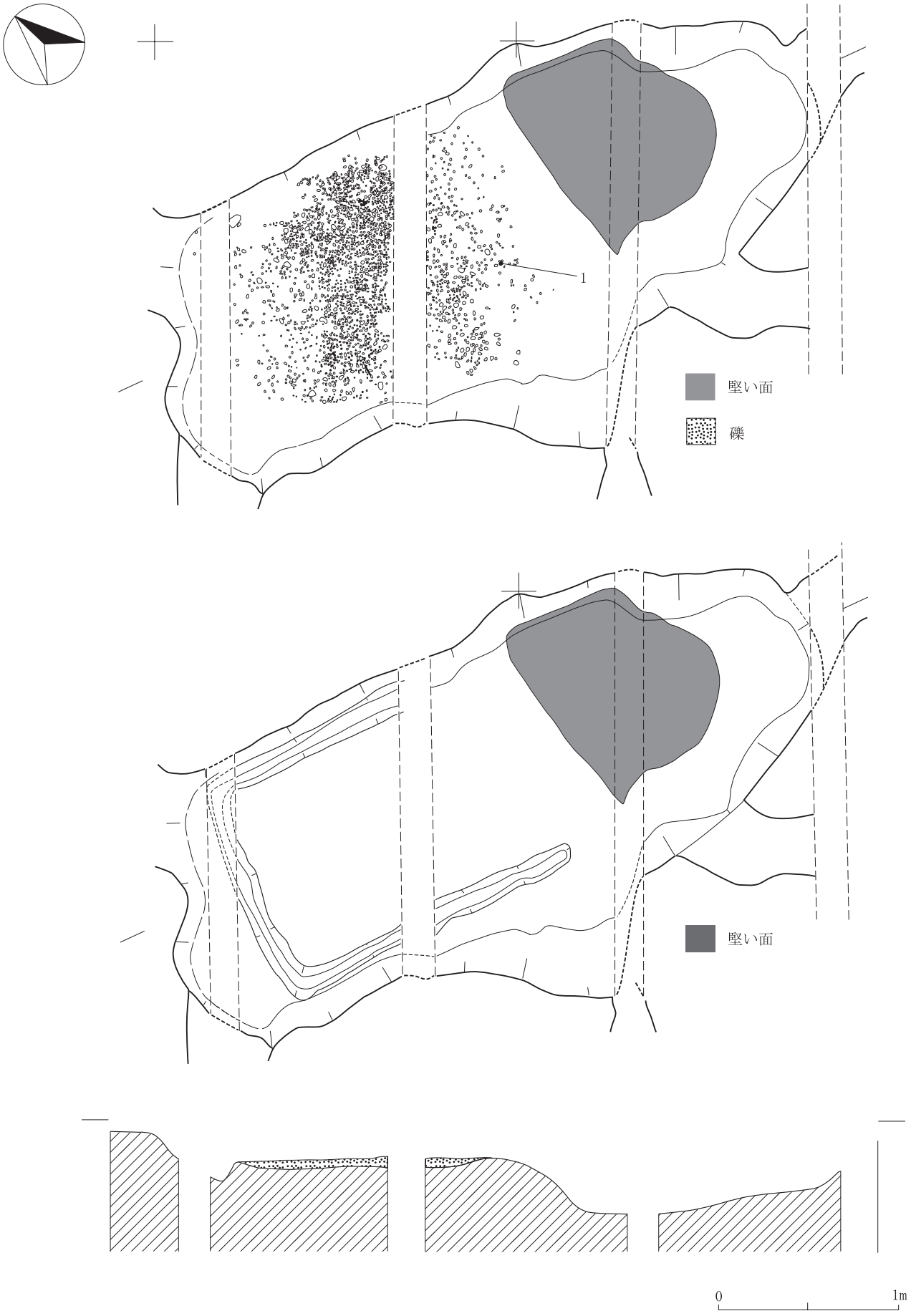
A12号墳　周溝土層観察表

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR2/1	シルト	しまりあり 粘性ややあり
第2層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	径5cm大の明黄褐色ロームブロック含む
第3層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	黒色土5～10cm大のロームブロック含む

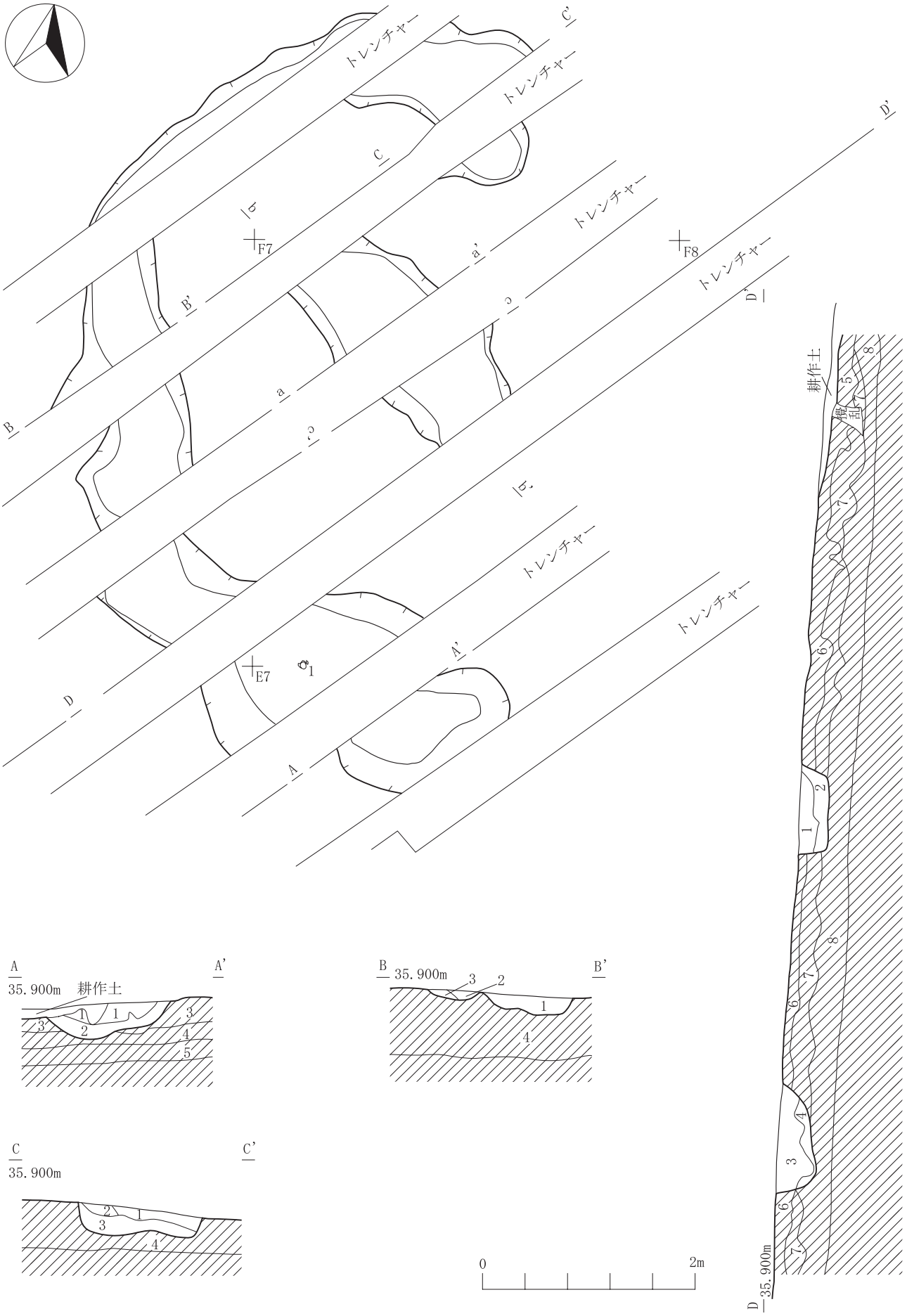


番号	種類	層位	特徴
1	耳環？	主体部床	外径:3.1～3.6cm 内径2.1～2.6cm
2	坏	周溝覆土	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ→黒色処理 口径(推)16.6cm 器高(推)4.4cm

第37図　A12号墳(1)



第38図　A12号墳(2)


トレンチャー
トレンチャー
トレンチャー
トレンチャー
トレンチャー
トレンチャー
F7
F8
E7
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
a
a'
耕作土
35.900m
0
2m

第 39 図　A13 号墳 (1)

A13 号墳周溝

A-A'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	上層に十和田a火山灰含む
第2層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	中掫浮石層と黒色土の混合土 掘り方
第3層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	自然堆積層
第4層	褐色土	10YR4/6	砂	中掫浮石層
第5層	暗褐色土	10YR3/4	粘土	岩片含む

B-B'

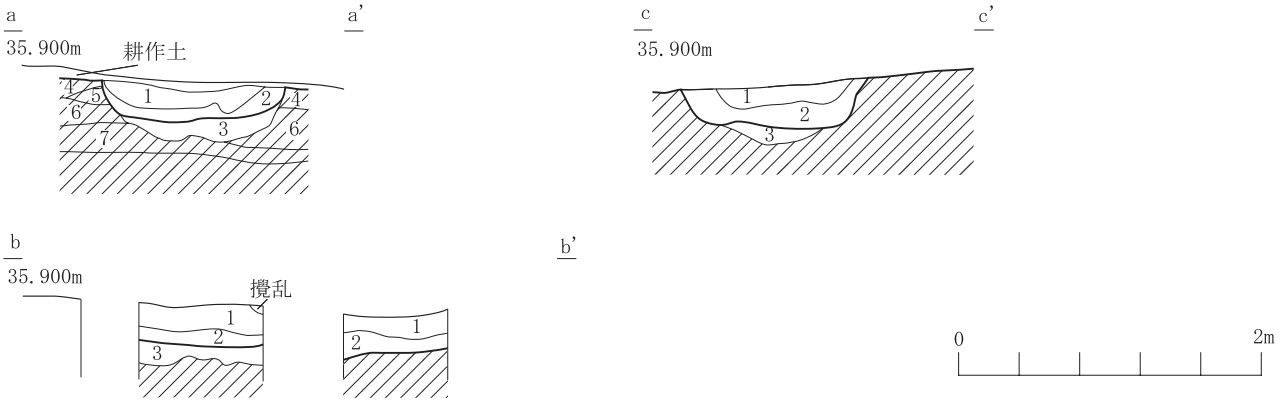
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	周溝覆土
第2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	周溝覆土
第3層	黒色土	10YR2/1	シルト	周溝覆土 上層より明るい

C-C'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒含む
第2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	上層より明るい
第3層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒含む
第4層	暗褐色土	10YR3/3	砂	中掫浮石二次堆積層

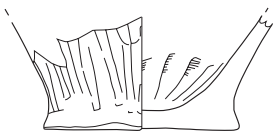
D-D'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	主体部
第2層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	砂粒含む 主体部
第3層	黒色土	10YR2/1	シルト	この部分にはないが 他では十和田a火山灰が見られる 周溝覆土
第4層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	
第5層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	しまり弱 周溝覆土か
第6層	黒色土	10YR2/1	シルト	
第7層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	黒色土と中掫浮石層が混じる
第8層	暗褐色土	10YR3/3	砂	中掫浮石層



A13 号墳主体部

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色～黒褐色土	10YR1.7/1～2/2	シルト	砂粒含む
第2層	黒色～黒褐色土	10YR1.7/1～2/3	シルト	砂粒を多量含み 上層より明るい
第3層	黒褐色～褐色土	10YR2/3～4/4	シルト	中掫浮石由来の砂粒と黒色土の混層 10YR4/6のロームブロック含む 貼床土
第4層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	基本層Ⅲ層
第5層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	上層より明るい砂粒多量含む
第6層	褐色土	10YR4/4	砂	中掫浮石層
第7層	暗褐色土	10YR3/4	粘土	八戸火山灰層



1

0　10cm

No.	器種	層位	種類	部位	底径(cm)	外面調整	内面調整	備考
1	甕	周溝1層上	土師器	底部	8.8	ミガキ	ナデ	P1

第 40 図　A13 号墳 (2)

A14 号墳　（第 41・42 図　図版 8）

位置　T28 を中心として位置し、耕作土を除去した段階のⅢからⅣ層上面で確認した。

周溝　遺構の北側が調査区外であり、西側のプランも曖昧で、さらに畑のトレンチャーによって部分的に切られているため、全体を確認することはできなかった。残存する溝の幅は 0.8 ～ 1.5m で、確認面からの深さは 8.2 ～ 27.6cm である。溝の南端部は細くなり途切れていることから開口部と推測される。西側の溝は平成元年度の調査区の a1 号土壙に伴う可能性も考えられ、本遺構に附随するものなのかは不明である。

主体部　周溝と同様にトレンチャーによって切られた部分があり、全体を確認することができなかった。規模は長軸 2.3m、短軸 75 ～ 90cm、確認面からの深さは 18.0 ～ 21.3cm であり、平面形は長方形を呈している。主軸方向は N-46°　-W であり、これまで確認された主体部より北に偏る。堆積土は主に黒色土を中心としている。

付属施設　主体部底面の南東側に長さ 60cm、幅 20cm、深さ 22.0 ～ 24.7cm の溝状の掘り込みを確認した。

出土遺物　（第 42 図　図版 17）　土器の細片がわずかに出土しているが、トレンチャーからのもので、遺構に伴うものかどうかは不明である。周溝からは加工が施されていない軽石が出土した。また、主体部の南東の壁から耳環が1点出土した。

小結　本遺構での主な出土遺物は耳環が1点のみであり、時期等を位置づける土器が出土しなかったため、詳細を把握することはできなかった。残存する周溝が全周しないタイプで、主体部を囲うように弧を成していることから、開口部を持つ末期古墳であると考えられる。年代については、時期を特定できる手がかりがないため不明である。

原典 F

A15 号墳　（第 43 図）

位置　O26 を中心に位置する。直径 7 ～ 8m、現地表面から 40cm 程度の高まりとして認識できる。末期古墳であると推定される。掘削を行わなかった。

原典 F

A16 号墳　（第 44 図　図版 9）

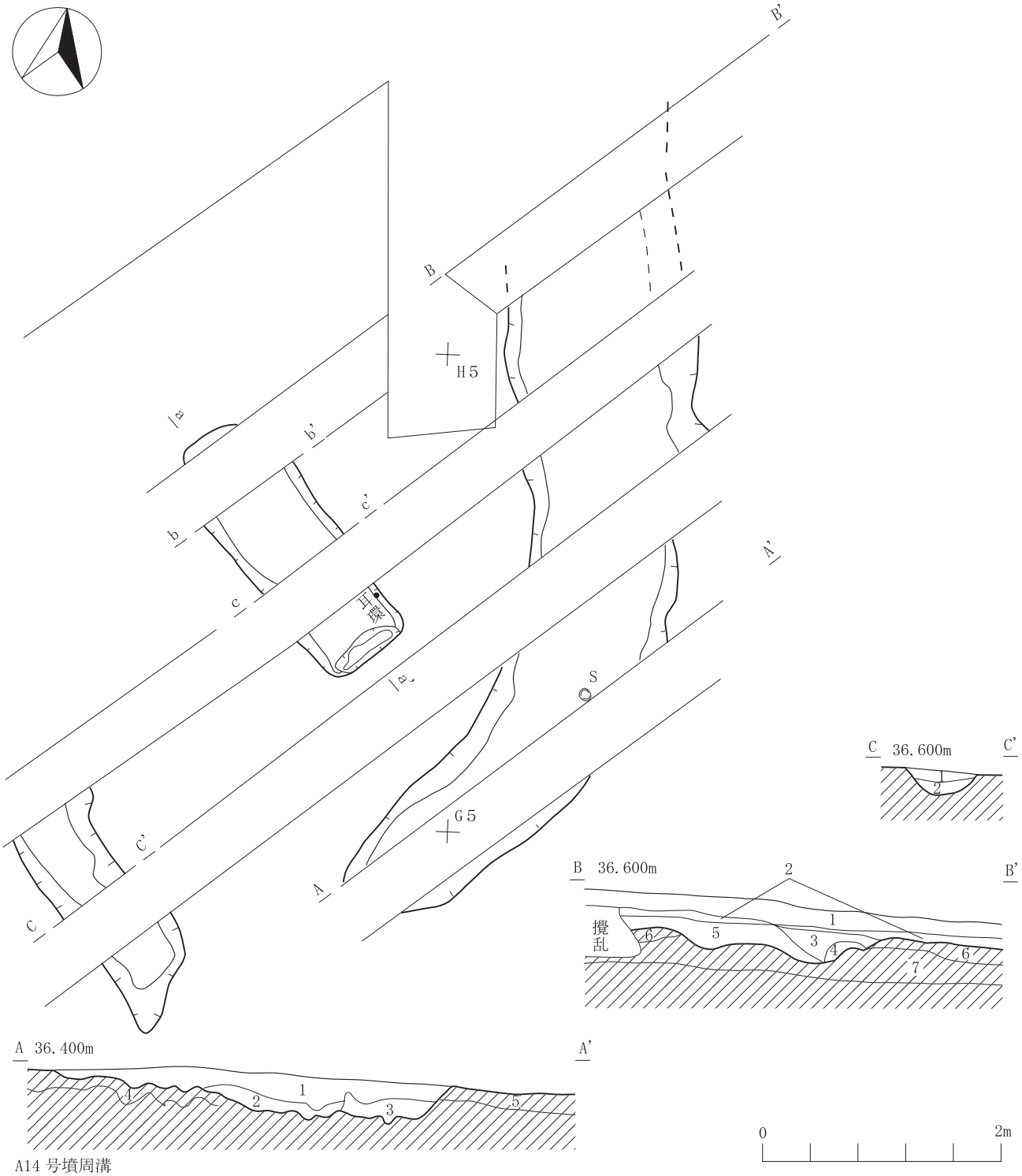
位置　2 トレンチ南端の N25 で確認した。現地表面からも 30 ～ 40cm の高まりとし認識出来たが、性格を明らかにするため一部にトレンチをかけた。南東側には A15 号墳が現況地表面で確認できるが、こちらは保全のためトレンチを避けた。

墳丘　周溝の立ち上がりから調査区範囲内の墳丘頂部まで 50cm である。盛土とみられる層をもつが、すべて黒色土である。

周溝　上面確認のみであるが幅 70cm の落ち込みとして確認できた。周溝の規模は、主体部と予想される落ち込みを中心とすれば直径 8m の円墳と推定される。

小結　出土遺物等はなく、時期を推定できる手がかりは得られなかった。しかし盛土によってマウンドがつくられ、また地表上から位置を予想できる場所付近で周溝を検出、中心部で主体部の可能性の高い落ち込みがあり、末期古墳であることが確認されものと考える。時期は阿光坊・天神山遺跡で確認されている幅におさまるものと予想される。

原典 H



A14 号墳周溝

A-A'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒少量 浮石粒微量含む しまり強
第2層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	黒色土(10YR1.7/1)多量 暗褐色土(10YR3/3)多量 砂粒少量含む しまり強
第3層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	黒色土(10YR1.7/1)少量 砂粒少量 浮石粒微量含む しまり強
第4層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒(中撹浮石)少量 浮石粒微量含む しまり強
第5層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒微量 浮石粒微量含む しまり強

B-B'

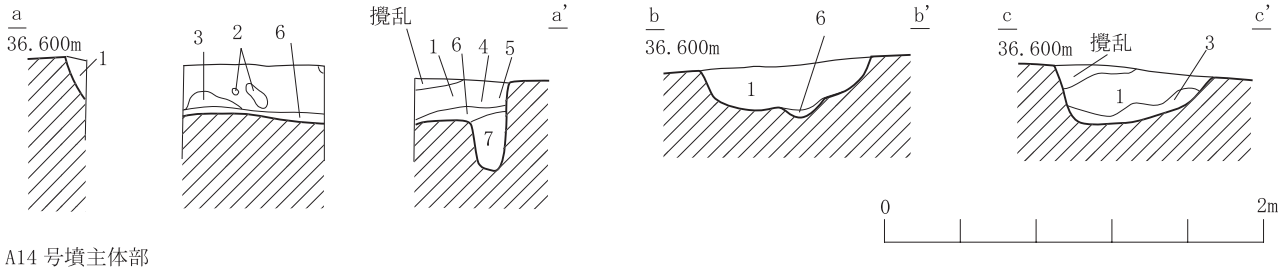
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層				耕作土
第2層	黒色土	10YR2/1	シルト	耕作土 トレンチャー起因の攪乱含む しまり強
第3層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	黒色土(10YR2/1)少量 砂粒少量含む しまり強
第4層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒微量 砂粒多量含む しまり強
第5層	黒色土	10YR2/1	シルト	黒色土(10YR1.7/1)多量 砂粒多量含む しまり強
第6層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒(中撹浮石)少量含む しまり強
第7層	褐色土	10YR4/4	砂	中撹浮石層

第 41 図　A14 号墳 (1)

A14 号墳周溝

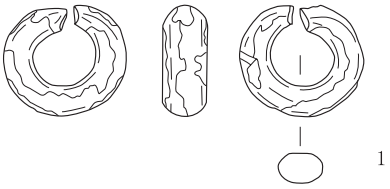
C-C'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒微量含む しまり強
第2層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒少量 ローム粒少量含む しまり強



A14 号墳主体部

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒微量 浮石粒微量 砂粒少量含む しまり強
第2層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒多量含む しまり弱 根の撹乱？
第3層	黒色土	10YR2/1	シルト	浮石粒微量 砂粒少量 しまり弱
第4層	黒色土	10YR2/1	シルト	黒褐色土(10YR2/2)少量 砂粒少量含む しまり弱
第5層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒多量含む しまりやや弱
第6層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒多量含む しまり強 主体部の床面
第7層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	黒色土(10YR2/1)多量 ローム粒 砂粒少量含む しまり弱



No.	器種	材質	層位	外径(mm)	最大幅(mm)	重さ(g)	備考
1	耳環	銅・銀	主体部1層	16.0	5.5	3.5	Gr.G4

第 42 図　A14 号墳 (2)

A17 号墳　（第 45 図　図版 9）

位置　2 トレンチ 024 で確認した。地表面ではマウンドは認識できないが、作成した地形図には周溝と思われるラインで等高線に屈折点がみられる。Ⅳ層上で溝状の落ち込みとして確認した。

墳丘　断面観察では、盛土層は確認されなかった。地山であるⅢ・Ⅳ層を掘り残している。8 層は位置から主体部の可能性がある。

周溝　トレンチにかかった部分のみ周溝を掘削した。堆積土は 3 層に分かれる。すべて黒色土であり、周囲からの流れ込みによる自然堆積とみられる。確認できた周溝から推定される規模は外径 5.6m、内径 4.7m の、比較的小型のものである。

小結　検出された部分から推定される周溝の大きさは、阿光坊古墳群のなかで最小である。A16 号墳と隣接し、保存環境は大きく違わないと推定されるが、A16 号墳はマウンドが観察でき、本例は地表から認識出来ない。両者の違いとして、一つには規模の大小を挙げることが出来るのではなかろうか。

原典 H

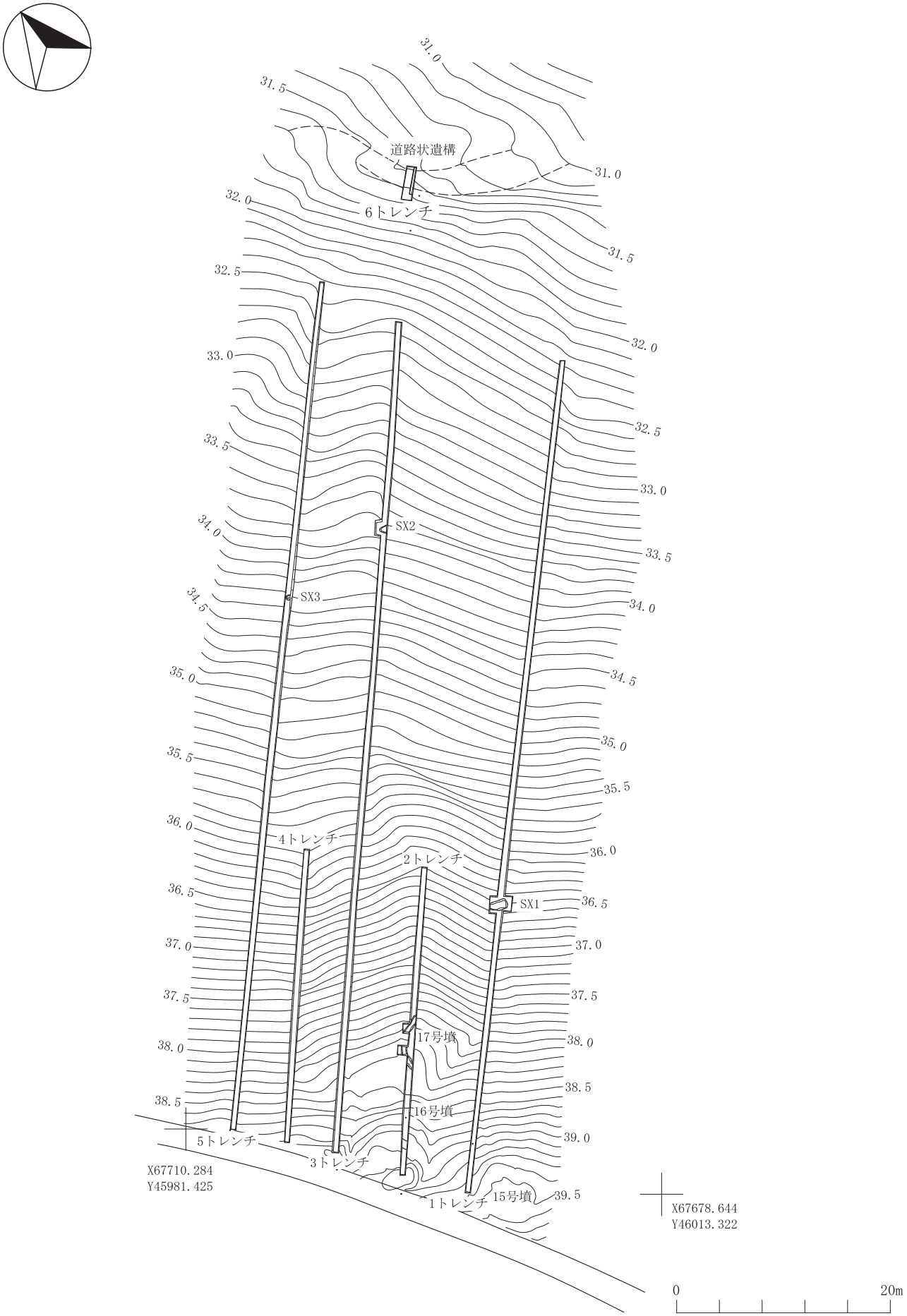
A18 号墳　（第 47 図）

位置　7トレンチ南端、I20 で黒色の落ち込みと火山灰の堆積により確認した。周辺を出来る限り拡張し、円弧状に遺構が伸びる点や、地表面の観察より、末期古墳であると考えられた。標高約 37m の地点である。

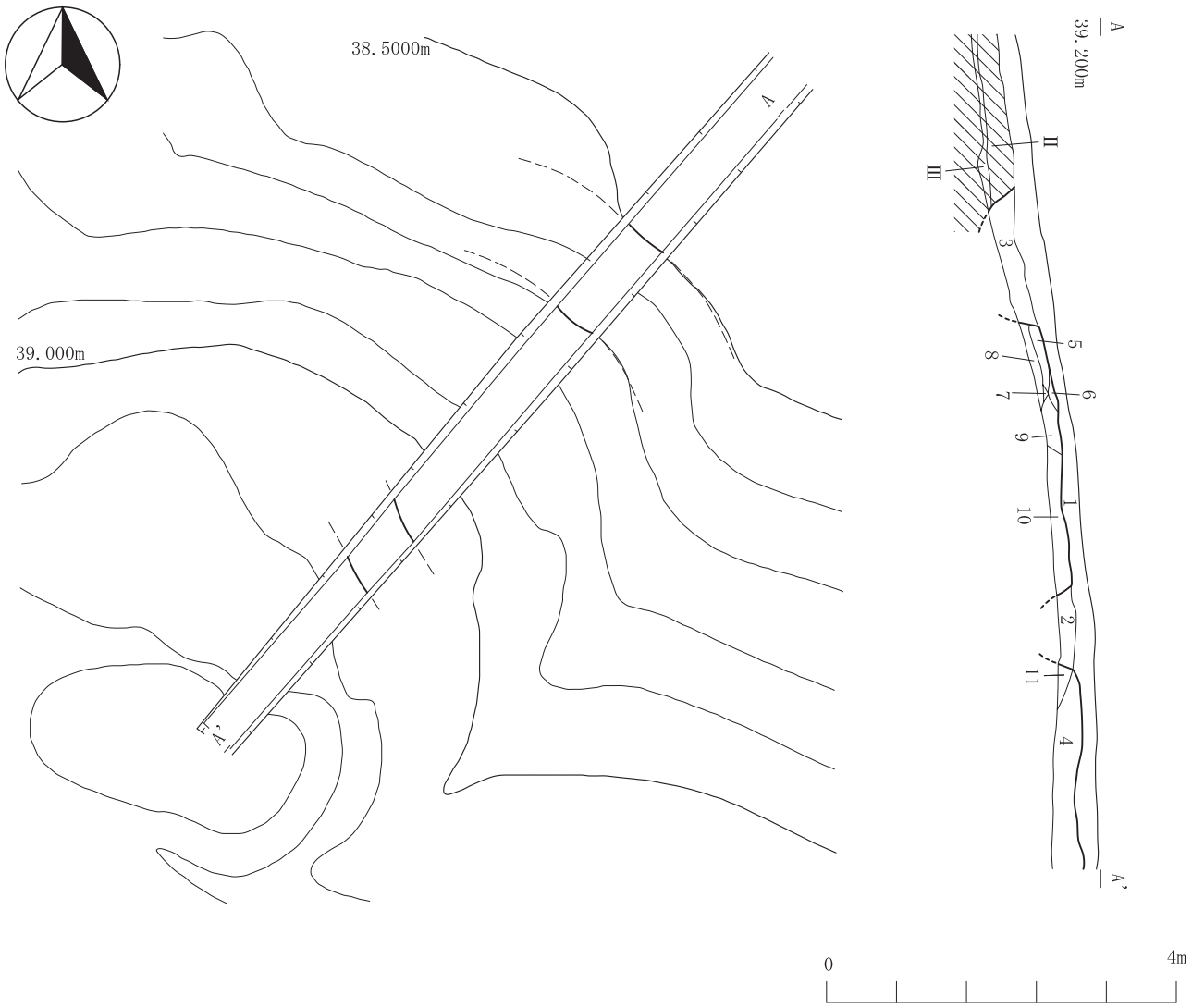
周溝　上面確認であるが、幅 1.2m の黒色の落ち込みとして確認した。確認できた範囲が部分的であるため規模の推定は出来ないが、確認した周溝からみて、西側に中心部をもつ末期古墳と考えられる。

小結　南西から北東に低くなる斜面には、本遺構より低位置には末期古墳が造られていないことが確認された。

原典 H



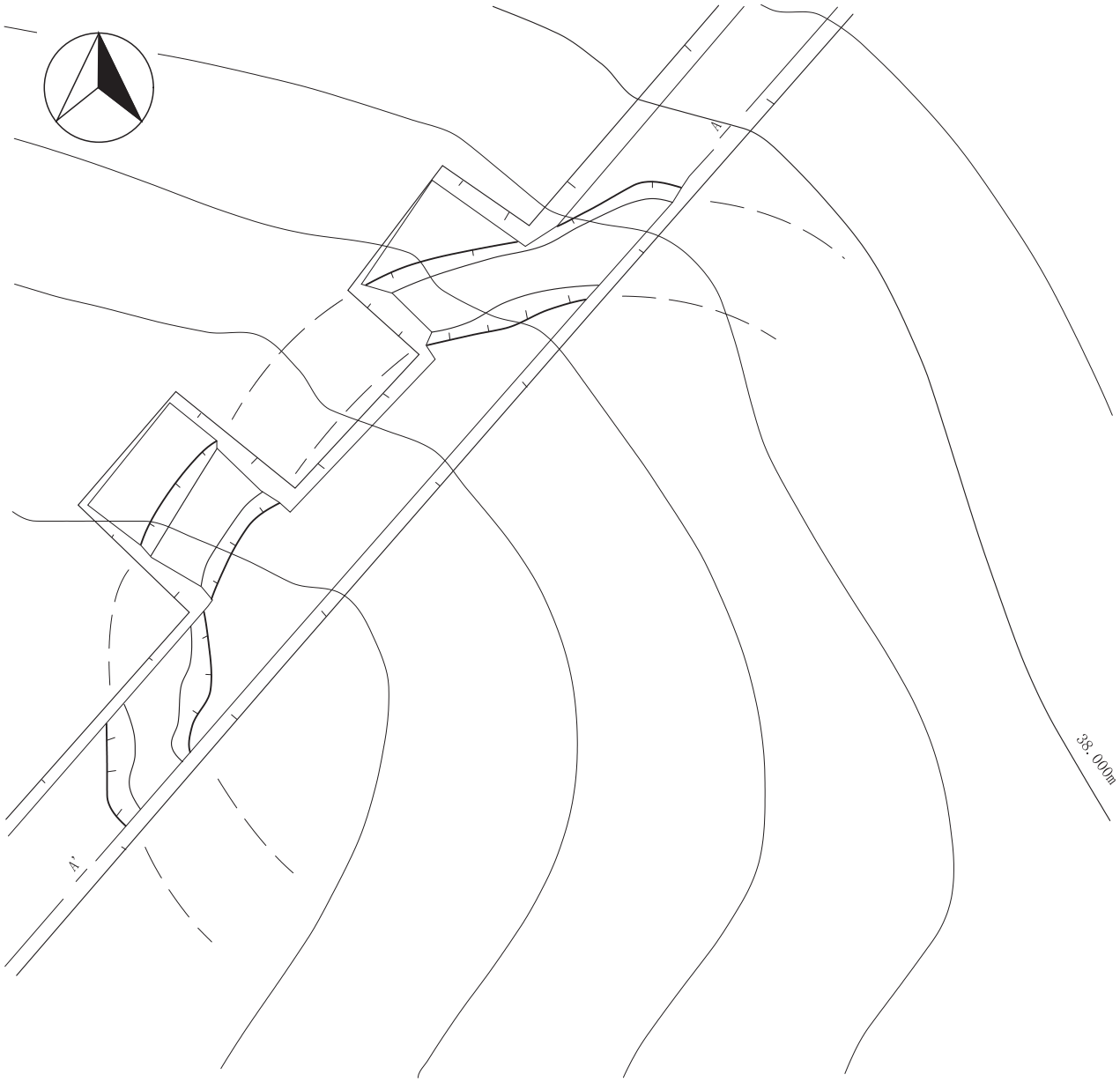
第 43 図　阿光坊遺跡トレンチ配置図 (1)

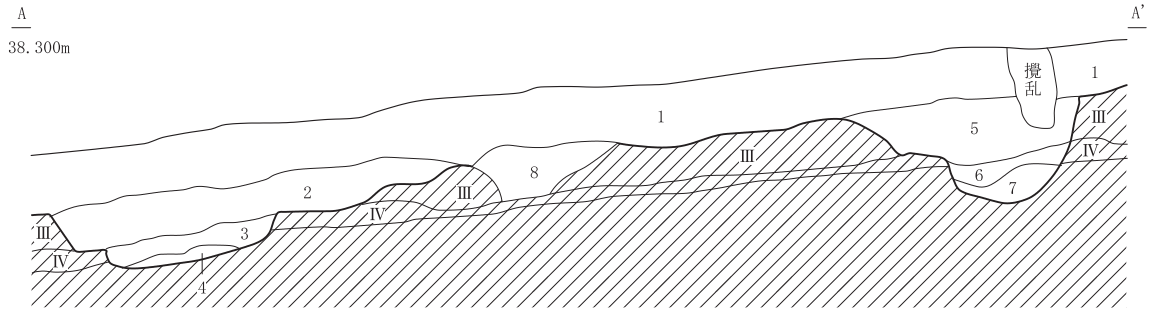


A16 号墳

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
１層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	表土層、しまり弱
２層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	主体部の可能性、しまりやや強
３層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	しまり弱
４層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	しまり強
５層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	しまり弱
６層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	しまり弱
７層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	しまり弱
８層	黒色土2/１(10YR)	シルト	砂粒少量含む、しまり強
９層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	しまり弱
10層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	しまり弱
11層	黒色土2/1(10YR)	シルト	砂粒少量含む、しまり強

第 44 図　A16 号墳



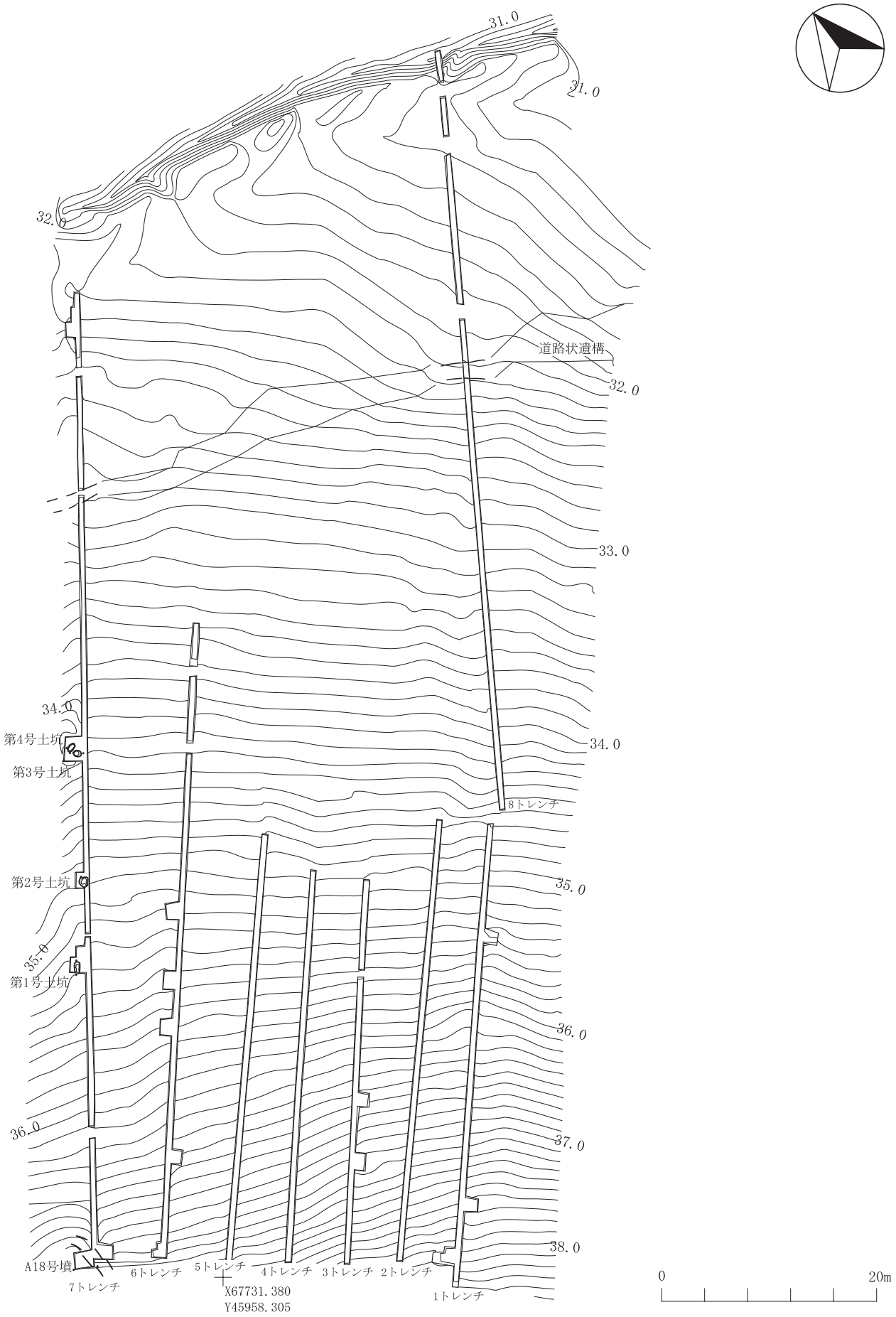


A17 号墳

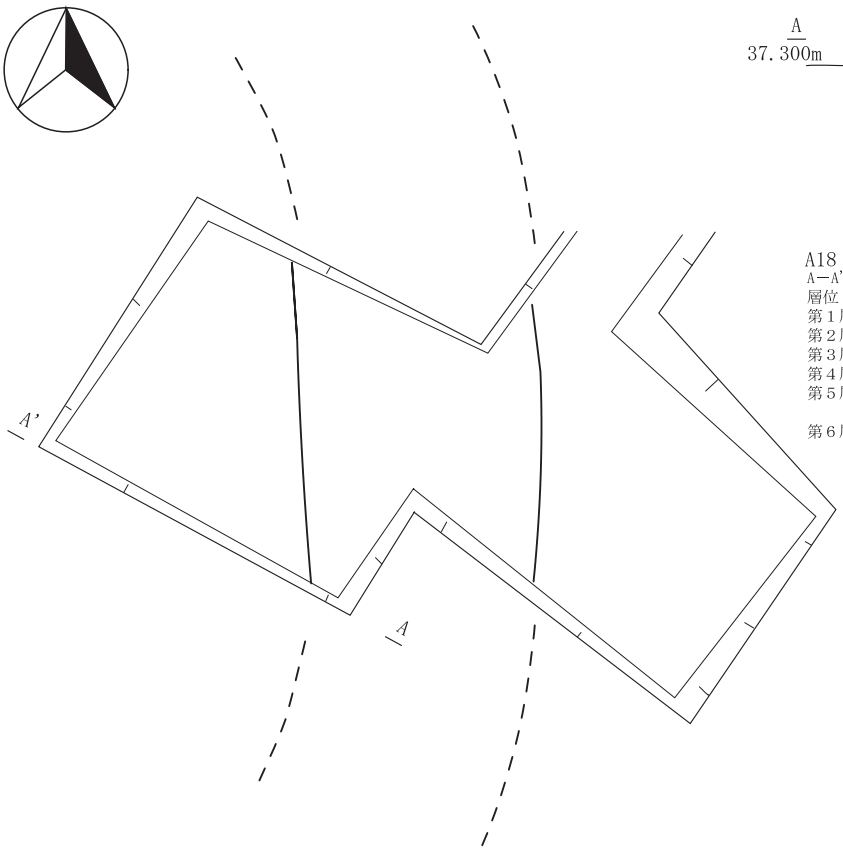
層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
１層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	表土層、やわらかい、しまり弱
２層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	黒褐色土2/2(10YR)微量含む、しまり強
３層	黒色土2/1(10YR)	シルト	砂粒少量、暗褐色3/4(10YR)のローム粒少量、黒褐色2/2(10YR)のロームブロックφ4cm含む、しまりやや強
４層	黒色土2/1(10YR)	シルト	砂粒少量、しまりやや弱(3層より弱)、砂粒は7層よりも多い
５層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	砂粒少量含む、ところどころがしまり弱だが全体的に強
６層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	砂粒少量、黒褐色土2/2(10YR)微量含む、かたくしまり強
７層	黒色土2/1(10YR)	シルト	砂粒多量含む、しまり弱(6層より弱)
８層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	砂粒少量含む、しまり弱(1層よりしまり強)

0　2m

第 45 図　A17 号墳



第 46 図　阿光坊遺跡トレンチ配置図 (2)



第 47 図　A18 号墳

a1 号土壙（第 48 図　図版 9）

位置　T28 に位置する。

確認面　Ⅲ層で確認した。

プラン　隅丸長方形を呈する。規模は長軸 1.9m、短軸 0.9m、確認面からの深さ 33 ～ 38cm である。主軸方向は N-46°　-W である。北西側底面には長さ 60cm、幅 20cm、深さ 15cm ほどの溝が掘り込まれている。また南東側も若干溝状になっている。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

原典 A　赤沼隆一　弘前大学学生

a2 号土壙（第 49 図　図版 9）

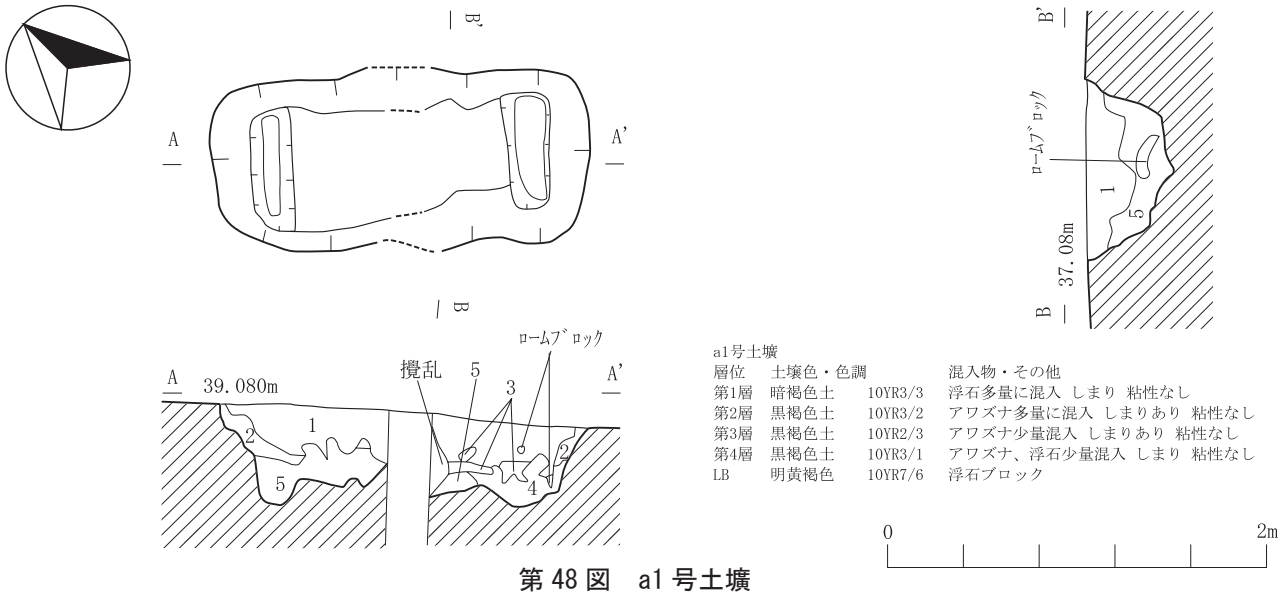
位置　U32 で検出した。

確認面　基本層序Ⅲ層上面で確認した。

平面形・規模　周溝をともなわない土壙で長軸 2.15m、短軸 0.95m の不整長方形である。埋葬部は長軸 1.6m、短軸 0.95m、張り出しは長軸 0.55m である。確認面からの深さは約 20cm である。底面には周溝が巡り、幅 7 ～ 20cm である。東側（張り出し側）の溝は 34cm と深いが、他は 6 ～ 13cm である。主軸方向は N-68°　-W である。

出土遺物　土壙東側埋葬部と張り出し部の境の堆積土 1 層から、完形の須恵器の平瓶（第 49 図 1　図版 18）が出土した。胴部上面は円形で、肩は丸みを帯びており横面は楕円形である。口縁は外傾して開く。胴部下端に回転ヘラケズリ調整、胴部中央から上にかけてカキメ調整が施される。胴部の外面上半部と口縁部の自然釉がみられる。口縁部割口には漆の痕跡が認められ、当時の口縁部を破損した際の修理に使われたと考えられる。須恵器平瓶は A11 号墳平瓶とともに県内では初めての出土である。

原典 C　大野　亨　八戸市博物館学芸員



a1号土壙

層位	土壌色・色調		混入物・その他
第1層	暗褐色土	10YR3/3	浮石多量に混入 しまり 粘性なし
第2層	黒褐色土	10YR3/2	アワズナ多量に混入 しまりあり 粘性なし
第3層	黒褐色土	10YR2/3	アワズナ少量混入 しまりあり 粘性なし
第4層	黒褐色土	10YR3/1	アワズナ、浮石少量混入 しまり 粘性なし
LB	明黄褐色	10YR7/6	浮石ブロック

0　2m

第 48 図　a1 号土壙

a3 号土壙（第 51・52 図　図版 9・10）

位置　W33 に設定したトレンチから大刀・鉄鏃が出土し、周囲を拡張することにより全体を把握した。Ⅲ層からⅣ層で確認した。

平面形・規模　周溝は周囲を拡張したが検出されなかった。周溝を持たない土壙墓と考えられる。中央と北側をトレンチャーで切られている。不整な長方形であり長軸 1.85m、短軸 0.93 ～ 1.10m、確認面からの深さは約 30cm である。底面に北側で一部途切れるが、幅 3 ～ 10cm、深さは 7 ～ 12cm の溝が検出された。また深さ 8 ～ 13.2cm のピット 4 個も確認された。また、底面で 48 × 146cm の範囲で堅くしまった層が確認された。主軸方向は N-52°　-W である。

堆積状況　黒色土を主とし、基本的には 2 層に分けられる。両層とも人為堆積と推定される。

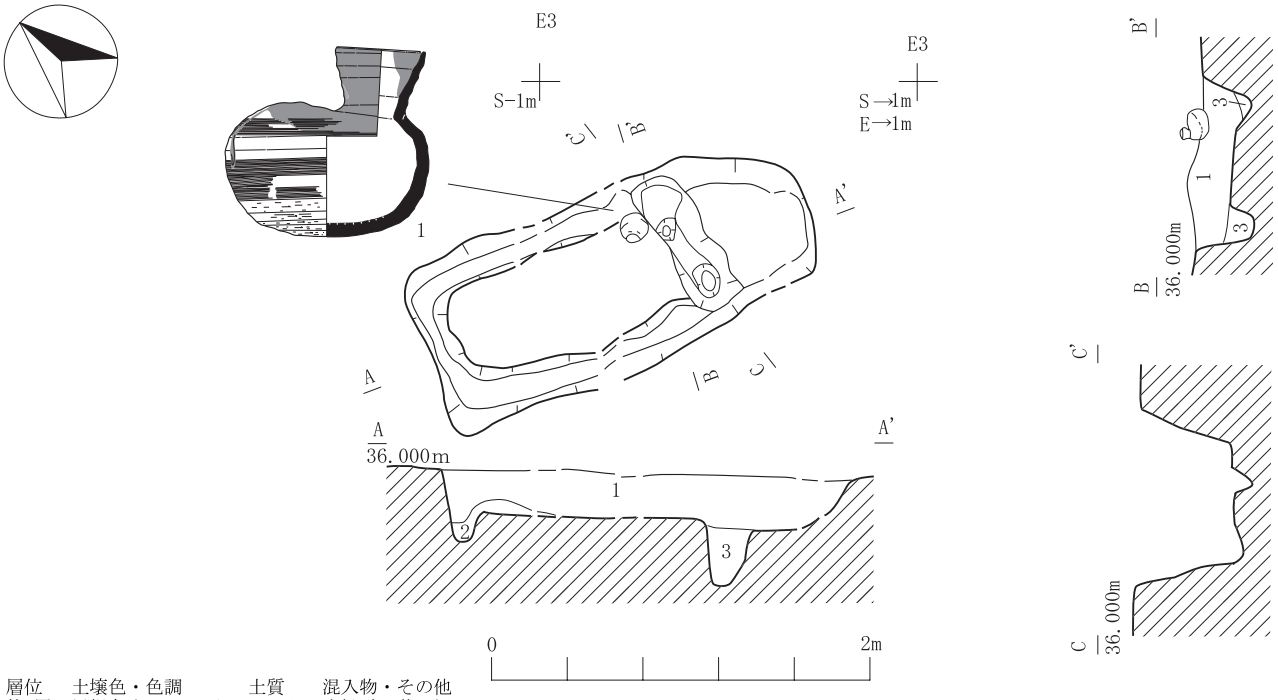
遺物の出土状況　鉄鏃 5 点といずれかの茎とみられる鉄製品 2 点、土師器坏 1 点、琥珀玉 1 点、大刀 1 点が出土している。いずれも土壙底面もしくは直上層からの出土である。

出土遺物　（第 52・53 図　図版 18）

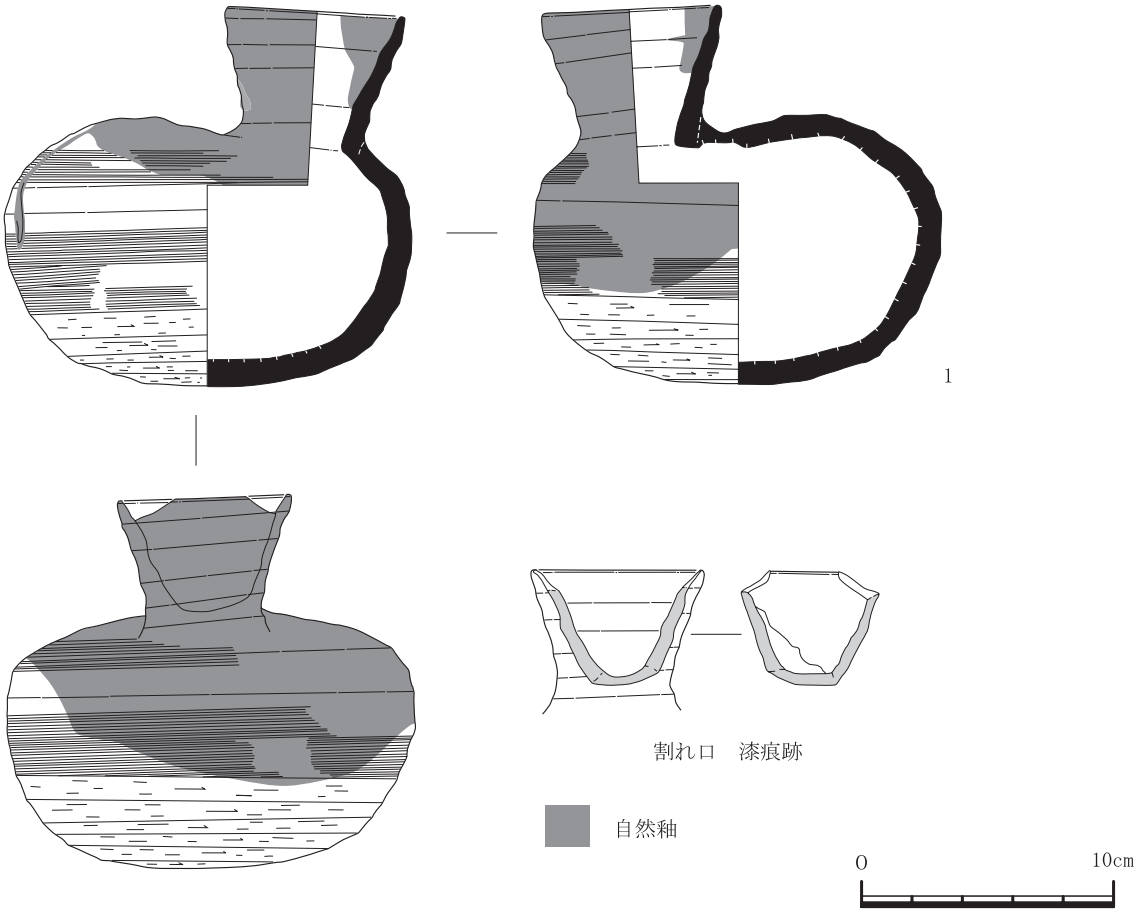
鉄鏃は有茎鏃 3 点、無茎鏃 2 点である。鎬のあるものはなく、全て三角形鏃で腸抉式である。3 は逆刺が重抉りとなっている。7 は木質が付着しており茎部と箆被が区別出来るが明瞭な関はみられない。8 は口径に対し器高の高い坏である。中心よりやや下方に溝が巡り、口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。内外面ともミガキが丁寧に施され、内面には黒色処理がなされている。9 は琥珀玉である。不整な楕円形を呈する。長径 1.4cm、短径 1.2cm、厚さ 0.9cm である。10 の大刀は、先端部が欠損し、柄も折れ、離れた場所から出土した。刀身は平棟平造である。表面に木質が付着しており、鞘を付着した状態と推定される。鞘元金具はみられない。内部は X 線写真の観察による。両関であり鎺に直に落し込まれる。鎺の中には鍔の筒金具がみられる。茎はやや反り先端に目釘穴がみられる。柄は粗めの紐で巻かれ、その上を漆等によって被覆されている。佩裏側では被膜が剥離し特に紐が良く観察され、鍔付近にやや太い紐を二重にまわし、それ以下を細い紐で螺旋状に巻く葛纏である。鎺、鍔とも断面倒卵形である。鍔の佩裏側に結ばれた紐が付着している。佩用のものか柄に巻いたものの端などとも考えられるが、両端が欠損しており用途は不明である。柄木は両側から当てられていると推定される。

小結　出土した坏が、宇部編年（宇部 1989）のⅡ群に属する。大刀の特徴は、両関であり、刀装具は断面が倒卵形である。柄と鎺の構造は鉄刀分類（菊地 1993）R1 類に分類され、また倒卵形の鍔は 7 世紀後半には崩れるとされる。その他の拵があきらかではないため、概ね 7 世紀後半以前のものと推定される。鉄鏃の形態は、A1 号墳・A5 号墳出土資料と酷似し、大きな時間差はないものと見られる。近年宇部編年Ⅱの時期を当初の 7 世紀後半から 8 世紀初頭というものを 7 世紀中葉以降 7 世紀代におさまるとの修正がみられ（宇部 2000 他）、これらから、本遺構は 7 世紀中葉から後半のものと考えられる。

原典 E

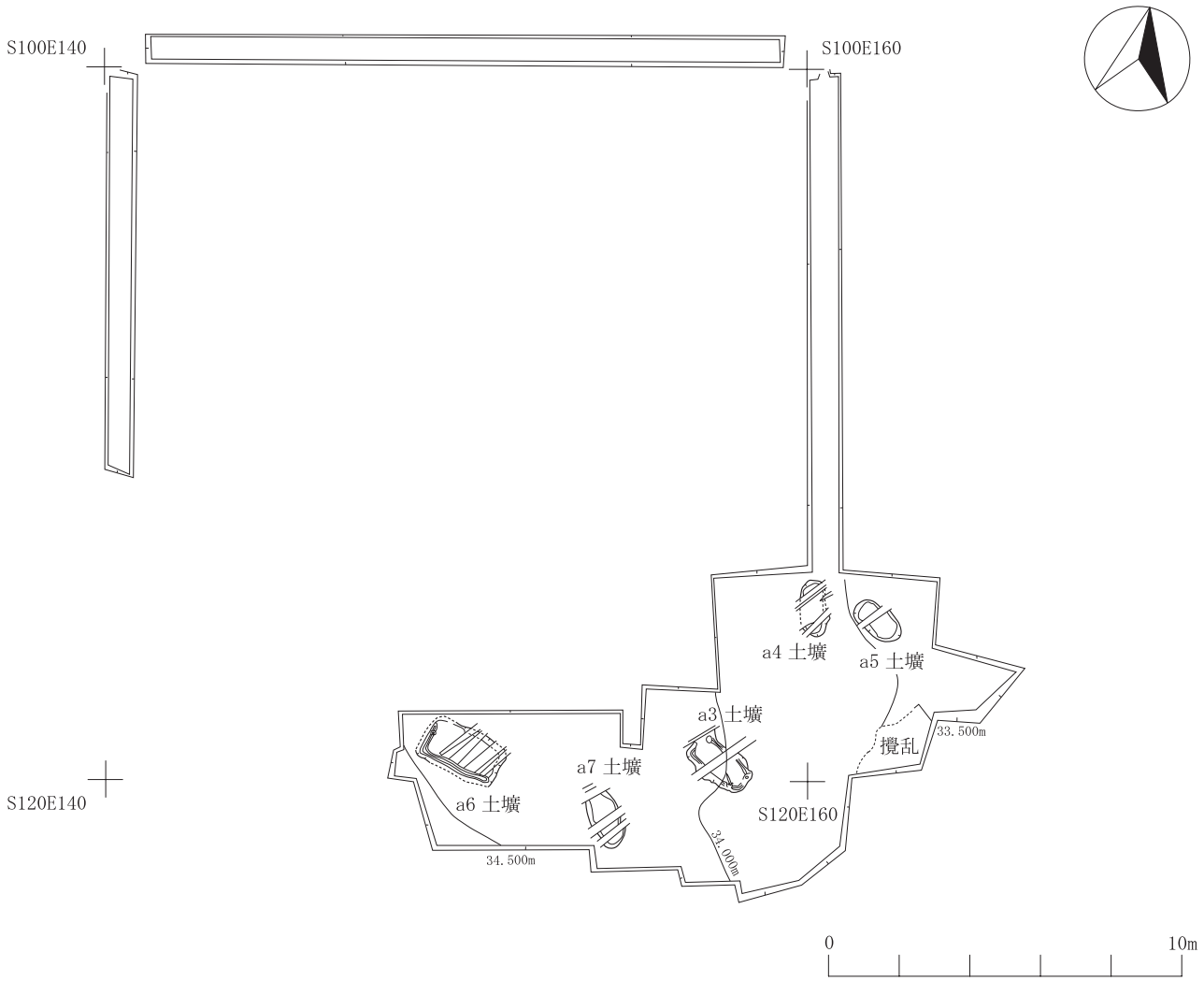


層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	中撥浮石若干混入
第2層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	黄褐色ロームを多量に含む
第3層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	黄褐色ロームを含む



番号	種類	層位	特　徴
1	平瓶	上層	外面:ロクロ調整→胴部上半カキメ 下半に回転ヘラケズリ 口径7.0cm 頸部径5.0cm 胴部(最大径)16.1cm

第 49 図　a2 号土壙



第 50 図　a3 ～ a7 号土壙配置図

a4 号土壙　（第 54 図　図版 10）

位置　X32（S100E160 ～ S120E160 トレンチ）において、Ⅳ層で確認した。

平面形・規模　長径 1.55m、短径 0.8m の長楕円形を呈する。床面積は 0.57m^2（トレンチャー部分含む）で、主軸方向は N-14°　-W である。

堆積状況　堆積土は 2 層に分けられ、いずれも黒色土である。

壁　壁の高さは残存する部分で 15 ～ 27cm であり、外傾して直線的に立ち上がる。

小結　土壙墓であると考えられるが、ほとんどがトレンチャーによって切られ、出土遺物もないため、時期は不明である。

原典 E

a5 号土壙　（第 54 図　図版 11）

位置　X32（S100E160 ～ S120E160 トレンチの東側）において、Ⅳ層で確認した。

平面形・規模　長径 1.46m、短径 0.83m の長楕円形を呈する。床面積は 0.65m^2（トレンチャー部分含む）で、主軸方向は N-59°　-W である。

堆積状況　堆積土は黒色土 1 層のみであった。

壁　壁の高さは 9.4 ～ 19.5cm で、外傾しながら立ち上がる。

床面　床面は凹凸があり、土壙の中心から北側にかけて盛り上がりがある。

小結　土壙墓であると考えられるが、a4 号土壙同様、年代を特定できる出土遺物はない。

原典 E

a6 号土壙（第 54 図　図版 11）

位置　W33(S120E140 ～ S120E160 トレンチの北側) において、Ⅳ層で確認した。

平面形・規模　周溝を伴わない土壙墓で、長軸 2.37m、短軸 1.38m の長方形を呈する。床面に幅 10 ～ 18cm、深さ 5 ～ 9cm の溝を西と南側で L 字型に検出し、西側の溝内にピットが確認された。北側にも溝の一部を確認できたが、トレンチャーによって不明瞭な部分が多かった。床面積は 1.92m^2 で、主軸方向は N-71°　-W である。

壁　壁の高さは 35 ～ 55cm で垂直に立ち上がる。

床面　床面は凹凸があり、南東側にかけて高くなる。

堆積状況　トレンチャーで攪乱のため、1 層で黒色土のみ確認。

出土遺物　なし。

小結　土壙墓であると考えられるが、ほとんどがトレンチャーによって切られ、出土遺物もないため、時期については不明である。

原典 E

a7 号土壙　（第 55 図　図版 11・12）

位置　Ⅲ層上で確認した。W3(S120E160 から西に設定したトレンチ南側) で確認された。

平面形・規模　周溝を持たない土壙墓と考えられる。数本のトレンチャーで切られている。不整な長楕円形である。端部を切られているが、確認出来た土壙の規模は長径 1.55m、短径 0.9m、確認面からの深さは 16 ～ 32cm である。主軸方向は N-44°　-W である。

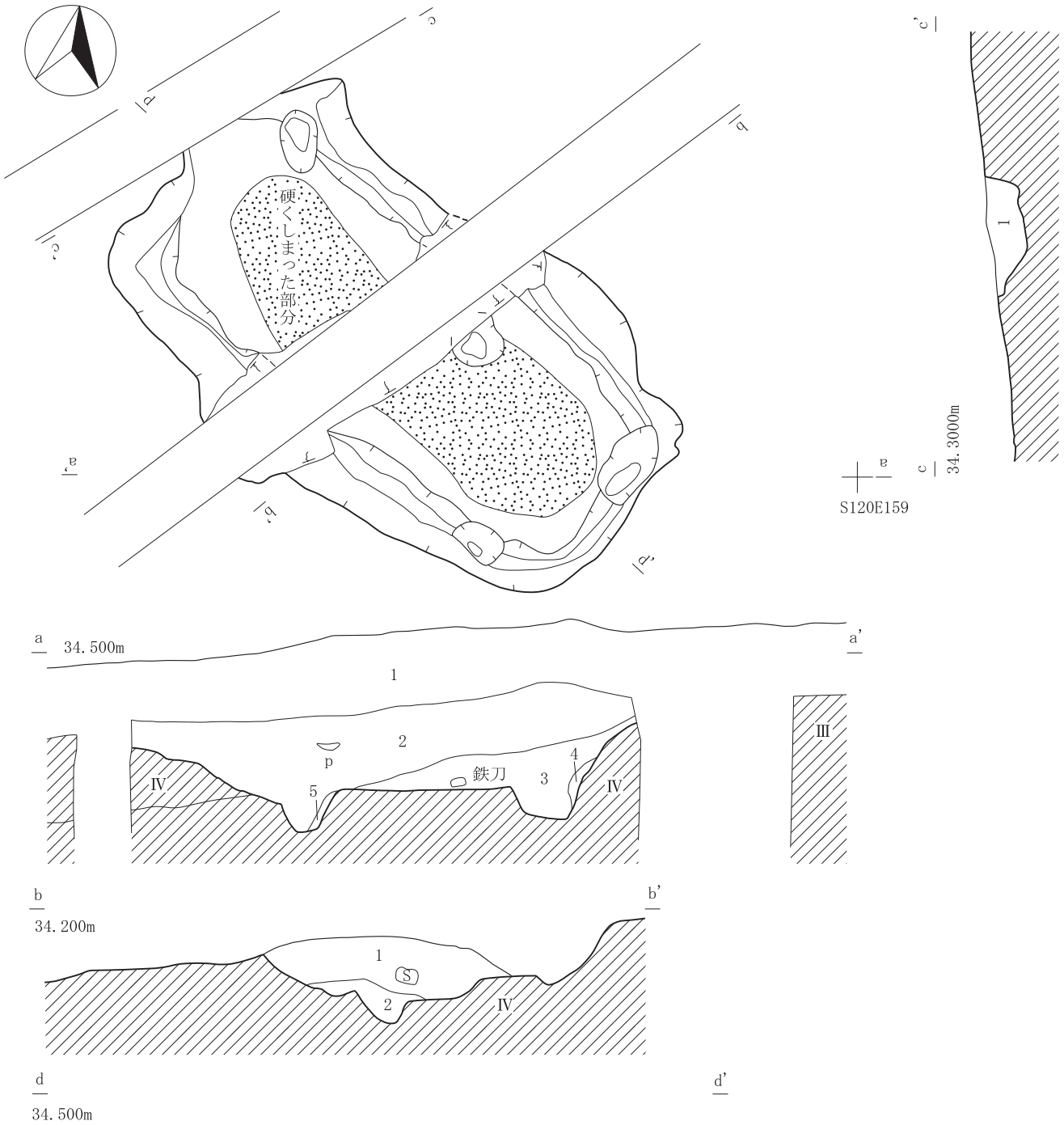
堆積状況　黒色土を主とする。5 層は貼床と見られる堅い層であった。

出土遺物　(第 55 図　図版 18)

出土遺物は鉄斧のみであり、2 層上面からの出土である。貼床上からは 17.9cm 浮いている。小型で柄との装着部が袋状となるものである。表面以外は X 線写真を用いて観察した。装着部と刃部との境にくびれが見られる。

小結　平面形が阿光坊遺跡で今まで知られているものと異なるものの、副葬されたとみられる鉄斧の出土や貼床の存在から墓壙とみて差し支えないものと考える。鉄斧の形態は A7・8 号墳出土のものと類似するが、刃部と装着部との境が明瞭である。その他年代を推定する資料がないため 7 世紀中葉から後半のものと推定するが、平面形が異なることからそれに前後する可能性も考えられる。

原典 E



a3号土壙　a－a′

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層				耕作土、トレンチャー
第2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒含む
第3層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒含む、上層より明るい
第4層	黒色土	10YR2/1	シルト	3層より明るい、砂粒多量含む
第5層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒含む

a3号土壙　b－b′

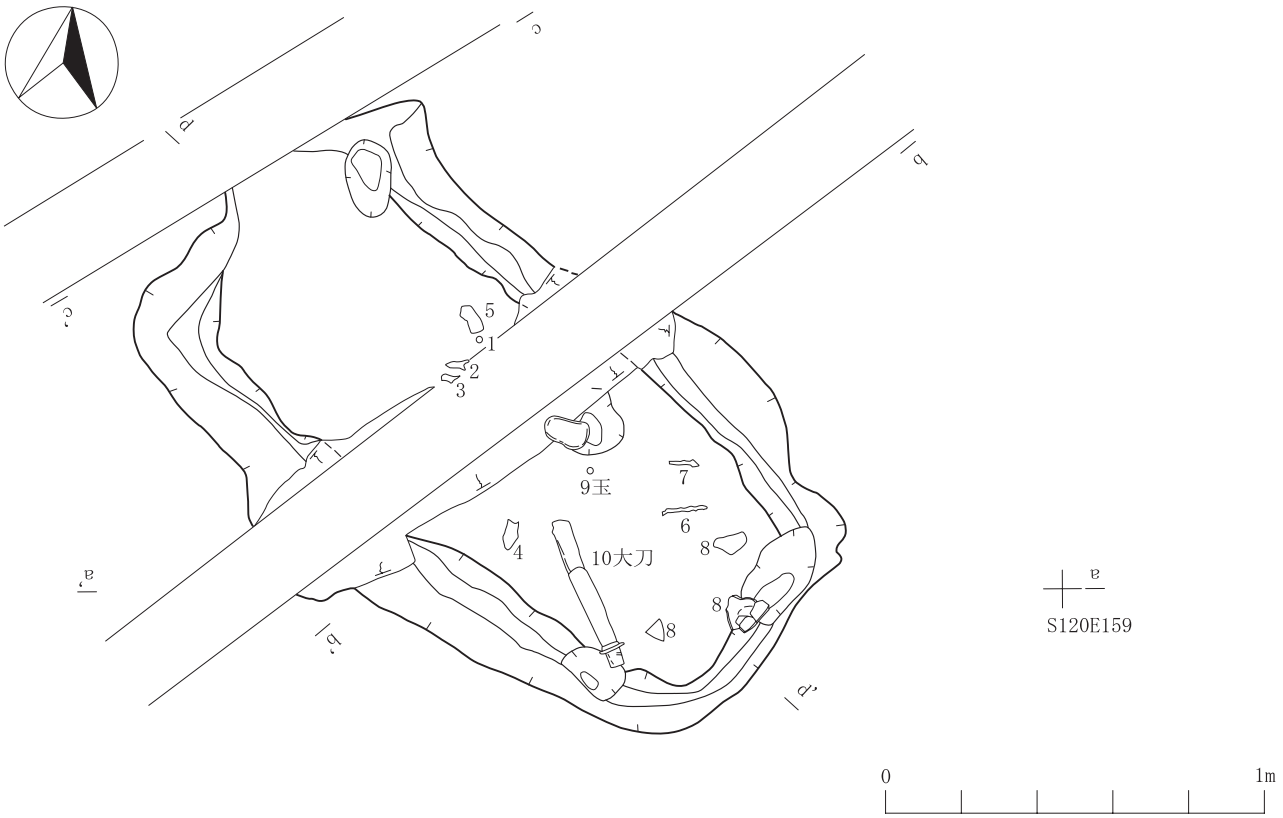
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	a－a′ の2層、砂粒含む
第2層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む、粘性有り

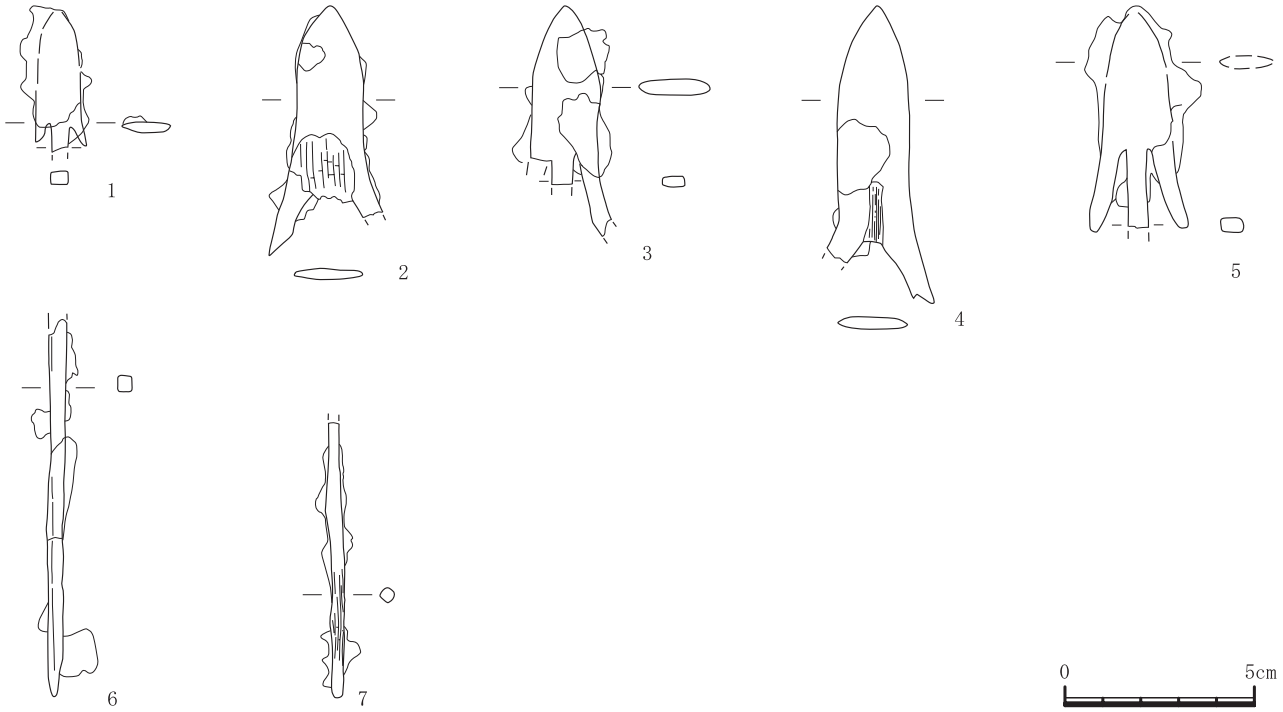
a3号土壙　c－c′

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	a－a′ の2層
第2層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒含む(中掀浮石層の崩落土)

0　1m

第51図　a3号土壙(1)

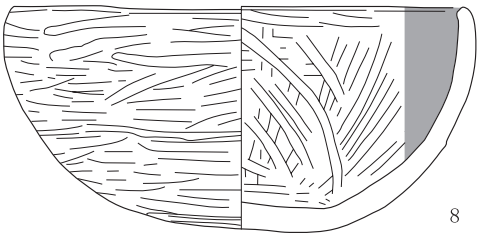


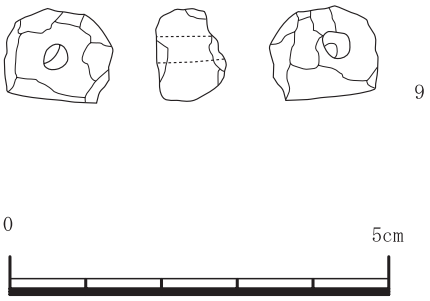


A3号土壙

番号	出土位置	層位	種類（鏃身の形）	全長(cm)	鏃身部			頸部			F No.
					長(cm)	巾(cm)	厚(cm)	長(cm)	被部巾(cm)	茎部巾(cm)	
1	主体部	－	腸抉式	(3.7以上)	3.6	1.4	0.3	(0.7以上)	(0.7以上)	－	F1
2	主体部	3層	腸抉式	6.6	6.6	2.7	0.3	－	－	－	F2
3	主体部	3層	腸抉式	6.1	6.1	1.9	0.5	(0.9以上)	(0.9以上)	－	F3
4	主体部	－	腸抉式	7.8	7.8	2.5	0.3	－	－	－	F12
5	主体部	－	腸抉式	6.0	6.0	2.6	0.4	(2.0以上)	(2.0以上)	－	F7
6	主体部	－	－	－	－	－	－	(9.9以上)	(9.9以上)	－	F10
7	主体部	－	－	－	－	－	－	(7.3以上)	(3.7以上)	(3.6以上)	F11

第52図　a3号土壙(2)

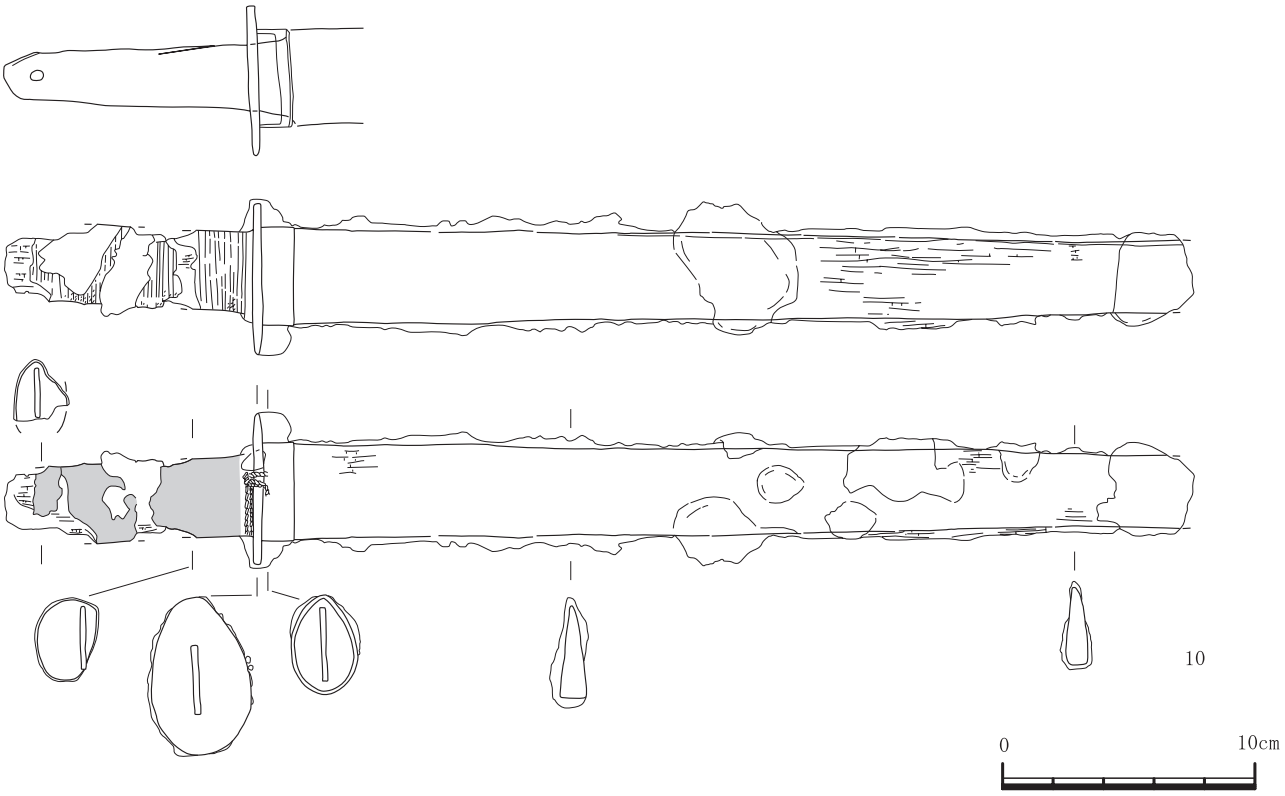




a3号土壙

No.	層位	器種	種類	口径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	備考
8	3層	坏	土師器	11.9	5.9	ミガキ	ミガキ→黒色処理	P1

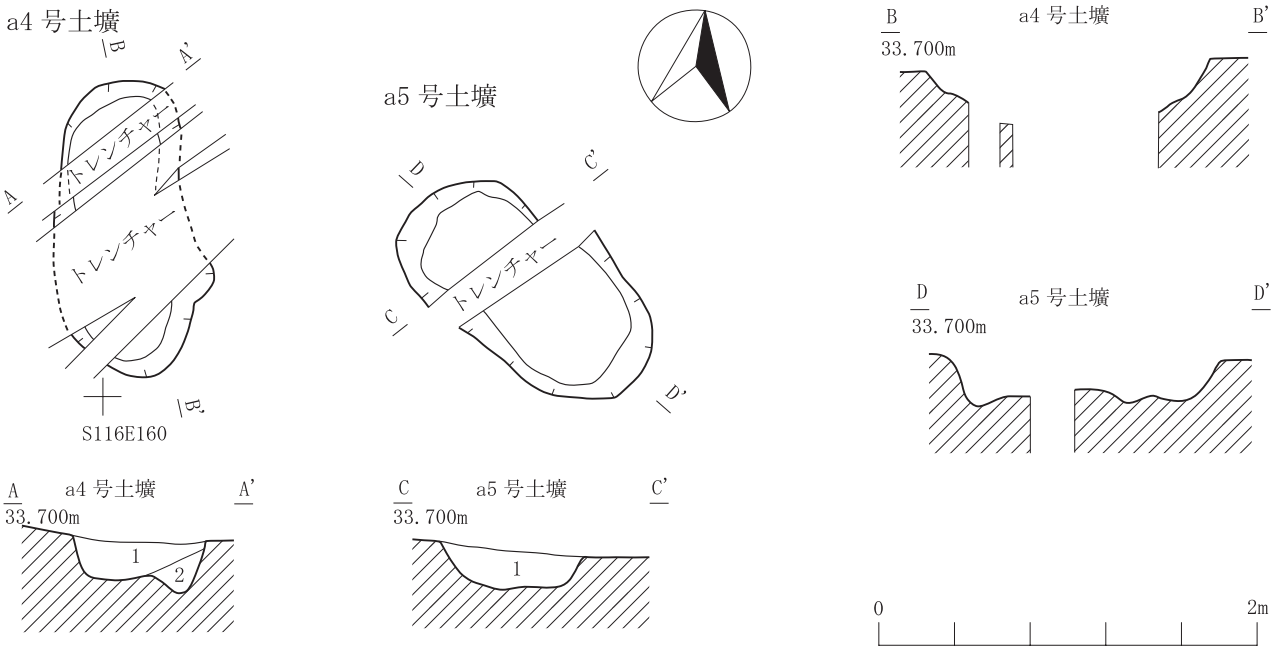
No.	層　位	機　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
9	覆土	琥珀玉	12.5	(14.5)	(9.0)	(0.8)



a3号土壙

番号	器種	全長(cm)	刀身長(cm)	茎長(cm)	元巾(cm)	重ね(cm)	鍔長(cm)	鍔巾(cm)	鍔重ね(cm)	全反り	反り
10	直刀	(47.0以上)	(35.6以上)	(11.4)	3.9	1.1	6.1	4.0	0.5	―	―

第53図　a3号土壙(3)

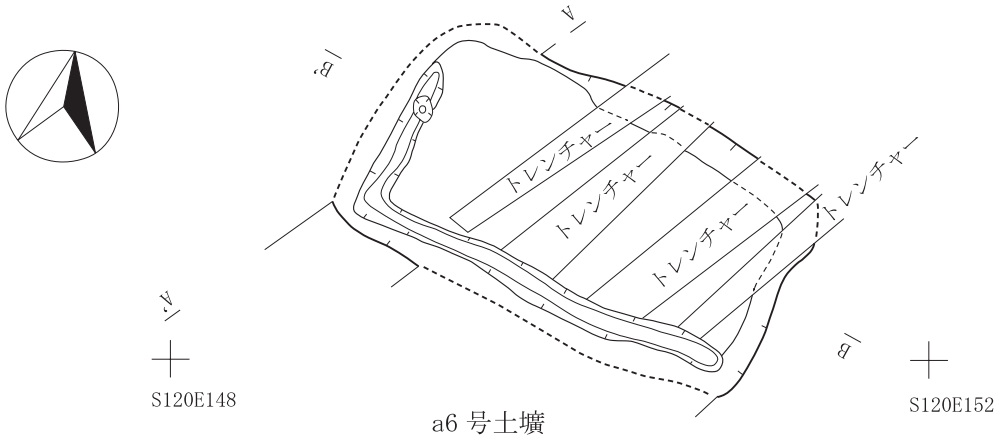


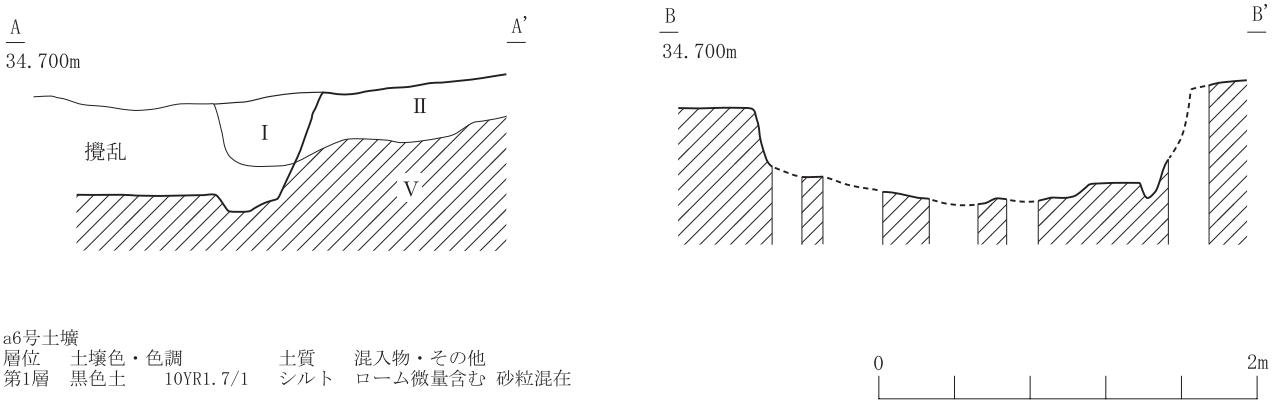
a4号土壙

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒・浮石粒少量 黒色(10YR2/1)ブロック含む しまり強
第2層	黒色土	10YR2/1	シルト	浮石粒多量 褐色(10YR4/4)小量含む しまり強

a5号土壙

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第１層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒少量 浮石粒微量 しまり強 下方に黒色(10YR2/1)少量含む

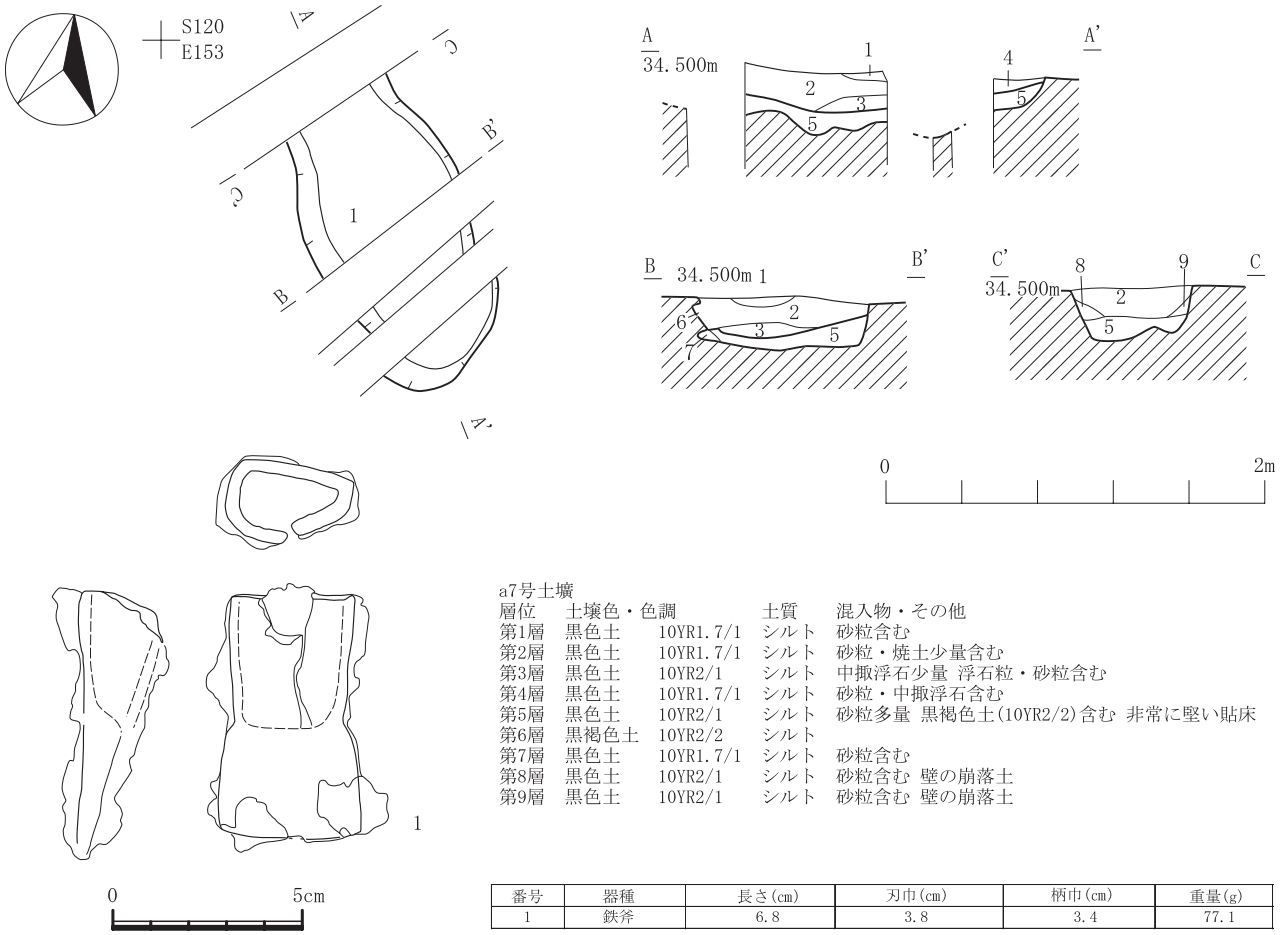




a6号土壙

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム微量含む 砂粒混在

第 54 図　a4 ～ a6 号土壙



a7号土壙

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒含む
第2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒・焼土少量含む
第3層	黒色土	10YR2/1	シルト	中撥浮石少量 浮石粒・砂粒含む
第4層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒・中撥浮石含む
第5層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒多量 黒褐色土(10YR2/2)含む 非常に堅い貼床
第6層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	
第7層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒含む
第8層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む 壁の崩落土
第9層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む 壁の崩落土

番号	器種	長さ(cm)	刃巾(cm)	柄巾(cm)	重量(g)
1	鉄斧	6.8	3.8	3.4	77.1

第 55 図　a7 号土壙

第 1 号溝　（第 56 図　図版 12）

位置　斜面がゆるやかになり、やや平坦になる地点に位置する。北東約 30m には西から東に向かって小川が流れる。Ⅳ層上で確認した。

平面形・規模　Z22 付近のトレンチで火山灰を確認し、周辺を拡張したところ直線的に続く様子が見られたため、調査区北西・南東側にもトレンチを設定したところ、連続する溝であることが分かった。幅 0.8 ～ 1.8m、深さ 9 ～ 25cm、長さは両端とも調査区外にのびるものと考えられ、本調査区内で 18m であった。

堆積状況　南西から北東にかけて傾斜する丘陵の谷部分に位置するため流れ込みが多いのか、あるいは耕作が深くまで及んだためか明瞭な立ち上がりは把握できなかった。1・2 層に分けられ覆土はしまりが強く、1 層上面に火山灰がまばらに見られた。

出土遺物　なし。

小結　確認されている最も近い遺構と 50m 以上離れており、末期古墳群との関連は不明である。

原典 F

第 2 号溝（第 57 図　図版 13）

位置　U29 を中心に、耕作土を除去したⅡ層上面で土器細片が出土し、トレンチャー跡を利用した断面観察を併用して確認した。

規模　幅 0.7 ～ 1.3m、確認面からの深さは 25 ～ 30cm であった。直線的な印象を受け、南東側へ続く様子が観察された。

出土遺物　耕作により砕かれ細片となったもので図示しないが、内外面ミガキを施す甕破片と推定される。

小結　第 7 図から配置を見ると、A9 号墳の「弧状の周溝」と報告された溝、平成 2 年度にトレンチで確認された溝と連続する可能性が考えられた。また A14 号墳西部にも不明瞭ながら溝状の遺構が確認され

ている。A14 号墳周溝は西側がこの溝を避けるような形で途切れる。しかし「弧状の周溝」からは供献されたと見られる土器が出土しているなど、末期古墳に伴う可能性も否定出来ない。これらから、A14 号墳や A9 号墳が造営される前に存在した溝、いずれかの末期古墳の周溝である二つの可能性が考えられる。

原典 F

道路状遺構（第 57 図　図版 12）

位置　南西から北東へ傾斜する斜面が、やや緩やかになる変換点に位置する。地表面に段が見られ、遺構が認識できる。本遺構の堆積状況等を確認するためにトレンチを設定した。遺構の方向の延長線上には、第 1 号溝があり、これに連続する遺構であろう。

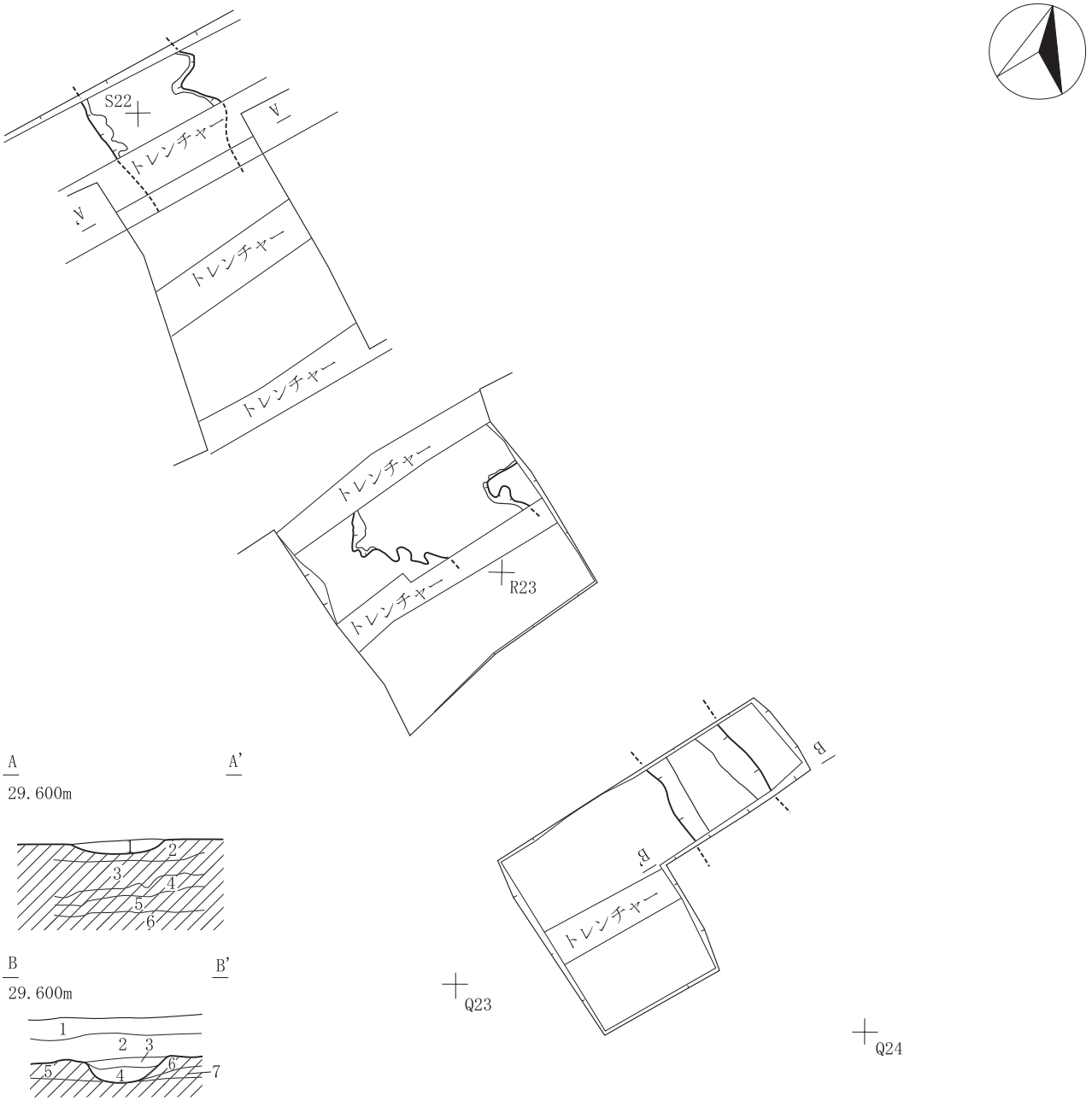
平面形・規模　確認面での幅は 1.7m、断面での立ち上がりの幅は 2.2m である。現況の測量図で、調査区の東端から北西端まで続いている様子が観察される。第 1 号溝の西端から 60m 西に位置している。

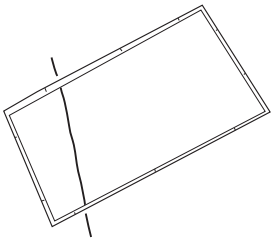
堆積状況　4 層の色調から B-Tm と推定される火山灰は降下当時窪んでいたため堆積・残存したものである。本遺構の堆積状況の観察では、4 層以下が大変しまりが強いのが特徴的である。6 層は 4 層の下に連続し、右側の遺構外と考えられる部分は通常のしまりで、4 層の下では非常にしまりが強いものであった。6 層は本来基本層序Ⅱ層にあたり、8 層はⅣ・Ⅴ層の混層とみられる。これらからは、掘削によって窪んだのではなく、圧迫されてそれぞれの層が薄くなった結果、溝状になったものと推測される。ただし 5 層はしまりが弱く、時間的な空白か、加圧が均質でないなどが想定される。第 1 号溝と現況地表面で確認できる段からみて、この圧迫は歩行によってなされたと考えるのが自然であり、道路状遺構とした。また、火山灰が堆積しているのはそれ以前に道として使用されていたことを示し、さらに 4 層自体のしまりも強いことから、火山灰堆積後も一定期間使用されたことを物語る。

小結　第 1 号溝とあわせ現在総延長 100m 以上続くとみられる。10 世紀前半代に降下したと考えられている火山灰からどの程度さかのぼれるかは不明であるが、谷を上りきったところには十三森 (2) 遺跡があり、関連に注目したい。

原典 H

遺構外出土遺物　（第 58 ～ 60 図　図版 18）





A-A'

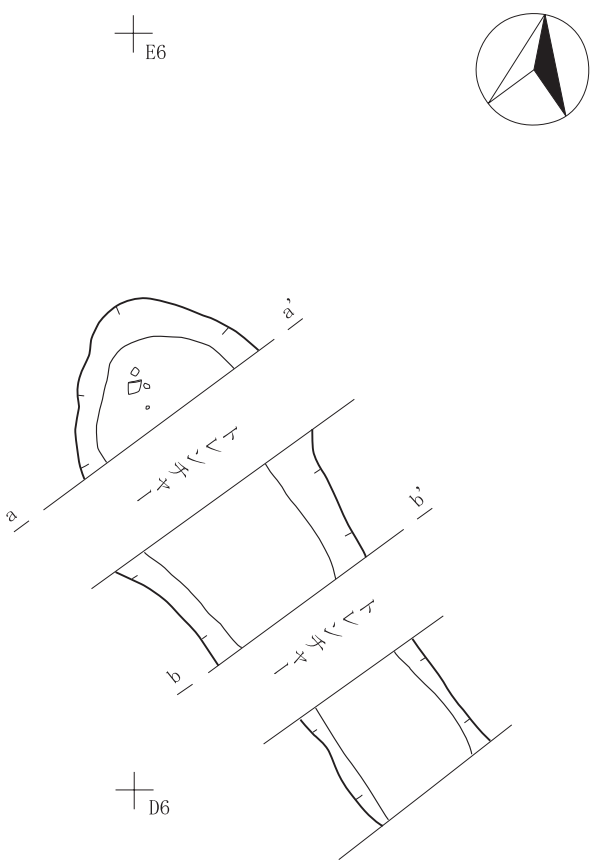
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR2/1	シルト	白頭山火山灰(2.5Y5/6)中撥浮石含む しまりやや強
第2層	褐色土	10YR4/6	砂	中撥浮石層 黒色土ﾌﾞﾛｯｸ含む しまり強
第3層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ1～12mm浮石少量含む しまり強
第4層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	φ1～8mm浮石少量 ローム少量含む しまり強
第5層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	浮石	ローム・浮石層 しまりやや強

B-B'

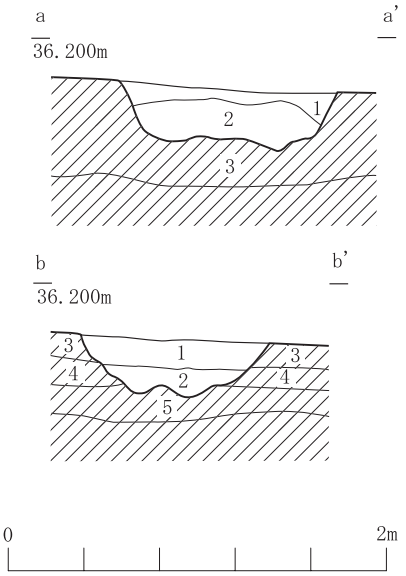
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR2/1	シルト	耕作土
第2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	浮石粒・ローム粒多量含む 硬くしまり強 耕作土?
第3層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒微量含む しまり弱
第4層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒微量含む 白頭山火山灰含む しまり強
第5層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒微量含む しまり弱
第6層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒微量含む しまり弱
第7層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒多量 黒色土(10YR2/2)多量含む しまり強

0　2m

第56図　第1号溝



第２号溝



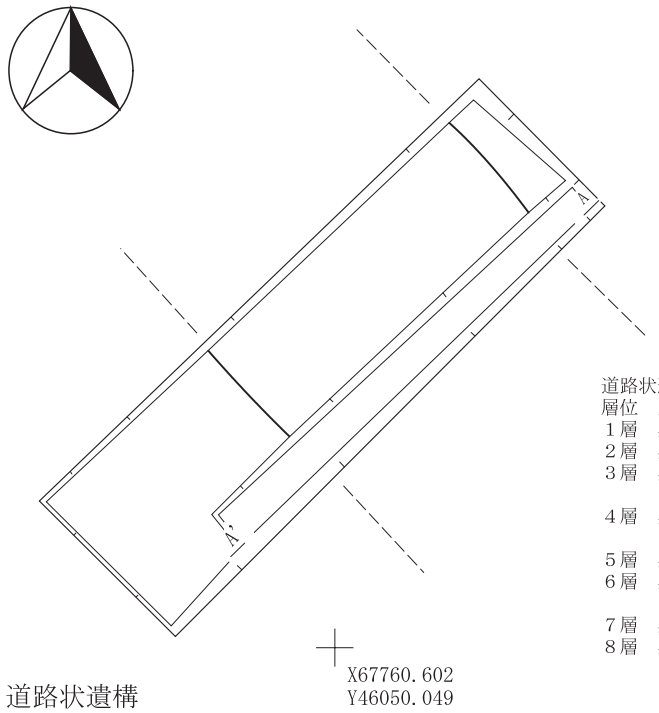
第２号溝

a-a'

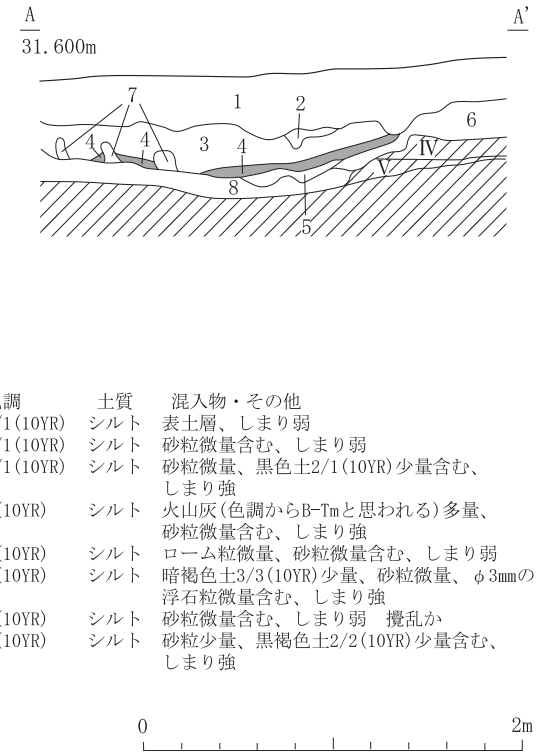
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	
第2層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	
第3層	暗褐色土	10YR3/4	粘土	自然堆積 八戸火山灰層

b-b'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	
第2層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む
第3層	黒色土	10YR2/1	シルト	自然堆積層
第4層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒(中掫浮石由来)多量含む
第5層	暗褐色土	10YR3/4	粘土	八戸火山灰層



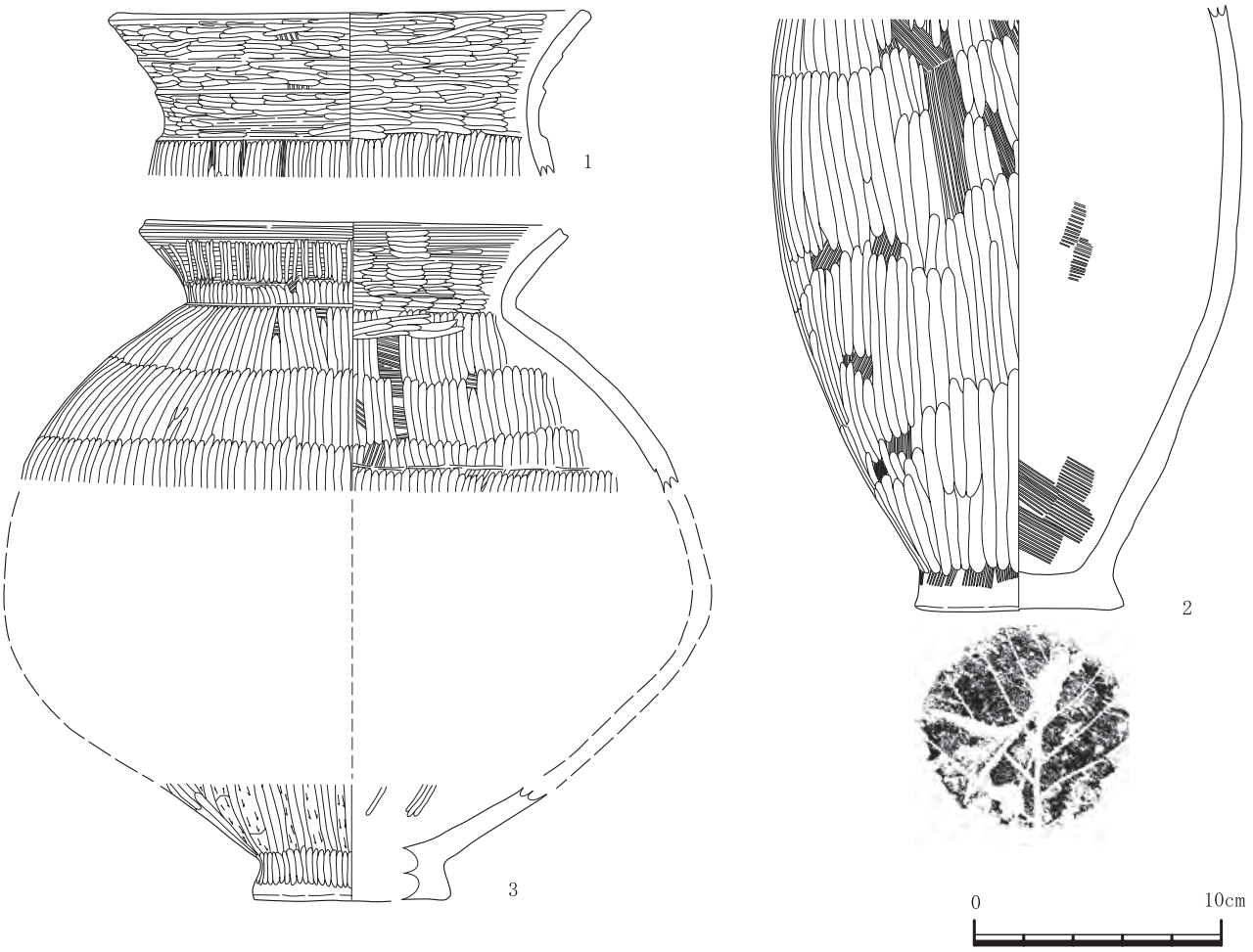
道路状遺構



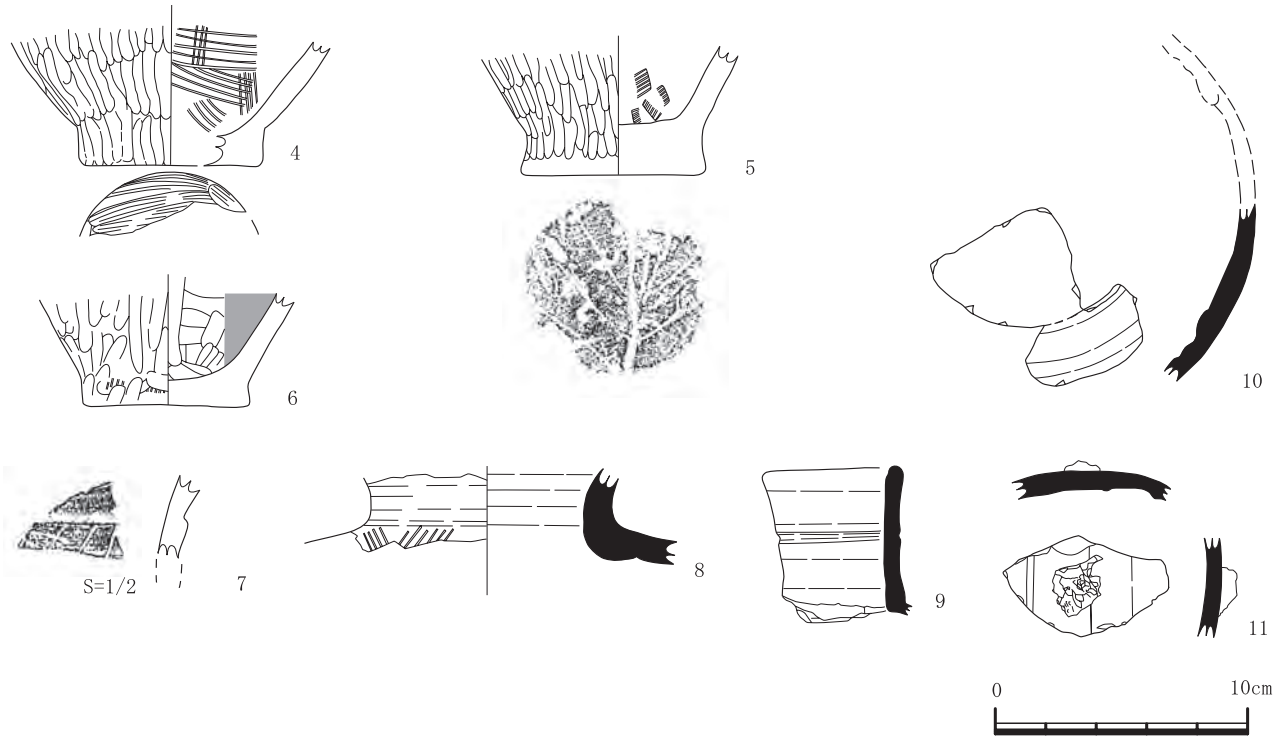
道路状遺構

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
１層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	表土層、しまり弱
２層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	砂粒微量含む、しまり弱
３層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	砂粒微量、黒色土2/1(10YR)少量含む、しまり強
４層	黒色土2/1(10YR)	シルト	火山灰(色調からB-Tmと思われる)多量、砂粒微量含む、しまり強
５層	黒色土2/1(10YR)	シルト	ローム粒微量、砂粒微量含む、しまり弱
６層	黒色土2/1(10YR)	シルト	暗褐色土3/3(10YR)少量、砂粒微量、φ3mmの浮石粒微量含む、しまり強
７層	黒色土2/1(10YR)	シルト	砂粒微量含む、しまり弱　攪乱か
８層	黒色土2/1(10YR)	シルト	砂粒少量、黒褐色土2/2(10YR)少量含む、しまり強

第57図　第２号溝・道路状遺構

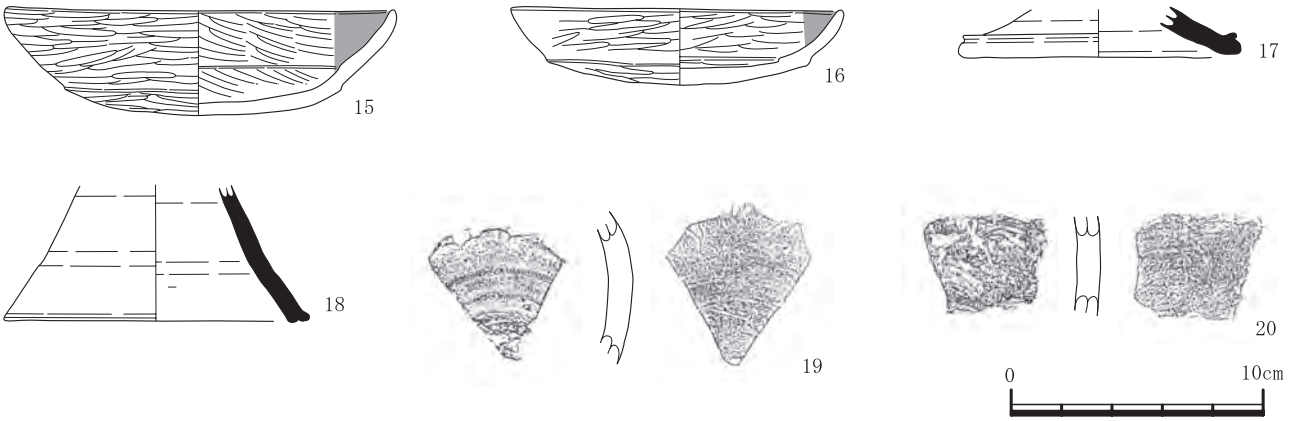


番号	出土位置	器　種	法　量(cm)			外面調整	内面調整	底面調整
			口径	底径	器高			
1	F-6	長胴甕	19.5	—	—	ハケメ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	—
2	F-4	長胴甕	—	9.4	23.9(残部)	ハケメ→ヘラミガキ	ハケメ	木葉痕
3	F-4	球胴甕	17.3	17.3	—	口縁部:横ナデ→ハケメ→ヘラミガキ　体部上半:ハケメ→ヘラミガキ 下半：ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部:横ナデ→ヘラミガキ 体部:ハケメ→ヘラミガキ	木葉痕

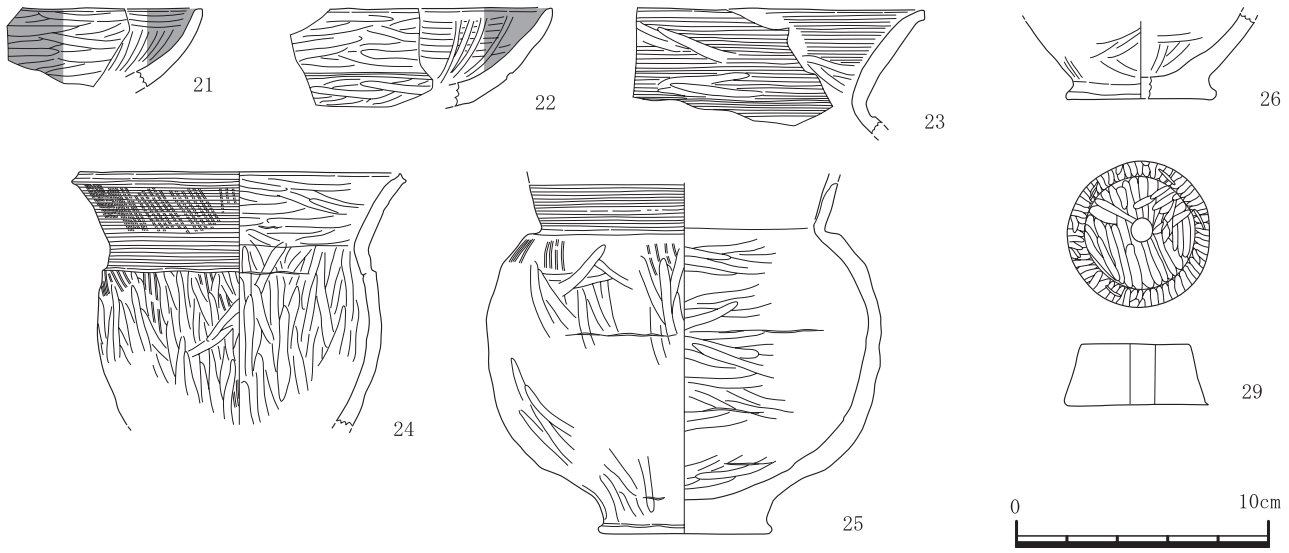


第 58 図　遺構外出土遺物 (1)

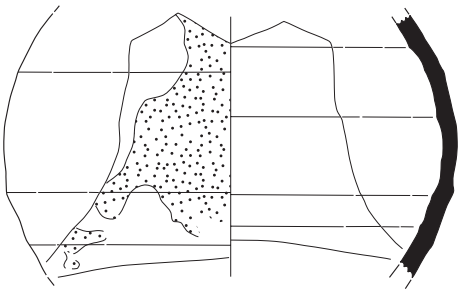
番号	器　種	法　量(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	備考
		口径	底径	器高				
4	長胴甕	—	7.3	5.5(残部)	ヘラミガキ	ハケメ	ヘラナデ	
5	長胴甕	—	7.4	5.1(残部)	ヘラミガキ	ハケメ	木葉痕	
6	長胴甕	—	7.2	4.9(残部)	ハケメ→ヘラミガキ	ヘラミガキ　黒色処理	ヘラナデ	
7	長胴甕	—	—	—	横ナデ　沈線文	横ナデ　ハケメ	—	
8	須恵器甕	—	—	—	横ナデ　タタキ目	横ナデ	—	
9	須恵器平瓶	5.6	—	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	
10	須恵器ﾌﾗｽｺ型長頸瓶?	—	—	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	外面に灰かぶり(黄灰色)自然釉(緑色) 8､9と同一個体
11	須恵器	—	—	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	外面に窯体付着 内面に自然釉(緑色)
12	須恵器	—	—	—	ロクロ痕	ロクロ痕	—	外面に灰かぶり(黄灰色) 自然釉(緑色)
13	須恵器坏	—	6.0	1.6(残部)	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラ切り	
14	須恵器	—	—	—	タタキ目	アテ具痕	—	



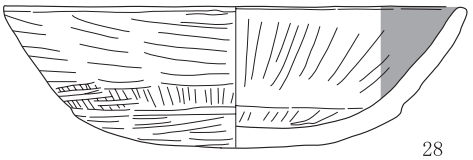
番号	出土位置	器種	法　量(cm)			外面調整	内面調整	備考
			口径	底径	器高			
15	B-8区Ⅱ層	坏	17.6	-	4.7	ヘラミガキ	ヘラミガキ 黒色処理	八教委‘90 丹後平古墳より
16	B-8区Ⅱ層	坏	14.0	-	3.1	ヘラミガキ	ヘラミガキ 黒色処理	八教委‘90 丹後平古墳より
17	A-7区Ⅰ層	須恵器	-	11.2	1.9	ロクロ痕	ロクロ痕	口縁部破片か台破片か不明
18	E-3区Ⅰ層	須恵器	-	12.1	5.4	ロクロ痕	ロクロ痕	口縁部破片か台破片か不明
19	D-6区Ⅰ層	須恵器	-	-	-	カキ目	ロクロ痕	提瓶か？
20	B-2区Ⅰ層	須恵器	-	-	-	タタキ目	アテ具痕	



第 59 図　遺構外出土遺物 (2)



27



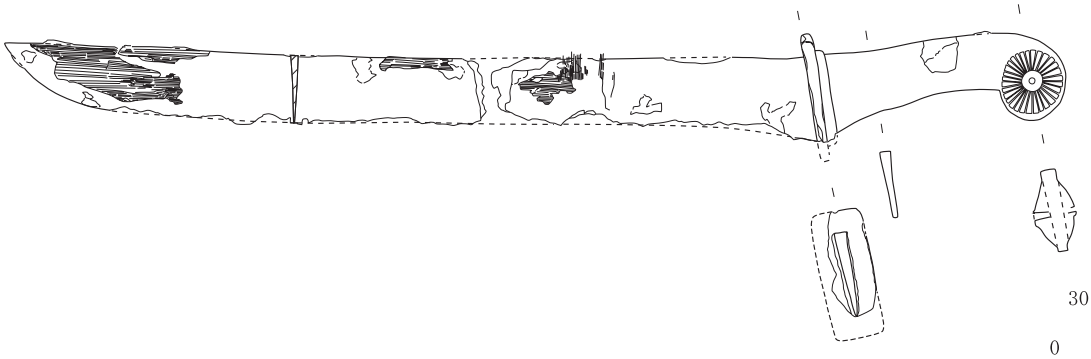
28

0　10cm

番号	種類	層位	特　　徴
21	坏	表土	内外面:ミガキ→黒色処理
22	坏	表採	外面:ミガキ 内面:ミガキ→黒色処理
23	甕	表土	外面:ナデ→ミガキ 内面:口縁～ナデ 下半～ミガキ
24	小型甕	E3Ⅲ層上面	外面:口縁～頸部 ハケメ→ナデ 胴部 ハケメ→ミガキ 内面:ヘラミガキ 口径(推)12.7cm 2号土壙付近
25	球胴甕	E3Ⅲ層上面	外面:口縁 ナデ 胴部 ハケメ→ミガキ 内面:胴部 ミガキ 底径(推)6.8cm
26	小甕	北壁トレンチ	外面:ハケメ ミガキ 内面:ミガキ
27		Ⅲ層上面	外面:ロクロ調整 自然釉 内面:ロクロ調整 12号墳主体部付近 フラスコ型

No.	層位	器種	種類	口径	器高	外面調整	内面調整
28	―	坏	土師器	(18.2)	5.7	ミガキ	ミガキ→黒色処理

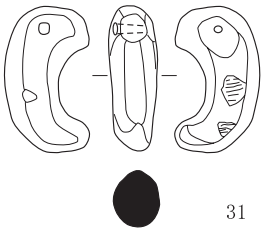
番号	種別	直径上部(cm)	直径下部(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)	調整
29	紡錘車	4.4	5.8	2.4	0.8	ヘラミガキ



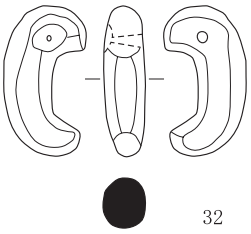
30

0　10cm

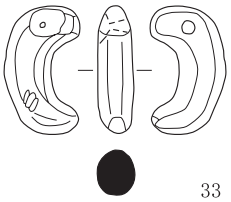
番号	全長(cm)	刃長(cm)	柄長(cm)	元幅(cm)	先幅(cm)	重ね(cm)	鋒長(cm)	鍔長(cm)	鍔幅(cm)	鍔重ね(cm)	全反り	反り	柄反り
13	56.1以上	42.8以上	13.3	4.5	3.0	0.5	4.5	5.7以上	2.5以上	0.4	―	―	0.9



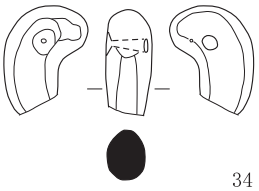
31



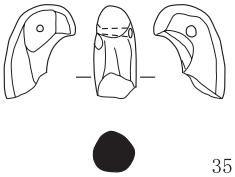
32



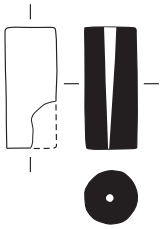
33



34



35



36

0　10cm

番号	種別	材質	全長(mm)	幅(mm)	厚さA (mm)	厚さB (mm)	重量(g)	穿孔方向	備考
31	勾玉	瑪瑙	39.0	23.0	15.0	12.0	13.9	C→A	コ字
32	勾玉	瑪瑙	39.5	21.5	13.0	11.0	11.5	A→C	コ字
33	勾玉	瑪瑙	34.0	20.0	11.5	9.5	8.3	A→C	コ字
34	勾玉	瑪瑙	28以上	24.0	13.0	10.5	9.1以上	A→C	
35	勾玉	瑪瑙	27以上	19.0	11.0	10.5	5.3以上	A→C	
36	管玉	碧玉	33.0	14.0			1.0		

第 60 図　遺構外出土遺物 (3)

プラン確認

掘削作業

完掘

主体部

小型土器出土状況

青銅金具出土状況

鉄鏃出土状況

従事者

図版 1　A1 号墳

A2 号墳プラン確認

A2 号墳完掘

A2 号墳周溝出土遺物

A3 号墳プラン確認

A3 号墳玉類出土状況

A4 号墳主体部

A5 号墳確認

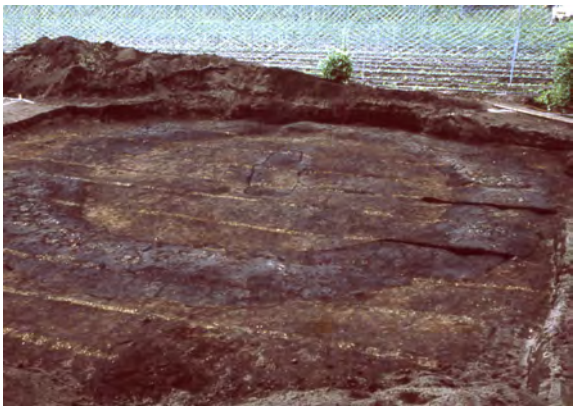
A5 号墳完掘

図版 2　A2 号墳・A3 号墳・A4 号墳・A5 号墳 (1)

A5 号墳主体部

鉄鏃出土状況

周溝土器出土状況


A6 号墳プラン確認

A6 号墳完掘

A6 号墳主体部完掘

A6 号墳張出し部（階段状）

A6 号墳調査状況

図版 3　A5 号墳 (2)・A6 号墳

A7 号墳確認

A7 号墳完掘

A7 号墳主体部

鉄斧出土状況

甕出土状況

A8 号墳完掘

A8 号墳主体部遺物出土状況

A8 号墳小刀出土状況

図版 4　A7 号墳・A8 号墳

A9 号墳完掘

A9a 号墳主体部

A9b 号墳主体部

A9 号墳周溝遺物出土状況

A10 号墳完掘

A10 号墳轡出土状況

A11 号墳完掘

A11 号墳主体部

図版 5　A9 号墳・A10 号墳・A11 号墳 (1)

A11 号墳直刀出土状況

A11 号墳土師器出土状況（周溝）

A11 号墳土師器出土状況（周溝）

A11 号墳主体部セクション

A11 号墳セクション

A12 号墳完掘

A12 号墳主体部（礫床）

A12 号墳主体部

図版 6　A11 号墳 (2)・A12 号墳 (1)

A12 号墳主体部完掘

平成 2 年度調査遠景

A13 号墳確認

A13 号墳完掘

A13 号墳周溝南北セクション B-B’（南東から）

A13 号墳セクション C-C’（南東から）

A13 号墳遺物出土状況

A13 号墳主体部セクション（南東から）

図版 7　A12 号墳 (2)・A13 号墳 (1)

A13 号墳主体部完掘

A13 号墳完掘（南東から）

A14 号墳確認

A14 号墳完掘（南東から）

A14 号墳主体部セクション c-c’

A14 号墳主体部出土遺物（耳環）出土状況

主体部セクション（溝）

完掘

図版 8　A13 号墳 (2)・A14 号墳

A16 号墳

A17 号墳①

A17 号墳②

a1 号土壙完掘

a2 号土壙確認

a2 号土壙完掘

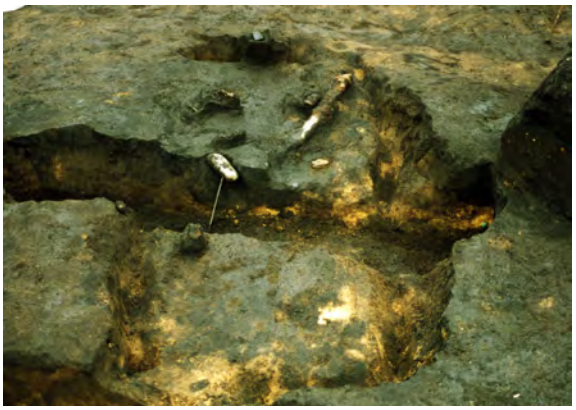
a2 号土壙セクション

a3 号土壙確認（北から）

図版 9　A16 号墳・A17 号墳・a1 号土壙・a2 号土壙・a3 号土壙 (1)

a3 号土壙坏出土状況

a3 号土壙セクション


a3 号土壙遺物出土状況①

a3 号土壙遺物出土状況②

a3 号土壙床面完掘

a3 号土壙掘り方完掘

a4 号土壙セクション

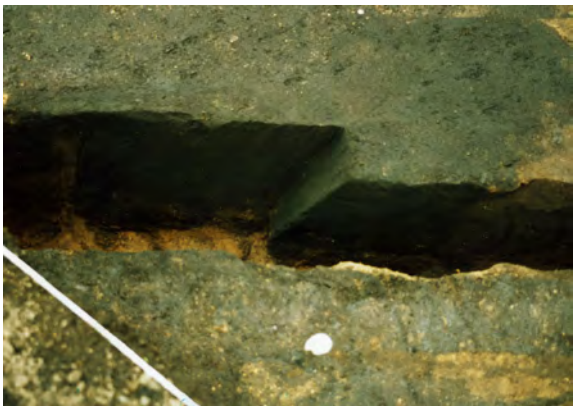
a4 号土壙完掘

図版 10　a3 号土壙 (2)・a4 号土壙

a5 号土壙セクション

a5 号土壙完掘

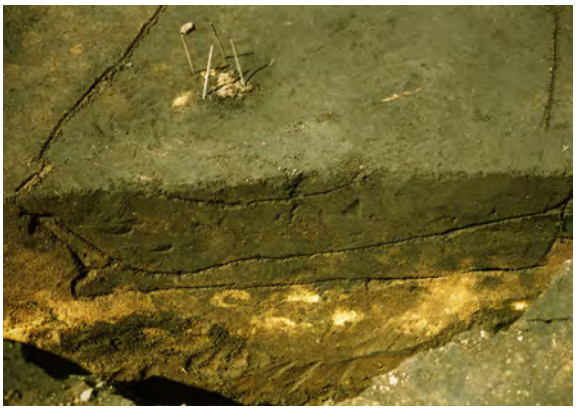
a6 号土壙確認


a6 号土壙セクション（西から）

a6 号土壙セクション（北から）

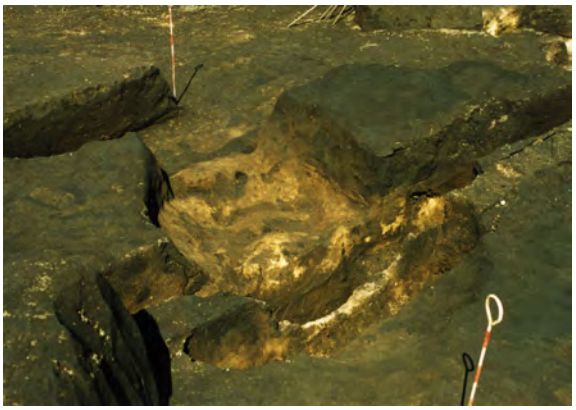
a6 号土壙完掘（東から）

a7 号土壙確認


a7 号土壙セクション（北から）

図版 11　a5 号土壙・a6 号土壙・a7 号土壙 (1)

a7 号土壙セクション


a7 号土壙完掘

調査区遠景（平成 12 年度・南から）

調査区遠景（平成 12 年度・北から）

第 1 号溝セクション

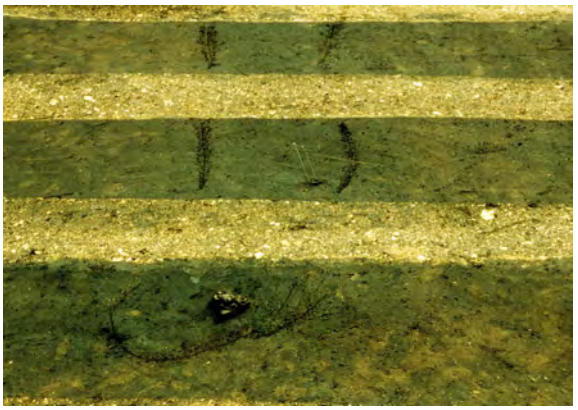
第 1 号溝（東から）

道路状遺構

作業風景（平成 13 年度）

図版 12　a7 号土壙 (2)・道路状遺構（第 1 号溝）

第 2 号溝完掘



第 2 号溝確認

第 2 号溝セクション a-a'

第 2 号溝セクション b-b'

A1 号墳出土大刀

図版 13　第 2 号溝・A1 号墳出土遺物 (1)

A1 号墳出土高坏・小型甕

A1 号墳出土鉄鏃

A2 号墳出土甕・坏

A3 号墳出土玉類

A4 号墳出土刀子

A5 号墳出土鉄鏃

A6 号墳出土ガラス玉

A7 号墳出土甕

図版 14　A1 号墳 (2)・A2 号墳・A3 号墳・A4 号墳・A5 号墳・A6 号墳・A7 号墳 (1) 出土遺物

A7 号墳出土鉄斧 3

A7 号墳出土鎌

A7 号墳出土鉄斧 4

A8 号墳出土鉄斧

A7 号墳出土小刀

図版 15　A7 号墳 (2)・A8 号墳出土遺物

A9 号墳出土釧・環状錫製品

A9 号墳周溝出土轡

A9 号墳出土土器

A10 号墳出土坏

A10 号墳出土轡

図版 16　A9 号墳・A10 号墳出土遺物

A11 号墳出土土器

A11 号墳出土刀子・鉄鏃

A12 号墳出土環状錫製品

A14 号墳出土耳環

A12 号墳出土杯

A13 号墳出土甕

図版 17　A11 号墳・A12 号墳・A13 号墳・A14 号墳出土遺物

a3 号土壙出土直刀

a2 号土壙出土平瓶

a3 号土壙出土鉄鏃

a7 号土壙出土鉄斧

遺構外出土勾玉

図版 18　a2 号土壙・a3 号土壙・a7 号土壙・遺構外出土遺物

第２節　天神山遺跡

t1 号土壙

T1 号墳（第 63 ～ 66 図　図版 20・21）

位置　P34 ～ 35、Q34 ～ 35 の地点において現況地盤で若干の高まりとして確認できた。現況地盤での最下点から最高点までの比高差は 50cｍである。このほか、平成 11 年度トレンチで周溝の一部を確認している。表土層である 1 層直下層から周溝は掘り込まれており、墳丘が検出されている。

周溝　東西南北方向に十字に設定したトレンチで周溝を確認し、さらに間にトレンチを設け、上面確認したうえで掘削した。立木があるため全体の確認は出来なかったが、全周するタイプのものと予想される。平面形は西側が直線的である。なお先行する末期古墳が西側に存在するとみられる。西側を除けば不整ながら円形である。周溝外径 10m、内径 7.06m、深さは 0.79m、幅 1.89m である。堆積土は 3 から 7 層あり、黒色土が主体となっている。a-a’・G-G’には 2 枚の火山灰二次堆積層が見られ、それぞれ上から B-Tm 火山灰、To-a 火山灰と推定される。c-c’5 層や d-d’7 層 F-F’27 層など、掘りかた底面直上層にはロームブロックがみられ、埋め戻して底面を成型した可能性がある。それ以外は自然堆積である。

主体部　周溝に囲まれたほぼ中央に、F-F’トレンチによって確認された。今回の調査の目的は墳墓の構築過程を断面から観察することにあったので、南側約半分にセクションベルトを設けて掘削した。同トレンチの 24 層・25 層の下層にはロームブロックが見られたため、24 層・25 層は盛土と見られる。そして主体部は 24・25 層を掘削して構築されたものである。主体部のセクション（第 64 図）の観察によると 4 層が大きく落ち込んでおり、木棺等の構造と蓋があり、ある程度の時間がたってから蓋が落ち、蓋の上を覆っていた埋土が堆積したという過程が想起される。壁溝を利用し板等が立て並べられた可能性として、A-A’の 5・6 や C-C’の 6･15 層、16 ～ 18 層のような縦に重なる層がみられ、蓋然性が高い。しかし、壁面の層が床側に流れ込んだり、逆に 8 層がほぼ全面の床面直上層となっており、部分的には壁溝の上部に達しているといった問題もある。壁材の崩落の際、部分的に先後があった場合、土が入り組む事があるのかもしれない。なお、今回の調査は、墳丘を断ち割らずに進めたため、断面観察を中心に据えながら、観察に有利な状況を作り出せなかった。そのため現場でこれらの問題点を抽出できず、不確定な要素が残った。今後の留意点としたい。

他の施設には西側に長さ 2.72m、幅 20 ～ 25cm の溝がある。これを A 溝とする。次に、貼床を巡る B 溝、南側の東西方向 65cｍ程の C 溝があった。まず、A 溝と B 溝の関係だが、B-B’では明確でないが、C-C’では A 溝は機能していない様子が観察される。したがって、壁立てがあったとするならば、B 溝を使用していたと推測される。B 溝は幅 15 ～ 30cｍ、深さ 15 ～ 20cｍで、貼床部を囲んで長方形に全周もしくは南側が切れるコの字型を呈するものと考えられる。南東部分の掘り方底面が浮石層であったため、崩れて確認ができなかった。東側壁際の中央付近に掘り残した部分がみられた。C 溝は、長軸方向に直行に近い溝である。丹後平古墳群の例では張り出しと埋葬部の間や、短辺両側に見られる溝があった。位置的には仕切り溝や棺との関連とするには離れすぎ、断面観察では 8 層堆積時にはすでに埋まっている。用途は不明である。

平面的には全体が北西方向に傾いているのに対し、C 溝と南側の形態は北側向きで、逆「く」の字形となっている。

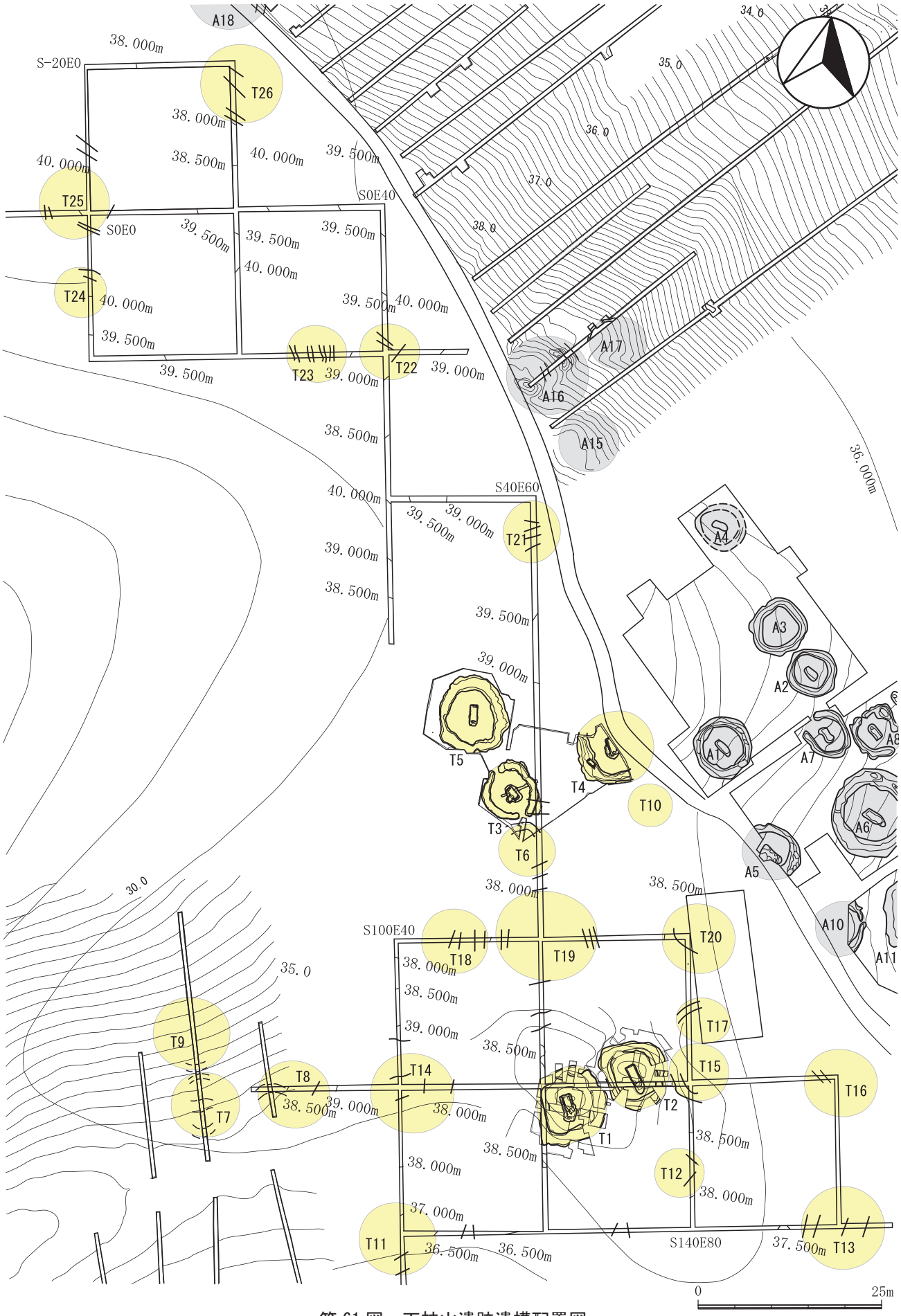
掘り方底面では、掘削に使用したと思われる鋤・鍬先の痕とみられる工具痕が明瞭に観察された（図版 21）。

規模は、全長 3.7m、幅 1.78m、深さ 52cｍである。埋葬部は長さ 2.23m、幅 1.65m である。主軸方向は N-28°-W。

出土遺物　（第 66 図　図版 30）

直刀 1 点、鉄鏃 1 点が東壁際から出土した。

直刀は鋒を北側にし、刃部を東側に向けていた。鞘を装着した状態で副葬されたものと見られ、部分的に木質が残る。全長 59.5cm 平棟平造りカマス鋒である。関は両関と見られる。茎には目釘が残っている。倒卵形だが、やや下側が尖った形の無窓鍔をもつ。鎺も倒卵形である。鎺の佩裏側には幅 5mm の鉄製品が付着しており、佩用装置の痕跡である可能性もある。茎端部に直径 1.2cｍ、厚さ 0.7cｍの円形金具が付随して 2 点出土した。この金具の中央は直径 4mm の穴があいており、有機質の柄頭がかつて存在し、それをはさんで表裏一対に装着されていたと考えられる。鉄鏃は有茎鏃である。錆膨れがあり、鏃身部の形態が明瞭ではないが、五角形に近い平面形である。茎付近には木質と樹皮が残存している。



第 61 図　天神山遺跡遺構配置図

小結　周溝堆積土上位でB-Tm火山灰、To-a火山灰がみられたことにより、少なくともそれ以前といえる。2号墳に避けられており、それ以前に存在したと予想される。出土遺物では大刀があるが、拵がほとんどなく位置付けが難しいが、刀身の幅が広いことから、これまでに出土している細身の直刀の7世紀という年代より降るものであろう。

原典G

保存処理の結果、鉄鏃の鏃身部はノミ刃式であった。

T2号墳（第67・68・71・73図　図版22・23）

位置　T1号墳の北東側のQ34を中心に位置する。平成11年度の試掘調査で東側と西側の周溝および主体部の位置を確認した。また、地表面で比高差40cmの高まりを持つことが改めて分かった。

周溝　南西側と北側がやや直線的であり、南西側にはT1号墳がある。北側にも先行する末期古墳が存在するものと予想される。また、東側にも1基有ることを試掘調査で確認している。そのためか、平面形はやや丸みを帯びているが、逆台形のような形態である。最大計測値は、外径9.42m、内径6.50m、幅1.76m、深さが0.94mである。堆積土は4～5層に分けられ、黒色土主体である。全てのセクションで底面直上層にロームブロックがみられた。埋め戻して床とした可能性がある。F-F’30層やc-c’4層など上層に古代のものとみられる火山灰が堆積している。掘り方の断面形状は基本的に底面が平坦であり、屈折点から外傾しながら直線的に立ち上がる、逆台形に近い形状である。主体部南側の主軸方向延長線上に立木があり掘削できなかったが、周溝は全周するものとみられる。

主体部　全長4.1m、幅1.4mである。埋葬部は長さ2.38m、幅1.26mである。地表面から床面までの深さは1.2m。埋葬部は長さ2.38m幅1.26mである。主軸方向はN-36°-W。

平面形は埋葬部が長方形で、張り出し部が半円形に突き出している。覆土は7・8層が極端に落ち込んでおり、2～4層がその後堆積したようにみられる。7・8層からは多量の須恵器破片が出土し、周溝から出土した破片とも接合するなど、これらの層も、1号墳同様に棺の蓋が腐食して崩落した際の流入土であり、墓壙を被覆していた層も含むものとみられる。一方、張り出し部であるC-C’の堆積土はロームブロックを含む単一層であり、一気に埋められたものとみられる。

床は一面炭化物で覆われていた。炭化物を除去した際、土が赤褐色に変色していたため、炭はこの場所で燃やしてつくられたものとみられる。

溝はコの字形に巡り、南側の一部が切れる。幅は7～15cmで、深さは床面から10～15cmであった。

張り出し部には段状の平坦面がみられ、階段のようになっていた。

出土遺物　（第69・70・72・73図　図版31・32・34）

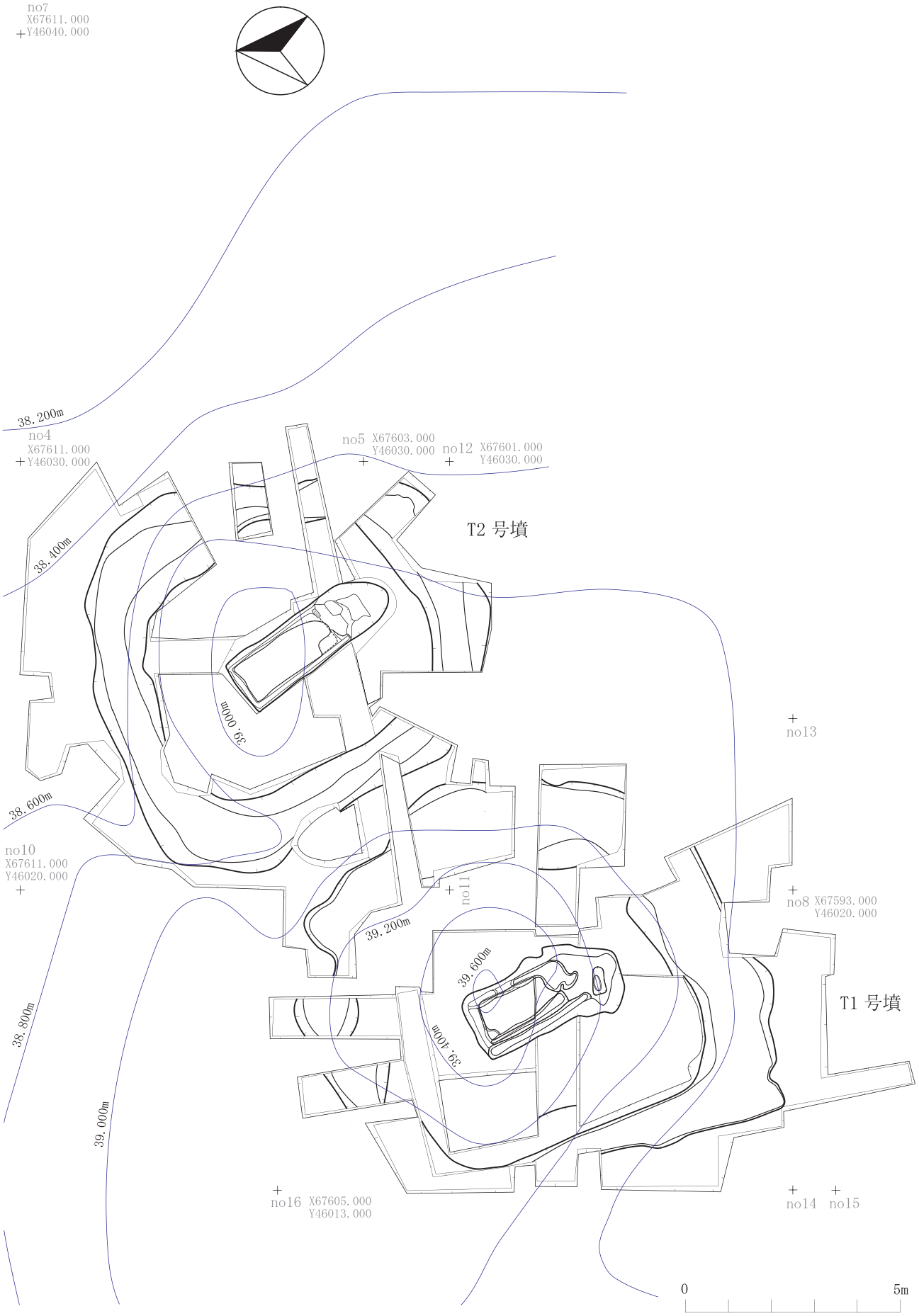
金属製品と須恵器、玉類、石器が出土した。副葬品、供献品に分けて記述する。

副葬品　金属製品として蕨手刀1点、刀子1点、釧1点、鑷子状鉄製品1点、環状銅製品1点、不明1点がある。

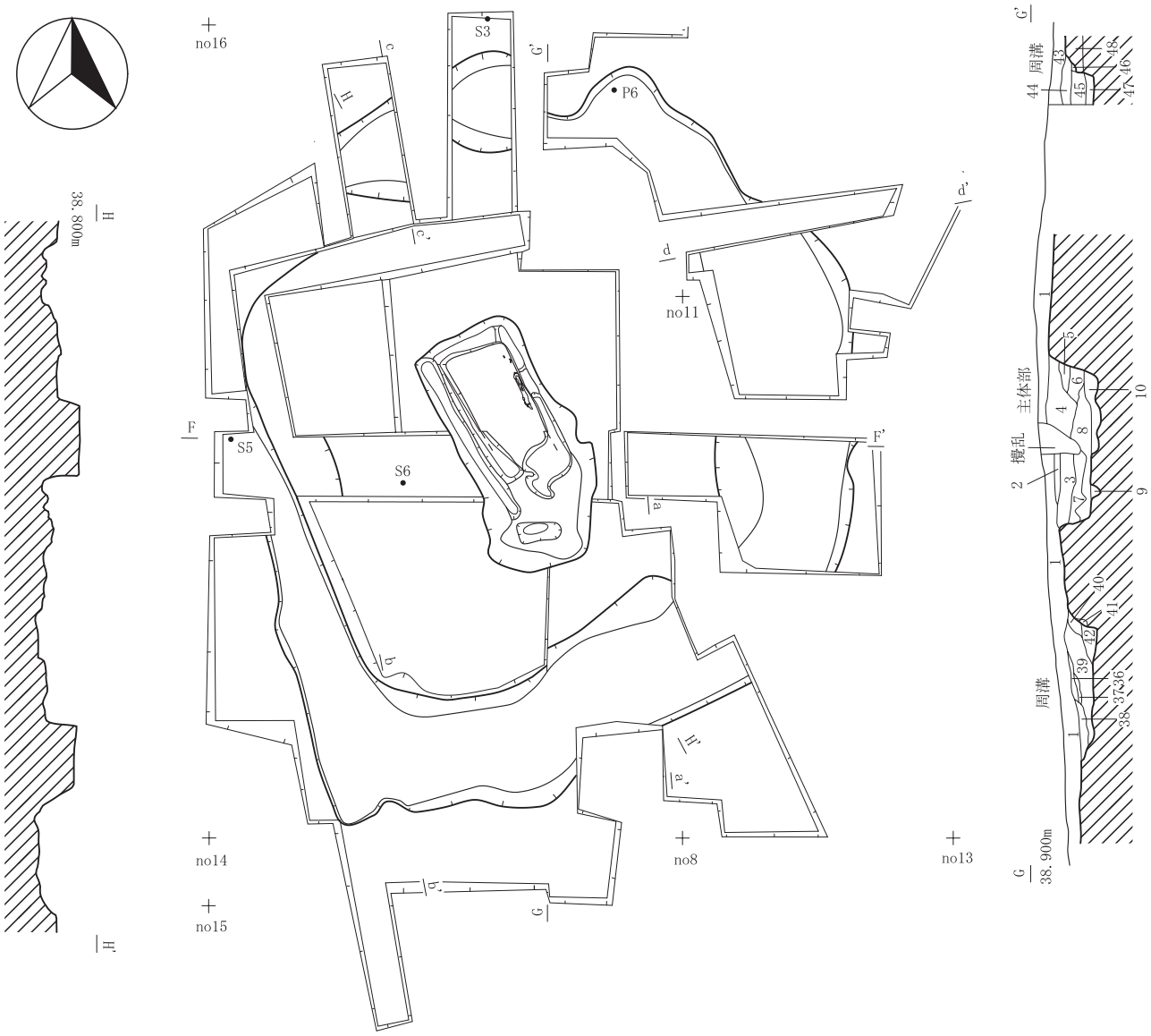
阿光坊古墳群内で発掘調査による蕨手刀の出土は初めてだが、造成中に発見された例があり、遺跡としては2例目となる。東側壁際から、鋒を北にし、刃を外に向けて出土した。完形であり、鍔は青銅製である。柄には明瞭に紐を4本単位で巻いた痕が残っている。全長56cm、元幅3.5cmと細身である。刀子も、責金具が青銅製である。全長16.4cm。西側の壁際から出土した。釧は、西側壁付近で出土した。垂直に立った状態で出土した。2重である。鑷子状鉄製品は先端部が欠損している。環状銅製品は、出土当初は耳環と見ていたが、形状が異なり、また出土位置が必ずしも頭部とはいえず、用途が限定されないため名称を改めた。

玉類には勾玉とガラス玉、琥珀玉がある。勾玉は3点出土し、2点は瑪瑙、1点は翡翠とみられる。1・2は片側穿孔である。3は小型で、側面は丸みをもたず直線的である。他の2点とは明らかな差異がある。

ガラス玉は直径6mm以上のもの（Ⅰ類）11点、直径4.9mm以上（Ⅱ類）7点、4mm以上（Ⅲ類）36点、3.9mm以下（Ⅳ類）88点、粉砕2点、合計144点出土した。図示したのはそれぞれ1点ずつである。上端面が直線的なもの（a）と丸みを帯びるもの（b）があるが、aが全体で7点であるのに対しⅠ類11点のうち4点が平坦で比率が高い。それぞれの特徴は別表に示した。琥珀玉は欠損部があるが、平面形は円形に近



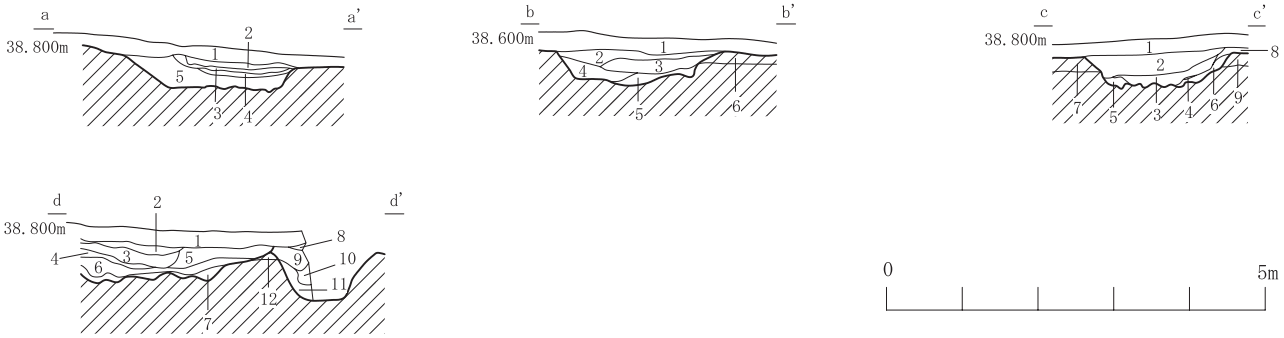
第 62 図　T1・T2 号墳遺構配置図



T1号墳　F−F'　G−G'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	表土層
2層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒微量、φ2～3mm浮石粒微量含む
3層	褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒少量、φ2～5mm浮石粒多量含む、しまり強
4層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量、砂粒少量含む
6層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量、黒色土2/1(10YR)多量、φ2～3mm浮石粒少量含む
7層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量、φ2～5mm浮石粒少量含む、しまり強
8層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量、黄褐色土5/8(10YR)ブロック、暗褐色土2/3(10YR)含む
9層	褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒少量含む、しまり弱
10層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量、黄褐色土5/8(10YR)ブロック、黒褐色土2/3(10YR)多量含む、しまり弱
11層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒微量、砂粒微量含む、しまり強
12層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	褐色土4/6(10YR)ブロック多量含む
13層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量、φ2～3mm浮石粒多量含む、しまり弱
14層	黒色土	10YR2/1	シルト	褐色土4/6(10YR)多量含む
15層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒微量含む、しまり強
16層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量含む
17層	褐色土	10YR4/6	シルト	黒色土2/1(10YR)少量含む
18層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量、炭化粒少量含む
19層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒多量、φ2～3mm浮石粒多量含む
20層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒多量、φ2～3mm浮石粒少量含む
21層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量、炭化粒微量含む、しまり弱
22層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒多量、黄褐色土5/8(10YR)ブロック多量、φ2～3mm浮石粒少量含む
23層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量、φ2～5mm浮石粒少量含む、しまり弱
24層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量、根多量含む
25層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量、黒褐色土2/3(10YR)少量含む
26層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量、黒褐色土2/3(10YR)少量含む
27層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	ローム粒多量、黄褐色土5/8(10YR)ブロック多量、黒褐色土2/2(10YR)多量含む
28層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒微量、φ2～10mm浮石粒微量含む、しまり強
29層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム粒少量、φ5～10mm浮石粒少量、十和田ａ火山灰微量含む、しまり強
30層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	ローム粒中量、φ7cmロームブロック、φ5mm浮石微量含む
31層	黄褐色土	10YR5/8	ローム	ローム粒中量、φ1～15mmロームブロック多量含む、しまり強
32層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム粒微量含む、しまり強
33層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	火山灰微量含む、しまり弱
34層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	φ1～5cmロームブロック少量、中掫浮石多量含む
35層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒微量含む、しまり強
36層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	火山灰	白頭山火山灰、しまり弱
37層	灰黄褐色土	10YR4/2	火山灰	十和田ａ火山灰、しまり弱
38層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒微量、火山灰微量含む、しまり強
39層	黒色土	10YR2/1	シルト	φ1～5mm浮石粒微量、小礫微量含む
40層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒中量、φ5mm浮石粒微量含む、しまり強
41層	暗褐色土	10YR3/4	ローム	ローム粒多量、ロームブロック含む、しまり強
42層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム粒中量、φ1cmロームブロック少量含む、しまり強
43層	黒色土	10YR2/1	シルト	表土層　木根含む、しまり強
44層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	φ1mm浮石粒微量、木根含む、しまり強
45層	黒色土	10YR2/1	シルト	φ5mm浮石粒微量含む、しまり強
46層	黒色土	10YR2/1	シルト	火山灰少量含む、しまり弱
47層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	ローム粒多量、φ5mm浮石粒含む、しまり強
48層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒微量、φ3～5mm浮石粒微量含む、しまり強、基本層Ⅱ

第63図　T1号墳(1)



T1号墳周溝　a－a'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
1層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	表土層
2層	黒色土　10YR2/1	シルト	ローム粒微量、黒褐色土3/2(10YR)含む
3層	暗褐色土10YR3/3	シルト	白頭山火山灰含む
4層	暗褐色土10YR3/3	シルト	十和田ａ火山灰含む
5層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒多量　黒色土1.7/1(10YR)少量 φ2～5mm浮石粒少量含む

T1号墳周溝　c－c'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
1層	黒色土　10YR2/1	シルト	表土層　しまり強
2層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	ローム粒微量、φ1～5mm浮石粒微量含む しまり強
3層	暗褐色土10YR3/3	シルト	ローム粒中量　φ2～4cmロームブロック少量含む しまり強
4層	褐色土　10YR4/6	ローム	しまり強
5層	褐色土　10YR3/4	ローム	ローム粒多量　φ10cmロームブロック多量含む しまり強
6層	黒色土　10YR2/1	シルト	ローム粒中量含む　しまり弱
7層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	ローム粒微量含む　しまり強　基本層Ⅱ
8層	黒色土　10YR2/1	シルト	ローム粒少量含む
9層	黒色土　10YR2/1	シルト	ローム粒少量含む　しまり強　基本層Ⅱ

T1号墳周溝　b－b'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
1層	黒色土　10YR2/1	シルト	表土層、浮石粒微量含む　しまり強
2層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	φ5～10mm浮石粒微量含む　しまり強
3層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒少量　φ5mm浮石粒微量、小礫微量含む しまり強
4層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒少量　φ8～50mmロームブロック中量含む しまり強
5層	暗褐色土10YR3/3	シルト	ローム粒多量　φ10～20cmロームブロック含む しまり強
6層	黒色土　10YR2/1	シルト	ローム粒少量　φ5mm浮石粒微量含む　しまり強 基本層Ⅱ

T1号墳周溝　d－d'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
1層	黒色土　10YR2/1	シルト	表土層　しまり強
2層	黒色土　10YR2/1	シルト	φ2～5mm浮石粒微量　木根含む　しまり強
3層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒微量　φ2～5mm浮石粒少量、 小礫微量含む　しまり強
4層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	ローム粒微量　φ1mm浮石粒微量含む しまり強
5層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒微量　φ1～5mm浮石粒微量含む しまり強
6層	暗褐色土10YR3/4	シルト	ローム粒多量　φ5mm浮石粒少量含む
7層	暗褐色土10YR3/4	ローム	ローム粒多量　φ6cmロームブロック多量含む しまり弱
8層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	根の攪乱　しまり強
9層	黒色土　10YR2/1	シルト	ローム粒微量　φ5mm浮石粒微量含む　しまり強
10層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒微量　φ1～2mm浮石粒少量含む　しまり強
11層	暗褐色土10YR3/3	シルト	ローム粒多量　φ3cmロームブロック φ8mm浮石粒少量含む　しまり弱
12層	暗褐色土10YR3/4	シルト	基本層Ⅴ

第 64 図　T1 号墳 (2)

いものとみられる。

供献品　金属製品として鉸具 1 点、須恵器長頸瓶 1 点、短頸壺 1 点、甕 1 点があり、他に図示していないが同一個体とみられる甕胴部破片が出土しており、出土位置は P9 として示している (第 67 図)。

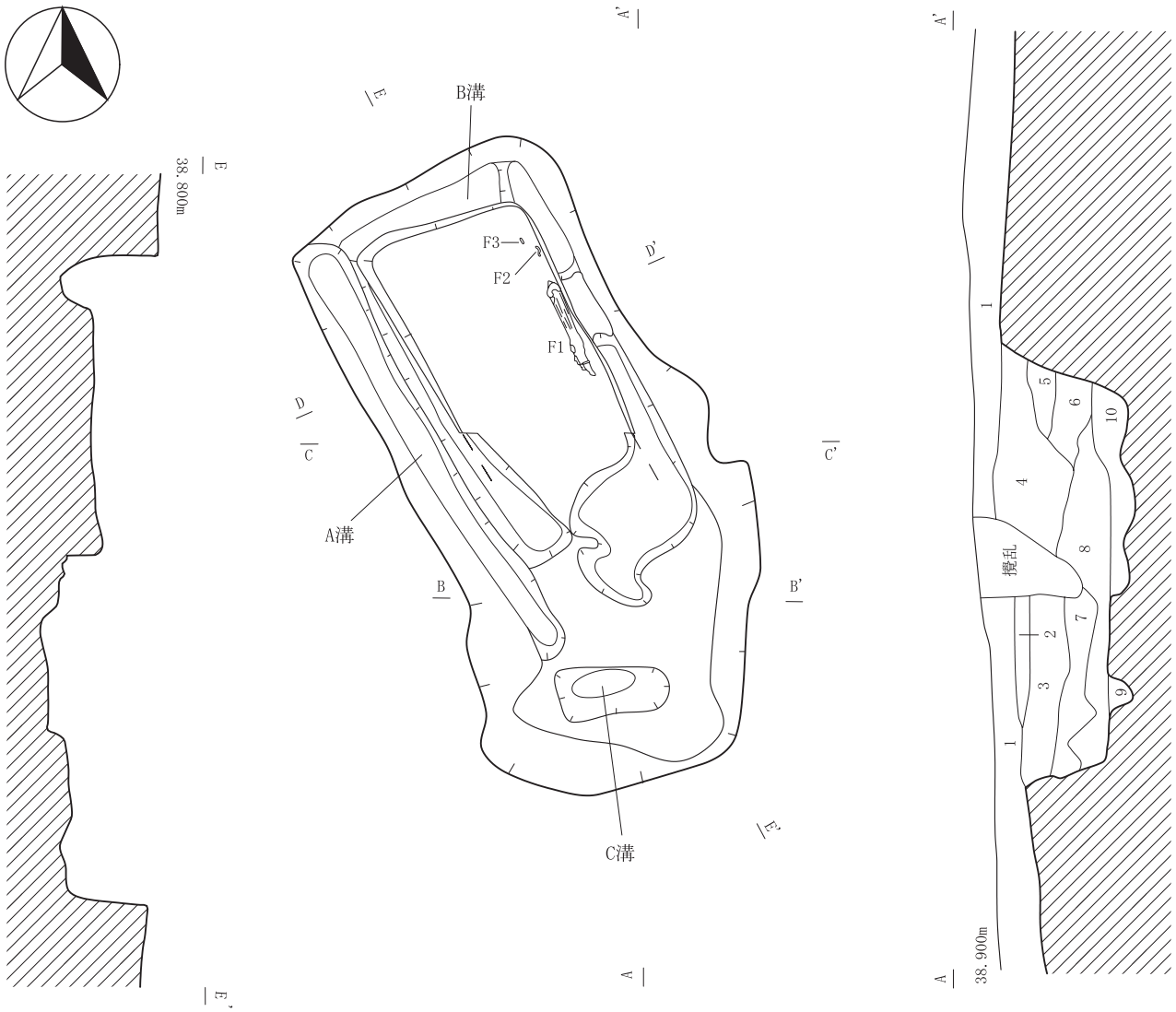
鉸具は、 縁金の前縁が丸みを帯び、 中位で若干すぼむ、 弱い瓢形を呈する。 刺金と軸との接合部分が若干くぼむ。 馬具と見られる。 主体部南側延長上の周溝から出土した。

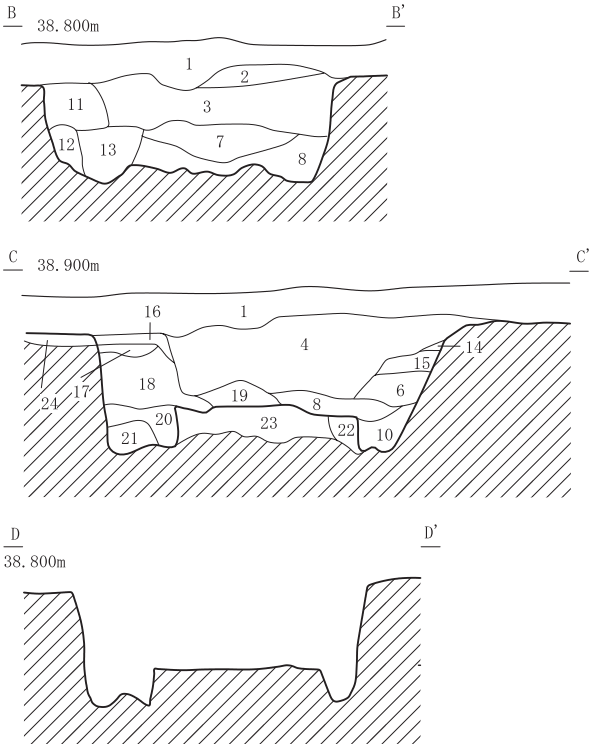
須恵器長頸瓶は、 頸部が主体部 3 層から、 体部は周溝から出土し、 主体部覆土と周溝出土遺物の性格を裏付ける好例である。 肩がやや張り、 櫛描による波状文や列点文が施されている。 第 96 図 5 の高台がつく可能性もある。

須恵器短頸壺は、 周溝内鉸具の東隣より出土した。 逆さの状態で出土し、 底部は見つからなかった。 甕は肩部に自然釉がみられる。 長頸瓶と同様に主体部上層および周溝から出土した。

小結　周溝の平面形状では前述のとおり、1 号墳を避けて造られたように見える。1 号墳 d-d' で両周溝の立ち上がりを観察したが切り合いはみられず、1 号墳が先行するが、並存した可能性を指摘できる。

時期を推定する手がかりとして、副葬品では蕨手刀、供献品として鉸具がある。蕨手刀は八木の分類(八木 1996) によると、柄頭 1 に分類され、柄頭 1 は 8 世紀前葉を中心とする時期と考えられている。鉸具は縁金の側面形態が刺金軸付近で上面が突出し、刺金と刺金軸の接合部分が三角形状になるもので、房の沢 RT04 号墳・RT21 古墳出土のものに類似する。RT04 古墳は縁金の前縁形態が丸みを帯び、RT21 古墳は方形に近い。本例は両者の中間的な平面形である。RT04 古墳出土のものは 8 世紀初頭、RT21 古墳のものは 8 世紀中葉から後葉の遺物といっしょに出土していると報告されている。これらから 8 世紀でも早い時期が想定される。一方須恵器の長頸瓶は体部の下半が内傾してたちあがり、肩部は張るものの稜は弱い。頸部は細長く、口縁部に稜をもち外反しながら立ち上がる。口縁端部は下につまみ出され縁帯状を呈する。胎土には粗い砂が混じる。短頸壺は長頸瓶とよく似た体部形状であり、肩部の張りがやや小さい。口縁部上方に突帯がみられる。底部付近に手持ちヘラケズリがみられる。胎土に白色の粗い砂



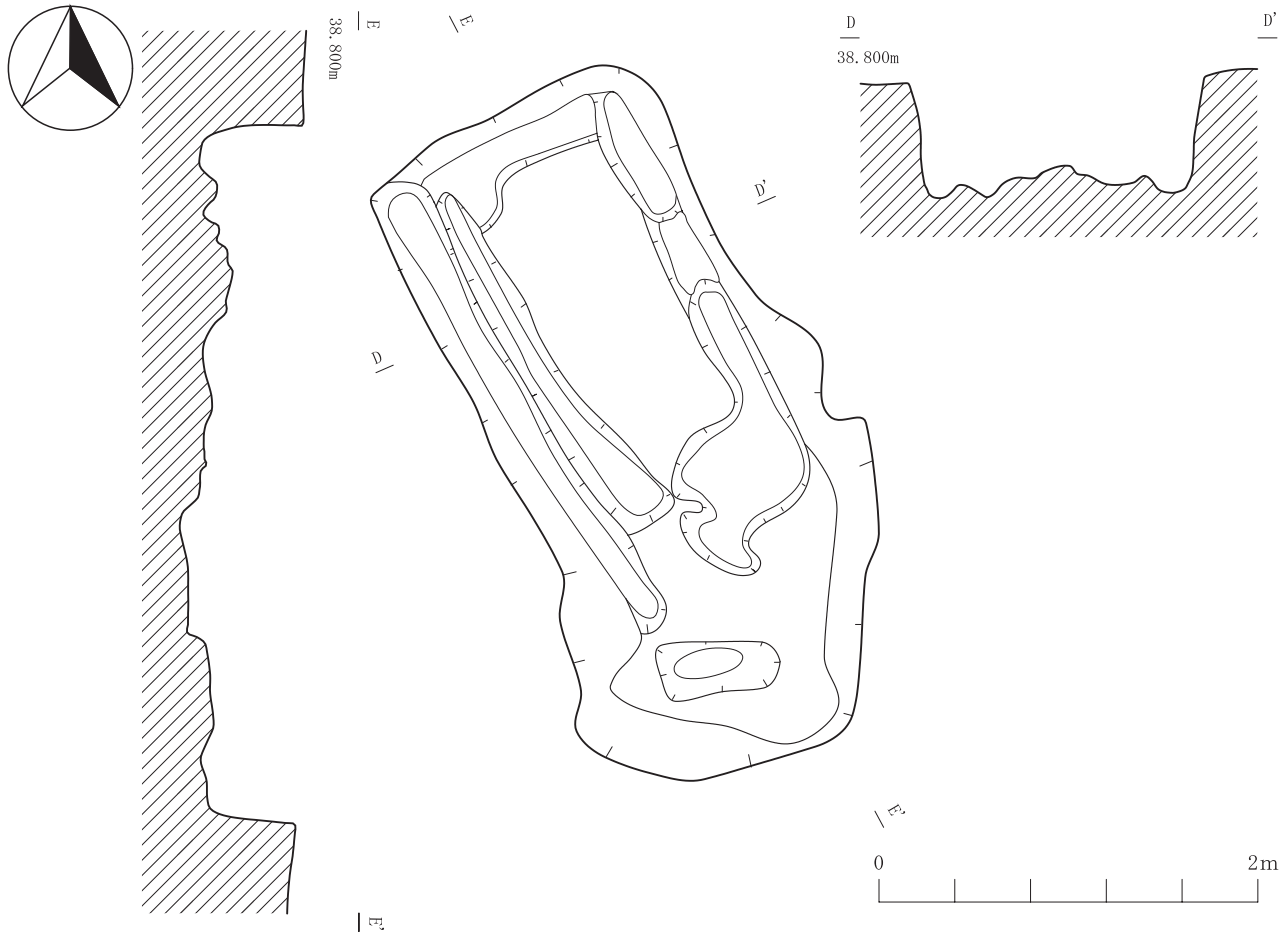


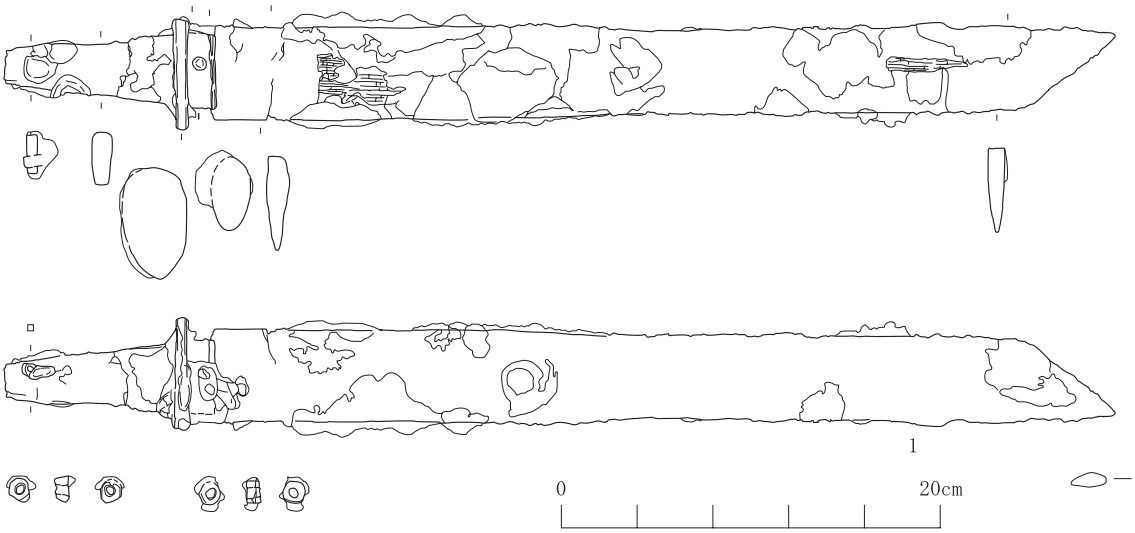
T1号墳　主体部

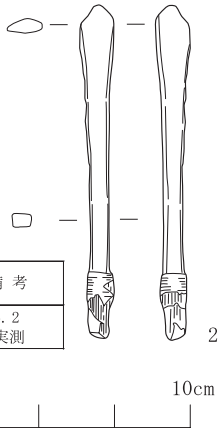
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	表土層
2層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒微量　φ2～3mm浮石粒微量含む
3層	褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒少量　φ2～5mm浮石粒多量含む しまり強
4層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量　砂粒少量含む
6層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量　黒色土2/1(10YR)多量 φ2～3mm浮石粒少量含む
7層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量　φ2～5mm浮石粒少量含む しまり強
8層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量　黄褐色土5/8(10YR)ブロック 暗褐色土2/3(10YR)含む
9層	褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒少量含む　しまり弱
10層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量　黄褐色土5/8(10YR)ブロック 黒褐色土2/3(10YR)多量含む　しまり弱
11層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒微量　砂粒微量含む　しまり強
12層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	褐色土4/6(10YR)ブロック多量含む
13層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量　φ2～3mm浮石粒多量含む、しまり弱
14層	黒色土	10YR2/1	シルト	褐色土4/6(10YR)多量含む
15層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒微量含む　しまり強
16層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量含む
17層	褐色土	10YR4/6	シルト	黒色土2/1(10YR)少量含む
18層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量　炭化粒少量含む
19層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒多量　φ2～3mm浮石粒多量含む
20層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒多量　φ2～3mm浮石粒少量含む
21層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量　炭化粒微量含む、しまり弱
22層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒多量　黄褐色土5/8(10YR)ブロック多量 φ2～3mm浮石粒少量含む
23層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量　φ2～5mm浮石粒少量含む しまり弱
24層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量含む

0　2m

第65図　T1号墳(3)





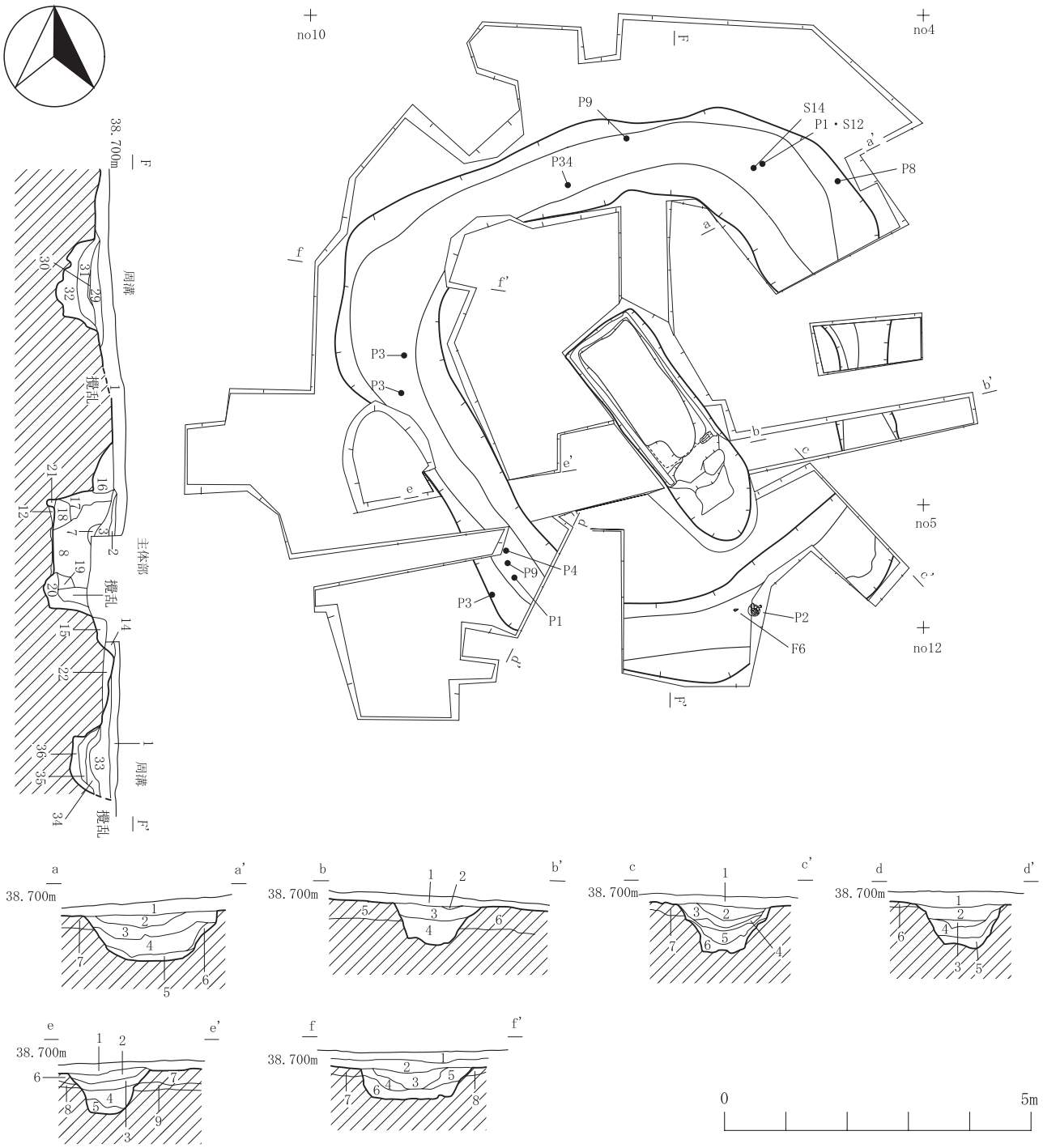


T1号墳　主体部出土

No.	器 種	層 位	全長(cm)	刀長(cm)	柄長(cm)	元巾(cm)	先巾(cm)	棟厚(cm)	特　徴
1	直 刀	床面直上	59.5	49.5	(9.1)	4.9	4.5	0.9	鋒:カマス 刀装具:鍄・鍔 茎に目釘が見られる 他に鵜目金具 →有機質の柄頭が存在した可能性が強い

No.	器 種	層 位	鏃身の形	全 長(cm)	鏃身部			頸部			茎部			備 考
					長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	
2	鉄 鏃	床 面	のみ頭式	(9.0)	2.3	1.3	0.5	6.7	0.7	0.4	(1.7)	0.8	0.8	実測No. 2 H18再実測

第 66 図　T1 号墳 (4)



T2号墳周溝　a－a'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
1層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	表土層　しまり強
2層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	φ2～3mm浮石粒微量含む　しまり強
3層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量　φ2～3mm浮石粒少量、火山灰微量含む　しまり弱
4層	黒色土　10YR2/1	シルト	ローム粒多量　黒褐色土2/2(10YR)多量　φ2～3mm浮石粒微量含む
5層	黒色土　10YR2/1	シルト	ローム粒多量　黒褐色土2/2(10YR)多量　φ2～3mm浮石粒微量 黄褐色5/8(10YR)ロームブロック多量含む　しまり弱
6層	黒褐色土10YR2/2	シルト	褐色土4/6(10YR)多量　黒色土1.7/1(10YR)少量含む　しまり弱
7層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	ローム粒微量含む

T2号墳周溝　b－b'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
1層	黒色土　10YR2/1	シルト	表土層　しまり弱
2層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒微量含む　しまり強
3層	黒色土　10YR2/1	シルト	φ3mm浮石粒微量含む　しまり強
4層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒中量　φ2～10cmロームブロック 少量含む　しまり強
5層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒微量、φ8mm浮石粒微量、小礫微量 含む　しまり強
6層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒中量含む　しまり強

T2号墳周溝　c－c'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
1層	黒褐色土10YR2/2	シルト	表土層　しまり強
2層	黒色土　10YR2/1	シルト	φ5mm浮石粒微量含む　しまり強
3層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒微量　φ5mmローム粒微量　φ5～10mm浮石粒 微量、火山灰微量含む　しまり強
4層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒少量　φ2～4cmロームブロック中量　φ2cm浮石粒 微量含む　しまり強
5層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒中量、φ5～15mmローム粒少量　φ8mm浮石粒 微量含む　しまり強
6層	褐色土　10YR4/4	シルト	ローム粒多量　φ1～5cmロームブロック中量含む　しまり弱
7層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒少量　φ18mm浮石粒微量含む　しまり弱

第67図　T2号墳(1)

T2号墳周溝　d－d’

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
１層	黒色土　10YR2/1	シルト	表土層　しまり強
２層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒微量　φ1cm浮石粒微量、砂粒微量 小礫微量含む　しまり強
３層	黒色土 10YR2/1	シルト	ローム粒少量　φ3～15mm浮石粒微量含む しまり強
４層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒多量　φ5mmローム粒少量 φ1～2.5cm浮石粒少量含む　しまり強
５層	暗褐色土10YR3/3 ～黄褐色土5/6	シルト	ローム粒多量　ロームブロックφ6cm中量含む しまり強
６層	黒褐色土10YR2/2	シルト	φ1mm浮石粒微量含む　しまり強

T2号墳周溝　e－e’

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
１層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	表土層　しまり強
２層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒微量　火山灰微量　しまり弱
３層	黒色土　10YR2/1	シルト	ローム粒微量　φ2～3mm浮石粒少量含む　しまり強
４層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒多量　φ2～5mm浮石粒少量含む　しまり弱
５層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒多量　φ5cmロームブロック多量　φ2～3mm 浮石粒微量含む　しまり強
６層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	黒褐色土2/2(10YR)少量含む　しまり弱　基本層Ⅱ
７層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量　木根多量含む　しまり弱　基本層Ⅱ
８層	暗褐色土10YR3/4	シルト	黒褐色土3/2(10YR)少量含む　しまり弱　基本層Ⅲ
９層	暗褐色土10YR3/4	シルト	黒褐色土3/2(10YR)少量含む　しまり弱　基本層Ⅲ

T2号墳周溝　f－f’

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
１層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	表土層　しまり強
２層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	1層よりしまり強
３層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	黒色土2/1(10YR)微量　φ2～5mm浮石粒少量含む　しまり強
４層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	ローム粒微量、黒褐色土2/2(10YR)多量　φ2～5mm浮石粒 少量含む　しまり弱
５層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	ローム粒微量、黒褐色土2/2(10YR)多量　φ2～5mm浮石粒 微量含む　しまり弱
６層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒多量　φ5～10cm黄褐色土5/8(10YR)ブロック多量 黒色土1.7/1(10YR)微量　φ2～5mm浮石粒多量含む　しまり弱
７層	暗褐色土10YR3/4	シルト	黒色土1.7/1(10YR)多量　φ2～3mm浮石粒少量含む　しまり弱
８層	暗褐色土10YR3/4	シルト	黒色土1.7/1(10YR)多量　φ1～2mm浮石粒微量含む　しまり弱

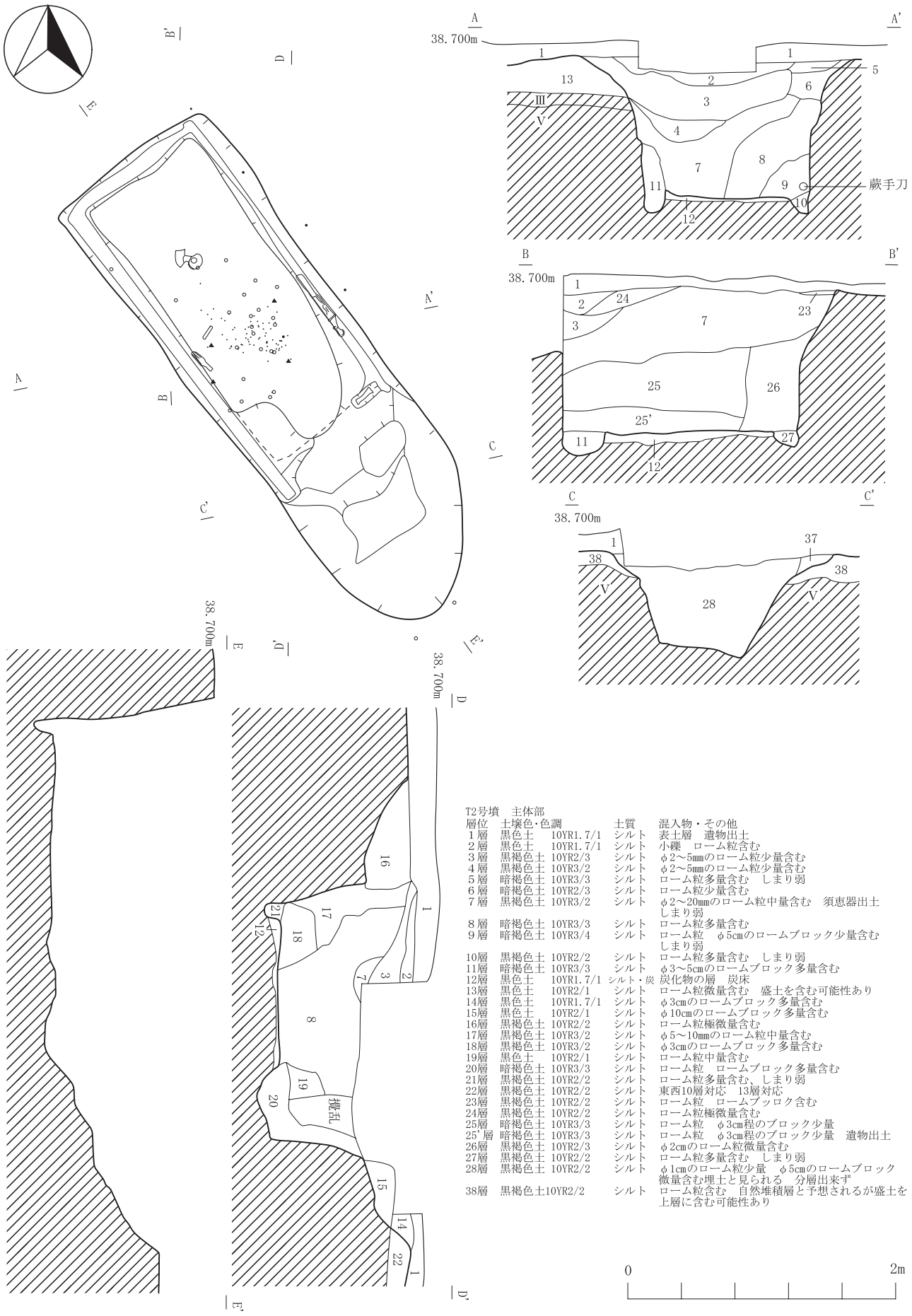
T2号墳　F－F’

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
１層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	表土層　遺物出土
２層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	小礫　ローム粒含む
３層	黒褐色土 10YR2/3	シルト	φ2～5mmのローム粒少量含む
７層	黒褐色土 10YR3/2	シルト	φ2～20mmのローム粒中量含む　須恵器出土 しまり弱
12層	黒色土　10YR1.7/1	シルト・炭	炭化物の層　炭床
14層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	φ3cmのロームブロック多量含む
15層	黒色土　10YR2/1	シルト	φ10cmのロームブロック多量含む
16層	黒褐色土 10YR2/2	シルト	ローム粒極微量含む
17層	黒褐色土 10YR3/2	シルト	φ5～10mmのローム粒中量含む
18層	黒褐色土 10YR3/2	シルト	φ3cmのロームブロック多量含む
19層	黒色土　10YR2/1	シルト	ローム粒中量含む
20層	暗褐色土 10YR3/3	シルト	ローム粒、ロームブロック多量含む
21層	黒褐色土 10YR2/2	シルト	ローム粒多量含む　しまり弱
22層	黒褐色土 10YR2/2	シルト	東西10層対応　13層対応
29層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	木根多量含む　しまり弱
30層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	φ2～3mm浮石粒微量、火山灰含む
31層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	ローム粒多量　黒褐色土2/2(10YR)多量 φ2～5mm浮石粒少量含む
32層	黒色土　10YR2/1	シルト	ローム粒多量　黄褐色土5/8(10YR)ブロック多量 φ2～5mm浮石粒少量含む　しまり強
33層	黒色土　10YR2/1	シルト	φ1～3mm浮石粒極微量　小礫微量含む しまり強(北側の続き参照)
34層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒中量　φ15mmローム粒微量含む しまり強
35層	黒色土 10YR2/1 ～黒褐色土10YR2/2	シルト	φ5～40mm微量含む　しまり弱
36層	暗褐色土10YR3/4	シルト	ローム粒多量　φ1～4cmロームブロック少量含む

が混じり、長頸瓶とよく似ている。他の遺物から推定される年代に近い資料として丹後平古墳第 15 号墳出土長頸瓶・短頸壺がある（工藤他 1991）。しかし、丹後平 15 号墳のものは肩部に明瞭な稜をもち、口縁部形態も本例とは異なる。管見では窯跡出土資料での類例を見出せず、現段階で年代をあてはめるには問題があるため、胎土分析等を含め改めて検討したい。

以上より、本遺構の構築時期は 8 世紀前葉前後と考える。

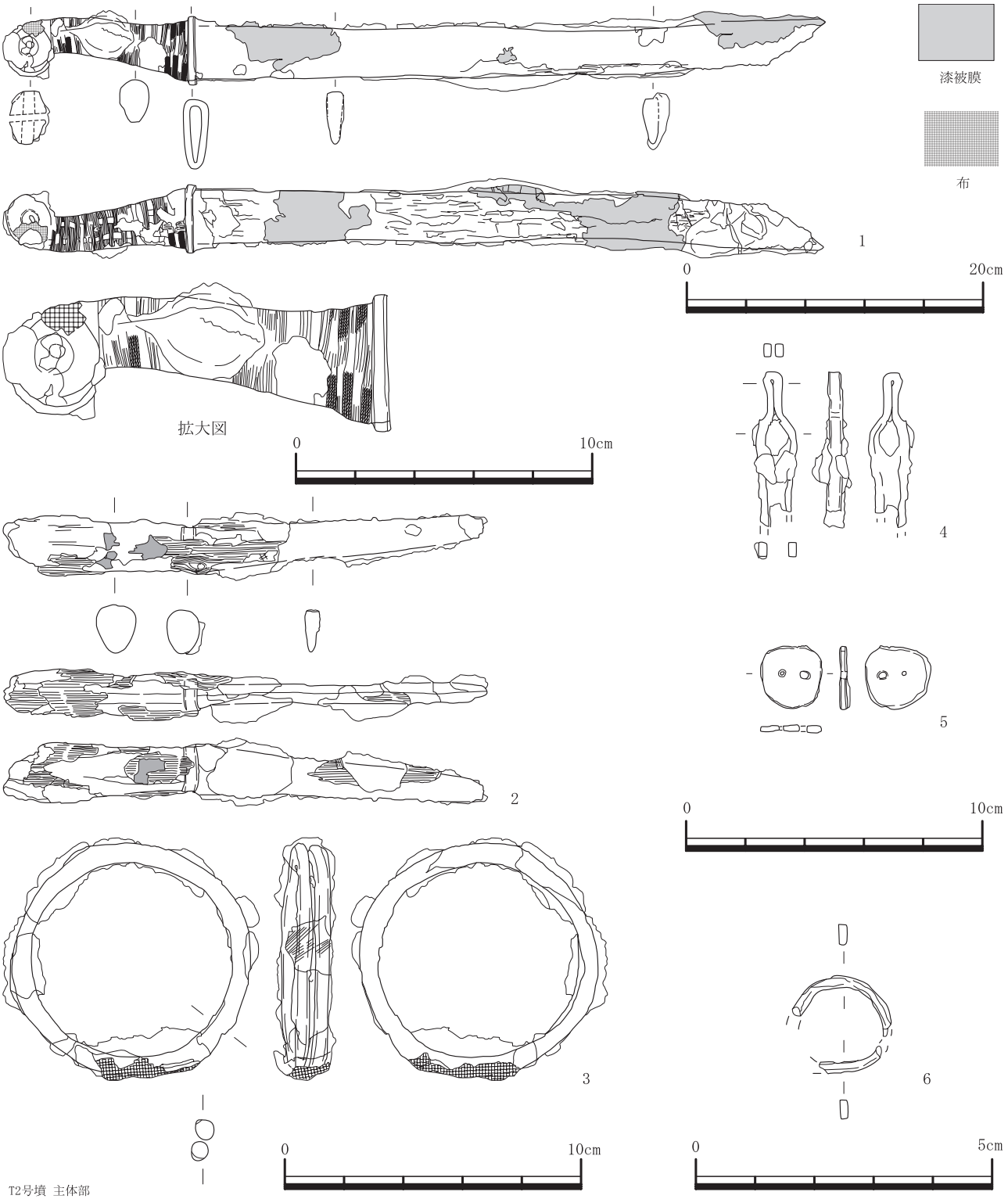
原典 G



T2号墳　主体部

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	表土層　遺物出土
2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	小礫　ローム粒含む
3層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	φ2～5mmのローム粒少量含む
4層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	φ2～5mmのローム粒少量含む
5層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	ローム粒多量含む　しまり弱
6層	暗褐色土	10YR2/3	シルト	ローム粒少量含む
7層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	φ2～20mmのローム粒中量含む　須恵器出土　しまり弱
8層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	ローム粒多量含む
9層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	ローム粒　φ5cmのロームブロック少量含む　しまり弱
10層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量含む　しまり弱
11層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	φ3～5cmのロームブロック多量含む
12層	黒色土	10YR1.7/1	シルト・炭	炭化物の層　炭床
13層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒微量含む　盛土を含む可能性あり
14層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	φ3cmのロームブロック多量含む
15層	黒色土	10YR2/1	シルト	φ10cmのロームブロック多量含む
16層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒極微量含む
17層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	φ5～10mmのローム粒中量含む
18層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	φ3cmのロームブロック多量含む
19層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒中量含む
20層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	ローム粒　ロームブロック多量含む
21層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量含む、しまり弱
22層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	東西10層対応　13層対応
23層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒　ロームブッロク含む
24層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒極微量含む
25層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	ローム粒　φ3cm程のブロック少量
25'層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	ローム粒　φ3cm程のブロック少量　遺物出土
26層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	φ2cmのローム粒微量含む
27層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量含む　しまり弱
28層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ1cmのローム粒少量　φ5cmのロームブロック微量含む埋土と見られる　分層出来ず
38層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒含む　自然堆積層と予想されるが盛土を上層に含む可能性あり

第68図　T2号墳(2)



T2号墳 主体部

No.	器 種	層 位	全 長(cm)	刃 長 (cm)	柄 長(cm)	元 巾(cm)	先 巾(cm)	棟 厚(cm)	鍔の材質	特　　徴
1	蕨手刀	床面直上	56.0	43.0	12.5	3.5	3.2	1.0	青銅製	鋒:カマス 平棟 柄は糸4本を単位として巻いている 鞘の木質残存 塗漆状の皮膜有り

No.	種 類	層 位	全 長(cm)	刀 長(cm)	柄 長(cm)	元 巾(cm)	備　考
2	刀 子	床 面	16.4	9.7	6.7	1.8	関部に青銅製の責金具あり 実測No.F5

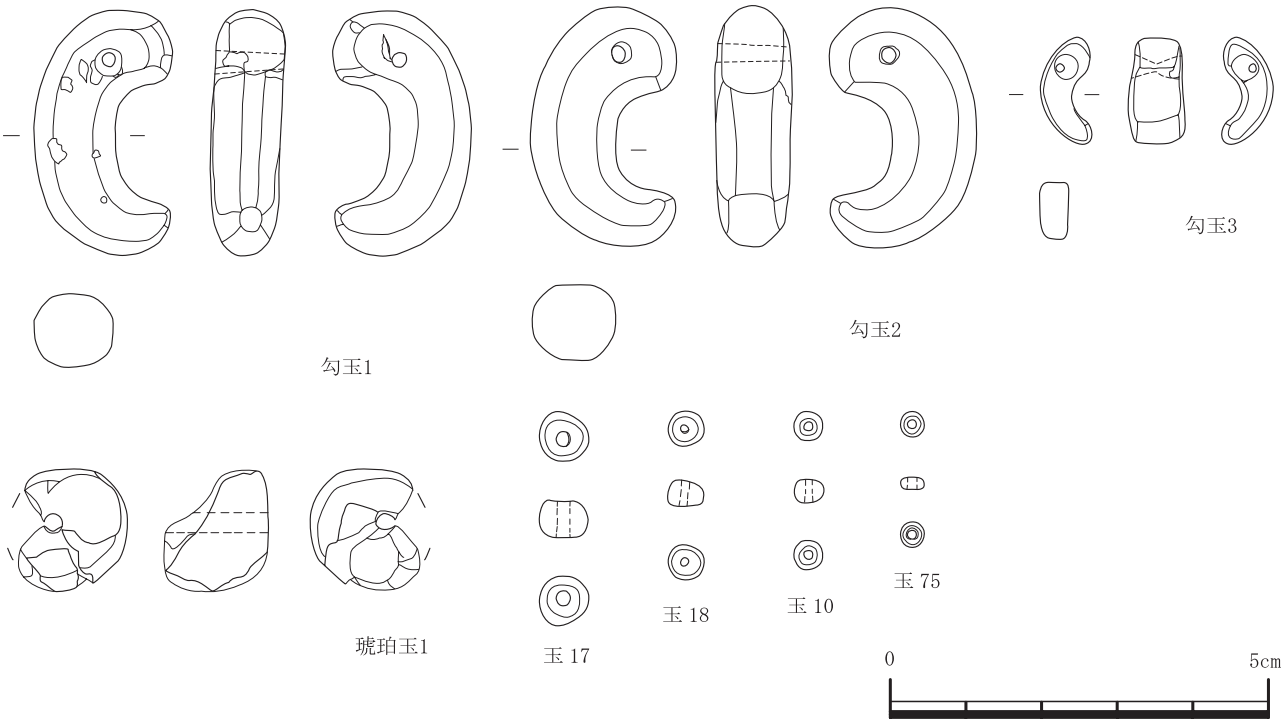
No.	器 種	層 位	外 径(cm)	内 径(cm)	断 面 径 ①	断 面 径 ②	備　考
3	釧	床 面	8.0	6.7	6mmの不整円形	5～6mmの不整円形	2重線 実測No.F6

No.	種 類	層 位	長 さ(cm)	巾(cm)	備 考
4	鏃子状鉄製品	床 面	(5.3)	1.4	

No.	器 種	層 位	長さ(cm)	巾(cm)	厚 さ(cm)	備　考
5	不 明	床 面	2.2	2.1	0.2	実測No.F7

No.	器 種	層 位	径(cm)	巾(cm)	厚 さ(cm)	備　考
6	環状銅製品	床面直上	1.6	0.3	0.15	

第69図　T2号墳(3)



T2号墳 主体部副葬品

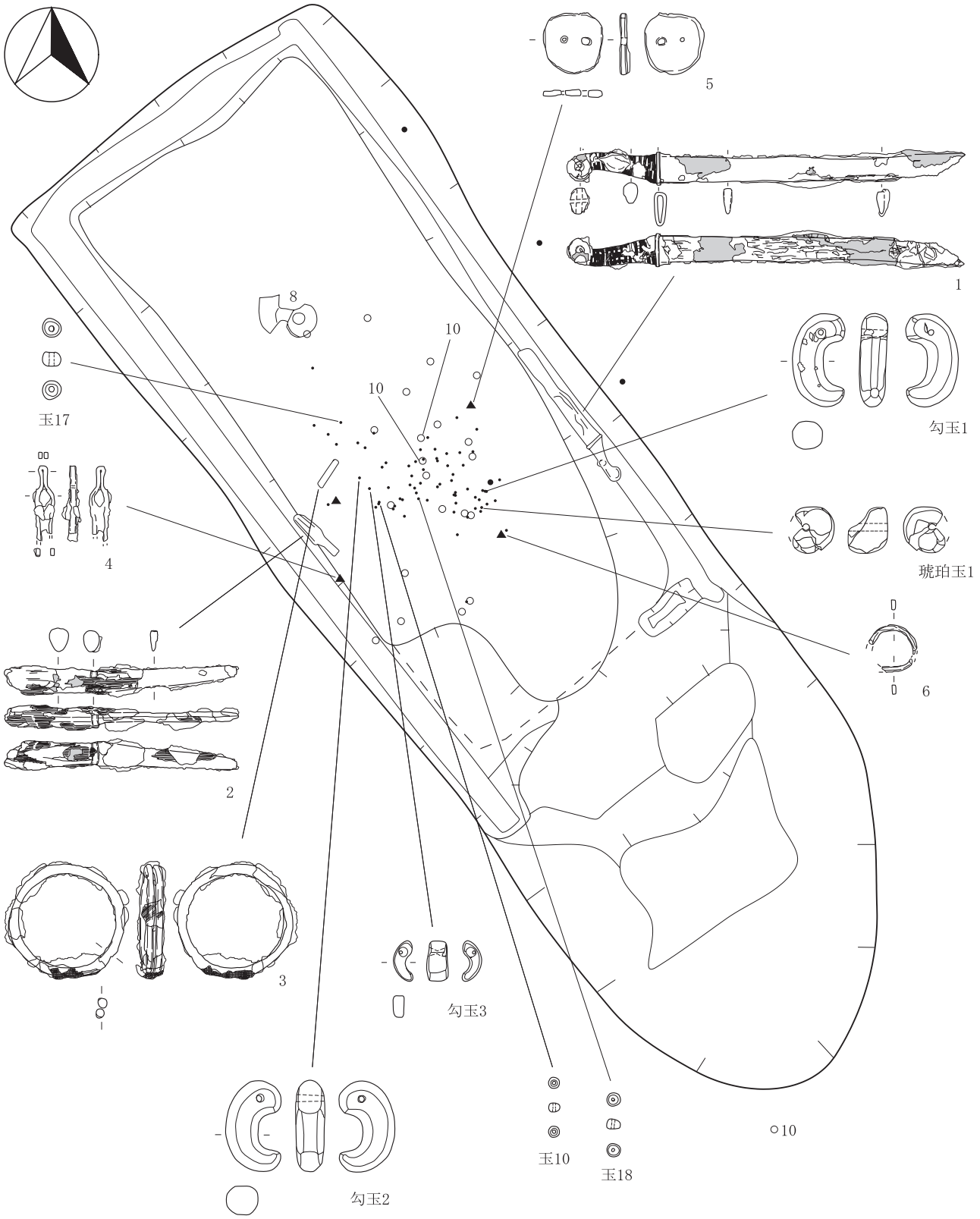
No.	器 種	材 質	層 位	径 (mm)	厚さ (mm)	重 さ (g)	備 考	B-No.
琥珀玉1	玉	琥 珀	床面直上	16.5	14.0	1.6	実測No.25	28

No.	器 種	材 質	層 位	長 さ (mm)	幅 (mm)	厚 さ (mm)	高 さ (mm)	重 さ (g)	備 考	B-No.
勾玉1	勾 玉	玉 髄	床面直上	32.5	18.5	10.5	9.5	7.2	片側穿孔 A→B	61
勾玉2	勾 玉	玉 髄	床面直上	32.0	19.5	10.0	11.0	8.5	片側穿孔 A→B	5
勾玉3	勾 玉	翡 翠	床面直上	14.0	7.0	7.5	4.0	1.1	両側穿孔	4

No.	器 種	材 質	層 位	径 (mm)	厚 さ (mm)	重 さ (g)	分 類	B-No.	備 考
1	小 玉	ガラス	床面直上	6.3	3.7	0.2	Ⅰ 類b	1	
2	小 玉	ガラス	床面直上	3.9	2.8	0.1未満	Ⅳ 類b	2	
3	小 玉	ガラス	床面直上	3.9	2.1	0.1未満	Ⅳ 類b		
4	小 玉	ガラス	床面直上	3.6	1.8	0.1未満	Ⅳ 類b		
5	小 玉	ガラス	床面直上	3.3	2.2	0.1未満	Ⅳ 類b		
6	小 玉	ガラス	床面直上	3.5	2.2	0.1未満	Ⅳ 類b		
7	小 玉	ガラス	床面直上	6.8	5.0	0.3	Ⅰ 類b	6	
8	小 玉	ガラス	床面直上	4.0	2.4	0.1	Ⅲ 類b	7	
9	小 玉	ガラス	床面直上	4.9	3.1	0.1	Ⅲ 類b	8	
10	小 玉	ガラス	床面直上	4.0	2.8	0.1	Ⅲ 類b	9	実測No.23
11	小 玉	ガラス	床面直上	4.1	2.3	0.1	Ⅲ 類b	10	
12	小 玉	ガラス	床面直上	4.0	2.5	0.1	Ⅲ 類b	11	
13	小 玉	ガラス	床面直上	3.9	2.4	0.1未満	Ⅳ 類b	12	
14	小 玉	ガラス	床面直上	3.8	1.9	0.1未満	Ⅳ 類b	13	
15	小 玉	ガラス	床面直上	6.0	4.4	0.2	Ⅰ 類a	14	
16	小 玉	ガラス	床面直上	7.1	4.9	0.3	Ⅰ 類a	15	
17	小 玉	ガラス	床面直上	7.2	5.3	0.4	Ⅰ 類a	16	実測No.21
18	小 玉	ガラス	床面直上	4.9	3.1	0.1	Ⅱ 類b	17	実測No.22
19	小 玉	ガラス	床面直上	3.3	2.2	0.1未満	Ⅳ 類b	18	
20	小 玉	ガラス	床面直上	3.9	2.3	0.1未満	Ⅳ 類b	19	
21	小 玉	ガラス	床面直上	4.7	3.1	0.1	Ⅲ 類b	20	
22	小 玉	ガラス	床面直上	3.8	2.1	0.1未満	Ⅳ 類b	21	
23	小 玉	ガラス	床面直上	3.9	2.8	0.1未満	Ⅳ 類b	22	
24	小 玉	ガラス	床面直上	3.9	1.9	0.1未満	Ⅳ 類a	23	
25	小 玉	ガラス	床面直上	5.7	3.6	0.2	Ⅱ 類b	24	
26	小 玉	ガラス	床面直上	4.7	3.6	0.1	Ⅲ 類b	25	
27	小 玉	ガラス	床面直上	3.8	2.5	0.1未満	Ⅳ 類b	26	
28	小 玉	ガラス	床面直上	4.0	2.0	0.1未満	Ⅲ 類b	27	
29	小 玉	ガラス	床面直上	3.8	2.2	0.1未満	Ⅳ 類b	29	
30	小 玉	ガラス	床面直上	3.5	2.0	0.1未満	Ⅳ 類b	30	
31	小 玉	ガラス	床面直上	4.0	2.1	0.1未満	Ⅲ 類b	31	
32	小 玉	ガラス	床面直上	3.8	2.1	0.1未満	Ⅳ 類b	32	
33	小 玉	ガラス	床面直上	3.8	2.1	0.1未満	Ⅳ 類b	33	
34	小 玉	ガラス	床面直上	3.9	2.4	0.1未満	Ⅳ 類a	34	
35	小 玉	ガラス	床面直上	3.9	2.5	0.1未満	Ⅳ 類b	35	
36	小 玉	ガラス	床面直上	3.9	2.4	0.1未満	Ⅳ 類b	36	
37	小 玉	ガラス	床面直上	3.8	2.1	0.1未満	Ⅳ 類b	37	
38	小 玉	ガラス	床面直上	4.0	2.8	0.1未満	Ⅲ 類b	38	
39	小 玉	ガラス	床面直上	-	-	0.1	-	39	粉 砕
40	小 玉	ガラス	床面直上	3.4	1.6	0.1未満	Ⅳ 類b	40	
41	小 玉	ガラス	床面直上	3.6	2.3	0.1未満	Ⅳ 類b	41	
42	小 玉	ガラス	床面直上	4.1	2.3	0.1未満	Ⅲ 類b	42	
43	小 玉	ガラス	床面直上	3.6	2.7	0.1未満	Ⅳ 類b	43	
44	小 玉	ガラス	床面直上	6.2	3.9	0.2	Ⅰ 類a	44	
45	小 玉	ガラス	床面直上	3.6	2.0	0.1未満	Ⅳ 類b	45	
46	小 玉	ガラス	床面直上	6.5	3.1	0.2	Ⅰ 類b	46	
47	小 玉	ガラス	床面直上	3.9	2.5	0.1未満	Ⅳ 類b	47	
48	小 玉	ガラス	床面直上	3.8	2.1	0.1未満	Ⅳ 類b	48	
49	小 玉	ガラス	床面直上	4.0	2.5	0.1未満	Ⅲ 類b	49	
50	小 玉	ガラス	床面直上	4.0	2.4	0.1未満	Ⅲ 類b	50	

第 70 図　T2 号墳 (4)

No.	器種	材質	層位	径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	分類	B-No.	備考
51	小玉	ガラス	床面直上	3.6	2.1	0.1未満	Ⅳ類b	51	
52	小玉	ガラス	床面直上	3.7	2.7	0.1未満	Ⅳ類b	52	
53	小玉	ガラス	床面直上	3.9	2.8	0.1未満	Ⅳ類b	53	
54	小玉	ガラス	床面直上	4.1	2.7	0.1	Ⅲ類b	54	
55	小玉	ガラス	床面直上	3.9	2.2	0.1未満	Ⅳ類b	55	
56	小玉	ガラス	床面直上	3.7	2.0	0.1未満	Ⅳ類b	56	
57	小玉	ガラス	床面直上	4.0	3.0	0.1未満	Ⅲ類b	57	
58	小玉	ガラス	床面直上	4.2	2.5	0.1未満	Ⅲ類b	58	
59	小玉	ガラス	床面直上	3.1	2.1	0.1未満	Ⅳ類b	59	
60	小玉	ガラス	床面直上	3.9	2.7	0.1未満	Ⅳ類b	60	
61	小玉	ガラス	床面直上	3.5	2.7	0.1未満	Ⅳ類b	62	
62	小玉	ガラス	床面直上	7.2	3.4	0.3	Ⅰ類b	63	
63	小玉	ガラス	床面直上	3.7	2.8	0.1未満	Ⅳ類b	64	
64	小玉	ガラス	床面直上	6.9	4.4	0.3	Ⅰ類b	65	
65	小玉	ガラス	床面直上	3.6	1.7	0.1未満	Ⅳ類b	66	
66	小玉	ガラス	床面直上	3.5	1.8	0.1未満	Ⅳ類b	67	
67	小玉	ガラス	床面直上	3.5	2.7	0.1未満	Ⅳ類b	68	
68	小玉	ガラス	床面直上	3.9	3.0	0.1未満	Ⅳ類b	69	
69	小玉	ガラス	床面直上	3.7	1.9	0.1未満	Ⅳ類b	70	
70	小玉	ガラス	床面直上	3.7	2.0	0.1未満	Ⅳ類b	71	
71	小玉	ガラス	床面直上	3.8	2.0	0.1未満	Ⅳ類b	72	
72	小玉	ガラス	床面直上	4.0	2.8	0.1未満	Ⅲ類b	73	
73	小玉	ガラス	床面直上	3.5	1.6	0.1未満	Ⅳ類b	74	
74	小玉	ガラス	床面直上	-	-	0.1未満	-	75	粉砕
75	小玉	ガラス	床面直上	3.3	1.7	0.1未満	Ⅳ類b	76	実測No.24
76	小玉	ガラス	床面直上	3.7	1.9	0.1未満	Ⅳ類b	77	
77	小玉	ガラス	床面直上	4.0	2.4	0.1未満	Ⅲ類b	78	
78	小玉	ガラス	床面直上	3.1	2.4	0.1	Ⅳ類a	79	
79	小玉	ガラス	床面直上	4.6	2.5	0.1	Ⅲ類b	80	
80	小玉	ガラス	床面直上	3.4	2.1	0.1未満	Ⅳ類b		
81	小玉	ガラス	床面直上	5.3	3.2	0.1	Ⅱ類b	81	
82	小玉	ガラス	床面直上	4.0	2.2	0.1未満	Ⅲ類b	82	
83	小玉	ガラス	床面直上	3.7	2.0	0.1未満	Ⅳ類b	83	
84	小玉	ガラス	床面直上	4.1	2.5	0.1	Ⅲ類b	84	
85	小玉	ガラス	床面直上	3.7	2.3	0.1未満	Ⅳ類b	85	
86	小玉	ガラス	床面直上	3.6	2.2	0.1未満	Ⅳ類b	86	
87	小玉	ガラス	床面直上	4.2	2.4	0.1	Ⅲ類b	87	
88	小玉	ガラス	床面直上	4.0	2.4	0.1未満	Ⅲ類b	88	
89	小玉	ガラス	床面直上	5.2	3.4	0.1	Ⅱ類b	89	
90	小玉	ガラス	覆土	5.8	2.6	0.2	Ⅱ類b	B-X	91
91	小玉	ガラス	覆土	6.3	3.4	0.2	Ⅰ類b	B-X	92
92	小玉	ガラス	覆土	5.4	3.4	0.2	Ⅱ類b	B-X	93
93	小玉	ガラス	覆土	6.2	3.1	0.2	Ⅰ類b	B-X	94
94	小玉	ガラス	覆土	4.0	2.2	0.1	Ⅲ類b	B-X	95
95	小玉	ガラス	覆土	3.9	2.7	0.1	Ⅳ類b	B-X	96
96	小玉	ガラス	覆土	4.1	2.6	0.1	Ⅲ類b	B-X	97
97	小玉	ガラス	覆土	4.6	2.6	0.1	Ⅲ類b	B-X	98
98	小玉	ガラス	覆土	3.9	2.5	0.1	Ⅳ類b	B-X	96
99	小玉	ガラス	覆土	4.0	2.4	0.1	Ⅲ類b	B-X	100
100	小玉	ガラス	覆土	4.1	2.6	0.1	Ⅲ類b	B-X	101
101	小玉	ガラス	覆土	3.9	2.6	0.1	Ⅳ類b	B-X	102
102	小玉	ガラス	覆土	4.2	2.1	0.1	Ⅲ類b	B-X	103
103	小玉	ガラス	覆土	4.2	2.6	0.1	Ⅲ類b	B-X	104
104	小玉	ガラス	覆土	4.2	2.8	0.1	Ⅲ類b	B-X	105
105	小玉	ガラス	覆土	4.2	2.5	0.1	Ⅲ類b	B-X	106
106	小玉	ガラス	覆土	4.1	2.1	0.1	Ⅲ類b	B-X	107
107	小玉	ガラス	覆土	3.9	2.5	0.1	Ⅳ類b	B-X	108
108	小玉	ガラス	覆土	4.0	2.6	0.1	Ⅲ類b	B-X	109
109	小玉	ガラス	覆土	3.9	2.6	0.1	Ⅳ類b	B-X	110
110	小玉	ガラス	覆土	3.8	2.5	0.1	Ⅳ類b	B-X	111
111	小玉	ガラス	覆土	3.8	2.1	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	112
112	小玉	ガラス	覆土	4.2	2.6	0.1未満	Ⅲ類b	B-X	113
113	小玉	ガラス	覆土	3.9	2.1	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	114
114	小玉	ガラス	覆土	3.9	2.0	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	115
115	小玉	ガラス	覆土	4.1	2.0	0.1未満	Ⅲ類b	B-X	116
116	小玉	ガラス	覆土	4.0	1.9	0.1未満	Ⅲ類b	B-X	117
117	小玉	ガラス	覆土	3.8	2.3	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	118
118	小玉	ガラス	覆土	3.8	2.1	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	119
119	小玉	ガラス	覆土	3.9	2.4	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	120
120	小玉	ガラス	覆土	3.6	2.1	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	121
121	小玉	ガラス	覆土	3.7	2.1	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	122
122	小玉	ガラス	覆土	3.9	2.1	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	123
123	小玉	ガラス	覆土	3.7	2.2	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	124
124	小玉	ガラス	覆土	3.7	1.9	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	125
125	小玉	ガラス	覆土	3.7	2.6	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	126
126	小玉	ガラス	覆土	3.8	2.1	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	127
127	小玉	ガラス	覆土	3.8	2.2	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	128
128	小玉	ガラス	覆土	3.7	1.9	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	129
129	小玉	ガラス	覆土	3.7	2.0	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	130
130	小玉	ガラス	覆土	3.7	2.1	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	131
131	小玉	ガラス	覆土	3.7	1.7	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	132
132	小玉	ガラス	覆土	3.6	1.7	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	133
133	小玉	ガラス	覆土	3.4	2.0	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	134
134	小玉	ガラス	覆土	3.6	2.2	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	135
135	小玉	ガラス	覆土	3.6	1.9	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	136
136	小玉	ガラス	覆土	3.4	2.0	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	137
137	小玉	ガラス	覆土	3.6	1.9	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	
138	小玉	ガラス	覆土	3.3	2.0	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	
139	小玉	ガラス	覆土	3.4	2.0	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	
140	小玉	ガラス	覆土	3.5	1.8	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	
141	小玉	ガラス	覆土	3.6	2.0	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	
142	小玉	ガラス	覆土	3.6	2.0	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	
143	小玉	ガラス	覆土	3.6	1.8	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	
144	小玉	ガラス	覆土	3.5	1.9	0.1未満	Ⅳ類b	B-X	



▲　鉄・銅製品

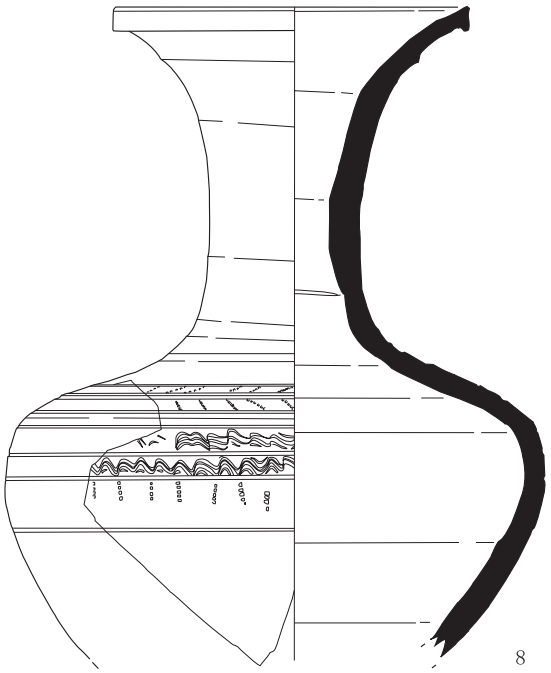
○　須恵器

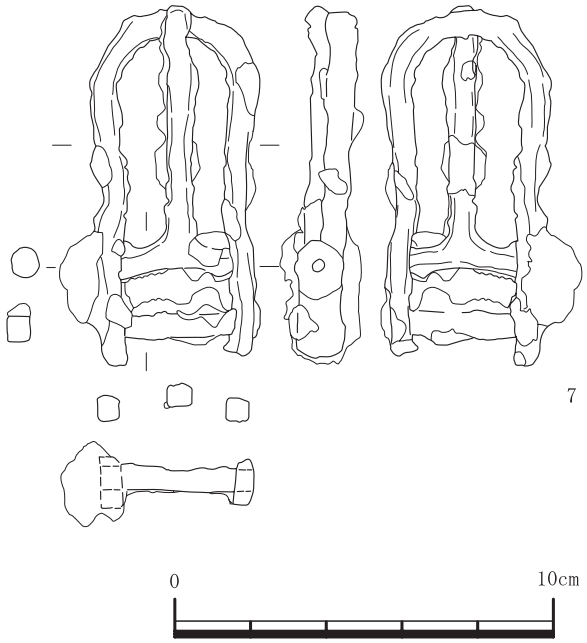
●　石器

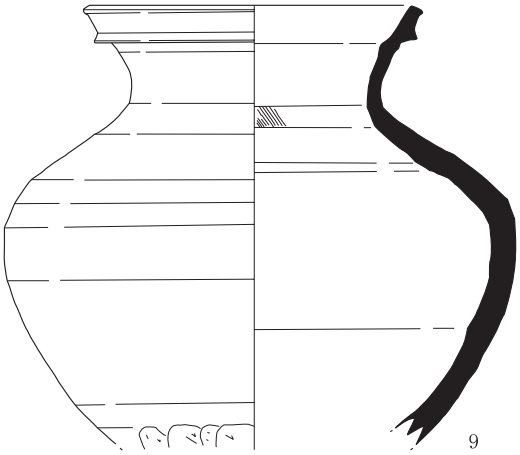
・　玉類

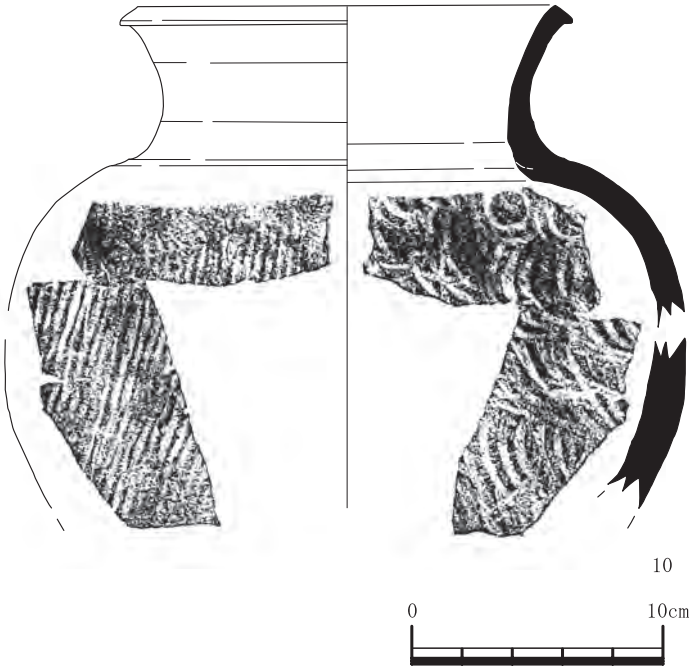
0　1m

第 71 図　T2 号墳 (5)









T2 号墳　出土遺物

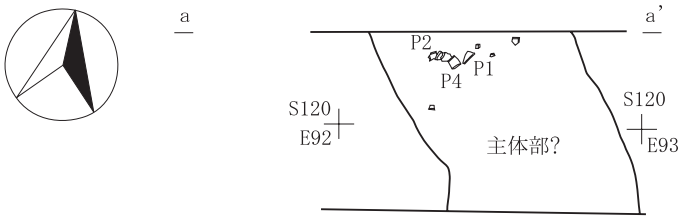
No.	器 種	層 位	全 長 (cm)	縁金 最大巾 (cm)	縁金 最小巾 (cm)	備　考
7	鉸 具	34 層	9.5	4.5	3.8	実測No.F1

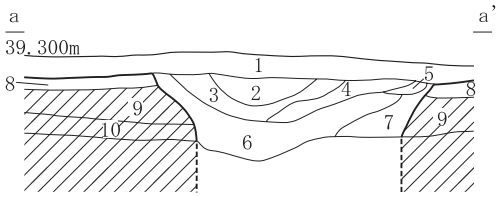
No.	器 種	層 位	種 類	口 径	器 高	最大径(cm)胴	外 面 調 整	内 面 調 整	備　考
8	長頸瓶	主体部26層 表土	須恵器	14.3	-	(21.6)	ロクロナデ 櫛描文	ロクロナデ	頸部と体部は別に作り接合 周溝 P26・P2・主体部(B-B')P54

No.	器 種	層 位	種 類	口 径(cm)	器 高(cm)	底 径(cm)	最大径(cm)胴部	外 面 調 整	内 面 調 整	備　考
9	短頸壺	周溝 34層	須恵器	13.5	-	-	20.5	ロクロナデ 一部ケズリ	ロクロナデ	sec F-F' P 19

No.	器 種	層 位	種 類	口 径 (cm)	外 面 調 整	内 面 調 整	備　考
10	甕	周溝表土 '99 I 層	須恵器	(18.2)	口縁-肩 ロクロナデ 一部ケズリ 体部 タタキ目 自然釉が見られる	口縁部 ロクロナデ 体部 アテ具痕	主体部 P11・39 周溝 P-X '99 S120 E80-100トレンチ

第 72 図　T2 号墳 (6)



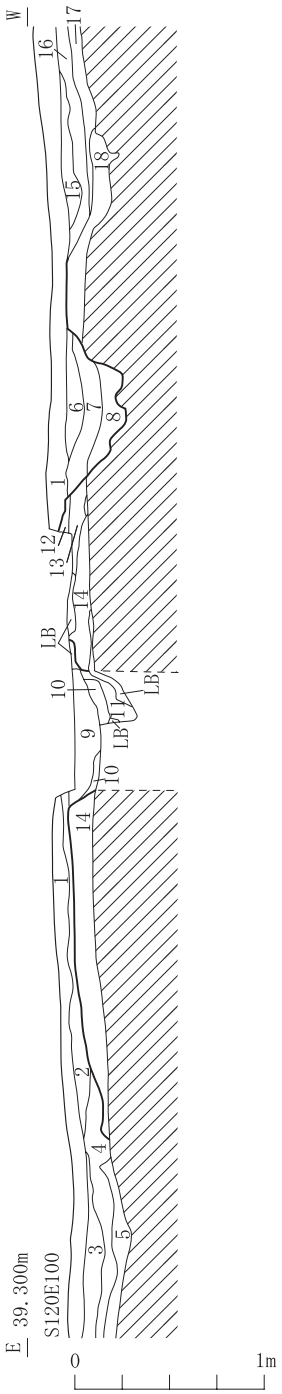


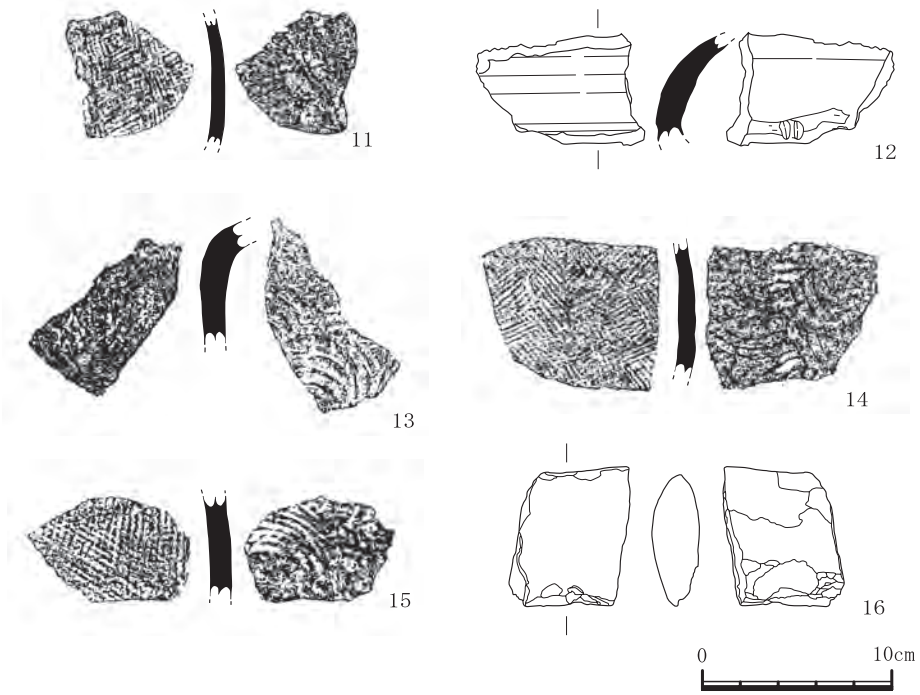
H11年度第1次調査T2号墳　a-a'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	表土層
第2層	黒色土	10ＹＲ1.7/1	シルト	φ5mmのパミス微量含む
第3層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	パミス微量含む
第4層	黒褐色土	10ＹＲ3/2	シルト	φ5～10mmの浮石含む　ローム質土混入　しまりなし
第5層	暗褐色土	10ＹＲ3/3	シルト	φ3～5mmのパミス多量含む　ローム質土混入
第6層	黒褐色土	10ＹＲ2/3	シルト	ローム粒中量含む　炭化物微量含む　しまり弱
第7層	黒褐色土	10ＹＲ2/2	シルト	ローム粒中量含む　φ2～4cmの(10YR5/8)ロームブロック含む　しまり強
第8層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	ローム粒中量含む　パミス含む
第9層	黒色土	10ＹＲ1.7/1	シルト	自然堆積　根の攪乱によるローム混在
第10層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	ローム粒少量含む

H11年度第1次調査T2号墳　E-W

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	表土層
第2層	黒色土	10ＹＲ1.7/1	シルト	浮石少量含む
第3層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	
第4層	黒色土	10ＹＲ1.7/1	シルト	黒色土（10ＹＲ2/１）少量含む
第5層	黒褐色土	10ＹＲ2/2	シルト	黒色土と暗褐色土が混在　φ2～5mmのパミス多量 φ5～10ｃｍのロームブロック含む
第6層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	
第7層	黒色土	10ＹＲ1.7/1	シルト	
第8層	黒褐色土	10ＹＲ2/2	シルト	
第9層	黒褐色土	10ＹＲ2/2	シルト	φ1～3cmのロームブロック中量含む　浮石含む
第10層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	φ3～10cmのロームブロック含む　浮石含む
第11層	黒褐色土	10ＹＲ2/2	シルト	
第12層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	ローム粒多量含む
第13層	黒褐色土	10ＹＲ2/2	シルト	ローム粒微量含む
第14層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	砂粒微量含む
第15層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	しまり弱
第16層	黒色土	10ＹＲ2/１	シルト	
第17層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	砂粒少量含む
第18層	黒褐色土	10ＹＲ2/2	シルト	黒色土 暗褐色土多量含む　砂粒含む　ロームブロック含む





No.	種類	層位	部位	外面調整	内面調整	備考	No.
11	須恵器	主体部覆土	胴部	タタキ目	あて具痕	S120E80～100	5
12	須恵器	主体部覆土	頸部	ロクロナデ	ロクロナデ　ケズリ	S120E80～100, 主体部 P-7	16
13	須恵器	Ⅰ層	胴部	タタキ目　自然釉	あて具痕　ロクロナデ	S120E80～100	20
14	須恵器	主体部覆土	胴部	タタキ目　ナデ	あて具痕	S120E80～100　主体部 P-1	22
15	須恵器	Ⅰ層	底部	タタキ目→ナデ（自然釉）	あて具痕→ナデ	S120E80～100	24

No.	器種	層位	最大計測値			重さ(ｇ)	石質	出土位置	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				
16	?	覆土	73.0	66.0	26.5	197.2	安山岩	S120 E80～100	

第73図　T2号墳（7）

T3 号墳（第 74 ～ 77 図　図版 24・25）

位置　N30 ～ 31、030 ～ 31 にかけて、平成 16 年度調査で表土を除去した段階、Ⅱ～Ⅲ層上で確認した。平成 17 年に、全体を掘削するため、西側と南側の立ち木を伐採し拡張した。

周溝　南東側と北西側の 2 箇所が途切れる。円形ととらえれば、内径 5.28 ～ 5.4m、外径 7.4 ～ 7.9m である。幅は上場 0.81 ～ 1.40m、下場 0.3 ～ 1.0m、深さ 0.3 ～ 0.4m である。

堆積土は黒色から黒褐色土であり、最下層にロームブロックを含み、埋め戻した、もしくは墳丘構築中に崩れたものが放置された、つまり埋葬行為時に床面であったものと考えられる。

なお、周溝に囲まれた墳丘部の堆積土、第 75 図 C セクション 8 層は浮石・ローム粒を多量に含む均質ではない土壌であり、当初盛土の可能性を考えた。しかし周溝外、B セクション 5 層も同様であった。このため自然堆積層であるか、周溝外にも末期古墳が存在し、双方が盛土である、もしくは広く造成が行われた、という可能性が考えられた。B セクション北西約 2.5m の地点には 5 号墳の周溝が存在するため、間に末期古墳がある可能性はなく、広範囲の造成も考えにくいので自然堆積層（Ⅴ層）であると考えられる。

主体部　平面形は長軸上場 2.56m、短軸上場 1.45m の長方形を基調とする。堆積土は黒色から黒褐色である。南西側に張り出しがみられる。堆積土の観察からは、主体部に伴うか、2 層堆積以前の掘削とみられたが、ほぼ主体部の底面と同じ深さであり、底部は平坦に掘られているなど、本遺構に伴う可能性が高いと判断した。

残りは良くないが、炭化材が断面及び底面付近で観察された。断面図 a の a’ 側では小口板と蓋の痕跡とみられる層、8・12 層が明瞭に観察された。長辺側は断面 b ・c ともに 19 層や 33 層のような、炭化材の痕跡が観察された。小口には厚さ 5 ～ 8cm の板材を立て、側面には直径 10cm 前後の丸い杭を立てていたと推定される。杭に板材を立てかけた可能性がある。一方掘り方であるが、杭に対応する穴や溝は見られず、小口板埋め込み式の主体部構造であることがわかった。また、南東側には側板を押さえる機能をもったとみられる掘り方が、小口板をはめる溝の両脇にあり、板を用いて主体部を構築していたことはほぼ確実と考えられる。

主軸方向は N-50°　-W である。

重複　周溝が溝状土坑を切っている。

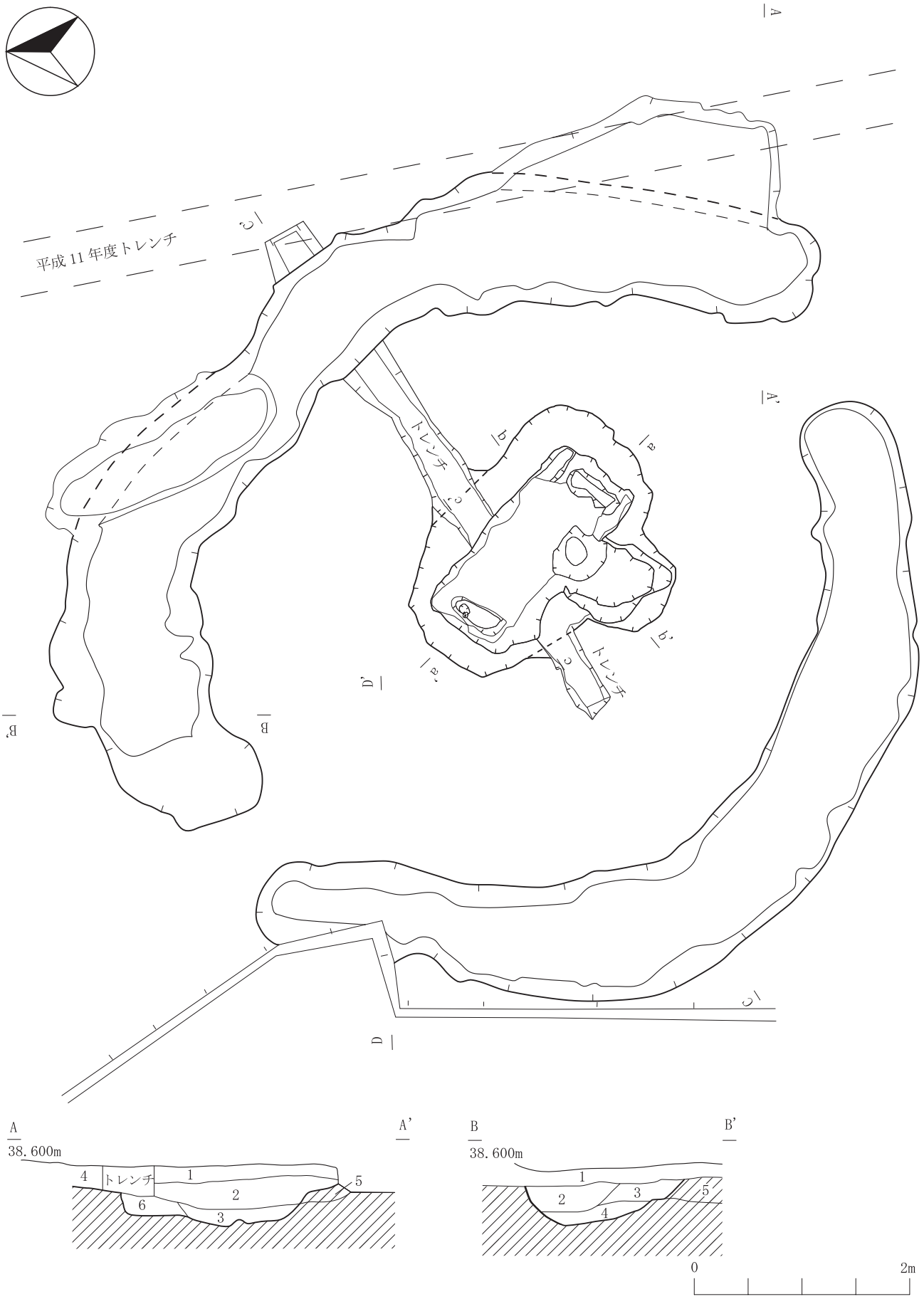
出土遺物（第 77 図　図版 33・34）

平成 16・17 年にかけて、主体部から、勾玉 5 点、切子玉 1 点、管玉 1 点、ガラス小玉 76 点、小玉 1 点、刀子、釧が出土した。勾玉の材質は全て瑪瑙製であり、5・7 は破損している。刀子の 4・9 は同一個体の可能性がある。釧は錫製とみられる。

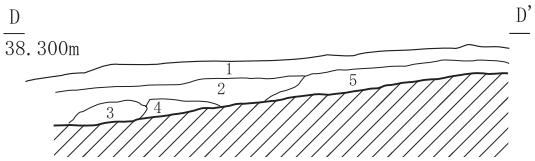
ガラス小玉は、粉砕され鋳型で再び作られたものを B 類、それ以外の引き伸ばし等で作成されたもの A 類、どちらとも判断が付かなかったもの C 類とした。A 類・C 類は全て図示し、顕微鏡写真を図版に掲載した。

小結　炭化材の痕跡が残っていたことにより、主体部の構造を考える上で貴重な資料となった。床の構造は小口板埋め込み式であり、側板と蓋にあたる痕跡も確認した。勾玉・ガラス玉とも使用期間の幅が広いなど、時期を特定するのに有利な遺物が出土しなかった。こうした装飾品が出土したものは阿光坊 3・6・9b 号墳、天神山 2・4 号墳と少なく、それらの時期は 7 世紀中・後半から 8 世紀前半代であることから、概ね 3 号墳もこれらと平行するものと推測する。

原典 G


平成11年度トレンチ
トレンチ
トレンチ
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
a
a'
b
b'
c
c'
A
38.600m
A'
4
トレンチ
1
2
3
5
6
B
38.600m
B'
1
2
3
4
5
0
2m

第74図　T3号墳(1)



T3号墳　周溝　A－A'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	表土層
第２層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	パミス微量含む しまりあり
第３層	黒褐色土2/3(10YR)	シルト	ロームブロック ローム質土混入 しまりあり
第４層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	2層対応 しまりあり
第５層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	パミス粒少量含む しまり強 盛土もしくは自然堆積（墳丘）
第６層	暗褐色土3/3(10YR)	シルト	パミス多量含む

T3号墳　周溝　B－B'

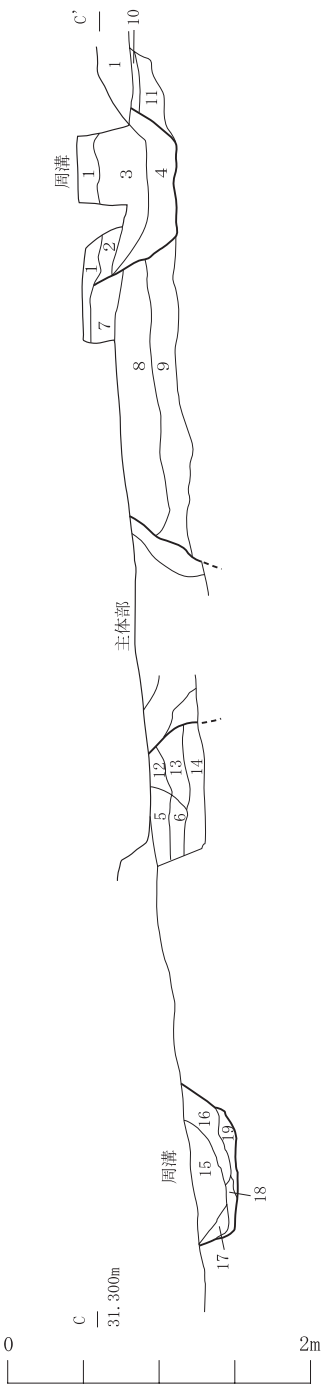
層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	パミス含む 表土層
第２層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	パミス微量含む しまりあり
第３層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	ローム粒微量含む しまりあり
第４層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	ロームブロック多量含む しまりあり
第５層	暗褐色土3/4(10YR)	粘土	パミス含む しまりあり 自然堆積？

T3号墳　周溝　C－C'

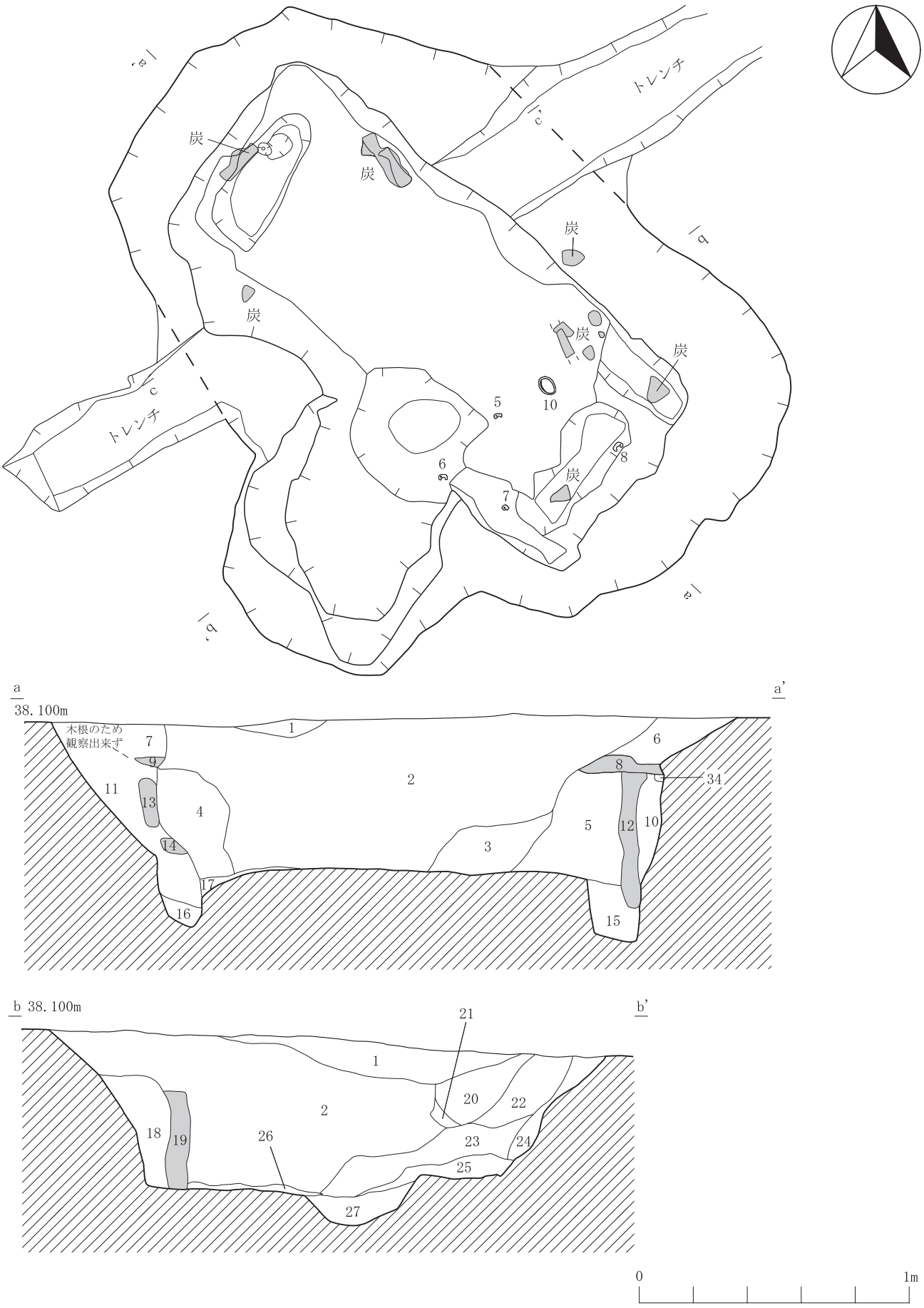
層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒褐色土10YR2/2	シルト	表土層
第２層	黒色土10YR1.7/1	シルト	ローム粒微量含む しまりあり
第３層	黒色土10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量含む しまりあり
第４層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒多量含む ロームブロック含む しまりあり
第５層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒微量含む しまりあり
第６層	黒褐色土10YR2/2	シルト	φ1cmのローム粒含む しまりあり
第７層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒微量含む しまりあり 盛土？
第８層	暗褐色土10YR3/3	シルト	φ5～10mmのローム粒・パミス多量含む しまりあり(自然堆積)
第９層	黄褐色土10YR5/6	粘土	八戸火山灰
第10層	明褐色土10YR5/8	浮石	八戸火山灰
第11層	黄褐色土10YR5/6	粘土	9層対応
第12層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒多量含む しまりあり (盛土 自然堆積両方の可能性あり)
第13層	暗褐色土10YR3/4	シルト	ローム粒・パミス多量含む しまりあり 8層対応
第14層	黄褐色土10YR5/6	粘土	9層対応
第15層	黒色土10YR2/1	シルト	ローム粒微量含む しまりあり
第16層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス微量含む しまりあり
第17層	黒色土10YR2/1	シルト	ローム粒少量含む しまりあり
第18層	黒褐色土10YR2/3	粘土	パミス含む しまりあり
第19層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス含む ローム粒多量含む しまりあり

T3号墳　周溝　D－D'

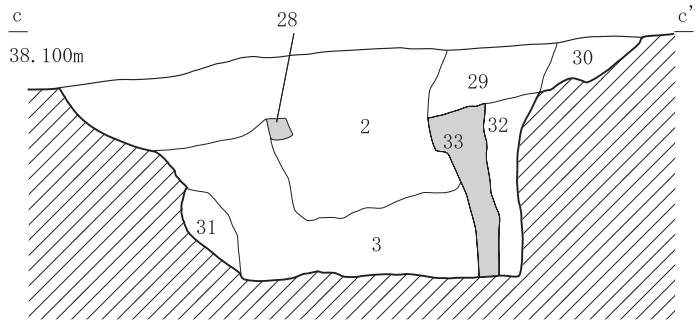
層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒褐色土10YR2/2	シルト	表土層
第２層	黒色土10YR2/1	シルト	しまり弱
第３層	黒色土10YR1.7/1	シルト	ローム粒含む パミス含む しまりあり 周溝覆土
第４層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒含む しまりあり 墳丘
第５層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒含む しまりあり 墳丘



第75図　T3号墳(2)

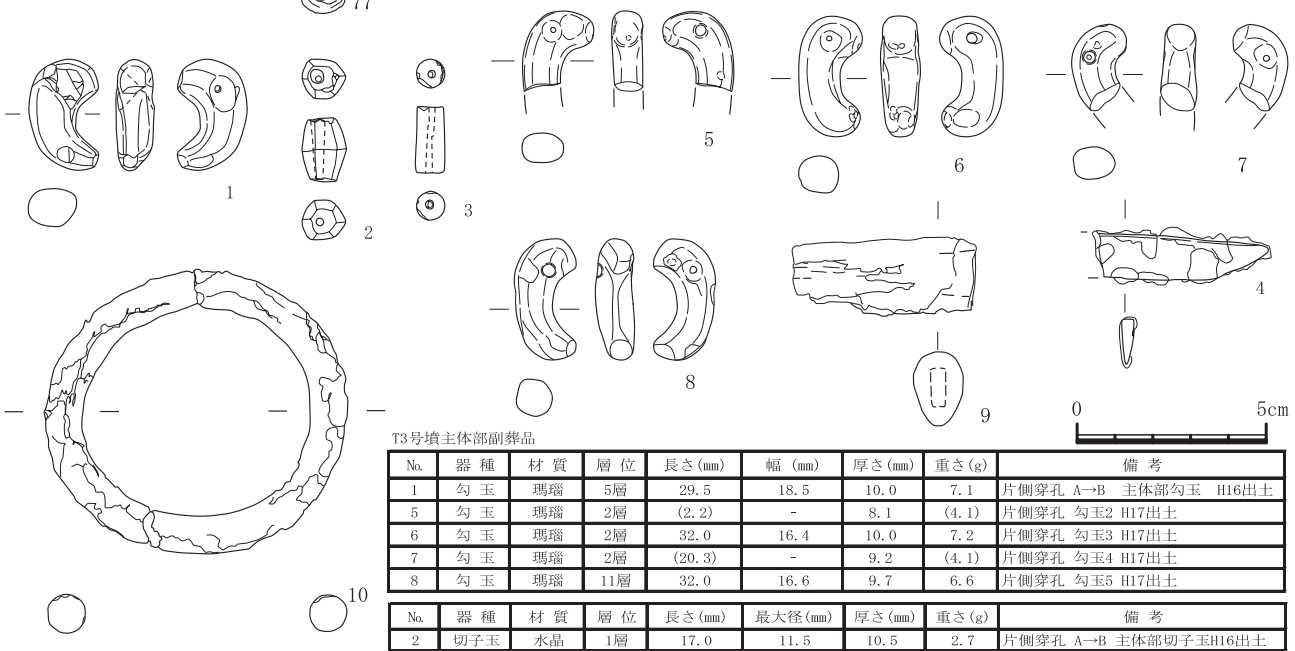


第 76 図　T3 号墳 (3)



T3号墳主体部

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第1層	黒色土10YR1.7/1	シルト	浮石粒中量含む
第2層	黒褐色土10YR2/3	シルト	φ5～30mmのローム粒中量含む 切子玉出土層 しまりあり
第3層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒含む しまりあり
第4層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス含む しまりあり
第5層	黒褐色土10YR2/2	シルト	φ5mmのローム粒微量含む しまり弱
第6層	黒褐色土10YR2/3	シルト	φ2mmのローム粒微量含む 棺蓋埋め土？
第7層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス微量含む しまりあり棺蓋埋め土？
第8層	黒色土10YR1.7/1	シルト	土壌化しているが蓋痕と見られる層
第9層	黒色土10YR1.7/1	シルト	土壌化しているが蓋痕と見られる層
第10層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒微量含む しまりあり 裏込め土
第11層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒含む 裏込め土
第12層	黒色土10YR1.7/1	シルト	土壌化しているが小口板と見られる層
第13層	黒色土10YR1.7/1	シルト	土壌化しているが小口板と見られる層
第14層	黒色土10YR1.7/1	シルト	土壌化しているが小口板と見られる層
第15層	黒褐色土10YR2/3	シルト	浮石粒含む ローム粒多量含む しまりあり
第16層	黒色土10YR2/1	シルト	浮石粒含む しまりあり
第17層	黒褐色土10YR2/2	シルト	浮石粒多量含む 遺物を多量に含む層 しまりあり
第18層	黒褐色土10YR2/2	シルト	φ1.5～2cmのローム粒少量含む しまりあり
第19層	黒色土10YR1.7/1	シルト	土壌化しているが側板と見られる層
第20層	黒褐色土10YR2/2	シルト	浮石粒微量含む しまりあり
第21層	黒褐色土10YR2/2	シルト	しまり弱 木根による撹乱
第22層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス少量含む しまりあり
第23層	黒褐色土10YR2/2	シルト	φ1.5～2cmのローム粒少量含む しまりあり
第24層	褐色土10YR4/4	シルト	ローム粒多量含む しまり弱
第25層	黒褐色土10YR2/3	シルト	φ3cmのロームブロック含む しまりあり
第26層	黒褐色土10YR2/2	シルト	浮石粒含む 遺物を多量に含む賞
第27層	黒色土10YR1.7/1	シルト	ローム粒含む しまりあり
第28層	黒色土10YR1.7/1	シルト	土壌化しているが炭化材と見られる層 しまりあり
第29層	黒色土10YR2/1	シルト	パミス微量含む しまりあり
第30層	黒褐色土10YR2/3	シルト	パミス中量含む しまりあり
第31層	黒褐色土10YR2/3	シルト	パミス中量含む ローム粒中量含む しまりあり
第32層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス含む ローム粒含む 裏込め土
第33層	黒色土10YR1.7/1	シルト	土壌化しているが側板と見られる層
第34層	褐色土10YR4/6	粘土	ロームブロック



T3号墳主体部副葬品

No.	器種	材質	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	勾玉	瑪瑙	5層	29.5	18.5	10.0	7.1	片側穿孔 A→B 主体部勾玉 H16出土
5	勾玉	瑪瑙	2層	(2.2)	-	8.1	(4.1)	片側穿孔 勾玉2 H17出土
6	勾玉	瑪瑙	2層	32.0	16.4	10.0	7.2	片側穿孔 勾玉3 H17出土
7	勾玉	瑪瑙	2層	(20.3)	-	9.2	(4.1)	片側穿孔 勾玉4 H17出土
8	勾玉	瑪瑙	11層	32.0	16.6	9.7	6.6	片側穿孔 勾玉5 H17出土

No.	器種	材質	層位	長さ(mm)	最大径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
2	切子玉	水晶	1層	17.0	11.5	10.5	2.7	片側穿孔 A→B 主体部切子玉H16出土
3	管玉	碧玉	4層	17.5	7.8	-	2.0	両側穿孔 主体部管玉H16出土

No.	器種	層位	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	備考
4	刀子	主体部1層上	(4.5)	1.2	0.3	F-1・H16出土
9	刀子	主体部2層	(4.9)	2	1.3	4と同一個体か？

No.	器種	層位	長径(cm)	短径(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	備考
10	釧	主体部2層	8.0	7.5	1.0	1.0	錫?

第77図 T3号墳(4)

番号	重さ	直径	厚さ	注記	分類	破片	特徴	層位	備考
1	0.1以下	3.3	3.0	T3B8	A		引き伸ばし		
2	0.1	4.3	2.4	T3BX	A				
3	0.1以下	4.2	2.2	T3B1	B			2 層	
4	0.1	(3.8)	(2.3)	T3B2	B	破損		2 層	
5	0.1	4.6	2.5	T3B3	B		小突起	2 層	
6	0.1	4.0	2.7	T3B4	B		小突起	2 層	
7	0.1	3.8	2.0	T3B5	B			2 層	
8	0.1以下	3.6	1.5	T3B6	B		小突起		
9	0.1以下	3.9	2.1	T3B7	B				
10	0.1以下	3.9	2.1	T3B9	B				
11	0.1	4.0	3.2	T3BX	B				
12	0.1	4.4	2.6	T3BX	B				
13	0.1	4.0	2.2	T3BX	B		小突起		
14	0.1	4.1	2.8	T3BX	B				
15	0.1以下	3.6	2.4	T3BX	B		小突起		
16	0.1以下	3.5	2.1	T3BX	B		小突起		
17	0.1以下	3.8	2.6	T3BX	B		小突起		
18	0.1以下	3.9	2.4	T3BX	B		小突起		
19	0.1以下	3.7	2.5	T3BX	B		小突起		
20	0.1以下	4.0	2.0	T3BX	B		小突起		
21	0.1以下	3.7	1.9	T3BX	B		小突起		
22	0.1以下	3.6	1.9	T3BX	B		小突起		
23	0.1以下	3.5	2.3	T3BX	B		小突起		
24	0.1以下	3.8	1.8	T3BX	B				
25	0.1以下	3.7	1.4	T3BX	B		小突起		
26	0.1以下	3.5	1.8	T3BX	B				
27	0.1以下	3.7	1.8	T3BX	B	破損	小突起		
28	0.1以下	(3.7)	1.9	T3BX	B	破損			以上H16出土
29	0.1以下	3.6	1.7	T3B29	B				以下H17出土
30	0.1以下	3.5	2.2	T3B30	B				
31	0.1以下	3.4	2.8	T3B31	B				
32	0.1以下	3.4	1.8	T3B32	B				
33	0.1	3.4	1.7	T3B33	B				
34	0.1以下	4.5	2.3	T3B34	A		引き伸ばし		第77図掲載
35	0.1以下	3.6	1.8	T3B35	B				
36	0.1	4.2	2.9	T3B36	B				
37	0.1	3.6	1.9	T3B37	B				
38	0.1以下	3.3	1.8	T3B38	C		気泡多い		
39	0.1以下	3.3	1.6	T3B39	A				第77図掲載
40	0.1以下	3.4	2	T3B40	B				
41	0.1以下	3.4	1.5	T3B41	C				第77図掲載
42	0.1以下	3.5	2.2	T3B42	B				
43	0.1以下	3.4	1.5	T3B43	C				第77図掲載
44	0.1以下	3.2	1.4	T3B44	B				
45	0.1以下	3.6	2.4	T3B45	A		引き伸ばし		第77図掲載
46	0.1以下	3.3	2.5	T3B46	B				
47	0.1以下	3.4	1.8	T3B47	B				
48	0.1以下	3.6	1.7	T3B48	B		小突起		
49	0.1以下	3.6	1.6	T3B49	B				
50	0.2	5.1	3.4	T3B50	A				第77図掲載
51	0.1	4.1	2.5	T3B51	B		小突起		
52	0.1以下	4.1	2.1	T3B52	B		小突起		
53	0.1以下	4.2	2.9	T3B53	B		気泡多い		
54	0.1以下	3.6	2.1	T3B54	B				
55	0.1以下			T3B55	B		粉砕		
56	0.1以下	3.7	2.3	T3B56	B				
57	0.2	5.3	3.8	T3B57	A		引き伸ばし		第77図掲載
58	0.1	4.2	2.5	T3B58	A				第77図掲載
59	0.1	4.1	2.7	T3B59	B				
60	0.1	4.5	2.5	T3B60	B				
61	1.3	10.9	7.8	T3B61	A				第77図掲載
62	0.1以下	4.2	2.8	T3B62	B		小突起		
63	0.1以下	4	1.9	T3B63	B				
64	0.1以下	3.7	2.3	T3B64	B		小突起		
65	0.1以下	3.9	2.7	T3B65	B				
66	0.1以下	3.8	2.9	T3B66	B				
67	0.1以下	3.6	2.6	T3BX	B				
68	0.1以下	3.9	2.5	T3BX	B				
69	0.1以下	3.8	1.9	T3BX	B				
70	0.1以下	4.3	2.1	T3BX	B				
71	0.1	4	2.9	T3BX	B				
72	0.1	5.6	2.7	T3BX	A				第77図掲載
73	0.1以下	4	2.1	T3BX	C				第77図掲載
74	0.1以下	4	2.1	T3BX	B				
75	0.1	4.9	2.5	T3BX	A		引き伸ばし		第77図掲載
76	0.1以下	(4.4)	2.3	T3BX	B				欠損
77	0.4	6.8	4.5	T3BX	貝？				第77図掲載

T4 号墳（第 78・79・82 図　図版 25・26）

位置　P29 ～ 30 にかけて確認した。地表面から若干の高まりとして把握できた。表土を除去した段階で周溝を検出した。

周溝　調査区外へ伸びていて、調査区内には全体の 5 分の 2 程度がかかっている。推定される内径（半径）3.6 ～ 4.5m、外径 5.6 ～ 6.7m の円形の溝が全周すると予想される。溝の幅は 0.9 ～ 2.4m であるが、t1 号土壙周辺が特に広くなっている。確認面からの深さは 0.5 ～ 0.6m である。

堆積土は、黒色から暗褐色土である。上層に To-a 及び B-Tm を含む。A-A’は 1 号土壙覆土と考えられる。周溝堆積土を掘削、もしくは埋まらない状態で掘削したものと見られる。B・C の堆積土に乱れはなく、自然堆積とみられる。最下層にロームブロックが多量混入しており、人為的に埋め戻され、床として使用されたものとみられる。周溝の立ち上がりは主体部側（内側）底部から中位まではややなだらかに、中位から上位にかけては直線的にたちあがる。外側はなだらかにたちあがる。

主体部　上場 2.45m、幅 1.1m、下場 2.15 × 1m の長方形を基調とする。底面には、南側の二角が途切れるが、ほぼ全周すると予想される溝がみられる。溝は長辺に併行するものが幅 17 ～ 20cm、床上面からの深さ

は 26cm であり、短辺側は北側が幅 9 ～ 13cm、床上面からの深さが 10cm である。溝の内側の規模は 1.85 × 0.75m である。四辺埋め込み式の木棺構造を有したと推定される。確認面からの床までの深さは 65 ～ 80cm である。堆積土は 6 層が主な遺物出土層である。9・15 層は木棺を据えた際の裏込め土と推定され、その周辺には 10・11・13・14 層といった棺材が腐食したとみられる部分が点在する。8 層は蓋の痕跡の可能性がある。3 層・20 層・21 層はローム粒・ロームブロックを含む層であり、墓壙を埋め戻した層と考えられる。厚さが 50cm であり、8 層が木棺蓋とすれば、そのレベルから上へ 50cm 以上の墳丘であったと推定できる。

南側の角を中心に不整な張り出し状の掘り込みがみられる。上面確認の段階では切り合いは確認されなかった。堆積土の観察では、先に墓壙を埋め戻したと推定した層より先に堆積している 6・22・23 層がこの掘り方に影響を受けている。このため、主体部の付属施設か、木棺蓋崩落前後に掘られたものであると考えられる。

主体部の主軸方向は N-28°　-W である。

重複　t1 号土壙に周溝が切られている。

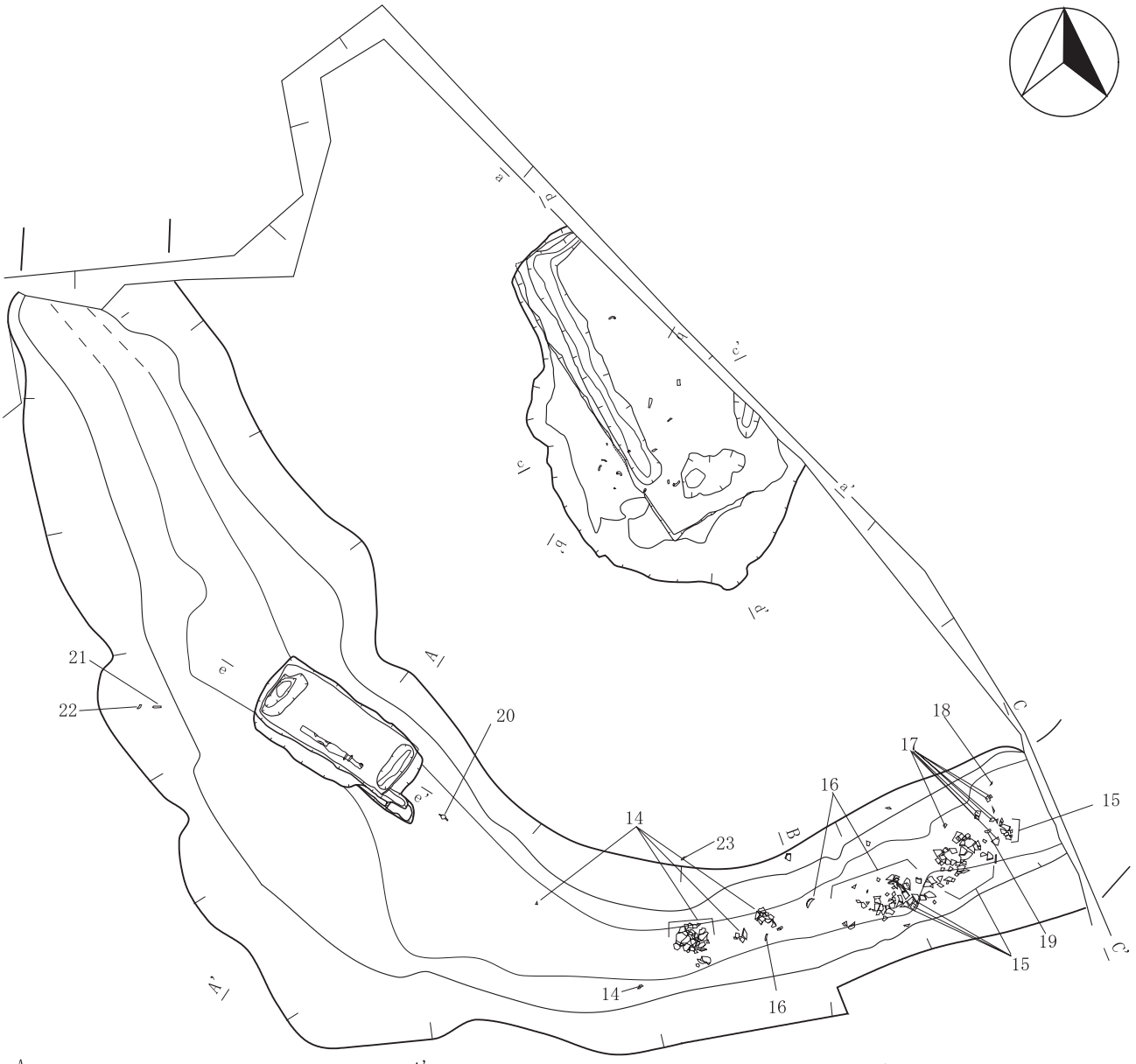
出土遺物　（第 79 ～ 81 図　図版 34 ～ 36）

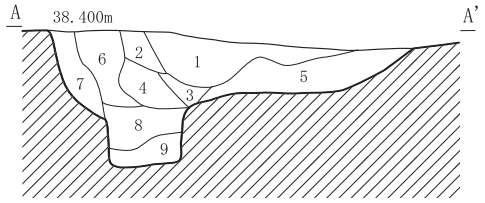
主体部出土遺物は、主に南側から出土している。刀子 1 点、鉄製釧 1 点、環状錫製品 1 点、勾玉 3 点、ガラス小玉 150 点、土玉 3 点、琥珀玉 2 点がある。出土層位は 6 層を主とする。同層から出土した P10 は周溝出土の破片と接合している。刀子・釧は数片に別れ散乱した状態で出土した。刀子に柄の木質が残存している。釧は二重である。布が付着している。玉類は木棺が据えられていたと想定される位置から西側にずれ、原位置を失っているものとみられる。

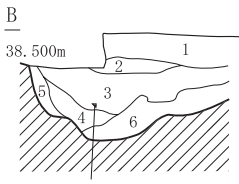
周溝出土遺物には須恵器長頸瓶 1 点、土師器甕 2 点、坏 1 点、鉄鏃 1 点、勾玉 1 点、そのほか鉄鏃の茎等と推定されるもの 2 点と剥片石器 1 点がある。土器は主体部主軸方向の延長線上から集中して出土した。鉄鏃は 1 号土壙周辺から出土している。

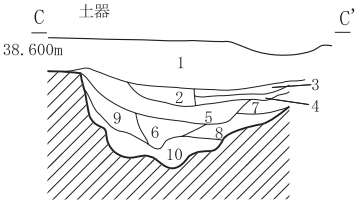
小結　構築年代を推定できる資料として、土師器坏・甕がある。17 の坏は破片資料ながら、口縁部から底部までが揃ったものである。口縁部に 3 条の沈線がめぐり、やや内傾して立ち上がる。底部は丸底である。口縁部の立ち上がりがやや異なるが、中野平遺跡 3 号住居跡 P7 と口径や沈線がめぐる点が類似する。沈線は本資料が 3 本であるのに対し、中野平のものは 2 本である。8 世紀前半から中葉のものと推定している（小谷地・成田 1996）。甕はいずれもミガキを多用し、小型の長胴甕は底部が若干突き出る。体部と口縁部との間に段をもち、口縁部は外傾してたちあがる。八戸市田面木平遺跡 49 号住居出土甕（村木ほか 1988）や酒見平遺跡 SI11 出土甕（大野・渡ほか 2001）に類似する。7 世紀中から後葉とされている。球胴甕は胴部に丸みがある器形である。口唇部端は溝状に窪む。須恵器長頸瓶は、近隣の比較資料に乏しく、丹後平 15 号墳出土のものとは、本資料の高台がハの字型に開くのに対し丹後平は開きが小さく、底径も本資料が大きいなど差異がある（工藤ほか 1991）。口縁部と肩の張りは 8 世紀前半に操業されたとされる静岡県東笠子 44 地点窯に類似するが（齊藤ほか 1995）、やはり高台の開きが本資料に比較して小さい。また、これらは底部がまるみを帯びているのに対し、本資料は平坦であるが、概ねこれらに併行するものと予想する。土器の組み合わせから 7 世紀中葉から 8 世紀中葉の遺構と推定する。

原典 I









T4号墳

周溝　A—A'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒褐色土2/3(10YR)	シルト	上層に火山灰10YR5/6(B—Tm)含む　ローム粒微量含む　しまりあり
第２層	黒褐色土2/3(10YR)	シルト	パミス　ローム粒微量含む　しまりあり
第３層	黒褐色土2/3(10YR)	シルト	パミス微量含む　しまり弱
第４層	黒褐色土2/3(10YR)	シルト	φ5cmのローム粒集中塊含む　しまり弱
第５層	黒褐色土2/3(10YR)	シルト	φ5cmのローム粒集中塊(しまりのないロームブロック)含む　しまり弱
第６層	暗褐色土3/3(10YR)	シルト	パミス　ローム粒少量含む　しまりあり
第７層	暗褐色土3/4(10YR)	シルト	パミス微量含む　しまりあり
第８層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	ローム粒微量含む　しまり弱
第９層	暗褐色土3/3(10YR)	シルト	ローム粒中量含む

B—B'

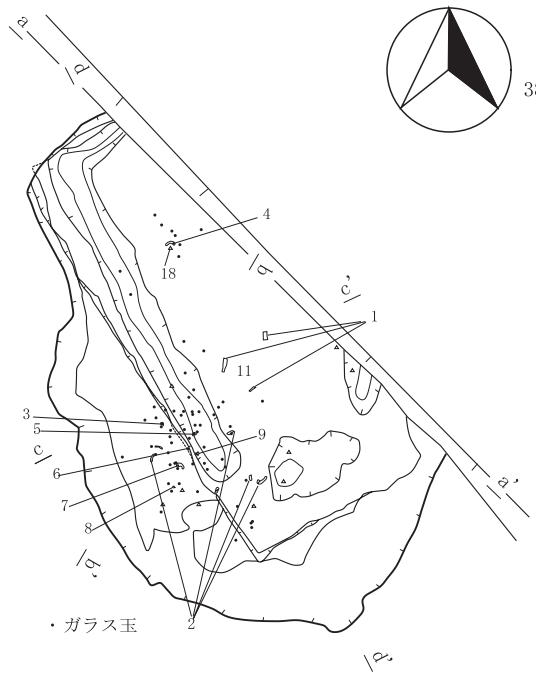
層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	表土層
第２層	黒色土2/1(10YR)	シルト	ローム粒極微量含む　しまりあり
第３層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	砂粒含む　上層に火山灰(10YR5/3,To—a)含む
第４層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	ローム粒微量含む
第５層	黒褐色土3/2(10YR)	シルト	ローム質土混入　しまり強
第６層	明黄褐色土6/8(10YR)	粘土	ロームブロック主体の層部分的に10YR2/2〜3/4のシルト質土混入　埋戻し土

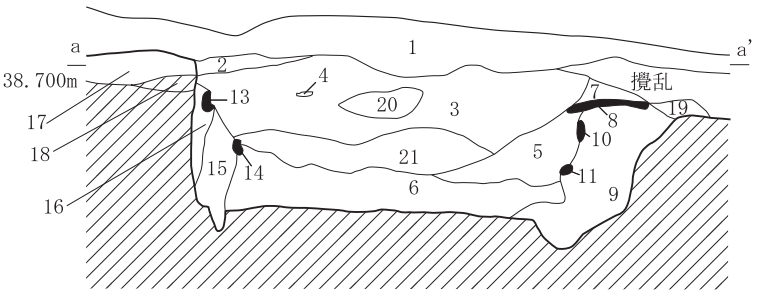
C—C'

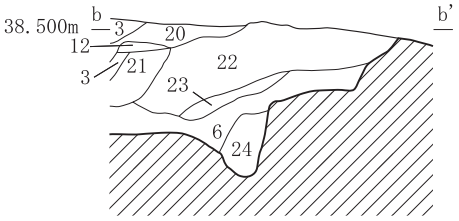
層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	表土層 撹乱含む
第２層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	ローム粒微量含む　しまりあり
第３層	黒色土2/1(10YR)	シルト	火山灰(B—Tm,10YR4/4)含む　しまりあり
第４層	黒色土2/1(10YR)	シルト	火山灰(To-a,10YR5/3)含む　しまりあり
第５層	黒色土2/1(10YR)	シルト	パミス、ローム粒微量含む　しまりあり
第６層	黒色土2/1(10YR)	シルト	ロームブロック　ローム粒含む　しまりあり
第７層	黒色土2/1(10YR)	シルト	ローム粒極微量含む　しまりあり
第８層	暗褐色土3/4(10YR)	粘土	パミス含む　しまりあり
第９層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	ローム粒下辺に向かうにつれ量を増す　しまりあり
第10層	褐色土4/6(10YR)	粘土	ロームブロック主体　シルト黒色土混入　しまりあり 主に遺物はこの上層より出土

0　2m

第78図　T4号墳(1)

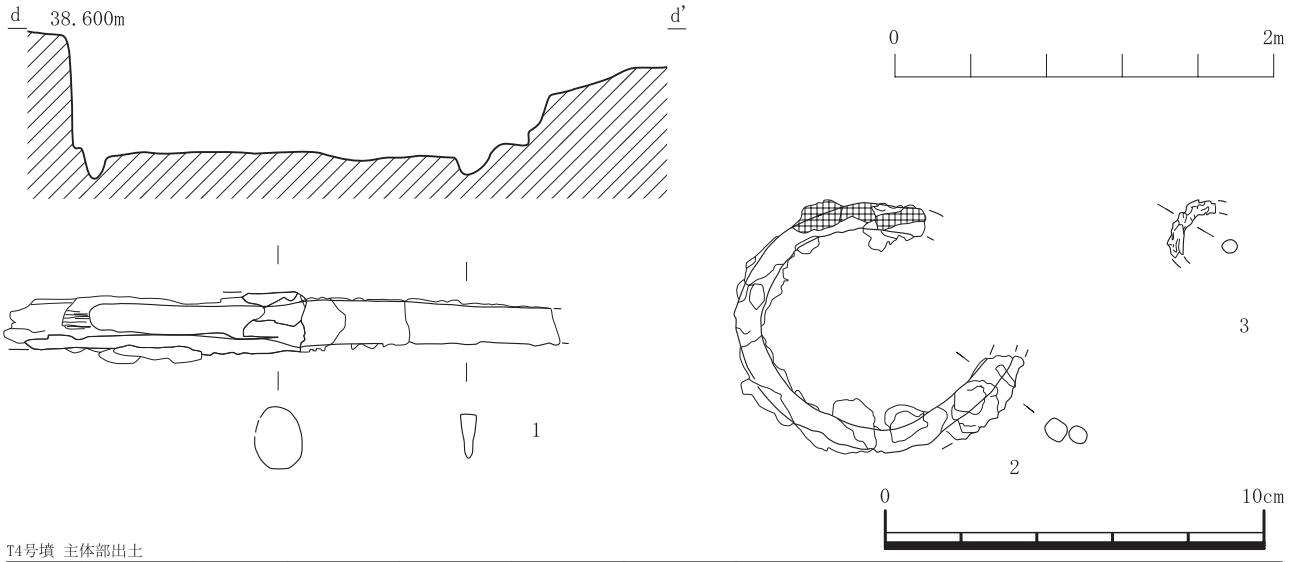






T4 号墳　主体部
a－a'　b－b'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	表土層（攪乱含む）
第２層	暗褐色土3/3(10YR)	シルト	ローム粒少量含む、しまりあり
第３層	暗褐色土3/3(10YR)	シルト	ローム粒多量含む、しまりあり
第４層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	炭化物痕
第５層	黒褐色土2/3(10YR)	シルト	φ5～10mmのローム粒少量含む、しまりあり
第６層	暗褐色土3/3 ～黒褐色土2/3(10YR)	シルト	φ5mmのローム粒中量含む
第７層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	砂粒含む、しまりあり
第８層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	腐食土(蓋の痕跡と推定)
第９層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	ローム粒少量、ロームブロック微量含む
第10層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	腐食土のブロック炭化物(木材)の痕跡と推定
第11層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	腐食土
第12層	褐色土4/4(10YR)	シルト	ロームブロック、ローム粒主体、しまりあり
第13層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	腐食土(炭化物)
第14層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	腐食土(炭化物)
第15層	黒褐色土2/3(10YR)	シルト	ローム粒中量含む
第16層	暗褐色土3/4(10YR)	シルト	砂粒含む、ローム粒少量含む
第17層	暗褐色土3/4(10YR)	シルト	ローム粒φ2cmのロームブロック含む、しまり強、盛土？
第18層	暗褐色土3/3(10YR)	シルト	砂粒含む、しまりあり、自然堆積？
第19層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	ロームブッロク含む、しまりあり、盛土層？
第20層	暗褐色土3/4(10YR)	シルト	φ3～7cmのロームブロック多量に含む、しまりあり、密度が高いため分層
第21層	暗褐色土3/3(10YR)	シルト	φ3～6cmのロームブロック中量含む、しまりあり
第22層	暗褐色土3/3(10YR)	シルト	φ3～5cmローム粒中量含む、しまりあり この層より下でガラス玉出土
第23層	黒褐色土2/3(10YR)	シルト	φ3～10cmのロームブロック少量含む、しまりあり
第24層	暗褐色土3/3(10YR)	シルト	ローム粒微量含む、しまり弱



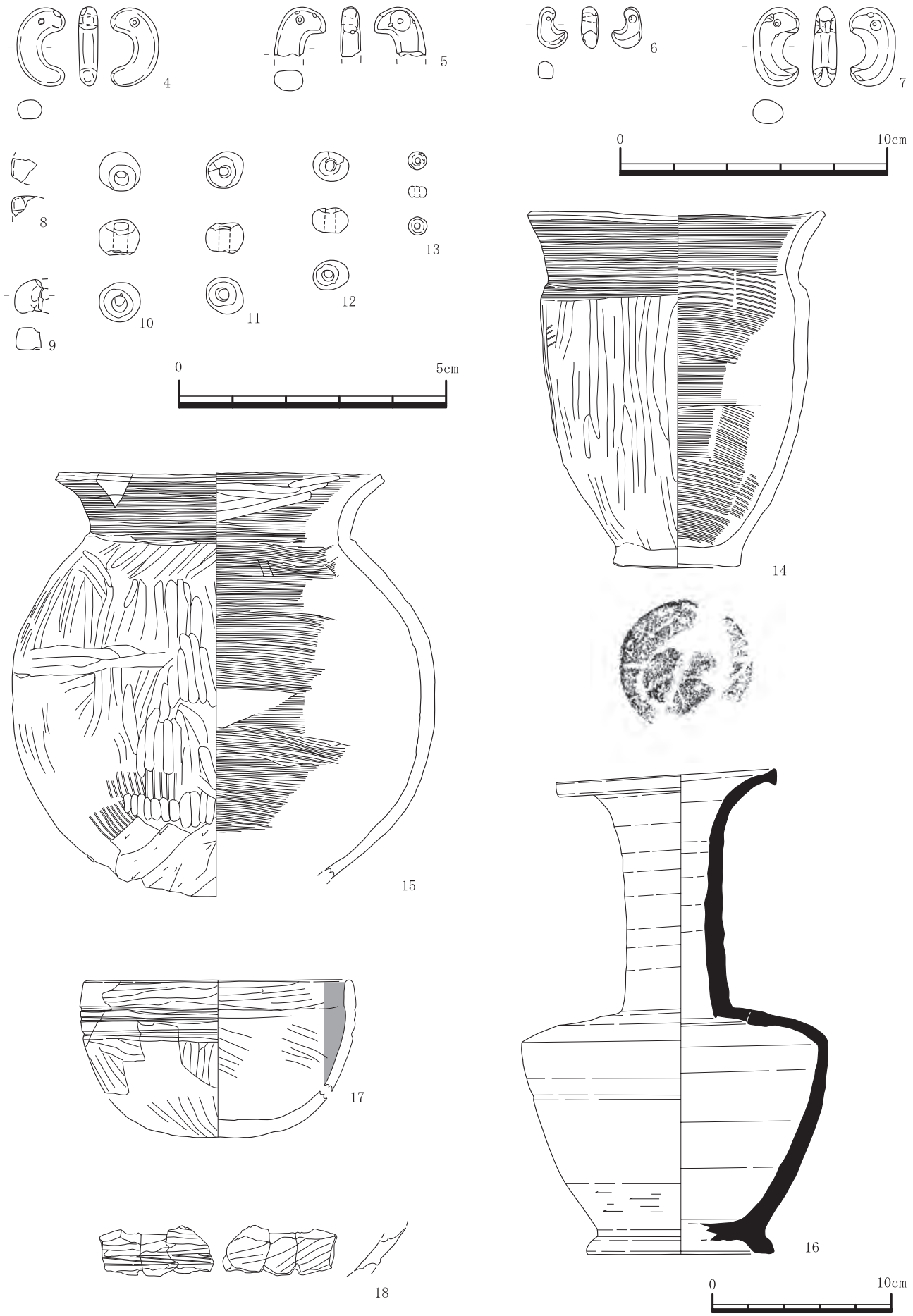
T4号墳 主体部出土

No.	器 種	層 位	全長(cm)	刀長(cm)	柄長(cm)	元巾(cm)	備　考
1	刀子	6層	(14.6)	(6.8)	(7.8)	1.2	F1～F3

No.	器 種	層 位	長径(cm)	短径(cm)	巾 (cm)		厚さ(cm)		備　考
2	釧	6層	(7.6)	6.6	① 0.6	② 0.5	① 0.5	② 0.4	布付着 2重線　F-4.5.8

No.	器 種	層 位	外径(cm)	巾(cm)	厚さ(mm)	備　考
3	環状錫製品	6層	(2.1)	0.4	0.37	

第 79 図　T4 号墳 (2)



第 80 図　T4 号墳 (3)

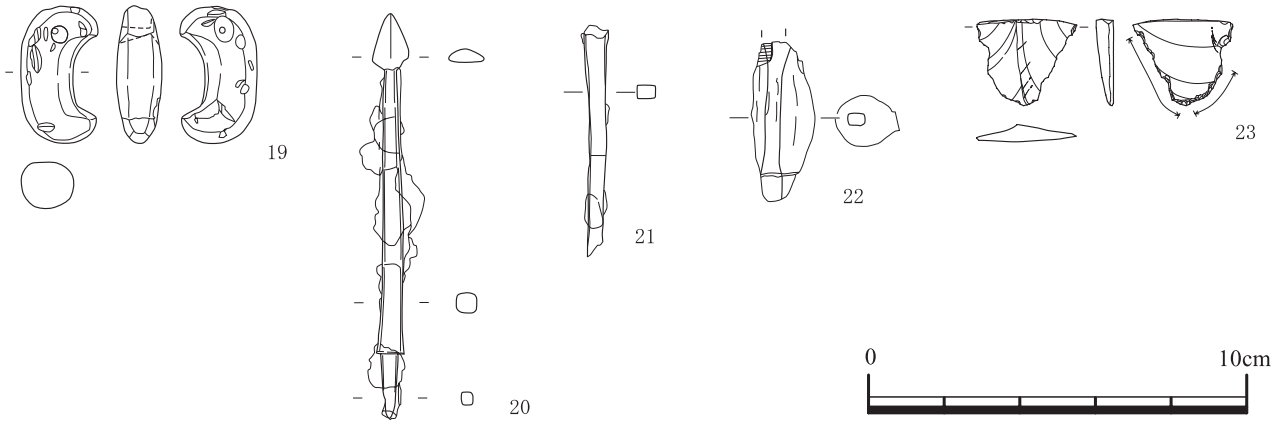
T4号墳主体部副葬品

No.	器 種	材 質	層 位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考
4	勾 玉	瑪瑙	6層	29.5	18.0	7.0	5.1	片側穿孔 A→B　主体部勾玉1
5	勾 玉	碧玉	6層	(18.5)	(19.5)	7.5	3.5	片側穿孔 A→B　主体部勾玉2
6	勾 玉	翡翠	6層	15.5	11.5	6.5	1.8	片側穿孔 A→B　B71
7	勾 玉	瑪瑙	6層	29.5	17.5	9.0	6.7	片側穿孔 A→B　主体部勾玉3
8	琥珀玉	琥珀	6層	(9.0)	(10.0)	(8.0)	(0.2)	主体部琥珀1
9	琥珀玉	琥珀	6層	(13.0)	(11.0)	8.5	(0.8)	主体部琥珀2

No.	器 種	材 質	層 位	最大径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
10	丸 玉	土玉	-	7.5	6.5	0.4	BX
11	丸 玉	土玉	6層	7.0	6.0	0.3	B23
12	丸 玉	土玉	-	7.0	5.0	0.2	BX

T4号墳周溝

No.	器 種	層 位	種 類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	外 面 調 整	内 面 調 整	備　考	実測番号
14	甕	4層	土師器	16.8	20.2	7.2	—	口縁部:ナデ 体部:ハケメ→ミガキ 底部:木葉痕	口縁部:ナデ 体部:ハケメ→ナデ	T4P1.2.10	12
15	球胴甕	6層	土師器	18.7	(24.0)	—	胴部(24.6)	口縁部:ナデ 体部:ハケメ→ミガキ 底返部:ケズリ	口縁部:ナデ→一部ミガキ 体部:ナデ	T4P63.64	13
16	長頸瓶	6層	須恵器	12.5	27.7	10.6	肩部 17.3	ロクロナデ	ロクロナデ	T4周溝P12.60.61.62	1
17	坏	5層	土師器	(15.2)	(8.9)	—	—	ミガキ	ミガキ→黒色処理	T4P25.31.42.47.48.49	22
18	坏	6層	土師器	—	—	—	—	口縁部:ハケメ→ミガキ 体部:ミガキ	ミガキ、黒色処理	T4主体部P6.周溝P7.15.18.52 *主体部覆土出土破片と周溝出土破片の接合例	24



T4号墳周溝

No.	器 種	材 質	層 位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考
19	勾 玉	瑪瑙	5層	36.5	20.5	12.0	11.8	片側穿孔 A→B　周溝勾玉1

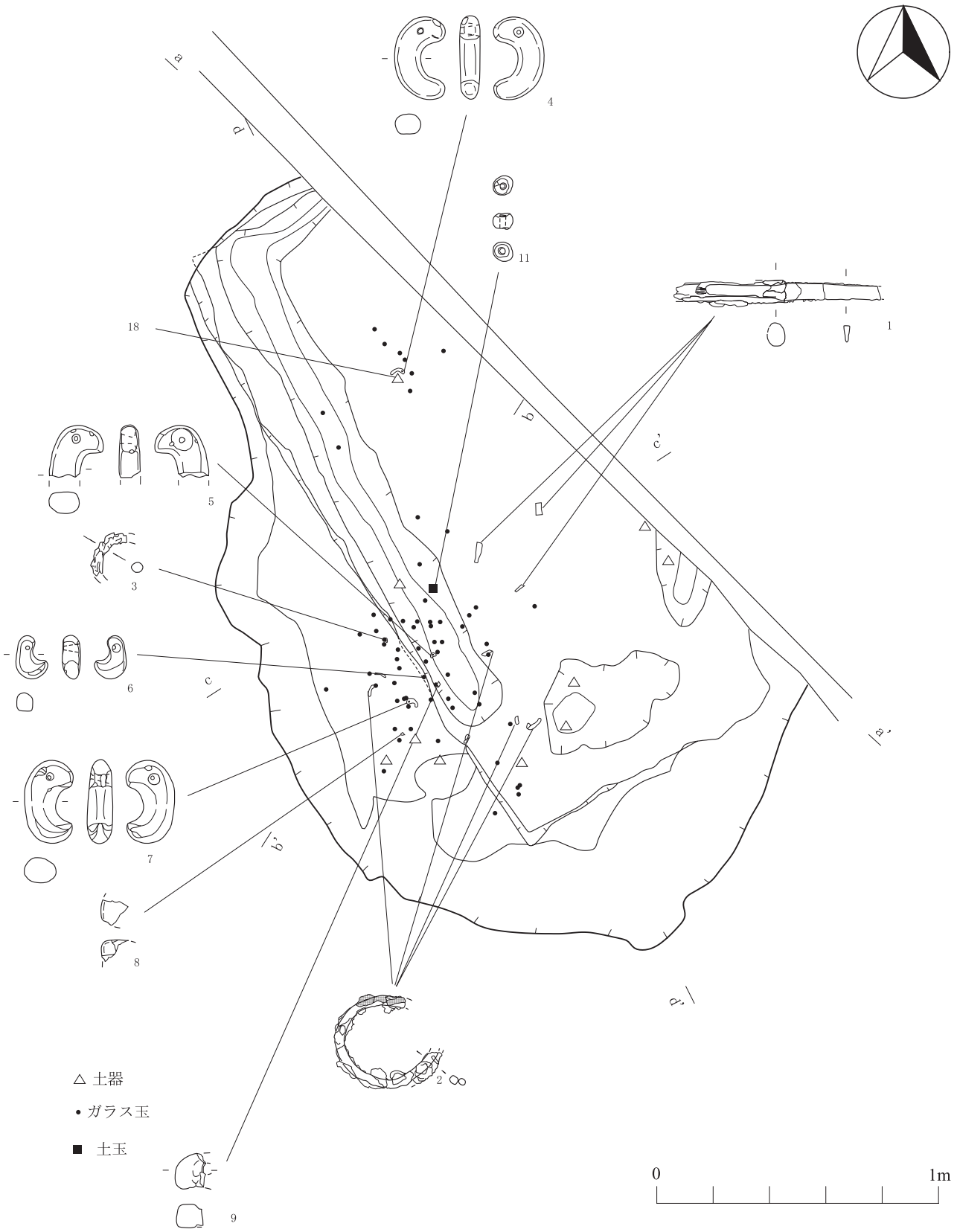
No.	器 種	層 位	鏃身の形	鏃 身 部			茎 部			頸 部			備 考
				巾(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	
20	鉄 鏃	1層	長三角形・片鏑造・長頸鏃・台関	0.9	0.3	1.5	0.5	0.5	1.7	0.8	0.8	7.5	F-1

No.	器 種	層 位	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	備考
21	鉄鏃頸部？	5層	6.2	0.6	0.4	F-3

No.	器 種	層 位	全長(cm)	巾(cm)	備　考
22	鉄鏃茎	5層	(4.3)	(0.7)	銹ぶくれで著しく形状が変形しているが、表面に樹皮様のものが付着し、X線写真と断面観察により、鉄鏃の茎と推定される。F-4

No.	器 種	遺構名	層 位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備 考
23	剥片石器	T4周溝	上層	23.0	16.0	5.0	2.0	頁岩	微細剥離有りの為RForUFか？ S-1

第81図　T4号墳(4)



第 82 図　T4 号墳 (5)

番号	重さ	直径	厚さ	注記	分類	破片	備考		番号	重さ	直径	厚さ	注記	分類	破片	備考	
1	0.4	6.9	6.9	T4B1	A		引き伸ばし	22層	73	0.1以下	3.7	2.3	T4B73	B		小突起	
4	0.1以下	5.8	2.6	T4B4	A			6層	74	0.1以下	3.9	2.0	T4B74	B		小突起	
5	0.1以下	3.5	2.3	T4B5	A			22層	75	0.1	4.3	2.6	T4B75	B			
13	0.1	5.3	3.3	T4B13	A			6層	76	0.1	3.9	2.9	T4B76	B		小突起	
39	0.1以下	3.4	1.7	T4B39	A				77	0.1以下	3.7	1.8	T4BX	B		小突起	6層
46	0.2	5.3	3.3	T4B46	A		引き伸ばし	6層	79	0.1	4.2	2.5	T4BX	B		小突起	
52	0.1	5.5	3.0	T4B52	A			6層	80	0.1	4.4	2.6	T4BX	B			
63	0.1以下	3.8	2.4	T4B63	A				81	0.1	3.7	2.5	T4BX	B			
84	0.2	6.3	3.1	T4BX	A				82	0.1	3.8	1.9	T4BX	B		小突起	
104	0.1以下	3.6	1.6	T4BX	A				83	0.1以下	4.0	2.6	T4BX	B		小突起	
114	0.1以下	4.0	2.1	T4BX	A				85	0.1以下	3.7	1.8	T4BX	B		小突起	
2	0.1以下	3.7	2.8	T4B2	B			22層	86	0.1以下	3.8	1.9	T4BX	B		小突起	
3	0.1以下	3.9	2.5	T4B3	B		小突起	23層	87	0.1以下	3.6	2.1	T4BX	B		小突起	
6	0.1	-	-	T4B6	B	破損	小突起	22層	88	0.1以下	3.9	2.5	T4BX	B		小突起	
7	0.1	3.6	2.7	T4B7	B			22層	89	0.1以下	3.9	2.2	T4BX	B		小突起	
8	0.1以下	3.8	2.2	T4B8	B		小突起		90	0.1以下	3.9	2.5	T4BX	B		小突起	
9	0.1以下	(3.5)	1.7	T4B9	B	破損	小突起		91	0.1	4.2	2.6	T4BX	B		小突起	
10	0.1以下	3.7	2.3	T4B10	B		小突起	6層	92	0.1以下	3.5	2.3	T4BX	B		小突起	
11	0.1	4.5	2.5	T4B11	B				93	0.1以下	3.8	1.6	T4BX	B		小突起	
12	0.1以下	3.8	2.4	T4B12	B		小突起		94	0.1	4.0	2.3	T4BX	B		小突起	
14	0.1	3.8	2.8	T4B14	B		小突起		95	0.1以下	3.8	2.0	T4BX	B		小突起	
15	0.1以下	3.9	2.2	T4B15	B		小突起	22層	96	0.1以下	3.9	2.4	T4BX	B	破損	小突起	
16	0.1以下	4.0	2.0	T4B16	B		小突起	22層	97	0.1	4.2	2.2	T4BX	B		小突起	
17	0.1以下	3.9	2.7	T4B17	B		小突起	22層	98	0.1以下	-	-	T4BX	B	破損	小突起	
18	0.1以下	3.3	1.9	T4B18	B		小突起	23層	99	0.1	4.2	2.4	T4BX	B		小突起	
19	0.1	4.1	2.1	T4B19	B		小突起	6層	100	0.1以下	3.7	2.6	T4BX	B			
20	0.1以下	4.0	1.8	T4B20	B		小突起	6層	101	0.1	4.4	2.5	T4BX	B		小突起	
21	0.1以下	4.0	2.1	T4B21	B		小突起	6層	102	0.1	4.3	2.4	T4BX	B		小突起	
22	0.1	4.1	2.6	T4B22	B		小突起	6層	103	0.1以下	4.0	2.4	T4BX	B		小突起	
24	0.1	3.8	2.1	T4B24	B		小突起		105	0.1以下	3.6	2.4	T4BX	B		小突起	
25	0.1	-	-	T4B25	B	破損	小突起		106	0.1以下	3.7	2.1	T4BX	B		小突起	
26	0.1	3.8	3.0	T4B26	B		小突起		107	0.1以下	(4.4)	2.1	T4BX	B	破損	小突起	
27	0.1以下	3.7	2.7	T4B27	B		小突起		108	0.1	3.8	2.6	T4BX	B		小突起	
28	0.1以下	-	-	T4B28	B	破損	小突起		109	0.1以下	3.9	2.2	T4BX	B		小突起	
29	0.1以下	3.9	2.1	T4B29	B		小突起		110	0.1以下	3.8	2.2	T4BX	B		小突起	
30	0.1	3.8	2.4	T4B30	B		小突起		111	0.1	3.9	2.6	T4BX	B		小突起	
31	0.1	4.0	2.3	T4B31	B		小突起		112	0.1	4.1	2.6	T4BX	B		小突起	
32	0.1以下	3.8	2.3	T4B32	B		小突起		113	0.1	3.9	2.3	T4BX	B		小突起	
33	0.1	4.1	2.7	T4B33	B		小突起		115	0.1	4.3	2.6	T4BX	B			
34	0.1	4.2	2.5	T4B34	B		小突起		116	0.1以下	3.6	1.9	T4BX	B		小突起	
35	0.1	4.1	2.5	T4B35	B		小突起		117	0.1以下	3.4	1.8	T4BX	B		小突起	
36	0.1以下	(3.9)	2.3	T4B36	B	破損	小突起		118	0.1以下	3.9	2.3	T4BX	B		小突起	
37	0.1以下	3.9	2.6	T4B37	B				119	0.1以下	3.6	1.8	T4BX	B		小突起	
38	0.1以下	4.3	2.4	T4B38	B		小突起		120	0.1	4.3	2.8	T4BX	B		小突起	
40	0.1以下	3.8	1.8	T4B40	B		小突起		121	0.1以下	3.8	2.4	T4BX	B		小突起	
41	0.1以下	3.5	2.4	T4B41	B		小突起		122	0.1以下	3.7	2.9	T4BX	B			
42	0.1以下	3.5	2.7	T4B42	B		小突起		123	0.1以下	3.6	1.4	T4BX	B		小突起	
43	0.1以下	4.0	2.2	T4B43	B		小突起		124	0.1以下	3.8	2.1	T4BX	B		小突起	
44	0.1以下	3.9	2.2	T4B44	B				125	0.1	3.9	2.7	T4BX	B			
45	0.1以下	3.7	2.1	T4B45	B		小突起	6層	126	0.1	4.0	2.1	T4BX	B			
47	0.1	3.9	2.1	T4B47	B			23層	127	0.1以下	4.1	1.7	T4BX	B		小突起	
48	0.1以下	3.6	2.2	T4B48	B		小突起	6層	128	0.1	3.9	2.1	T4BX	B		小突起	
49a	0.1	4.0	2.1	T4B49	B		小突起	6層	129	0.1以下	3.8	1.8	T4BX	B		小突起	
49b	0.1以下	3.6	2.0	T4B49	B		小突起	6層	130	0.1以下	4.0	2.0	T4BX	B		小突起	
50	0.1以下	3.6	1.8	T4B50	B		小突起	6層	131	0.1以下	3.6	2.0	T4BX	B		小突起	
51	0.1	3.8	2.4	T4B51	B		小突起	6層	132	0.1	4.4	1.7	T4BX	B		小突起	
53	0.1以下	(4)	2.1	T4B53	B	破損	小突起	6層	133	0.1以下	3.7	2.0	T4BX	B		小突起	
54	0.1以下	3.9	2.2	T4B54	B		小突起	6層	134	0.1以下	3.7	1.9	T4BX	B		小突起	
55	0.1以下	3.8	2.0	T4B55	B		小突起	23層	135	0.1以下	3.2	1.5	T4BX	B			
56	0.1以下	3.7	2.2	T4B56	B		小突起		136	0.1以下	3.6	1.9	T4BX	B		小突起	
57	0.1	4.2	2.5	T4B57	B		小突起		137	0.1以下	3.7	2.3	T4BX	B		小突起	
58	0.1以下	3.6	1.8	T4B58	B		小突起		138	0.1以下	3.7	2.4	T4BX	B		小突起	
59	0.1以下	3.7	2.1	T4B59	B		小突起		139	0.1以下	3.3	2.2	T4BX	B		小突起	
60	0.1以下	3.8	2.3	T4B60	B		小突起		140	0.1以下	3.8	2.2	T4BX	B		小突起	
61	0.1	4.2	2.5	T4B61	B		小突起		141	0.1以下	3.7	1.8	T4BX	B		小突起	
62	0.1以下	3.6	1.8	T4B62	B		小突起		142	0.1以下	3.7	2.2	T4BX	B		小突起	
64	0.1	4.0	2.7	T4B64	B		小突起		143	0.1以下	3.9	1.7	T4BX	B		小突起	
65	0.1以下	3.7	2.1	T4B65	B		小突起		144	0.1以下	3.6	1.7	T4BX	B		小突起	
66	0.1以下	3.4	1.9	T4B66	B		小突起		173a	0.1以下	3.7	1.8	T4BX	B	破損	小突起	
67	0.1	3.9	2.4	T4B67	B		小突起		173b	0.1以下	(3.8)	1.6	T4BX	B	破損	小突起	
68	0.1以下	3.8	2.0	T4B68	B				23	0.3	7.5	6.0	T4BX	土玉			
69	0.1以下	-	1.4	T4B69	B	破損	小突起		78	0.2	6.8	4.7	T4BX	土玉			
70	0.1以下	3.3	2.1	T4B70	B				145	0.4	8.0	6.5	T4BX	土玉			
71	0.1以下	3.8	2.6	T4B71	B		小突起		175	0.1以下	4.0	2.1	不明	B		小突起	実測
72	0.1以下	3.8	2.2	T4B72	B		小突起		176	0.1以下	3.3	2.6	不明	B		小突起	

T5 号墳　（第 83・84 図　図版 26 ～ 28）

位置　N29 ～ 30 にかけて、表土を除去した段階、Ⅱ層上で確認した。

周溝　周溝は全周し、内径 6.19 ～ 7.28m、外径 9.02 ～ 10.26m の円形を呈する。幅は上場 1.12 ～ 2.14m、下場 0.41 ～ 0.75m、確認面からの深さ 0.18 ～ 0.54m である。

堆積土は黒色から褐色土であり、最下層にロームブロックを含み、埋め戻した、もしくは墳丘構築中に崩れたものが放置されたものと考えられる。

主体部　平面形は長軸上場 2.85m、短軸上場 0.97 ～ 1.15m の長方形である。堆積土は黒褐色から暗褐色土が主である。底面付近及び側面に褐色から黄橙色の土壌が堆積し、裏込めなど主体部構造に関わるものとみられる。

残りは良くないが、炭化材が断面及び底面付近東側で観察された。構造を考察できるような残りではなく、断片的なものであった。

主軸方向は N-6°　-W である。

重複　なし。

出土遺物　（第 85 図　図版 37）　主体部からの出土遺物はなかった。周溝より須恵器甕破片と蕨手刀 1 点が出土した。須恵器破片は色調や調整から同一個体の甕とみられる。周溝に堆積した降下火山灰より上層で出土している。蕨手刀はロームブロックを含む 12 層上からの出土であり、この層は埋め戻しもしくは、墳丘構築中に堆積した層とみられ、よって 5 号墳に供献されたものと考えられる。鞘は腐食し殆ど残っていないが、一部に木質と、漆とみられる皮膜が残っている。鞘尻金具は筒状で元側に責金具がみられる。そのほか鞘には責金具、双脚足金具と、全ての拵が残る。蕨手刀の分類（八木 1996）によると、1 の柄は柄頭 E 類で、柄反りと絞りの関係から 1 類に分類される。この類型は足金具が銅製台状双脚、喰出鍔が多いとされ、8 世紀前から中葉の年代とされる。一方 1 の足金物は鉄製双脚、鍔は長方形の板鍔であり、やや新しい傾向を示すものとみられ、8 世紀中から後葉とされる。本資料も概ねこの年代のものと考えられる。

小結　小口板埋め込み式の主体部構造をもち、周溝は全周する末期古墳である。年代を推定できる出土遺物は蕨手刀のみであり、特に佩用金具により 8 世紀中から後葉の製作年代と推定された。このため 5 号墳は 8 世紀代の後半を中心とする時期に構築されたものであると推定する。

原典 G

T7・8・9 号墳　（第 87・88 図　図版 28）

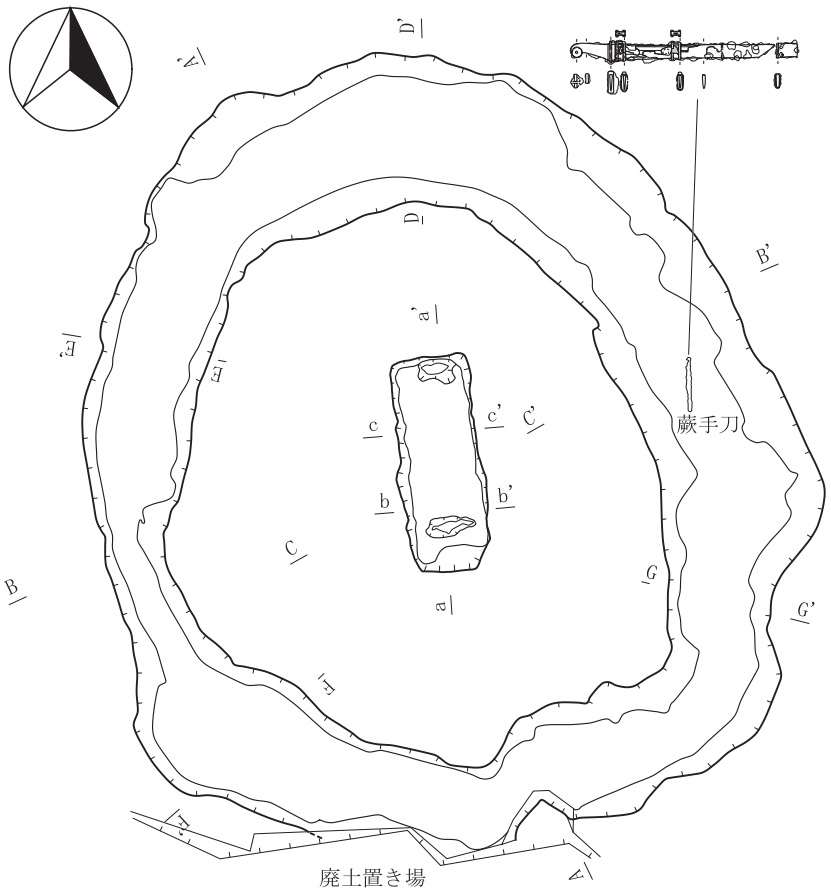
L35 ～ 36（5 トレンチ）標高 37.2 ～ 37.4m の地点で溝状の落ち込みを確認した。確認面での幅は 86 ～ 88cm である。平成 11 年度調査時に確認した周溝と近接し末期古墳の可能性が高いと考えられる。堆積土は黒色から褐色土である。T8 号墳とした。

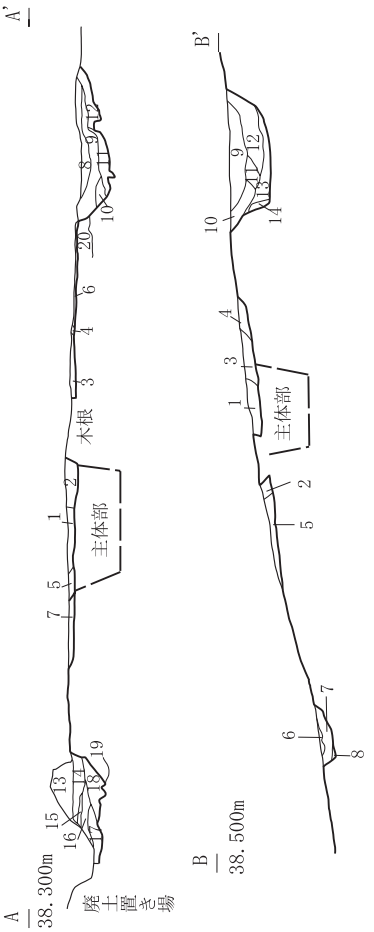
K35 ～ 36（6 トレンチ）標高 36 ～ 37.5m の地点で確認した。周溝は上面で幅 50 ～ 72cm の黒色の落ち込みとして確認した。推定される周溝内径 3m、外径 4m である。中央部に主体部と推定される落ち込みがみられた。トレンチ内での規模は 1m である。T7 号墳とした。

周溝と推定される 3・14・15 層は黒色から黒褐色土である。周溝の間の 4・5・11・12 層には浮石粒が多量に含まれ、均質ではない土壌である。T3 号墳周辺土壌と酷似する。その中央に主体部と推定される落ち込みがみられる。9 層には褐色土のブロックが含まれ、人為的堆積と考えられる。

6 トレンチではさらに北側の K35 に、周溝状の遺構が確認された。対応する周溝の確認を目指したが、確認されなかった。T9 号墳とした。

原典 I





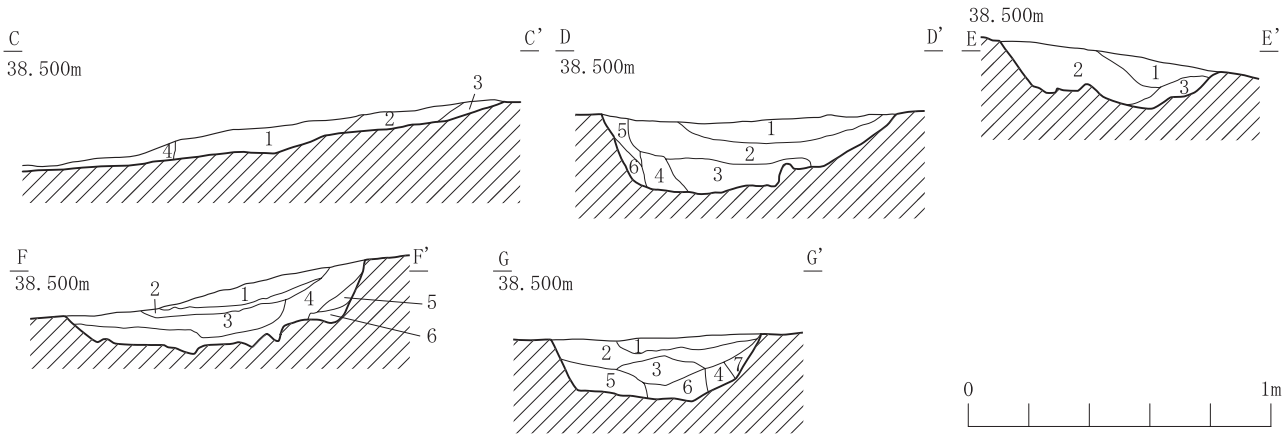
0　4m

T5号墳A-A'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒色土10YR12/1	シルト	パミス・小礫含む しまりあり
第２層	暗褐色土10YR3/4	粘土	ロームブロック含む 黒色土混入 しまり弱
第３層	褐色土10YR4/4	粘土	パミス含む ローム粒含む 黒色土混入 しまりあり
第４層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒含む
第５層	黒褐色土10YR2/3	粘土	φ5mmのパミス微量含む ローム粒含む しまり強
第６層	暗褐色土10YR3/3	粘土	パミス多量含む ローム粒含む しまりあり
第７層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒含む しまりあり
第８層	黒色土10YR1.7/1	シルト	ローム粒極微量含む しまりあり
第９層	暗褐色土10YR3/3	シルト	φ5～10mmのパミス少量含む しまりあり
第10層	褐色土10YR4/4	シルト	φ1～3cmのロームブロック少量含む しまりあり
第11層	暗褐色土10YR3/4	粘土	ロームブロック主体の層 しまりあり
第12層	褐色土10YR4/6	粘土	黒色土混入 しまり弱
第13層	黒褐色土10YR2/2	シルト	表土層
第14層	黒褐色土10YR2/2	シルト	
第15層	黒褐色土10YR2/2	シルト	
第16層	黒褐色土10YR2/2	シルト	しまりあり
第17層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒微量含む しまりあり
第18層	黒褐色土10YR2/3	シルト	パミス含む ローム粒多量含む
第19層	暗褐色土10YR3/4	シルト	パミス多量含む 自然堆積層

T5号墳B-B'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	褐色土10YR4/4	粘土	φ5cmのロームブロック含む ローム粒多量含む しまり弱 A-A'2層対応
第２層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス含む しまり弱
第３層	黒色土10YR2/2	シルト	φ5cmのロームブロック含む ローム粒含む しまりあり
第４層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス含む しまり強
第５層	黒褐色土10YR2/3	シルト	パミスとローム粒黒色土がまだらに混入
第６層	黒褐色土10YR2/2	シルト	
第７層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ロームブロック微量含む ローム質土混入 しまりあり
第８層	黄橙色土10YR7/8	粘土	しまりあり
第９層	黒色土10YR1.7/1	シルト	パミス微量含む ローム粒微量含む しまりあり
第10層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス含む しまりあり
第11層	黒色土10YR2/1	シルト	パミス含む ローム粒微量含む しまりあり
第12層	暗褐色土10YR3/4	シルト	ローム質土多量含む しまり強 蕨手刀出土層
第13層	にぶい黄褐色土 10YR4/3	シルト	浮石粒多量含む しまり弱
第14層	黒褐色土10YR2/3	シルト	φ2mmのパミス含む しまり弱



第 83 図　T5 号墳 (1)

T5号墳C-C'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス中量含む 小礫含む しまりあり A-A'1層対応
第２層	暗褐色土10YR3/3	粘土	パミス含む しまり弱
第３層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス含む
第４層	黒褐色土10YR2/3	粘土	パミス含む

T5号墳D-D'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒色土10YR1.7/1	シルト	パミス微量含む しまりあり
第２層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス微量含む しまりあり
第３層	暗褐色土10YR3/4	粘土	ロームブロック主体の層 しまりあり
第４層	黒褐色土10YR3/2	粘土	φ3～5cmのロームブロック多量含む しまりあり
第５層	暗褐色土10YR3/3	シルト	パミス微量含む しまりあり
第６層	黄橙色土10YR5/8	粘土	しまり弱

T5号墳E-E'

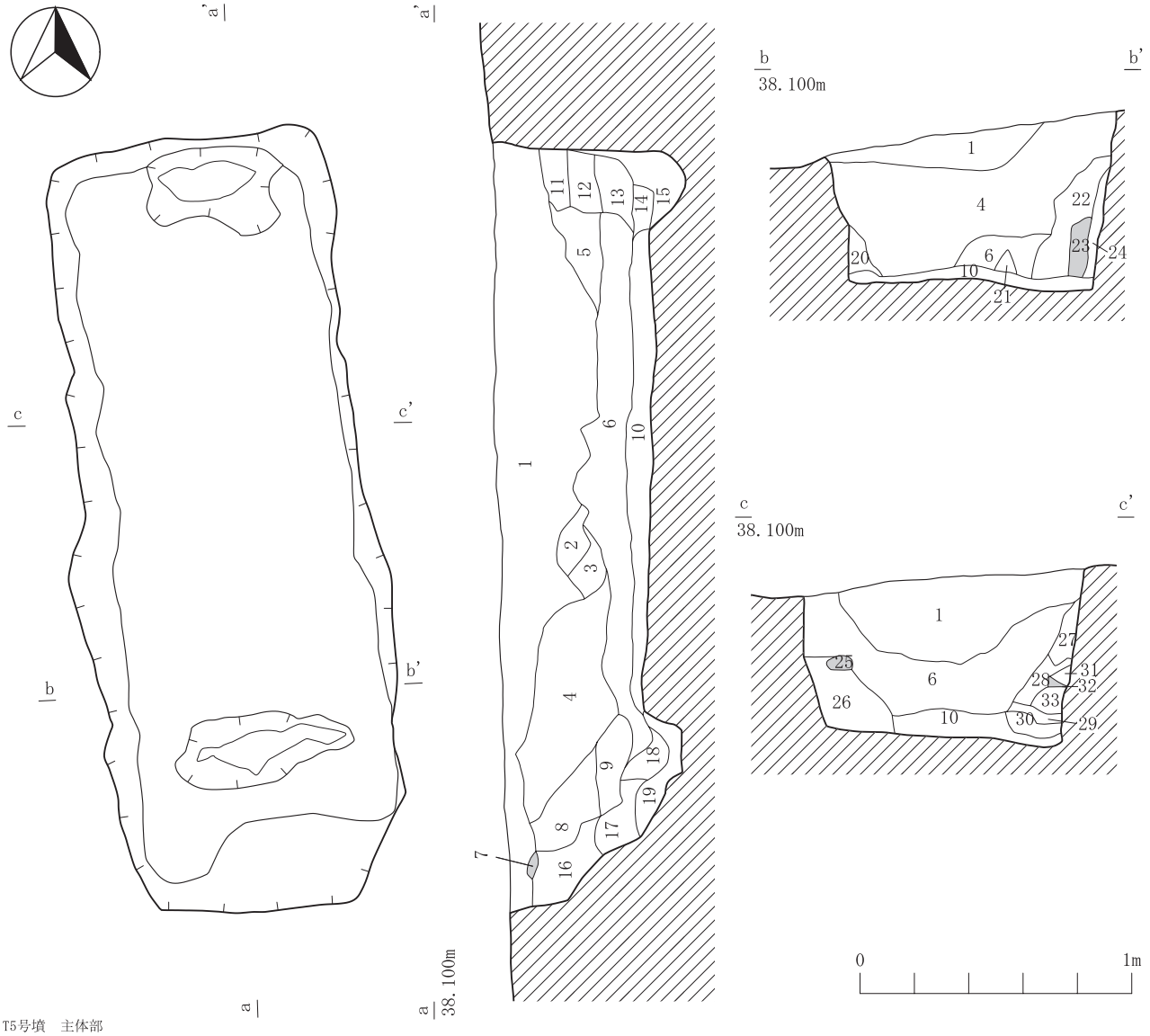
層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒色土10YR1.7/1	シルト	パミス微量含む しまりあり
第２層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス含む ローム粒含む しまり強
第３層	黒褐色土10YR2/2	シルト	φ2～5cmのロームブロック含む しまりあり

T5号墳F-F'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス微量含む しまり弱
第２層	黒褐色土10YR2/2	シルト	明黄褐色(10YR6/6)の火山灰(B-Tm)含む
第３層	黒色土10YR1.7/1	シルト	ローム粒少量含む しまりあり
第４層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム質土混入 上辺に火山灰(To-a)含む
第５層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒微量含む しまりあり
第６層	暗褐色土10YR3/4	粘土	パミス含む しまりあり

T5号墳G-G'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒色土10YR1.7/1	シルト	ローム粒微量含む しまりあり
第２層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス微量含む しまり強
第３層	黒褐色土10YR2/2	シルト	φ1cmのパミス中量含む しまりあり
第４層	暗褐色土10YR3/3	シルト	ローム質土混入 しまりあり
第５層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス中量含む ローム粒混入 しまりあり
第６層	明黄褐色土10YR6/8	粘土	腐植土混入 しまりあり
第７層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒混入 しまり弱

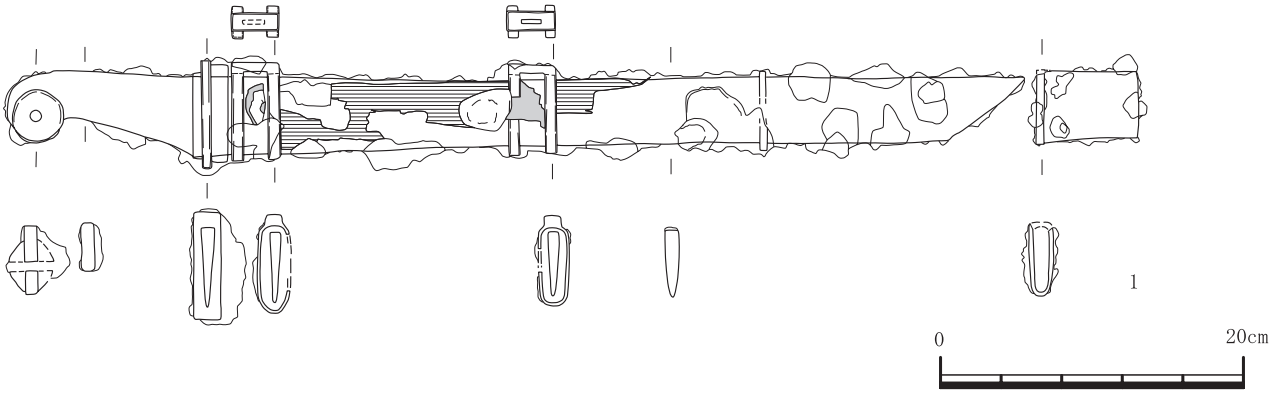


T5号墳　主体部

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	褐色土10YR4/4	シルト	φ2～3cmのロームブロック含む ローム粒含む しまり弱
第２層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス中量含む しまり弱
第３層	暗褐色土10YR3/4	シルト	ローム粒多量含む しまりあり
第４層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒多量含む しまりあり
第５層	暗褐色土10YR3/3	シルト	ローム粒少量含む しまりあり
第６層	黒褐色土10YR2/2	シルト	φ1cmのローム粒含む しまりあり
第７層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス含む しまり弱 炭化物の腐食痕
第８層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒含む しまりあり
第９層	暗褐色土10YR3/4	シルト	ローム粒含む しまりあり
第10層	褐色土10YR4/6	粘土	パミス多量含む しまりあり
第11層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒少量含む しまりあり
第12層	褐色土10YR4/4	粘土	黒褐色土混入 しまりあり
第13層	明黄褐色土10YR6/8	粘土	しまり弱
第14層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒微量含む しまり弱
第15層	黄橙色土10YR7/8	粘土	黒色土混入 しまり強
第16層	褐色土10YR3/3	シルト	ローム粒含む しまりあり
第17層	褐色土10YR3/3	粘土	ローム粒含む しまりあり
第18層	黒褐色土10YR2/3	シルト	パミス含む しまりあり
第19層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒含む しまりあり
第20層	黒褐色土10YR2/3	シルト	ローム粒含む しまりあり
第21層	黒褐色土10YR3/2	粘土	φ3cmのロームブロック多量含む しまりあり

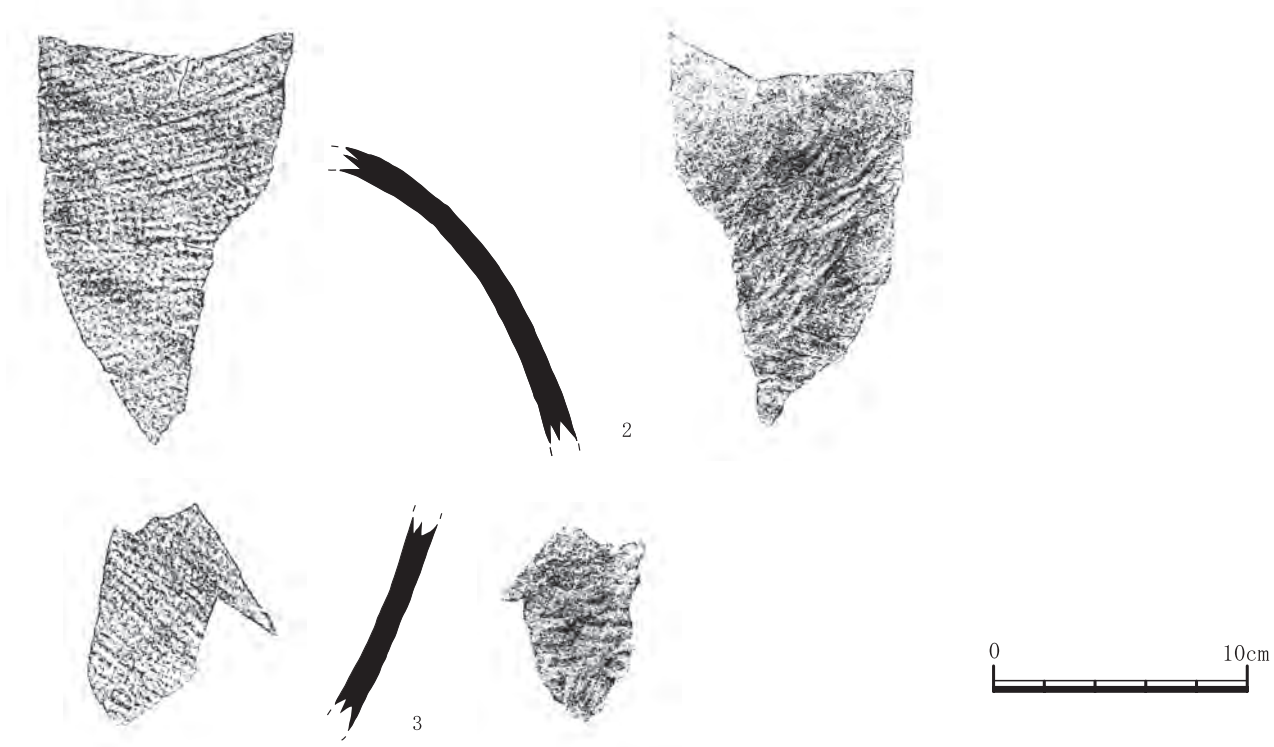
第84図　T5号墳(2)

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第22層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス含む ローム粒含む しまりあり
第23層	黒色土10YR2/1	シルト	パミス含む しまり弱 土壌化しているが側板と見られる層
第24層	黒褐色～褐色土10YR2/3～4/4	粘土	褐色土混入しまりあり
第25層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス含む ローム粒含む しまりあり 炭化物腐植土
第26層	黄褐色土10YR5/6	粘土	黒褐色土極微量混入 しまりあり
第27層	褐色土10YR4/4	粘土	黒褐色土との混合土 しまりあり
第28層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒微量含む しまりあり
第29層	黄橙色土10YR7/8	粘土	腐植土微量混入 しまりあり
第30層	黒褐色土10YR2/2	シルト	パミス含む ローム粒含む しまり強
第31層	黒色土10YR2/1	シルト	パミスを周縁部に含む 炭化物の腐食痕
第32層	黄橙色土10YR7/8	粘土	腐植土混入 しまりあり
第33層	黒褐色土10YR2/2	シルト	ローム粒含む しまり弱



T5号墳周溝

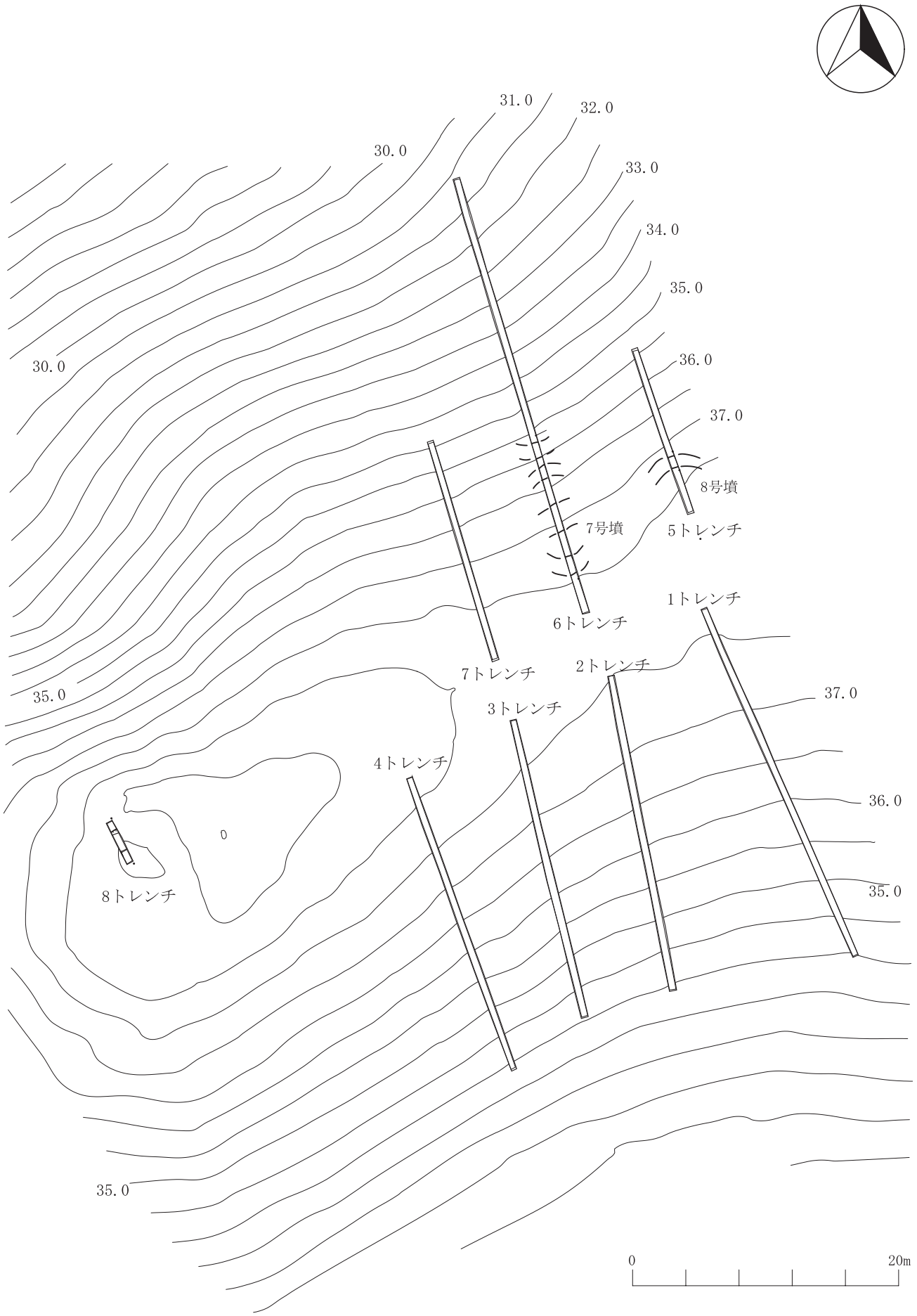
No.	器 種	層 位	全長(cm)	刀身長(cm)	柄長(cm)	元巾(cm)	先巾(cm)	棟厚(cm)	備　考
1	蕨手刀	B10層	67.3	54.9	12.3	5.0	4.2	0.9	鋒:カマス 刀装具　鞘尻金具:鉄製、双脚足金具、責金具、鍔:長方形 絞り27mm・柄反り5mm



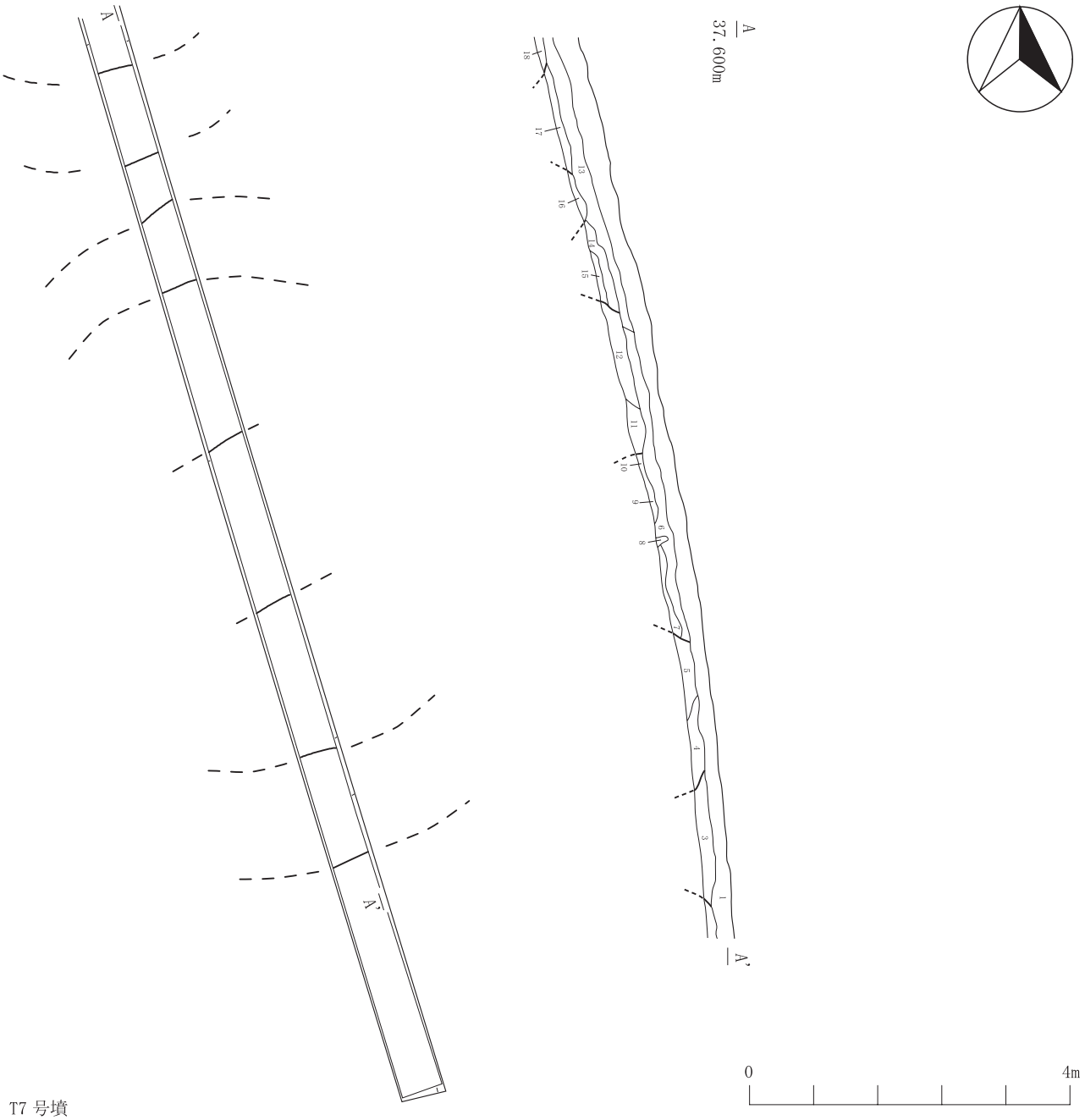
T5 号墳

No.	器 種	部位	層 位	種類	外面調整	内面調整	備考
2	甕	胴部	1層	須恵器	タタキ目	アテ具痕	T5P1・2・3・6・8
3	甕	胴部	1層	須恵器	タタキ目	アテ具痕	T5P4・7

第 85 図　T5 号墳 (3)



第 86 図　天神山遺跡トレンチ配置図

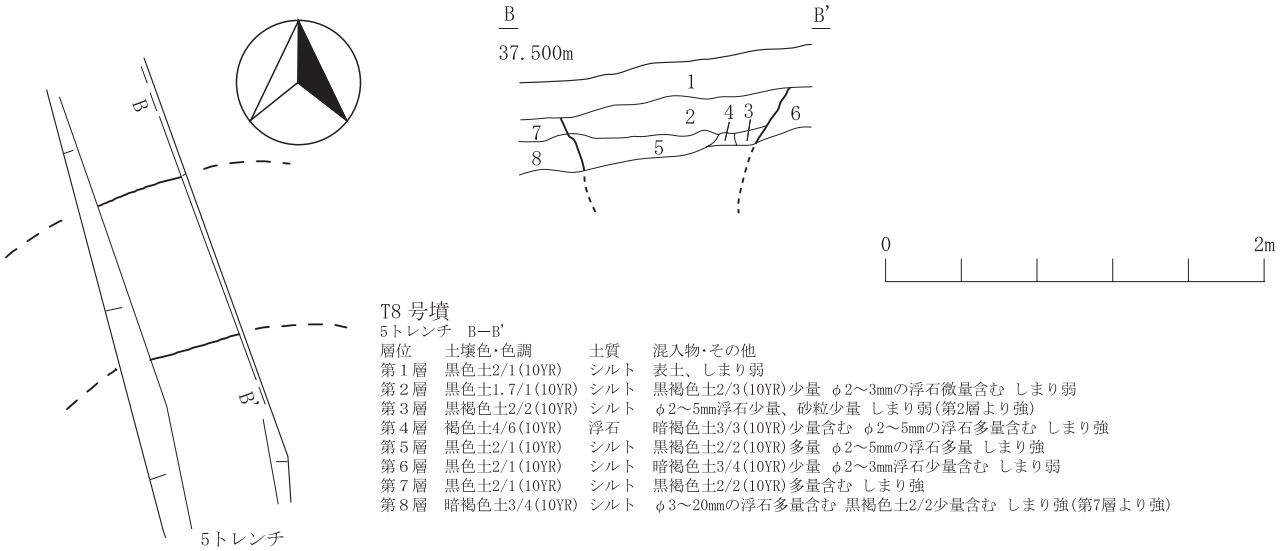


T7 号墳

6トレンチ

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒色土2/1(10YR)	シルト	表土　やわらかくしまりなし
第２層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	暗褐色土3/4(10YR)多量含む　φ1～2mmの浮石粒微量含む　しまり弱
第３層	黒色土2/1(10YR)	シルト	黒褐色土2/2(10YR)多量含む　しまり強
第４層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	暗褐色土3/4(10YR)少量　小礫微量含む　しまり強
第５層	黒褐色土2/1(10YR)	シルト	暗褐色土2/3(10YR)多量　φ2～3mmの浮石粒微量含む　しまり強(第4層より弱)
第６層	黒色土2/1(10YR)	シルト	φ5～6mmの浮石粒少量含む　暗褐色土3/4(10YR)少量含む　暗褐色土2/2(10YR)多量含む　しまり弱
第７層	黒色土2/1(10YR)	シルト	φ2～10mmの浮石粒多量　暗褐色土3/4(10YR)少量含む　しまり弱(第6層より弱)
第８層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	褐色土4/6(10YR)多量　しまり弱
第９層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	褐色土4/6(10YR)のブロック状の物が多量　φ5～10mmの浮石粒多量含む　しまり弱
第10層	黒色土2/1(10YR)	シルト	φ5～20mmの浮石粒少量含む　しまり弱
第11層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	褐色土4/6(10YR)少量　φ5～20mmの浮石粒多量含む　しまり弱(第6層より弱)
第12層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	暗褐色土3/3(10YR)多量含む　褐色土4/6(10YR)多量　φ3～5mmの浮石粒多量含む　しまり弱(第6層より弱)
第13層	黒色土2/1(10YR)	シルト	φ5mmの浮石粒微量含む　黒褐色土2/2(10YR)少量含む　しまり強(第6層より強)
第14層	黒色土2/1(10YR)	シルト	黒褐色土2/2(10YR)多量　φ1～2mmの浮石粒微量含む　しまり強
第15層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	褐色土4/6(10YR)のブロック状のもの多量　φ2～3mmの浮石粒多量含む　しまり強
第16層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	φ1～2mmの浮石粒多量含む　黒褐色土2/3(10YR)少量含む　しまり強
第17層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	褐色土4/6(10YR)微量　φ2～5mm浮石粒微量含む　しまり弱
第18層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	暗褐色土3/4(10YR)多量　φ1～2mmの浮石粒微量含む　しまり弱

第 87 図　T7 号墳



T8 号墳
5トレンチ　B−B'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
第１層	黒色土2/1(10YR)	シルト	表土、しまり弱
第２層	黒色土1.7/1(10YR)	シルト	黒褐色土2/3(10YR)少量　φ2〜3mmの浮石微量含む　しまり弱
第３層	黒褐色土2/2(10YR)	シルト	φ2〜5mm浮石少量、砂粒少量　しまり弱(第2層より強)
第４層	褐色土4/6(10YR)	浮石	暗褐色土3/3(10YR)少量含む　φ2〜5mmの浮石多量含む　しまり強
第５層	黒色土2/1(10YR)	シルト	黒褐色土2/2(10YR)多量　φ2〜5mmの浮石多量　しまり強
第６層	黒色土2/1(10YR)	シルト	暗褐色土3/4(10YR)少量　φ2〜3mm浮石少量含む　しまり弱
第７層	黒色土2/1(10YR)	シルト	黒褐色土2/2(10YR)多量含む　しまり強
第８層	暗褐色土3/4(10YR)	シルト	φ3〜20mmの浮石多量含む　黒褐色土2/2少量含む　しまり強(第7層より強)

第 88 図　T8 号墳

T16 号墳　(第 89 図　図版 28・37)

T34(S120E100 〜 S120E120 トレンチ東側) で、末期古墳の周溝と見られる遺構を確認した。幅は上端で 0.6 〜 1.0m、底面幅 0.44 〜 0.85m、深さは、現地表面から 0.7 〜 0.74m である。堆積土は黒色土から黒褐色土であり自然堆積と考えられる。

覆土中から、甕と坏が出土した。1 はミガキを主とする小型の甕である。口を上にして出土した。2 は内面黒色処理を施した坏である。いずれも2層中の出土であり、周溝底部からは20cm以上浮いた状態である。

部分的ではあるが、 確認した部分は周溝の開口部であろうと推測される。

原典 D

T17 号墳　(第 90 図　図版 29・36)

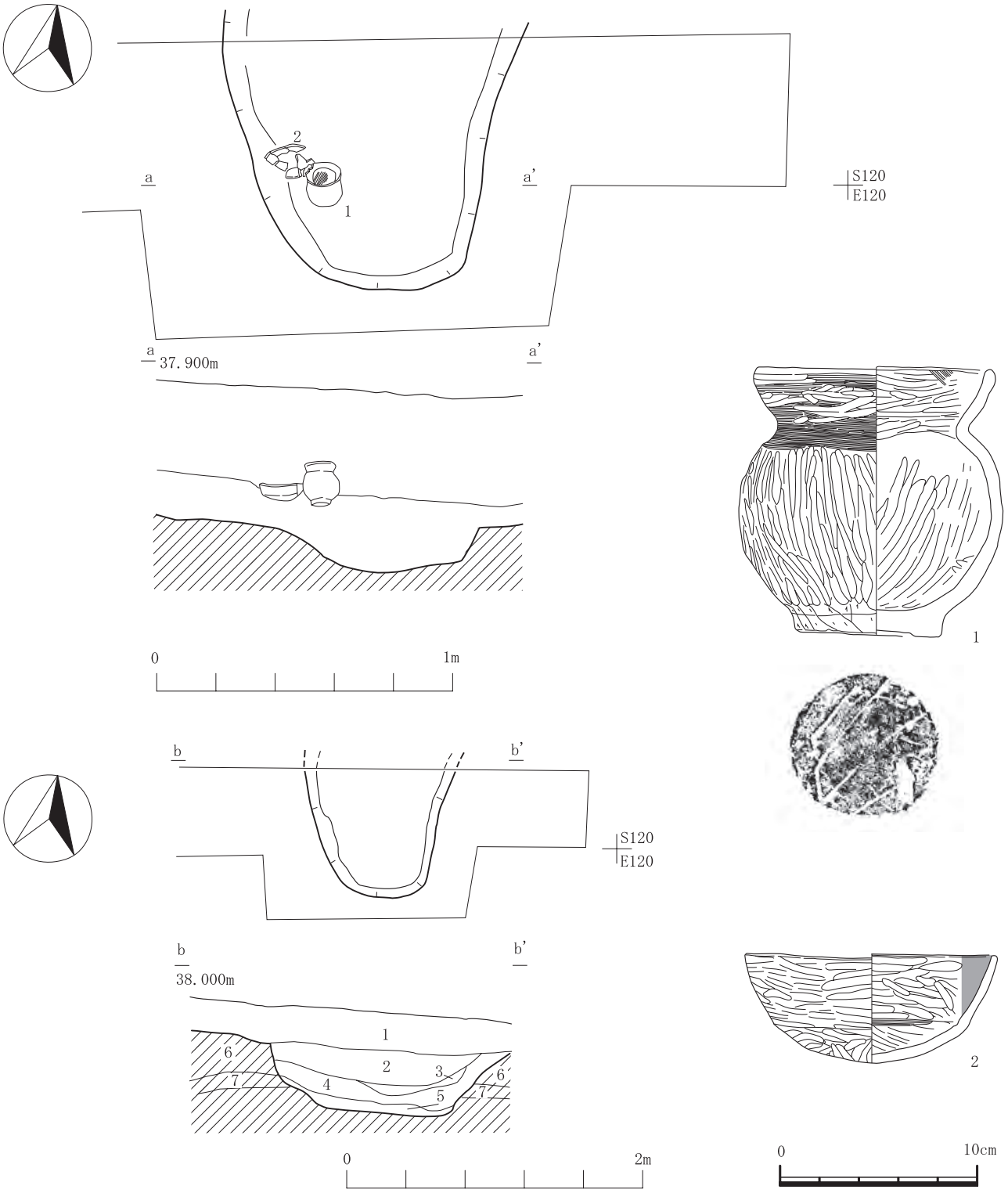
南北に設定したトレンチのほぼ中央の R33 に位置する。確認面で幅 70cm である。坏 2 点、甕 1 点、轡 1 点が出土した。

1 は全面ミガキの坏である。内面は黒色処理されているが一部ニ次燃成のため黒色処理がとんでいる。2 はミガキが多用されるが外面底部がケズリである。内面は黒色処理され、底部は燃成後穿孔されている。3 の甕も底部を打ち欠かれている。4 は鏡板が素環の轡である。鉄製で、引手は輪にした鉄棒を捻って作られている。鏡板の一部を欠いている。立聞部分は非常に細くなっており、実際にかなり使用されていたのではないかと推測される。

底部穿孔の坏・甕や、轡の出土など、A9・10 号墳周溝及び周辺出土遺物とほぼ同様の内容である。いずれも墓に供献されたものと考えられる。

平成 16 年に本遺構を確認する目的で物理探査を行い、 特に電気探査によってその存在がさらに明らかにできた。 X 線撮影により、 轡の鏡板には穴があり、 鉸具作りであることがわかった。

原典 D

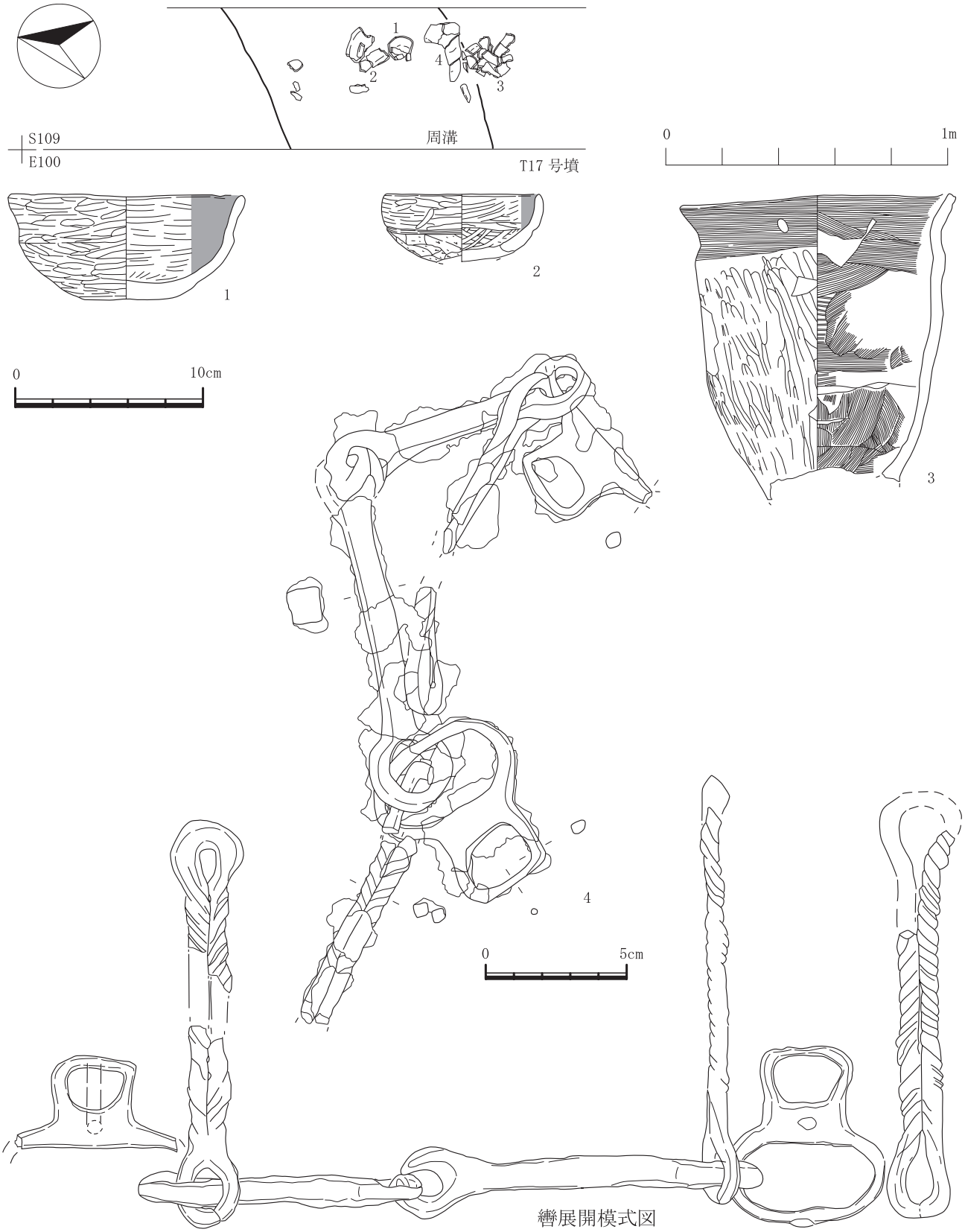


T16 号墳

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	表土層
第2層	黒色土	10YR2/1	シルト	周溝覆土　混入物がみられない
第3層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む
第4層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む
第5層	黒褐色土	10YR2/3	砂	中撥浮石起因の砂多量含む
第6層	黒色土	10YR2/1	シルト	自然堆積層
第7層	黒褐色土	10YR2/3	砂	中撥浮石層

No.	種類	層位	部位	外面調整	内面調整	口径×器高×底部(cm)	No.
1	土師器	2層	甕	口縁:ナデ→ミガキ 体:ミガキ 底部付近:ケズリ	口縁:ハケメ→ミガキ 体:ミガキ	12.2×13.7×7.3 胴部：φ13.4cm	49
2	土師器	2層	坏	ミガキ	ハケメ→ミガキ,黒色処理	13.6×5.5	3

第 89 図　T16 号墳

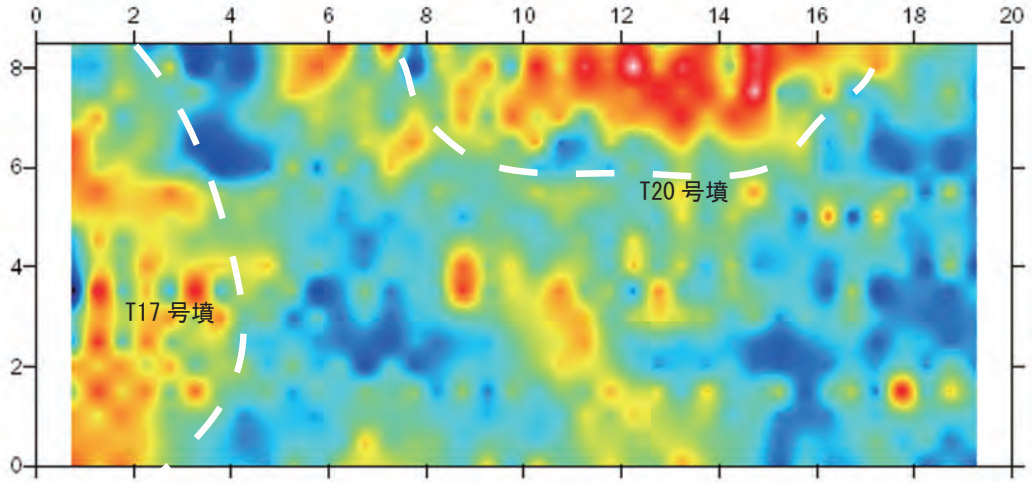


T17 号墳

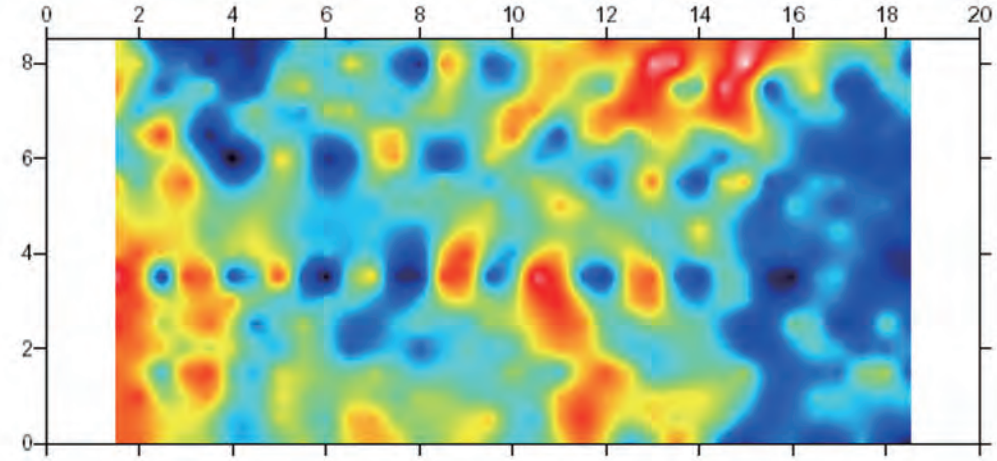
No.	名称	最大計測値（cm）				出土位置	備考
		鏡板環体	立聞	銜長	引手長		
4	轡	3.4×5.8	3.3	10.2 12.5	10.2cm以上	S100－120E100	使用の為か 一部細い

No.	種類	層位	部位	外面調整	内面調整	備考	口径X器高(cm)	No.
1	土師器	周溝覆土	坏	ミガキ	ミガキ→黒色処理	二次加熱による黒色処理トビ・ハジケ	12.8×5.6	2
2	土師器	周溝覆土	坏	上:ミガキ 下:ケズリ	ミガキ 黒色処理	底部:焼成後穿孔,S100～120E100	8.3×(3.8)	4
3	土師器	周溝覆土	甕	口縁：ナデ 体部：ミガキ	ハケメ→ナデ	焼成後,底部穿孔 P-7	14.7×(16)	56

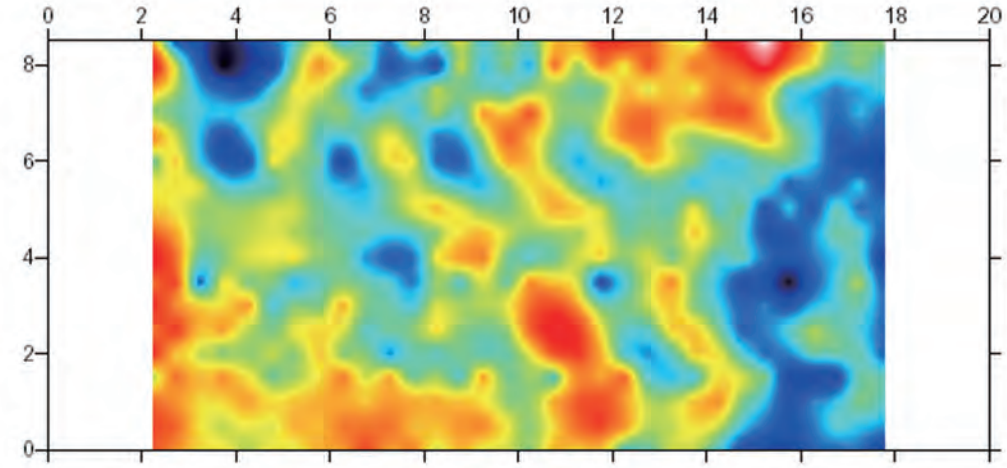
第 90 図　T17 号墳



0.5m

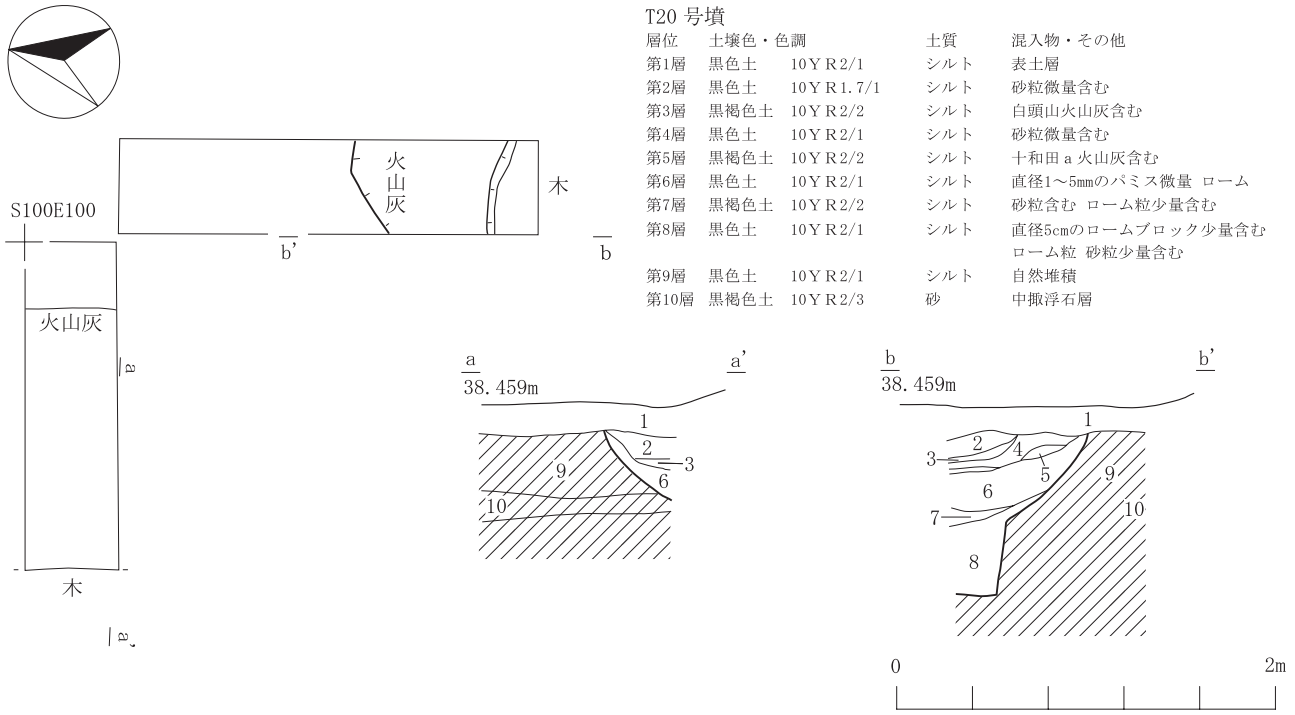


1.0m



1.5m

第 91 図　電気探査（T17 号墳・T20 号墳）



T20 号墳

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	表土層
第2層	黒色土	10ＹＲ1.7/1	シルト	砂粒微量含む
第3層	黒褐色土	10ＹＲ2/2	シルト	白頭山火山灰含む
第4層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	砂粒微量含む
第5層	黒褐色土	10ＹＲ2/2	シルト	十和田ａ火山灰含む
第6層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	直径1～5mmのパミス微量 ローム
第7層	黒褐色土	10ＹＲ2/2	シルト	砂粒含む ローム粒少量含む
第8層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	直径5cmのロームブロック少量含む ローム粒 砂粒少量含む
第9層	黒色土	10ＹＲ2/1	シルト	自然堆積
第10層	黒褐色土	10ＹＲ2/3	砂	中掫浮石層

第 92 図　T20 号墳

T20 号墳　（第 92 図）

S100E100 から西と南に幅約 20cｍの火山灰が確認された。Q32・R32 に位置する。確認当初、住居跡と推定したものである。墓域中であり、住居跡であれその性格が注目されるため一部掘削したところ、溝であることが分かった。3 層 4 層に色調の異なる火山灰を含み、上層が B-Tm、下層が To- a火山灰と推定される。底面は平坦であり、直立気味に立ち上がり、途中から外へ広がる。出土遺物は無かった。

なお、平成 16 年に本遺構を確認する目的で物理探査を行い、特に電気探査で周溝を明確に把握できた。

原典 D

T21 号墳　（第 93 図　図版 29）

N27 で、末期古墳の周溝と主体部と見られる遺構を確認した。北側が主体部、南側が周溝とみられる。周溝の堆積土は黒色土から黒褐色土であり 4 層には To-a 火山灰と推定される火山灰が堆積している。自然堆積と考えられる。出土遺物はなかった。

原典 E

T22 号墳　（第 93 図　図版 29）

L25 に位置する。2 層に火山灰を含む。自然堆積と考えられる。出土遺物はなかった。

原典 E

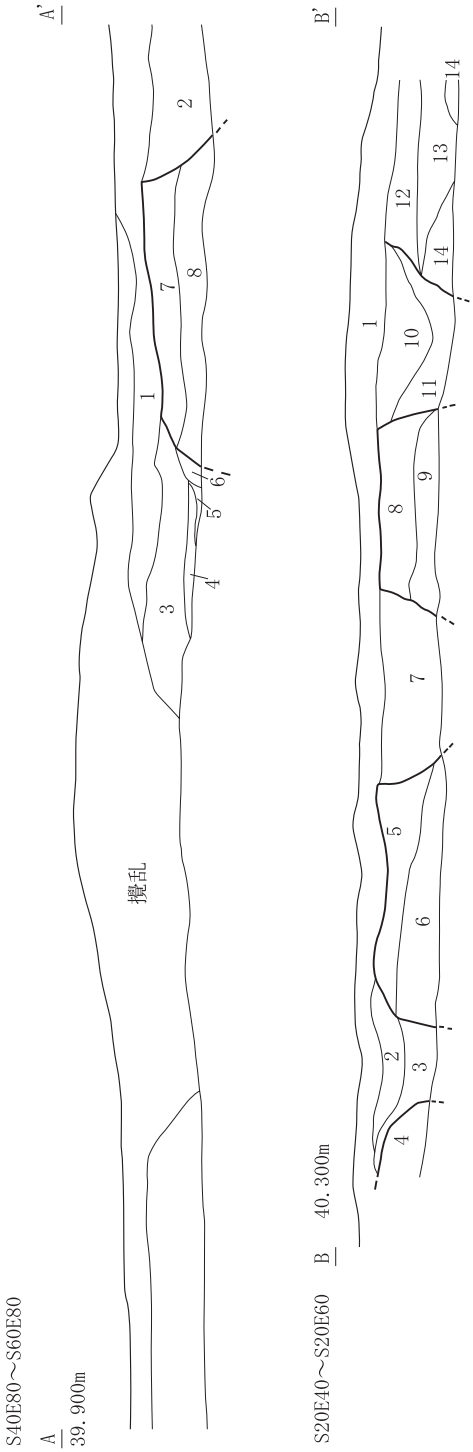
T23 号墳　（第 93 図）

末期古墳の周溝と主体部と推定される遺構を K25 で確認した。堆積土は黒色から黒褐色土である。周溝は自然堆積と考えられる。5 層・10 層は自然堆積土層とみられ、盛土はみられない。出土遺物はなかった。

原典 E

T24 号墳　（第 94 図　図版 29・37）

末期古墳の周溝と推定される遺構を検出した。H25 に位置する。周溝の堆積土は 5 層にわけられ、6 層は



T21 号墳　　T23 号墳

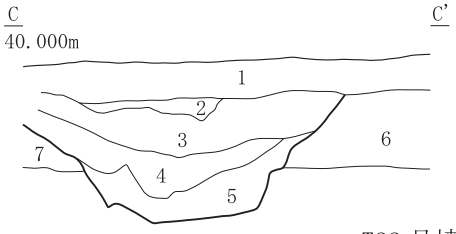
T21号墳　S40～60E80

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	表土
第2層	黒色土	10YR2/1	シルト	浮石微量含む
第3層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	火山灰微量 浮石少量 小礫含む
第4層	灰黄褐色土	10YR6/2	シルト	火山灰 黒褐色土混入
第5層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	浮石微量
第6層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	砂質土 浮石微量含む
第7層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	浮石微量含む
第8層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	砂質土 ローム混

T23号墳　S20E40～60

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	表土 根多量含む しまり強
第2層	黒色土	10YR2/1	シルト	浮石・砂粒少量 黒褐色(10YR2/2)少量含む しまり強
第3層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	浮石粒多量 砂粒少量 小礫微量含む しまり強
第4層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	浮石粒微量 砂粒少量含む しまり強
第5層	黒色土	10YR2/1	シルト	黒褐色(10YR2/2)少量 浮石・砂粒微量含む しまり強
第6層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム粒・浮石粒多量 黒色(10YR2/1)少量含む しまり強
第7層	黒色土	10YR2/1	シルト	浮石粒少量含む しまり強
第8層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒・浮石粒微量含む しまり強
第9層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	暗褐色(10YR3/4)多量含む しまり弱
第10層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒・浮石粒少量含む しまり強
第11層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	浮石粒・暗褐色(10YR3/4)少量含む しまり強
第12層	黒色土	10YR2/1	シルト	浮石粒微量 根多量含む しまり弱
第13層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	浮石粒多量 ローム粒・砂粒少量含む しまり強
第14層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	暗褐色(10YR3/3)多量含む しまり強

S20E40～S20E60



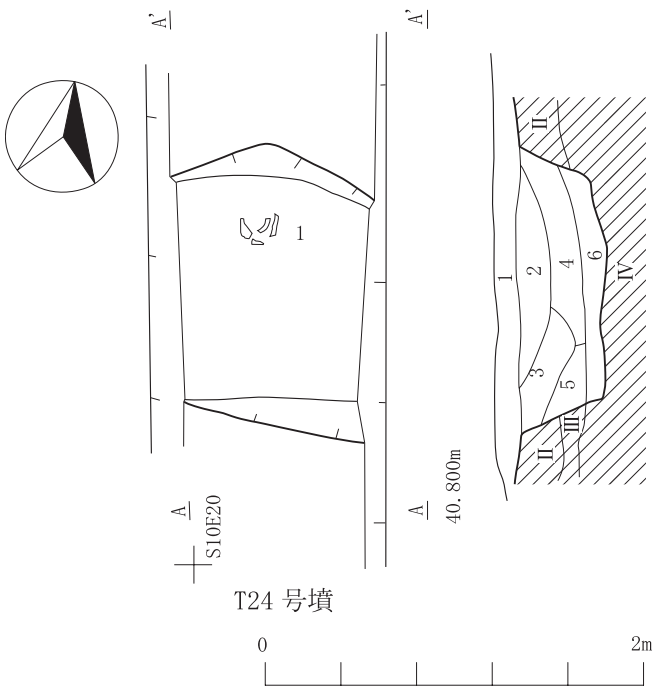
T22 号墳

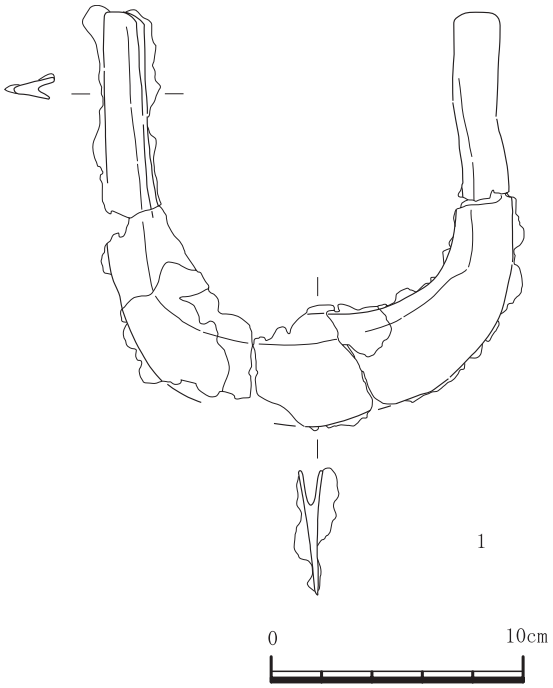
T22号墳　S20E60

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	表土、根多量に含む やや柔らかく粘性あり しまりやや強
第2層	黒色土	10YR2/1	シルト	白頭山？火山灰含む しまりやや強
第3層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	黒色(10YR2/1)少量 砂粒微量含む しまり強
第4層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒微量 褐・黒褐色(10YR4/6・2/2)少量 褐色ブロック多量含む しまり強
第5層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	褐色(10YR4/6)ブロック多量 砂粒微量 黒色(10YR2/1)少量含む しまり強
第6層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒微量含む しまり強
第7層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒多量含む 柔らかくしまりやや弱

0　　2m

第 93 図　T21・T22・T23 号墳



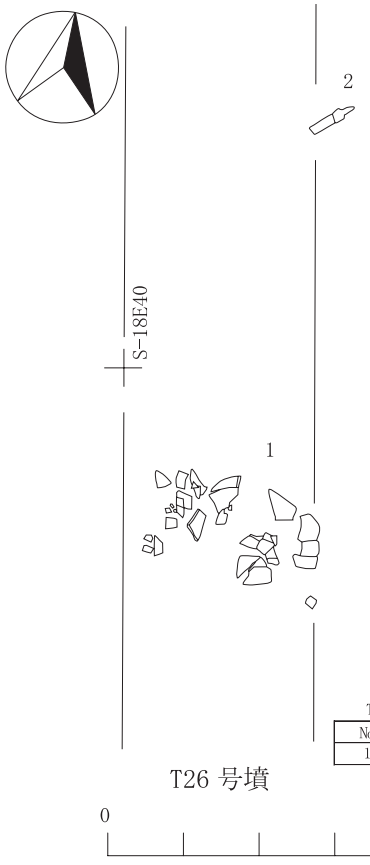


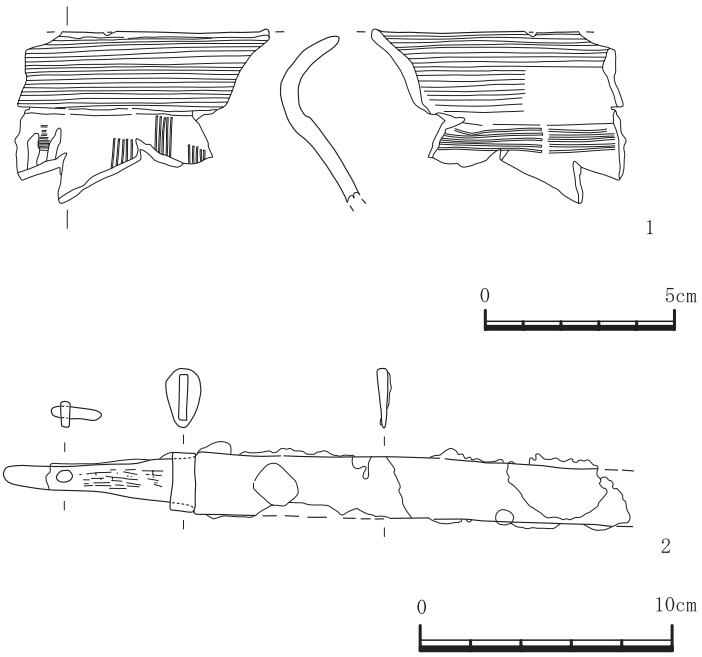
T24 号墳　S0E20 ～ S20E20

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR2/1	シルト	表土
第2層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ2～3mmの浮石粒少量含む しまり強
第3層	黒色土	10YR2/1	シルト	φ2～3mmの浮石粒少量含む しまり強
第4層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ1～5mmの浮石粒多量含む しまり強
第5層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ1～5mmの浮石粒・ローム粒多量含む しまり弱
第6層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	φ1～10mmの浮石・ローム粒多量 φ10cmの浮石ブロック含む しまり強

T24号墳　S0E20～S20E20

番号	器種	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)
1	鍬・鋤先	(16.5)	4.6	1.0





T26号墳　S0～-20E40

No.	層位	器種	種類	口径(cm)	外面調整	内面調整
1	上層	球胴甕	土師器	―	口縁：ナデ、体部：ハケ目→ミガキ	口縁：ナデ、体部：ハケ目

T26号墳　S0～-20E40

番号	器種	全長(cm)	刀身長(cm)	茎長(cm)	元巾(cm)	先巾(cm)	重ね(cm)	備考
2	小刀	(24.8以上)	(17.3以上)	7.6	2.5	不明	0.5	

第 94 図　T24・T26 号墳

掘り方を埋めてその上面を周溝底部とした可能性がある。6 層上から鋤・鍬先が 1 点出土した。

原典 E

T26 号墳　（第 94 図　図版 30・37）

I22 に落ち込みが見られ、末期古墳の主体部と推定される。付近から小刀と甕が出土した。小刀は先端部が欠損し、現在の全長は 24.8cm である。球胴甕は1個体分と推定されるが、各破片が微細で磨耗が激しく接合が困難であったため、口縁部破片のみ図示した。口縁部ナデ、体部はハケメの後ミガキが施されている。

原典 E

t1 号土壙　（第 95 図　図版 25）

位置　P30 の T4 号墳周溝内に位置する。T4 号墳周溝埋め戻し土上で確認した。

規模　上面長軸 1.3m、短軸 0.52 ～ 0.64m の長方形である。床面には北西･南東小口付近に溝がある。溝は北西側が長さ 40cm、幅 17cm、深さ 14cm、南東側 41cm、幅 13cm、深さ 30cm。両溝の間は 83cm であり、床面の幅は 49cm である。このほか長辺を延長するような幅 8cm、深さ 33cm の溝が南東方向へ 20cm 掘られていた。小口板埋め込み式の木棺構造と考えられ、小口板とともに、この掘り込みを利用し、長辺の側板を固定したと推定される。

主軸方向は N-33°　-W である。

堆積状況　堆積土は黒褐色から暗褐色土であり、上面に B-Tm とみられる火山灰が堆積している。火山灰の堆積から、火山灰降下当時周溝同様くぼんでいたことを示すため、土壙の埋め戻しは、T4 号墳周溝を埋めてしまう程ではなかったとみられる。断面観察から周溝堆積土との切りあいは見られないため、周溝が埋没しない段階につくられたもので、T4 号墳との時期差は大きくないと考えられる。

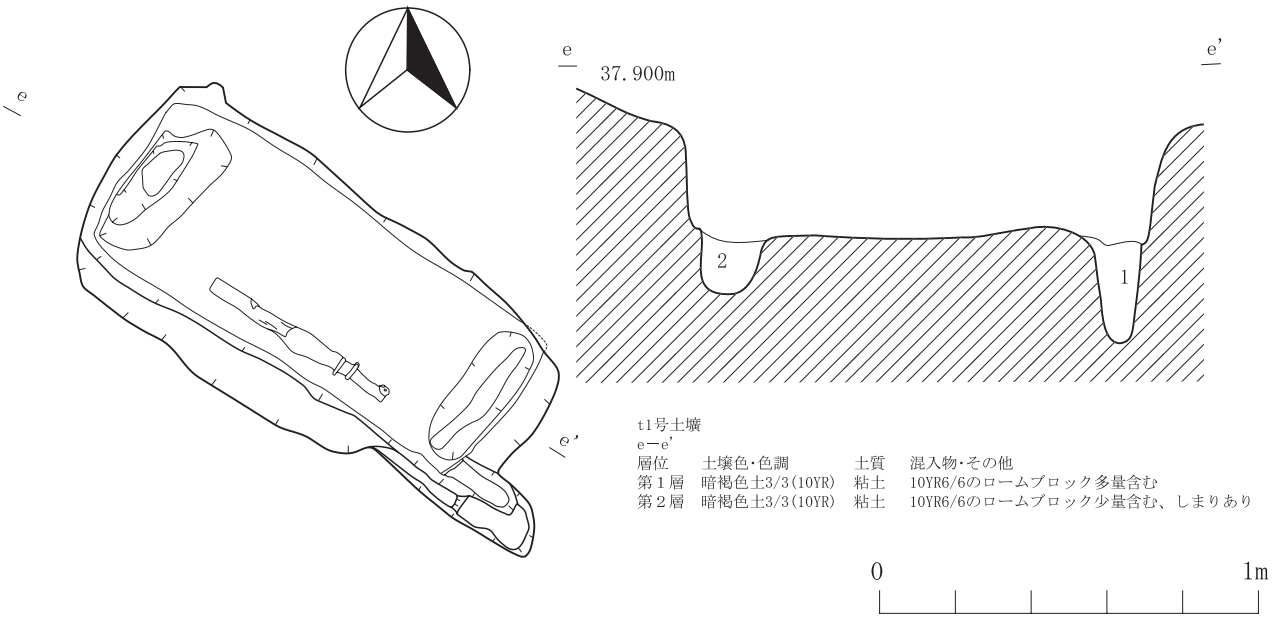
出土遺物　（第 95 図　図版 37）

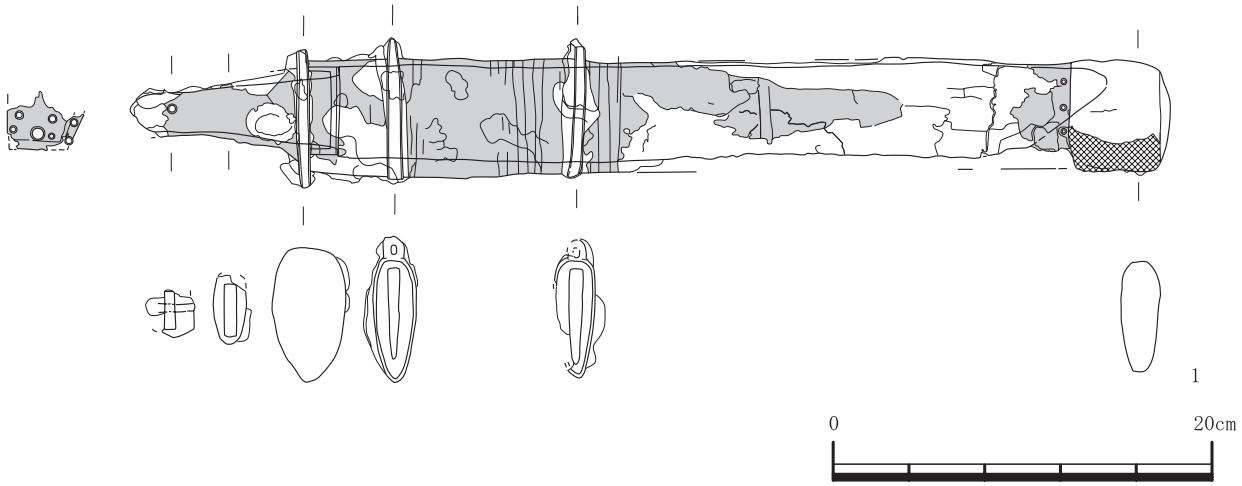
床面西側から、柄を南、刃を内（東）側に向けた状態で大刀が出土した。

小結　T4 号墳周溝を切っているため、T4 号墳築造以降のものと考えられる。残存する漆皮膜から柄頭は方頭であった可能性がある。柄頭には 6 本の錫製鋲が打たれていた。鞘尻金具付近の鞘にも 3 本の鋲が打たれている。漆などを押さえる機能とともに、佩表のみに打たれることから、装飾的な意図があったと推定される。柄は木質が残っておりその上に黒漆がみられる。鍔は倒卵形で形態のくずれはない。刀身は、鞘に入った状態であるため直接見られないが、X 線撮影の観察によると幅 4.3 から 4.8cm 長さ 40.6cm である。カマス鋒である。刀身が太く寸づまりであり､柄頭が推定どおり方頭であれば｢北の方頭｣とみることができる。鞘は木の上を樹皮で巻き、さらに黒漆を塗っているものと推定される。2 点みられた足金物は単環付である。鞘尻金具は鉄製とみられ、筒状を呈し、表面に布が付着している。足金具、鞘尻金具ともに断面形は扁平である点が特徴である。このような平鞘に伴う単環付足金具は 7 世紀後葉から 8 世紀後葉までとされる（八木 2003）。なお、この大刀より剥離した漆皮膜を使用した AMS による年代測定結果では 7 世紀後半から 8 世紀の年代が得られている。

原典 I

遺構外出土遺物　（第 96 図）



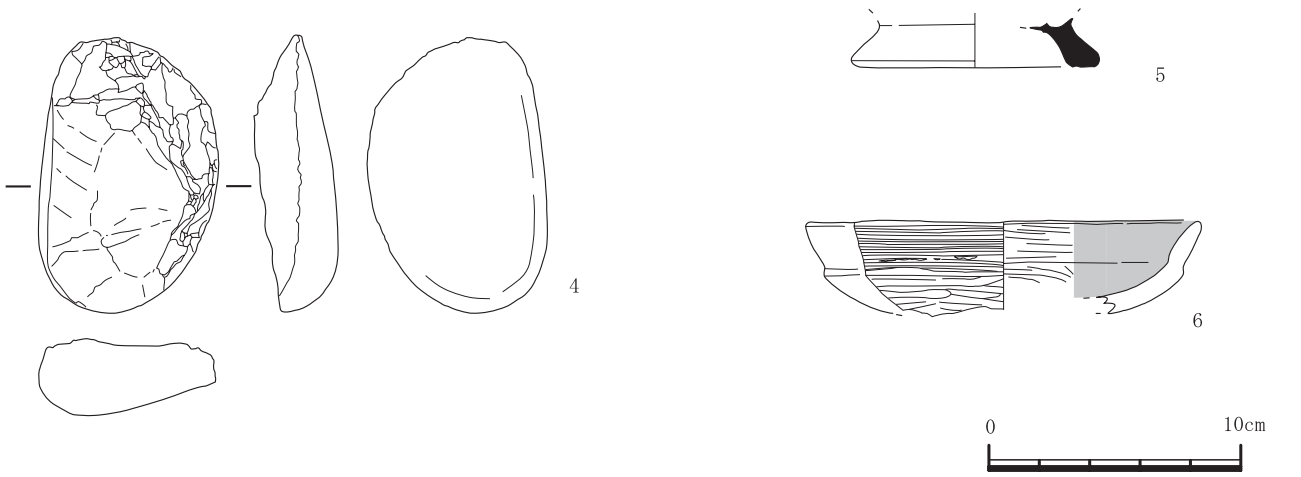


t1 号土壙

No.	器 種	層 位	全長(cm)	刀身長(cm)	柄長(cm)	元巾(cm)	先巾(cm)	棟厚(cm)	備　考
1	大刀	床上	(60.0)	40.6	(8.9)	4.8	4.3	0.8	鋒:カマス 刀装具　鞘尻金具:鉄製布張り　単脚足金具　鍔:倒卵形　柄頭:方頭と推定 黒漆・錫製鋲が施される　鞘:黒漆先側佩表に鋲

第 95 図　t1 号土壙

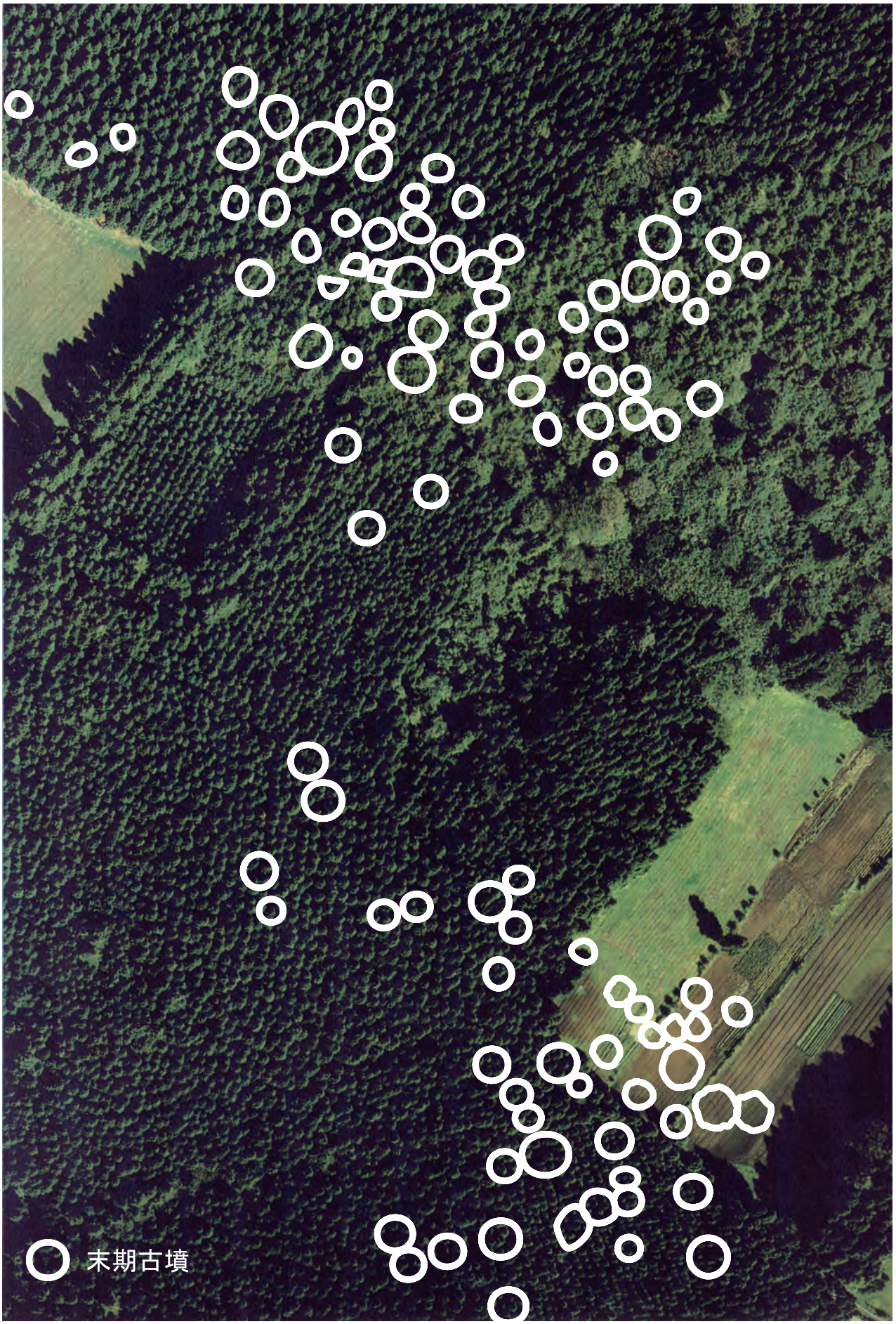
No.	種類	層位	部位	外面調整	内面調整	備考	No.
1	須恵器	2層	底部	タタキ目	あて具痕	S140E120	17
2	須恵器	2層	胴部	タタキ目	あて具痕	S120E100～140	8
3	須恵器甕？	2層	口縁部	ロクロナデ,自然釉	ロクロナデ	外面:打ち欠いた所に自然釉→打ち欠いて焼いた?	67



No.	器種	層位	最大計測値			重（g）	石質	出土位置
			長(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)			
4	敲磨器	覆土	109.5	70.5	30.0	296.6	砂岩	S120～140 E60

No.	器種	層位	種類	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	外面調整	内面調整
5	長頸瓶？	周溝表土	須恵器	-	-	(10.0)		
6	坏	表採	土師器	(15.9)	-	-	口縁 ナデ 体部 ミガキ	ミガキ→黒色処理

第 96 図　天神山遺跡遺構外出土遺物



図版 19　上空から見た阿光坊古墳群

周溝確認

主体部完掘（南東から）

主体部掘り方完掘（南東から）

完掘（南東から）

掘り方完掘（南東から）

確認（北から）

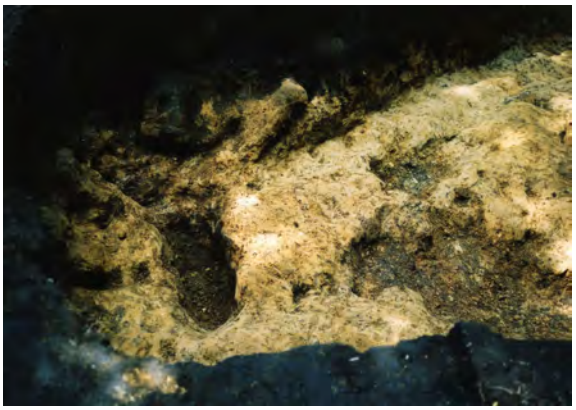
主体部南東セクション（東から）

主体部東西セクション C-C’（南から）

図版 20　T1 号墳 (1)

主体部東西セクションB-B’（北から）

主体部溝工具痕（北西から）



主体部C溝（東から）

周溝F-F’東側セクション（南から）

周溝G-G’北側セクション（東から）

周溝C-C’北側セクション（西から）

周溝a-a’セクション（東から）

周溝b-b’セクション（東から）

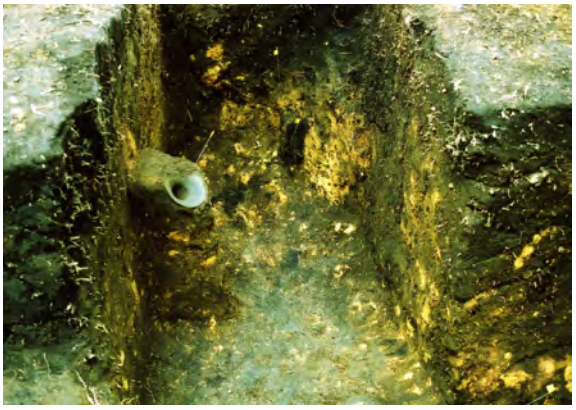
図版21　T1号墳(2)

T2 号墳確認

T2 号墳周溝セクション

T2 号墳床面完掘（南から）

床面完掘（南東から）



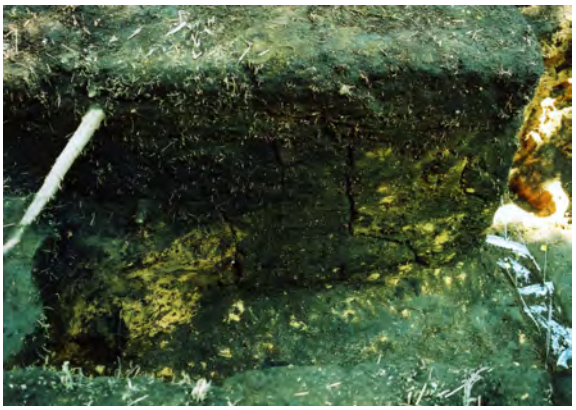
長頸瓶出土状況（南から）

床面遺物出土状況

主体部セクション A-A’（南から）

主体部セクション D-D’（東から）

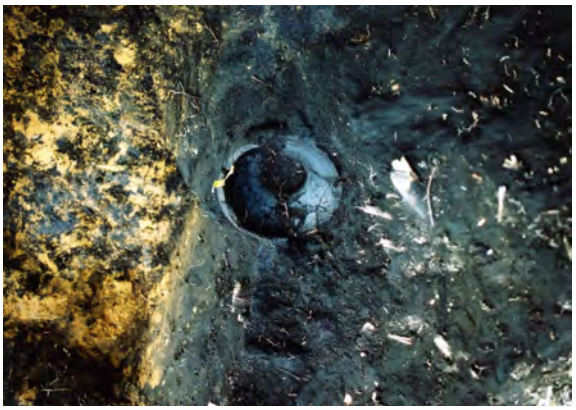
図版 22　T2 号墳 (1)



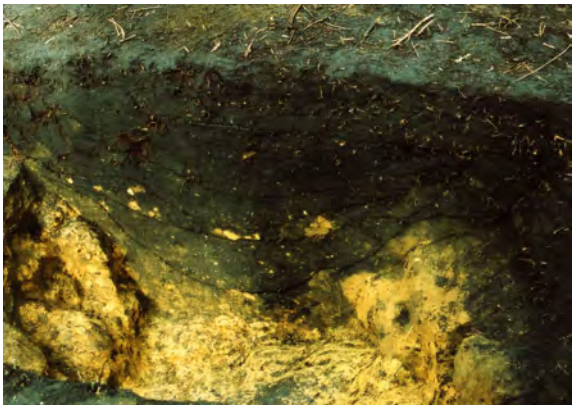
主体部セクションD-D’（西から）

主体部セクションC-C’（北から）

掘り方完掘（南東から）



短頸壺出土状況（北から）



周溝セクションC-C’（南西から）

周溝セクションa-a’（北西から）

周溝セクションf-f’（南から）

周溝セクションe-e’（南から）

図版23　T2号墳（2）

周溝セクション B-B’

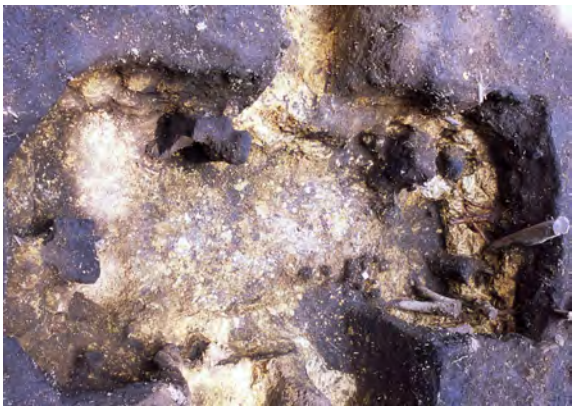
周溝セクション C-C’

主体部セクション a-a’

主体部セクション b-b’

主体部セクション c-c’ ①

主体部セクション c-c’ ②

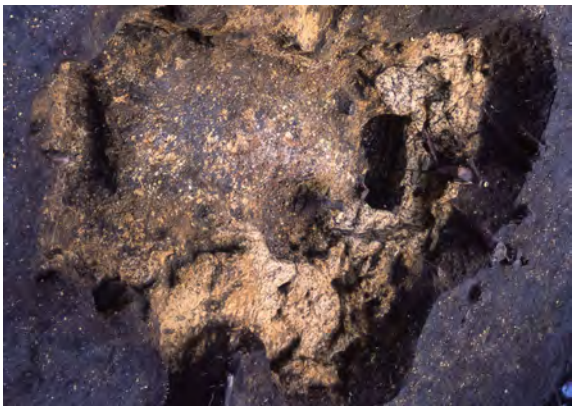


炭化物出土状況（北西から）

釧出土状況

図版 24　T3 号墳 (1)

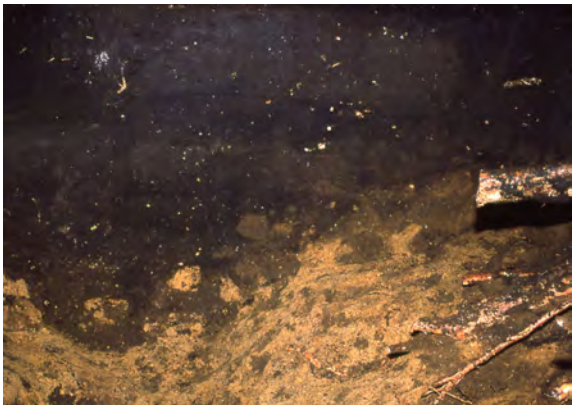
T3 号墳主体部完掘



T3 号墳主体部完掘（北西から）

T3 号墳完掘（南東から）

T4 号墳周溝・t1 号土壙セクション A-A'



T4 号墳周溝セクション B-B'

T4 号墳主体部セクション a-a'

T4 号墳主体部セクション b-b'

T4 号墳遺物出土状況

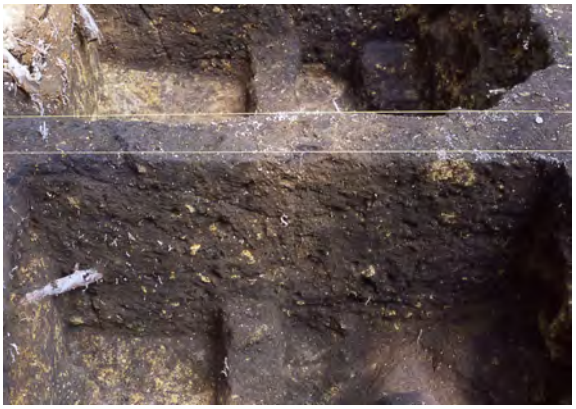
図版 25　T3 号墳 (2)・T4 号墳 (1)・t1 号土壙

T4 号墳完掘

T5 号墳確認状況

T5 号墳主体部確認状況

T5 号墳主体部確認セクション a ①（東から）



T5 号墳主体部セクション b（南から）

T5 号墳主体部炭化材出土状況

T5 号墳周溝セクション A（中央）

T5 号墳周溝セクション A（北側）

図版 26　T4 号墳 (2)・T5 号墳 (1)

周溝セクションB（西側）

周溝セクションB（中央）

周溝セクションD

周溝セクションE

周溝セクションF

周溝セクションG

遺物出土状況①

完掘（南から）

図版27　T5号墳（2）

T5 号墳遺物出土状況②

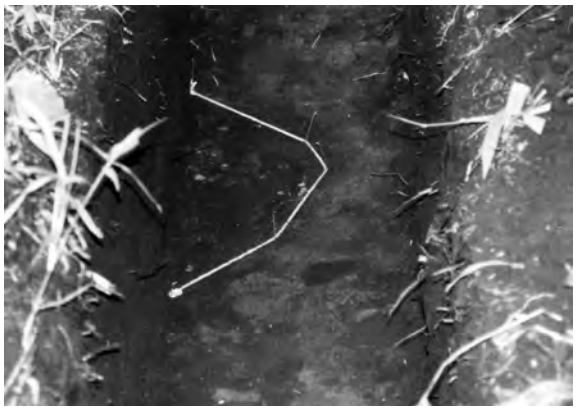
T5 号墳完掘（南東から）

T7 号墳（6 トレンチセクション）

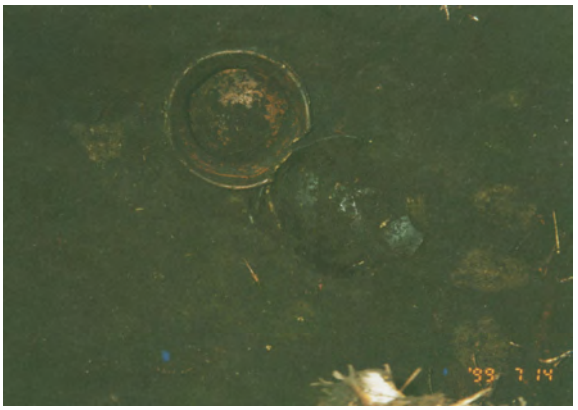
T7 号墳（6 トレンチ・南から）

T8 号墳（5 トレンチ）

T11 号墳確認（S140 E60 ～ S160 E60）



T15 号墳確認（S120 E100 ～ S120 E120）



T16 号墳遺物出土状況（S120 E100 ～ S120 E120）

図版 28　T5 号墳（3）・T7 号墳・T8 号墳・T11 号墳・T16 号墳

T17 号墳遺物出土状況（S100 E100 ～ S120 E100）

T21 号墳周溝・主体部（S40 E80 ～ S60 E80・南から）

T21 号墳周溝セクション（S40 E80 ～ S60 E80･北から）

T22 号墳周溝セクション（S0 E60 ～ S20 E60）

T24 号墳確認（S0 E20 ～ S20 E20）

T24 号墳周溝確認（S0 E20 ～ S20 E20）

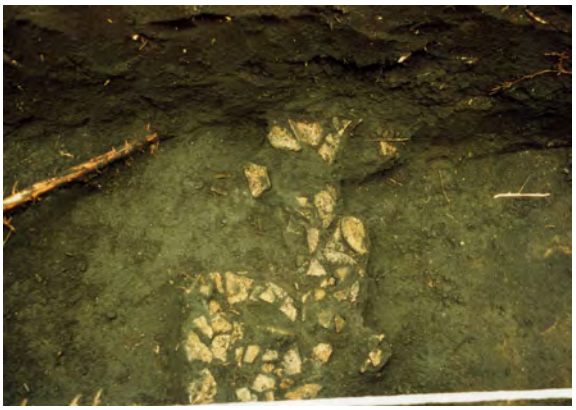
T24 号墳出土鋤・鍬先（S0 E20 ～ S20 E20）

T25 号墳周溝確認（S0 E0 ～ S0 E20・西から）

図版 29　T17 号墳・T21 号墳・T22 号墳・T23 号墳・T24 号墳・T25 号墳

T26 号墳確認（S0 E40 ～ S-20 E40）

T26 号墳周溝セクション（S0 E40 ～ S-20 E40）



T26 号墳遺物出土状況（S0 E40 ～ S-20 E40・西から）

T1 号墳出土鉄鏃

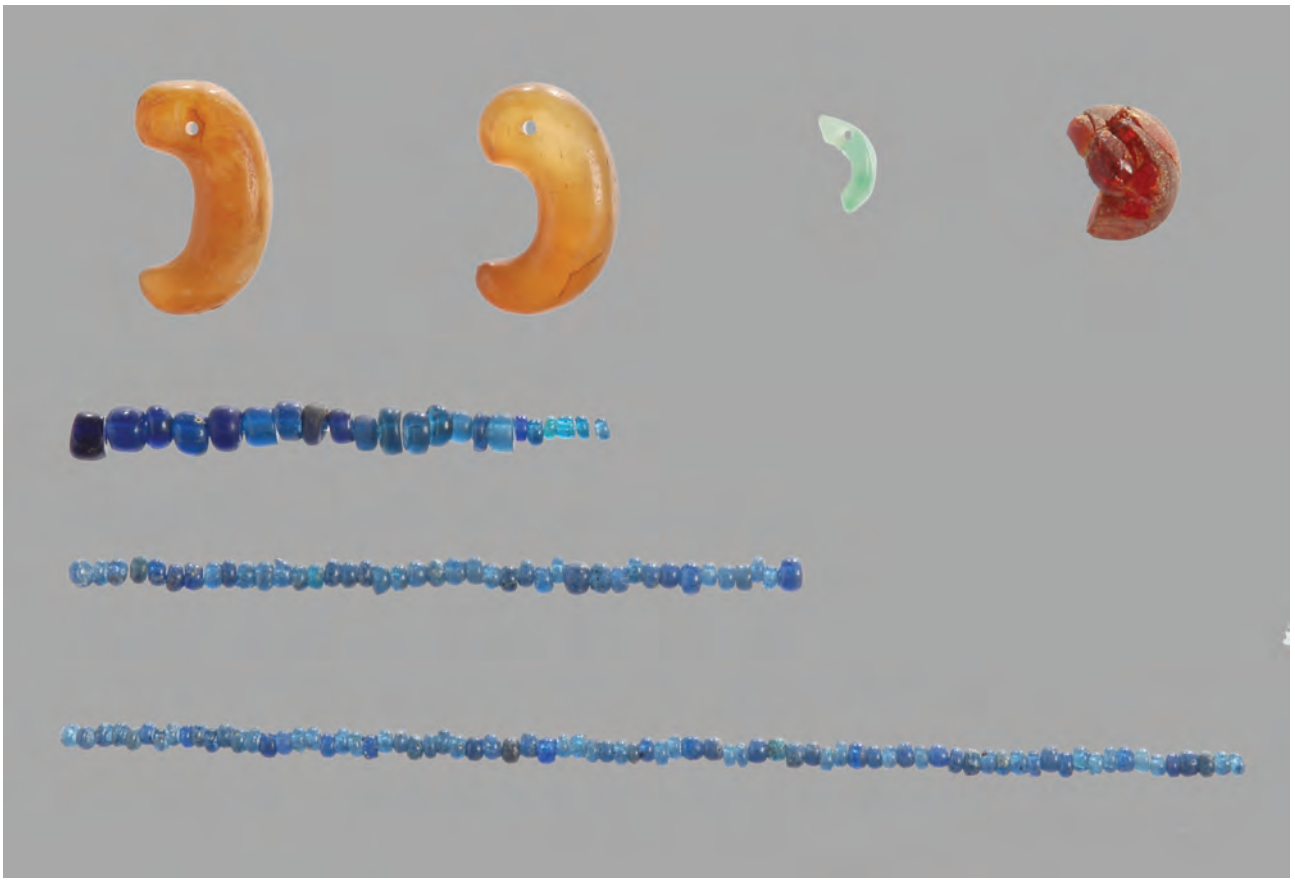
T1 号墳出土大刀

図版 30　T26 号墳・T1 号墳出土遺物（1）

蕨手刀

刀子・釧・鑷子・環状銅製品・不明

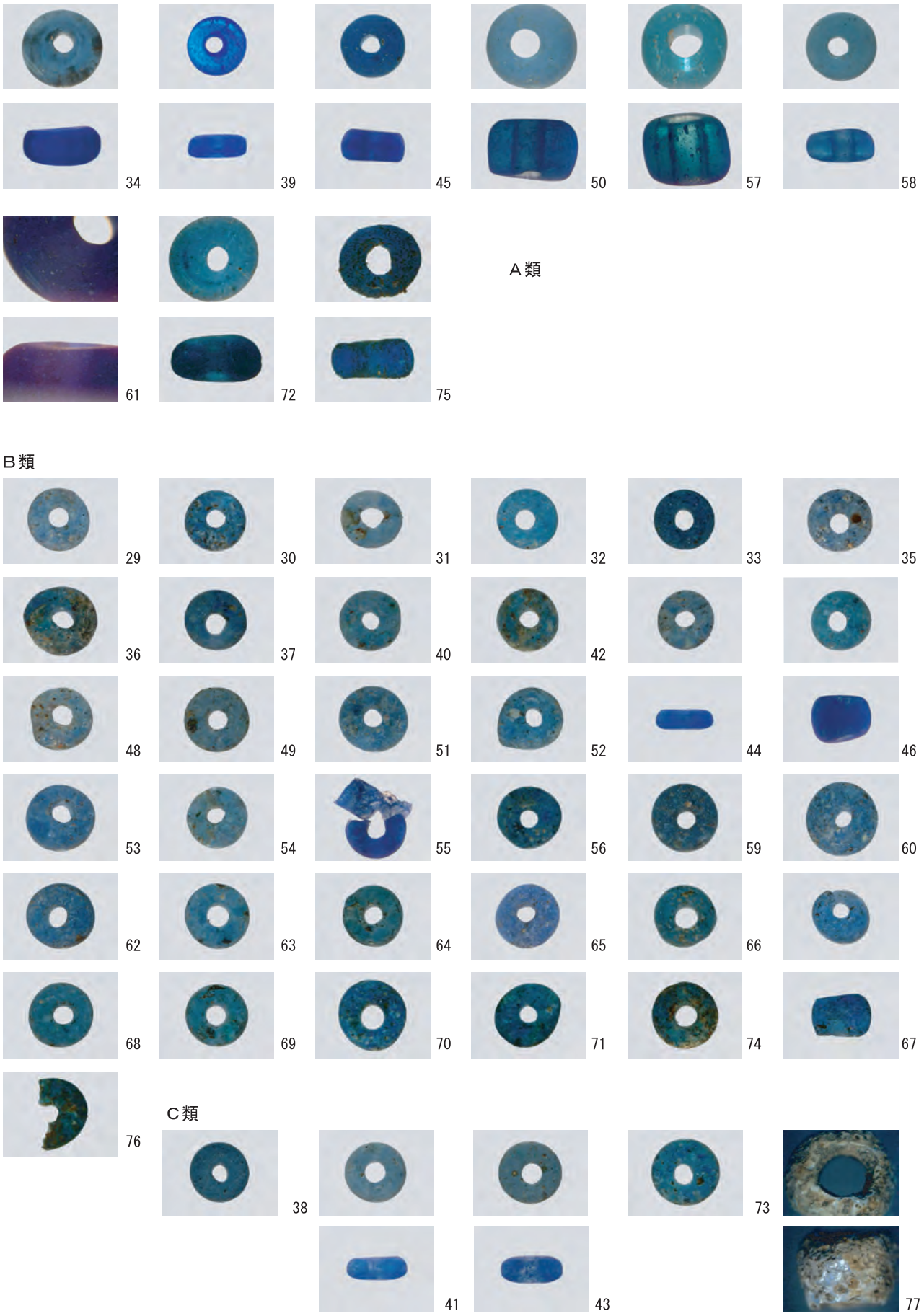
図版 31　T2 号墳出土遺物 (1)



勾玉・琥珀玉・ガラス玉

須恵器長頸瓶・短頸壺・甕

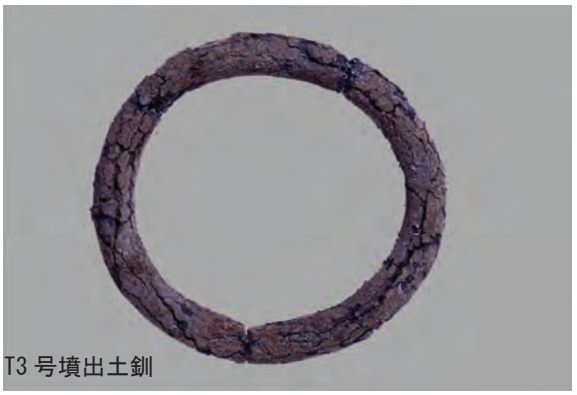
図版 32　T2 号墳出土遺物 (2)

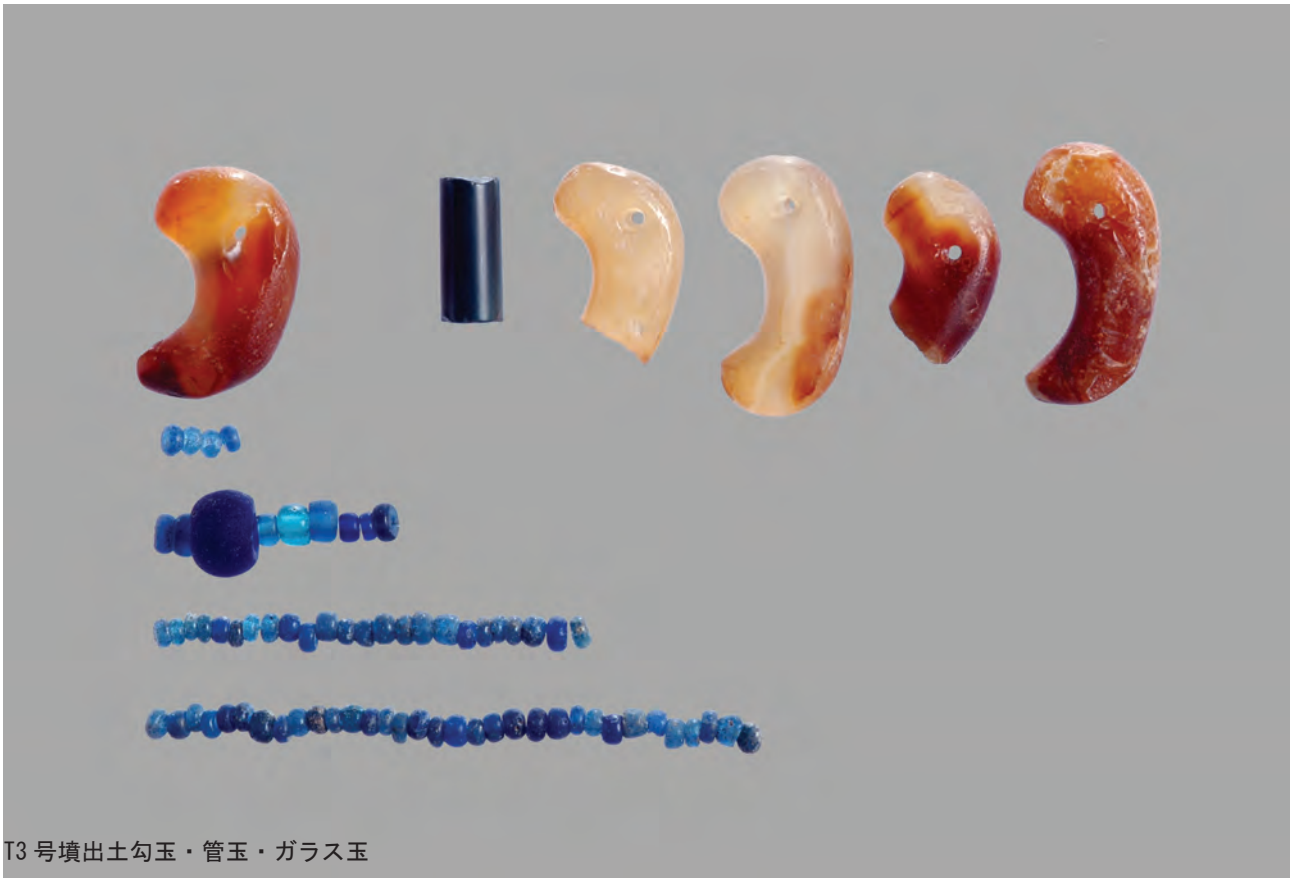


T3 号墳出土ガラス玉実体顕微鏡写真

図版 33　T3 号墳出土遺物 (1)

T2 号墳出土鉸具


T3 号墳出土釧


T3 号墳出土勾玉・管玉・ガラス玉

T4 号墳出土釧・環状錫製品・鉄鏃・刀子

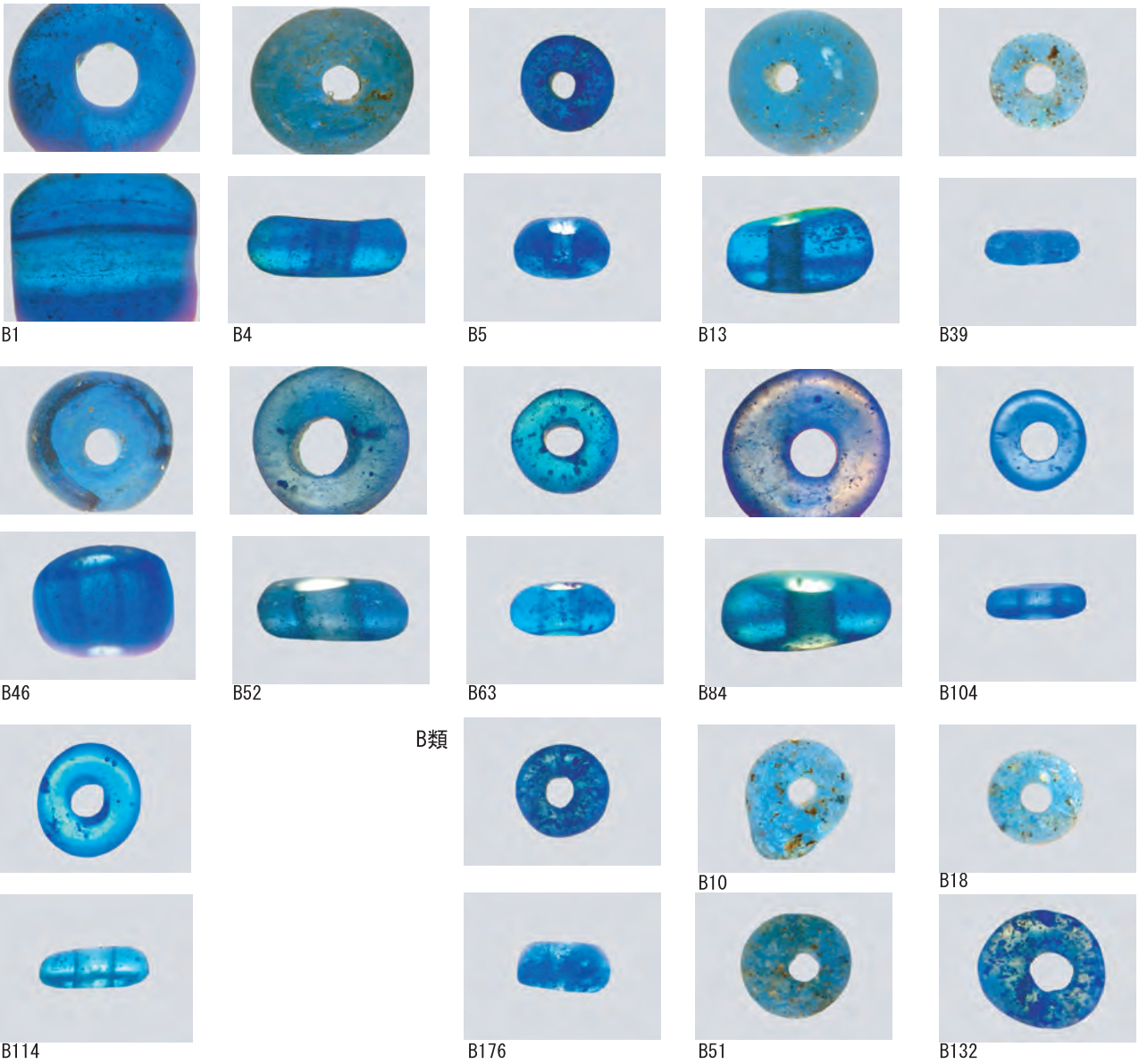
図版 34　T2 号墳出土遺物 (3)・T3 号墳出土遺物 (2)・T4 号墳出土遺物 (1)

勾玉・小玉・琥珀玉・ガラス玉

土師器坏・甕・須恵器長頸瓶

図版 35　T4 号墳出土遺物 (2)

T4号墳出土ガラス玉・Ａ類



T17 号墳出土甕・坏

T17 号墳出土轡

図版 36　T4 号墳出土遺物 (3)・T17 号墳出土遺物

T5 号墳出土蕨手刀

T16 号墳出土土師器甕・坏

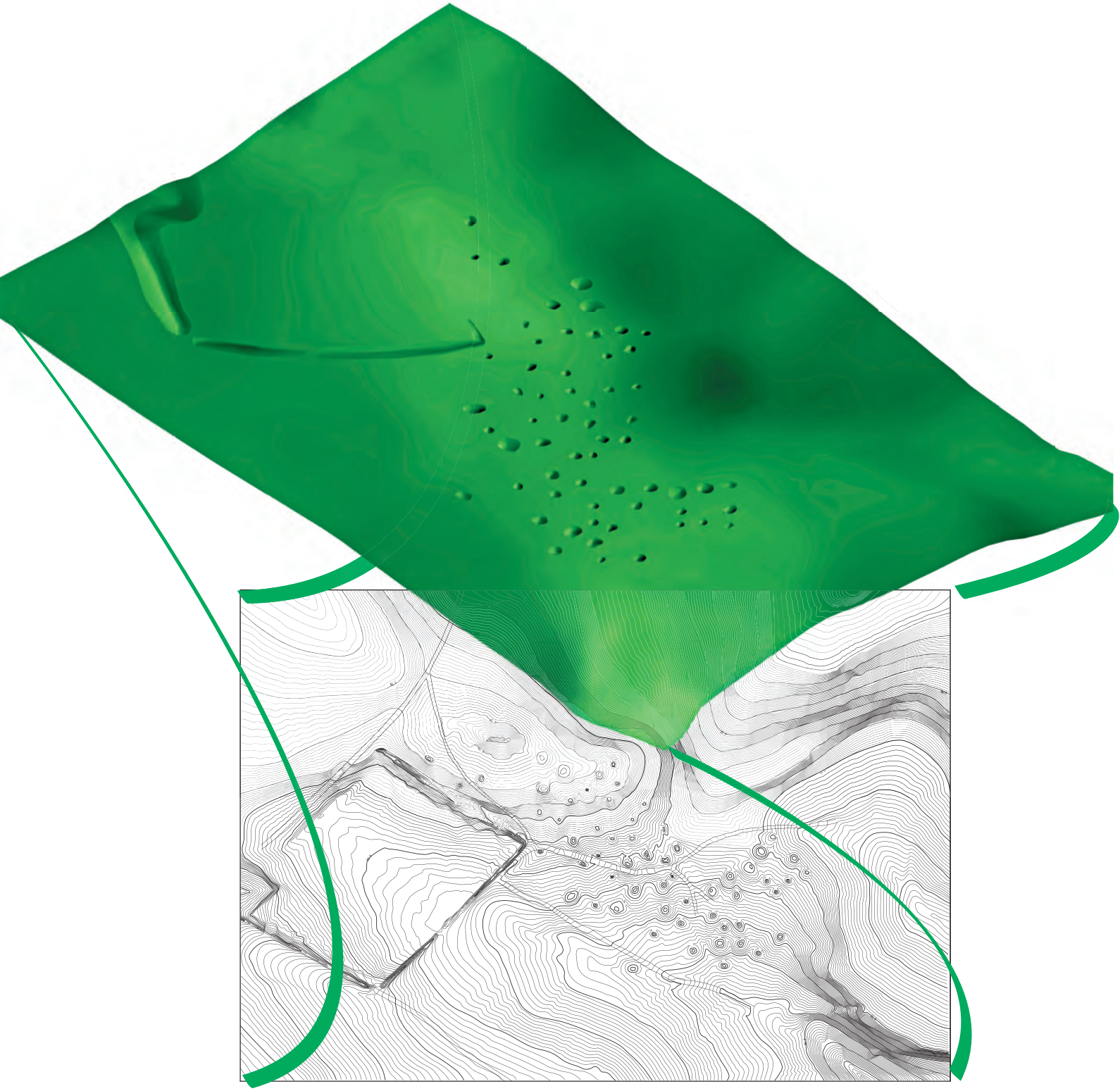
T24 号墳出土鍬・鋤先

T26 号墳出土小刀

t1 号土壙出土大刀

図版 37　T5 号墳・T16 号墳・T24 号墳・T26 号墳・t1 号土壙出土遺物

第３節
十三森（2）遺跡



十三森（2）遺跡現況 3D 図

J10 号墳（第 98 ～ 100 図、図版 38 ～ 40）

位置　J2 ～ 3 を中心に、標高 37.6 ～ 38.8m の斜面に位置する。地表面から円形の塚として確認された。

墳丘　周溝内側の立ち上がりから最も高い位置まで 1.01m である。一部断ち割って観察したところ、4 層以下が自然堆積層であり、当時の地表面にそのまま周溝を掘り上げた土を盛ったものと考えられる。築造時に周溝を掘る際、最初に出る黒色土を外側に厚く盛り上げ、中心部に八戸火山灰層由来の粘土を積み上げた様子が観察された。盛り土の厚さは最大 55cm であり墳丘の外側は地山のⅣ層が露出している。崩落等を考慮しても、表面を被覆する程度であったのではないだろうか。

周溝　周溝内径 8.70 ～ 9.10m、周溝外径 12.55 ～ 14.25m であり、全体的にはほぼ円形であるが、南側に開口部がある。深さは墳丘と周溝の変換点から 0.85 ～ 0.95m。幅は A 区で上場 1.50 ～ 2.60m、下場 0.90 ～ 1.35m、B 区上場 2.10m、下場 0.50m、D 区上場 1.80 ～ 2.20m、下場 0.80 ～ 1.30m。掘り方底面は凹凸が少なく平坦な印象である。堆積土は、C-C’では 9 層に分けられた。5 層に B-Tm 火山灰、6 層に To-a 火山灰が含まれる。掘り方直上層である 9 層は、他のセクションと共通して粘土層であり、掘り方を埋め戻して底面として使用した可能性がある。E-E’では 10 層に分けられ 4 層に B-Tm 火山灰、6 層に To-a 火山灰が含まれる。11 から 13 層は自然堆積層であり、掘り残して墳丘の基底部として使用されている。

主体部　平成 11 年度は主体部であるかどうか疑問があったので土坑として扱ったが、以下の点から主体部と結論づけた。まず、墳丘全体の盛り土を露出させたが他の落ち込みがみられなかったこと、再度土坑底部を精査したところ、ピットが 2 個確認されたこと、墓道とみられる南側の開口部から磁北方向に対し直線的な位置にあたること、主体部周辺から出土した甕と同一個体の破片が周溝底部から出土したことなどによる。2・3 層や 5 層は埋め戻された土の可能性が考えられる。6 層は極端な落ち込みであり、後世に掘られたものである可能性も否定出来ない。ピットは北側のものが幅 15 × 18cm、深さ 14.3cm、南側は幅 22cm 深さ 8cm である。なお地山に対する掘削は 50cm である。

開口部　幅は周溝底部で 3.10 ～ 2.20m、上部 1.50 ～ 1.90m である。断ち割った結果地山を掘り残したものであった。周溝堀り方底部からの高さは 0.67 ～ 0.993m である。

重複　周溝が J9 号墳周溝を切り、J6 号墳周溝に切られている。

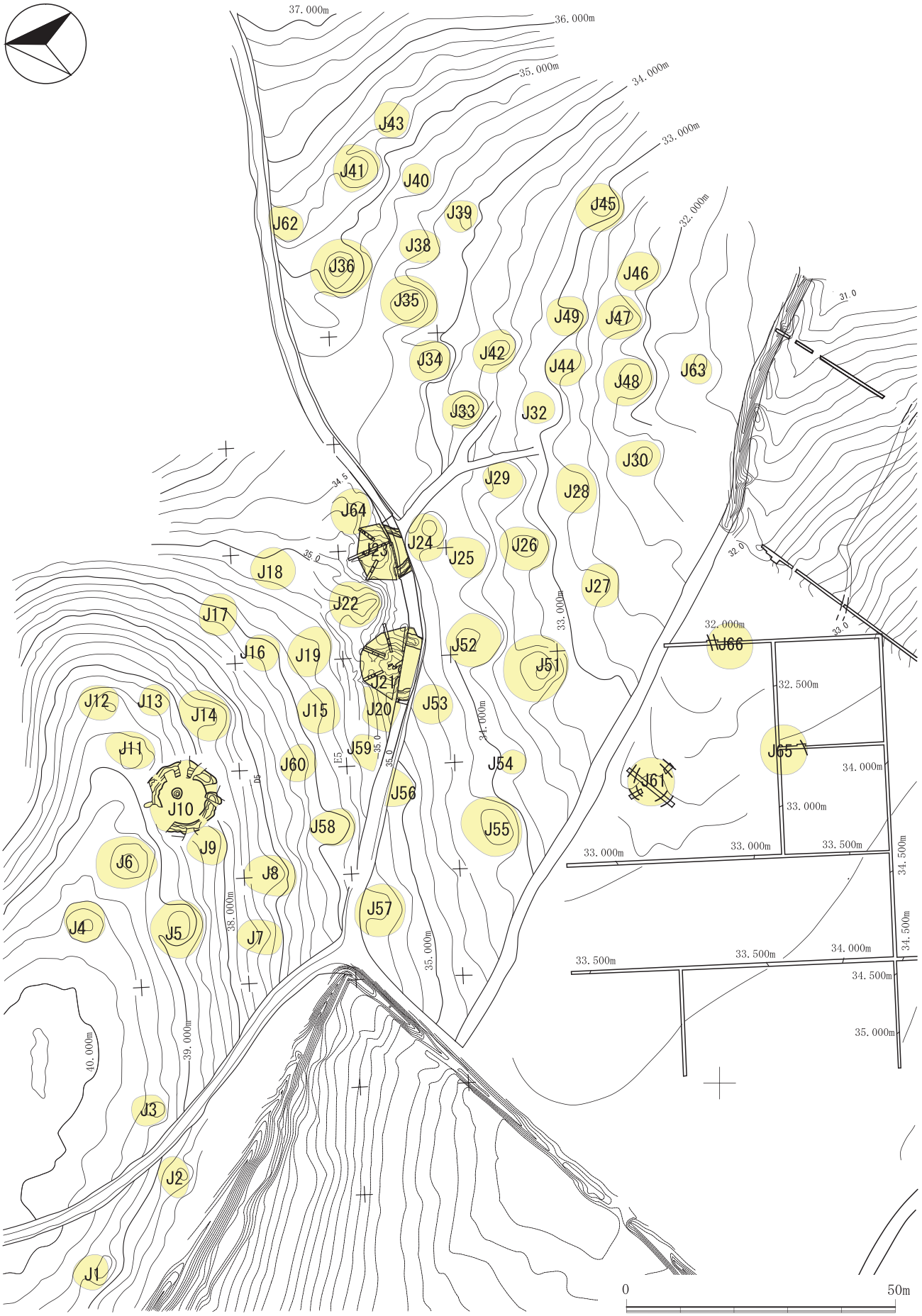
遺物出土状況　各遺物出土地点は第 100 図に示した。1 を▲、2 を●で示した。1 は墳丘上や周溝の粘土層上から出土している。周溝では堀り方から 20cm 程浮いた状態であった。2 は主体部覆土中から出土した他に、墳丘上で見つかっている。4 は、周溝堀り方から 36cm 浮いて出土しているが、これも堆積土の最下層である粘土層の上からである。1 の出土状況を見る限り、末期古墳に伴うものと見られ、同様に他の遺物も同じ層からの出土のため、本遺構に供えられたものと考えられるが原位置を保っているかどうかは不明である。なお周溝内の出土遺物は全て To-a 火山灰層の下からの出土である。A 区の開口部付近の周溝粘土層上から炭化物が検出された。非常にもろく部分的な取り上げしか出来なかったため、用途は不明である。

出土遺物の特徴（第 101・102 図　図版 45）1 は肩部以下は破片からの推定復元である。口縁部はロクロナデ、それ以下は木目に対して直行して溝を刻んだ平行タタキ目である。内面の口縁部はロクロナデ、体部は木目に平行に溝を刻んだ当て具を用いた平行当て具痕、その上に一部ケズリが施されている。2 の長頸瓶も破片からの推定復元である。頸部はカキメ、肩部はロクロナデ、底部付近はヘラケズリであり、底部は菊花状痕が見られる。内面はロクロナデで底部付近ナデである。3 の坏底部は回転糸切り、内面ミガキと黒色処理が施されている。坏 4 は、ロクロ成形の後口縁部付近をミガキ、底部辺をケズリ、内面ミガキの後黒色処理をしている。外面に「十」字状の墨書がみられた。5 の耳皿は、ロクロ成形の後に折り曲げ、全面にミガキ、黒色処理を施している。底面は回転糸切り無調整である。

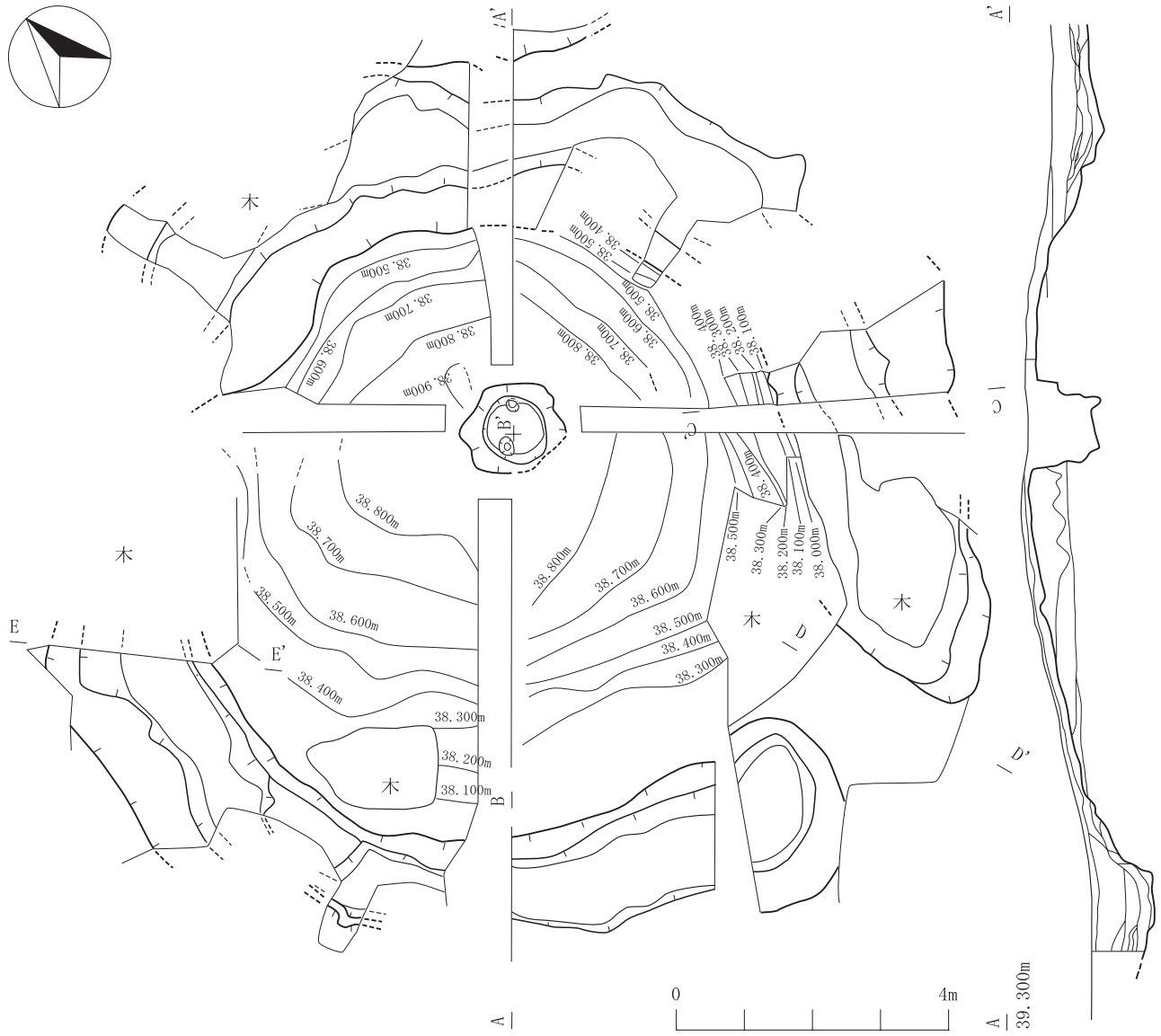
おわりに

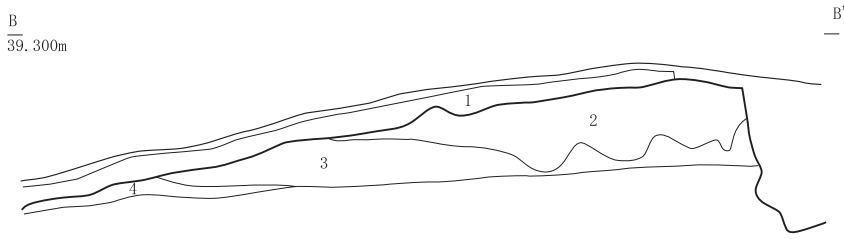
時期は火山灰の堆積状況から 10 世紀前半以前とみられた。出土遺物から 2 の菊花状の底を呈する長頸瓶が、9 世紀後半以降の集落でみられるようである。個々の遺物の検討がさらに必要であるが、おおむね 9 世紀後半から 10 世紀前葉に築造された末期古墳だと考えられる。

今回の調査によって、J10 号墳の規模・構造が明らかになった。基本的な構造は阿光坊遺跡等で確認されている末期古墳と同様である。主体部は盛土の上部から堀り込まれているため、地山に対する掘削が浅くなっ



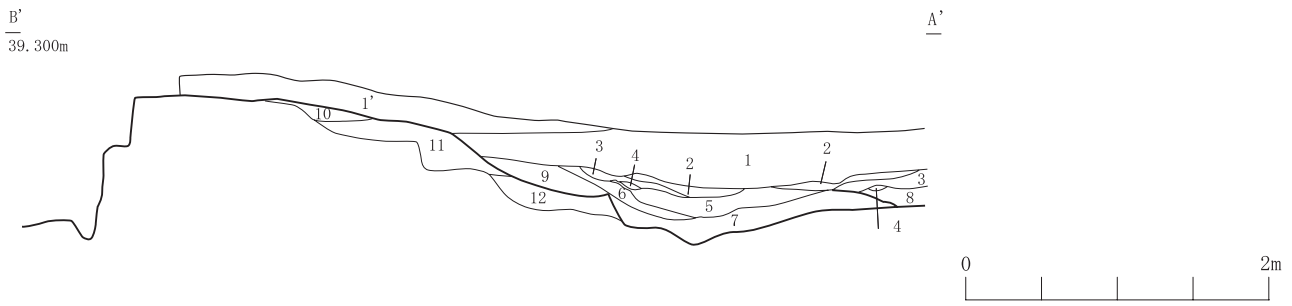
第 97 図　十三森 (2) 遺跡全体図



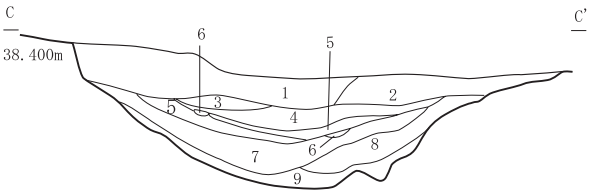


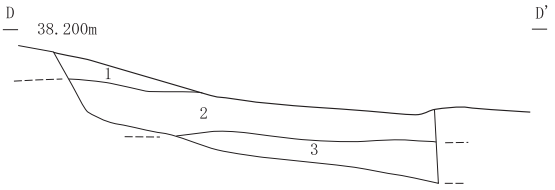
J10号墳　B−B′

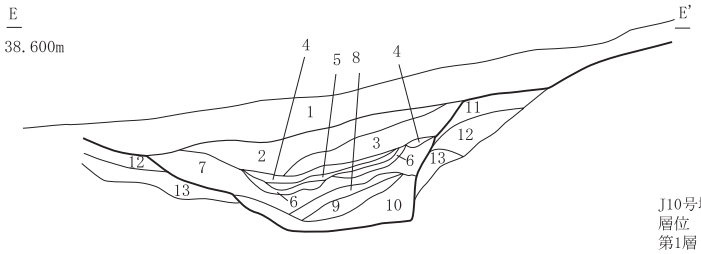
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	浮石φ3〜10mm　砂粒含む 遺物包含層
第2層	黄褐色土	10YR5/6	粘土	浮石ブロック多量含む
第3層	黒色土	10YR2/1	シルト	φ1〜10mmの浮石中量 ローム含む
第4層	黒色土	10YR2/1	シルト	φ1〜3mmの浮石極微量含む



第 98 図　J10 号墳 (1)







J10号墳 B'-A'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1‘層			シルト	B−B′ の1層に対応
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	φ2〜8mmの浮石微量 小礫含む
第2層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	白頭山火山灰（10YR6/6）多量 φ2〜3mmの浮石微量含む
第3層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ2〜10mmの浮石少量含む
第4層	暗灰黄褐色土	2.5Y5/2	火山灰	十和田a火山灰層
第5層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム・φ1〜10mmの浮石少量 小礫 砂粒含む
第6層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	φ5mmの浮石中量 砂粒 ローム含む
第7層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	φ8cmのロームブロック多量 φ5mmの浮石中量 黒色土（根による攪乱）砂粒含む
第8層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	ローム粒 ロームブロック多量含む
第9層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	ローム粒多量含む パミス微量含む
第10層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム	ロームブロック主体とする盛土
第11層	黒色土	10YR2/1	シルト	小礫 パミス含むB−B′ の4層に対応
第12層	黄褐色土	10YR5/8	粘土	八戸火山灰層

J10号墳 D-D'

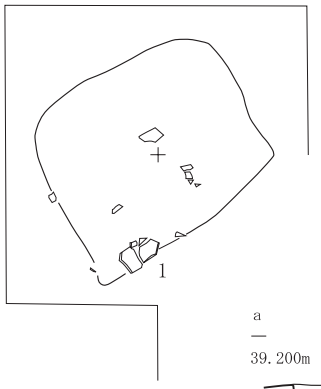
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ2〜5mmの浮石微量含む 流れ込み
第2層	黒色土	10YR2/1	シルト	φ5〜10mmの浮石少量含む 自然堆積土
第3層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	φ7〜10mmの浮石中量含む ローム質土混入

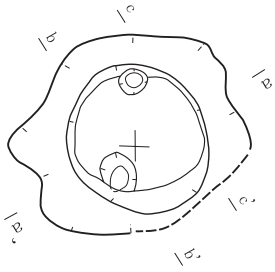
J10号墳 C-C'

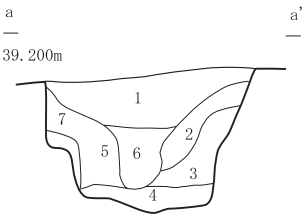
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	φ2〜5mmの浮石極微量 小礫含む しまり無
第2層	黒色土	10YR2/1	シルト	φ3mmの浮石微量 小礫含む
第3層	黒色土	10YR2/1	シルト	φ7〜10mmの浮石 小礫含む
第4層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ2〜15mmの浮石少量 小礫含む
第5層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ5mmの浮石極微量 炭化物微量含む 白頭山火山灰（10YR5/6）堆積層
第6層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ2〜15mmの浮石微量含む 十和田a火山灰（5YR5/3）堆積層
第7層	黒色土	10YR2/1	シルト	φ3〜10mmの浮石 根の攪乱によるローム少量含む
第8層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ5〜15mmの浮石中量 ローム少量含む
第9層	暗褐色土	10YR3/3	粘土	浮石混入 ローム層

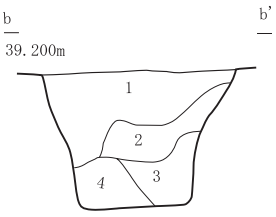
J10号墳 E−E′

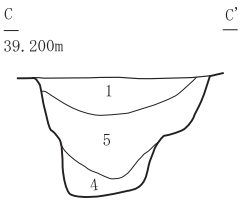
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR2/1	シルト	小礫含む
第2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	ローム粒 浮石 小礫含む
第3層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒中量含む
第4層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	白頭山火山灰 砂粒含む
第5層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒含む
第6層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	シルト	十和田a火山灰含む
第7層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム質土 浮石混入
第8層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	砂粒 小礫含む ローム質土混入
第9層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム粒少量含む
第10層	黒褐〜 明黄褐色土	10YR2/3〜7/6	粘土	ローム・黒色の混合土 ブロック状のローム混入
第11層	黒色土	10YR2/1	シルト	浮石微量含む
第12層	黒色土	10YR2/1	シルト	浮石少量含む
第13層	黄橙色土	10YR7/8	浮石	八戸火山灰層







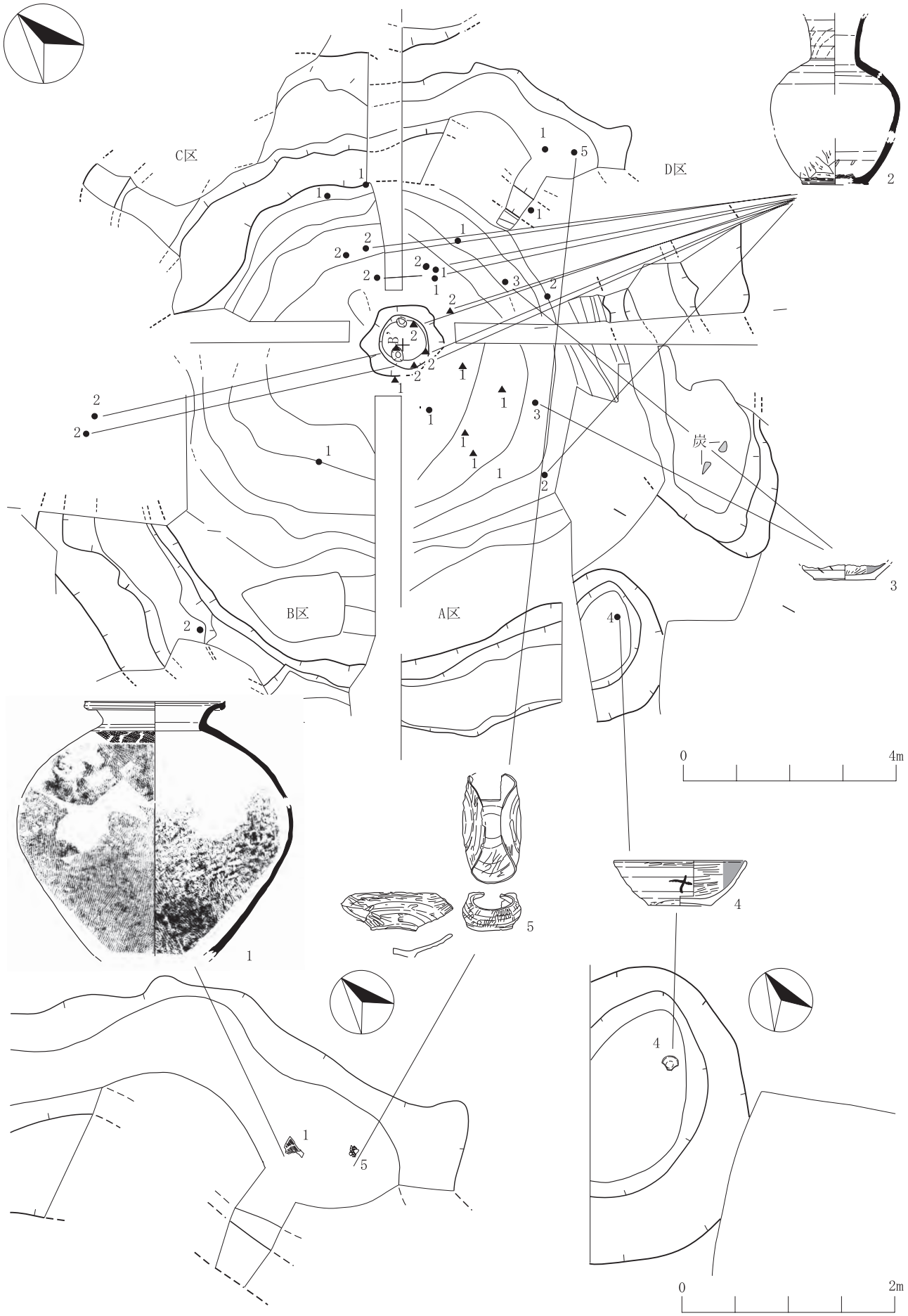




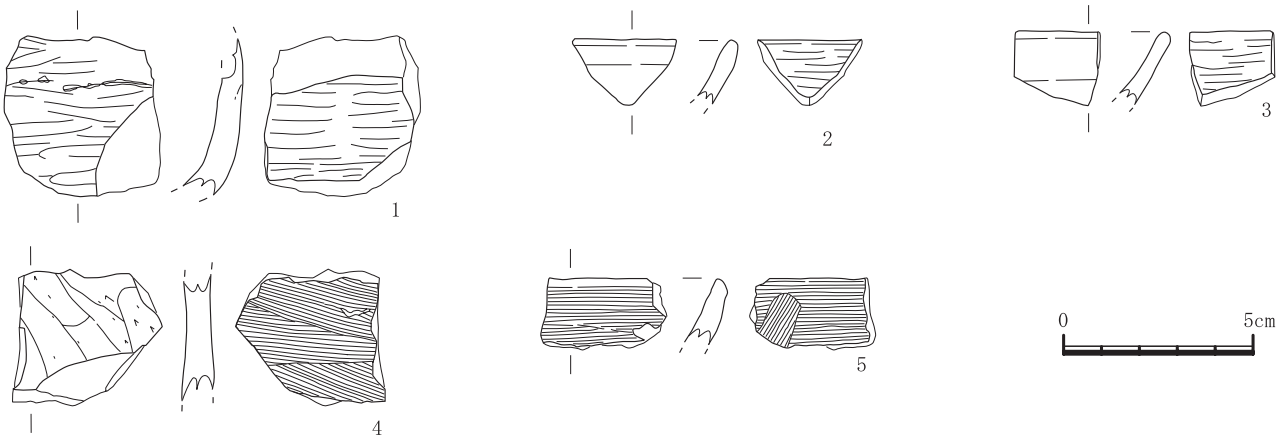
J10号墳 99土坑注記

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	直径1〜30mmのパミス多量 ローム流多量 褐色土(10YR4/6)少量
第2層	褐色土	10YR4/6	シルト	直径1〜5mmのパミス多量 ローム粒多量 しまり弱
第3層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	長径1〜5mmのパミス多量 黒色土(10YR1.7/1)多量
第4層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	直径1〜5mmのパミス少量 しまりやや弱い
第5層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	直径1〜20mmのパミス多量
第6層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	直径1〜5mmのパミス少量 ローム粒少量 しまり弱
第7層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	直径1〜5cmの明黄褐色土(10YR6/8)少量 ローム粒少量 直径1〜5mmのパミス少量
第8層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	直径5cmの明黄褐色土(10YR6/8)ブロック しまり強

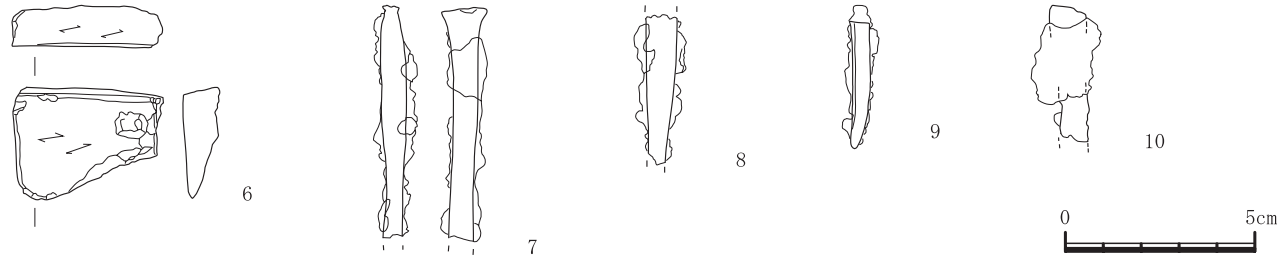
第 99 図　J10 号墳 (2)



第 100 図　J10 号墳 (3)

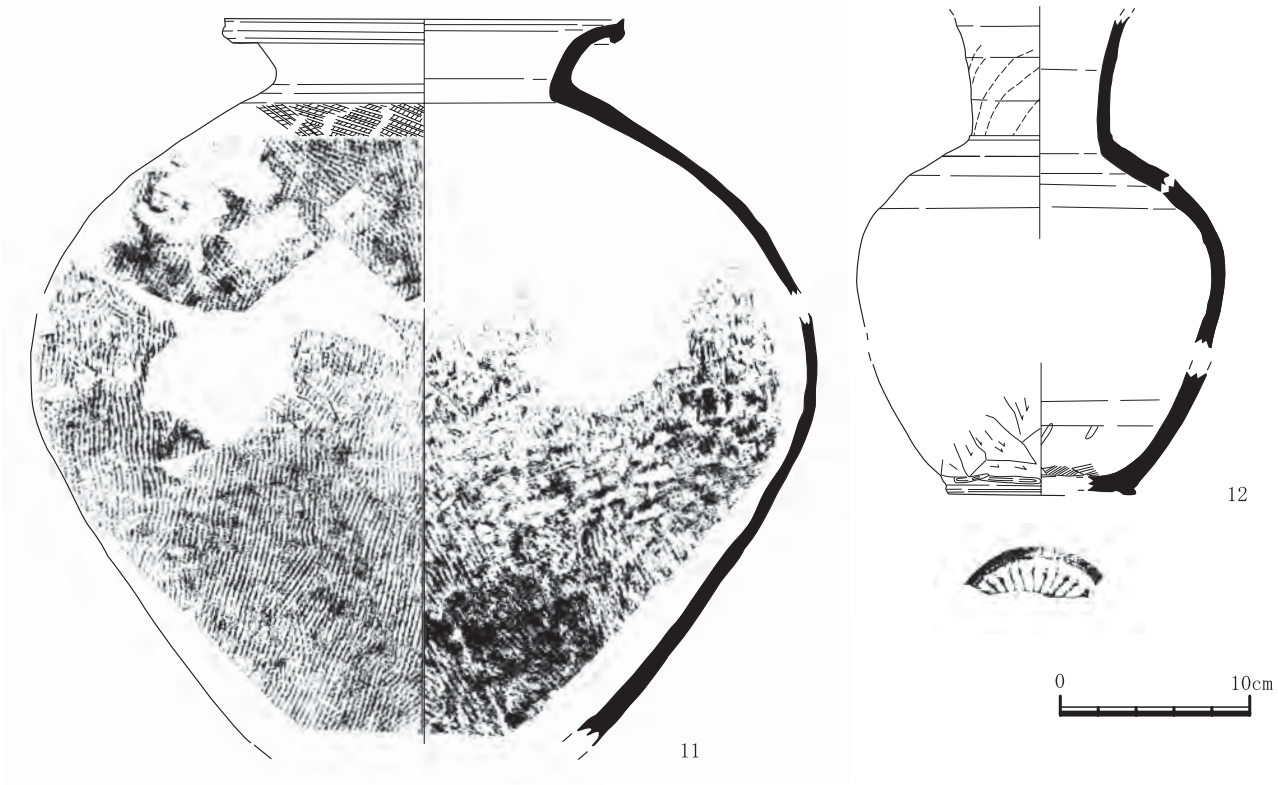


No.	種類	層位	部位	外面調整	内面調整	備考	No.
1	土師器	1層の上	肩部	ミガキ	ミガキ→黒色処理	墳丘部 坏？	1
2	土師器	覆土	口縁	ロクロナデ	ミガキ→黒色処理	周溝 坏	2
3	土師器	1層	口縁	ロクロナデ	ミガキ→黒色処理	主体部周辺 P-9	3
4	土師器	1層	胴部	ケズリ	ナデ	主体部 甕?	4
5	土師器	1層	口縁	ナデ	ナデ	北東周溝	5

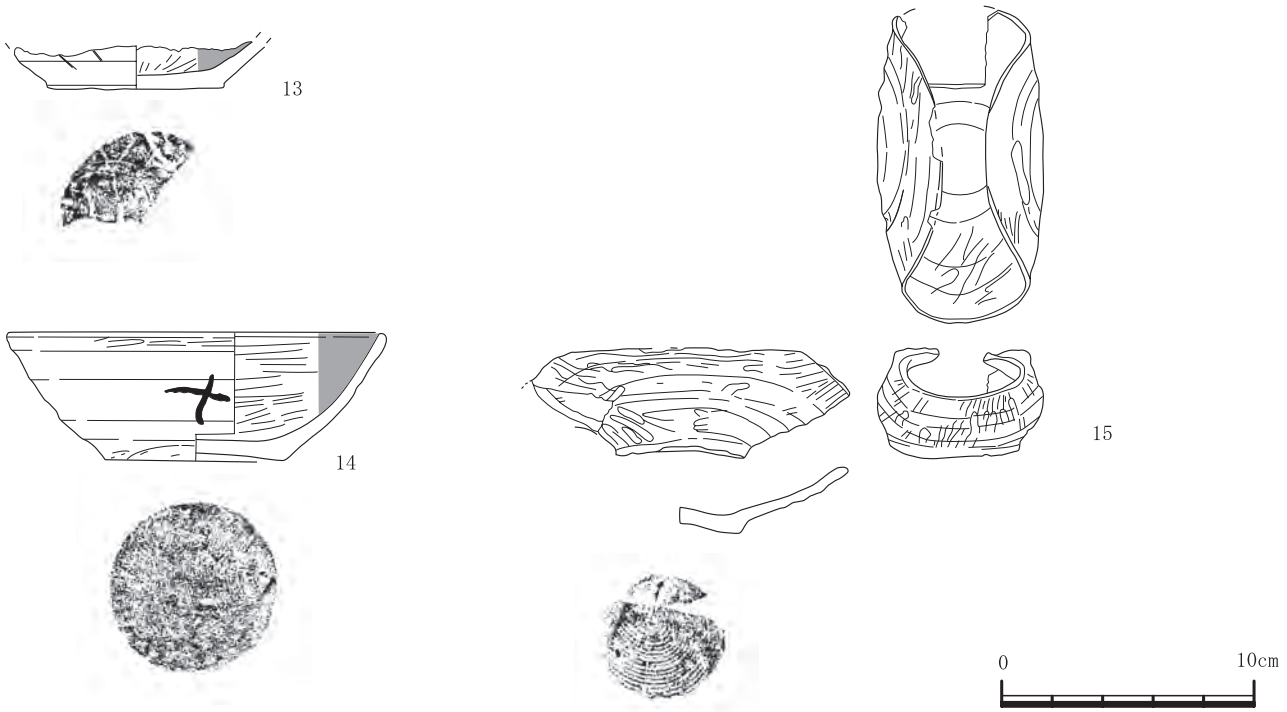


No.	器種	層位	最大計測値			重さ(g)	石質	備考
			長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)			
6	砥石	主体部覆土	40.0	30.0	11.5	13.2	流紋岩	主体部内

No.	名称	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	備考
7	釘？	主体部周辺	(6.3)	1.3	
8	釘？	主体部覆土	(4.0)	8.5	
9	不明	主体部覆土	(3.8)	5.5	
10	不明	主体部覆土	(3.2)	(1.5)	刀子の金具？



第 101 図　J10 号墳 (4)



No.	出土位置	層位	器種	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胴部最大径(cm)	外面調整	内面調整	備考
11	A～D区	周溝粘土層上	甕	須恵器	(21.2)	-	-	(41.5)	口縁：ロクロナデ 体部：タタキ目	口縁：ロクロナデ 体部：あて具痕・一部ケズリ	
12	C区	周溝粘土層上	甕	須恵器	-	-	(10.0)	(19.5)	口縁：カキ目 体部上：ロクロナデ 下：ケズリ	ロクロナデ、底部：ナデ	底部：菊花状調整痕、P6-B:42・43・46・102(1層)、C:13、D:10・19・28　再実測
13	C区		坏	土師器	-	-	(7.0)	-	底部：回転糸切り	黒色処理	A区P47,D区P29
14	A区	周溝覆土	坏	土師器	15.0	5.1	7.1	-	体部：墨書　口縁：ロクロナデ口唇部：ミガキ 底部辺：ケズリ	ミガキ→黒色処理	

No.	出土位置	器種	種類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大幅(cm)	外面調整	内面調整	備考
15	周溝	耳皿	土師器	―	4.4	5.0	12.5	ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	底部：回転糸切り

第 102 図　J10 号墳 (5)

ている。周溝が深い傾向も、盛土の土量を確保する事が要因の一つと考えられる。

原典 E

J21 号墳　(第 104・106 図　図版 40 ～ 42)

位置　十三森 (2) 遺跡のほぼ中央、L6 ～ 7、M6 ～ 7 の標高 33m から 37m に位置する。

墳丘　周溝内側の立ち上がりから墳頂部まで 90cm 程の高まりである。A-A’断面観察によると、自然堆積土であるⅡ層を整地するなど手を加え、6 から 8 層を盛土している。これらにはロームブロックが多量に含まれ、また黒色土が混入するなど、周溝を掘りあげた土をそのまま盛ったものであろう。7・8 層より 6 層の方が多くのロームブロックを含んでいる。これは周溝を掘ることと盛土を平行して行ったため、周溝掘削が進むにつれ、Ⅵ層八戸火山灰層のブロックが増えたことを反映している。6・8 層は外縁から中央に向かって傾斜している。このことは整地の効果として縁が土手の役割を果たし、土を順次外から中央に向かって盛っていった結果と考えられる。6 層を掘り込んでいる 2 から 4 層は、当初主体部覆土と予想したが、この土坑は主体部とは特定出来ないものであった。

周溝　周溝外径 12.7m 内径 8.5m の、ほぼ円形を呈する。南東側で溝が立ち上がっており、橋状の施設が存在する。この施設の規模は調査区外へのびるため不明であるが、J10 号墳を参考にすれば、1m 程度の幅であろうと予想される。溝の幅は、上場 1.7 ～ 2.3m、下場 0.3 ～ 0.85m である。深さは確認面から 0.6 ～ 0.85m で、墳頂部から底までは最大 1.8m の比高差がある。堆積土は上から 3 分の 1 程の高さのところに To-a 火山灰と B-Tm 火山灰が堆積していた。また、いずれのセクションでも下から 1 層目にロー

ムブロックが多量に含まれる層がみられ、埋め戻して床にしたものとみられる。この層からTo-a火山灰を含む層まで2から3層を挟む。これらは黒色から黒褐色土であり、Ⅱ層からⅢ層由来の、周囲からの流れ込みによる自然堆積と考えられる。

付属施設　墳丘構築後に作られた土坑が3基確認された。上面確認時にはそれぞれ切り合いが明瞭ではなかったが、掘削した結果1号土坑が2号土坑を切っていた。1号土坑は、道路側の断面観察で確認できたもので、A-A’2から4層にあたる遺構である。a-a’，4・5層はそれぞれA-A’，2・3層に対応する。道路に半分以上が削られており、残存部の規模は上場2.7×0.45m、下場2.5×0.2mである。残存する形態からは楕円形のような平面形が予想される。深さは0.3mである。2号土坑は南側を1号土坑と道に切られている。残存規模は上場2.7×0.83m、下場2.7×0.62mであり、深さは0.3mである。主軸方向はN-32°-Wである。堆積土は基本的には1層のみであり、盛土層由来のローム粒を含む。平面形は、南東側の立ち上がりが不明であるが、北西側を見ると長方形に近い形態である。床面には特別な施設は確認できなかった。3号土坑は、不整な楕円形の土坑でd-d’,1･2層は特にしまりが無かった。上場0.91×0.35m、下場0.83×0.28m、深さ0.35mであった。

1から3号土坑からは遺物は出土せず、用途は不明であるが、位置・方向及び形態から、2号土坑が主体部であった可能性がある。1号土坑は2号土坑を切っているが、堆積土が2層に分けられ、近年の攪乱等とは見られないものの、J21号墳とどのような関係であるか結論付けるのは困難である。

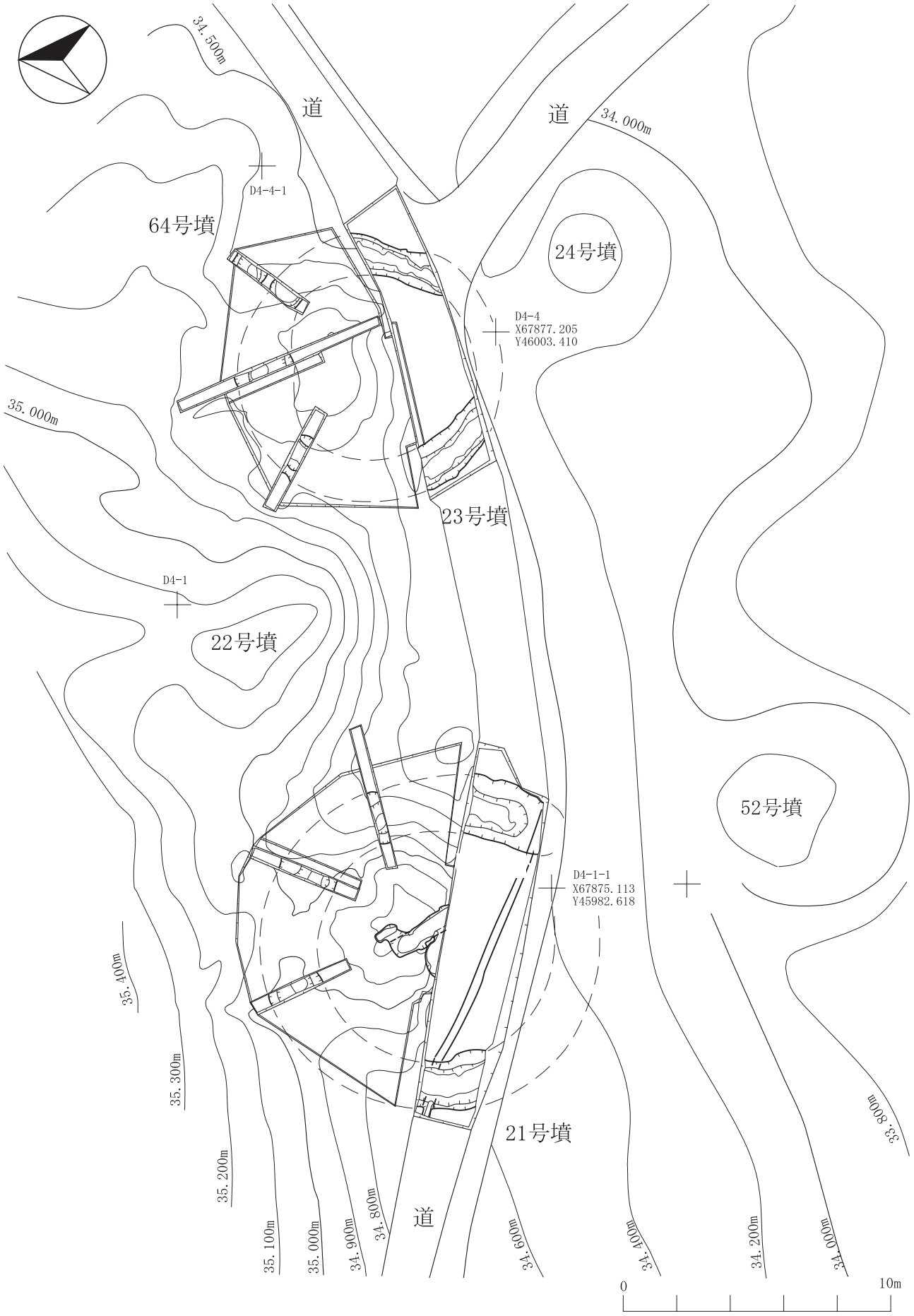
重複　1号溝に切られている。

出土遺物　（第105図　図版45）　1トレンチ内の東側検出周溝内、周溝埋土34層下層から1の土師器坏が出土した。体部下部に墨書がみられた。周辺に不明瞭ながら墨痕が見られるため、現在は「人」様に見えるが、他の字である可能性がある。3・4トレンチより2の須恵器甕口縁部破片が、1トレンチから3の胴部破片が出土した。2は1と同じく周溝の埋め戻し層直上層からの出土である。なお、胴部破片は他に20点程出土している。色調や胎土から、2・3及びその他の須恵器破片は同一個体である可能性が高いものであり、第104図中4として示した。この出土のありかたは、J10号墳でみられた須恵器甕の分布と類似する。そのほか、鉄器の一部とみられる細片が2点出土しているが、腐食が激しく形状を全くとどめないものであった。出土地点は図中F1・F2として示した。

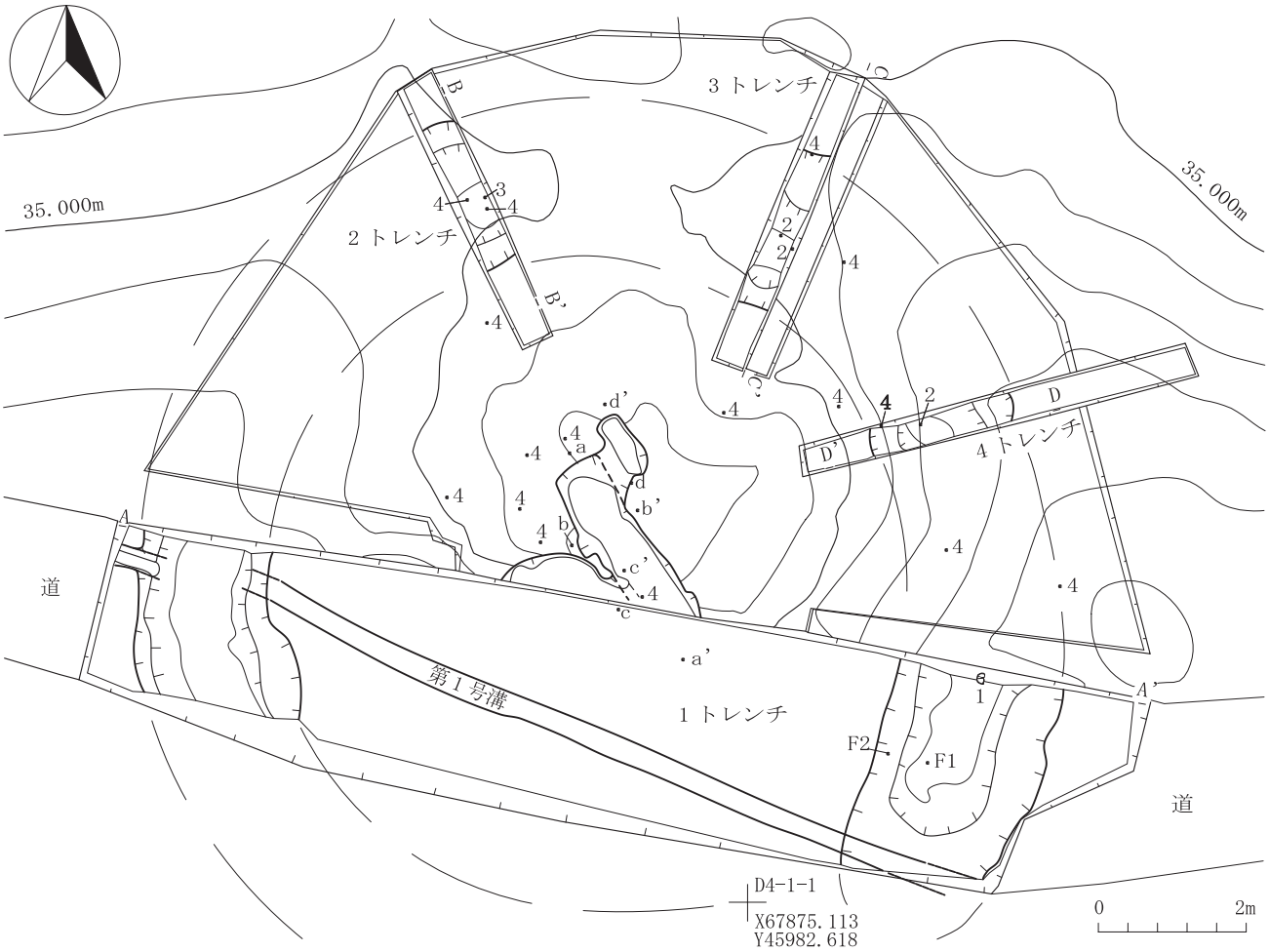
小結　古代の火山灰であるTo-a火山灰とB-Tm火山灰が堆積していることから、10世紀前半以前の構築である。出土遺物の中で、全体の器形の明らかなものはP1だけである。法量は中野平遺跡（奈良・三浦ほか1991）第3群の坏に類似するが、外面の再調整が見られないことから、後出的である。火山灰の堆積状況は、J10号墳に比較して上位であり、先行するものと推定される。

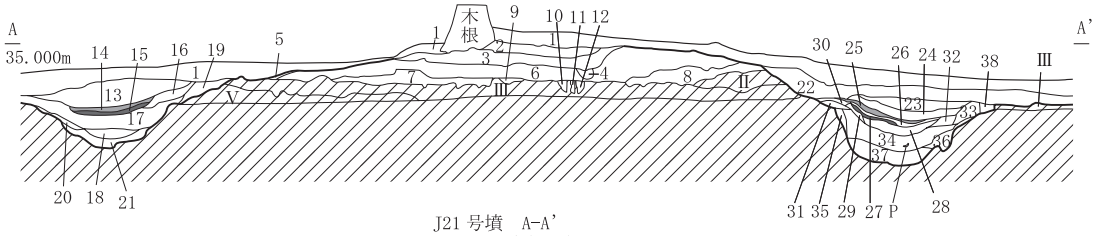
断面観察では、墳丘構築にあたって整地が行われたことが分かった。その後周溝掘削によって生じた土を盛土していった様子が確認された。

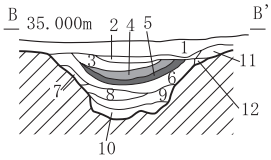
原典H

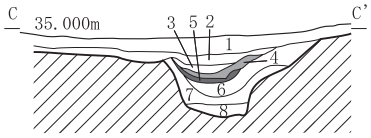


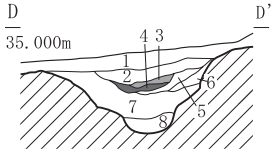
第 103 図　J21・J23 号墳遺構配置図











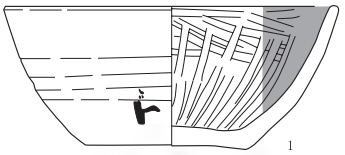
0　2m

J21 号墳　A-A'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	表土層　攪乱含む
2層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒(φ5mm)微量含む　しまり弱
3層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ5～20mmのローム粒含む 上層より明るい　しまり弱
4層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒微粒含む　しまり弱
5層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ5～10mmのローム粒少量含む　攪乱か？
6層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	φ5cmのロームブロック10YR(5/8)　ローム粒 多量含む　しまり弱
7層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	砂粒含む　10YR2/3ブロックと黒色土の混層 盛土とみられる
8層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒　φ2mmのローム粒含む　盛土　しまり強
9層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム粒含む　木根の痕に上層の土が入った もの　しまり弱
10層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム粒含む　木根の痕に上層の土が入った もの　しまり弱
11層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム粒含む　木根の痕に上層の土が入った もの　しまり弱
12層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム粒含む　木根の痕に上層の土が入った もの　しまり弱
13層	黒色土	10YR2/1	シルト	ローム粒極微量含む　しまり強
14層	黒色土	10YR2/1	シルト	10YR4/4の火山灰(B-Tm)　多量含む
15層	黒色土	10YR2/1	シルト	10YR5/2の火山灰(To-a)　多量含む
16層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	砂粒含む　しまり弱
17層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒含む　φ5mmのローム粒微量含む　しまりあり
18層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム粒中量含む　しまりあり
19層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒含む　しまり弱
20層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒多量含む　しまり弱

第104図　J21号墳 (1)

21層　黄橙色土　10YR7/8　ローム　ロームブロック主体　黒色土混入
22層　黒色土　10YR1.7/1　シルト　しまりあり
23層　黒色土　10YR1.7/1　シルト　ローム粒微粒含む　しまりあり
24層　黒色土　10YR2/1　シルト　ローム粒微量含む
25層　黒褐色土　10YR2/2　シルト　10YR4/6の火山灰(B-Tm)多量含む
26層　黒色土　10YR2/1　シルト　φ5mmのパミス微量含む　しまりあり
27層　黒色土　10YR2/1　シルト　10YR6/3の火山灰(To-a)含む　しまりあり
28層　黒色土　10YR2/1　シルト　φ2～10mmのパミス微量含む　しまりあり
29層　暗褐色土　10YR3/4　シルト　しまりのないローム質土をブロック状に含む
しまりあり
30層　黒色土　10YR2/1　シルト　10YR6/3の火山灰(To-a)含む　しまりあり
31層　黒色土　10YR2/1　シルト　しまり弱
32層　黒褐色土　10YR2/2　シルト　ローム粒微量混入　しまりあり
33層　黒色土　10YR2/1　シルト　しまりあり
34層　黒褐色土　10YR2/2　シルト　φ2～10mmのローム粒中量含む　しまりあり
土器出土
35層　黒褐色土　10YR2/2　シルト　ローム質土多量含む　しまり弱
36層　黒褐色土　10YR2/2　シルト　ローム粒(φ5mm)少量含む　しまりあり
37層　明黄褐色土10YR6/8　シルト　10YR2/2黒褐色土混入　ロームブロック主体
38層　黒色土　10YR2/1　シルト　ローム粒微量含む　しまりあり



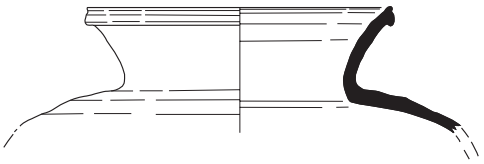
J21号墳　B－B'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	覆土層　砂粒含む
2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒含む　しまり強
3層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒　φ1mmのパミス微量含む　しまり強
4層	黒色土	10YR2/1	シルト	10YR3/4暗褐色の火山灰(B-Tm)含む　しまりあり
5層	黒色土	10YR2/1	シルト	10YR6/2の火山灰(To-a)含む　しまりあり
6層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	φ0.5mmのパミス含む　しまりあり
7層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒含む　しまりあり
8層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒含む　しまりあり
9層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	砂粒含む　ローム粒多量混入　しまりあり
10層	褐色土	10YR4/6	粘　土	ロームブロック主体の層　黒褐色土混入

0　10cm

J21号墳　C－C'

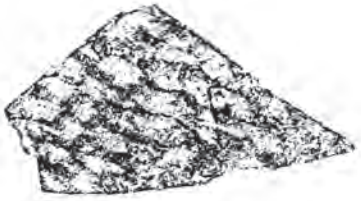
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒色土	10YR2/1	シルト	表土層
2層	黒色土	10YR2/1	シルト	しまり強
3層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒、ローム粒微量含む　しまりあり
4層	黒色土	10YR2/1	シルト	10YR4/6火山灰(B-Tm)含む
5層	黒色土	10YR2/2	シルト	10YR6/2火山灰(To-a)含む
6層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ローム粒φ1mmのパミス微量含む　しまりあり
7層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒中量含む　しまり弱
8層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	10YR6/8のロームブロック多量含む　しまりあり



0　10cm

J21号墳　D－D'

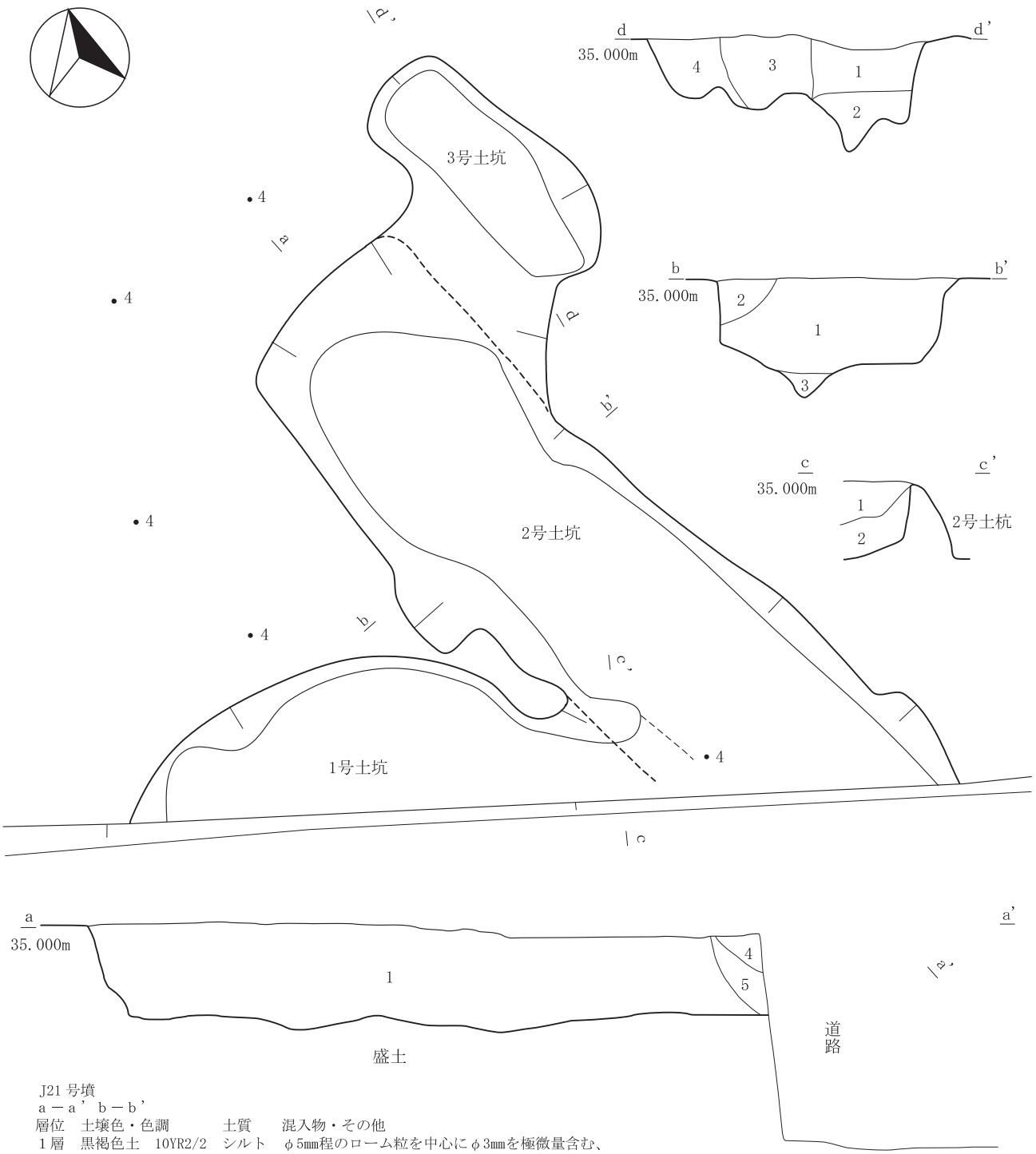
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	表土層
2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒含む　しまりあり
3層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	火山灰層(B-Tm)
4層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	火山灰含む(To-a)
5層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む　しまり弱
6層	黒褐色土	10YR3/2	シルト	砂粒含む　しまり弱
7層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒含む
8層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	ロームブロック多量含む



0　5cm

No.	器種	層位	種類	外面調整	内面調整	口径×器高(cm)	低径(cm)	番号
1	坏	A-A'34層	土師器	ロクロナデ	ミガキ→黒色処理	13.2×5.7	6.4	P5
2	甕	D-D'7層	須恵器	ロクロナデ	ロクロナデ	(16.2)	―	P19,20,21
3	甕	B-B'9層	須恵器	タタキ目	アテ具痕	―	―	P12

第105図　J21号墳(2)



J21 号墳
a－a' b－b'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	φ5mm程のローム粒を中心にφ3mmを極微量含む、しまりあり
2層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	ローム粒多量含む、しまり弱
3層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒含む
4層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒微量含む
5層	黒褐色土	10YR2/2	ソルト	ローム粒微量含む

c－c'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒微量含む
2層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	ローム粒少量含む

d－d'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	ローム粒多量含む、しまり弱
2層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	ローム粒多量含む、しまり弱
3層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	ローム粒微粒含む、しまりあり
4層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	φ5mmのロームブロック多量含む

0　1m

第 106 図　J21 号墳 (3)

J23 号墳　（第 107・109 図　図版 42・43）

位置　J21 号墳の東側 10m 程の N6 ～ 7、06 ～ 7 に位置し、北西には J22 号墳がある。

墳丘　現況で最大 50cｍ程の高まりとして認識できるが、特に西側が後世の削平を受けていて、残存状況はあまり良くない。そのため形状は不明瞭であった。A-A’ではⅢ層上に、盛土をして墳丘を構築している様子が確認できた。2 層・3 層は盛土の痕跡である。比較的残りの良い D-D’では 14 ～ 28cm の盛土層が確認された。

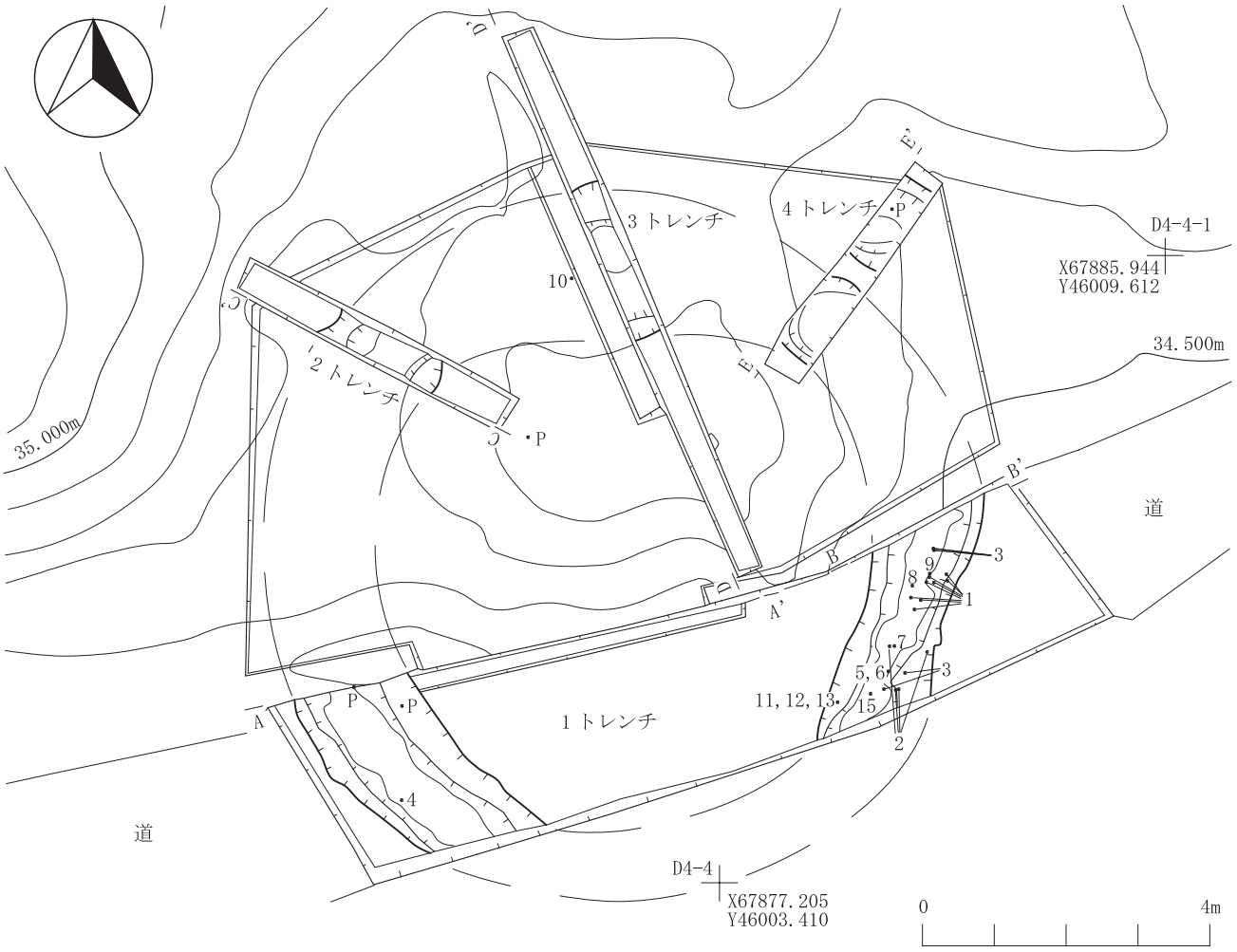
周溝　道路部分の攪乱を除去することにより 1 トレンチで東側及び西側から周溝が確認された。2 から 3 トレンチを掘削し、全体的な規模を確認した。周溝外径 10m、内径 7.1m で、ほぼ円形となる。溝の幅は、上場 1.1m ～ 2.25m、下場 0.2m ～ 0.94m である。深さは確認面からそれぞれ A-A’0.8m、B-B’0.6m、C-C’0.45m、D-D’0.45m、E-E’0.55m であった。堆積土上位には火山灰が堆積していた。断面形状は、B-B’を参考にすれば、底面は平坦であり、壁は墳丘方向・外方向ともに直線的に外傾して立ち上がっている。一方、A-A’、D-D’では墳丘側へはなだらかに傾斜し、途中の変換点からやや角度を急にして立ち上がっている。C-C’、D-D’では、外側にそれぞれ J22 号墳と、今回の調査で新たに確認した J64 号墳の周溝と 0.4 ～ 0.5m の間を残して隣接している。特に E-E’では、2 層の堆積状況から、掘り残された部分を周溝埋没後通路としていたとみられ、7・8 層に堆積している古代の火山灰降下以降も往来があった可能性を指摘できる。周溝最下層にはロームブロックを含む層が堆積している。遺物はほとんどがこの層の上層から出土しているため、遺物供献時には床として使用されていたと考えられる。

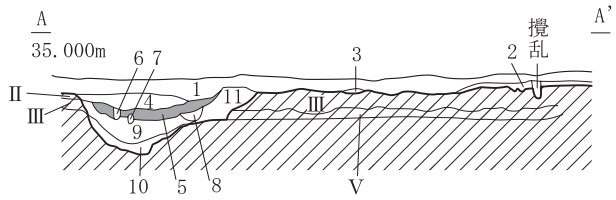
出土遺物　（第 108・110 図　図版 45）

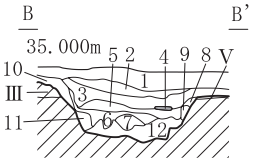
土器には 1 の須恵器高台坏、2・3 の土師器坏、4 の須恵器甕片がある。1 の底部はヘラ切り無調整であり、体部は直線的に立ち上がり、上半で若干外傾する器形である。2 の坏は小ぶりで体部はやや丸みを帯びながら立ち上がる。口縁部辺にヘラミガキが施されている。内面もヘラミガキの後黒色処理がなされている。3 の坏も丸みを帯びて立ち上がる。2 と同様に口縁部辺にヘラミガキが施される。4 は肩部から頸部へ至る部分であり、下部にタタキ目、上部にロクロナデがみられる。

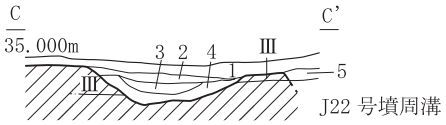
鉄器が周溝から出土している。5 から 8 の鉄鏃、9 の鉄鉋 10 から 14 の器種不明であるが棒状のものが出土した。5・6 は上下に重なった状態で出土した。5 は鏃身の形が三角形で断面平造、鏃身の関部は角関、頸部の関も角関である。頸部断面形は長方形である。6 は 5 と同様であるが、頸部の関が腐食により不明瞭である。5・6 とも茎が欠損している。7 は鏃身の形が腸抉三角形であり、断面形は平造りである。逆刺先端は方形となる。頸部の断面形は長方形であり、角関である。茎は欠損している。8 の鏃身形は腸抉三角形であり、逆刺の形状は 3 と同様方形となる。断面形は平造りである。関が不明瞭である。9 の鉄鉋は刃部が 3cm ほど反っている。柄部は幅 1.8cm、残存部長 5.4cm である。柄木が残存しており、上を樹皮かツルのようなもので巻いた様子が見られる。裏面には茎が露出しており、茎の先端には繊維を巻いた様子がみられる。刃部の断面は下部が出る台形に近い形である。10 から 13 は鉄鏃の茎などと見られるが、出土位置や断面形からも組み合わせを確認できなかったが、茎が欠損しているいずれかのものであると予想される。13 には小型の鉄鏃鏃身のようなものが付着している。9 は刀子等の茎に類似する。14 は断面円形である。先端部に若干ふくらみを持つ。15 は木質のみであるが、錆がついていて、中に茎が差し込まれていたような円形の穴がある。柄の一部であろうと見られる。

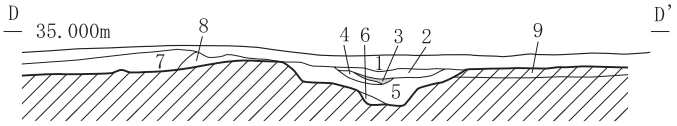
小結　周溝堆積土には To-a もしくは B-Tm とみられる古代の火山灰が含まれ、10 世紀前半以前の構築である。須恵器の坏は例えば秋田県横手市の富ヶ沢 B 窯跡 SJ101・102 窯跡灰原出土土器に、法量のよく似る物が見られる。富ヶ沢 B 窯跡は 9 世紀前半から中葉のものとされている。土師器の坏は外面のミガキがロクロ使用の土師器のなかでも比較的古手の要素とみられる。鉄鏃については、土器から予想される 9 世紀代のなかで、鏃身が小型のものは県南地域の末期古墳や集落から出土した例がみられるが、本例のように鏃身が大型のものはあまり見られないようである。志波城 SI389 竪穴住居跡出土例（八木・室野ほか 1972）や、滝沢村大釜館遺跡 3 号円形周溝、88 号土坑出土例（吉田・井上 2003）例といった、9 世紀前半代の例が見られる。阿光坊古墳群内で鉄鏃が主体部に副葬された例は A1 号墳・A5 号墳・A11 号墳・a3 号土壙・T1 号墳があるが、周溝に供献された例は初見であるが、滝沢村大釜館遺跡 3 号円形周溝出土例と共通性がみられるほか、鏃身の大小を問わなければ丹後平 2・5・15・22・50 号墳、殿見遺跡 1・

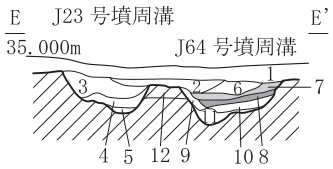












J23 号墳　A—A'

層位	土壌色・色調	土質	混入物・その他
1層	黒色土　10YR2/1	シルト	表土層、撹乱含む
2層	黒褐色土10YR2/2～2/3	シルト	盛土層φ5mmのローム多量含む、しまりあり
3層	黒褐色土10YR2/2	シルト	φ5mmのローム粒中量含む、盛土層
4層	黒色土　10YR2/1	シルト	砂粒、ローム粒微量含む、しまりあり
5層	黒褐色土10YR2/2	シルト	10YR5/6の火山灰含む、しまりあり
6層	黒色土　10YR2/1	シルト	根による撹乱
7層	黒色土　10YR2/1	シルト	根による撹乱
8層	黒褐色土10YR2/2	シルト	根による撹乱
9層	黒色土　10YR1.7/1	シルト	砂粒をブロック状に含む、人為ではなく積もった後に、多量の木根が入ったためと見られる
10層	暗褐色土～黄褐色土 10YR3/3～5/8	シルト	ロームブロック主体暗褐色土混入
11層	黒褐色土10YR2/2	シルト	φ1cm程のローム粒少量含む

第 107 図　J23 号墳 (1)

J23号墳　B—B'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	表土層
2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	しまりあり
3層	黒色土	10YR2/1	シルト	φ2mmのローム粒少量含む、しまり強
4層	黒色土	10YR3/4	シルト	10YR6/2の火山灰含む
5層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	φ2mmのローム粒少量含む、しまりあり
6層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む、しまりあり
7層	暗褐色土	10YR3/4	粘　土	黒色土混入、しまりあり
8層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒含む、しまりあり
9層	暗褐色土	10YR3/4	シルト	シルト質土とローム粒の混入土
10層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む、しまりあり
11層	黒色土	10YR2/1	シルト	10YR2/2～5/6のローム質土中量含む、しまり強
12層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	10YR5/8のロームブロック多量含む、しまりあり

J23号墳　D—D'

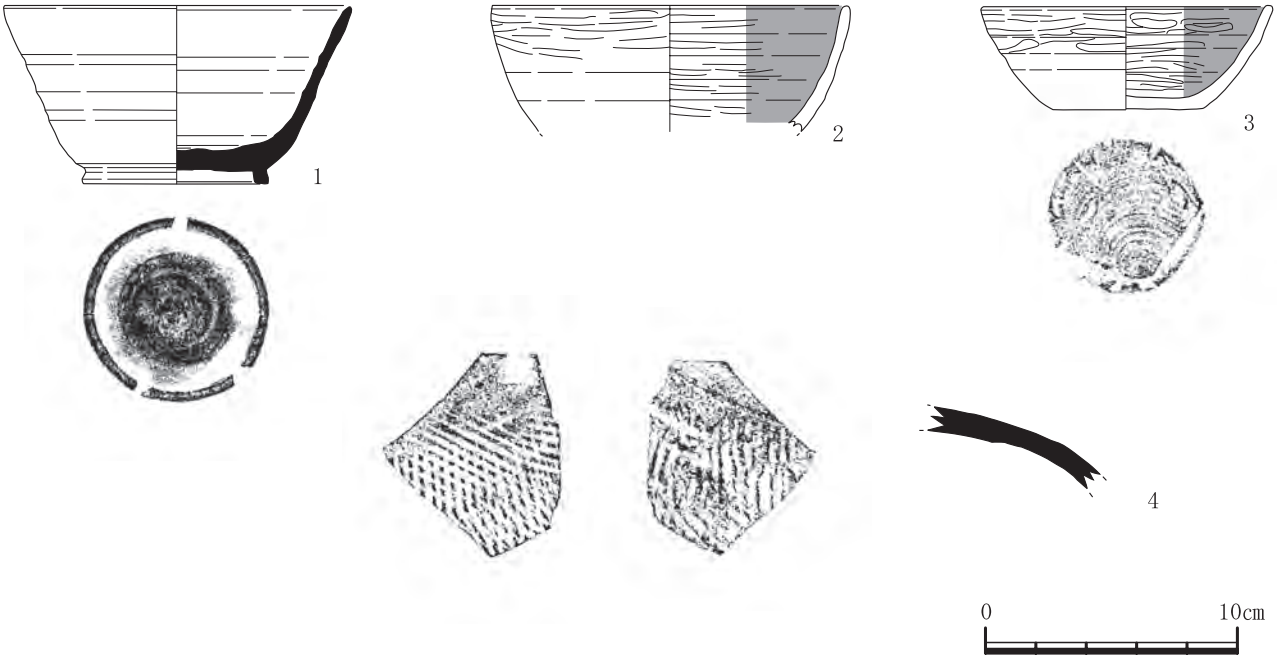
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒色土	10YR2/1	シルト	表土層
2層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む、しまり強
3層	黒色土	10YR2/1	シルト	火山灰含む、しまり弱
4層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	しまりあり
5層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒含む、しまりあり
6層	黒色土	10YR2/1	シルト	10YR5/8のロームブロック多量含む、しまりあり
7層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	10YR4/6～5/8のロームブロック多量混入、盛土層、しまり弱
8層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む、盛土層、しまりあり

J23号墳　C—C'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	表土層、しまりあり
2層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む、しまりあり
3層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む、しまりあり
4層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む、しまりあり
5層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	22号墳周溝覆土、しまりあり

J23号墳　E—E'

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	表土層
2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	しまり強
3層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒、ローム粒微量含む、しまりあり
4層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒含む、しまり弱
5層	黒色土	10YR2/1	シルト	10YR3/4暗褐色土ロームブロック混入、しまりあり
6層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒含む、しまりあり
7層	黒色土	10YR2/	シルト	10YR3/4の火山灰(B-Tm)、砂粒含む、しまりあり
8層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	10YR6/2灰褐色土の火山灰(To-a)、砂粒含む、しまりあり
9層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	砂粒多量、パミスを含む、しまりあり
10層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	砂粒含む、しまり弱
11層	黒褐色土	10YR2/3	シルト	10YR3/4ロームブロック含む、しまり強



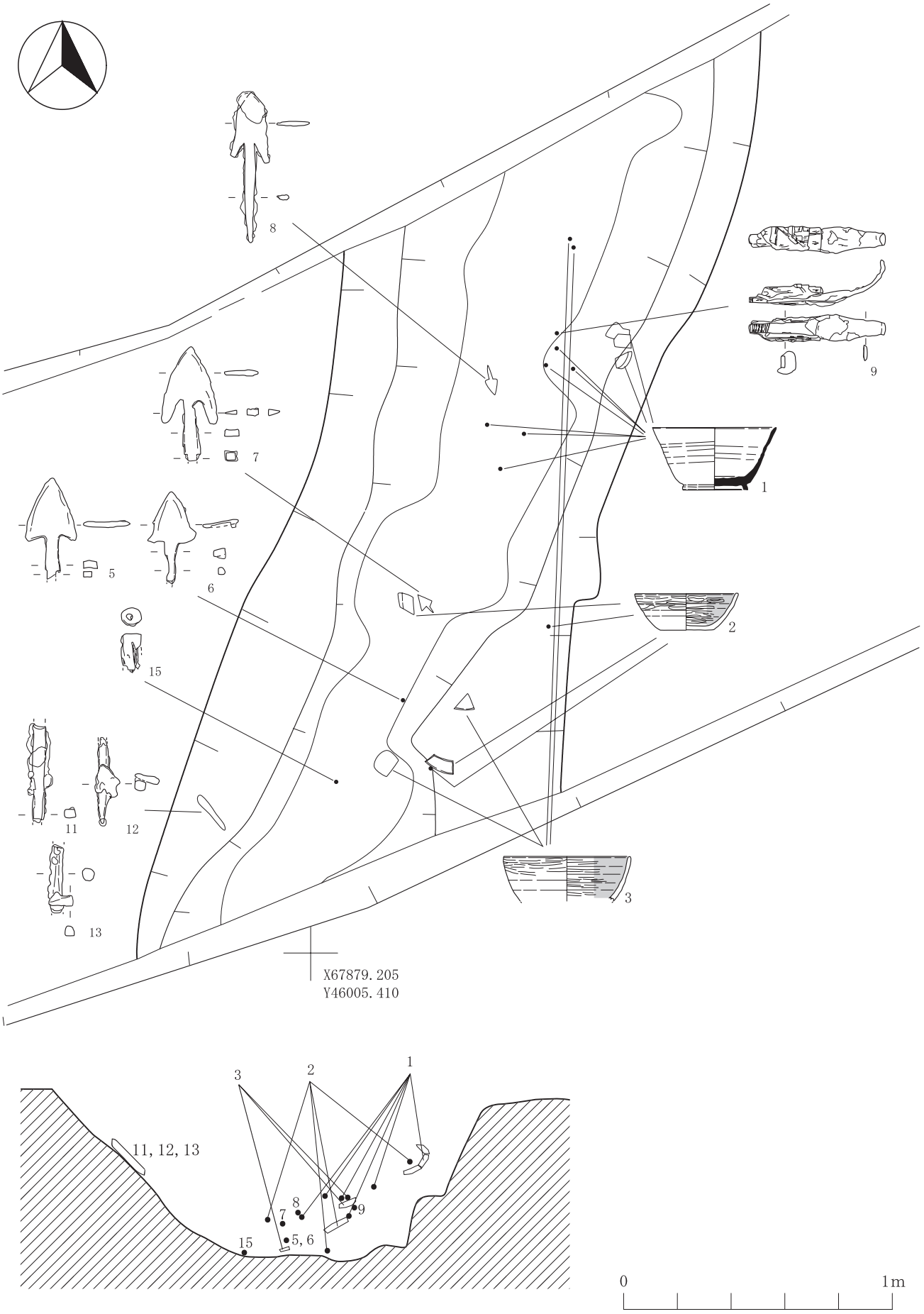
No.	器種	層 位	種 類	外面調整	内面調整	口径×器高(cm)	低径(cm)	番号	備考
1	坏	B-B'12層上	須恵器	体部:ロクロナデ 底部:回転ヘラ切り→高台	ロクロナデ	13.8×7.0	7.4	P1,2,3,4,5,14	再実測
2	坏	B-B'12層上	土師器	口縁:ミガキ 体部:ロクロナデ	ミガキ→黒色処理	(12.2)	—	P11	
3	坏	B-B'12層上	土師器	口縁:ロクロナデ→ミガキ 体部:ロクロナデ　底部:糸切り	ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	11.6×4.1	5.8	P12,16,17,20	
4	甕	周溝覆土	須恵器	ロクロナデ　タタキ目	ロクロナデ　アテ具痕	—	—	P9	

第 108 図　J23 号墳 (2)

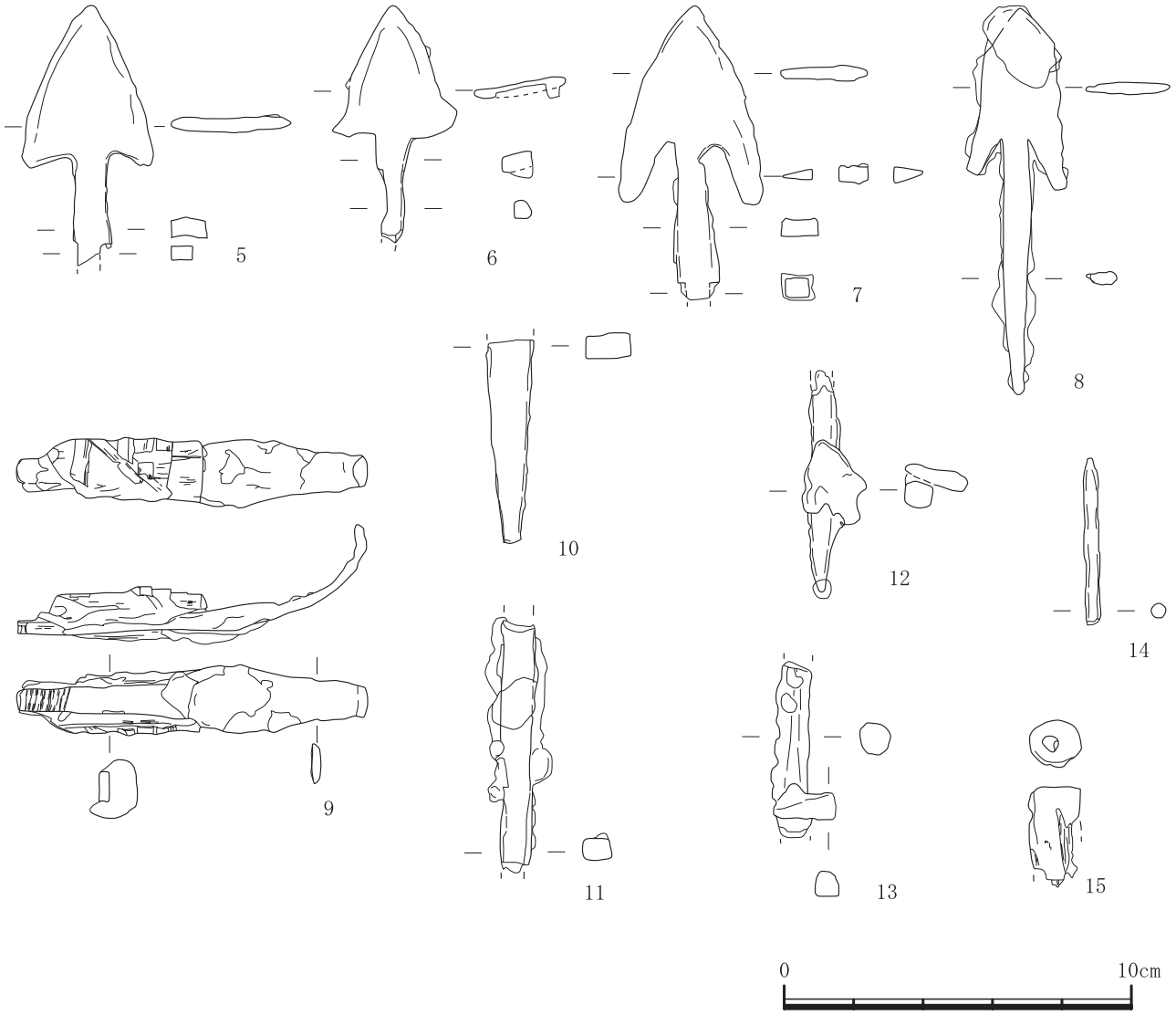
4・9 号墳と、比較的鉄鏃の供献例自体は豊富である。

鉄鉇は、北海道恵庭市柏木東遺跡 4 号土壙から出土している (上屋 1998)。

原典 H



第 109 図　J23 号墳 (3)



No.	種類	層位	鏃身部(cm)				頸部(cm)			茎部(cm)			重さ(g)	番号
			全長	長さ	巾	厚さ	長さ	巾	厚さ	長さ	巾	厚さ		
5	鉄鏃	周溝下	(7.5)	4.7	3.5	0.4	2.7	1.0	0.5	(0.6)	0.7	0.4	14.4	F2a
6	鉄鏃	周溝下	(6.9)	3.9	3.5	0.3	1.0	1.0	0.5	(0.6)	0.6	0.5	7.2	F2b
7	鉄鏃	周溝埋戻上	(8.5)	5.8	4.2	0.4	4.1	1.2	0.5	(0.5)	0.7	0.5	16.8	F5
8	鉄鏃	周溝埋戻上	11.2	5.2	2.8	0.3	—	—	—	7.4	0.8	0.4	12.1	F6

No.	層位	種類	全長(cm)	刀部巾(cm)	長さ(cm)	柄部巾(cm)	柄部長(cm)	重さ(g)	番号
9	周溝埋戻上	鉈	(10.2)	2.0	4.3	1.8	(5.4)	21.5	F7

No.	器種	層位	全長(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	番号
10	不明	—	(5.9)	1.3	0.7	12.5	鉄製品の茎か?	F1
11	不明	B-B'12層	(7.3)	0.9	0.7	14.7	鉄鏃の茎と類以	F3a
12	不明	B-B'12層	(6.4)	0.8	0.7	13.1	鉄鏃の鏃身に類似するものが付着	F3b
			(2.6)	2.0	0.5			
13	不明	B-B'12層	(5.1)	1.0	0.9	10.4	下端には 単に錆着したものか 一体となり何らかの鉄器となるのか不明な直角方向に続く部分がある	F3c
14	不明	—	(4.9)	0.4	0.4	3.5	断面形が円形であるのが特徴的 先端がややふくらむ	F8
15	不明	B-B'12層	(2.9)	1.4	1.4	2.8	鉄器でとりあげたが木であった 本来は鉄器の柄等であったものとみられる	F4

第110図　J23号墳(4)

J61 号墳　(第 111 ～ 113 図　図版 43・44)

位置　T11 ～ 12、K11 ～ 12 の南東側に位置する。地表面から観察される塚状の盛り上がりとして平成 12 年度調査で確認した。本調査では、塚状のものが、J10 号墳同様古代の墳墓であるかどうかを確認するため、周溝がめぐるかどうか、また、堆積土からの時期の推定を主な目的としてトレンチを設定した。

周溝　周溝内径 6.24 ～ 6.4m、周溝外径 8.60 ～ 8.92m のほぼ円形になるものと予想される。地表面からの深さは 75 ～ 112cm、幅は 76 ～ 144cm である。墳頂部の標高 33.399m から周溝底部までの差は 1.02m(B-B') から 1.2m(A-A') である。

堆積状況　13 層に分けられた。黒色土を主体とする自然堆積と考えられる。周溝基底部は基本層序第Ⅴ層であり、周溝を掘り下げた土で墳丘の盛土を行ったものと考えられるが、土壌色が酷似し明確に分層出来なかった。周溝覆土 5 層に B-Tm 火山灰が、7 層には To-a 火山灰が 2 ～ 10cm レンズ状に堆積し、To-a は周溝掘方から 20 ～ 30cm 覆土が堆積した段階で堆積している。

出土遺物　(第 113 図)

A-A' トレンチから須恵器の甕の破片 3 点出土した。

小結　トレンチ調査の結果、ほぼ円形に周溝が巡る末期古墳であることが明らかになった。出土した 3 片は同一個体のものと推定されるものの、全体的器形を推定することが出来なかった。胎土は J10 号墳出土の長頸瓶と同様に赤褐色を呈する。To-a 火山灰の堆積により 10 世紀前半以前のものと考えられる。

原典 F

J65 号墳　(第 114 図　図版 44)

トレンチの北側の M12 で溝と思われる遺構を検出した。 火山灰が確認された時点で何らかの落ち込みが存在することが予想された。 堆積土は黒色土主体の層で、 レンズ状を呈し、 自然堆積と思われる。 出土遺物はなかった。

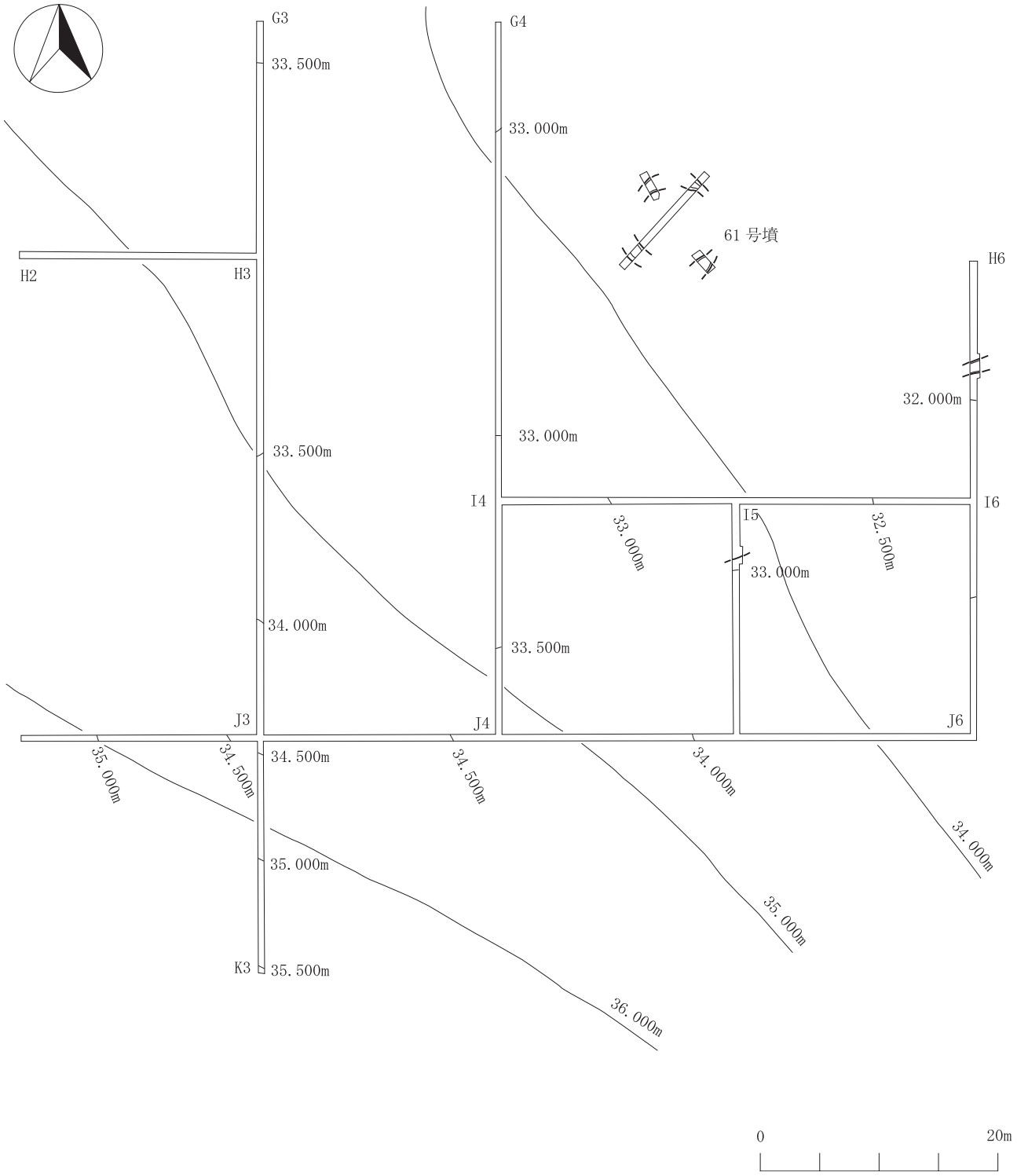
原典 F

J66 号墳　(第 114 図　図版 44)

トレンチのほぼ中央の K14 で、溝と推測される遺構を検出した。堆積土は黒色土主体で、レンズ状を呈し自然堆積と考えられる。3 層には火山灰が含まれている。溝の底面付近は湧水のため明瞭に出来なかった。トレンチ内からは時期等を推測できる出土遺物はなかった。北側には 60 基の末期古墳が存在することから、同様の墓である可能性が考えられた。溝の覆土と北側の耕作土の下層では火山灰が確認されたが、南側にはみられない事から、南側に墳丘が存在したと推測した。墳丘はすでに削平された可能性が考えられる。

原典 F

遺構外出土遺物　(第 115 図　図版 45)



第 111 図　J61 号墳 (1)

H4 から北へ 8m 東へ 12m

H4 から北へ 8m 東へ 16m

H4 から
北へ 4m 東へ 12m

H4 から
北へ 4m 東へ 16m

H4 から
東へ 12m

H4 から
東へ 16m

A A' B B' C C'

B 33.400m B'

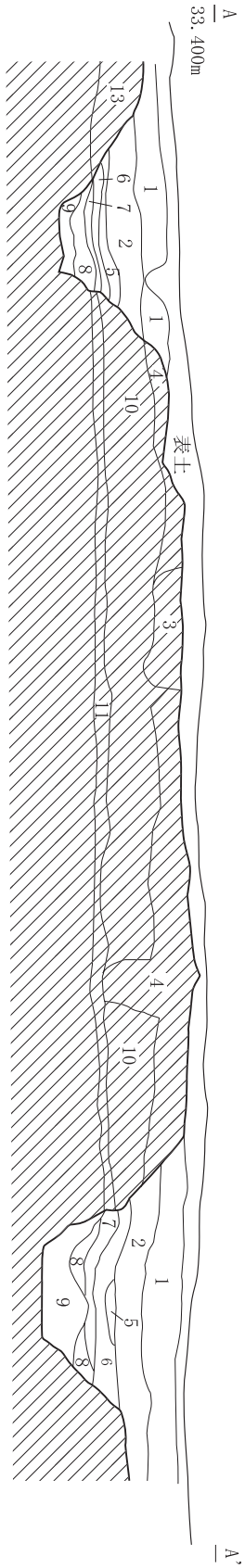
表土 1 2 5 6 7 8 9

C 33.200m C'

表土 2 5 6 7 8 9 10

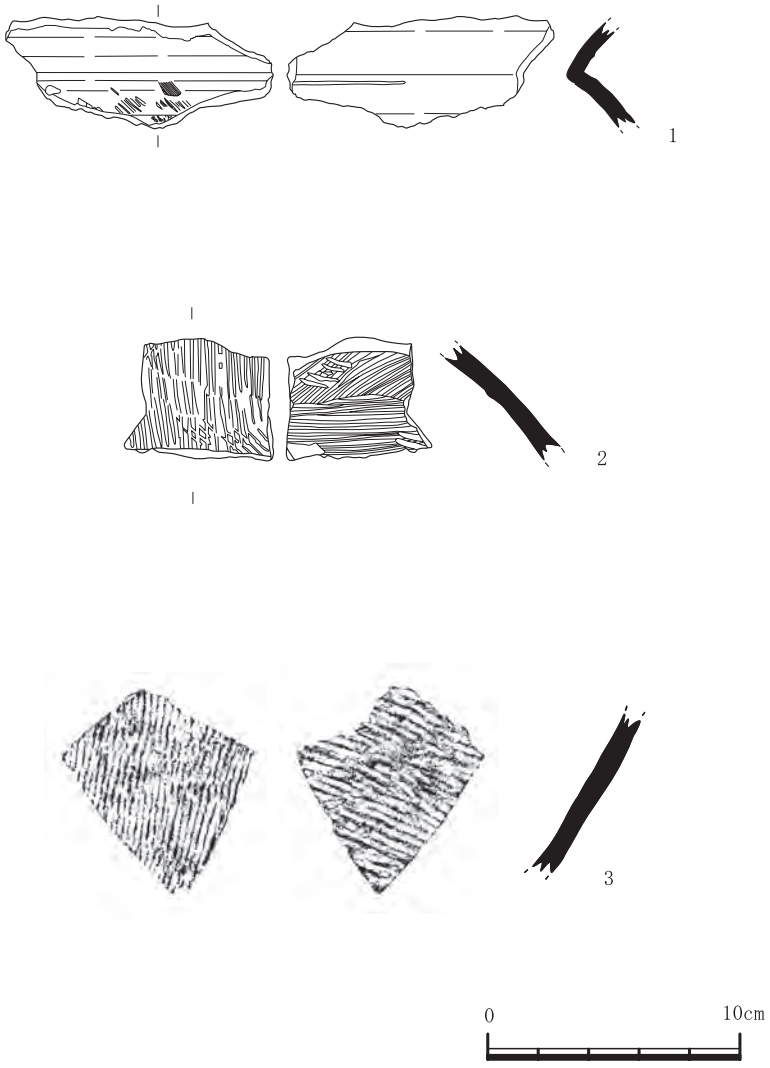
0 2m

第 112 図　J61 号墳 (2)



J61 号墳

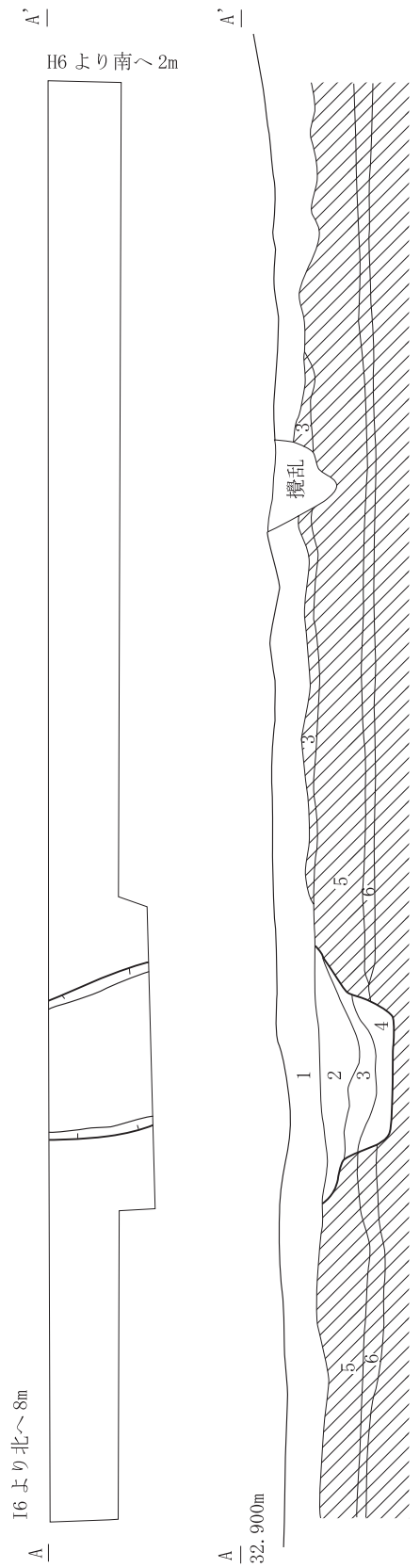
層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
表土	黒色土	10YR1.7/1	シルト	木･草根 しまり弱
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	木･草根 しまり弱
第2層	黒色土	10YR2/1	シルト	白頭山火山灰微量含む しまり強
第3層	黒色土	10YR2/1	シルト	砂粒混在 しまり弱
第4層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	φ2cm中撥浮石 10層に割り込んだ下方に中撥含む 木根
第5層	黄褐色土	2.5Y5/4	火山灰	白頭山火山灰堆積層（厚さ5～10cmのレンズ状）
第6層	黒色土	10YR2/1	シルト	十和田a火山灰微～少量 白頭山火山灰極微量含む しまりやや強
第7層	灰ｵﾘｰﾌﾞ色土	5Y5/3	火山灰	十和田a火山灰堆積層(厚さ8cm前後のレンズ状)
第8層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	中撥浮石微量含む しまり強
第9層	黒褐色土	10YR2/2	シルト	中撥浮石多量 黒褐色土少量含む
第10層	黒色土	10YR2/1	シルト	非常に硬くしまった層 砂粒含む
第11層	黒褐色土	10YR2/3	砂	中撥浮石層 木根に鉄分を含有 しまり強
第12層	黒色土	10YR2/1	シルト	硬くしまり強
第13層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	しまり強

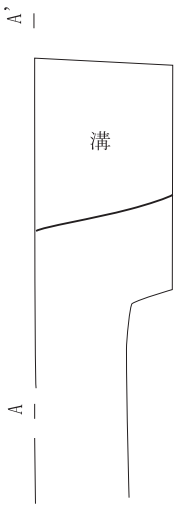


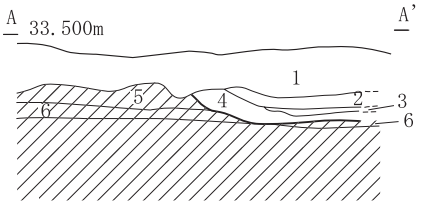
器 種	層 位	種 類	部 位	外面調整	内面調整	備 考
甕	覆土	須恵器	頸部	頸部上:ロクロナデ、下:タタキ目→ロクロナデ	ロクロナデ	

器 種	層 位	種 類	部 位	外面調整	内面調整	備 考
甕	覆土	須恵器	胴部	タタキ目	あて具痕	
甕	覆土	須恵器	胴部	タタキ目	あて具痕→ナデ	

第 113 図　J61 号墳 (3)







J65 号墳

I5～J5間
ﾄﾚﾝﾁ溝

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	表土 根多量含む
第2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒微量含む しまり強
第3層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	火山灰	黒色土(10YR1.7/1)多量含む しまり強
第4層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒微量含む しまり弱
第5層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒微量含む しまり強
第6層	黒色土	10YR2/1	シルト	中掫浮石少量含む しまり強

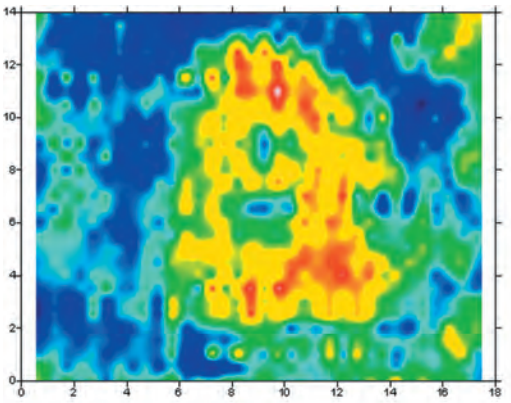
0 2m

J66 号墳

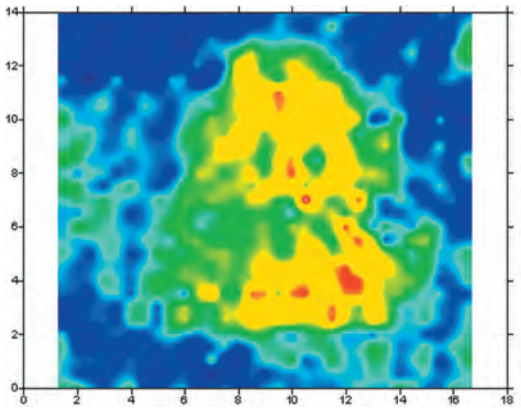
H6～I6
ﾄﾚﾝﾁ
ｾｸｼｮﾝ

層位	土壌色・色調		土質	混入物・その他
第1層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	表土 根多量含む
第2層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒微量含む しまり強
第3層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	火山灰(白頭山)多量 砂粒微量含む しまり強
第4層	黒色土	10YR2/1	シルト	黒褐色土(10YR2/3)少量 砂粒微量含む しまり強
第5層	黒色土	10YR1.7/1	シルト	砂粒少量含む しまり強
第6層	黒色土	10YR2/1	シルト	黒褐色土(10YR2/2)少量 中掫浮石少量含む しまり強

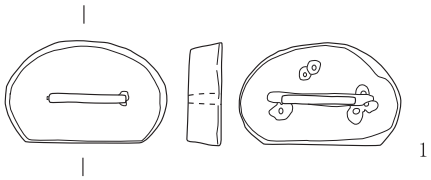
第 114 図　J65・J66 号墳



0.5m



1.0m



1

0　5cm

十三森遺構外

No.	器種	材質	高さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	備考
1	丸鞆	碧玉	2.7	4.2	0.88	H18再実測

第 115 図　J5 号墳電気探査・十三森 (2) 遺跡遺構外出土遺物

番号	墳頂標高m	裾標高m	高さm	直径m	番号	墳頂標高m	裾標高m	高さm	直径m	番号	墳頂標高m	裾標高m	高さm	直径m
1	39.555	38.750	0.805	7.200	23	34.700	34.600	0.100	7.000	45	33.352	32.600	0.752	9.000
2	38.845	38.480	0.365	7.400	24	34.469	34.160	0.309	8.000	46	32.472	32.000	0.472	8.200
3	39.700	39.340	0.360	5.600	25	34.121	33.700	0.421	8.000	47	32.729	31.967	0.762	9.000
4	40.015	39.480	0.535	10.200	26	33.505	33.000	0.505	9.000	48	32.498	31.920	0.578	9.400
5	39.407	38.400	1.007	11.000	27	32.860	32.572	0.288	8.800	49	33.210	32.578	0.632	7.800
6	39.650	39.000	0.650	11.400	28	33.030	32.550	0.480	9.800	50	欠番	—	—	—
7	37.670	37.010	0.660	8.200	29	33.639	33.050	0.589	8.200	51	33.790	33.050	0.740	13.000
8	37.415	36.400	1.015	9.200	30	32.443	32.200	0.243	9.000	52	34.330	33.534	0.796	10.600
9	38.430	37.620	0.810	8.600	31	欠番	—	—	—	53	34.735	34.134	0.601	8.200
10	39.100	38.090	1.010	14.250	32	33.367	33.025	0.342	6.400	54	33.960	33.734	0.226	5.400
11	39.153	38.580	0.573	9.400	33	34.230	33.600	0.630	8.000	55	34.564	33.900	0.664	12.400
12	38.869	38.340	0.529	7.800	34	34.570	33.778	0.792	9.200	56	35.343	34.800	0.543	6.800
13	38.360	38.020	0.340	5.000	35	34.913	34.100	0.813	11.200	57	35.665	35.200	0.465	10.400
14	37.896	36.970	0.926	10.000	36	35.520	34.556	0.964	12.400	58	36.190	35.600	0.590	8.800
15	35.915	35.400	0.515	9.000	37	欠番	—	—	—	59	35.280	35.146	0.134	6.400
16	36.231	35.717	0.514	7.000	38	34.460	34.200	0.260	7.600	60	36.298	35.800	0.498	6.800
17	36.076	35.662	0.414	8.200	39	34.264	33.956	0.308	6.400	61	33.370	33.167	0.203	6.600
18	35.270	34.800	0.470	8.000	40	34.769	34.480	0.289	6.000	62	35.635	35.160	0.475	6.400
19	35.670	35.100	0.570	10.000	41	35.781	35.000	0.781	9.000	63	31.870	31.686	0.184	6.200
20	35.440	34.920	0.520	9.600	42	33.881	33.400	0.481	8.400	64	34.700	—	—	—
21	35.240	34.500	0.740	11.000	43	35.411	35.000	0.411	6.800	65	32.700	—	—	—
22	35.300	34.860	0.440	9.800	44	32.990	32.470	0.520	7.600	66	33.450	—	—	—
										平均			0.626	8.993

第 3 表　墳丘計測表

調査前（南から）

周溝掘削（南から）

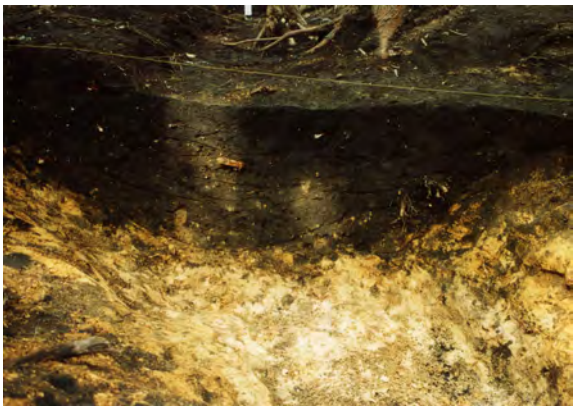
盛土セクション（中央部）

盛土基底部（東から）

盛土セクション

盛土基底部（北東から）

セクション（開口部）



B 区セクション

図版 38　J10 号墳 (1)

D 区セクション

D 区セクション（南側）

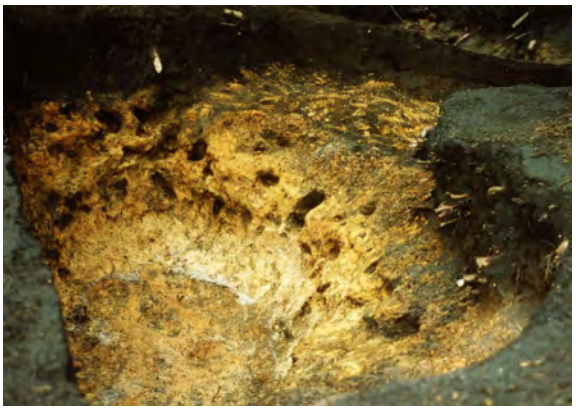
D 区セクション（北側）

D 区遺物出土状況（甕）

D 区遺物出土状況（耳皿）

D 区遺物出土状況（坏）

主体部（東から）


開口部立ちあがり（西から）

図版 39　J10 号墳 (2)

J10 号墳開口部立ちあがり（東から）

J10 号墳 A 区炭化物出土状況

J21 号墳確認

J21 号墳調査終了

A-A’ 全体

A-A’ 西側

A-A’ 中央

B-B’

図版 40　J10 号墳 (3)・J21 号墳 (1)

J21 号墳 C-C'

J21 号墳 D-D'

墳丘上土坑確認

土坑完掘

土坑完掘（南東から）

1 号土坑セクション c-c'

2 号土抗セクション a-a'

2 号土抗セクション b-b'

図版 41　J21 号墳 (2)

J21 号墳 3 号土抗セクション d-d'

J23 号墳調査前

作業風景①

作業風景②

J23 号墳確認

J23 号墳 A-A' 西側

J23 号墳 A-A' 中央

J23 号墳 B-B'

図版 42　J21 号墳 (3)・J23 号墳 (1)

J23 号墳 C-C'

J23 号墳 D-D'

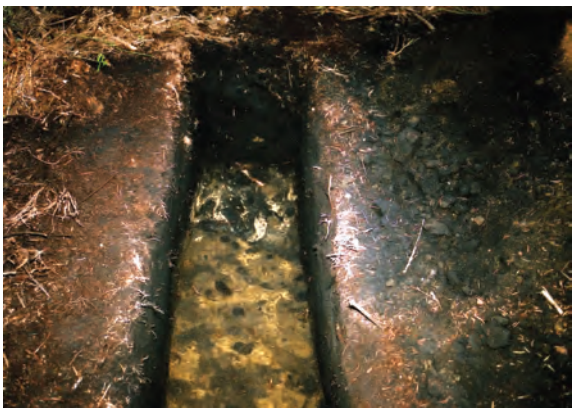
J23 号墳 E-E'

J23 号墳調査前

J23 号墳遺物出土状況（南から）

遺跡の現況

トレンチ設定状況


I4-J4（I4 付近）火山灰確認

図版 43　J23 号墳 (2)・J61 号墳 (1)

J61 号墳周溝南側セクション A-A'（西から）

J61 号墳周溝北側セクション A-A'（西から）

J61 号墳周溝火山灰検出状況 A-A'（西から）

J61 号墳周溝火山灰検出状況 A-A'（北東から）

J65 号墳　I5-J5 トレンチ溝検出（南から）

J66 号墳　H6-I6 セクション A-A'

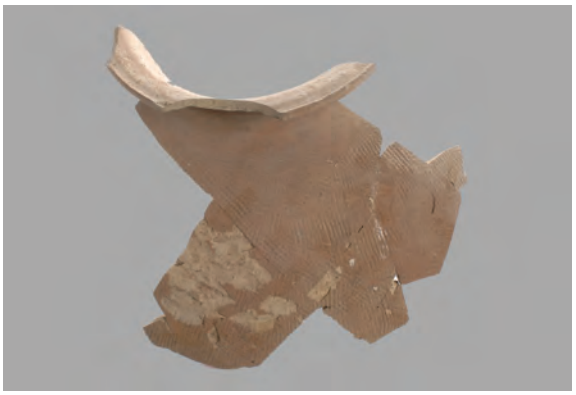
J66 号墳　H6-I6 トレンチセクション A-A'（東から）

J66 号墳　H6-I6 溝及び火山灰

図版 44　J61 号墳 (2)・J65 号墳・J66 号墳

J10 号墳出土釘

J10 号墳出土長頸瓶



J10 号墳出土甕

J10 号墳出土坏・耳皿

J21 号墳出土坏・甕

J23 号墳出土高台付坏・坏

J23 号墳出土鉄鏃・鉄鉈

遺構外出土石帯丸鞆

図版 45　出土遺物

第Ⅲ章　保存処理・分析報告

平成 17 年度阿光坊古墳群遺跡出土金属製品他保存処理報告

東北芸術工科大学
文化財保存修復研究センター

青森県おいらせ町（旧下田町）教育委員会発掘調査、阿光坊古墳群（阿光坊遺跡・天神山遺跡・十三森(2) 遺跡）出土金属製品の保存処理および材質分析を行ったので、下記のとおり報告する。

出土金属製品の保存処理

1. 処理工程

1)　写真撮影

2)　構造調査（レントゲン写真撮影）

3)　クリーニング（錆・土の除去）

レントゲン写真観察から金属部の残存が少ない資料はパラロイド NAD10　2% ソルベントナフサ溶液に資料を浸漬して、減圧含浸から乾燥させ、クリーニングに耐えられる強度を付加した。

4)　脱塩処理

刀剣以外の出土金属製品には高温高圧純水法を用いた。刀剣資料に対してはセスキ炭酸ナトリウム水溶液法を用いた。最終的に塩化物イオン、硫酸イオンともに水道水の可溶性陰イオン量（10ppm）以下となった。

5)　脱水および乾燥処理

エチルアルコール（エタノール）を用いて　2 ～ 3 回繰り返した後、恒温器内（105℃）で乾燥を行った。

6)　強化処理

パラロイド NAD10　10% ソルベントナフサ溶液に資料を浸漬して、減圧含浸の後、乾燥させた。この工程を 2 回行った。

7)　接合･整形･彩色

クリーニング･脱塩処理中に割れた遺物に関しては、アクリル系接着剤（パラロイド B-72）で接合した。欠損部分にはボンドオールで補填した。

8)　写真撮影

9)　RP システムに封入

保存処理が終了後、遺物に対しては腐食が促進されないよう無酸素・低湿度の環境が望ましい。このことから外的要因を除去するために脱酸素包装システム（RP システム（三菱ガス化学製））に封入した。

2. 脱塩処理溶液の可溶性陰イオン量について

金属の腐食を促進させる陰イオンを除去する処理を脱塩処理という。脱塩処理は出土鉄製品の寿命を決める重要な処理であり、鉄製品それぞれに応じて脱塩処理方法を適切に決めることが重要である。

刀剣資料に対してはセスキ炭酸ナトリウム水溶液法を用いた。脱塩処理として除去したい可溶性陰イオンである塩化物イオン・硫酸イオンの溶解度は純水が最も高く、特に塩化物イオンに対する脱塩処理には適していることが既往の研究から示唆されている。脱塩処理中に常時使用した純水は、水道水を蒸留した後、含有する陽･陰イオンを除去したものである。日常使用する水道水には多くのイオンが含まれており、特に脱塩処理中で注目する陰イオンの塩化物イオン・硫酸イオンが約 10ppm(1ppm ＝ 0.0001％）程度含まれている（表1)。純水が

含有する塩化物イオン量・硫酸イオン量はともに 0ppm 以下であることから、資料から溶出したイオン量を端的に解釈することが可能である。さらに資料より脱塩溶液に溶出したイオンと水に含まれるイオンが反応しないためにも純水を用いることが必要であった。

処理はステンレス製専用容器に純水 20L と資料を入れ、陰イオンの溶出を行った。脱塩条件は常温下で 3 日間～ 10 日間である。この工程を 5 回繰り返した。処理中は脱塩終了毎に塩化物イオンおよび硫酸イオン量の確認を行った。イオン量の推移を図 1 に示す。

表1　イオン交換水と水道水に含まれる陰イオン量

測定溶液	塩化物イオン（ppm）	硫酸イオン（ppm）
イオン交換水	0	0.2
芸工大水道水	3.5	14.4

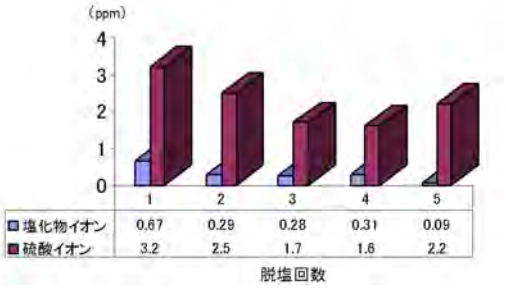


図 1　脱塩回数毎の陰イオン量

結果、本遺跡出土鉄製品資料には塩化物イオンよりも硫酸イオンが多く含まれていることがわかった。これは既往の研究から土壌に配合する肥料に多く含まれていることが知られており、もし本遺跡が以前そのような肥料が用いられていた状況であったならば、要因の一つとして考えられる。

脱塩処理の回数が重なるにつれて、脱塩後の溶液中に含まれる可溶性陰イオンは減少する。本脱塩処理では塩化物イオンは同様の傾向を示したが、硫酸イオンは 3 回目までは減少したものの 4、5 回目は脱塩量が増加した。これは、脱塩処理中に資料が破断し、その破断面からさらに奥に残っていた可溶性陰イオンが溶出したためと考えられる。

可溶性陰イオン量は 5 回の処理中の塩化物イオン、硫酸イオンはともに 3ppm 以下と低い値であり、また 5 回以上の脱塩処理は資料の破壊をより引き起こす可能性もあったため、脱塩処理は 5 回で終了することは妥当であったと考える。

なお、刀剣以外の資料、刀子や鉋などは高温高圧純水法を用い、溶液の陰イオン量から脱塩回数を 3 回とし、おこなった。

材質分析

● 付着繊維品について

出土刀剣の鞘木の直上や鉄釧に数種類の金属のさびに影響を受け鉱物化した繊維が確認できた。刀剣には麻類および平絹と推定されるものが確認できた。鉄釧には繊維の太さが異なる平絹と推定される繊維品が確認できた (写真 1)。詳細は資料 1 をご参照願いたい。

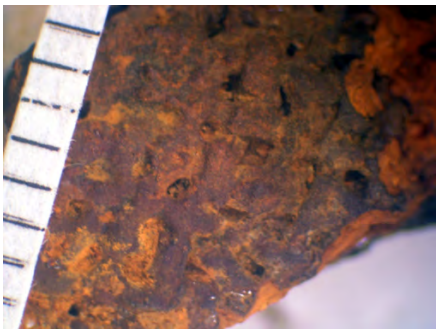


写真 1 ：鉄釧に付着した繊維製品

● 鞘木の樹種同定について

出土刀剣にはさび化した鞘木が残存しており、その樹種を同定するために木口・板目・柾目面の3方向に切り出した資料（写真2）を電子顕微鏡（HITACHI社製）で観察したところ、その特徴からモミ属の利用が推定された。本件は外部研究者との協議を進め、本結果を導いた。なお、鞘木は柾目面を用いて製作された事もわかった。詳細報告は資料2をご参照願いたい。

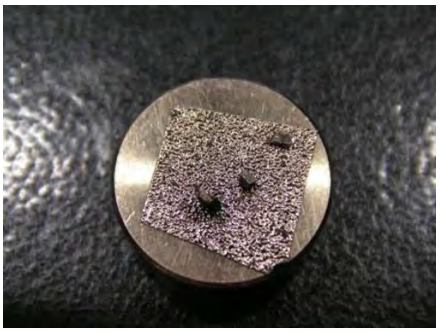


写真2：樹種同定資料（繊維・接線・放射の3方向試料）

● 金属部分のX線回折分析について

非破壊で測定可能なX線回折装置（Bruker社製）を用いて、金属部分の定性分析を行った（写真3）。鞘木にある錫鋲の表面を測定した所、酸化錫が検出された。鋲の表面は劣化が激しく、その原因は金属の錫が空気酸化を受け、酸化錫が生じた事にも起因すると考えられる。今後の保存状況が懸念された所であった。詳細は資料3をご参考願いたい。

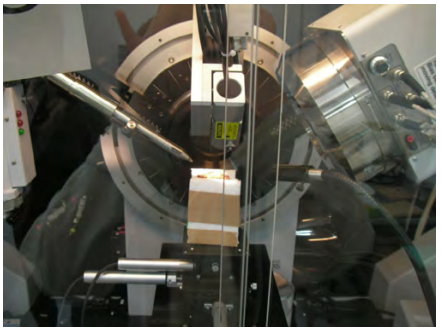


写真3：X線回析分析風景

（資料1）

阿光坊古墳群遺跡出土金属製品付着繊維品について

東北芸術工科大学
文化財保存修復研究センター
手代木美穂

【はじめに】

人類と繊維との文化史を解き明かすとき、発掘調査より出土した文化財繊維品は史実に基づく証拠品として価値が高い。特に、繊維品はそれ自体の材質の問題からその埋納環境において残ることが非常に困難であり、それ故にいかなる形でも文化財繊維品がそのオリジナルを探る糸口が内包していれば、何らかの形で引き出していくことが必要であると考える。

奈良県藤ノ木古墳や黒塚古墳など 1300 年～ 1500 年前の有力者の墓とされる発掘調査からは埋納品として刀剣・鏡などの金属製品が出土する。その中には銹化した布（繊維品）が付着しているものが確認できることがある。これは金属製品の錆が繊維品に入り込み布が銹化しているものであるが、それらは繊維品の形骸を残しており、当時の繊維品の使用方法や製作技法を解明できる貴重な資料となる可能性が高い。このような銹化した繊維品を含む文化財調査は「非破壊分析」を原則とすることが望ましい。銹化した繊維品に関しては顕微鏡下観察により繊維品の材質は撚りの有無で推定、織密度・繊維の太さは観察結果写真より推定している。また、その結果を追従するための破壊分析も資料の制約を考慮して行うことがのぞましいであろう。

このたび保存処理を行った金属製品のうち、刀剣及び鉄釧からこのような繊維品が確認できた。繊維品は保存処理中によって強化剤を含浸する事によって特有の「てかり」が出てくるため、顕微鏡観察による非破壊分析が難しくなる。よって、保存処理前の調査が有効である。また、処理中に本資料から落ちて、元には戻せない繊維品に関しては非破壊分析の比較資料として採取し、断面観察をおこなった。以下、調査結果を報告する。

写真：刀剣資料（青字まるで囲まれた所が繊維の観察された部分）

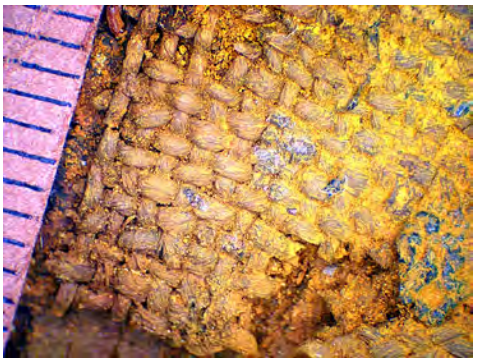
1）刀剣資料

刀剣には麻類と絹の 2 種の繊維が用いられたと推定できた。麻類は鍔の裏面・柄につながる面に存在した事から、可能性として柄全体にグリップのような役割で存在した、紐の一部であるとも考えられる。強い右撚りが掛かっており、繊維束は約 0.8mm(スケールは 1 間隔 1mm) 程度であった。

写真：鍔裏の紐状繊維品 1

写真：鍔裏の紐状繊維品 2（拡大）

絹は 3 層の重なりが確認された。 いづれも平織りである。

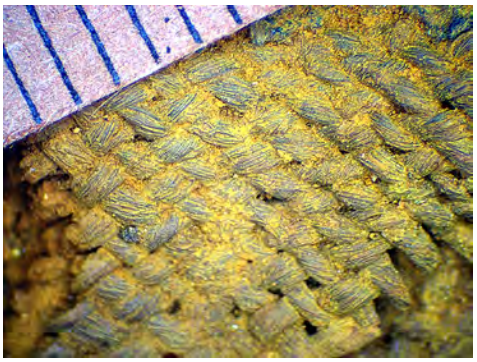


写真：刀剣鞘木直上の上層平絹 1

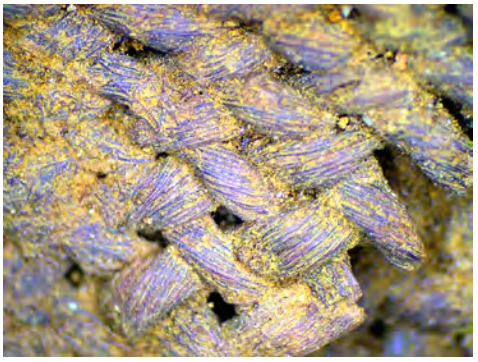
写真：刀剣鞘木直上の上層平絹 2（拡大）

最上層：繊維束の太さは経糸 0.8mm 程度、 緯糸は 0.5mm 程度で全体的に無撚りであった。

中層：経緯糸共に 0.8mm 程度の比較的無撚りの平絹と推察した。

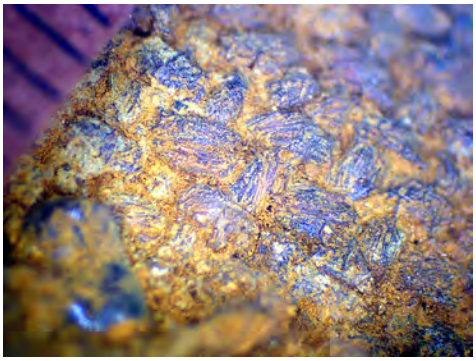


写真：刀剣鞘木直上の中層平絹 1

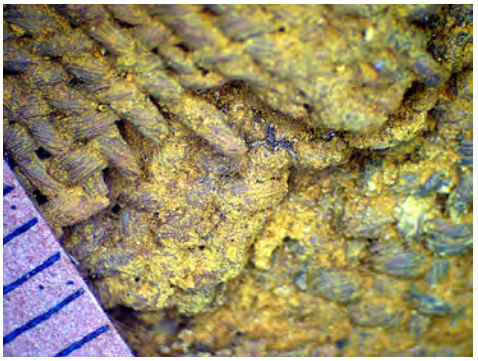


写真：刀剣鞘木直上の中層平絹 2（拡大）

最下層：繊維束の太さは経糸 0.8mm 程度、緯糸は 0.5mm 程度で全体的に無撚りで、最上層の繊維と類似していた。



写真：刀剣鞘木直上の下層平絹 1



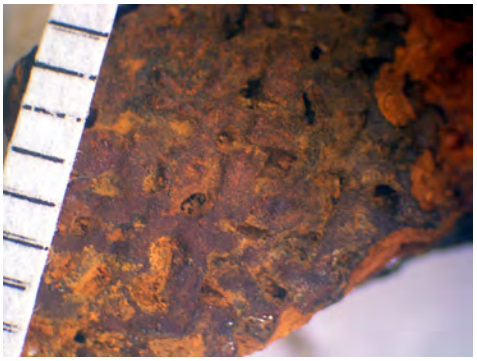
写真：刀剣鞘木直上の平絹の重なり

以上のことから、刀剣鞘木の上には少なくとも 3 層の平織りの繊維品の存在が示唆されたが、その広がりは確認できず、また上層・下層が類似している事から同一のものが折れて存在した事も否定できない。よって、この刀剣がどのように布でくるまれ埋納されたかについては言及できないものである。

2）鉄釧

写真：鉄釧（青字まるが繊維が確認できた部分）

鉄釧には 2 種類の繊維束の太さが異なる広がりが確認できた。繊維束が太い資料：繊維束が 0.5 ～ 0.8mm の平絹が用いられた。



写真：鉄釧付着平絹 1

写真：鉄釧付着平絹 2

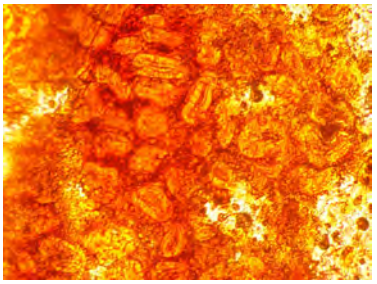
繊維束の細い資料：縦横共に 0.1㎜ 程度の繊維束の太さで平絹と推定される。

以上のことから、鉄釧付着繊維は 2 種の太さの異なる平織りの繊維品であった。しかし、この 2 種の上下層の関係や広がりは確認できなかった。

【考察～断面観察結果より】

本非破壊分析結果を追従するために、処理中に鍔付近から落ちた繊維品資料の断面観察を行った。資料はエポキシ樹脂で包埋した後、ダイアモンドカッターおよび紙やすり、バッファー研磨機を用いて薄片として、金属顕微鏡を用いて繊維断面を観察した。断面は楕円形の束であることが確認でき、既往の研究から絹ではない植物性の繊維断面であることが確認できた。

この断面繊維は刀剣鍔に付着した繊維品であることから、非破壊分析によって麻類とした結果は妥当であったと考えている。



写真：繊維断面（× 300 倍）

【さいごに】

今回調査した出土刀剣および鉄釧の 2 資料からは合わせて 6 点の繊維品が確認できた。しかし、それぞれの金属製品の広がりつまり包装に対する情報は見つけられなかった。これまで金属製品に付着した繊維品の調査は軽視されてきたが、今後繊維製品の国内生産の歴史や技術の伝播を考える一助として貴重な資料であると考えている。

参考文献

佐藤昌憲監修　2005「絹文化財の世界―伝統文化・技術と保存科学―」

北海道埋蔵文化財センター　2005「恵庭市西島松5遺跡 (2) －北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第 194 集」

（資料 2）

阿光坊遺跡出土の鉄剣付着木材の樹種同定について

東北芸術工科大学大学院
歴史文化研究領域
小林克也

【はじめに】

鉄剣の鞘部に付着していた木材について分析を行った。この遺物の木質部分は、経年劣化により脆くなっていたり、金属化していたりと劣化が著しかったのだが、その中でも自然炭化（金属化？）した比較的硬い部分を、剥落したものから 1 点、遺物から小さな破片を 1 点、サンプルとして採取した。それによって、樹種の同定及び材の加工方法などを分析した。

【同定方法】

今回分析する資料は、炭化ないし金属化した硬い資料であるため、木口・柾目・板目面をカミソリで割るようにしてカットし、カーボンテープで試料台に固定したのち、金蒸着をして走査型電子顕微鏡で観察した。

【同定結果･考察】

今回の木材は、マツ科モミ属の木材であることが判明した。モミ属にはモミ・ウラジロモミ・シラベなどの樹木が存在するが、細胞での同定ではこれらの識別はほぼ不可能である。そのため今回はモミ属とした。

このモミ属は、秋田県・岩手県南部以南の本州・四国・対馬・九州（鹿児島まで）の、暖帯の中部から温帯の南部にわたって分布している。そのため、本遺跡の所在している青森県では、古墳築造当時には遺跡周辺にモミ属が存在していなかった可能性が高いが、部分的に植生があったことは否定できない。特に、平安時代の住居跡の柱材でモミ属の利用が確認されていることからも部分植生の可能性が考えられる。今後刀剣の鞘木の樹種同定研究が進み、樹種の選択性が見出すことができれば、本資料に関してはさらに在地製作品か、もしくは搬入品かについても議論できるものと考える。

以下に樹種同定の根拠となる記述を記載する

・モミ属　Abies firma Sieb. EtZucc　**マツ科**（1a ～ 1d）

木口面（1a）

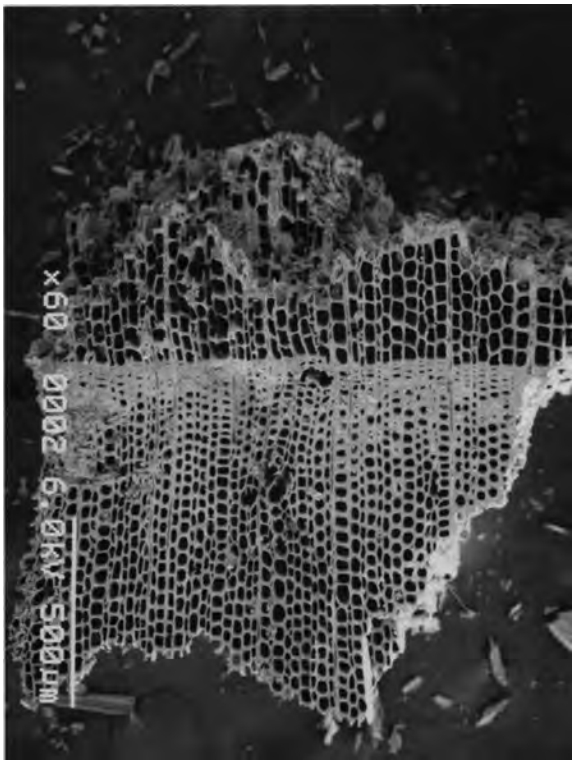
一つの年輪界を挟んで二年輪にわたる部分である。写真の中に見える樹脂道のようなものは、エピセリウム柔細胞がみられず細胞壁が薄壁であるため、樹脂道ではなく細胞の劣化によって出来た空隙である、ということがいえる。

板目面（1b）

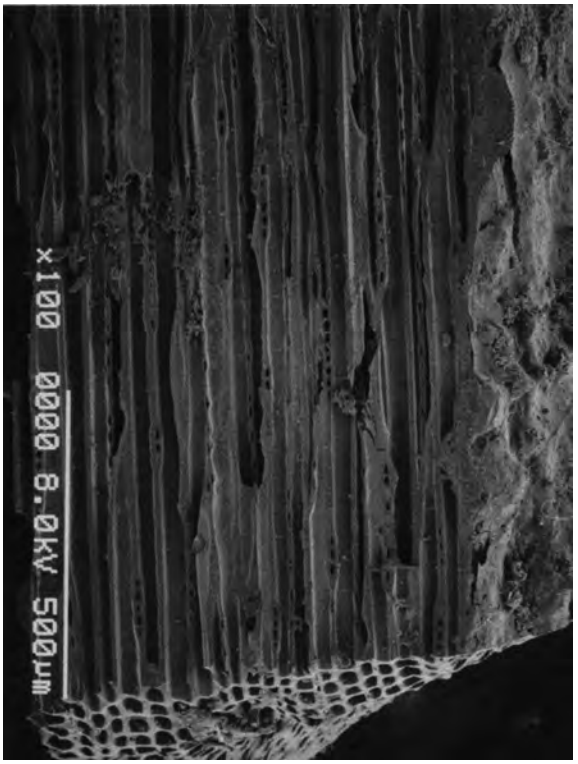
放射組織は普通単列であるが、ときたま部分的に 2 列になることもある。1 ～ 2 細胞高の極めて低い放射組織も見られるが、一般に細胞高は高く、30 細胞高を超える場合もある。本試料では、2 列の放射組織は見られなかった。

柾目面（1c・1d）

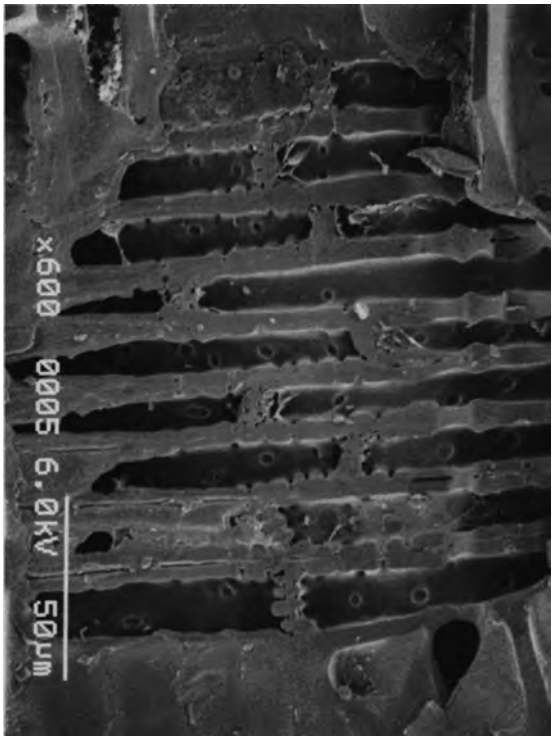
柾目面の放射組織である。放射柔細胞からなるが、上下縁辺部には不規則な形状の放射柔細胞が見られる。そしてじゅず状末端壁を有する。分野壁孔はスギ型で、1 分野で 1 ～ 3 個存在する。本試料でもじゅず状末端壁や不規則な形状の放射柔細胞が見られ、分野壁孔も各分野に 1 ～ 3 個、スギ型のものが見られた。



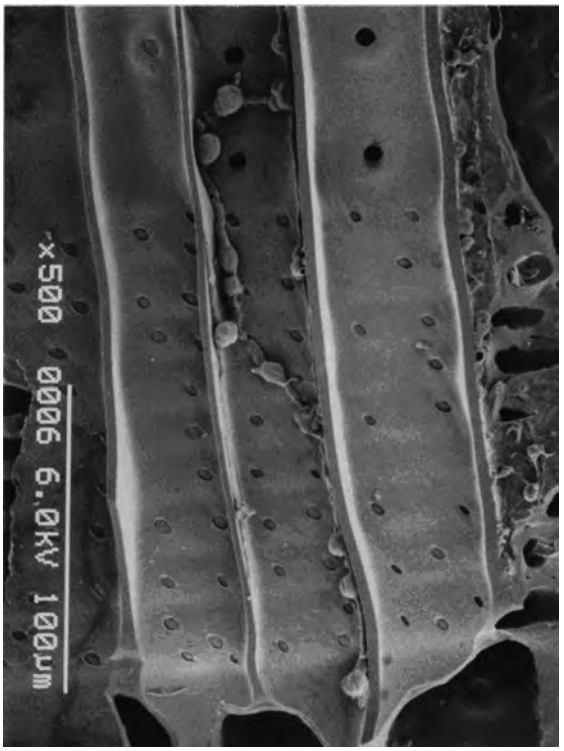
1a　モミ属小口　× 60



1b　モミ属板目　× 100



1c　モミ属柾目　× 600



1a　モミ属柾目　× 500

参考文献
島地謙・伊藤隆夫 1982『図説木材組織』地球社
平井信二 1996『木の大百科 - 解説編 - 』朝倉書店
白鳥文雄　2003『自然科学的分析一覧』研究紀要第 8 号　青森県埋蔵文化財センター

（資料 3）

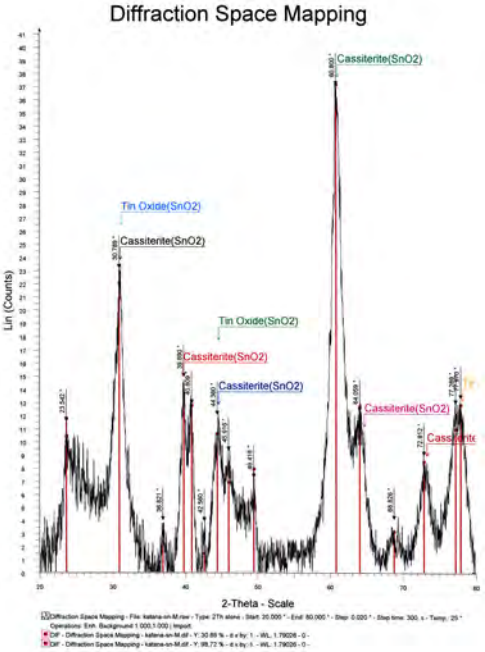
阿光坊古墳群出土金属製品にまつわるその他の材質分析

東北芸術工科大学
文化財保存修復研究センター
手代木美穂

【鞘留め鋲？の材質分析】

出土刀剣資料には白灰色の鋲のようなものが確認できた。その鋲の材質および状態を把握するために、X 線回折分析を用いて定性分析を行った。

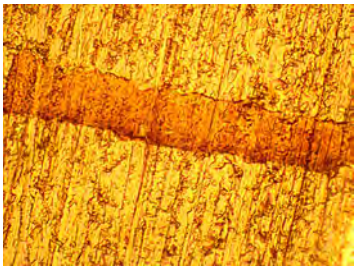
結果、鋲は錫を主成分としているが、酸化錫（SnO_2）の状態であった。これは安定化としても考えられるが、一部より白色化している部分もあり、状態が変化してより脆弱なものとなる可能性もある。今後の継続的な状態観察が必要である。



【鞘木上の漆塗膜の断面観察】

出土刀剣資料の処理中に資料から落下し、もとには戻せない漆膜に対して、断面観察を行った。漆塗膜は非常に脆弱化しており、部分的には薄くなり、穴が開いていた。できるだけ厚みの残る部分を顕微鏡下で選定し、エポキシ樹脂で包埋した後、ダイヤモンドカッター、紙やすり、バッファー研磨機で薄片断面を作り、金属顕微鏡を用いて観察した。

結果、2 層が確認でき、下面には下地と思われる黒色層、上面には生漆と推定される褐色層が見られた。これがもとの状態を示したものであるかについてはさらに状態のよい漆塗膜資料の断面観察が必要であるが、少なくとも 2 層塗りであったことは推定された。



写真：漆塗膜の断面（× 100）

青森県おいらせ町内遺跡出土須恵器の胎土分析

松本建速

1.　はじめに

青森県上北郡おいらせ町内の十三森および天神山遺跡から出土した須恵器の化学成分を測定したのでその結果を報告し、若干の考察をおこなう。十三森と天神山の両遺跡からは、末期古墳と呼ばれるタイプの古代の墓が多数検出されている。今回試料としたのは、それらの主体部や周溝から出土したものである。それぞれの胎土の産地を推定する基礎データを得ることを分析の第一の目的とした。異なる時期の土器間、また、同じ時期の土器でも精製と粗製とでは、胎土に違いがあるのかを見ることを分析の第二の目的とした。

2.　試　料

十三森遺跡出土の須恵器片５点、天神山遺跡出土の須恵器片６点を試料とした。それぞれの土器型式や出土遺構等の情報を表に掲載した。

3.　方　法

分析は誘導結合プラズマ発光分光分析法inductively coupled plasma atomic emission spectrometry（以下ではICP-AESと略す）によった。装置は筑波大学分析センター設置の日本ジャーレル・アッシュ社製ICAP-757Vである。

4.　分　析

（1）試料作成

土器の破損部から1cm四方ほどの破片を採取する。土器表面を電動やすりで研磨し、表面の付着物を取り除く。１cm × 0.5cmほどの土器破片を瑪瑙乳鉢で粉砕・すり潰す。すり潰された粉末を0.05 g秤量し、蓋付きのテフロン容器に入れる。それに、硝酸0.5ml、過塩素酸0.5ml、フッ化水素酸1.0mlを順に加える。蓋を閉め、容器ごとホットプレート上に置き、100℃で６時間以上熱する。次に、蓋を開け160℃に加熱し、蒸発乾固させる。乾固された試料に６規定蒸留塩酸1.0mlを加え、160℃で再び蒸発させる。しばらく放冷後、１規定硝酸を加え、100℃に加熱する。試料が完全に溶けていることを確かめた後、１規定硝酸を加え、1000倍に希釈し、50.00 gの溶液試料を得る。また、土器の破損断面が黒色であり、炭素を多量に含むと予想できるので、粉砕後、マッフル炉内を用いて500℃で２時間加熱し、炭素を除去したものを分析した。

粘土についても、瑪瑙乳鉢で粉砕後、土器と同様にマッフル炉で加熱したものを試料とした。酸で溶解する手順は上記と同様である。

（2）実験

得られた溶液試料をICP-AESで定量分析した。標準試料には、旧地質調査所発行のJA1、JB1a、JG1a、JGb1、JR1、JSd1を用いた。Ti・Al・Fe・Mn・Mg・Ca・Na・K・P・Ba・Cr・Cu・Li・Sc・Sr・V・Y・Zn・Zrの19元素を測定した。これらの元素は、メイスン ,B.（松井・一国訳1970）の地殻平均で存在度が高いとされる元素のうち、20ppm以上含まれる元素のほとんどを含むので、地質的背景を考えながら土器胎土成分の地域差を考察するのに利用できる。

5.　結果と考察

（1）結果

分析結果を表に掲載した。また、試料ごとの全元素濃度をグラフにした（図１）。

（2）十三森遺跡出土須恵器と天神山遺跡出土須恵器との比較

一般には、Ca・Na・K の３元素を用いれば、産地ごとの粘土の差を見ることができ、東北北部地域の第四紀層の粘土を用いた場合には、K/Na ＋ Ca と Ca/Na ＋ K の２つの指標が、産地ごとの成分の違いを良く反映することが知られている（松本 2003）。そこで、図２- １に今回の全試料のその２指標の値を示した。この指標では、横軸の値が右に寄るほど K の比率が高く、縦軸の値が上に向かうほど Ca の比率が高いことになる。図によると、十三森遺跡出土須恵器（白丸として表示）は右下に、天神山遺跡出土須恵器（黒丸として表示）の６～９は左上に集まる。天神山遺跡出土須恵器の 10・11 は、十三森遺跡出土須恵器の値に近い。さらに、天神山遺跡の６は、７～９とは少し離れた位置にある。以上のことから、天神山遺跡出土の須恵器は、図２- １によって、６（天神山①）、７～９（天神山②）、10･11（天神山③）の３つに大別できる。十三森遺跡は若干ばらついており、この指標では細別が難しい。

図２- ２は、横軸にフェルシック鉱物の主要元素を用いた指標である K/Na ＋ Ca、縦軸にマフィック鉱物の主要元素を用いた Ti/Al ＋ Fe ＋ Mg を取ったグラフである。天神山②の３試料は、この指標でも比較的まとまりが良く、同一産地の可能性が高い。それに対し、十三森遺跡の５試料はすべてばらついている。それらが、様々な産地の製品であることを反映しているのであろう。

また、図２- １で天神山①②とした試料６～９は、Fe 濃度が低い（2.7％以下）のが特徴である（図１- １）。

（3）産地推定

焼成窯が明白である試料の分析値が手元に少ないので、多くを語ることはできないが、最後に、可能な試料について産地を推定しておく。比較に用いるのは､外観から産地推定されている試料（推定陶邑、推定湖西）と窯出土試料（五所川原市犬走窯）の分析値である。すべて筆者が今回の試料と同様の方法で分析したものである（松本 2001、2002、2003）。ただし、松戸市立出遺跡出土の産地不明の横瓶の分析値も１点示してある。

図３- １・２により、十三森遺跡試料２は五所川原産と推定できる。しかしながら、今回分析した他の 10 点については、明確に産地を推定することはできない。ただし、産地不明の横瓶の分析値が十三森遺跡試料７～９に近い。各地の窯出土試料の分析を継続することにより、化学成分によって産地推定することが可能となるであろう。

６．　まとめ

(1)　十三森遺跡出土（９世紀）の須恵器と天神山遺跡の須恵器（７～８世紀）とでは、産地が全く異なる。

(2)　７～８世紀の天神山遺跡出土須恵器は、Fe 濃度が低いのが特徴である。

(3)　十三森遺跡出土の試料２は五所川原窯跡群のものと推定できる。

(4)　陶邑、湖西産と考えられる試料はなかった。

７．　おわりに

青森県上北郡おいらせ町内の十三森および天神山遺跡から出土した須恵器の産地推定を目的として 11 点の試料の胎土分析をおこなった。比較できる窯出土試料のデータを持たぬため、今回は、十三森遺跡の試料２の１点しか産地推定することができなかった。ただし、基礎データの蓄積はできたので、今後、７～９世紀の全国各地の須恵器のデータを収集し、比較することにより、産地推定がもう少し可能となるであろう。全国各地の窯出土試料の主要元素を測定することも、今後の課題である。

引用・参考文献

松本建速 2001「木戸前遺跡出土土器の成分分析」『木戸前遺跡』21-26 頁　松戸市遺跡調査会

2003a「秋山神宿遺跡出土土器の成分分析」『秋山神宿遺跡』58-63 頁　松戸市遺跡調査会

2003b「誘導結合プラズマ発光分光分析（ICP-AES）による東北北部古代土器の胎土分析」

『第四紀研究』42 巻 1 号　1-12 頁　日本第四紀学会
メイスン ,B.（松井義人・一国雅巳訳）1970『一般地球化学』 岩波書店〔Mason, B. 1966 Principles of Geochemistry.〕

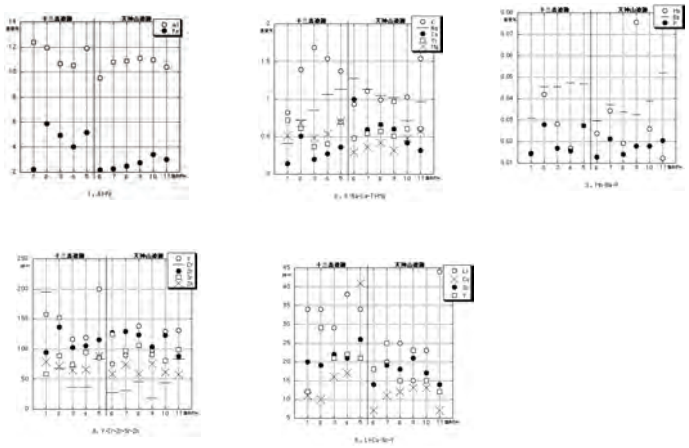


図１　試料別元素濃度

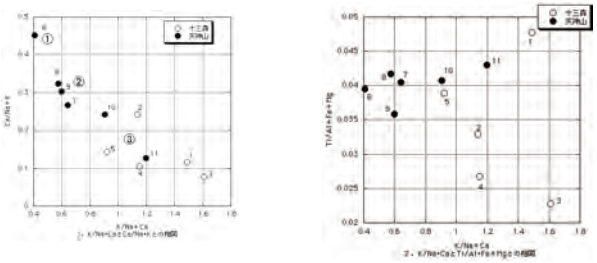


図２　下田遺跡出土須恵器の化学成分の特徴

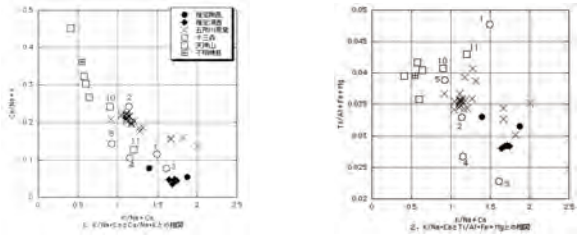


図３　各地の須恵器窯の化学成分との比較

表　分析値一覧

試料名	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Ba	Cr	Cu	Li	Sc	Sr	V	Y	Zn	Zr	出土遺構	推定時期	Ti/Al+Fe+Mg	K/Na+Ca	Ca/Na+K
No.01	0.7198	12.3652	2.2201	0.0146	0.5157	0.1419	0.4106	0.8235	0.0144	0.0309	195	11	34	20	59	158	12	79	94	J10号墳主体部	9 世紀後半～末	0.0477	1.4904	0.1150
No.02	0.6091	11.9398	5.8698	0.0421	0.6815	0.5087	0.7167	1.3965	0.0280	0.0456	68	10	34	19	89	152	29	71	137	J10号墳主体部	9 世紀後半～末	0.0329	1.1396	0.2407
No.03	0.3679	10.6676	4.9658	0.0283	0.4856	0.1983	0.8515	1.6891	0.0170	0.0458	37	16	29	22	74	116	21	65	103	J21号墳	9 世紀前半	0.0228	1.6090	0.0780
No.04	0.4042	10.5294	4.0298	0.0169	0.5315	0.2723	1.0623	1.5382	0.0156	0.0475	37	17	38	21	94	119	22	66	105	J23号墳溝	9 世紀前半	0.0268	1.1525	0.1047
No.05	0.6925	11.9098	5.1699	0.0274	0.7018	0.3563	1.1288	1.3686	0.0275	0.0469	83	41	34	26	86	200	21	89	115	J61号墳	不明	0.0389	0.9216	0.1427
No.06	0.4743	9.5437	2.1620	0.0238	0.2923	0.9973	1.2785	0.9309	0.0127	0.0297	27	7	18	14	125	75	18	59	127	S120E100～E140	不明	0.0395	0.4090	0.4514
No.07	0.5412	10.7905	2.2489	0.0344	0.3572	0.5948	1.1299	1.1044	0.0213	0.0371	31	11	20	19	97	90	25	74	129	T2号墳表採	7 世紀末～８世紀前半	0.0404	0.6404	0.2662
No.08	0.5745	10.8949	2.4745	0.0192	0.4187	0.6596	1.0508	0.9866	0.0140	0.0338	46	12	25	18	106	138	15	59	124	T2号墳周溝	7 世紀末～８世紀前半	0.0417	0.5768	0.3237
No.09	0.5069	11.1006	2.7281	0.0758	0.3140	0.6034	1.0215	0.9697	0.0179	0.0326	18	13	15	21	91	98	23	75	104	T2号墳主体部	7 世紀末～８世紀前半	0.0358	0.5968	0.3030
No.10	0.6039	10.9869	3.3837	0.0259	0.4763	0.4201	0.7139	1.0258	0.0180	0.0391	44	13	23	17	81	129	15	61	123	T4周溝	8 世紀前半	0.0407	0.9046	0.2415
No.11	0.6010	10.4190	2.9958	0.0123	0.5713	0.3178	0.9655	1.5383	0.0205	0.0521	83	7	44	14	99	131	12	58	88		9 世紀前半	0.0430	1.1987	0.1269

単位：Ti～Ba（重量%）・Cr～Zr（ppm）

第Ⅳ章　考察

第１節　出土遺物について

①出土遺物の特徴

遺物の出土位置及び出土状況には特徴がみられた。ひとつは主体部床面付近より出土するものである。これらは棺内に納められたものであり、末期古墳構築時に納められたものと考えられる。これを副葬品とする。もうひとつは、外表に供えられたもので、主体部内であるが、床面より数十ｃｍ浮いた状態で出土するものと、周溝から出土したものである。これらは棺の蓋の上、もしくは墳丘の上に置かれたものと、周溝に供えられたものと考えられ、供献品とする。これらは周溝掘り方底面ではなく、最下層上から出土するものが多い。T2 号墳出土長頸瓶や T10 号墳出土甕の出土状況から、主体部構築と大きな時間差が無いと捉えられる例が確認されている。一方では、末期古墳構築時期に限定されず、埋没までの時間幅や、周辺からの流れ込みを考慮する必要もある。

副葬品には装身具（玉類・釧・耳環）、鉄器（刀・鉄鏃・農工具）、土師器（椀・甕）がある。

供献品には土師器（坏・椀・高坏・甕）、須恵器（高台坏・長頸瓶・甕・壺・平瓶）、例外的に装身具（勾玉１点・琥珀１点）がある。供献品の主体は土師器・須恵器である。

②出土遺物の年代

a. 土師器の分類と年代

近年奥入瀬川流域も、中野平遺跡の調査やふくべ(3)遺跡の調査により、阿光坊古墳群併行期の資料が充実しつつある。周辺集落の現状を踏まえつつ、年代を考えていきたい。

土師器

非ロクロ坏（口径が器高の 1/2 以上のものを主とする）

坏Ａ：口縁部が外傾し、段が体部中位にあるもの。

坏Ｂ：口縁部が内湾し、体部内面下位に稜のあるもの。

坏Ｃ：口縁部が内湾し、体部内面中央に稜のあるもの。

坏Ｄ：椀と坏の中間的器形のもの。口縁部が外傾するもの１類と内湾する２類がある。

ロクロ坏

全て内面はミガキの後、黒色処理されている。

坏Ｅ：器高に対し口径が小さく、外面にミガキが施されるもの。

坏Ｆ：外面がロクロ調整だけのもの。

坏Ｇ：器高に対し口径が大きく、口唇部にミガキが施されるもの。

椀

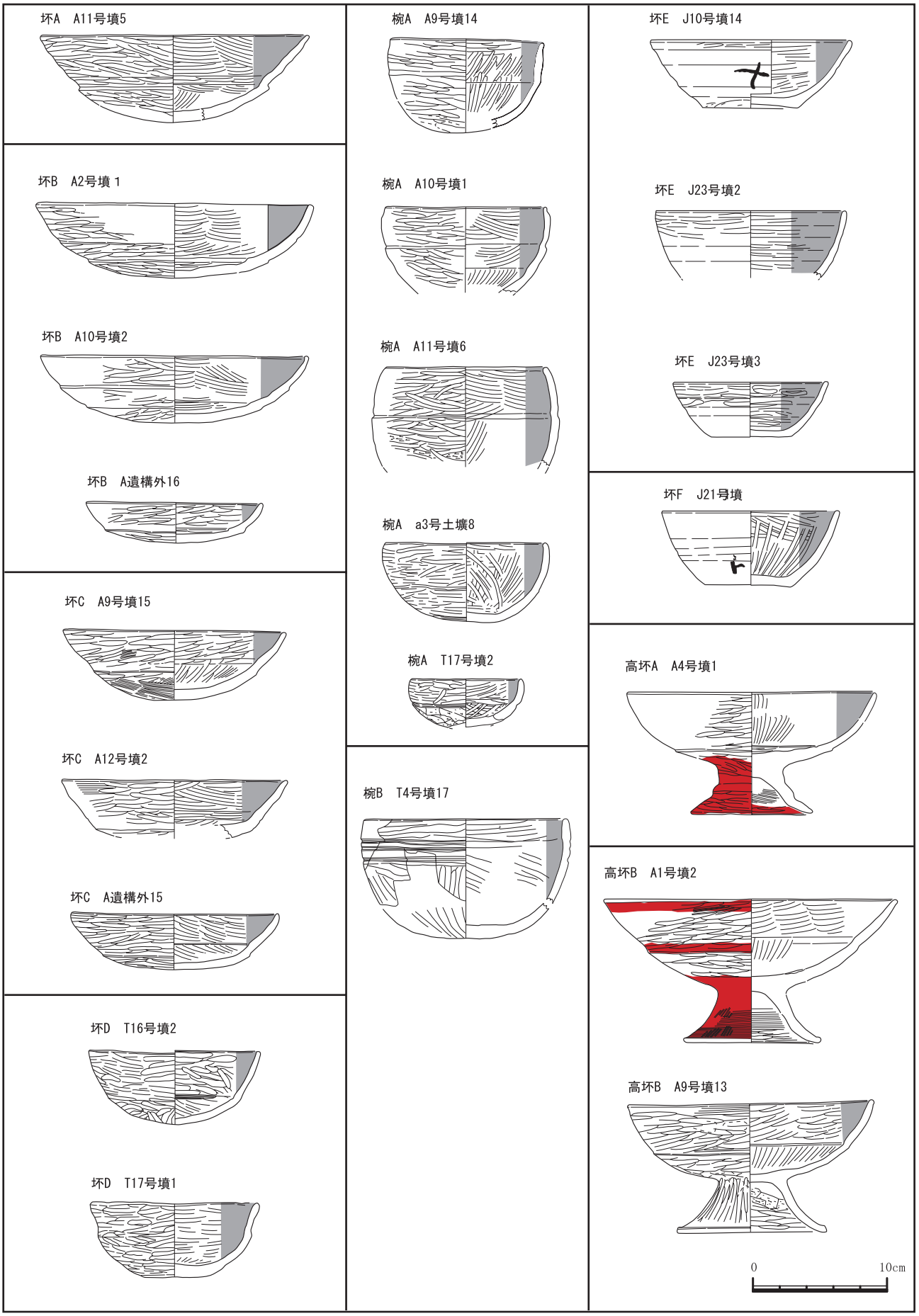
椀Ａ：体部中位に沈線が一条めぐるもの。

椀Ｂ：体部上位に沈線が三条めぐるもの。

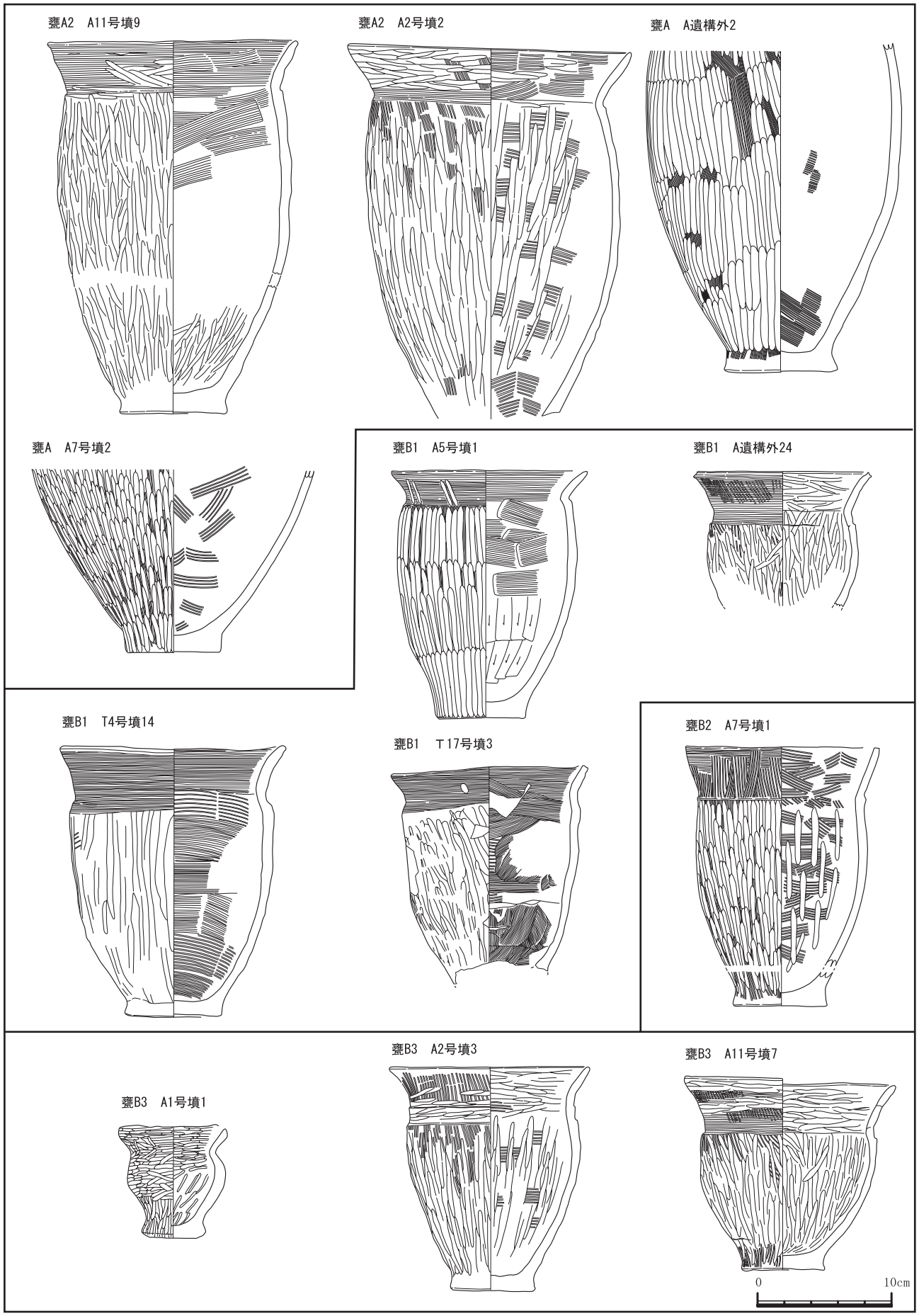
高坏

高坏Ａ：坏Ｃと同様体部内面中位に稜があるもの。

高坏Ｂ：坏Ｂと同様体部内面下位に稜があるもの。


坏A　A11号墳5
坏B　A2号墳１
坏B　A10号墳2
坏B　A遺構外16
坏C　A9号墳15
坏C　A12号墳2
坏C　A遺構外15
坏D　T16号墳2
坏D　T17号墳1
椀A　A9号墳14
椀A　A10号墳1
椀A　A11号墳6
椀A　a3号土壙8
椀A　T17号墳2
椀B　T4号墳17
坏E　J10号墳14
坏E　J23号墳2
坏E　J23号墳3
坏F　J21号墳
高坏A　A4号墳1
高坏B　A1号墳2
高坏B　A9号墳13
0
10cm

第 116 図　坏分類図


甕A2　A11号墳9
甕A2　A2号墳2
甕A　A遺構外2
甕A　A7号墳2
甕B1　A5号墳1
甕B1　A遺構外24
甕B1　T4号墳14
甕B1　T17号墳3
甕B2　A7号墳1
甕B3　A1号墳1
甕B3　A2号墳3
甕B3　A11号墳7
0
10cm

第 117 図　甕分類図

甕

甕Ａ：長胴の甕。器高 20cm 以上のもの。

甕Ｂ：長胴の小型甕。器高 20cm 以下のもの。口縁部の主な調整が１ナデ２ハケメ３ミガキに細分される。

甕Ｃ：球胴の甕。器高 20cm 以上のもの。

甕Ｄ：球胴の甕。器高 20cm 以下のもの。

坏Ａは A11 号墳出土の１点である。八戸市丹後谷地遺跡 55 号住居（藤田 1986）や根城東構地区 SI110 出土の坏（宇部・高島 1983）に類似する。奥入瀬川流域ではこの１点に限られる。宇部編年Ⅰ期の新段階とされ、７世紀前葉の年代が与えられている資料である（宇部 1989・2000）。

坏Ｂは周辺集落でも散見され、ふくべ(3)遺跡（工藤・小林ほか 2005）、中野平遺跡第７地点（小谷地・成田 2005）、立蛇(1)遺跡１号住居（小谷地ほか 2001）等で出土している。馬渕川流域では丹後平古墳群の坏Ｂ類（工藤ほか 1991）と共通するのをはじめ、田面木平(1)遺跡（村木他 1988）や湯浅屋新田遺跡（宇部 1984・1987）など、７世紀中葉を中心とする遺跡に類例を見ることができる。坏Ｃも外面と内面の稜が一致せず、縦方向へずれるものである。田面木平第 39 号住居跡で坏Ｂと供伴しており、これらは併行するとみられる。坏Ｄは八戸市酒見平遺跡Ⅱ群土器に分類される坏（大野・渡ほか 2001）に類例がみられる。酒見平遺跡Ⅱ群土器は７世紀後葉を中心とするとされる。坏 D2 は立蛇(1)遺跡９号住居跡出土坏と類似する。丸底の底部から体部中央に屈折点をもち、内折するのが特徴である。立蛇(1)遺跡９号住居跡は７世紀後半代と考えられ、本資料も同様の年代のものと推定される。

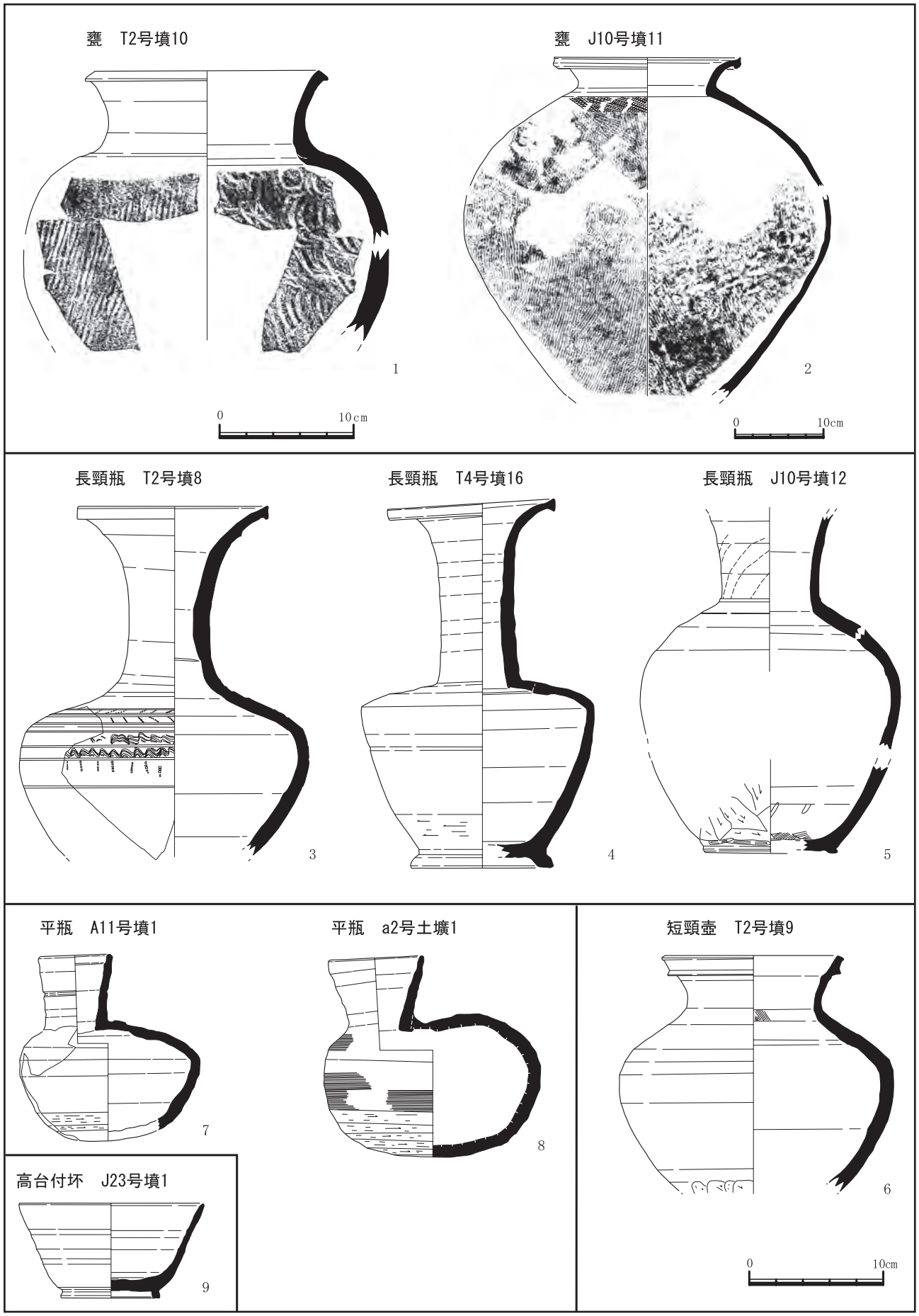
ロクロ使用の坏については、４点のみであり、うち全体の器形が推定できるものは３点である。外面に調整がみられるＥと、ロクロ調整のみのＦに分類される。中野平３群土器（奈良・三浦ほか 1991）の特徴である、底辺部再調整のある坏は J10 号墳出土の１点である。底径と口径の比（底径÷口径）は 0.47 から 0.5 と差が少ないが、高さと口径の比（高さ÷口径）はＥが 0.34 から 0.35、Ｆが 0.43 とＦの器高が高くなっている。Ｅは中野平３群土器やふくべ４群土器に類例がみられる。９世紀前半に位置づけられ、これらに併行する製作年代を想定する。Ｆについては中野平４群土器の内容やふくべ５群土器と類似し、それらの想定年代である９世紀中葉から後半のものと推定する。

椀Ａは、立蛇(1)遺跡１号･9 号住居跡、ふくべ(3)遺跡 17 号住居跡、中野平遺跡第７地点１号住居跡など、宇部編年Ⅱ期併行の住居跡から出土している。椀Ｂは、溝が３条巡るが、段が３段みられるものに田面木平(1)遺跡 42 号住居出土のものがある。また二条の溝が巡る例は、宇部Ⅱ群土器と共伴して出土した中野平遺跡３号住居出土遺物（小谷地・成田 1996）にみられ、椀Ａ同様７世紀中葉から後葉の年代が想定される。

高坏は３点出土している。内面の稜の位置によりＡとＢに二分したが、坏Ｂ･Ｃと併行するものと考えられる。類例としては田面木平(1)遺跡 40 号住居のものが挙げられ、これらから７世紀中葉から後葉をその年代と推定する。

甕Ａは、胴部上半に最大径をもち、底部が残るものは台形に突き出る形態で、外面はミガキ調整であり、一部ハケメの残るものも見られる。A2 は周辺集落では、ふくべ(3)遺跡 29 号住居出土のものに類似する。甕Ｂは最も多い８点であり、B1 が４点、B2 が１点、B3 が３点である。B1 は、中野平遺跡 17 地点１号住居、ふくべ(3)遺跡 10・26 号住居跡などと類似する。B3 は中野平遺跡 17 地点１号住居にみられる。何れも宇部編年Ⅱ群併行とみられるが、B1 の中には口縁部と体部の段が明瞭でない T16・17 号墳出土のものが含まれ、やや後出的な様相と考えられる。煤がつき、実際に煮炊きに使用されたものも含まれる。

甕Ｃは、周辺集落からも多く出土しているものの、口縁部形態が類似するものは少ない。Ｄのうち遺構外出土のものは立蛇(1)遺跡１号住居出土遺物と類似する。時期としては、Ｃに類似するものが、田面木平(1)遺跡 49 号住居より出土しているなど、７世紀中葉から後半と推定する。



第 118 図　須恵器集成図

b. 須恵器の種類と年代

器種に甕・長頸瓶・短頸壺・平瓶・高台付坏がある。個体数が少ないため、細分は行なわず、器種ごとに見てみる。

甕

出土遺物の主体を占めるが、胴部片が多く、復元実測が可能なものは T2 号墳出土の 1 点と J10 号墳出土の 1 点のみである。

1 は、胎土に白色粒子と長石を含み、灰黒色を呈す。後述の共伴した長頸瓶、短頸壺と類似し、胎土分析の結果もこの 3 点は近いものと考えていいようである。2 は、胎土分析からは五所川原産以外との判定であり、現在までのところ年代・産地の知見は得られていない。今後の課題としたい。

長頸瓶

T2 号墳、T4 号墳、J10 号墳から出土している。このうち形態及び胎土分析の判定から、5 は五所川原産であるとされる。

3 は丸みを帯びた肩部と、口縁部下に段を形成する点が特徴である。湖西製品ではないとの胎土分析結果であったが、これらは湖西編年Ⅲ期の前半の特徴と似る（後藤 1989）。また、胴部上半に文様帯を持つ点も古相とみられる。これらから、概ね後藤編年のⅢ期前半に併行するものと推定する。Ⅲ期前半は 7 世紀第 3 四半期とされており、これを製作年代と推定する。

4 は肩部がはり、口縁部下の段がなく、また胴部文様帯もなく 3 に比較し後出的である。口唇部端は上下に引かれる。これらの特徴は、湖西編年のⅣ期に類例が見出される。Ⅳ期の年代は 8 世紀第 1 四半期から第 2 四半期前半とされる。

6 は、先のとおり胎土分析から五所川原産とされた。肩が丸く、頸部と体部の境に弱いリング状突帯がめぐる。また底部に菊花状のケズリが施されている。口唇部が残存しないが、口頸部は若干外傾しながら立ち上がる。こうした特徴は五所川原窯跡前半期の高野 1 号窯、持子沢 7 号窯出土の壺Ⅰ類と類似する（藤原 2003）。五所川原窯跡群は 9 世紀後葉から 10 世紀後葉までの操業が想定され、先の 2 窯はその初源期に近いものである。よって、本資料の製作年代は 9 世紀後葉を中心とした時期と推定される。

短頸壺

6 の肩部は 3 同様丸みを帯びる。頸部は外傾しながら立ち上がる。口唇部が四角で端部が外につまみ出されている。頸部上位に隆帯を有する。特に隆帯は 8 世紀以降は見られないようであり、こうした点は、やはり湖西編年Ⅲ期前半の特徴とみられ、7 世紀第 3 四半期をその製作年代と推定する。

平瓶

文献 C で詳しく考察されている。7 は胎土分析によって湖西産と考えられている。

7 は口径 5.2cm、頸部径 4.6cm、体部最大径 13.5cm、器高 13.9cm である。口縁部はやや垂直気味に立ち上がり、頸部に一条の沈線が巡る。体部上面は扁平であるが稜はもたない。また体部上半（天井部）に閉塞粘土蓋の痕跡（径 3cm 程）がみられる。体部下半は回転ヘラケズリ調整を施している。色調は灰白色である。8 は、口径 7.0cm、頸部径 5.0cm、体部最大径 16.1cm、器高 15.1cm である。口縁部は外傾して広がり、体部は楕円形を呈し円みを帯びている。体部下半は回転ヘラケズリ調整、体部上半はカキ目調整を施している。色調は灰黄色である。体部上半を中心に自然釉がみられる。

7 は陶邑編年（田辺 1966）による TK217 型式の体部上半にボタン状の貼り付けのみられるものと類似している。一方、胎土分析の結果、湖西産と判定されており、その湖西窯跡群出土の平瓶と比較すると、Ⅱ期第 5・6 小期が 7 世紀第 1 四半期～第 2 四半期頃、Ⅲ期第 1 小期が 7 世紀第 2 四半期後半～第 3 四半期前半頃で TK217 型式に該当すると設定している。従って 7 はおおまかに 7 世紀前半頃と考

えられる。
8は体部に丸みを持ち、11号墳出土のものより古い様相を呈する。先に述べた湖西編年、Ⅱ期第4小期に類似するものがある。Ⅱ期第4小期は6世紀末～7世紀初頃と設定されており、8もこれに近いものと考えられる。

高台付坏
底部はヘラ切り無調整のうえに高台を貼り付けている。高台は若干開き、やや角ばり、外側のみが設置する形態である。体部は直線的に立ち上がり、上半で若干外傾する。秋田県富ヶ沢B窯跡SJ101・102灰原出土土器に法量・器形の類似するものがみられる（桜田・柴田他1992）。同窯跡は9世紀前半から中葉のものとされている。それらに併行するものと推定する。

c. 金属製品の種類と年代

遺構から直刀･蕨手刀･刀子･農工具･馬具･装飾品が出土している。また表採資料として蕨手刀がある。器種ごとに見ていきたい。

刀剣類
柄の形態から蕨手刀と円頭大刀、方頭系に分けられる。近年、蕨手刀の集成研究（八木ほか2003）や、柄構造からの大刀編年（福島2005）、北海道における擦文文化期の大刀研究（森2005）など、当古墳群と対比可能な研究が活発に行なわれている。それらの成果からは、蕨手刀以外は同様の柄構造の変遷をたどると考えられるため、柄構造と拵を重視し分類する。
X線写真の観察から、柄の構造は基本的に全て両関であり、茎は3がやや棟側に寄るが、他はほぼ中央に位置する。柄木の残るものの観察では、多くの研究者が指摘するように茎を両側から挟み、鎺で約す形態となっている。直刀系の柄構造は基本的に同一形態とみられ、両関で鎺を装着する大刀の継続年代に収まるとみられる。
次に拵えであるが、これについては、八木の分類（八木1996・2003）を元に進めてみたい。氏は足金具の変遷をメルクマールに、他の拵えを含めた変遷を想定している。
足金具の確認できるものは2・3・8・9である。2・3は鉄製単脚で丸鞘と想定される。8は鉄製台状双脚、9は鉄製単脚で平鞘である。単脚から双脚へ、丸鞘から平鞘への変遷が想定され、足金具のみでは2・3→9→8という変遷が想定される。
次いで､鍔である。1・2・4・5・6・7・8・9に見られる。板鍔と喰出鍔に分けられ､喰出鍔は小判型(2)と角切三角形(7)、角切札形(8)に分けられる。板鍔は鞘の扁平化に伴い、同様の変遷を辿るとされる。1・4・6・9に見られる板鍔の扁平率については、鍔の残存が完全ではない個体も含まれるが、1・4が大きな差は無く、より円に近く、6・9は扁平になるという傾向が見られた。
蕨手刀の分類基準は、さらに反りなども加味されるため、5・7・8について検討してみたい。5は柄頭の付根が深く湾入するもので柄頭E1、7は柄頭C1、8は柄頭F1にそれぞれ分類される。これらは8世紀前葉を中心とするとされる。このうち､絞り･柄反りのやや大きい5は､佩用金具が明確ではないが、これらの中ではより新しいものと推定する。
以上刀剣類では、柄構造では明確な差異はないが、丸鞘となる1・2・4から平鞘の傾向が強い6・8・9への変遷が想定され、さらに円頭大刀である2が最も古く、6世紀後半台から7世紀に製作されたと推定する。6・9がそれに次ぐ7世紀後半代を中心とし、次に7の蕨手刀が8世紀前葉、8は、蕨手刀自体は8世紀前葉を中心と考えられたが、佩用金具から8世紀後半代まで使用されたものと推定する。

鉄鏃

鏃身部の明らかな35点を集成した。A有茎鏃B無茎鏃、さらにAはⅠ細根、Ⅱ広根に大別される。鏃の形態はa三角形、b長三角形、c片刃形、dその他とする。関については14が台関である以外は不明である。

1から23までを、山内敏行氏は一括して3群に分類し、7世紀後葉から8世紀前半の年代をあてている（内山2003）。関部に注目した分類で棘関から台関や四面段関が出現する段階であるという。阿光坊古墳群出土遺物のなかで棘関は確認されておらず、関の明らかな14は四面段関に分類されている。また、X線の観察によると、24も四面段関である。

24から32についても、上記の遺物の特徴を持つため、同じ段階の遺物とみられる。

33から36は、共伴遺物から、他のものより後出のものと推定される。35は紫波城SI389竪穴式住居例や、やや本例が腸抉が深いが、滝沢村大釜館遺跡3号円形周溝、88号土坑例に類似する。これらは概ね9世紀前半代の年代が与えられており、本資料もそれらの年代を中心とすると想定する。

馬具

轡と鉸具がある。年代を推定するうえで轡についてみてみる。

轡は3点出土している。1は破損が激しく、全体的な形態は不明であるが、破片から鉸具造であった可能性が考えられる。引手はねじられていない。2は円環に方形の立聞をつけたものである。引手は捩られ引手壺は「く」の字状に曲がっている。本資料は大年寺横穴群第4号横穴の轡に類似している（菊地他1990）。岡安光彦氏はこれらを「回字形立聞造り環状鏡板付轡」とし、その年代はTK217型式期の前半と考えている。2もそれに近い年代を製作年代と推定する。

3は鏡板が小型化し、引手が二条線となる。鉸具造りとみられる。鉸具造りの轡は立聞部分の規格性が強いとの指摘があり（岡安2003）、例示されている房の沢古墳群RT10号墳の立聞幅とほぼ一致する。8世紀以降のものと考えられている。

農工具

鉄斧4点、鋤・鍬先1点、鎌1点が出土している。鋤・鍬先以外は主体部から出土している。全て柄との装着部分が袋状を呈する有袋鉄斧である。末期古墳では北海道柏木東9号墳（後藤・曽根原1934）、岩手県五条丸古墳群51号墳（伊東・板橋1978）、宮城県和泉沢古墳15号墳（佐々木1972）で出土している。大きさの違いは伐採や削りなど、用途の違いによるものと考えられる。

鎌は北海道柏木東7号墳、五条丸52号墳、長沼9号墳（草間1964）、房の沢RT22号墳、RT26号墳（大道・佐藤ほか1998）で出土している。5と五条丸52号墳例は直刃に近く、柏木東・房の沢は曲刃度が強い。

鋤・鍬先は五条丸51号墳、房の沢RT14号墳の出土が知られるほか、これら農具は、北海道柏木川1遺跡77土壙や島松沢3遺跡3号土壙などの土壙墓からも見つかり（上屋1998）、関連が注目される。

工具として鉄鉇がある。五条丸52号墳、柏木東4号土壙で出土している。

釧・環状製品

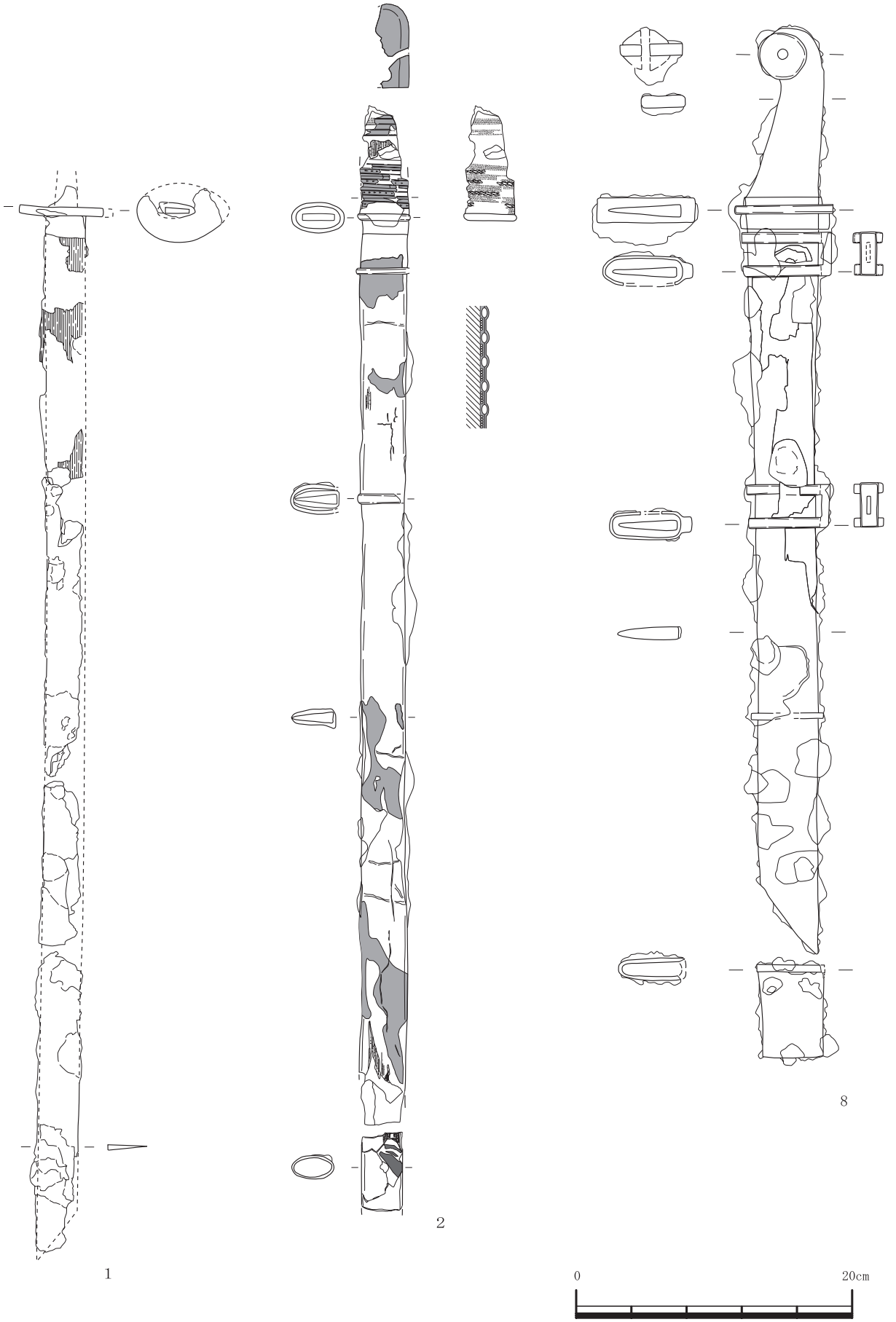
鉄製の釧2点と、錫製の釧2点、耳環の可能性がある環状錫製品3点、銅製の耳環1点、銅製の環状製品1点がある。

このうち2には布片が付着し、分析の結果平絹であるという（第Ⅲ章参照）。

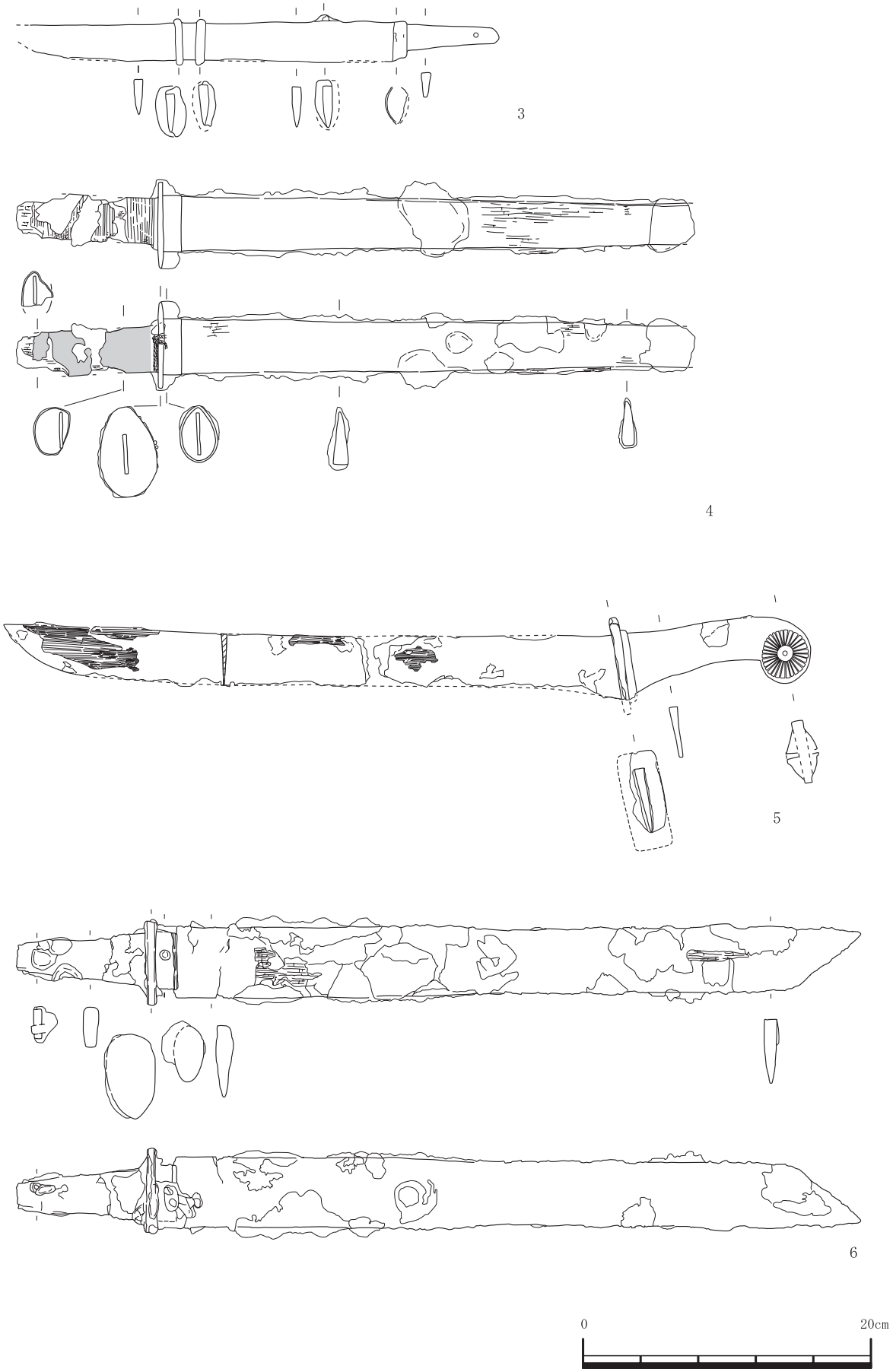
錫製品は、沿海州から北方ルートで伝わったと意見がある（小嶋1996）。

d. 玉類について

勾玉・管玉・切子玉・ガラス玉・琥珀玉・土玉がある。主体部からの出土が98%を占める。勾玉は遺構外出土遺物5点を含め25点出土し、瑪瑙製が21点、翡翠製3点、碧玉製1点である。管玉は遺



第 119 図　刀剣類集成図 1

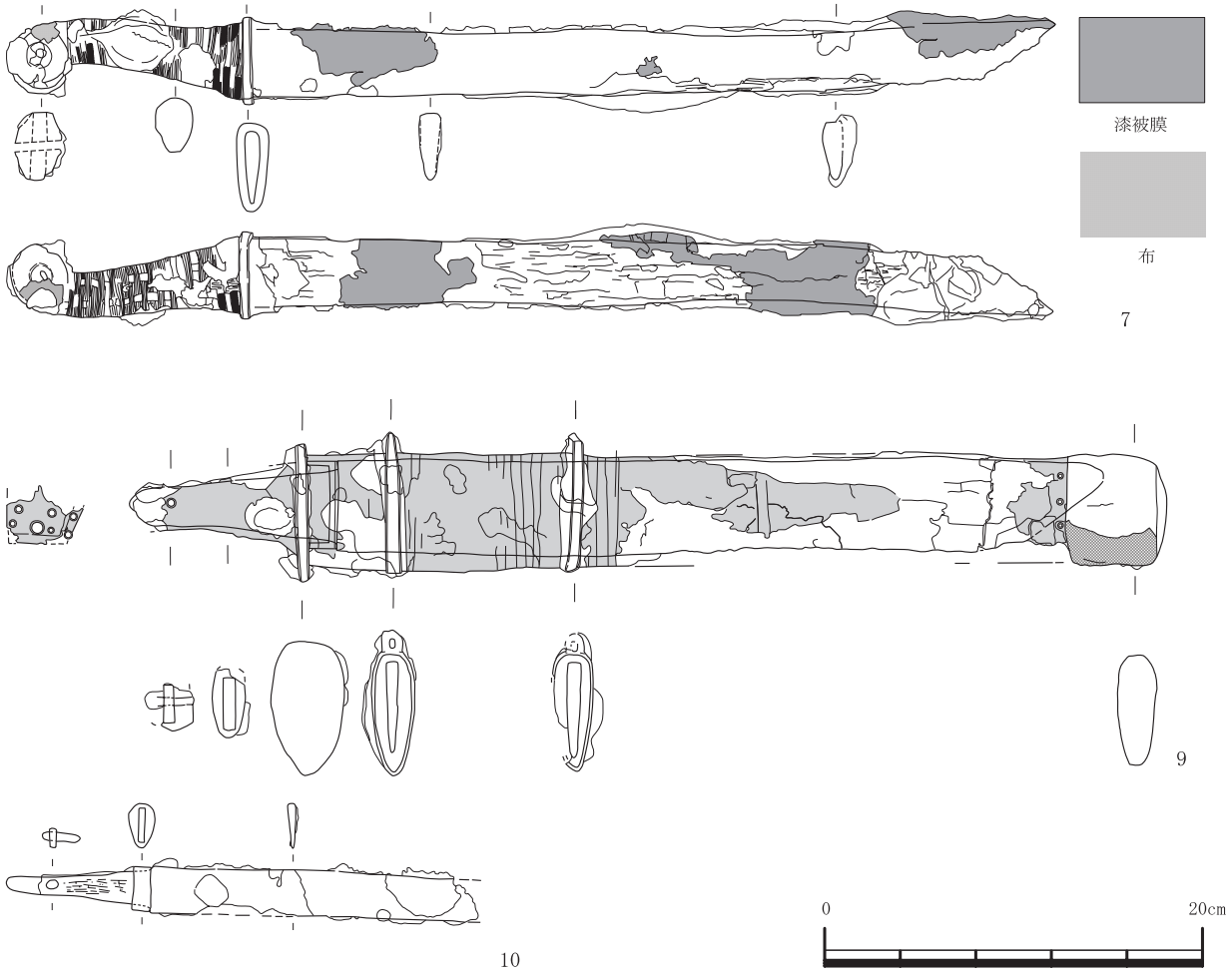


第 120 図　刀剣類集成図 2

構内より 2 点出土、遺構外より 1 点出土し、材質は碧玉製である。片側穿孔 2 点、両側穿孔が 1 点である。切子玉は 2 点出土している。琥珀玉は 6 点出土している。形状の分かるもの 4 点のうち 3 点は円形であり、1 点は勾玉であった可能性がある。ガラス玉は 404 点あり、全て主体部内よりの出土である。ガラスを砕き、再び鋳型で製作されたものが 80% 以上を占める。T2 号墳のガラス玉について、CR 法・AR 法・蛍光 X 線による分析が行なわれている。[註1] 粉砕鋳型によって製作されたものが分析した資料中 148 点、引き伸ばしによるものが 22 点であり、2 個のカリガラス製品が含まれていた。関東・南東北出土のガラス玉組成に極めて近く、これらが北東北にもたらされたものとされ、末期古墳の被葬者像に迫る成果が上がっている。

③末期古墳の時期

以上から、末期古墳の造営年代を考える上では、土師器・須恵器・刀剣類・轡が有効であると考えられる。出土遺物は主体部内（副葬品）、主体部上・周溝（供献品）に分けられ、それぞれ意味が異なるものとみられるが、供献品は後世のものや周辺の供献品等が混入する可能性も否定しきれない。異なる時期と推定されるものもみられるが、年代観の開きは今後の展開を待つこととし、遺物の組み合わせから以下の 6 期に分けた。



第 121 図　刀剣類集成図 3

Ⅰ期　土師器坏Ａ類が出土したA11号墳と、須恵器平瓶出土のa2号土壙。7世紀前葉。

Ⅱ期　土師器坏Ｂ・Ｃ・Ｄ、椀Ａが出土し、刀剣類では鞘等の断面の扁平化が進まない段階。7世紀中・後半。阿光坊古墳群の主体を占める。A1・2・4・5・6・7・8・9・10・12号墳、T1・2・16・17号墳。

Ⅲ期　須恵器長頸瓶の年代観から8世紀前半代とみられるT4号墳、t1号土壙。

Ⅳ期　佩用金具から8世紀後半代と考えられる蕨手刀が出土したT5号墳。

Ⅴ期　坏Ｅ類とＦ類を出土したJ21・23号墳。9世紀前半代中心。坏Ｅ類がＦ類に先行するとみられることから、J23号墳が先行する可能性がある。

Ⅵ期　五所川原産と考えられる長頸瓶を出土したJ10号墳。長頸瓶の年代観及び、周溝に堆積したTo-a・B-Tm火山灰から、9世紀末葉を中心とする。供献品の中には、これに先行するとみられるものが含まれるが、周辺からの流れ込みの可能性も考えれられる事と、長頸瓶の出土状況から、J10号墳に伴うと判断されるためこの時期とした。

各期の出土遺物は第127図から第130図に示した。

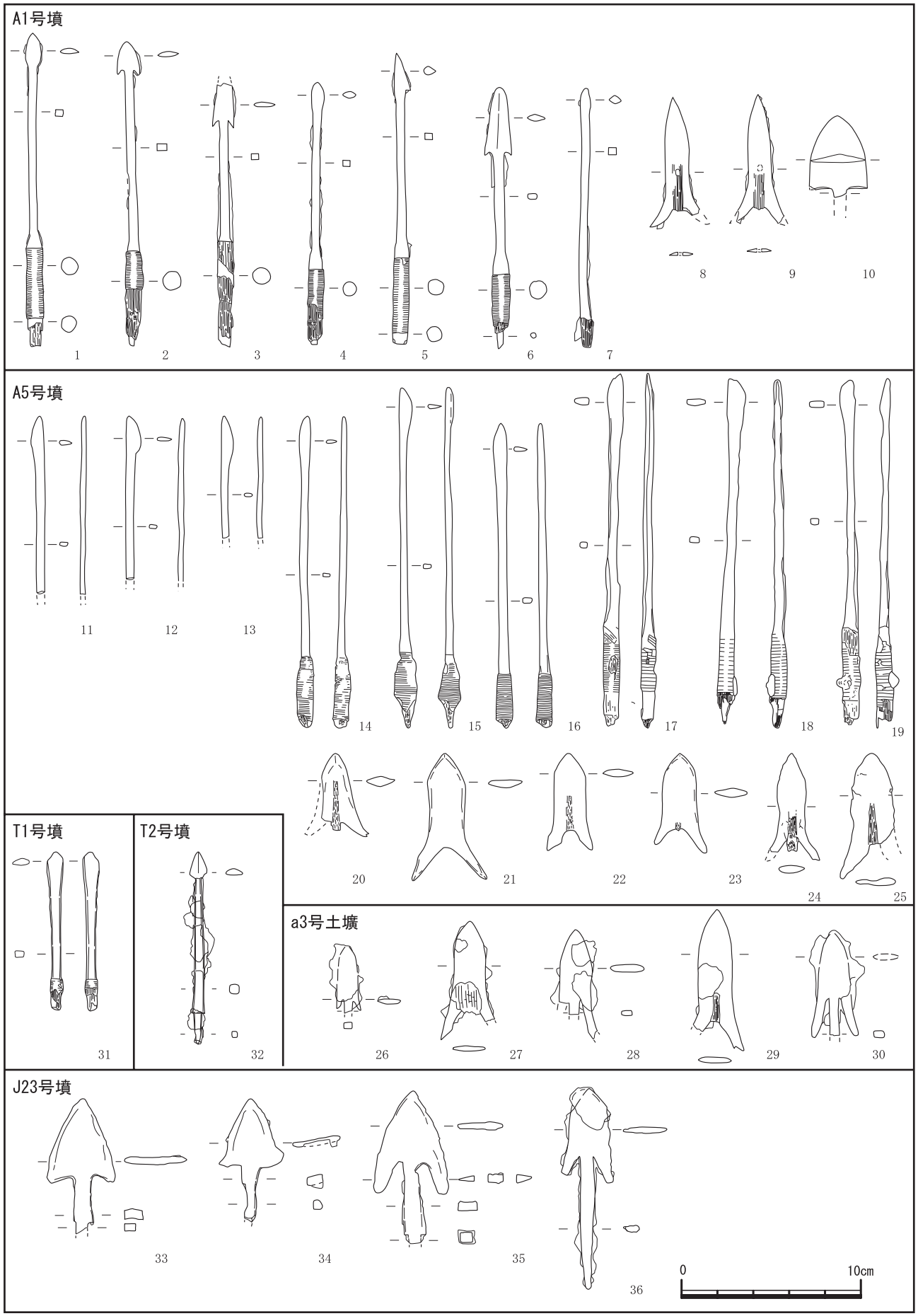
註１　八戸市博物館企画講演会「東北北部の末期古墳について～丹後平古墳群の出土品から」講演資料

古墳	装身具								鉄器														土師器			須恵器						その他			時期
	勾玉	切子玉	管玉	丸玉・小玉			釧		耳環	環状鍚製品	直刀	蕨手刀	小刀	刀子	鉄鏃	轡	鉸具	鎌	鉄斧	鋤・鍬先	鉋	鑿子	釘	坏	高坏	甕	高台坏	長頸瓶	甕	壺	平瓶	砥石	青銅製品	耳皿	
				ガラス	琥珀	粘土	鉄製	鍚製																												
A1																									(1)								(1)			Ⅱ
A2															13									(1)		1(1)										Ⅱ
A3	7	1	1	22	1																															Ⅱ～Ⅲ
A4														1											(1)											Ⅱ～Ⅲ
A5														1	18			1																		Ⅱ
A6				12	(1)																					(1)										Ⅱ
A7																		1	2							(1)										Ⅱ
A8													1						(1)																	Ⅱ
A9a										2						(1)								(2)	(1)											Ⅱ
A9b								1																												Ⅱ
A10																(1)								(2)												Ⅱ
A11											1			1	2									(2)		(3)					(1)					Ⅰ
A12										1														(1)												Ⅱ～Ⅲ
A13																										(1)										—
A14									1																											—
a2																															(1)					Ⅰ
a3					1						1				7									1												Ⅱ
a7																			1																	—
T1											1				1		(1)																			Ⅱ
T2	3		144	1			1					1		1								1						(1)	(1)							Ⅱ
T3	5	1	76					1						1																						—
T4	4(1)		150	2		3	1			1				1	(1)									(2)			(1)									Ⅲ
T5												(1)																								Ⅳ
T16																								(1)												Ⅳ
T17																(1)								(2)		(1)										Ⅳ
T24																				(1)																—
T26												(1)														(1)										—
t1											1																									Ⅲ
J10																							3(1)	(2)				(1)	(1)				(1)			Ⅵ
J21																						1		(1)												Ⅴ
J23	19(1)	2	2	404	5(1)	3		2	1	4	5	1(1)	2	6	41(5)	(3)	(1)	2	3(1)	(1)	(1)	1	3(1)		(3)	1(16)	(1)	(3)	(5)	(1)	(2)	1	1(1)	(1)		Ⅴ

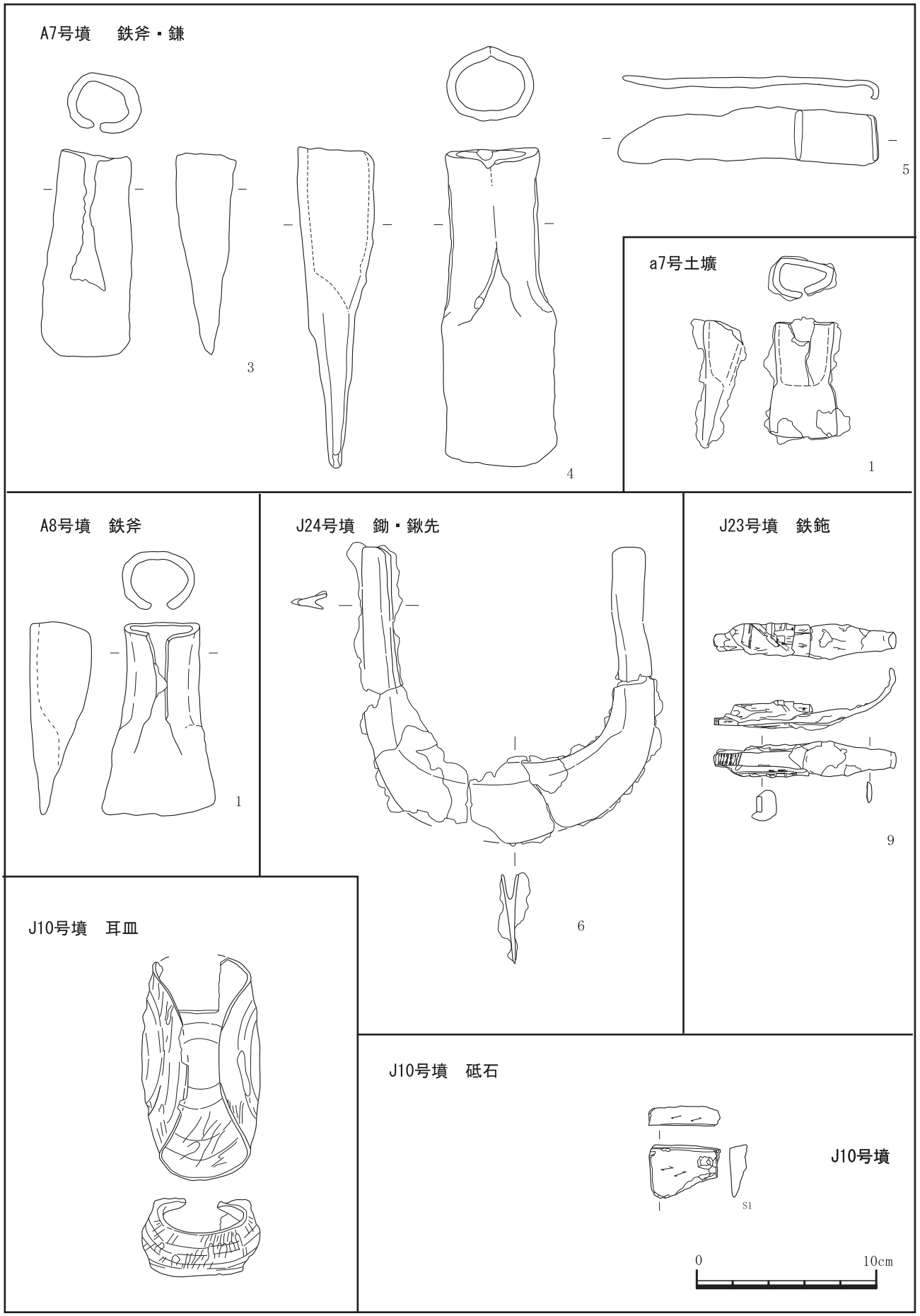
古墳	主体部分類	周溝分類
A1	Ⅱb	A
A2	Ⅱc	A
A3	—	B
A4	Ⅱb	A
A5	Ⅰa	A
A6	Ⅰa	A
A7	Ⅱc	A
A8	Ⅱb	A
A9a	Ⅰc	A
A9b	Ⅰc	—
A10	—	—
A11	Ⅰa	A
A12	Ⅰa	B
A13	Ⅱc	A
A14	Ⅱb	?
a2	Ⅰc	—
a3	Ⅱa	—
a7	Ⅱc	—
T1	Ⅰa	A
T2	Ⅰa	A
T3	Ⅱb	A
T4	Ⅱa	A
T5	Ⅱb	A
T16	—	—
T17	—	—
T24	—	—
T26	—	—
t1	Ⅱb	—
J10	Ⅱd	B
J21	Ⅱc	B
J23	—	B

※出土遺物のあるもののみ掲載
※整数は副葬品　()　内は供献品

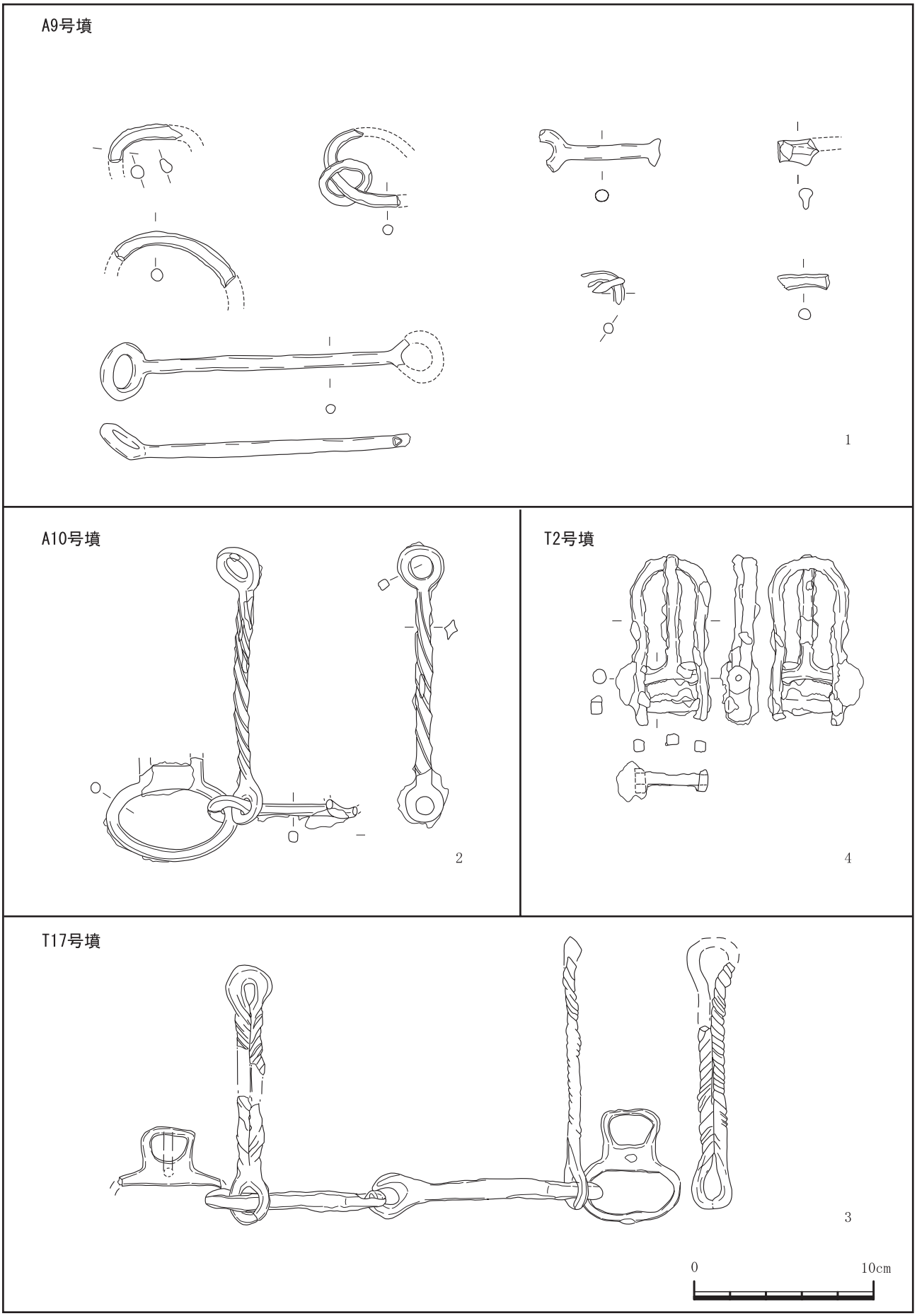
第４表　出土遺物一覧


A1号墳
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
A5号墳
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
T1号墳
31
T2号墳
32
a3号土壙
26
27
28
29
30
J23号墳
33
34
35
36
0
10cm

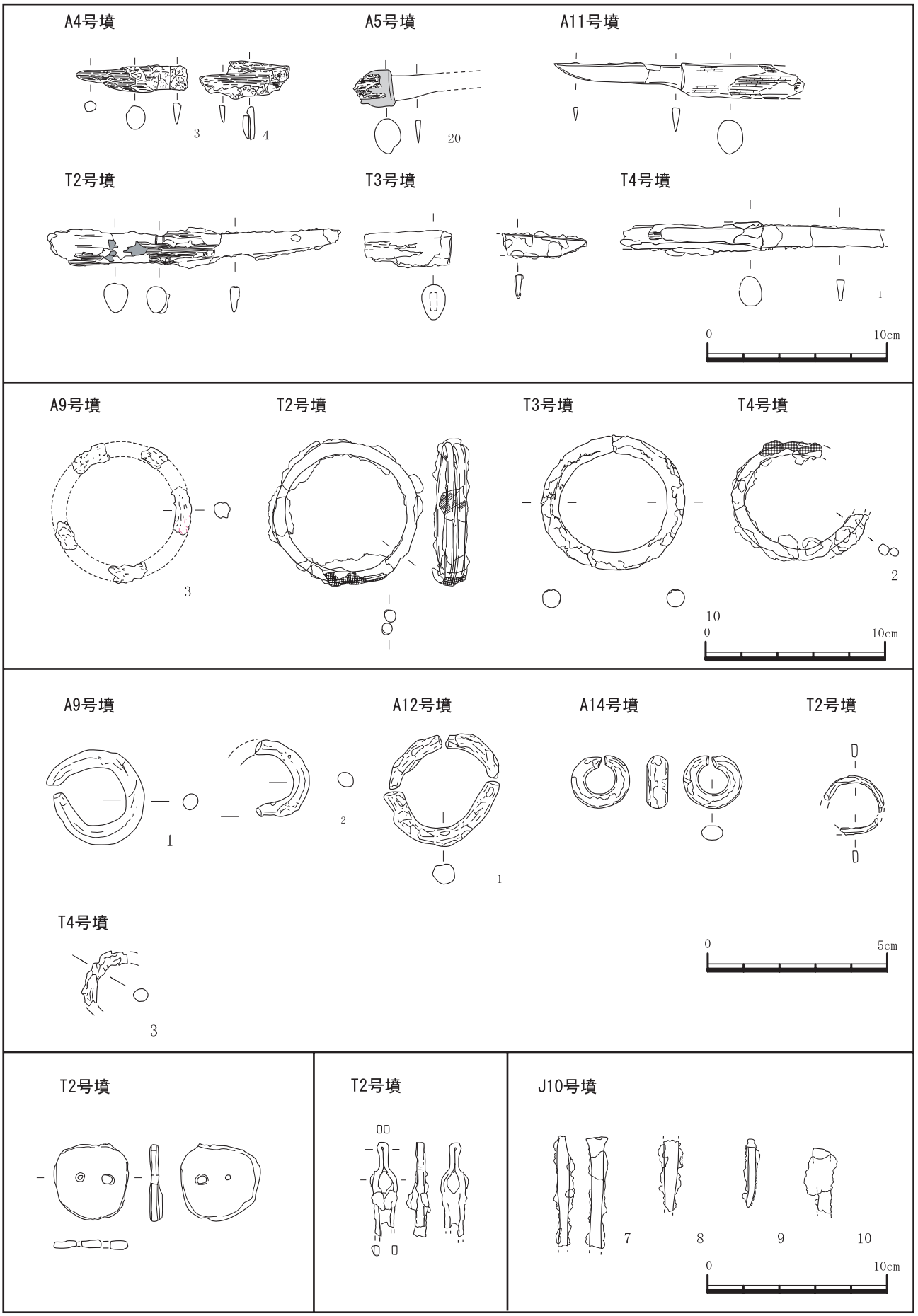
第 122 図　鉄鏃集成図



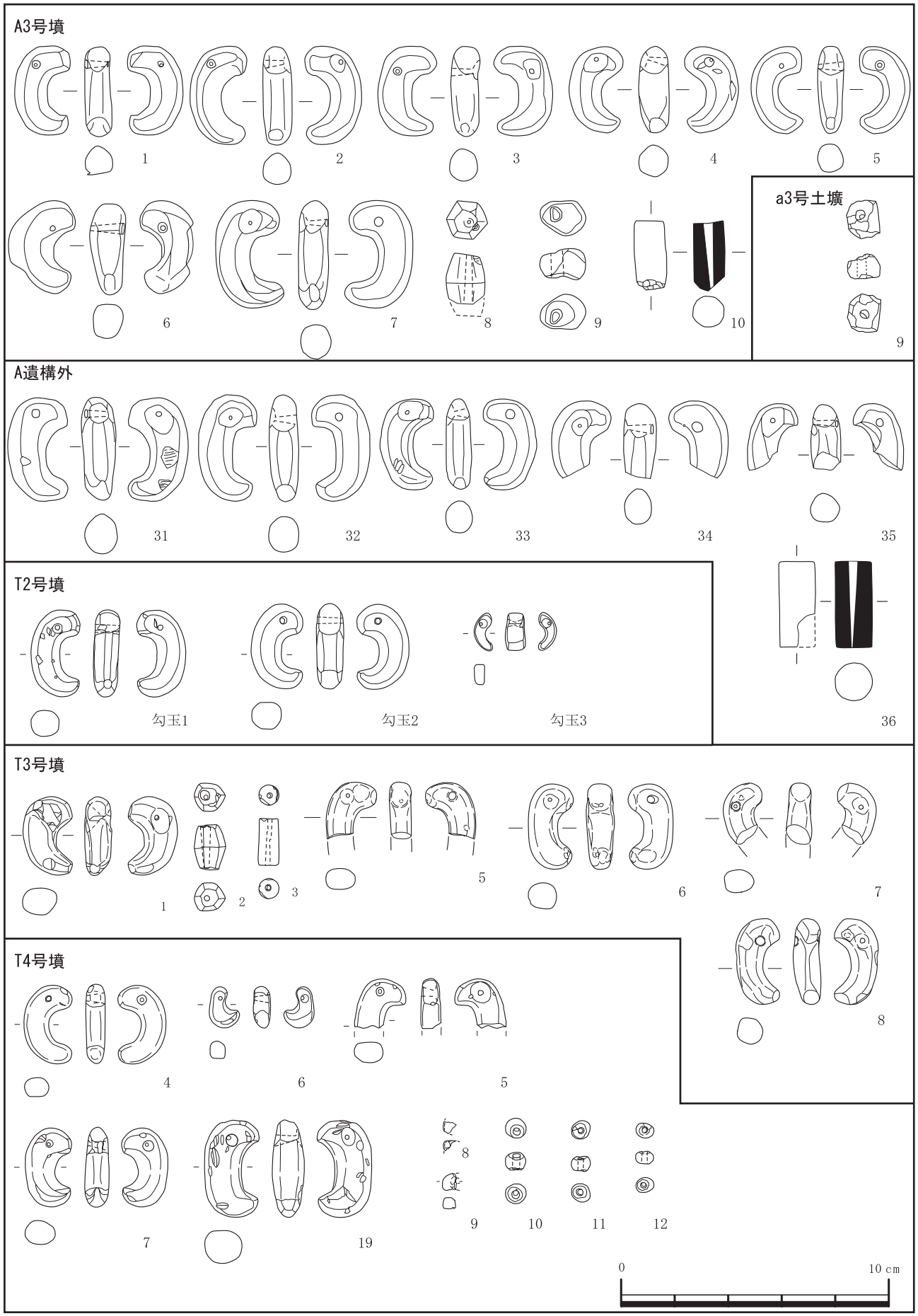
第 123 図　農工具・その他



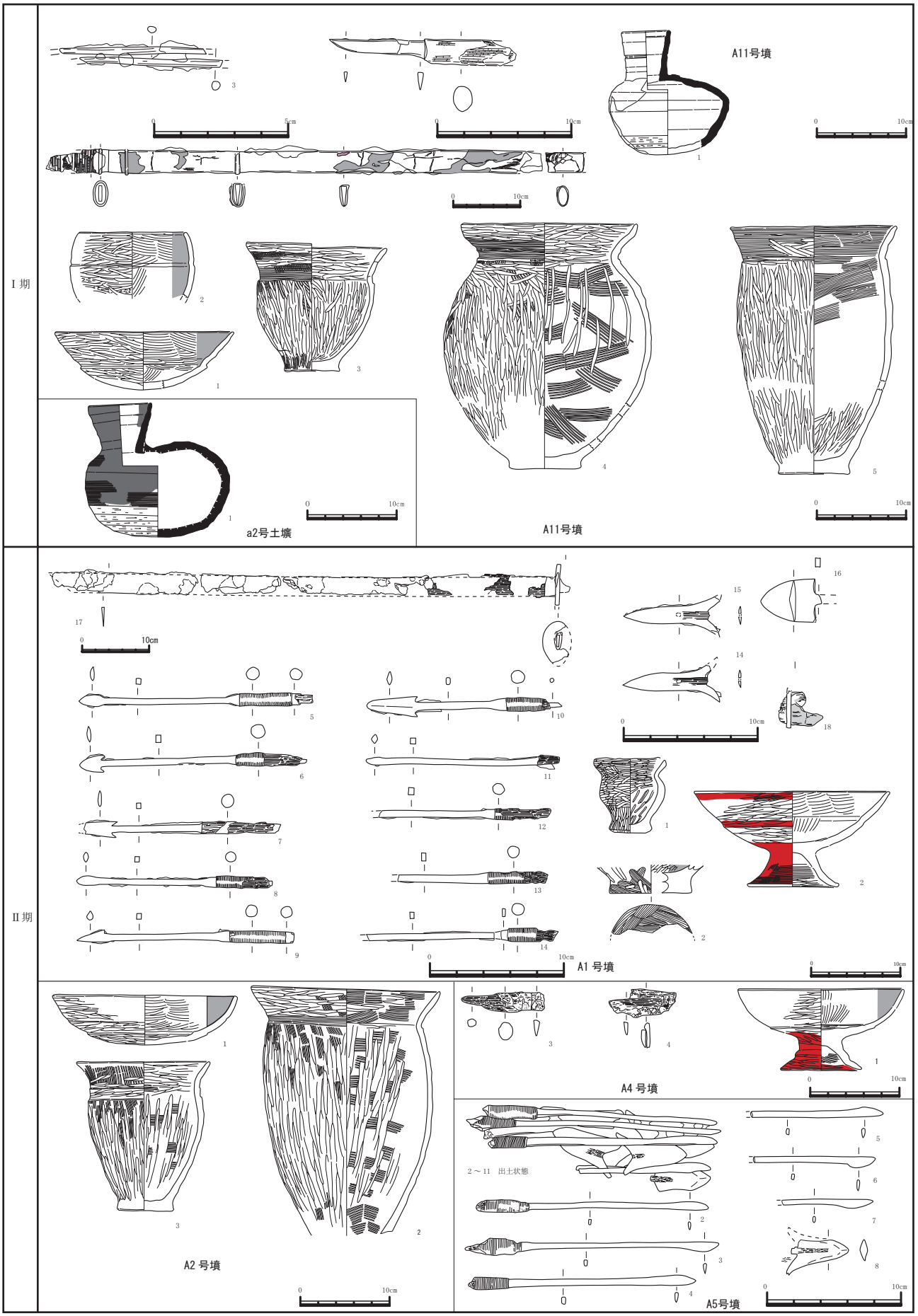
第 124 図　馬具



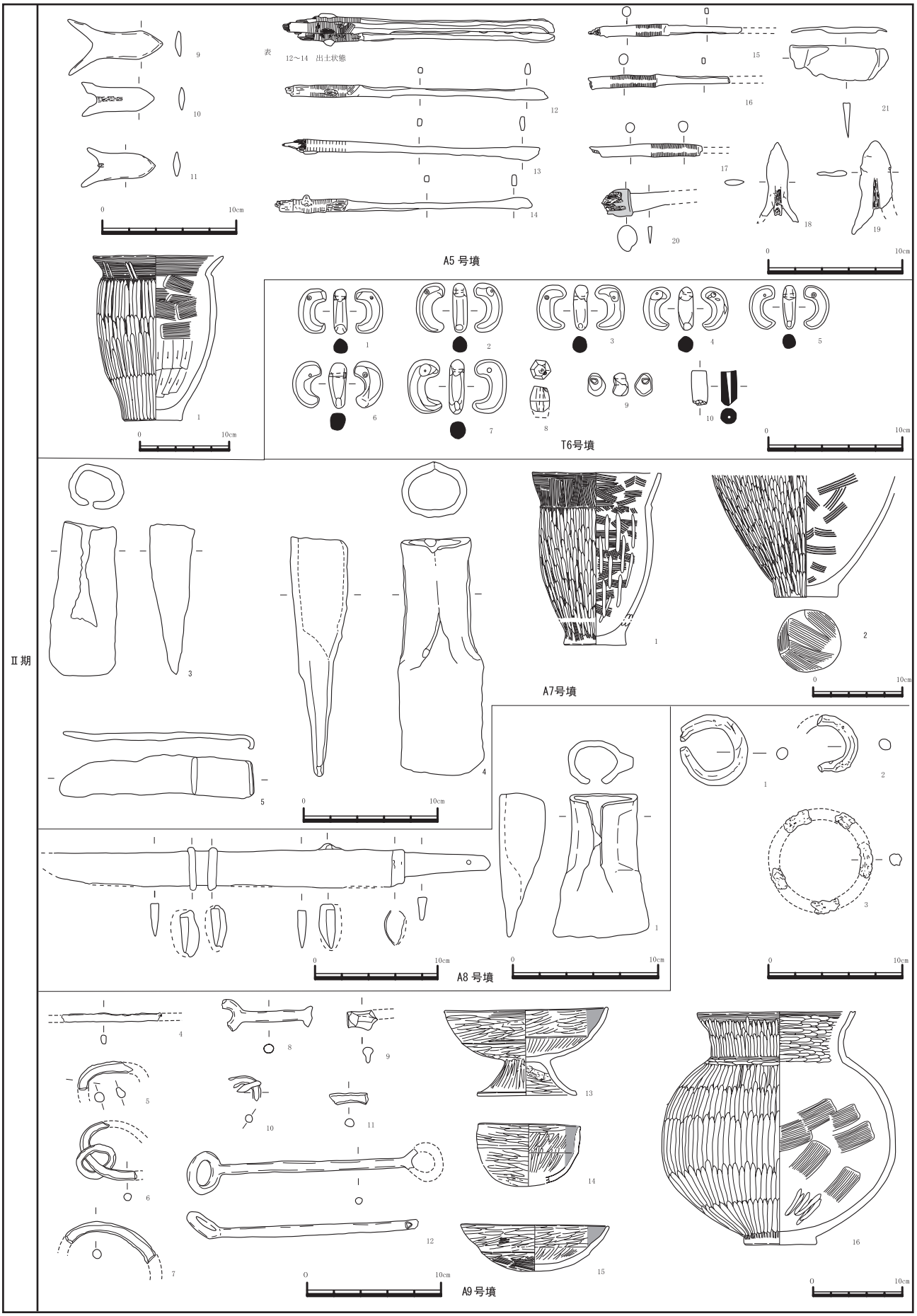
第 125 図　刀子・釧・耳環・環状錫製品


A3号墳
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
a3号土壙
9
A遺構外
31
32
33
34
35
36
T2号墳
勾玉1
勾玉2
勾玉3
T3号墳
1
2
3
5
6
7
8
T4号墳
4
6
5
7
19
8
9
10
11
12
0
10 cm

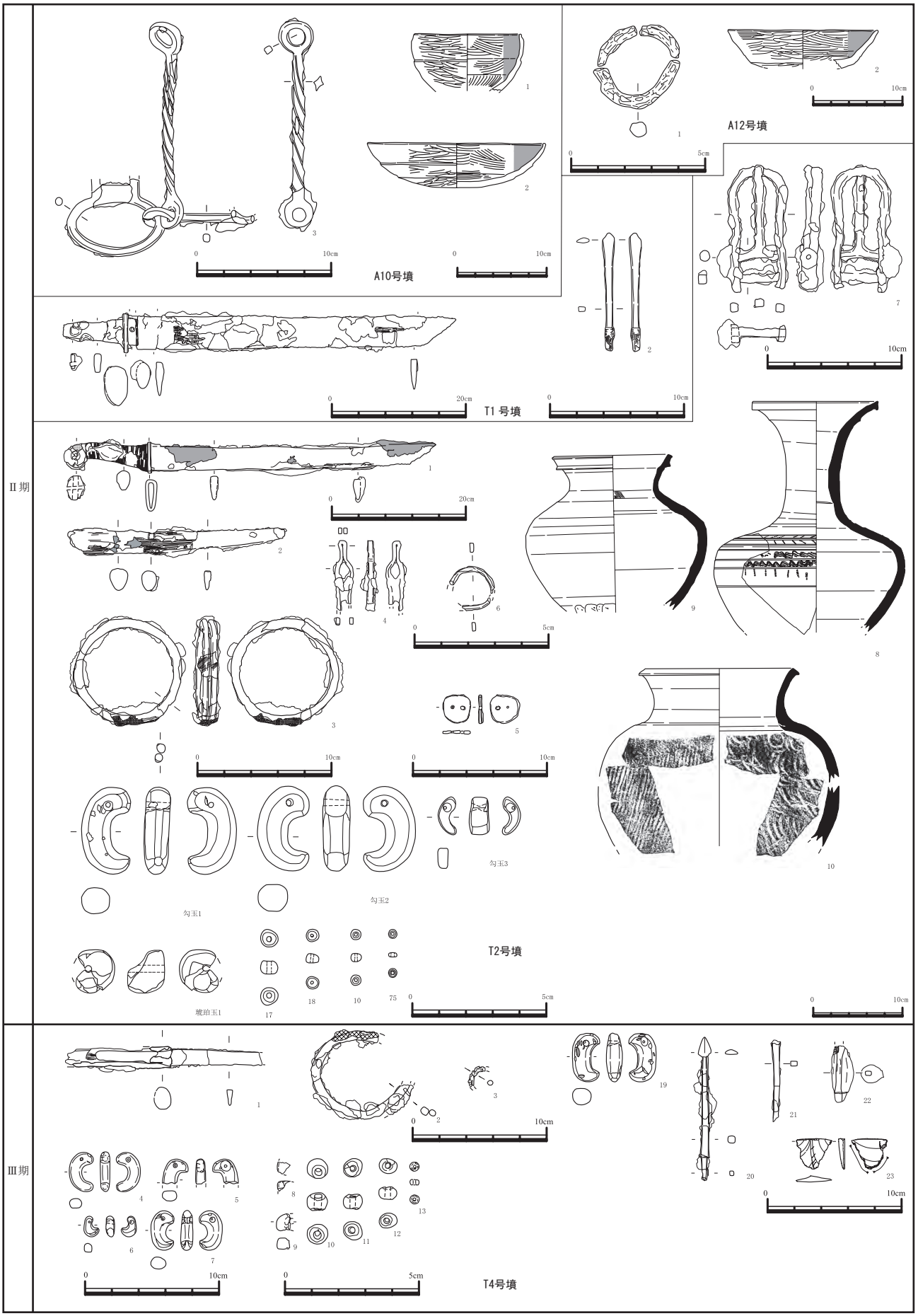
第 126 図　玉類集成図



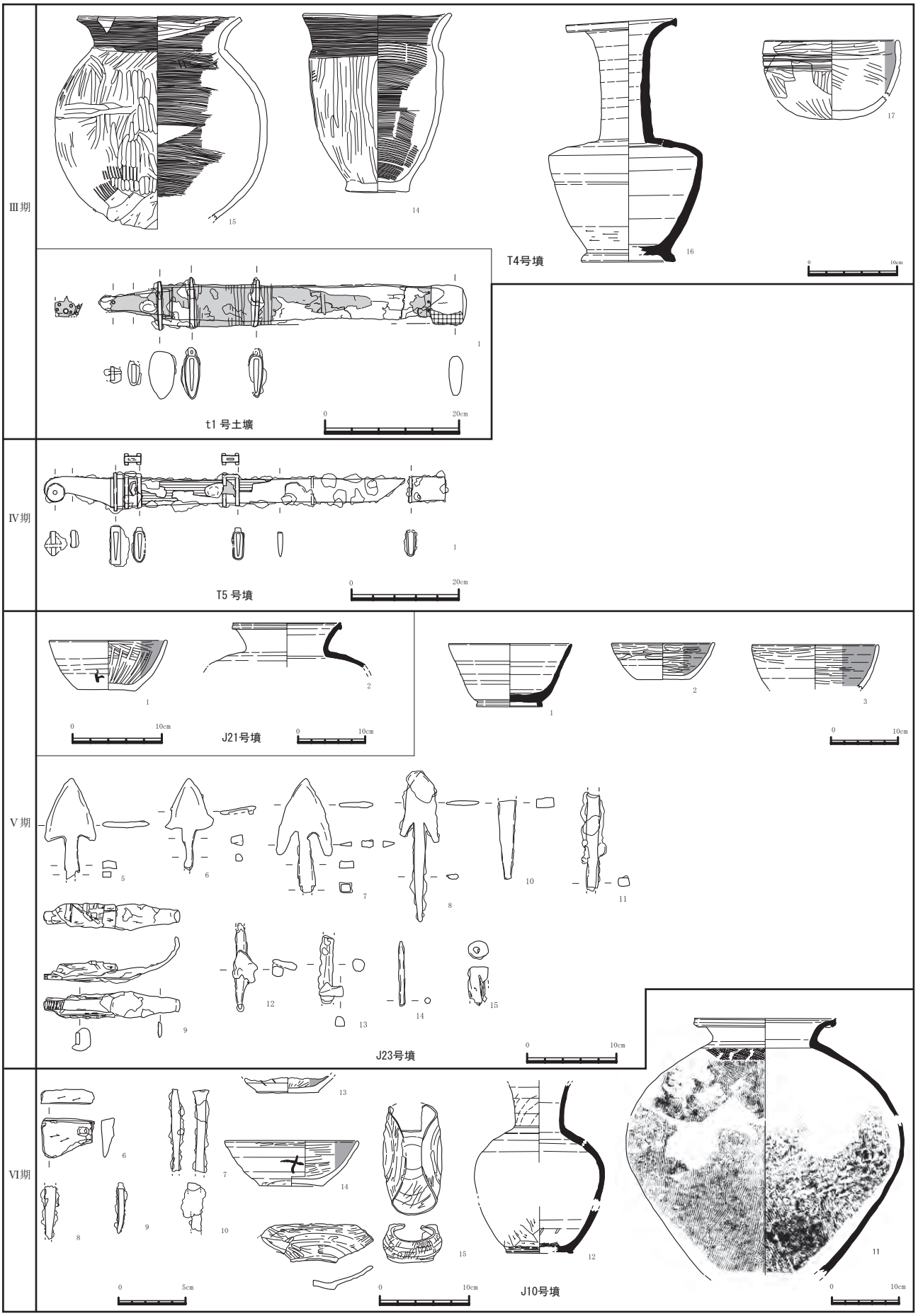
第 127 図　遺物変遷図 (1)



第 128 図　遺物変遷図 (2)



第 129 図　遺物変遷図 (3)



第 130 図　遺物変遷図 (4)

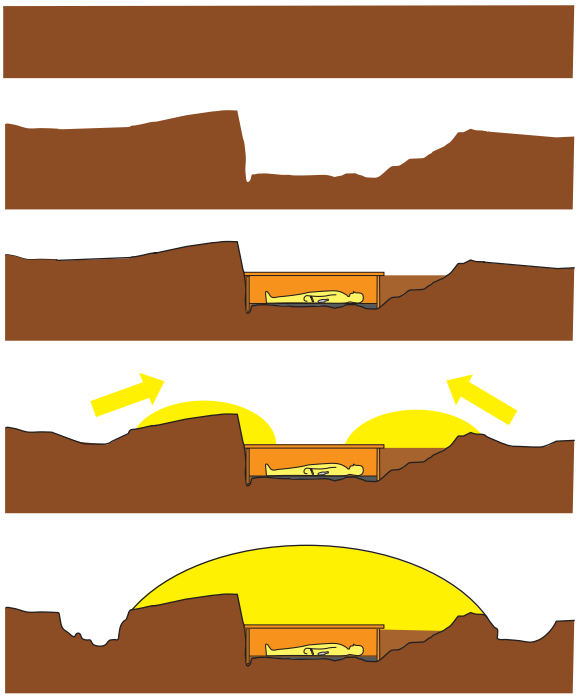
第 2 節　阿光坊古墳群の遺構について

末期古墳は格差が顕在化しないとの指摘がある（藤沢 2003）。確かに長大な前方後円墳と小型の円墳という形で現れる、古墳時代のような明確な格差はみられない。しかし、出土遺物の多寡や、主体部・周溝の規模の違いはあり、序列や性差、出自や時期などの差を内包するもの予想する。

このため、主体部の構造分類を行い、時期・出土遺物・規模を比較したい。

それに先立ち、主体部構造について整理する。末期古墳の主体部構造に着目した藤沢敦氏は、第 133 図に示したように、①墓壙の掘削→②小口板・側板を立て棺内に 1 層土を入れ外側を埋め戻す→③遺体の埋葬と副葬品の配置→④蓋をして墓壙を埋め戻すーという順を想定し、「このような主体部構造は、古墳の中には近接時期の類例がなく、古墳文化の影響を受けつつも独自に創出された墓制」としている（藤沢 1997）。T3・4・5 号墳からは、半ば土壌化しながらも、炭化した棺材が検出された。T3・T4 号墳では短・長辺に、T5 号墳では長辺側で検出された。底面の施設として溝が検出され、T3・T5 号墳は短辺側に溝があり、T4 号墳は短・長辺両方に溝がめぐるものであった。前者は小口板埋め込み式木棺、後者は四辺埋め込み式木棺に分類される。また、側板の上には直行する方向に炭化材が検出され、蓋の痕跡と考えられた。これらから、底板のない、据えつける棺と考えられ、藤沢氏の想定を裏付ける結果となっている。

末期古墳の構築順位は、主体部が先であり、上記の④の埋め戻す際に、周溝掘削が行われたものと考えられる（第 131 図）。



第 131 図　墳丘構築模式図

	Ⅰa	Ⅰc	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd
Ⅰ期	■					
Ⅱ期	■	■	■	■	■	
Ⅲ期	■			■	■	
Ⅳ期				■		
Ⅴ期					■	
Ⅵ期						■

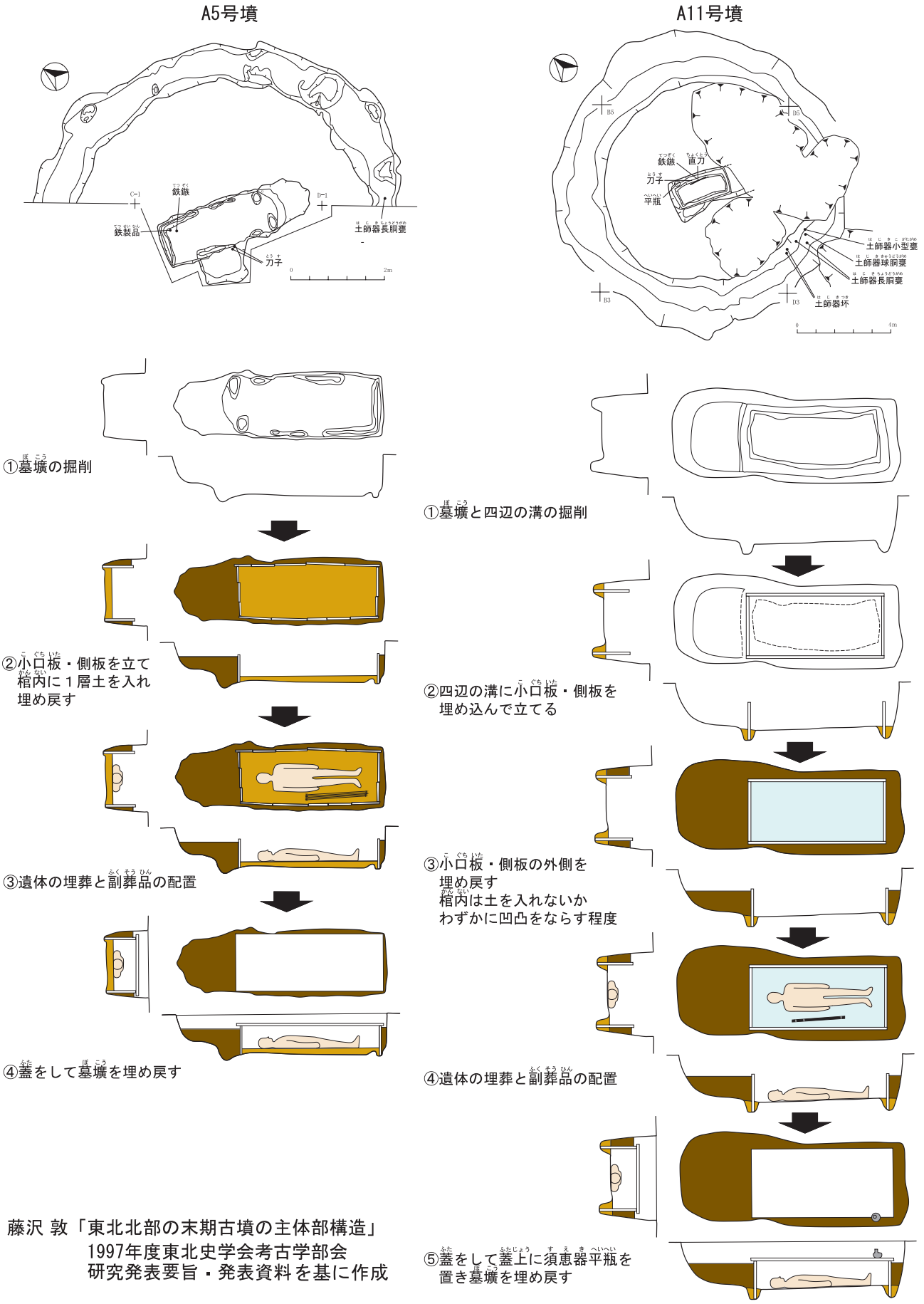
第 132 図　主体部分類と時期

阿光坊古墳群で主体部の明らかになっている末期古墳は 22 基、土壙墓を含めると 31 基である。全て土壙タイプである。前述のとおり、据えつける木棺構造と推定される。

張り出しと呼ばれる入り口状の施設を持つⅠ類と、墓壙のみで張り出しをもたないⅡ類に分けられる。次いで床面の溝が長辺・短辺にみられる a 類と、短辺のみに見られる b 類、床面に施設のみられない c 類、その他 d 類がある。床面に石を敷く 1 類、炭を敷く 2 類、貼り床や掘り方を床とする 3 類に分けられる。

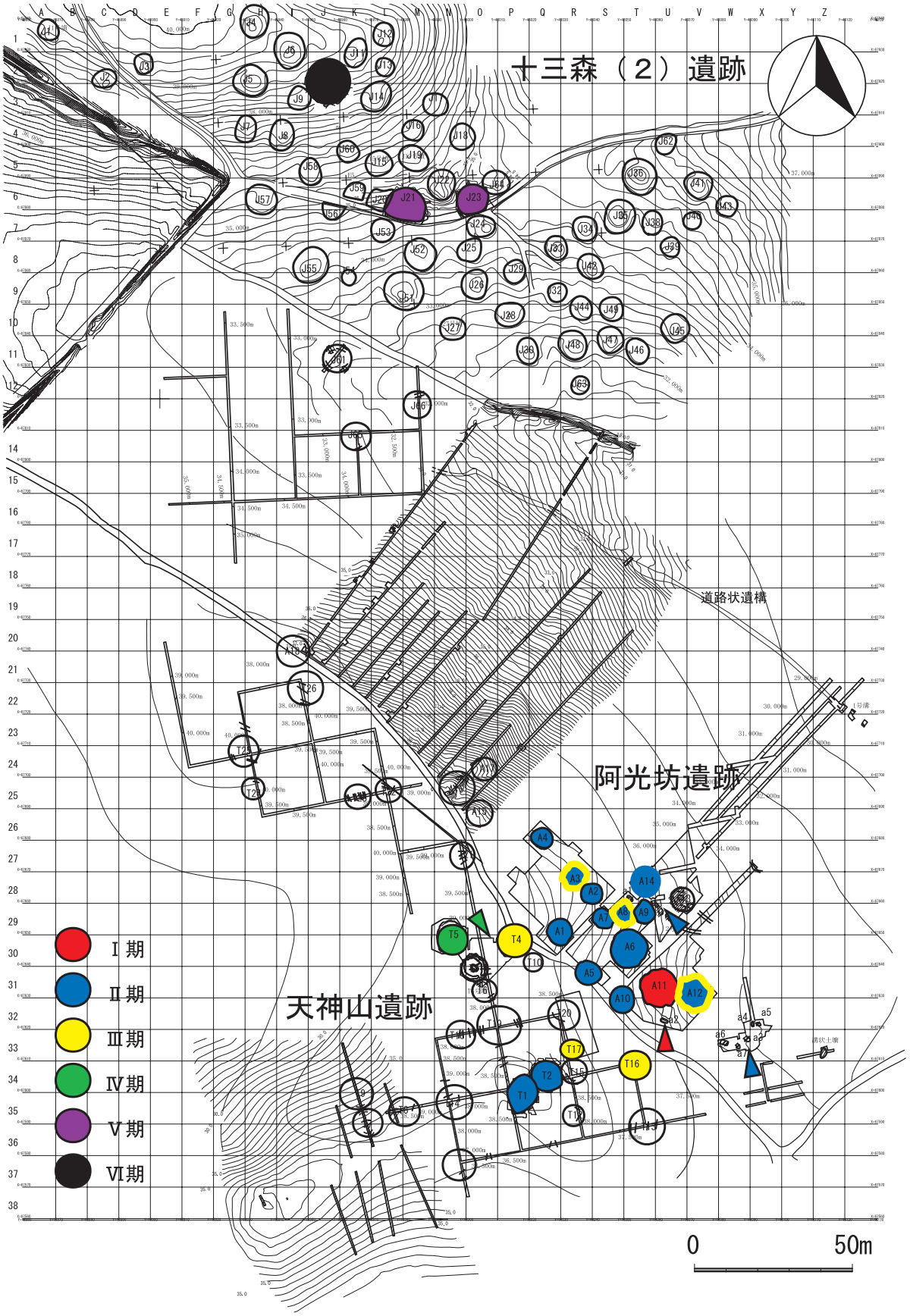
Ⅰ類を入り口状の施設としたが、小口板埋め込み式であるⅡ b 類には張り出し部は付かない。張り出しは入り口として使用されたと可能性がある。床面の石敷きは A12 号墳、炭敷きは T2 号墳のそれぞれ 1 例のみで、他は全て 3 類の粘土である。

この主体部分類を基準として、さきに検討した、時期の関係をみてみたい（第 132 図）。Ⅰ a 類はⅠ期からⅢ期にかけて、Ⅱ b はⅡ期からⅣ期、Ⅱ c はⅡ・Ⅲ期とⅤ期にみられる。Ⅰ c とⅡ a はⅡ期、Ⅱ d はⅥ期のみである。なお、Ⅴ期とⅥ期のⅡ c（J23 号墳）とⅡ d(J10 号墳）は、墓壙を先に作るのではなく、盛土した後に掘削している。Ⅳ期からⅤ期の間に主体部構築の順位に変化があったと見られる。

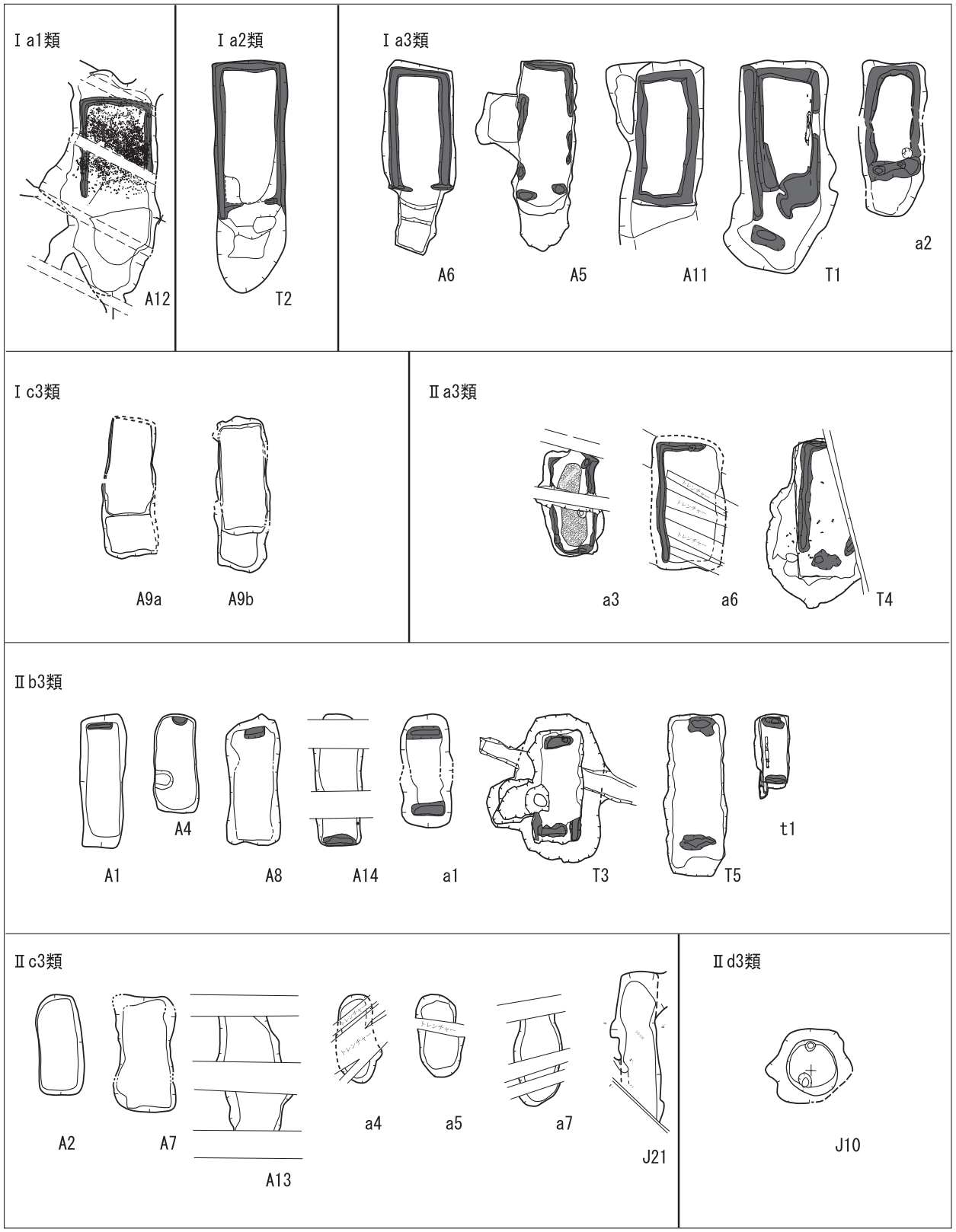


藤沢 敦「東北北部の末期古墳の主体部構造」
1997年度東北史学会考古学部会
研究発表要旨・発表資料を基に作成

第 133 図　四辺埋め込み式木棺の構造と埋葬の手順

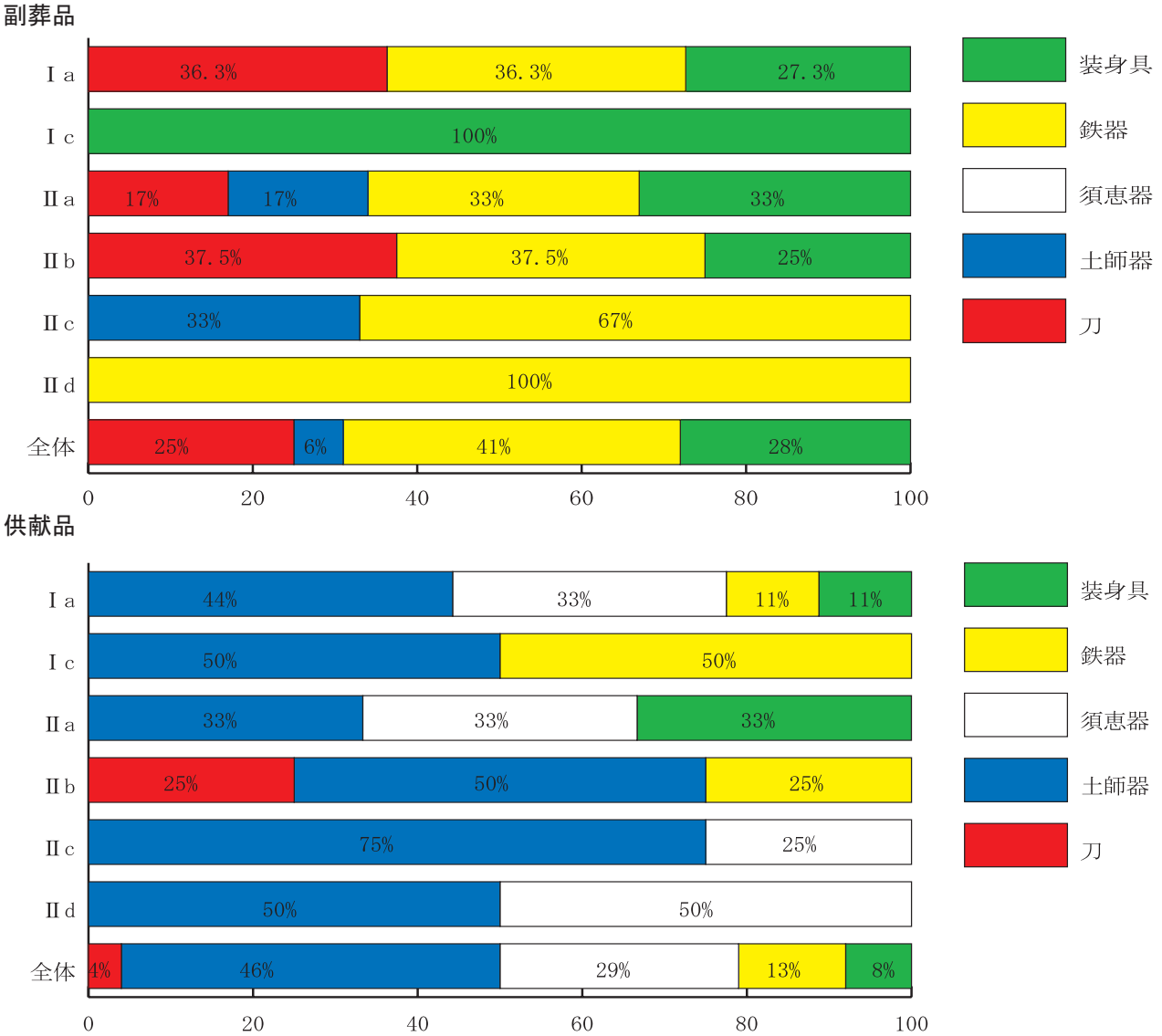


第 134 図　末期古墳の時期



溝

第 135 図　主体部分類図

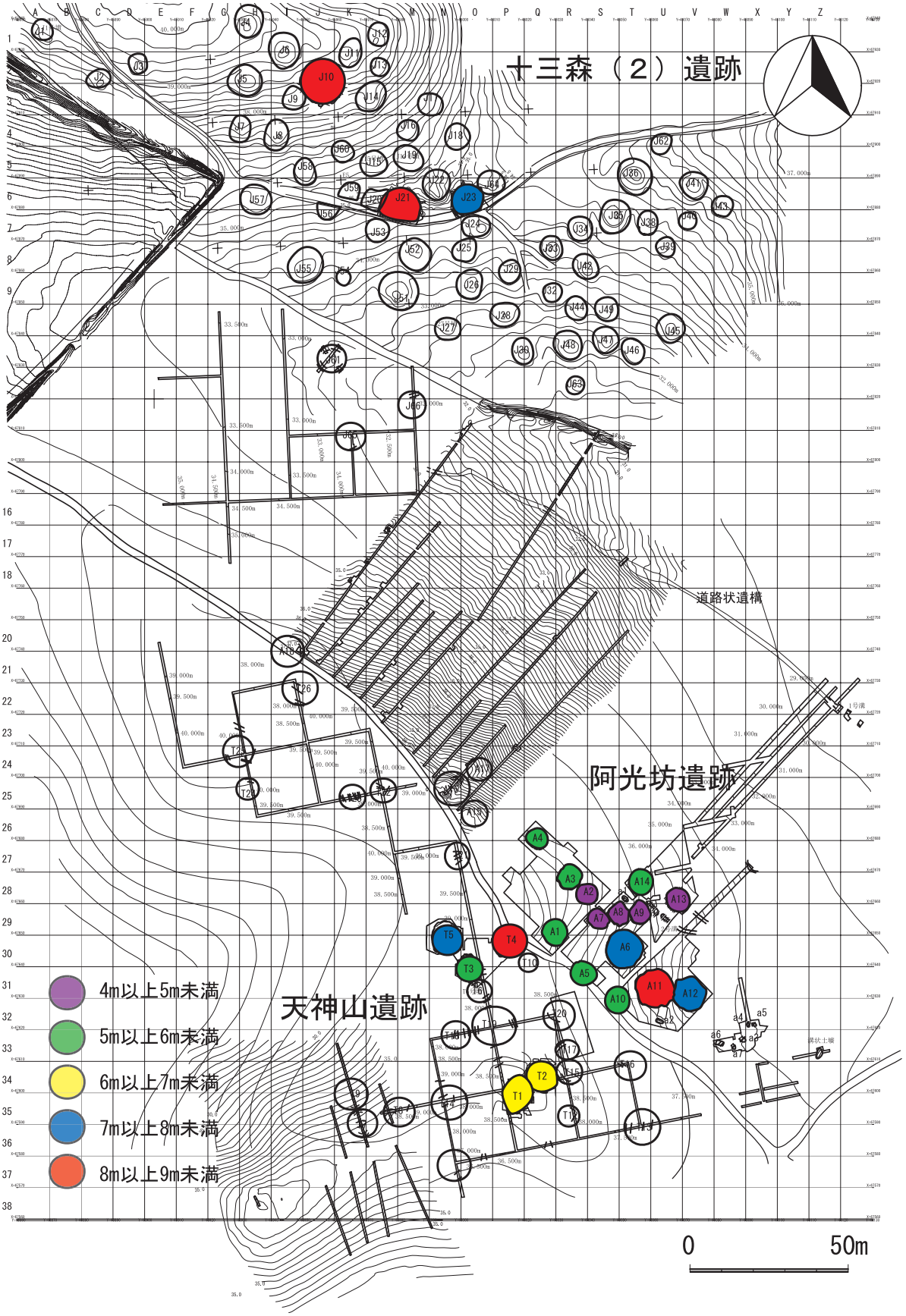


第 136 図　主体部分類と出土遺物

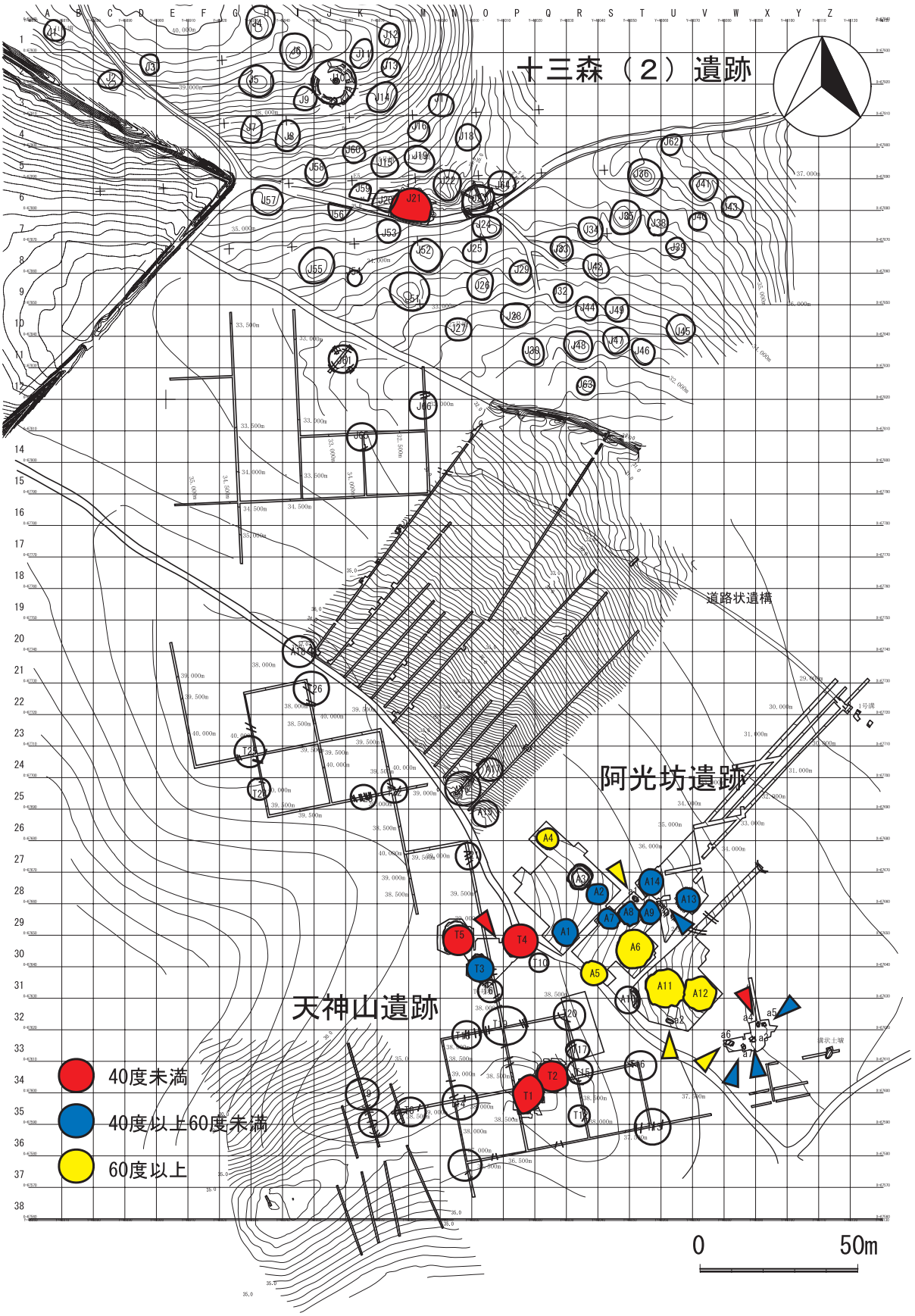
次に出土遺物との関係をみてみる。第 136 図は、出土遺物を刀・土師器・須恵器・刀以外の鉄器・装飾品に分け、一品目 1 件として出土頻度を示したものである。

まず、主体部床面付近より出土した、副葬品からみてみたい。床面に施設をもたない c 類からは刀が出土していない点が最も注目される。同じ c 類でも Ⅰ c 類は装身具が 100%、Ⅱ c 類は土師器と、鉄斧･鎌といった農具の副葬が顕著であり、刀の出土がないのは先にあげたとおりである。全体からみて、土師器の副葬は極めてまれであることが見てとれる。Ⅱ d 類の J10 号墳は、時期がⅥ期であり同時期の末期古墳の主体部が明らかになっておらず、類例をまたなければならないが、出土遺物は釘であり、副葬品ではなく棺を作るのに使用されたものである可能性がある。円形の墓壙とともに棺構造が異なると推定され、注目される。Ⅰ a 類とⅡ b 類が刀・その他の鉄器・装身具の構成で、ほぼ近い値を示している。

次いで、周溝や墓壙上に置かれたと見られる供献品についてみてみる。全てに土師器が伴い、次いで須恵器が多く出土している。Ⅰ c・Ⅱ b には須恵器がみられない点が注目される。周溝から出土する鉄器には馬具があり、Ⅰ c 類の A9 号墳、Ⅰ a 類の T2 号墳から出土している。また、主体部の調査は行なわれていないが、A10 号墳・T17 号墳の周溝からも轡が出土している。今のところⅠ類の主体部をもつ末期古墳からの出土に限定される。


十三森（2）遺跡
道路状遺構
阿光坊遺跡
天神山遺跡
4m以上5m未満
5m以上6m未満
6m以上7m未満
7m以上8m未満
8m以上9m未満
0
50m

第 137 図　周溝規模



第 138 図　方位

古墳	主体部												
	棺規模					埋葬部（m）					張り出し部（m）		
	長さ	幅	縦横比	面積（プ）	分類	長さ	幅	深さ	形態	主軸方向	長さ	幅	深さ
A1	1.86	0.58	3.21	1.03	Ⅱb	2.30	0.80	0.58	長方形	N 51 W	—	—	—
A2	1.55	1.2	1.29	1.04	Ⅱc	1.78	0.82	0.60	長方形	N 57 W	—	—	—
A3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N — W	—	—	—
A4	1.5	0.72	2.08	0.90	Ⅱb	1.76	0.76	0.40	長方形	N 73 W	—	—	—
A5	2.08	0.7	2.97	1.54	Ⅰa	2.70	1.80	0.40	長方形	N 63 W	0.65	0.75	0.05
A6	2	0.78	2.56	1.50	Ⅰa	2.30	1.30	0.60	長方形	N 62 W	1.15	0.90	0.55
A7	1.9	0.78	2.44	1.52	Ⅱc	2.00	1.10	0.24	長方形	N 48 W	—	—	—
A8	1.82	0.72	2.53	1.30	Ⅱb	2.30	1.10	0.48	長方形	N 51 W	—	—	—
A9a	1.68	0.8	2.10	1.25	Ⅰc	1.90	1.00	0.48	長方形	N 59 W	0.73	1.10	0.24
A9b	1.72	0.78	2.21	1.37	Ⅰc	2.10	1.00	0.65	長方形	N 68 W	0.64	0.90	0.25
A10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N — W	—	—	—
A11	2	0.76	2.63	1.46	Ⅰa	2.55	1.80	0.50	長方形	N 65 W	カクラン	カクラン	0.48
A12	1.62	1.06	1.53	1.70	Ⅰa	1.70	1.50	0.20	長方形	N 68 W	1.80	1.60	0.49
A13	—	0.88	—	1.55	Ⅱc	—	1.25	0.28	不明	N 57 W	—	—	—
A14	1.9	0.68	2.79	1.17	Ⅱb	2.30	0.90	0.21	長方形	N 46 W	—	—	—
a1	1.12	0.59	1.90	0.59	Ⅱb	1.90	0.90	0.38	隅丸長方形	N 46 W	—	—	—
a2	1.2	0.5	2.40	0.57	Ⅰa	1.60	0.95	0.38	不正長方形	N 68 W	0.55	0.95	2.50
a3	1.58	0.6	2.63	1.01	Ⅱa	1.85	1.10	0.30	不整長方形	N 52 W	—	—	—
a4	1.36	0.4	3.40	0.60	Ⅱc	1.55	0.80	0.27	長楕円形	N 14 W	—	—	—
a5	1.18	0.62	1.90	0.67	Ⅱc	1.46	0.83	0.19	長楕円形	N 59 W	—	—	—
a6	1.98	0.98	2.02	1.83	Ⅱa	2.37	1.38	0.55	長方形	N 71 W	—	—	—
a7	—	0.72	—	0.86	Ⅱc	1.55	0.90	0.32	長楕円形	N 44 W	—	—	—
T1	2	0.8	2.50	1.40	Ⅰa	2.23	1.65	0.80	長方形	N 31 W	1.03	1.02	0.67
T2	2.25	0.88	2.56	2.36	Ⅰa	2.38	1.26	1.20	長方形	N 36 W	1.62	1.28	1.18
T3	1.36	0.52	2.62	0.89	Ⅱb	2.56	1.45	0.56	長方形	N 50 W	—	—	—
T4	1.73	0.75	2.31		Ⅱa	2.45	1.10	0.80	長方形	N 28 W	—	—	—
T5	1.77	0.8	2.21	1.70	Ⅱb	2.85	1.15	0.50	長方形	N 6 W	—	—	—
t1	0.83	0.43	1.93	0.40	Ⅱb	1.30	0.64	0.31	長方形	N 33 W	—	—	—
J10	0.95	0.98	0.97	0.49	Ⅱd	1.50	1.35	0.93	円形	—	—	—	—
J21	2.70	0.62	4.35	1.14	Ⅱc	2.70	0.83	0.30	長方形	N 32 W	—	—	—
J23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
平均	1.68	0.74	2.39	1.18		2.07	1.12	0.48		N 50 W			

第5表　末期古墳の規模（1）

以上出土遺物と主体部構造では各型式間に差があることが見て取れた。その差は時期差と考えられるⅡdを除外すると、職掌や序列、性差などを反映している可能性がある。それらを明らかにするため、さらに周溝規模を比較してみる。一般論として、墓の大きさは作る際の作業量の大きさが違うため、一つの目安となると考えられる。内径の規模を比較してみる。

最も大きいJ10号墳の8.9mと小さいA13号墳とでは倍以上の直径差がある。第139図には1m毎に

古墳	周溝（m）最大値を計測							遺物		時期
	外径	内径1	内径2	幅	深さ	形態	分類	副葬品	供献品	
A1	7.80	6.00	5.40	1.50	0.48	円	A	刀■	○	Ⅱ期
A2	6.60	5.00	4.56	1.20	0.20	円	A	○	○	Ⅱ期
A3	7.70	5.90	5.10	1.70	0.25	円	B	●		Ⅱ～Ⅲ期
A4	6.60	4.90	5.00	0.90	0.20	(円)	A	■	○	Ⅱ期
A5	7.80	6.20	5.90	1.30	0.21	(円)	A	■	○	Ⅱ期
A6	12.10	8.00	7.50	2.60	0.60	円	A	●	○●	Ⅱ期
A7	6.90	5.00	4.67	1.00	0.35	馬蹄	A	■	○	Ⅱ期
A8	7.80	5.50	4.82	2.20	0.10	弧	A	刀	■	Ⅱ～Ⅲ期
A9a	7.40	5.70	4.40	1.20	0.37	馬蹄	A	●	○■	Ⅱ期
A9b	—	—	—	—	—	—	—	●		Ⅱ期
A10	(6.90)	(5.85)	5.50	1.90	0.18	(馬蹄)	—		○■	Ⅱ期
A11	12.60	8.60	8.50	2.60	0.50	円	A	刀■	○△	Ⅰ期
A12	11.20	8.10	7.70	2.20	0.59	円	B	●	○	Ⅱ～Ⅲ期
A13	7.70	4.60	4.08	1.75	0.37	弧	A		○	—
A14	—	—	5.80	1.50	0.27	弧	?	●		—
a1	—	—	—	—	—	—	—			—
a2	—	—	—	—	—	—	—		△	Ⅰ期
a3	—	—	—	—	—	—	—	刀○●■		Ⅱ期
a4	—	—	—	—	—	—	—			—
a5	—	—	—	—	—	—	—			—
a6	—	—	—	—	—	—	—			—
a7	—	—	—	—	—	—	—	■		—
T1	10.00	7.06	6.65	1.89	0.79	円	A	刀■		Ⅱ期
T2	9.42	6.50	6.50	1.76	0.94	円	A	刀■●	△■	Ⅱ期
T3	7.90	5.40	5.40	1.40	0.40	弧	A	■●		—
T4	(11.84)	(8.50)	(8.50)	2.40	0.60	円？	A	■●	○△●	Ⅲ期
T5	10.26	7.28	7.28	2.14	0.54	円	A		刀	Ⅳ期
t1	—	—	—	—	—	—	—	刀		Ⅳ期
J10	14.25	9.10	8.90	2.60	0.95	馬蹄	B	■	○△	Ⅵ期
J21	12.70	8.50	8.50	1.00	0.85	馬蹄	B		○△	Ⅴ期
J23	10.00	7.10	7.10	2.25	0.80	円？	B		○△■	Ⅴ期
平均	9.31	5.24	6.26	1.77	0.33					

※内径1は事実記載に記された直径、内径2は再測定した直径。今回は内径2を使用。

刀　刀
○土師器
△須恵器
■鉄器
●装身具

第 6 表　末期古墳の規模 (2)

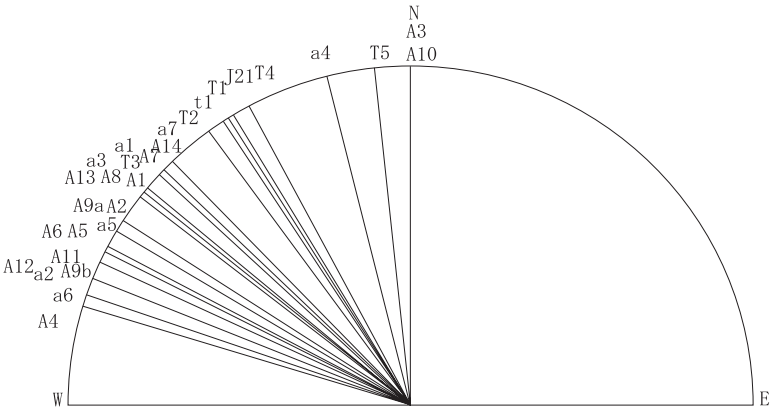
区分して示した。

J10 号墳とともに J21 号墳も 8m 以上であり J23 号墳も 7m 以上とⅤ・Ⅵ期に大型化がみられる。Ⅰから Ⅳ期では A11 号墳が最も大きく、副葬品・供献品とも豊富である。最小のグループである直径 4m から 5m 未満のものをみてみると、A8 号墳に小刀が見られる以外、大刀はみられない。主体部構造では、唯一Ⅰ類の A9a 号墳が含まれるが、次に小さい A5 号墳が 5.9m であり、例外的ととらえられ、周溝内径が小さいものの主体はⅡ類である。また、このグループからは須恵器の出土がみられない。A9a 号墳以外は副葬品・供献品がそれぞれ 1 品目以下である。そのほか、鉄斧や鎌の出土が集中する。

これらの傾向は内径が 6m 未満とそれ以上で分けた場合顕著であり、須恵器は小さいグループに全く

含まれず、大きな相違点と考えられる。

棺の大きさと内径の関係をみてみる。最小が特異な形態の J10 号墳、最大が J21 号墳とⅤ期以降のものである。それに次ぐのが 1.36m の T3 号墳と 2.25m の T2 号墳である。T2 号墳の遺物の出土状況からは、副葬品を納めるために大きく作られたという様子は伺われない。埋葬部長辺の平均は 1.86m であり、規模から伸展葬であると予想される。従って埋葬部の規模は身長を反映し、その違いは性差・年齢を含めた身体的な差を現していると理解される。規模と出土遺物から、ひとまず T3 号墳の被葬者は女性、T2 号墳は成人男性と予想しておく。



第 139 図　主体部主軸方向

埋葬部と張り出し部全体を含めた規模についても、張り出し部を持つⅠ類が長くなるのは当然として、大きな差異は見出せない。

周溝が主体部より深いものＡと、浅いものＢがある。周溝の掘り方直上層に粘土ブロックを含むものが複数の末期古墳で確認され、その層上から供献された遺物が出土している。このことから、この層を周溝底部として比較した。その結果ⅠからⅣ期はＡ類が 85% と多く、僅かにⅡからⅢ期とみられる A3 号墳と A12 号墳がＢ類となる。Ⅴ・Ⅵ期は全てＢ類となるため、ＡからＢへ変遷するものと考えられる。

周溝が全周するものと途切れるものがあるが、削平によるものか意図的なものか判断が難しいものがある一方、明らかに通路として掘り残されている J10 号墳や J23 号墳のような例もある。主体部型式との組み合わせではⅠａ類・Ⅱａ類は全て周溝が全周し、その他のものは途切れる、もしくは馬蹄形を成すものが半数以上含まれる。

周溝を持たない土壙墓が 8 基確認されている。形態が長方形のもの（a1・a3・a5・t1）、楕円形を呈すもの（a2・a4・a6・a7）がある。形態が長方形のものは、周溝を持つ末期古墳と同様の構造を持つことが、主体部底面の溝から伺える。一方楕円形を呈すものは全て床面に施設が見られず、a7 号土壙を除いて出土遺物もみられない。長方形を呈するもののなかには、末期古墳で最も優位な組み合わせと見られるⅠａ類の構造をもつ a2 号土壙があり、須恵器が供献されている。また刀・琥珀玉・鉄鏃・土師器椀が副葬された t3 号土壙など、周溝を持つものに匹敵するものが含まれる。これらと末期古墳との大きな差は埋葬部の長辺規模である。最大の a6 は 1.98m であるが、他は 0.83m から 1.58m であり、平均が 1.32m と、明らかに末期古墳の平均 2.18m に比較して小さい。特に 1 m 前後のものは伸展葬であれば幼児としか考えられない。一方、t1 号土壙は蓋が乗せられた可能性が考えられる平坦面がみられ、それを参考にするならば深さは 30c m 程度であり、屈葬とは考えにくい。このため幼児・再葬などの可能性が考えられるが、これ以上推定する材料がないため、大人を葬るのには小さいものも含むが、末期古墳と同様な性格を持つ墓壙としておく。

以上をまとめると①周溝を大と小の 2 群に分けた場合、張り出しを持つ主体部Ⅰ類は大きい一群に多い。②同様の場合、小さい一群からは須恵器が出土しない。

これらより、主体部構造はⅠ＞Ⅱ類、ａ＞ｂ＞ｃ類という価値観が見て取れるが、やはり圧倒的な差にはならない。埋葬部の大小で性別を想定する案を提示したが、主体部構造の違いはこの他、序列や出自、あるいは職掌をあらわす可能性が考えられ検討してみたが、阿光坊古墳群の調査では明確にできなかった。末期古墳全体の中での検討を要し、論議の進展を待ちたい。

出土遺物のなかには、錫製品があり、北方の産物との意見がある（小嶋 1996）。また、蕨手刀や「北の方刀」と呼ばれる大刀も、北東北に多く分布する。その他は明らかに古墳時代から律令国家に至る、

南の影響を考えざるを得ないものである。石帯丸鞆が採集されており、端的にそれを物語る。

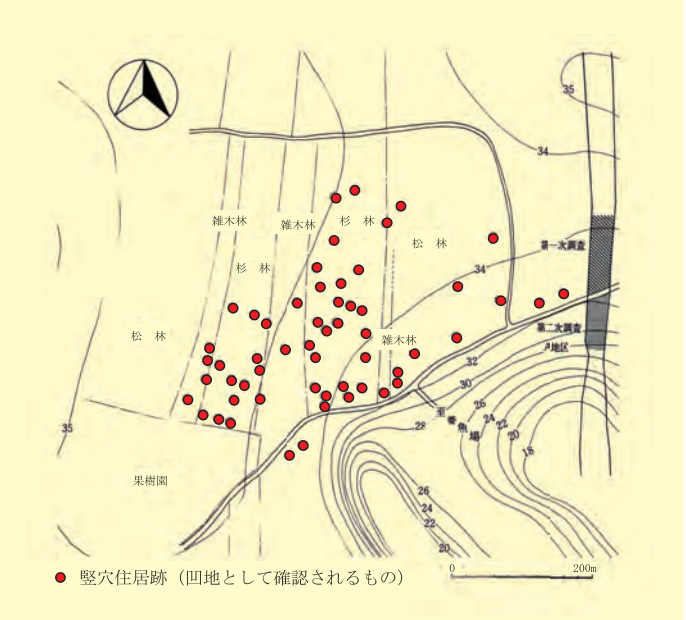
一方、主体部構造は直近の時期・地域に見られないものであり、北東北独自の墓制と考えられる（藤沢 1997・2003 他）。末期古墳の開始時期には、北海道では楕円形土壙墓、倭国域では横穴墓・横穴式石室を基調とした墓制が展開していた。地表を掘り下げ墓壙をつくり、古墳様の小円墳を呈する末期古墳は、古墳文化の影響を受けつつ成立した、地理的・文化的な境界に位置する墓制ととらえられる。

第 3 節　被葬者と集落

阿光坊古墳群は、東流する奥入瀬川左岸の丘陵上に位置する。同じ丘陵上や谷を挟んだ北側の丘陵上には多くの集落が営まれていたことが、発掘調査や、現在でも地表から認識できる、住居跡と想定される窪みが所在することによって把握出来る。

平成 18 年度までに、おいらせ町内では 221 軒の古代の竪穴式住居跡が調査されている。また、住居跡と推定されるくぼ地も多数残存し、測量調査が行われた例に限ってみてみると、下谷地 (1) 遺跡で 61、向山 (4) 遺跡 7、向山 (6) 遺跡で 38 の合計 106 である。発掘調査されたものとくぼみの合計は 327 軒である。さらに中野平遺跡、ふくべ (4) 遺跡、ふくべ (7) 遺跡、ふくべ (9) 遺跡にもくぼみは多数みられ、現在把握しているものが、ほんの一部であるのは言うまでもなく、少なくとも 1,000 軒は超えるものと予想する。

図版 46　窪みとして認識できる住居跡の例 (向山 (6) 遺跡)



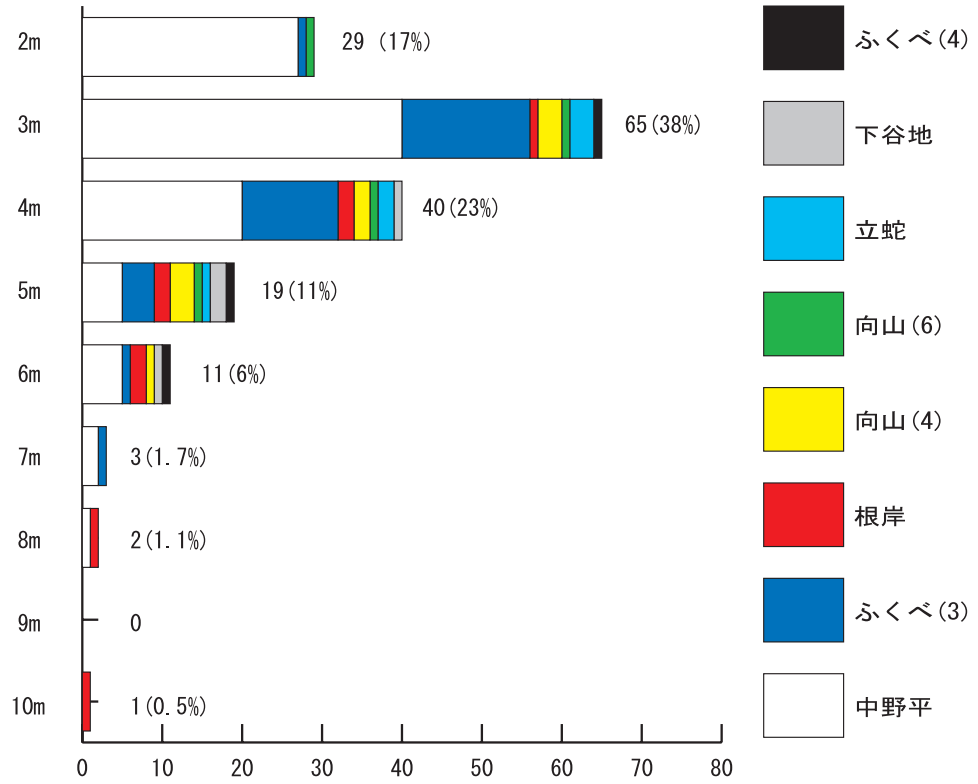
第 140 図　下谷地 (1) 遺跡の窪み

（赤平・三浦 1988 より転載・一部改変）

阿光坊古墳群からは 108 基の末期古墳が調査によって確認されている。遺構の分布範囲は、阿光坊・天神山遺跡側が 12,800 ㎡、十三森 (2) 遺跡側が 15,000 ㎡である。面的な調査が行なわれている阿光坊遺跡では、約 2,000 ㎡を掘削し、14 基の末期古墳と、7 基の土壙を検出している。これから遺構密度が得られ、末期古墳は 200 基、土壙墓を含めて最大 280 基という数が想定される。見つかっている住居跡が墓の数を上回っている点に注目したい。

1 軒あたりの住居跡には複数の住人が住んでいたと想定される。この時点で、現在把握している 327 軒からは、どんなに少なく見積もっても 654 人以上の人が暮らしたとできる。このことから、奥入瀬川下流域一帯の集落の全成員が葬られた共同墓地ではなく、何らかの選択があったと言える。その選択には、A 末期古墳を作る集落と作らない集落がある、B 複数の集落の共同墓地であり、集落の中で葬られる者とそうでないものがある、という、二つの方向がある。

まず、A について検討してみる。天野哲也は江別・恵庭古墳群の分析から、墓壙の規模や副葬品から、被葬者には年齢・性別の選択がなかったとし、集落の成員数を S、墓の数を G、期間を T で表すと、一般に $S = \frac{GL}{T}$（ただし S ≧ 2、L は平均寿命）であらわされるとした (天野 1985)。阿光坊古墳群にあてはめるならば、G を現在見つかっている 116 基（末期古墳と土壙墓の合計数)、L を 50 年、T を 275 年とすると、21 人の集落で形成可能となる。4 人が 1 軒に暮らしたとすると、6 軒が一世代あたりの住居数となる。一世代 25 年とすれば、66 軒の住居が作られたことになる。また、同じ条件で、阿光坊古



第 141 図　住居跡規模

墳群が 280 基である場合は 50 人の集落で、137 軒の住居が作られる計算となる。この条件にあう遺跡は複数みられ、ある特定の集落が阿光坊古墳群と結びつく可能性は、周辺集落の全容があきらかになるまで、ある程度考慮する必要があると思われる。

現在までに調査が行なわれた集落のなかに、阿光坊古墳群を造営したものが含まれていると考えた場合、古墳群出土遺物から、末期古墳を作らない集落に対し有力であり、集落間に格差があったと予想される。それらを見出す方法として、竪穴式住居跡の規模を比較することが有効と考えられる。住居跡の規模は住んでいた人数にも規制されるであろうが、建築するための労力・材料は大きさが増すにつれ増大するため、経済力を示す目安になると期待される。第 141 図は、奥入瀬川下流域集落の住居規模を、一辺の長さで比較したものである。ピークは 3 から 4m にあり、全体の 61% を占める。7m 以上は 3% と極少数である。調査件数の多い中野平遺跡から見てみると、規模のあきらかな 100 軒のうち、3 から 4m が 60% であり、ほぼ全体と同じである。2m 台の小型の比率がやや高いが、7m 以上のものが、全体と符号する 3 軒で 3% である。ふくべ (3) 遺跡は、ピークがあきらかに 3 から 4m であることが読み取れる。その他は調査件数が少ないので参考に示したが、6m や 7m にピークがあるものはなく、各集落間の格差は少ないと判断できる。住居跡の規模からは、末期古墳を造営した集落としない集落といった、顕著な隔絶は見出せないと結論付けられる。そして、むしろ面積が最小と最大で 21 倍もの差がある住居の大きさ、住人の性格にこそ格差があることが読み取れる。

これをうけ、B の複数の集落の共同墓地であり、集落の中で葬られる者とそうでないものがある、という考え方について検討する。まず、阿光坊古墳群と発掘調査された集落との結びつきについて、簡単に触れておきたい。古墳群に副葬・供献されるものは、死後ばかりでなく、生前にも価値があったと推定される。特に刀や装飾品などは、日常の什器や煮炊きの道具と違い、住居跡を廃絶する際に破棄してしまうような性質のものではなく、集落からの出土は極稀である。近年、理由は不明だが、末期古墳から出土するもの、または類推されるものが、集落遺跡から出土した例がある。

①根岸遺跡 7 号住居跡出土遺物（小向・瀧澤ほか 1995）

1 辺が 10m という、奥入瀬川下流域で最大の竪穴式住居跡である。復元可能な土師器坏が 24 点、甕 10 点が出土している。

阿光坊古墳群と関連付けられる出土遺物に蕨手刀がある。これまでに T2 号墳・T5 号墳・表土採集の 3 点がみつかっている。

また、挂甲小札が 137 枚出土している。盛岡市上田蝦夷森古墳から衝角付冑の出土が知られているので、挂甲も末期古墳と関連付けられる可能性はある。時期はⅤ期とみられる。

②ふくべ (3) 遺跡 24 号住居跡出土遺物（工藤・小林ほか 2005）

一辺が 7.6m の大型の住居跡である。鉄斧・鉄鏃・土玉が出土している。鉄斧は A7 号墳・A8 号墳・a7 号土壙から出土している。

③ふくべ (3) 遺跡 27 号住居跡出土遺物

一辺が 5m 程度の、中規模の住居跡である。この住居跡からは環状錫製品と呼ばれる、耳環と想定される遺物が出土している。阿光坊古墳群からは A9a 号墳・A12 号墳・T4 号墳から見つかっている。

また、馬具である轡の一部も出土している。古墳群側では A9a 号墳・A10 号墳・T17 号墳から出土している。

④ふくべ (3) 遺跡[註1]

ガラス玉が出土している。A3 号墳・A6 号墳・T2 号墳・T3 号墳・T4 号墳から出土している。

そのほか、古墳群との関連を想起される遺物が出土しているものがある。

・向山 (4) 遺跡 4 号住居跡（町）　土玉 29 点（一辺 3.8m）
・ふくべ (3) 遺跡 9 号住居跡（県）　鉸具（一辺 3.9m）
・中野平遺跡（町 9 集）20 号住居跡　轡の一部（一辺 3.9m）

などである。これらから、古墳群に副葬・供献される遺物と同様のものを、集落で生活していた人々が使っていたであろうということは言える。大形の住居跡ばかりではなく、中・小型の住居跡に住んでいた人々も、阿光坊古墳群被葬者となる場合もあった可能性がある。

それでは、どのような選択が想定されるだろうか。一辺が 7 m以上の比較的大形の住居跡を抜き出してみる。

①ふくべ (3) 遺跡（県 392 集）24 住　一辺 7.6m・7 世紀後半（Ⅱ期）
②中野平遺跡（町 21 集）1 住　一辺 8m・7 世紀後葉から 8 世紀中葉（Ⅳ期）
③中野平遺跡(平成 17 年度調査) 11 号住居跡　一辺 8.4m・7 世紀後葉から 8 世紀中葉（Ⅱ～Ⅲ期）
④根岸遺跡 7 号住居跡　一辺 10m・9 世紀前葉（Ⅴ期）
⑤中野平遺跡（町 9 集）9 号住居跡　一辺 8.75 m・9 世紀前半（Ⅴ期）
⑥中野平遺跡（県 134 集）2 号住居跡　一辺 7.70 m・9 世紀前半（Ⅴ期）

規模については、7 mを超えるものの出現が、現在把握しているものの中では 6 軒であり、約 3%である。ひとまずはこれら、大形の住居跡に住む有力家

	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期	Ⅵ期以降
中野平遺跡		■	■	■	■		■
ふくべ（3）遺跡		■	■	■	■		
根岸遺跡				■	■		
向山（4）遺跡		■		■			
向山（6）遺跡				■			■
立蛇（1）遺跡		■			■		■
下谷地（1）遺跡						■	■
ふくべ（4）遺跡			■		■		

第 142 図　集落の消長

族の家長層は阿光坊古墳群に葬られたと想定する。

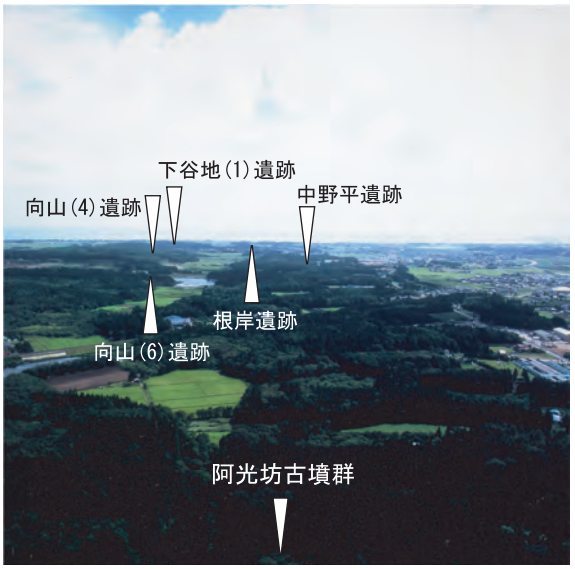
中・小型住居跡からも関連性を考えられる遺物が出土していることから、更に裾野が広がるとも考えられるが、住居跡数も不確定であり、明確な線引きをすることは困難である。

周辺集落の継続時期を、阿光坊古墳群の時期区分に合わせて第 142 図に示した。なお、年代観については各報告に拠った。阿光坊古墳群の開始時期であるⅠ期の住居跡は未確認である。中野平遺跡・ふくべ (3) 遺跡ではⅡ期からⅤ期まで集落の継続がみられる。Ⅴ期には根岸遺跡 7 号住居跡が含まれる。Ⅵ期は集落数が極端に少ないが、時間幅が短い設定となったためであり、Ⅵ期以降の住居跡が見つかっている集落にはⅤ期から継続するものもあると考えられる。今のところ 10 世紀後半代以降と判断される住居跡は、確認されていない。集落と古墳群とでは開始と終末に違いがあり、完全な一致はみられないが、少なくともⅡ期からⅤ期への継続は双方ともに共通する。

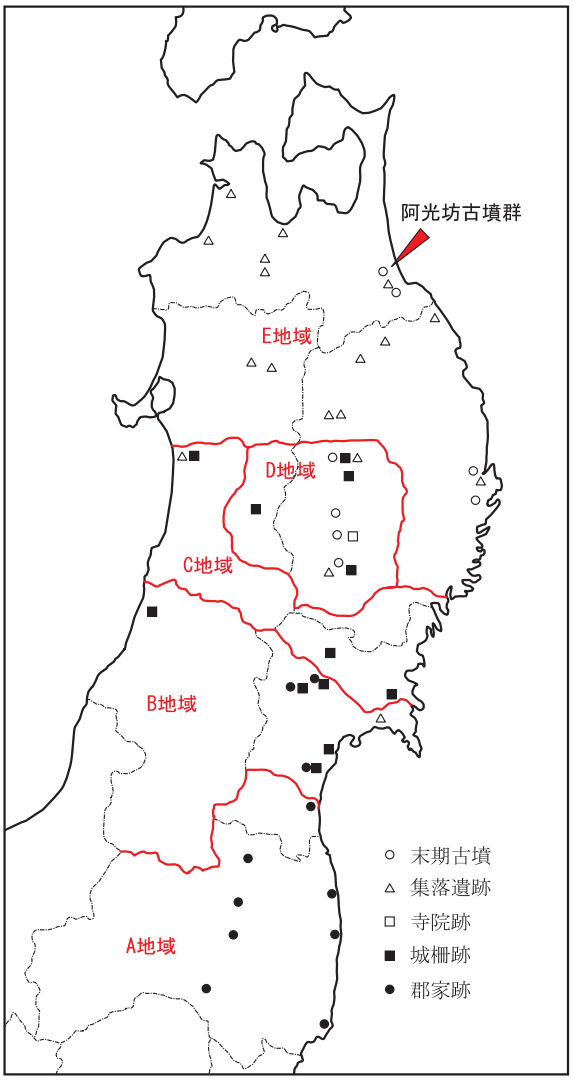
また、阿光坊から東方へ 3.2km の地点に中心を持つ中野平遺跡からは、奥入瀬川に平行して流れる小河川である明神川の川辺を西に向かうと、対岸に下谷地 (1) 遺跡や向山 (6) 遺跡を望みながら、古墳群に至る（図版 47）。阿光坊古墳群に谷頭を持つ小谷沿いには、墓道の可能性が考えられる古代の道路状遺構も見つかっている。

このように、発掘された集落のあり方に差が少ないとみられる点、古墳群から出土する遺物と同様のものが複数集落から出土する点、継続する時期が、開始と終末を除いて共通する点、及び遺跡の立地から、双方が無関係であるとは考えにくい。奥入瀬川下流域左岸には、濃密な集落が存在し、阿光坊古墳群をひとつの紐帯とした、有機的な存在であったと想定される。ただし、これらの集落の全成員を葬ったのではなく、選択があったものと考えられるが、その内容については、明らかに出来なかった。

青森県・岩手県の太平洋側集落を概観すると、陸奥湾沿岸部、小川原湖周辺部、奥入瀬川流域、馬渕川下流域、三陸沿岸部、馬渕川上流域、軽米・九戸と、おおまかに 7 つの集中が見られた（小谷地 2004）。末期古墳の分布をみてみると、小川原湖周辺地域には平畑 (5)・八幡、馬渕川には鹿島沢・丹後平・殿見、馬渕川上流域には堀野・御所野がある。それぞれが阿光坊古墳群と集落で見たような関係を持つと考えられ、交易等で力を持った集団が存在したと推定する。その中でも阿光坊古墳群は最大規模であり、継続時期が最も長い。



図版 47　阿光坊古墳群から東を望む（空中撮影）



第 143 図　古代東北の地域区分

（八木 2004b を基に作成）

『日本後紀』弘仁二年七月辛酉条（811 年）には、北東北を指すと考えられる記述がある。

辛酉、（中略）出羽国奏、邑良志閇村降俘吉弥候部都留岐申云、己等与弐薩体村夷伊加古等、久搆仇怨。今伊加古等、練兵整衆、居都母村、誘幣伊村夷、将伐己等。伏請兵粮、先登襲撃者。臣等商量、以賊伐賊、軍国之利。仍給米一百斛、奬励其情者。許之。

記された地名には弐薩体村・邑良志閇村・幣伊村・都母村があり、それぞれ岩手県二戸市仁佐平、秋田県北部、岩手県沿岸部、青森県七戸町坪をあてる説がある。

都母村は、七戸町坪川流域を中心に、広く上北地域とみられている。坪川流域には 5・6 世紀代の土壙墓がみつかった森ヶ沢遺跡があるが、8・9 世紀段階の集落は今のところ見つかっていない。さらに周辺地域に視点を広げても、奥入瀬川流域以北に、この時期の大規模な集落展開は見られない。

奥入瀬川下流域の集落は弘仁 2 年に拠点的な集落でありえたといえ、さきの「都母村」や「弐薩体村」を想起させる。

八木光則は、古代東北を次の 5 つの地域に区分されるとした（八木 2004b）。A：古墳時代から国家の体制に組み込まれた地域。B：城柵と郡家（郡役所）による二重支配の地域。C：蝦夷色が強まる地域。D：国家側と密接にかかわり合いながらも蝦夷の独自色が強かった地域。E：古代末まで国家の直接支配が及ばず、蝦夷の独自色が温存された地域。阿光坊古墳群は E 地域に区分され、最北の城柵跡からも百数十キロ北方に位置する。征夷の記事や先の『日本後紀』記事以降も造営が継続する点から、まさに E 地域の代表的な遺跡と考えられる。

文献と遺跡を結び付けるには、なお幾重もの検証が必要であろうが、7 世紀から 9 世紀にかけての集落の集中と、阿光坊古墳群という 100 基を超える群集墳を 200 年以上にわたって築き続けた集団が存在したことは事実である。文献に記された村々は、阿光坊古墳群と集落にみられるような、複数集落が紐帯をもち、末期古墳群を造営しているというような姿をしていたのではないかと推測され、古代北東北史を考える上で、重要な要素となると考えられる。

註 1　平成 18 年度ふくべ (3) 遺跡現地説明会資料

《引用参考文献》

赤平智尚・三浦圭介 1988『下谷地 (1) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 109 集
天野哲也 1985『北海道式古墳再考」『古代文化』37 － 10
安部義平 1994『蝦夷の墓－森ヶ沢遺跡調査概要』国立歴史民俗博物館
伊東信雄・板橋源 1978『猫谷地・五条丸古墳群（増補再刊）』岩手県江釣子村教育委員会
宇部則保・高島芳弘 1983『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 11 集
宇部則保 1984「湯浅屋新田遺跡 (2)」『八戸新都市区域中埋蔵文化財調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 13 集
宇部則保 1987「湯浅屋新田遺跡 (2)」『八戸新都市区域中埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 19 集
宇部則保 1989「青森県における 7・8 世紀の土師器－馬渕川流域を中心として－」『北海道考古学』第 25 輯
宇部則保 2000「馬渕川下流域における古代集落の様相」『考古学の方法』東北大学文学部考古学研究会会報第 3 号
上屋真一 1998「茂漁古墳群－柏木東遺跡の発掘調査から－」『北海道式古墳の系譜－擦文文化の墓制をめぐって－』北海道考古学会
内山敏行 2003「古墳時代終末期の長頸鏃－東日本における棘長頸腸抉鏃の評価－」『七世紀研究会シンポジウム武器生産と流通の諸画期』
大野亨・渡則子・小笠原善範 2001『酒美平遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 88 集
大野亨 2002『盲堤沢 (3) 遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 92 集
大道篤史・佐藤良和・星雅之・佐々木清文 1998『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 287 集
岡安光彦 2003「馬具生産と流通の諸画期」『七世紀研究会シンポジウム武器生産と流通の諸画期』

菊地芳朗ほか 1990『大年寺山横穴群』宮城県文化財報告書 136 集
菊地芳朗 1993「東北地方における横穴の出現年代」『福島県立博物館紀要』第 7 号
草間俊一 1964「岩手県和賀町長沼古墳」『日本考古学年報』12
工藤竹久ほか 1991『丹後平古墳』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第 44 集
工藤大・小林雅人・佐藤智生・関尊文 2005『通目木遺跡　ふくべ (3) 遺跡　ふくべ (4) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 392 集
小嶋芳孝 1996「蝦夷とユーラシア大陸の交流」『古代蝦夷の世界と交流』名誉出版
小向勝利・瀧澤幸長ほか 1995『根岸 (2) 遺跡発掘調査報告書』百石町文化財調査報告書第 4 集
小谷地肇・成田和世 1996『中野平遺跡』下田町埋蔵文化財調査報告書第 9 集
小谷地肇・杉田幸子・成田和世 2001『立蛇 (1) 遺跡』下田町埋蔵文化財調査報告書第 16 集
小谷地肇・成田和世 2005『下田町内遺跡発掘調査報告書 8』下田町埋蔵文化財調査報告書第 21 集
小谷地肇 2004「奥入瀬川流域左岸の遺跡群と古代の都母村」『古代蝦夷の実像を探る』青森県埋蔵文化財調査センター
小谷地肇 2005「集落と墓域 - 発掘調査成果から -」『阿光坊古墳群シンポジウム資料集』
小谷地肇 2006「阿光坊古墳群と十三塚伝説」『青森県考古学』第 14 号　青森県考古学会
後藤建一 1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』
後藤壽一・曾根原武保 1934「膽振國千歳郡惠庭村の遺跡について」『考古学雑誌』第 24 巻第 2 号
齊藤孝正・後藤建一 1995『須恵器集成図録』第 3 巻 東日本編Ⅰ　雄山閣出版
坂川進・渡則子 2002『丹後平古墳群』八戸市埋蔵文化財調査報告書 93 集
桜田隆・柴田陽一郎ほか 1992『秋田ふるさと村 (仮称) 建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 220 集
佐々木茂楨 1972『和泉沢古墳群』宮城県桃生郡河北地区文化財調査報告書第 1 集
佐藤智生 2004「平安時代における青森県上北郡の様相について」『向田 (35) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 373 集』
佐藤智生 2005「遺跡周辺の古代遺跡と発掘調査」『通目木遺跡、ふくべ (3) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 392 集
田辺昭三 1996『陶邑古窯跡群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
奈良昌毅・羽柴直人・三浦圭介ほか 1991『中野平遺跡 - 第二みちのく有料道路建設に係る埋蔵文化財調査報告書 -』青森県埋蔵文化財調査報告書第 134 集
成田健康 1987『阿光坊の史跡と伝説』
福島雅儀 2005「古代金属装鉄刀の年代」『考古学雑誌』第 89 巻第 2 号
藤田亮一 1986『丹後谷地遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 15 集
藤沢敦 1997「東北北部の末期古墳の主体部構造」『東北史学会考古部会研究発表要旨・発表資料』
藤沢敦 2001「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』第 48 巻第 3 号
藤沢敦 2003「北の周縁域の墳墓」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』　第 6 回九州前方後円墳研究会
藤沢敦 2004「倭の「古墳」と東北北部の「末期古墳」」『古墳時代の政治構造』　青木書店
藤原弘明 2003『五所川原須恵器窯跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第 25 集
松本建速 2006『蝦夷の考古学』同成社
村木淳ほか 1988『田面木平遺跡 (1)』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 20 集
村木淳・藤田俊雄 1996『丹後平 (1) 遺跡　丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 66 集
森秀之 2005「擦文・オホーツク文化期の出土刀剣に関する覚書 (3) - 恵庭市西島松 5 遺跡出土資料の考察 -」『紋別市立博物館報告』第 12 号
八木光則・室野秀文ほか 1972『紫波城跡 - 昭和 56 年度発掘調査概報 -』盛岡市教育委員会
八木光則 1996「蕨手刀の変換と性格」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念論文集
八木光則 1997「7 ～ 9 世紀の墓制－東北北部の様相－」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会秋田大会実行委員会』
八木光則・藤村茂克 2003『蕨手刀集成』(第 3 版) 文化財資料集第 3 集
八木光則 2003「7・8 世紀鉄刀の画期と地域性」『七世紀研究会シンポジウム武器生産と流通の諸画期』
八木光則 2004a「蝦夷考古学の地平」『古代蝦夷と律令国家』蝦夷研究会編　高志書院
八木光則 2004b「古代概観」『図説盛岡・岩手・紫波の歴史』郷土出版
吉田勉・井上雅孝 2003『大釜館遺跡発掘調査報告書』　滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第 1 集

列島の古代史における阿光坊古墳群

東北大学埋蔵文化財調査室　藤沢敦

１．はじめに

阿光坊古墳群は、一般に「末期古墳」と呼ばれる１)。「末期古墳」とは、主に東北地方北部において、７世紀から９世紀にかけて築造された、小規模円墳群である。「末期古墳」は、北東北３県と宮城県の北部に分布する他、北海道の道央地方にも分布する（図１）。なお北海道に分布するものについては、「北海道式古墳」と呼ばれることもあるが、基本的には北東北の木棺直葬の「末期古墳」と共通する墳墓群と考えることができる。

昭和63年に始まる阿光坊古墳群の調査は、多くの重要な成果をもたらしてきた。それは、阿光坊古墳群が存在する奥入瀬川流域の歴史研究に留まらず、「末期古墳」全体の研究、あるいはそれが造られた時代の北東北の歴史研究にとっても大きな意味を有している。ひいては、列島の古代史の見方そのものにも大きな問題を投げかけるものである。

本稿では、これらの点を検討し、列島の古代史全般の中において、「末期古墳」の占める位置、ひいては阿光坊古墳群の占める位置とその意義について検討してみたい。

図１　主な「末期古墳」の分布

２．「末期古墳」をいかにとらえるか

阿光坊古墳群を考えるにあたっては、まず第一に、「末期古墳」を、いかなる墳墓としてとらえるかという問題がある。

（１）「末期古墳」の系譜

「末期古墳」は、その名称にも示されているように、倭の領域で築造された「古墳」との関連で議論されてきた。実際、倭の「古墳」の強い影響を受けて成立したことは、まず間違いない。「末期古墳」の具体的様相は、同時期の倭における終末期「古墳」、あるいは前段階の後期「古墳」の中の小規模円墳との共通性が強い。木棺の構造など相違点もあるが、倭の「古墳」の中においても、地域ごとの変異は少なからず存在する。何よりも、「末期古墳」以前に北東北に展開していた続縄文系の平面楕円形の土壙からなる墓と、どちらが共通性が強いかと言えば、答えは明白である。続縄文系の墓は、わずかな高まりは存在したとしても墳丘と呼べるようなものではないし、墓を区画する施設も存在しない。土壙の形態と規模から見て、屈葬の可能性が高い。伸展葬で棺に納められ、周溝で区画された墳丘を伴う「末期古墳」との差は大きい（図２）。また、「末期古墳」の成立とほぼ同時に、古墳文化に伴って展開してきた方形竪穴住居と土師器が北東北に広がる。このことを合わせて考えれば、「末期古墳」が倭の「古墳」の強い

影響のもとに成立したことは明らかである。

（２）「末期古墳」と倭の「古墳」

しかし、倭の「古墳」が、古墳文化の外縁地域に、遅れて波及したということで済まされるものではない。「末期古墳」が、倭の「古墳」と全く同じものとは考えられないからである。個々の具体的要素に共通性が強いとしても、両者を同一視することはできない。極めて重要な相違点も存在する。

この問題を考えるには、「末期古墳」と倭の「古墳」との比較検討が必要である。この点については、以前に検討したこともあるが（藤沢敦 2004）、あらためて簡単に触れてみたい。

①築造時期

「末期古墳」と倭の「古墳」が大きく異なる点の一つは、築造される時期である。倭において「古墳」の築造がほぼ終焉した後の、８世紀以降から９世紀にかけても、「末期古墳」は活発に築造され続ける。むしろ、倭の「古墳」が終焉した後に、「末期古墳」は最盛期を迎えると言って良い。

しかも近年の調査で、「末期古墳」には、長期間同一場所に古墳が築造され続ける例があることが明らかとなってきた。青森県八戸市丹後平古墳群と隣接する丹後平（１）遺跡では、７世紀後葉から９世紀後葉の約 200 年間にわたって、類似した墳墓が造られ続けていた可能性が高い（図３、村木淳・藤田俊雄 1996）。そして阿光坊古墳群では、７世紀前半に開始される阿光坊遺跡から、８世紀代の天神山遺跡、９世紀末まで続く十三森（２）遺跡へと至る。それぞれの詳細な時間的関係については、なお検討が必要であるが、阿光坊古墳群の「末期古墳」は、大きく途切れることなく分布している。この地において、７世紀前半から９世紀末に至るまで、類似した「末期古墳」が築造され続けていたことを示している。

②墳墓における階層性

さらに重要な相違点は、「末期古墳」においては、明確な格差が顕在化しないことである。

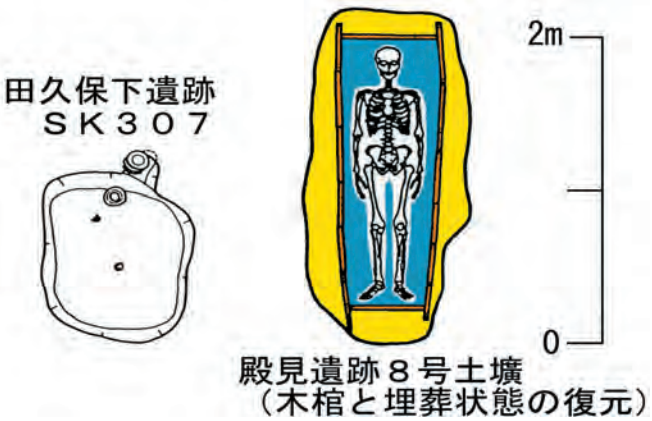


図２　続縄文文化の墓と「末期古墳」の主体部の比較

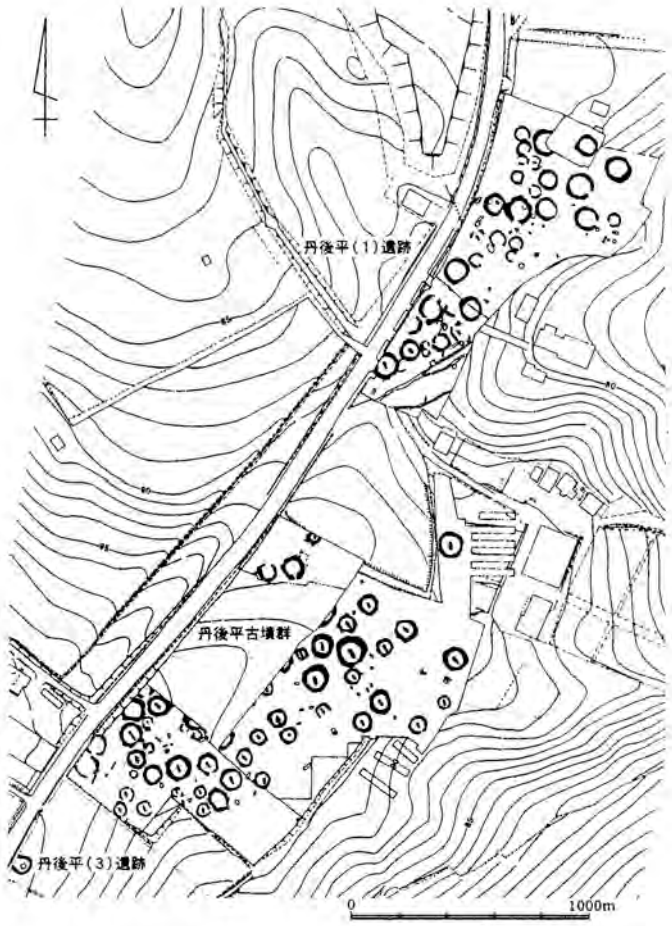


図３　丹後平古墳群の「末期古墳」の分布

墳丘形態・墳丘規模、内部主体の構造、副葬品の構成において、「末期古墳」は均質性が強い。

「末期古墳」の墳丘形態は、やや楕円に近いもの、方形に近いものも存在するが、円形が基本である。周溝をめぐらすのが通常で、明確な突出部が付くような例は知られていない。

墳丘規模は、最大で周溝内縁径 17 m程度、最も小規模なものは４m程度である。ほとんどは、５mから 10 m弱程度の大きさである。削平されている場合が多いが、少数の墳丘が良好に残っている例か

ら想定すると、規模の大きなものでも２ｍに満たず、多くは１ｍ前後の低い墳丘であったと想定される。また、墳丘を伴わず、主体部のみが検出される例も、少数ながら存在する。

内部主体は、木棺を直接墓壙に埋めた木棺直葬のものと、横穴式石室の退化した石室を構築するものに二大別される。

木棺直葬の主体部は、「末期古墳」の成立時から存在し、終末まで続く。木棺構造は、側板の四辺すべてを、あるいは短辺のみを埋め込んで構築された、「据え付ける棺」が主体を占め、それらは最後まで続く。このような、側板を埋め込む木棺は、倭の「古墳」の中には近接時期の類例がない。倭の「古墳」の影響を受けつつも独自に創出された棺構造と考えられる。

一方、横穴式石室の退化した石室は、7 世紀末頃に出現するものと考えられる。ただし、石室を伴う「末期古墳」の分布は、北上川流域に限定される。石室出現後も木棺直葬のものが造られており、木棺直葬から石室へ転換する訳ではない。初期のものを含めて、石室の規模が小さいことから、玄門から埋葬を行うことは困難で、追葬を行った可能性は低い。

副葬品には、刀類・鉄鏃などの武器、馬具、玉類などの装身具などがある。土器が棺内に副葬される場合もあるが、地域的に偏りがある。棺蓋上に土器を副葬する場合も認められる。棺内の副葬品が極めて少ないか、全く出土しない例もある。副葬品が多い場合でも、玉類を除くと、特定の品目が個人が使用する量を超えて、多量に副葬される例は認められない。

このように「末期古墳」の中には、規模の違いも存在し、副葬品の内容も全く同じ訳ではない。相対的な優劣関係は存在する。しかしながら重要な点は、他から傑出すると言いうるような古墳が存在しないことである。特定の古墳だけが、他の古墳から離れて立地する例も知られていない。しかも、7 世紀初頭頃の初現から終末に至るまで、類似する墳墓が築造され続ける。丹後平古墳群や阿光坊古墳群でも、200 年間以上にわたる間に、他から傑出するような特別な墳墓は、ついに生み出されなかった。このような一つの古墳群の中に留まらず、河川流域のような一地域の内部においても、さらには北東北全体の中でも、明確な格差は最後まで顕在化しない。

この問題を、時間的な差異をとりあえず捨象して、倭において前方後円墳が築造されていた時期、すなわち前期から後期の「古墳」と、まず比較してみたい。

倭の「古墳」には、常に明確な格差が存在する。墳丘形態・規模、外表施設、内部主体と副葬品など、あらゆる点において明瞭な格差が存在する。その格差は、地域内の「古墳」において存在するだけでなく、地域を越えても存在する。倭の「古墳」には、たとえ緩やかであれ、大和（畿内）の巨大前方後円墳を頂点とした格差を内包しており、それらは階層的関係の中にあると見なして良い。このことこそが、北東北の「末期古墳」と大きく異なる点である。

問題なのは、「末期古墳」の成立が、倭において前方後円墳の築造が終焉を迎える時期にあたることである。前方後円墳の終焉を受けた終末期「古墳」を、それ以前の「古墳」と同等に考えて良いかということが問題となる。前方後円墳では、常に畿内に最大規模のものが存在したが、終末期「古墳」では畿内の圧倒的優位性は認め難い。このことは、巨大前方後円墳を頂点とした中央と地方の関係を表現する機能、言い換えれば、全体的な政治的関係を表現する機能が、墳墓においては失われていったことを示している。しかし終末期にも大型方墳・大型円墳、あるいは八角墳などが存在し、小規模墳との格差は残っている。「末期古墳」の分布域に近い、宮城県中部の仙台平野においても、多数の小規模円墳や横穴墓が存在する一方で、直径 32 ｍの法領塚古墳が 7 世紀前半に築造されている。このように、終末期の墳墓においても格差が残っていることは、墳墓において表現される各地の首長層の関係に、階層的関係を表現するという機能が、依然として含まれていると考えるべきであろう。

このような倭の「古墳」と比較した時、「末期古墳」の均質な様相は、それに担わされた社会的役割が異なっていたと考えざるを得ない。墳墓における階層性が顕在化しないということは、その墳墓を共有する範囲の内部に、中央と地方の関係が形成されないということでもある。

もちろん、当時の北東北の人々の全てが、「末期古墳」に埋葬された訳ではない。限定された支配的

階層に属する人々だけが、「末期古墳」に葬られたと考えられる。その点で、当時の社会は、一定の階層分化が進んでいたと見なすべきである。このような「末期古墳」の被葬者たちが、相互に階層的関係を有せず並立している点が、大きな特徴なのである。

③墳墓に政治性は表現されているか

前方後円墳に代表される倭の「古墳」は、被葬者たる首長層間の政治的関係を表現すると考えられてきた。そのような政治的関係の有無を墳墓の様相から判断する基準は、墳墓における階層性と、その変化の連動性にあると考える。

墳墓の階層性については、上記したように、墳丘形態・規模、外表施設、内部主体と副葬品など、あらゆる点において明瞭な格差が存在する。その格差は、地域内の「古墳」において存在するだけでなく、地域を越えても存在する。その結果、たとえ緩やかであれ、大和（畿内）の巨大前方後円墳を頂点とした階層的関係が存在する。このことによって、各地の首長間の政治的関係、ひいては、中央と地方の関係を墳墓において表現したものと考えられる。

墳墓の変化の連動性については、例えば『前方後円墳集成』の共通編年（広瀬和雄 1991）の４期と５期の間や７期と８期の間には、地域を越えて、首長墓系譜の断絶や移動、小規模墳の急激な増減などの変化が見られる。変化の具体的様相には各地域の独自性も存在するが、一つの地域に留まらず、ほとんどの地域で同じ頃に大きな変化が生じている。このような墳墓の変化の連動性を説明するためには、政治的動向を介在させないことには困難である。

このように墳墓における階層性と、その変化の連動性が、倭の「古墳」においては明瞭である。それゆえ、そこには政治的関係が表現されていたと考える訳である。しかも、そこに表現された政治的関係は、一つの地域の枠を越えた広域における、中央と地方の関係であった。

この墳墓の階層性と変化の連動性という、まさにこの２点において、「末期古墳」は倭の「古墳」と異なっている。それゆえ、「末期古墳」には、被葬者間の政治的関係を表現する機能は見出し難い。

「末期古墳」の被葬者が限定された人々であったことは、地域ごとの共同社会の中にあって、「末期古墳」に副葬された支配的階層の人々と、それ以外の一般成員との違いを、「末期古墳」は表現していると考えることができる。しかし、「末期古墳」の被葬者間の階層的関係、その中における中央と地方の関係という、相互の政治的関係は表現されていない。

「末期古墳」は、墳丘の形など様々な具体的要素においては、倭の「古墳」との共通性が強い。その一方で、そこに込められた社会的機能という点では、大きな違いが存在する。倭の「古墳」を受け入れた側、すなわち北東北の人々にとっては、自らの社会にとって必要な機能のみを、選択的に受容したと言えるだろう。

３．「末期古墳」が造られた時代

「末期古墳」が造られた時代の北東北は、列島の歴史の中でも、独自の展開を見せる地域である。「末期古墳」の有する歴史的意義を考えるにあたっては、それが造られた時代状況の中に位置づけて検討することが必要である。

（１）「末期古墳」以前

弥生時代の終末から古墳時代初頭に、本州島の北部においては、北海道で展開していた続縄文文化が広がってくる。その中で、続縄文文化に伴う平面形態が楕円形の墓も、北東北に分布するようになる。住居については北海道も含めて検出例がほとんどなく、平地式住居か、かなり浅い竪穴住居が使われていた可能性が高い。そのため、集落の様相については、ほとんど検討することができない。一方、南東北には古墳文化が波及し、各種の「古墳」が築造され、方形竪穴住居と土師器が広がる。

このように古墳時代には、南東北三県に古墳文化が展開し、北東北三県に続縄文文化が広がり、東北地方の南北で、異なる文化が対峙する。その一方で、続縄文文化と古墳文化の間には、活発な交流が存在した。その背景には、鉄の流通を始めとする物資の、北海道までを含む広域流通が存在したと考えら

れる。両文化の境界領域である岩手県南部から宮城県北部にかけての区域では、古墳文化と続縄文文化の遺跡は、相互に入り組んだ分布を示す。特に５世紀後半には、相互依存関係とも言えるような、密接な関係を有するようになる（藤沢敦 2001）。

近年、八戸市の田向冷水遺跡では、５世紀後半の土師器を伴う方形竪穴住居からなる集落が発見され、続縄文土器や黒曜石製石器も出土している（小保内裕之ほか 2006）。ここでは、５世紀後半以降も集落が存続していた可能性もある。一方、田向冷水遺跡から新井田川を渡った対岸約 1.5km に立地する市子林遺跡では、田向冷水遺跡の集落とほぼ同時期の、続縄文文化に伴う墓が検出されている（大野亨ほか 2004）。古墳文化と続縄文文化の遺跡が、相互に入り組んだ形で分布するという状況は、岩手県南部から宮城県北部にかけての地域に限らず、北東北一帯で見られる可能性が出てきたと言えよう。

いずれにせよ、古墳時代に併行する時期の北東北には、続縄文文化が広がるものの、古墳文化の遺跡も存在し、両者が密接な関係を有しつつ、北海道までを含む広域の交流が存在したと考えられる。

（２）倭系文化の波及

田向冷水遺跡などの少数の例を除くと、古墳時代の北東北においては、土師器を伴う方形竪穴住居の検出例はきわめて少ない。ところが７世紀に入ると、北東北一帯に方形竪穴住居と土師器が広がる。それらから構成される集落遺跡も、農耕に適した立地が一般的となる。生業という観点からは、農耕を中心とする社会へと大きく変化していったと見なすことができる。

このような方形竪穴住居と土師器に代表される文化は、南東北以南の古墳文化に伴い展開してきた文化と基本的に類似するものであり、倭系の文化が波及していったと見ることができる。とは言っても、北東北と南東北の考古資料は、全く同じではない。北東北の土師器と南東北の土師器は、常に異なっている。しかし、土師器の地域差は、別に北東北に限らず、各地に見られる現象である。竪穴住居についても、細かな部分では違いもあるが、基本的には南東北と変わらない。

ただし、その中で注目しておくべきことは、北海道との関係である。「末期古墳」が活発に築造される７世紀末から８世紀にかけて、北海道の墳墓には、「末期古墳」から出土するのと同様の副葬品が多数見られるようになる。特に刀を始めとする鉄製品は、それまでの北海道の墳墓からは、ほとんど出土しない。「末期古墳」や北海道の墳墓から出土する刀については、その製作地を北東北に求める意見も強いが、律令国家のもとで作られたものと考えるべきであろう２）。北海道で出土するこれらの遺物が、北海道の人々が直接律令国家と交渉をもって入手した可能性も否定できないが、全てを直接的交渉と見るのは無理がある。少なくないものが、北東北の勢力が媒介して北海道へもたらされたと見るべきであろう。北東北と北海道の間に活発な交流があったことは、「末期古墳」と共通する古墳が、北海道の道央地域に分布することからも明らかである。北東北の社会は、南の律令国家と、北の北海道の両方と、あるいは両者の間に立ち、活発な交流が行われていた社会であった。このような南北双方との交流は、前段階の古墳時代を通じて維持されてきた交流関係を基盤として成立したのであろう。

（３）蝦夷（エミシ）と「末期古墳」

一方、文献史料から明らかとなる北東北の様相は、全く異なっている。律令国家を形成していく中央政権は、主に北東北の人々を蝦夷（エミシ）と呼び、異族視した。律令国家の政治支配領域の外側に位置づけられ、律令国家内とは異なる別個の対処政策がとられた。律令国家は蝦夷に対して、貢納関係のもとに置くとともに、領域支配の拡大策を進め、度重なる軍事的対立に至る。

蝦夷と呼ばれた人々の範囲は、前段階の古墳文化の分布域などとは、厳密には一致しない。このことは、文化の漸進的変移の中に持ち込まれた、二項対立的な境界の恣意性を如実に示すものである。それでも、蝦夷と呼ばれた人々のかなりの範囲が、北東北で「末期古墳」を築造していた人々と重なることは間違いない。

「末期古墳」が造られた時代の北東北は、蝦夷の住まう地域として、律令国家の領域とは全く異なる歴史過程をたどっていく。ところが、考古資料に見える明確な文化的差異を、北東北と南東北の間で指摘することは簡単ではない。城柵遺跡や官衙遺跡など、政治支配に直接関わる遺跡は、当然ながら律令

国家の支配領域と対応する。また、北東北には仏教寺院の出現が大幅に遅れるが、南東北でも７・８世紀の寺院は、城柵や官衙の附属寺院が多数造られるように、律令国家の政治支配と密接に関連して展開する。このような、政治支配と密接に関係する遺跡やそれに伴う遺物を別にすると、北東北と南東北の間で、全く異なる文化と言えるような、考古資料の上での明確な相違を、簡単に指摘することは難しい。

「末期古墳」の具体的様相についても、倭の「古墳」と共通性が強いことは先に指摘した。その限りにおいては「末期古墳」も、７世紀以降北東北に波及する倭系文化の中に含めることも不可能ではない。しかし「末期古墳」は、倭の「古墳」に顕著な墳墓の階層性と変化の連動性を欠き、それゆえ墳墓に込められた社会的機能という点では、大きく異なっている。このような「末期古墳」の社会的機能の違いは、北東北の社会が、単に律令国家の政治的支配の外にあったというだけでなく、独自の社会であったことを物語る、最も重要な考古学的証拠である。

４.「末期古墳」の中での阿光坊古墳群の意義

「末期古墳」も、今日では多くの調査例が蓄積されてきている。その中において阿光坊古墳群がどのような意義を有するのかを、次に検討してみたい。

（1）良好な保存状態

まず第一に指摘されるべきことは、阿光坊古墳群の保存状態の良好さである。

「末期古墳」には、良好な状態で古墳群が残されている例は、あまり多くない。多数の調査例がある一方で、破壊されてしまったものも多い。ある程度まとまって保存されている「末期古墳」としては、北海道江別市後藤遺跡、青森県八戸市丹後平古墳群、岩手県花巻市熊堂古墳群、北上市猫谷地・五条丸古墳群、宮城県栗原市鳥谷ヶ崎古墳群、石巻市和泉沢古墳群などがある。後藤遺跡は「北海道式古墳」と呼ばれることも多いが、基本的には北東北の木棺直葬の「末期古墳」と共通する墳墓群である。熊堂古墳群、猫谷地・五条丸古墳群、和泉沢古墳群は、石室墳からなる「末期古墳」である。鳥谷ヶ崎古墳群は、木棺直葬のものと石室墳の両方が存在する。八戸市丹後平古墳群が木棺直葬の古墳だけで構成される古墳群である。

このように、保存されている「末期古墳」は、石室墳に偏っている。より存続時期が長く分布範囲も広い、その点から普遍的と言える木棺直葬の「末期古墳」で良好に保存されている古墳群は、後藤遺跡、丹後平古墳群があげられる程度なのである。

「末期古墳」は、墳丘の高さが比較的低いことが影響して、調査以前に墳丘が削平されてしまっている場合が多い。その中でも石室墳は、削平をまぬがれている例が比較的多く、削平を受けた場合でも、全て削平されていない場合が多い。そのため、古墳の存在が認識しやすい。岩手県の北上川流域に存在する石室墳が最初に注目され、これら石室墳を中心に研究が進められてきたのは、このことが影響している。

ところが発掘調査が進展すると、木棺直葬のものが、より長期間かつ広範囲に展開することが明らかとなってきた。これらのほとんどは、開発に伴う調査によって、従来知られていなかった「末期古墳」が確認されたことによる。墳丘が削平されていた場合、発掘調査によってはじめて「末期古墳」の存在が知られるようになる。開発を前提とした記録保存のための調査では、「末期古墳」の存在が明らかとなっても、当初計画を変更して現状保存に持ち込むことは、現実には難しいことがほとんどである。そのため、多くの「末期古墳」が、発掘調査後に破壊されてしまうこととなった。それらの圧倒的多数が、木棺直葬の「末期古墳」であった。

このような結果、北東北の木棺直葬の「末期古墳」で、まとまって保存されているのは丹後平古墳群があげられる程度となってしまった。丹後平古墳群は、獅噛式環頭大刀柄頭など重要な遺物も出土し、木棺直葬の「末期古墳」の研究を大きく進展させることとなった重要な遺跡である（工藤竹久ほか1990）。これらの重要性が評価され、国史跡に指定されている。しかしながら丹後平古墳群は、墳丘がほとんど削平されており、その遺存状態は、必ずしも良好であるとは言えない。大規模な開発計画の中で、古墳群を保存するために計画を変更させたのは関係者の努力の賜物であるが、周辺の開発が進んだため、遺跡を取り巻く景観は大きく改変されてしまっている。

このような「末期古墳」の現状の中で、阿光坊古墳群の保存状態の良好さは、特筆されるべきである。

阿光坊遺跡・天神山遺跡の区域では、墳丘はほとんど削平されているが、十三森（２）遺跡の区域では、墳丘が良好に遺存しており、現状で63基が確認されている。このように、「末期古墳」で多数の墳丘が遺存している例は、他にはない。阿光坊古墳群では、若干の古墳が既に破壊された可能性も残るが、ほぼ全体が残されていると見て良いであろう。この点も、他に類を見ない。

「末期古墳」の中でも木棺直葬のものは、７～８世紀には、墳丘構築以前に主体部を構築する。そのため、墳丘が削平されていても、ほとんどの場合で主体部は残存している。ところが９世紀に入ると、墳丘構築後に、墳頂から墓壙を掘り込んで主体部を構築する方法へと変化すると考えられている。その場合、墳丘が削平されると主体部も削平されるため、周溝だけが残存することとなる。９世紀以降の例では、周溝だけが残存する例がほとんどを占めるため、このように推定されてきた訳である。十三森（２）遺跡10号墳では、墳頂から主体部が掘り込まれていることが確認され、この推定が裏付けられる結果となった。木棺直葬の主体部が残存している９世紀の「末期古墳」は、墳丘を有せず主体部のみが構築された秋田県秋田市湯の沢Ｆ遺跡（石郷岡誠一ほか1984）を除くと、他にはごく僅かしか知られていない。そのため阿光坊古墳群の十三森（２）遺跡は、数少ない貴重な例となる。

（２）長い存続期間

阿光坊古墳群を特徴づける、もう一つの特徴は、その存続期間の長さである。

石室墳の調査が中心であった時期には、「末期古墳」は８世紀代を中心に築造されたと考えられてきた。しかし木棺直葬の調査例が増加するとともに、築造時期の幅は拡大していく（高橋信雄1987）。岩手県矢巾町藤沢えぞ森古墳群の調査によって、７世紀代に遡る「末期古墳」の存在することが確実となった（西野修1986）。岩手県北上市（旧和賀町）岩崎台地遺跡群の調査では、７世紀初頭まで、その出現が遡ることが明らかとなった（高橋與右衛門ほか1995）。

「末期古墳」の築造年代の幅が拡大することが明らかとなる中で、八戸市丹後平古墳群と隣接する丹後平（１）遺跡の調査によって、「末期古墳」には、同じ場所で長期間造営が続けられる例があることが明らかとなった。そして阿光坊古墳群の調査が進展することによって、７世紀前半代から９世紀末葉に至る300年間近くの期間、同一古墳群での造墓活動が続けられており、丹後平古墳群より存続期間が長いことが明らかとなった。

さきに「末期古墳」には、倭の「古墳」に特徴的な階層性と連動性が見られないことを指摘した。丹後平古墳群や阿光坊古墳群においては200年間以上築造が続くが、ついに他から傑出するような墳墓が生み出されなかった。このような「末期古墳」の均質な様相は、存続時期が長期に渡る丹後平古墳群や阿光坊古墳群の調査によって、明確になってきたと言える。

「末期古墳」では、古墳群全体の様相が明らかとなっている例が少ないため、存続期間については明確さを欠く場合が多かった。また、阿光坊古墳群のように、存続年代が長期間に渡るものではない古墳群も存在する。それらを含めて、築造時期や地域が異なる古墳群の間で比較しても、明確な格差は顕在化しないと言える。丹後平古墳群や阿光坊古墳群の調査は、この問題を考える上での、一つの基準となったのである。

阿光坊古墳群は、その存続期間が長いため、「末期古墳」の特徴を、最も明瞭な形で体現した古墳群であると評することができる。さらに、上記した保存状態の良好さも相まって、まさしく「末期古墳」を代表する古墳群と言える。

５．列島の古代史における「末期古墳」

（１）倭の周縁域の墳墓

「古墳」は、列島にくまなく分布する訳ではない。古墳時代を前後する時期には、北東北の「末期古墳」以外にも、各地で独自の墓が造られていく場合もある。そのような、倭の「古墳」とは異なる独自の墓を造った地域との比較検討も重要な課題である。詳しく検討を加えなければならない課題であるが、こ

こでは簡単にいくつかの視点について触れておきたい。

古墳文化の南端にあたる九州島、特に南九州と周辺の島嶼地域には、古墳時代に独自の墳墓が展開したことが知られている。南九州には、地下式横穴墓・地下式板石積石室墳・立石土壙墓と呼ばれる、この地域独自の墓が分布している（東憲章 2001）。鹿児島県の西側にある長島には、積石塚古墳が海岸沿いに造られる（長島町教委 1982）。大隅海峡を渡った種子島には、海岸沿いの砂丘上に、砂地埋葬遺跡があり貝符を副葬する特徴的な墓が造られる。これらの墓は、倭の「古墳」とは大きく異なっているが、「古墳」が築造される時期に併行して造られており、北東北の「末期古墳」のように、８世紀以降まで続くことはない。倭の「古墳」が終焉した以降も、類似する墳墓を造り続けるという点では、北東北の「末期古墳」は、列島の中でも極めて特殊であると言える。

地下式横穴墓や長島の積石塚は、「古墳」と分布域が重なる。地下式横穴墓の中には、「古墳」に伴って造られているものもある。これらは、各地の「古墳」の消長と連動する場合もあり、この点から「古墳」に表された階層秩序の中に取り込まれていった可能性が高い。独自の墳墓形式であっても、「古墳」と同様の社会的機能を持つ場合もあることを示している。

一方、種子島の砂地埋葬遺跡である広田遺跡では、古墳時代初頭から７世紀にかけて、同一場所で埋葬が行われ続けている。埋葬方法は、新しくなると二次葬へと変化するが、貝符の副葬は同じように続けられる（広田遺跡学術調査研究会編 2003）。倭の「古墳」は、しばしば築造場所が変化したり、系譜関係が途切れる場合があることが各地で確認されている。このような現象は、広域の政治的変動を反映したものと考えられている。しかし、種子島の広田遺跡は、長期間に渡って比較的安定して墓が造り続けられており、この点で倭の「古墳」とは対照的である一方、北東北の「末期古墳」の展開状況に類似することは興味深い。

このような周縁域の墳墓には、それぞれに固有の条件と歴史的背景が存在する。それらを歴史的に位置づけていくためには、表面的な墳墓の形式差だけに留まらず、その展開過程や、倭の「古墳」との関係性、その社会的機能などを検討していくことが必要である。

（２）考古資料による文化の把握

「末期古墳」が造られた時代、考古資料に見える文化的な明確な差異を、北東北と南東北の間で指摘することは簡単ではない。にもかかわらず、この時代の北東北は、蝦夷の住まう地域として、律令国家の領域とは全く異なる歴史過程をたどっていく。律令国家の政治支配に直接結びつくような遺跡を除くと、「末期古墳」の展開過程に見える社会的機能の違いなどが、相違点としてあげられるにすぎない。このことは、考古資料から帰納される文化のまとまりが、地域ごとの歴史過程の違いをどれだけ反映しているのかという根本的な問いを投げかけるものである。

これまで、北海道・北東北や九州島南部・南西諸島を除く列島の大部分は、古墳文化として一括りにして議論されてきた。ひるがえって考えてみると、はたして本当に単一の文化の歴史として描くことが妥当なのかという疑問に行き着く。考古資料の類似性から、たとえば土師器や鉄器などの共通性によって、同じ古墳文化として把握される地域が、同様の社会として、同様の歴史過程をたどったのか、あらためて考え直してみる必要がある。古墳文化として一括りにされる中にも、前方後円墳が存在しない地域もある。逆に、前方後円墳が存在する地域においても、竪穴住居におけるカマドのあり方には、その採用が著しく遅れる場合も含め、きわめて多様である。古墳文化としてまとめられてきた中においても、いくつもの問題を、直ちに指摘できる。このような問題を検討していくためには、考古資料に基づく文化の概念、その有効性と限界があらためて問われる必要がある。

これまでの日本の考古学・歴史学では、古墳時代の大和政権から律令国家に至る歴史を、無前提に一つの枠組みのもとでの過程として描いてきた。「末期古墳」に代表される、その外側に位置する地域の歴史は、この枠組みの妥当性を、逆に照らし出す存在でもある。そのような点において、「末期古墳」を始めとする北東北の歴史が、列島全体の歴史に投げかける意味は、小さくないと言えるであろう。

６．おわりに

前方後円墳の成立と各地への波及は、各地域の首長層間の政治的結合が進められていったことを示すと考えられる。古墳時代の長い過程を経て、やがて日本列島の大半の地域は、律令国家に統合されていく。しかし実際の各地域の社会は、決して一枚岩の様相ではなく、地域ごとの環境と密接に結びつき、独自の社会・文化・集団を育んでいた。それらが、それぞれの利害をかけ、せめぎ合い、相互に影響を与え、相互に変容していく過程であったに違いない。古墳時代併行期の、北東北の続縄文文化、南九州の独自の墳墓の存在は、このことを雄弁に物語る。「古墳」そのものの中においても、地域ごとの変異はかなり大きい。

このように、古代国家形成期においても、日本列島の歴史は決して単一の様相で描かれるものではない。多様な社会が列島に存在し、独自の歩みを続けていた。この事実を示すものとして、阿光坊古墳群に代表される北東北の「末期古墳」は、列島全体の中でも、重要な歴史資料であると言うことができるであろう。

〔註〕

１）「末期古墳」については、本稿でも述べるように、倭の「古墳」とは、社会的機能が異なると考える。それ故、「古墳」という名称で呼ぶことについては、再検討すべき余地がある。そのため本稿では、従来から使用されてきた用語として、括弧付きで「末期古墳」との名称を暫定的に使用している。しかし問題は、「末期古墳」という名称に限らず、倭の「古墳」についてもあてはまる。倭の「古墳」という名称についても、空間的分節化は、墳墓の実態から帰納された訳でない。「日本」「日本史」という枠組みを前提とし、空間的枠組みはあらかじめ設定されていた中で成立してきた用語である。そのため、前方後円墳に代表される、倭の領域の墳墓についても、括弧付きで「古墳」と表現した。より広い一般的な意味合いで使用する場合にのみ、特に括弧を付けないこととする。

２）蕨手刀を始めとするこれらの刀については、その分布が北東北に偏ることから、その製作地を北東北に求める意見も強い。しかし、このような見方は、それが副葬されている「末期古墳」の様相から考えると首肯し難い。蕨手刀などの刀が、それを所有した人物にとって、何らかの権威を表したとしたならば、それを製作し供給した側と、供給された側との間で、何らかの格差が形成されていくと考えるのが自然であろう。北東北のいずれかの場所で製作されていたと想定した場合、地域を越えても格差が顕在化しない「末期古墳」の均質な様相とは、不整合であると言わねばならない。「末期古墳」の様相からは、北東北の中に中央と地方の関係が見出し難いという現状を踏まえると、蕨手刀などの刀が、北東北で製作されたと考えることは困難である。

〔引用・参考文献〕

東　憲章　2001「地下式横穴墓の成立と展開」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第Ⅰ分冊第４回九州前方後円墳研究会　497 ～ 504 頁
石郷岡誠一ほか 1984『秋田臨空新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
伊藤玄三 1967「末期古墳の年代について」『古代学』第 14 巻第３・４号　217 ～ 224 頁
宇部則保 1994『殿見遺跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 57 集
大野　亨ほか 2004『八戸市内遺跡発掘調査報告書 18』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 102 集
小保内裕之ほか 2006『田向冷水遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 113 集
工藤竹久ほか 1990『丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 44 集
小谷地肇ほか 2006『下田町内遺跡発掘調査報告書９』下田町埋蔵文化財調査報告書第 22 集
坂川進・渡則子 2002『丹後平古墳群　丹後平 (1) 遺跡・丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 93 集
高橋信雄 1987「岩手県における末期古墳の再検討」『北奥古代文化』18　1 ～ 24 頁
高橋與右衛門ほか 1995『岩崎台地遺跡群発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第 214 集
長島町教育委員会 1982『長島の古墳』
西野　修　1986『徳田遺跡群詳細分布調査報告書－藤沢えぞ森古墳群の発掘調査－』矢巾町文化財調査報告書第８集
広瀬和雄　1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成　中国・四国編』山川出版社　24 ～ 26 頁
広田遺跡学術調査研究会編　2003『種子島広田遺跡』鹿児島県歴史資料センター黎明館
藤沢　敦　1997「東北北部の末期古墳の主体部構造」『1997 年度東北史学会考古学部会研究発表要旨・発表資料』
藤沢　敦　2001「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』第 48 巻第３号　41 ～ 55 頁
藤沢　敦　2004「倭の「古墳」と東北北部の「末期古墳」」『古墳時代の政治構造』青木書店　295 ～ 308 頁
村木淳・藤田俊雄　1996『丹後平（１）遺跡　丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 66 集

まとめ

阿光坊古墳群は青森県おいらせ町の南西部、阿光坊105-12他に位置する末期古墳の群集墳である。昭和63年から平成17年までに16次の調査が行なわれた。諸検討の確認事項を記述し、まとめとしたい。

(1) 数　末期古墳は108基確認されており、総数は最大200基と推定される。周溝を伴わない土壙墓は8基確認されており、最大80基が存在する可能性がある。このため、幅があるが、土壙墓を含めて116基から280基の墓域と推定される。

(2) 範囲　末期古墳は阿光坊・天神山遺跡では標高33mから40mの平坦面12,800㎡に分布し、十三森(2)遺跡では標高31.6mから38.8mの、南面する斜面を中心に15,000㎡の範囲に分布する事を把握した。

(3) 年代　7世紀前葉から9世紀末葉まで継続的に造墓されたと考えられる。6期に区分され、Ⅰ期からⅣ期は南側の阿光坊・天神山遺跡に、Ⅴ期以降は北側の十三森(2)遺跡に造られており、分布範囲が南から北へ移っている。Ⅳ期以降の資料が少ないが、調査密度と位置の偏りがあったためと推定される。現状ではⅡ期のものが多いが、十三森(2)で確認されている末期古墳の所属時期が明らかになるにつれⅤ～Ⅵ期の資料が増加すると予想されるなど、調査事例の蓄積によって解消されるものと考えられる。

(4) 出土遺物　棺内に納められた副葬品と、外表に供えられた供献品に分けられる。副葬品には刀剣類・装飾品・土師器・農具がある。供献品には、土師器・須恵器を中心とし、馬具や農工具、鉄鏃などの鉄製品が出土している。

(5) 主体部構造　全てが土壙タイプの主体部である。床底面の溝のありかたや、炭化材の残存状況から、四辺埋め込み式や小口板埋め込み式の木棺構造をもっていたと推定される。こうした墓制は直近の時期・地域にみられず、北東北独自のものである可能性がある。

(6) 被葬者像　周辺集落の配置、阿光坊古墳群の立地や道路状遺構の存在から、奥入瀬川下流域一帯の集落が造墓集団である可能性が考えられ、複数集落の上位階層を中心とした人々の墓域と推定される。

(7) 阿光坊古墳群の意義　文献史料への初出が、古くとも8世紀末から9世紀の歴史を記した『日本後紀』である当地域にとって、7世紀代からの展開が明らかであり、その集落とともに、史料の残っていない地域史を補う事のできる遺跡である。また、開墾によって破壊された一部地域を除き、多くが築造当時に近い姿を維持し、古代の景観が残る貴重な文化遺産である。

報告書抄録

ふりがな	あこうぼうこふんぐんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	阿光坊古墳群発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	おいらせ町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	小谷地肇
編集機関	青森県上北郡おいらせ町教育委員会
所在地	青森県上北郡おいらせ町上明堂60－6
発行年月日	西暦2007年1月17日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あこうぼういせき 阿光坊遺跡	おいらせ町(ちょう) 阿光坊(あこうぼう) 105-41ほか	2412	48025	40度 36分 17秒	141度 22分 54秒	19880803 ～ 20040831	2,818㎡	学術調査ほか
てんじんやまいせき 天神山遺跡	おいらせ町(ちょう) 阿光坊(あこうぼう) 105-12ほか	2412	48005	40度 36分 27秒	141度 22分 40秒	19990712 ～ 20050916	771㎡	学術調査
じゅうさんもり 十三森(2)遺跡(いせき)	おいらせ町(ちょう) 阿光坊(あこうぼう) 105-46ほか	2412	48031	40度 36分 25秒	141度 22分 52秒	19990712 ～ 20030912	541㎡	学術調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
阿光坊遺跡	墳墓	飛鳥	末期古墳14・土壙7	須恵器 土師器 直刀	
天神山遺跡	墳墓	飛鳥・奈良	末期古墳5・土壙1	須恵器 土師器 蕨手刀	
十三森(2)遺跡	墳墓	平安	末期古墳3	須恵器 土師器 鉄鏃	

要約

阿光坊古墳群(阿光坊遺跡・天神山遺跡・十三森(2)遺跡)からは、昭和63年から平成17年の調査で、27,800㎡の範囲に、108基の末期古墳が確認された。7世紀前葉から9世紀末葉まで継続的に造墓されたと考えられる。出土遺物は主体部に納められた副葬品と、外表に供えられた供献品にわけられ、副葬品には大刀・鉄鏃・鎌・斧・勾玉・管玉・切小玉・ガラス玉・耳環・釧などがあり、供献品には須恵器・土師器を中心に、馬具や鋤・鍬先などがある。

おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第１集

阿光坊古墳群発掘調査報告書

発　行　日　平成 19 年 1 月 17 日
編集・発行　おいらせ町教育委員会
〒 039-2289　青森県上北郡おいらせ町上明堂 60-6
TEL　0178-56-4276

印　　刷　川口印刷工業株式会社　八戸営業所
〒039-1161　青森県八戸市大字河原木字谷地畑118-2
TEL　0178-20-4340